

一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書2

五丁遺跡  
庵寺遺跡Ⅰ  
於才迫遺跡

2009年3月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会





1. 五丁遺跡C・D区 SR04・05 出土置物



2. 五丁遺跡A区 SK02 出土田下駄

カラー図版 2



1. 廬寺遺跡B・C区 SR01 出土田下駄



2. 五丁遺跡・廬寺遺跡全景

# 序

現在、一般国道9号線の大田市仁摩町～温泉津町間は、防災対策が必要な箇所が多数あり、交通の難所（急カーブ・狭小トンネル）となっています。そのため、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所では、仁摩温泉津道路の整備を平成16年度から事業化し、平成17年度より順次着手し、現在に至っています。

仁摩温泉津道路の整備に際しては、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ整備計画や工法の検討を行っていますが、どうしても回避できない埋蔵文化財については道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

具体的には、島根県教育委員会に委託し、一般国道9号仁摩温泉津道路建設地内に所在する遺跡の発掘調査を実施していただいております。道路事業計画との調整を図りつつ、十分な調査を進めていただいていることに対し、同委員会のご尽力に敬意を表する次第です。

この報告書は、平成17年度から19年度に実施しました大田市仁摩町大國地内に所在する五丁遺跡、庵寺遺跡、於才迫遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育等のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援いただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成21年3月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所

所長 越智健吾

# 序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成17年度より一般国道9号仁摩温泉津道路地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しています。本書はこのうち平成17年度から平成19年度に実施した大田市仁摩町大国地内の五丁遺跡と庵寺遺跡、於才迫遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

五丁遺跡の調査では、小河川流路跡ほかを発掘し、縄文晩期～弥生前期の土器が多数出土し、同地域の川向・坂灘・古屋敷遺跡と並んで当該期の遺跡が存在することが明らかになりました。また、奈良・平安時代以降の条里制大畦畔跡を2ヵ所確認し、さらに木簡も2点出土するなど石見地方の大変貴重な資料を得ることができました。

庵寺遺跡では、島根県内最多35点もの農具「田下駄」が一度にまとめて出土しました。これは、弥生時代の農具の製作方法や保管方法を考える上で重要な資料となりました。

本書でまとめたこれらの成果が、ふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育等のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原義光

# 例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、平成17～19年度に実施した一般国道9号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で報告する遺跡は次の通りである。

島根県大田市仁摩町大字45-1他 五丁遺跡  
島根県大田市仁摩町大字大字97他 庵寺遺跡  
島根県大田市仁摩町大字3136 於才迫遺跡

3. 調査組織は次の通りである。

平成17年度 現地調査

[事務局] 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）、  
宮澤明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 伊藤智（同文化財保護主事）、竹下浩充（同教諭兼主事）、阿部賢治（同調査補助員）

平成18年度 現地調査

[事務局] 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（同総務グループ課長）、  
宮澤明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 平石充（同文化財保護主任）、濱岡宏行（同教諭兼保護主任）、小池康明  
(同調査補助員)

平成19年度 現地調査

[事務局] 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同調整監）、赤山治  
(同総務G課長)、廣江耕史（同調査第3グループ課長）

[調査員] 平石充（同文化財保護主任）、濱岡宏行（同教諭兼保護主任）、小池康明  
(同調査補助員)

平成20年度 報告書作成

[事務局] 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同副所長）、赤山治  
(同総務課長)、廣江耕史（同調査第3グループ課長）

[調査員] 平石充（同文化財保護主任）、濱岡宏行（同教諭兼保護主任）

4. 本調査に伴って行った自然科学的な分析は次の機関に委託して実施し、その成果は第6章にまとめて掲載した。

平成17年度 五丁遺跡 樹種同定（京都科学（株）及び文化財調査コンサルタント）  
樹種鑑定（元興寺文化財研究所）

平成18年度 五丁遺跡 軟X線観察業務、種実分析業務、自然科学的分析業務、古環境復元業務  
(文化財調査コンサルタント)  
放射性炭素年代測定報告書（古環境研究所）

平成19年度 庵寺遺跡 軟X線観察業務、微化石分析業務、(文化財調査コンサルタント)  
庵寺遺跡及び於才迫遺跡 地磁気年代測定（法吉データ）

5. 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借上げ・発掘用具調達等）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

[平成17年度] 高橋憲生（社団法人中国建設弘済会技術員）

[平成18～19年度] 祝部祥子（同）寺戸由美子（同事務員）

6. 発掘調査並びに報告書作成にあたっては、以下の方から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表させていただく（五十音順、敬称略）。

梅木茂雄（江津市教育委員会）、遠藤浩巳（大田市石見銀山課）、大国晴雄（大田市石見銀山課）、大橋康夫（島根大学法文学部教授）、田中義昭（島根県文化財保護審議委員会）、田畠直彦（山口大学埋蔵文化財資料館助手）、中田健一（大田市石見銀山課）、長嶺泰典（大田市石見銀山課）、中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）、三宅博士

7. 本書のうち、挿図中の北は測量法による平面直角座標系XY座標（世界測地系）、第Ⅲ座標系のX軸方向を指している。

8. 本書で使用した第1図は国土地理院発行の1/25,000地図を使用して作成したものである。

9. 本書に掲載した写真は、平石が撮影した。

10. 本書に掲載した遺物実測図の作成と浄書は、各調査員・補助員の他、園山暢男、渡辺真二、佐々木知子、無川美知子が行った。

11. 本書の執筆・編集は平石が行った。

12. 注・参考文献は各章ごとに連番を振り、各章末にまとめて示した。

13. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次の通りである。

SK：土坑、SD：溝、SR：流路

14. 遺物実測図の断面は、縄文土器、弥生土器、土師器は白ヌキ、須恵器を黒塗り、陶磁器を50%スミで示している。

15. 本書の仕様は巻末に示した。

16. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管している。

## 凡　　例

(1) 突帯文土器の器形・刻目の形態などの分類については、特に断りのない限り濱田竜彦2001「沖丈遺跡出土の突帯文土器と石見東部の地域性」（『沖丈遺跡』邑智町教育委員会）を使用している。

(2) 弥生土器の様式については、本書の全編にわたり松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」「石見地域」（いずれも『弥生土器の様式と編年』木耳社所収）を使用し、「松本石見I-1様式」のように表記している。

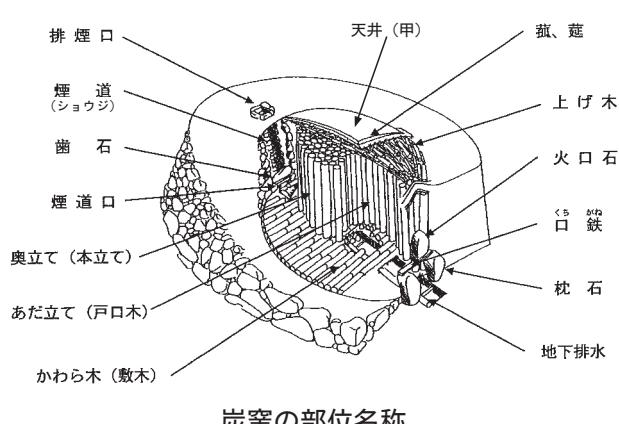
(3) 土師器の編年については、松山智宏1991「出雲における古墳時代前期の土器の様相－大東式の再検討－」（『島根考古学会誌』8）、池淵俊一2008「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」（『九景川遺跡』島根県教育委員会）を使用し、「出雲松山Ⅲ期」、「九景川様相4」のように表記している。

(4) 近世の肥前系陶磁器については、九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』の編年観を使用し

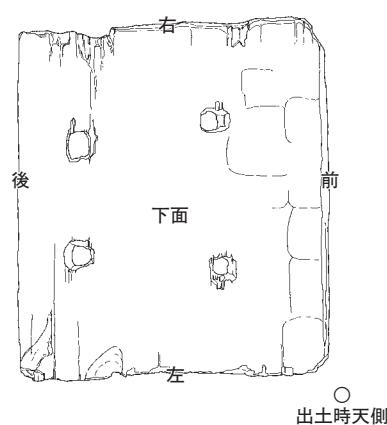
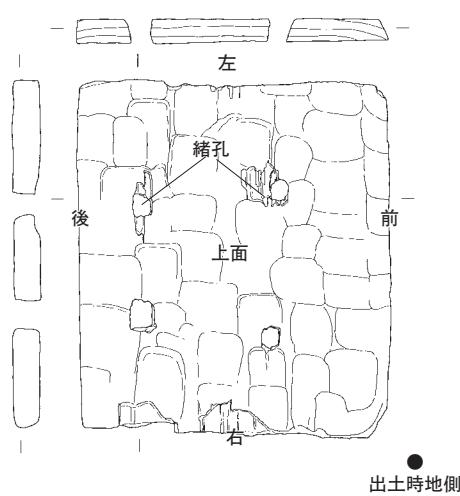
「九陶V期」のように表記する。また全資料について、調査補助員の阿部賢治氏に鑑定による。

(5) 炭窯については、以下の文献を参考としている。部位名称については横田町教育委員会2003を参照した。

- ・是田敦2003「炭窯について」『尾白I遺跡・尾白II遺跡・家ノ脇II遺跡3区・川平I遺跡』島根県教育委員会。
- ・横田町教育委員会2003『大炭窯築造製炭技術解説－製鉄用製炭従事者“山子の技術伝承”－』
- ・岸本定吉1984『木炭の博物誌』総合科学出版
- ・安間拓巳2007「中国地方の木炭窯」『日本古代鉄器生産の考古学的研究』溪水社



炭窯の部位名称



田下駄実測図の配置と部位名称

(6) 田下駄の実測図配置、部位等については以下の田下駄の部位名称を参照のこと。

実測図の配置 田下駄の上面・下面・前後左右が判明する場合、基本的には以下のように縦2段に上面・下面を配置している。左右には位置している場合は、左側に上面を配置している。また、田下駄下面に調整使用痕跡がない場合、下面の図面は省略している。

前後左右・上下面を判断できなかった場合も、上下両面に調整・使用痕があれば同様に仮配置している。この場合、前後左右上下については上段の実測図の位置関係に基づき表記するが、仮のものであることを示すために括弧付を付し、(前) 方向、(後) 側などのように表記する。

## 用語

### ①型式

横型田下駄：板の木目方向に対し、直行するように足の長辺を載せる田下駄。

縦型田下駄：板の木目方向に対し、平行になるように足の長辺を乗せる田下駄。

### ②緒孔

平面穿孔：板材の平らな面から穿孔したもの。

側面キリカキ：板材の側面から工具を入れ、キリカキ落とすようにして刻みを付け、緒孔の代用としたもの。

### ③ 田下駄の前後左右上下と天・地

前・後・左・右=田下駄作成時の上面を基準とした前後左右である（下面では左右が逆になる）。

上面・下面=上面は田下駄としての作成時・使用時

に、上側（足を乗せる側）を上面、地面に接す側を下面とする。出土時の状況を示すものではない。なお、田下駄についてはオモテ・ウラの概念は使用しない。表面はすべて「ひょうめん」である。

**天側・地側**=出土時点で天を向いていた面を天側、地を向いていた面を地側とする。田下駄作成時点の部位名称ではない。

#### ④ 原材調整の類型

田下駄の足板本体を原材から田下駄に加工・調整する際の類型である。詳細は第7章参照。

I類→未調整原材を田下駄に整形する。

II 1類→片面調整済み原材を田下駄に整形する。

II 2類→両面調整済み原材を田下駄に整形する。

III 1類→未調整原材を田下駄に整形し、片面のみ調整する。

III 2類→未調整原材を田下駄に整形し、両面に調整を施す。

VI 1類→片面調整のされた田下駄。ただし保存状況により調整の時期は不明な資料。

VI 2類→両面とも調整された田下駄。ただし保存状況により調整の時期は不明な資料。

(7) 石器・砥石などの石製品の石材については三瓶自然館中村唯史氏に鑑定を受け、その結果を記載している。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 五丁遺跡の調査 .....	5
第1節 遺跡と調査の概要 .....	5
第2節 A区の調査 .....	8
第3節 B区の調査 .....	24
第4節 C区の調査 .....	32
第5節 D区の調査 .....	60
第4章 庵寺遺跡の調査 .....	79
第1節 遺跡と調査の概要 .....	79
第2節 A区の調査 .....	82
第3節 B・C区の調査 .....	97
第5章 於才迫遺跡の調査 .....	136
第1節 遺跡と調査の概要 .....	136
第2節 調査の内容 .....	137
第3節 まとめ .....	144
第6章 自然化学分析 .....	145
第1節 五丁遺跡・庵寺遺跡における堆積相の軟X線観察 .....	渡辺正巳 145
第2節 五丁遺跡発掘調査に伴う出土樹種同定及び種実分析 .....	古野 育・渡辺正巳 161
第3節 庵寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の地磁気年代 .....	時枝克安 169
第7章 総括 .....	173
第1節 はじめに .....	173
第2節 五丁遺跡・庵寺遺跡の変遷 .....	173
第3節 庵寺遺跡出土田下駄について .....	190

# 図版目次

第1図 五丁・庵寺・於才迫遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)
第2図 五丁・庵寺・於才迫遺跡の調査区 (S=1/2500)
第3図 五丁遺跡 調査区全体図 (S=1/1000)
第4図 五丁遺跡 調査区地区割図 (S=1/1000)
第5図 五丁遺跡 A区遺構配置図 (S=1/400)
第6図 五丁遺跡 A区調査区土層図 (S=1/120)
第7図 五丁遺跡 A区畦1位置図・実測図 (S=1/400, 実測図1/60)
第8図 五丁遺跡 A区SK01実測図 (S=1/60)

- 第 9 図 五丁遺跡 A区SK02実測図・出土遺物実測図 (S = 1/60, 遺物 S = 1/6)
- 第 10 図 五丁遺跡 A区SD01・SR01・02実測図・出土遺物実測図 (S = 1/120, 遺物 1/3)
- 第 11 図 五丁遺跡 A区SR03実測図 (S = 1/80)
- 第 12 図 五丁遺跡 A区SR03土層図・立面図 (S = 1/80)
- 第 13 図 五丁遺跡 A区SR03出土遺物実測図(1) (S = 1/3, 3、4 : S = 1/6, 5~7 : S = 1/12)
- 第 14 図 五丁遺跡 A区SR03出土遺物実測図(2) (S = 1/12)
- 第 15 図 五丁遺跡 A区立木1・周辺出土遺物実測図 (S = 1/60, 遺物 S = 1/3)
- 第 16 図 五丁遺跡 A区遺構外出土遺物実測図 (S = 1/3)
- 第 17 図 五丁遺跡 B区遺構配置図 (S = 1/300)
- 第 18 図 五丁遺跡 B区調査区土層図 (S = 1/120)
- 第 19 図 五丁遺跡 B区SK03~08・12~16実測図 (S = 1/60)
- 第 20 図 五丁遺跡 B区SK09~11・17実測図 (S = 1/60, 遺物 S = 1/12)
- 第 21 図 五丁遺跡 B区SK04・07・09出土遺物実測図 (S = 1/3, 4~6 : S = 2/3)
- 第 22 図 五丁遺跡 B区SD02・03実測図・出土遺物実測図 (S = 1/120, 出土状況遺物 S = 1/12 遺物 S = 1/3)
- 第 23 図 五丁遺跡 B区遺構外出土遺物実測図 (S = 1/3, 8~12 : S = 2/3)
- 第 24 図 五丁遺跡 C区遺構配置図 (S = 1/400)
- 第 25 図 五丁遺跡 C区調査区土層図 (S = 1/120)
- 第 26 図 五丁遺跡 C区SK18~20実測図・出土遺物実測図 (S = 1/60, 出土状況遺物 S = 1/12, 遺物 S = 1/3)
- 第 27 図 五丁遺跡 C区SD04実測図・出土遺物実測図 (S = 1/80, 出土状況遺物 S = 1/12, 遺物 S = 1/3)
- 第 28 図 五丁遺跡 C区SR04・05位置図 (S = 1/400)
- 第 29 図 五丁遺跡 C区SR04実測図(1) (S = 1/120, 遺物 S = 1/12)
- 第 30 図 五丁遺跡 C区SR04実測図(2)・土層図 (S = 1/120, 土層図 S = 1/60)
- 第 31 図 五丁遺跡 C区SR04土器溜まり遺物出土状況図 (S = 1/30, 遺物 S = 1/12)
- 第 32 図 五丁遺跡 C区SR04実測図(3) (S = 1/60, 遺物 S = 1/12)
- 第 33 図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(1) (S = 1/3)
- 第 34 図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(2) (S = 1/3)
- 第 35 図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(3) (S = 1/3)
- 第 36 図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(4) (S = 1/3)
- 第 37 図 五丁遺跡 C区SR05実測図(1)・土層図 (S = 1/150, 土層図 S = 1/75, 遺物 S = 1/12)
- 第 38 図 五丁遺跡 C区SR05実測図(2) (S = 1/150, 遺物 S = 1/12)
- 第 39 図 五丁遺跡 C区SR05遺物出土状況拡大図(1) (S = 1/30, 遺物 S = 1/12)
- 第 40 図 五丁遺跡 C区SR05遺物出土状況拡大図(2) (S = 1/60, 遺物 S = 1/12)
- 第 41 図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(1) (S = 1/3)
- 第 42 図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(2) (S = 1/3)
- 第 43 図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(3) (S = 1/3)
- 第 44 図 五丁遺跡 C区SR05下層出土遺物実測図 (S = 1/3)
- 第 45 図 五丁遺跡 C区SR05出土遺物実測図 (S = 1/3, 1 : S = 1/6)
- 第 46 図 五丁遺跡 C区遺構外出土遺物実測図(1) (S = 1/3)
- 第 47 図 五丁遺跡 C区遺構外出土遺物実測図(2) (S = 1/3, 46 : S = 1/1)
- 第 48 図 五丁遺跡 D区遺構配置図(1) (S = 1/400)
- 第 49 図 五丁遺跡 D区遺構配置図(2) (S = 1/400)
- 第 50 図 五丁遺跡 D区調査区土層図 (S = 1/120)
- 第 51 図 五丁遺跡 D区畦 2 付近出土遺物実測図 (S = 1/3)
- 第 52 図 五丁遺跡 D区畦 2 実測図・下層実測図(1) (S = 1/60)
- 第 53 図 五丁遺跡 D区畦2実測図・下層実測図(2) (S = 1/60)
- 第 54 図 五丁遺跡 D区SK21~25実測図 (S = 1/60)
- 第 55 図 五丁遺跡 D区SD04実測図 (S = 1/80)
- 第 56 図 五丁遺跡 D区SD05実測図 (S = 1/80, 遺物 S = 1/12)
- 第 57 図 五丁遺跡 D区 SD04・05出土遺物実測図 (S = 1/3, 5 : S = 1/12)
- 第 58 図 五丁遺跡 D区SR04実測図 (S = 1/120)
- 第 59 図 五丁遺跡 D区SR05実測図 (S = 1/120, 遺物 S = 1/12)
- 第 60 図 五丁遺跡 D区SR05土層図 (S = 1/60)
- 第 61 図 五丁遺跡 D区SR05上層・下層出土遺物実測図 (S = 1/3)
- 第 62 図 五丁遺跡 D区SR05下層出土遺物実測図 (S = 1/3)
- 第 63 図 五丁遺跡 D区遺構外出土遺物実測図(1) (S = 1/3)

- 第64図 五丁遺跡 D区遺構外出土遺物実測図(2) (S=1/3, 30:S=2/3)
- 第65図 庵寺遺跡 調査区位置図 (S=1/2000)
- 第66図 庵寺遺跡 調査区地区割図 (S=1/1000)
- 第67図 庵寺遺跡 A区第1黒色土下層遺構配置図 (S=1/200)
- 第68図 庵寺遺跡 A区土層図 (S=1/80)
- 第69図 庵寺遺跡 A区第1黒色土土層図 (S=1/80)
- 第70図 庵寺遺跡 A区炭窯1~3重複実測図 (S=1/60)
- 第71図 庵寺遺跡 A区炭窯1実測図 (S=1/60)
- 第72図 庵寺遺跡 A区炭窯2実測図 (S=1/60)
- 第73図 庵寺遺跡 A区炭窯3実測図 (S=1/60)
- 第74図 庵寺遺跡 A区SD01実測図 (S=1/90)
- 第75図 庵寺遺跡 A区石組み1実測図 (S=1/60)
- 第76図 庵寺遺跡 A区石組み2実測図 (S=1/60)
- 第77図 庵寺遺跡 A区SK01~03道1実測図 (S=1/30)
- 第78図 庵寺遺跡 A区炭溜り実測図 (S=1/60)
- 第79図 庵寺遺跡 A区炭窯付近出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第80図 庵寺遺跡 A区第1・第2黒色土出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第81図 庵寺遺跡 A区第3黒色土下層遺構図 (S=1/200, 遺物S=1/12)
- 第82図 庵寺遺跡 A区第3黒色土出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第83図 庵寺遺跡 A区第3黒色土・暗灰色粘質土土層図 (S=1/80)
- 第84図 庵寺遺跡 A区暗灰色粘質土遺物出土状況図 (S=1/200, 出土遺物S=1/12)
- 第85図 庵寺遺跡 A区暗灰色粘質土出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第86図 庵寺遺跡 B・C区遺構配置図 (S=1/400)
- 第87図 庵寺遺跡 B・C区調査区中央・東壁土層図 (S=1/90)
- 第88図 庵寺遺跡 B・C区調査区北壁・西壁土層図 (S=1/90)
- 第89図 庵寺遺跡 B・C区SK04実測図 (S=1/60)
- 第90図 庵寺遺跡 B区SD02・03杭列1~3実測図 (S=1/80)
- 第91図 庵寺遺跡 B・C区Ⅲ層出土遺物実測図(1) (S=1/3)
- 第92図 庵寺遺跡 B・C区Ⅲ層出土遺物実測図(2) (S=1/3)
- 第93図 庵寺遺跡 C区SD01・02出土遺物実測図 (S=1/3, 7:S=2/3)
- 第94図 庵寺遺跡 B・C区IV層出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第95図 庵寺遺跡 B・C区杭列4実測図 (S=1/80)
- 第96図 庵寺遺跡 B・C区SD04実測図 (S=1/80)
- 第97図 庵寺遺跡 B・C区SD05実測図 (S=1/90)
- 第98図 庵寺遺跡 B・C区杭列5実測図 (S=1/80)
- 第99図 庵寺遺跡 B・C区SR01(北)実測図・遺物出土状況図(1) (S=1/100)
- 第100図 庵寺遺跡 B・C区SR01(中)実測図・遺物出土状況図(2) (S=1/100)
- 第101図 庵寺遺跡 B・C区SR01(南)実測図・遺物出土状況図(3) (S=1/100)
- 第102図 庵寺遺跡 B・C区SR01田下駄多数出土地点A実測図 (S=1/30)
- 第103図 庵寺遺跡 B・C区SR01田下駄多数出土地点B実測図 (S=1/30)
- 第104図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(1) (S=1/4)
- 第105図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(2) (S=1/4)
- 第106図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(3) (S=1/4)
- 第107図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(4) (S=1/4)
- 第108図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(5) (S=1/4)
- 第109図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(6) (S=1/4)
- 第110図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(7) (S=1/4)
- 第111図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(8) (S=1/4)
- 第112図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(9) (S=1/4)
- 第113図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(10) (S=1/4)
- 第114図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(11) (S=1/4)
- 第115図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(12) (S=1/4)
- 第116図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(13) (S=1/4)
- 第117図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(14) (S=1/4)
- 第118図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(15) (S=1/6,37:S=1/12)

- 第119図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(16) (S=1/6,41 : S=1/12)  
 第120図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(17) (S=1/6)  
 第121図 廬寺遺跡 B・C区遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)  
 第122図 於才迫遺跡 調査区位置図 (S=1/1500)  
 第123図 於才迫遺跡 調査区遺構全体図 (S=1/150)  
 第124図 於才迫遺跡 炭窯1実測図 (S=1/60)  
 第125図 於才迫遺跡 炭窯3実測図 (S=1/60)  
 第126図 於才迫遺跡 炭窯4実測図 (S=1/60)  
 第127図 於才迫遺跡 炭窯4周辺図 (S=1/60)  
 第128図 於才迫遺跡 集石1実測図 (S=1/30)  
 第129図 於才迫遺跡 集石2実測図 (S=1/30)  
 第130図 於才迫遺跡 出土遺物実測図 (S=1/3)  
 第131図 五丁・廬寺遺跡周辺圃場整備前の状況 (S=1/4000)  
 第132図 五丁・廬寺遺跡周辺の復元地形 (S=1/4000)  
 第133図 五丁地区の縄文晩期～弥生前期の様相 (S=1/2000)  
 第134図 五丁・廬寺遺跡の出土地点別縄文・弥生土器一覧 (S=1/12)  
 第135図 五丁地区弥生中期～古墳時代中期の様相 (S=1/2000)  
 第136図 五丁地区の奈良・時代～中世の様相 (S=1/2000)  
 第137図 五丁地区潮川流路推定地の堆積状況  
 第138図 田下駄の調整と類型  
 第139図 出土状況からセットなると考えられる田下駄 (S=1/16)

## 表 目 次

表 1	周辺の遺跡一覧表	4
表 2	五丁地区条里の地割間距離	187
表 3	五丁地区遺跡の中世建物軸方位	188
表 4	廬寺遺跡田下駄詳細観察表	191
表 5	五丁遺跡・廬寺遺跡・於才迫遺跡出土遺物観察表	197

## 本文中写真目次

写真 1	廬寺・於才迫遺跡の谷の小河川	38
写真 2	43-26壺の頸胴部界	54
写真 3	43-27壺の胴部沈線	54
写真 4	畦2と3-1層（右側砂混じりの部分）	63
写真 5	61-7の有軸羽状文	71
写真 6	62-15壺の断面	76
写真 7	弥生土器85-1出土状況と基盤層のひび割れ	95
写真 8	田下駄14の上面端の半裁された調整痕	118
写真 9	田下駄27後左端部 隅丸の田下駄形状に整合する調整痕	124
写真10	圃場整備前の仁摩平野空中写真	185

# 写真図版目次

- カラー図版 1 1. 五丁遺跡C・D区SR04・05 出土置物  
2. 五丁遺跡A区SK02 出土田下駄
- カラー図版 2 1. 廬寺遺跡B・C区SR01 出土田下駄  
2. 五丁遺跡・庵寺遺跡全景
- 図版 1 1. 五丁遺跡調査前風景(北より)  
2. 五丁遺跡調査前風景写真  
3. 五丁遺跡A区北壁土層
- 図版 2 1. 五丁遺跡A区畦1(南から)  
2. 五丁遺跡A区SK01(東から)  
3. 五丁遺跡A区SK02(西から)
- 図版 3 1. 五丁遺跡A区SK02遺物出土状況  
2. 五丁遺跡A区SD01(東から)  
3. 五丁遺跡A区SR03北西検出状況(西から)
- 図版 4 1. 五丁遺跡A区SR03北西杭列(東から)  
2. 五丁遺跡A区SR03BB'土層(南部分)  
3. 五丁遺跡A区SR03BB'土層(北部分)
- 図版 5 1. 五丁遺跡A区SR03北東矢板列(南から)  
2. 五丁遺跡A区SR03南西矢板列(東から)  
3. 五丁遺跡A区SR03DD'土層(西から)
- 図版 6 1. 五丁遺跡A区SR03西部分(東から)  
2. 五丁遺跡A区SR03東部分(東から)
- 図版 7 1. 五丁遺跡A区SR03広鍬(13-3)出土状況  
2. 五丁遺跡A区立木1  
3. 五丁遺跡B区SK04土層・遺物出土状況(西から)
- 図版 8 1. 五丁遺跡B区SK07土層  
2. 五丁遺跡B区SK08土層  
3. 五丁遺跡B区SK08 完掘
- 図版 9 1. 五丁遺跡B区全景  
2. 五丁遺跡B区SK09~11・14検出
- 図版10 1. 五丁遺跡B区SK09・10(北から)  
2. 五丁遺跡B区SK11(南から)  
3. 五丁遺跡B区SD02・03CC'土層(北から)
- 図版11 1. 五丁遺跡B区SD03(北から)  
2. 五丁遺跡C区SK18・19遺物出土状況(西から)  
3. 五丁遺跡C区SD04検出(南から)
- 図版12 1. 五丁遺跡C区SD04(南から)  
2. 五丁遺跡C区SR04(DD'付近から北を望む)  
3. 五丁遺跡C区SR04(DD'付近から南を望む)
- 図版13 1. 五丁遺跡C区SR04遺物(34-13)出土状況  
2. 五丁遺跡C区SR04石群(南から)  
3. 五丁遺跡C区SR04土器出土状況(北から)
- 図版14 1. 五丁遺跡C区SR04FF'土層(南から)  
2. 五丁遺跡B区SR05  
3. 五丁遺跡B区SR05AA'土層
- 図版15 1. 五丁遺跡C区SR05土器(43-26)出土状況(南から)  
2. 五丁遺跡C区SR05(北から)  
3. 五丁遺跡C区SR05DD'土層
- 図版16 1. 五丁遺跡C区全景  
2. 五丁遺跡D区D 1区・D 2区全景
- 図版17 1. 五丁遺跡D区畦2西部分(東から)  
2. 五丁遺跡D区畦2東部分(東から)  
3. 五丁遺跡D区畦2東部分地業検出(南から)
- 図版18 1. 五丁遺跡D区畦2東部分地業完掘(南から)  
2. 五丁遺跡D区D 2区東壁(第50図)の畦2  
3. 五丁遺跡D区畦2 GG'土層
- 図版19 1. 五丁遺跡D区SD04(北から)  
2. 五丁遺跡D区D 1区SD05(北から)  
3. 五丁遺跡D区D 1区全景(北から)
- 図版20 1. 五丁遺跡D区D 2区SR04・05検出(北から)  
2. 五丁遺跡D区D 2・3区SR05完掘  
3. 五丁遺跡D区SR05BB'土層
- 図版21 1. 五丁遺跡D区SR05DD'土層西部分  
2. 五丁遺跡D区SD05DD'土層東部分  
3. 五丁遺跡D区SR05土層土器(61-7)出土状況
- 図版22 1. A区SK02出土遺物  
2. A区SR03出土遺物
- 図版23 1. A区SR03出土遺物  
2. A区立木1・周辺出土遺物  
3. A区遺構外出土遺物
- 図版24 1. A区遺構外出土遺物  
2. B区SK04・07・09出土遺物(1)
- 図版25 1. B区SK04・07・09出土遺物(2)  
2. B区SD02・03出土遺物  
3. B区遺構外 出土遺物(1)
- 図版26 1. B区遺構外 出土遺物(2)  
2. C区SK18~20出土遺物  
3. C区SD04出土遺物  
4. C区SR04出土遺物(1)
- 図版27 1. C区SR04出土遺物(2)
- 図版28 1. C区SR04出土遺物(3)  
2. C区SR05出土遺物(1)
- 図版29 1. C区SR05出土遺物(2)
- 図版30 1. C区SR05出土遺物(3)
- 図版31 1. C区SR05出土遺物(4)  
2. C区遺構外出土遺物(1)
- 図版32 1. C区遺構外出土遺物(2)
- 図版33 1. C区遺構外出土遺物(3)
- 図版34 1. C区遺構外出土遺物(4)  
2. D区畦2付近出土遺物  
3. D区SD04・05出土遺物  
4. D区SR05上層出土遺物(1)
- 図版35 1. D区SR05上層出土遺物(2)  
2. D区SR05下層出土遺物(1)
- 図版36 1. D区SR05下層出土遺物(2)
- 図版36 2. D区遺構外出土遺物(1)
- 図版37 1. D区遺構外出土遺物(2)
- 図版38 1. D区出土遺物・A区出土陶磁器片  
2. 庵寺遺跡A区第2黑色土完掘(西から)  
3. 庵寺遺跡B区完掘(南から)
- 図版39 1. 庵寺遺跡調査前風景(北から)

2. 廬寺遺跡調査前風景(南から)  
3. 廬寺遺跡A区調査前風景(南東から)
- 図版40 1. 廬寺遺跡A区第1黑色土完掘(南から)  
2. 廬寺遺跡A区第1黑色土完掘(西から)  
3. 廬寺遺跡A区炭窯1~3検出(北から)
- 図版41 1. 廬寺遺跡A区炭窯1土層(南から)  
2. 廬寺遺跡A区炭窯1完掘(南から)  
3. 廬寺遺跡A区炭窯1完掘(北から)
- 図版42 1. 廬寺遺跡A区炭窯2・3土層  
2. 廬寺遺跡A区炭窯2完掘(西より)  
3. 廬寺遺跡A区炭窯3床面検出(北より)
- 図版43 1. 廬寺遺跡A区炭窯3完掘(北から)  
2. 廬寺遺跡A区SD01土層  
3. 廬寺遺跡A区石組み1
- 図版44 1. 廬寺遺跡A区石組み2  
2. 廬寺遺跡A区SK01(南から)  
3. 廬寺遺跡A区SK02(西から)
- 図版45 1. 廬寺遺跡A区SK03(東から)  
2. 廬寺遺跡A区炭溜り検出(西から)  
3. 廬寺遺跡A区炭溜り完掘(西から)
- 図版46 1. 廬寺遺跡A区第2黑色土下層遺構検出  
2. 廬寺遺跡A区第2黑色土下層遺構完掘  
3. 廬寺遺跡A区第2黑色土土層
- 図版47 1. 廬寺遺跡A区暗灰色粘質土遺物(85-1)出土状況  
2. 廬寺遺跡A区暗灰色粘質土完掘  
3. 廬寺遺跡A区北壁土層
- 図版48 1. 廬寺遺跡B区西壁(南部)  
図版49 2. 廬寺遺跡B区西壁(中部)  
3. 廬寺遺跡B区西壁(北部 C区との境)
- 図版50 1. 廬寺遺跡B・C区SK04完掘(南から)  
2. 廬寺遺跡B・C区SD02・03検出(南から)  
3. 廬寺遺跡B・C区SD02土層(西から)
- 図版51 1. 廬寺遺跡B・C区SD02・03完掘(南北から)  
2. 廬寺遺跡B・C区杭列1・2(東から)  
3. 廬寺遺跡B・C区III層遺物出土状況
- 図版52 1. 廬寺遺跡B・C区杭列4(南から)  
2. 廬寺遺跡B区IV層上面(西部分・南から)  
3. 廬寺遺跡C区IV層上面(西部分・南から)
- 図版53 1. 廬寺遺跡B区SR01木製品出土状況(北から)  
2. 廬寺遺跡C区SR01木製品出土状況(南から)
- 図版54 1. 廬寺遺跡C区SR01木製品出土状況(北東から)  
2. 廬寺遺跡B・C区SR01内SD04上の板材  
3. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品4・36出土状況
- 図版55 1. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品9・13・14・37・36出土状況(南から)  
2. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品14・15・出土状況(南から)  
3. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品11出土状況
- 図版56 1. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品19出土状況(東から)
- 図版56 2. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品26・27・31・32・35・41出土状況(北から)  
3. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品24・28出土状況(東から)
- 図版57 1. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品40出土状況(北から)  
2. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品28・30出土状況(北から)  
3. 廬寺遺跡B・C区SR01内木製品16・43出土状況(南から)
- 図版58 1. 廬寺遺跡B・C区杭列5(南から)  
2. 廬寺遺跡B区SR01完掘(南から)  
3. 廬寺遺跡C区SR01完掘(南西隅から)
- 図版59 1. 廬寺遺跡B・C区SR01東壁土層  
2. 廬寺遺跡B・C区SR01EE'土層  
(西から 図面は鏡像)  
3. 廬寺遺跡B・C区SR01GG'土層  
(西から 図面は鏡像)
- 図版60 1. A区炭窯付近第1・第2黑色土出土遺物
- 図版61 1. A区第3黑色土・暗灰色粘質土出土遺物  
2. B・C区III層出土遺物(1)
- 図版62 1. B・C区III層出土遺物(2)
- 図版63 1. B・C区III層出土遺物(3)
- 図版64 1. B・C区III層SD01・02遺構外出土遺物  
2. B・C区III層SD01・02出土遺物  
3. A区第3黑色土出土遺物、B・C区III層出土遺物
- 図版65 1. B・C区遺構外出土遺物(1)  
2. 於才迫遺跡出土遺物
- 図版66 1. B・C区SR01出土木製品(1)
- 図版67 1. B・C区SR01出土木製品(2)
- 図版68 1. B・C区SR01出土木製品(3)
- 図版69 1. B・C区SR01出土木製品(4)
- 図版70 1. B・C区SR01出土木製品(5)
- 図版71 1. B・C区SR01出土木製品(6)
- 図版72 1. B・C区SR01出土木製品(7)
- 図版73 1. B・C区SR01出土木製品(8)
- 図版74 1. B・C区SR01出土木製品(9)
- 図版75 1. B・C区SR01出土木製品(10)
- 図版76 1. 於才迫遺跡調査前風景(東から)  
2. 於才迫遺跡炭窯1(西から)  
3. 於才迫遺跡炭窯2(南から)
- 図版77 1. 於才迫遺跡炭窯3(東から)  
2. 於才迫遺跡炭窯4検出(東から)  
3. 於才迫遺跡炭窯4土層(東から)
- 図版78 1. 於才迫遺跡炭窯4完掘(西から)  
2. 於才迫遺跡炭窯4完掘  
3. 於才迫遺跡炭窯4焚口下の暗渠
- 図版79 1. 於才迫遺跡炭窯4奥壁の根石  
2. 於才迫遺跡集積1  
3. 於才迫遺跡集積2
- 図版80 1. 於才迫遺跡南部分完掘(東から)  
2. 於才迫遺跡北部分完掘(西から)

# 第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道9号仁摩温泉津道路は島根県大田市仁摩町大国から同温泉津町福波11.8kmに計画されている高規格道路である。この事業地内に存在する埋蔵文化財については、国土交通省松江国道工事事務所（当時）より平成15(2003)年2月19日付けで島根県教育委員会に協議があり、県教育長庁文化財課は、平成15年3月3日付けで事業実施前に遺跡の有無について確認調査が必要な旨を回答した。これに対し、松江国道工事事務所は平成15年3月31日付けで事業地内の遺跡について島根県教育委員会に照会したので、県教育長庁埋蔵文化財調査センターでは、平成15年4月に事業地内の分布調査を実施した。その結果、事業地内で都合17カ所の遺跡が存在することを確認したが、この時点では一部に分布調査できない地点もあった。これを受け、島根県教育委員会は平成15年7月28日付で松江国道工事事務所あてに、分布調査の結果を報告、所在する遺跡について文化財保護法上の諸手続をとるよう回答した。平成17年(2005)年3月には残る温泉津町福波地区で分布調査を行い、事業地の周辺で遺物を採取した。

平成17(2005)年度からは仁摩温泉津道路改築工事が本格化し、これに伴う発掘調査を島根県教育委員会が中国地方整備局松江国道工事事務所より受託している。調査は温泉津町福波の福波第2高架橋予定地のトレンチ調査（中祖遺跡）、仁摩インターチェンジ1号工事用道路の進入路部分（五丁遺跡A1区）の本調査が実施されている。

平成18(2006)年度は、前年に引き続き中祖遺跡、五丁遺跡の本調査を実施したほか、仁摩町立岩中遺跡・於才迫遺跡・狐城跡、温泉津町紺屋平遺跡、仁摩町ナメラ迫遺跡・宇福遺跡・矢臺遺跡で遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を行った。このうち、中祖遺跡では石見では確認事例の少ない瓦を使用した礎石建物が検出され、あわせて周辺部の遺跡の範囲確認調査を実施した。また、ナメラ迫遺跡で古墳時代後期～室町時代の集落跡が発見され、9～11月にかけて本調査が実施された。

平成19(2007)年度には、仁摩インターチェンジ道路本体土工区間1に当たる庵寺城跡について、谷部で遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を実施したところ、奈良平安時代を中心とする遺物が出土したため、庵寺遺跡として本調査を実施した。なお、平成19年度末の段階で庵寺遺跡にはEランプ橋脚部分等の未調査部分が残った。同じく本体工事土工区間2で平成18年度にトレンチ調査を実施した於才迫遺跡について本調査を行った。ナメラ迫遺跡についても、前年度対象から外れていた本線P1橋脚部分のトレンチ調査を行ったところ、掘立柱建物他の遺構が確認されたため引き続き本調査実施した。このほか、近世の道路跡が遺存していた梨ノ木坂遺跡について本調査を実施しており、仁摩町牧原I・牧原II遺跡・向山遺跡、温泉津町紺屋平遺跡・ズリ岩遺跡・福光窯跡で遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を行い、牧原II遺跡からは古代・中世の製鉄関連遺跡が確認された。また、調査対象遺跡のうち、中祖遺跡・ナメラ迫遺跡の発掘調査報告書を『一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1 中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』として刊行した。

平成20(2008)年度には、五丁遺跡・庵寺遺跡の平成19年度調査分（庵寺遺跡Iとして報告）・於才迫遺跡の報告書を作成した（本書）。庵寺城跡丘陵部については、実態が古墳群であることから庵寺古墳群として本調査を実施、前漢鏡その他の副葬品を持つ箱式石棺を主体部とし、古墳時代後期に横穴式石室が増築された庵寺1号墳他の古墳4基を確認した。また、牧原II遺跡でも本調査を実施し、9世紀から中世にかけての鉄滓・路壁などが出土した。このほか、湯里天神遺跡・ビャクラク遺跡のトレンチ調査を実施している。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

島根県西部（旧石見国）の沿岸部は、日本海に山地が迫り深い入り江になったリアス式海岸と、その間に開けた砂丘が織りなす変化に富んだ景観をもつ。人々の生活の舞台となった集落や古墳は、そうした浦々に注ぐ河川沿いに形成された小平野と周辺の丘陵地に点在する。五丁遺跡、庵寺遺跡、於才迫遺跡は、このような石見沿岸部に形成された遺跡である。五丁遺跡は島根県大田市仁摩町大国45-1他、庵寺遺跡は大田市仁摩町大字大国97他、於才迫遺跡は、大田市仁摩町大国3136に所在する。

3遺跡が所在する大国地区は、仁摩町の中央を流れる潮川の中流域から上流域の一帯にあり、東部は大森銀山に境し、西部は温泉津町・天河内地区に接している。明治22（1889）年の町村制施行時には、邇摩郡明治村とされ明治24（1881）年に邇摩郡大国村、昭和29（1954）年には邇摩郡仁摩町となり、平成17（2005）年に大田市と合併して現在に至っている。五丁遺跡は、潮川と平行して走っている県道31号線の南西の沖積平野の中に位置している。庵寺遺跡も五丁遺跡のすぐ奥の谷合に位置し、2遺跡とも調査前は、ほとんどの部分が水田地帯であり、低湿地遺跡に属する。於才迫遺跡は、庵寺遺跡からさらに約150m谷奥へ進んだ丘陵の裾部の斜面で、調査前は山林であった。

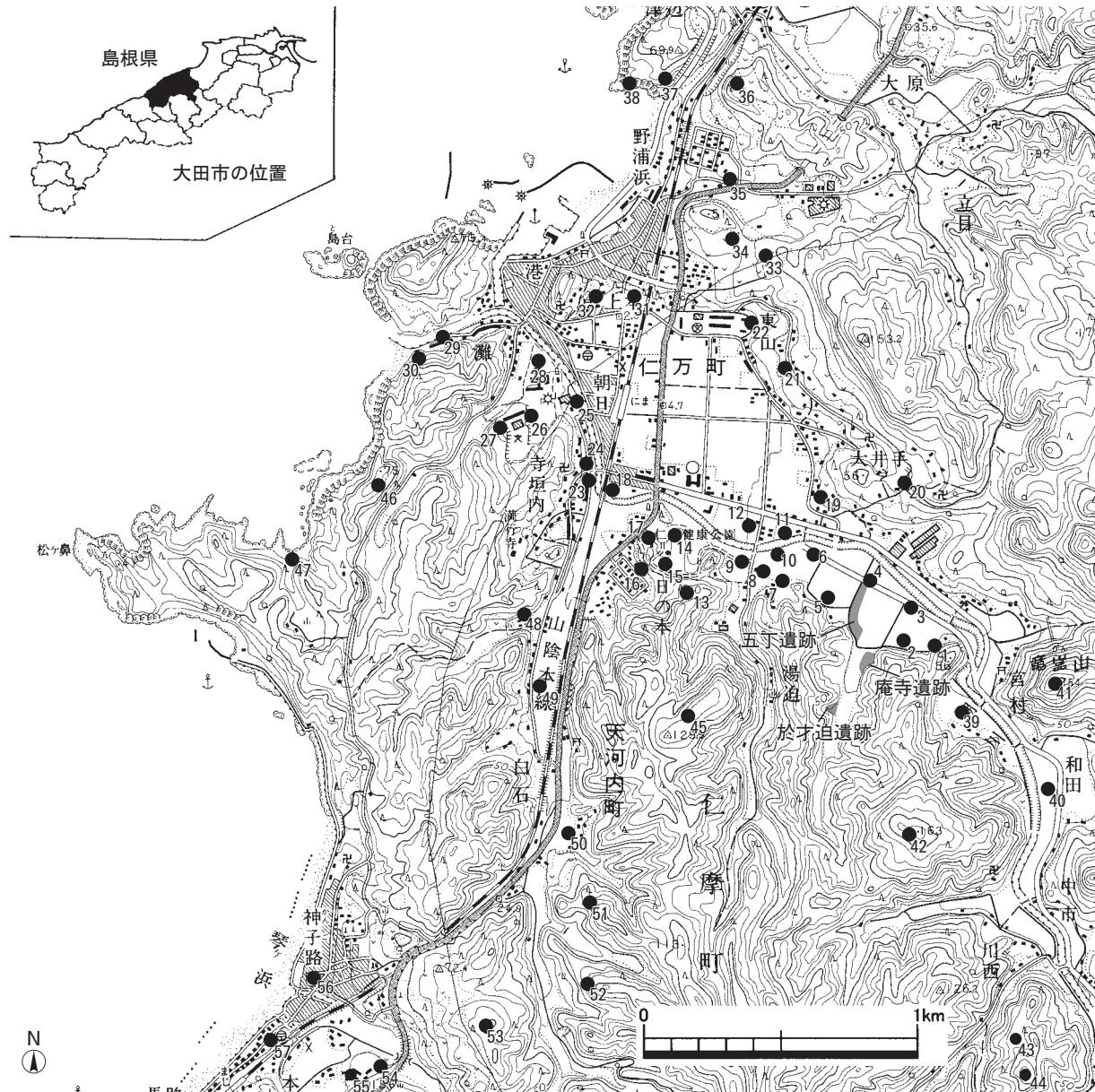
### 第2節 歴史的環境

調査地の周辺地域における遺跡の初見は、久根ヶ曾根遺跡と鳥居原遺跡で縄文時代前期に遡る。海岸砂丘とその縁辺部に立地し、砂層下の黒灰色層または黒色砂層から縄文土器のほか石斧・石鎌などが出土している。中期・後期の遺跡はあまり多くないが、砂丘に立地する坂灘遺跡・湊遺跡・善興寺遺跡が知られている。

縄文時代晚期から弥生時代前期の遺跡には、坂灘遺跡・川向遺跡・古屋敷遺跡などが知られる。いずれの遺跡も沿岸部の砂丘地や少し内陸に入った地点で確認されており、当地域にも水稻稻作がいち早くもたされ、内陸へと広がったと推測される。このうち川向遺跡では矢板を円形または長楕円形状に打ち込み内部に木製農具の未製品を入れた水浸け保管施設が検出された他、鍬、鋤、高坏・杓子など多数の木製品が出土している。弥生時代後期になると榆ノ木遺跡からは竪穴式住居跡が検出され、大寺遺跡や孫四田遺跡など遺跡も多くなる。

古墳時代前期・中期の遺跡では、仁摩平野を望む位置に作られた安養寺1号墳があげられる。この地域では数少ない前期古墳の可能性が考えられるものである。墳丘は長辺12m・短辺8mほどの方墳状をなし、箱式石棺をはじめとする4基の埋葬施設が確認された。また、平成20年度の発掘調査により、庵寺古墳群でも2基の古墳を確認し、その中の1基に前漢鏡（八禽鏡）が出土している。この他、坂灘遺跡では石を2～3段に積み上げ、床面に石を敷いた箱式石棺が明らかになっており、人骨とともに鹿角装刀子が出土している。

古墳時代後期になると明神古墳、鳥居原古墳など小平野ごとに有力な古墳が営まれる。明神古墳は径20mの円墳で、全長10.1mの横穴式石室に家形石棺を納めており、副葬品には金銅装円頭大刀・銅腕・鏡片・鉄斧・鉄鎌などがある。鳥居原古墳は横穴式石室を持ち、双龍環頭大刀をはじめ、鞍金具、玉類、耳環などが出土した。また、庵寺古墳群からも横穴式石室が1基確認され、刀



第1図 五丁・庵寺・於才迫遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)

子、玉類、耳環などが出土した。

これらの古墳の所在する仁摩平野周辺は、榆ノ木谷横穴墓群や赤崎山横穴墓群など有力者の墳墓も確認されており、中核を担っていた地域であることが窺える。

奈良・平安時代の遺跡確認例は少ない。『和名妙』によれば、仁摩町は託農郷・大国郷が置かれ、『延喜式』には、古代山陰道の駅として託農などの名は見える。邇摩郡の郡家を大国の御門あたりに比定する説もあり、仁万田台には条里遺構が近年まで残されていた。本報告書の五丁遺跡でも奈良平安以降の条里畦畔遺構が発見された。しかし、郡家や駅などに関わる遺跡は不明といわざるを得ない。

平安時代末から鎌倉時代の遺跡には白石遺跡がある。掘立柱建物跡11棟が確認された他、白磁や龍泉系青磁など輸入陶磁器が出土しており、豪族居館の可能性が考えられている。

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	概要
1	古屋敷遺跡	集落跡	大國町	掘立柱建物跡、石組遺構、土壙、陶磁器、弥生土器
2	末ヶ坪遺跡	散布地	大國町	土師質土器、陶磁器
3	孫四田遺跡	集落跡	大國町	土師質土器、陶磁器、土師器、弥生土器
4	大月遺跡	集落跡	大國町	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器
5	コヲスミ遺跡	集落跡	大國町	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器、石鉢
6	京円原遺跡	集落跡	大國町	土師質土器、陶磁器
7	ヒヨトリヶ市遺跡	散布地	大國町	土師質土器、陶磁器、須恵器、土師器
8	入石遺跡	集落跡	大國町	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器
9	白石遺跡	集落跡	天河内町	掘立柱建物跡、土師質土器、貿易青白磁、須恵器
10	千後田遺跡	集落跡	大國町	掘立柱建物跡、土師質土器、須恵器、陶磁器
11	清石遺跡	集落跡	仁万町	掘立柱建物跡、土師質土器、青白磁、土師器、須恵器
12	幸田遺跡	散布地	仁万町	土師質土器、陶磁器
13	千人塚遺跡	古墳	天河内町	横穴式石室、墳形不明
14	榆ノ木谷横穴群	横穴墓	天河内町	3支群12穴、須恵器、土師器、耳環、玉類、I群保存
15	榆ノ木遺跡	散布地	天河内町	土壙、弥生土器、須恵器
16	飯田遺跡	散布地	天河内町	土師器
17	安養寺古墳群	古墳ほか	天河内町	4基、土壙、土師器、須恵器、刀子、弥生住居跡
18	馬庭遺跡	散布地	仁万町	土師器、須恵器
19	大井手遺跡	散布地	仁万町	黒曜石
20	藪田遺跡	散布地	仁万町	土師器、須恵器、土師質土器、下駄、漆椀
21	番所遺跡	散布地	仁万町	塚
22	大寺遺跡	散布地	仁万町	弥生土器、土師器、須恵器、木製品
23	善興寺橋遺跡	散布地	天河内町	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器
24	仁万大橋遺跡	散布地	仁万町	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器
25	中配前遺跡	散布地	仁万町	石斧
26	毘沙門塚古墳	古墳	仁万町	消滅
27	毘沙門遺跡	散布地	仁万町	横穴?、須恵器
28	川向遺跡	散布地	仁万町	円形杭列遺構、弥生土器、石器類、木製品
29	坂灘遺跡	散布地	仁万町	中世墓、人骨、縄文土器ほか
30	坂灘古墳	古墳	仁万町	箱式石棺、人骨、鹿角装刀子、町指定史跡
31	墓原遺跡	散布地	仁万町	土師器
32	打落し遺跡	散布地	仁万町	弥生土器、土師質土器、古錢、人骨
33	高浜遺跡	散布地	仁万町	古墳?、須恵器
34	明神古墳	古墳	仁万町	横穴式石室、家形石棺、県指定史跡
35	立平浜遺跡	散布地	仁万町	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器
36	宅野の道標	その他	宅野町	才の峠
37	赤崎山横穴群	横穴	宅野町	3支群約25穴
38	坂本窯跡	生産遺跡	宅野町	だるま窯2~3黄
39	駒岩遺跡	散布地	大國町	ピット、土師器、須恵器、青白磁
40	志源寺遺跡	散布地	大國町	溝状遺構、土師質土器、陶磁器
41	石見城跡	城跡	大國町	郭、土壘
42	大國城跡	城跡	大國町	郭、土壘
43	虹ヶ谷城跡	城跡	大國町	郭、堀切
44	茶臼山城跡	城跡	大國町	郭
45	天垣内城跡	城跡	天河内町	郭、堀内
46	仁万要城跡	城跡	仁万町	郭、帶郭、土壘
47	田尻遺跡	散布地	仁万町	石斧
48	矢迫屋横穴群	横穴墓	天河内町	3穴
49	横屋前遺跡	散布地	天河内町	土師質土器、貿易青磁
50	白石上屋敷遺跡	集落跡	天河内町	ピット、土師質土器、須恵器、青白磁、陶器、木製品
51	半城跡	城跡	大國町	郭、堀切
52	ナメラ迫遺跡	集落跡	天河内町	掘立柱建物跡、溝、土師器、須恵器、土師質土器、貿易陶磁器
53	狐城跡	城跡	馬路町	郭、腰郭
54	鳥居原遺跡	散布地	馬路町	縄文土器、石斧、石鎌、石錐
55	鳥居原古墳	古墳	馬路町	双龍環頭太刀、馬具、玉類、須恵器、消滅
56	久根ヶ曾根遺跡	散布地	馬路町	縄文土器、石鎌、石匙
57	琴ヶ浜遺跡	散布地	馬路町	石斧

## 第3章 五丁遺跡の調査

### 第1節 遺跡と調査の概要

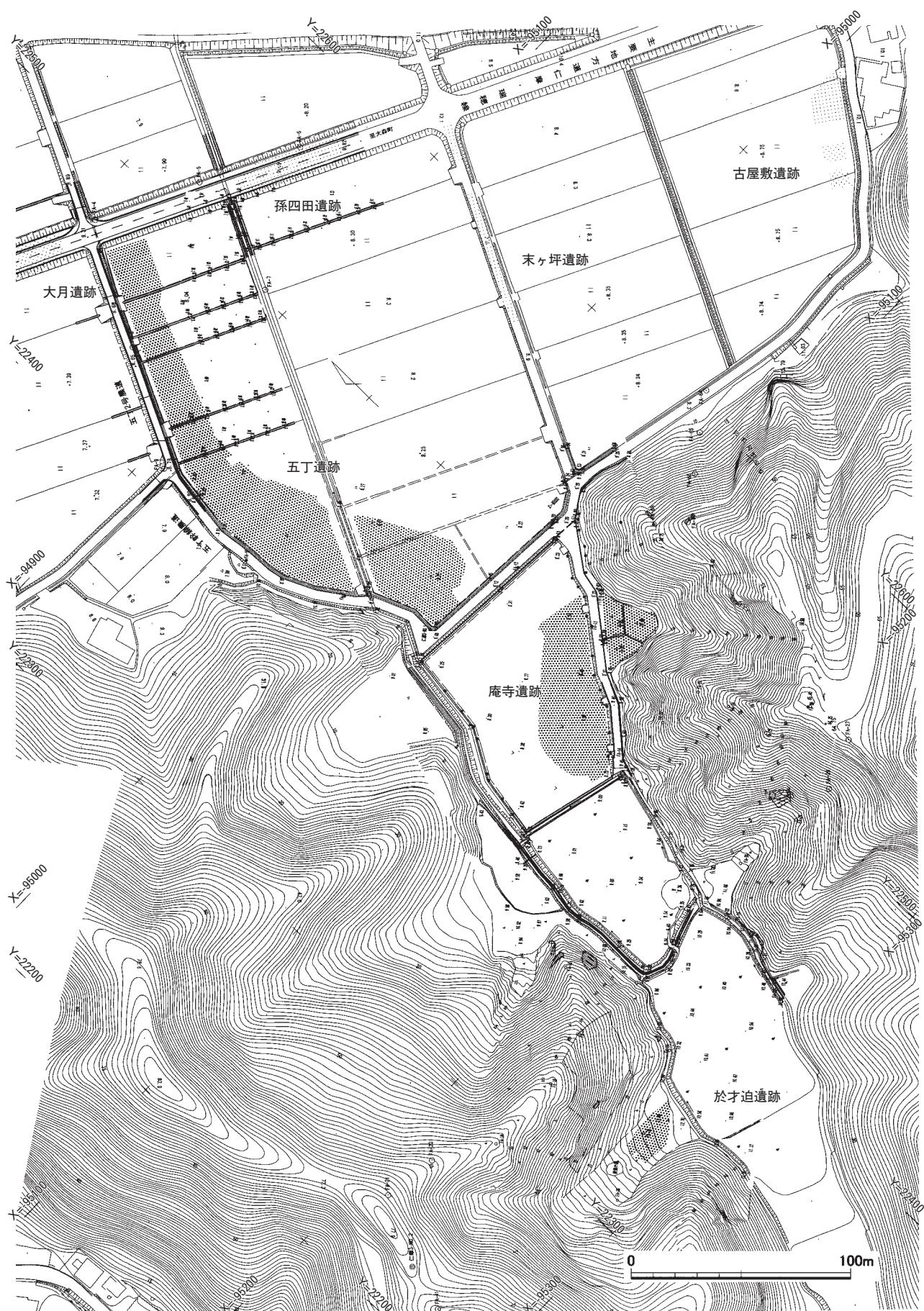
五丁遺跡は大田市仁摩町大國45-1ほかに所在する、縄文時代～中世に至る複合遺跡である。遺跡は潮川左岸の標高8～9mの平坦地に位置する。調査対象地は五丁2号農道・五丁基幹農道に東接する南北約250mの細長い範囲で、国土交通省による用地買い上げ前は周辺同様に水田であった。

この五丁遺跡を含む周辺の遺跡（五丁遺跡群）については、主要地方道仁摩瑞穂線の大國地区改良工事、五丁地区農地環境整備（圃場整備）に際して、すでに仁摩町教育委員会により発掘調査が行われている（第2図参照）<sup>\*1</sup>。五丁遺跡の北西の大月遺跡・同じく北東の孫四田遺跡では中世の遺構面・遺物が確認され、孫四田遺跡ではその下層から包含層出土ながら弥生時代前期～古墳時代中期に至る土器が出土している。また、五丁遺跡東方約300mの庵寺遺跡のある丘陵縁辺の古屋敷遺跡からは中近世の建物跡のほか、弥生時代前期の土塹16基が確認され、松本編年I-2・3様式のまとまった土器資料が出土している。

さて、発掘調査対象範囲は仁摩瑞穂線から仁摩温泉津道路本道への進入路に当たる道路敷きに当たり（第4図）、平成17年10月～同18年1月にかけて、調査区北端の東半分（A1区）の調査を行った。次いで翌18年度には4月より調査区北端西半分（A2区）、調査区中央（B区）、調査区南側（C区）の順に北から南に調査を行った。この間、仁摩温泉津道路本体の工事に関わる作業道を調査区内に設定する必要があり、C区については西半分（C1区）を先に埋め戻し、また排水路の南側D区についても作業道敷となるD1区の調査を先行して行った。このC1・D1区はいずれも調査期限が8月盆前までと限定されたため、後に東側の調査区で確認された自然流路その他について十分な調査が行えなかった。この後、C2区を調査、最後に残るD区を廃土処理の関係からD2・D3に二分して調査し、平成18年12月に現地発掘調査を終了した。なお、調査区全体にわたり、第4図に示した一辺10mのグリッドを設定し、遺構外の遺物を取り上げている。以下調査結果の概要を記す。

**A区**：調査区北端に位置し、仁摩瑞穂線に接する。断面のみの確認となつたが、圃場整備前の道路直下中世遺物包含層上、および中世遺物の包含層下で2時期の砂混じりの土で構築された畦畔（畦1）を検出した。第7章総括で述べるように圃場整備前まで広範に確認されていた仁摩平野の条里地割りに関わる遺構と考えられる。中世包含層以下では浅い土坑2基、溝1条、自然流路3を確認した。このうちSK02からは大型枠型田下駄の部品がまとめて出土している。また、溝・自然流路についてはいずれも南東～北西方向で検出しており、A区南端に近いSR03は幅約10m、両岸に矢板あるいは杭で横に板材を渡した護岸状施設・水路状施設が施されている。奈良平安時代～中世の遺物を含む包含層が完全に被覆しており、遅くとも中世には埋没していたと考えられる。堆積土中の遺物は少ないが、土師器甕・高壺などから古墳時代中期頃には流路として機能していたと考えられる。

**B区**：A区の南に位置し、土坑14基・溝2条・自然流路1を検出した。当調査区でもA区より連続する中世包含層が存在するが、黒色土壤化した層はみられず、遺物も少なかった。土坑・溝も出土遺物が少なく時期は明確ではないが、SK08を除いていずれも単口縁化した土師器甕・高壺片の出土から古墳時代中期頃のものと思われる。また、SK09はA区SK01・02同様の浅い底部皿形の土坑

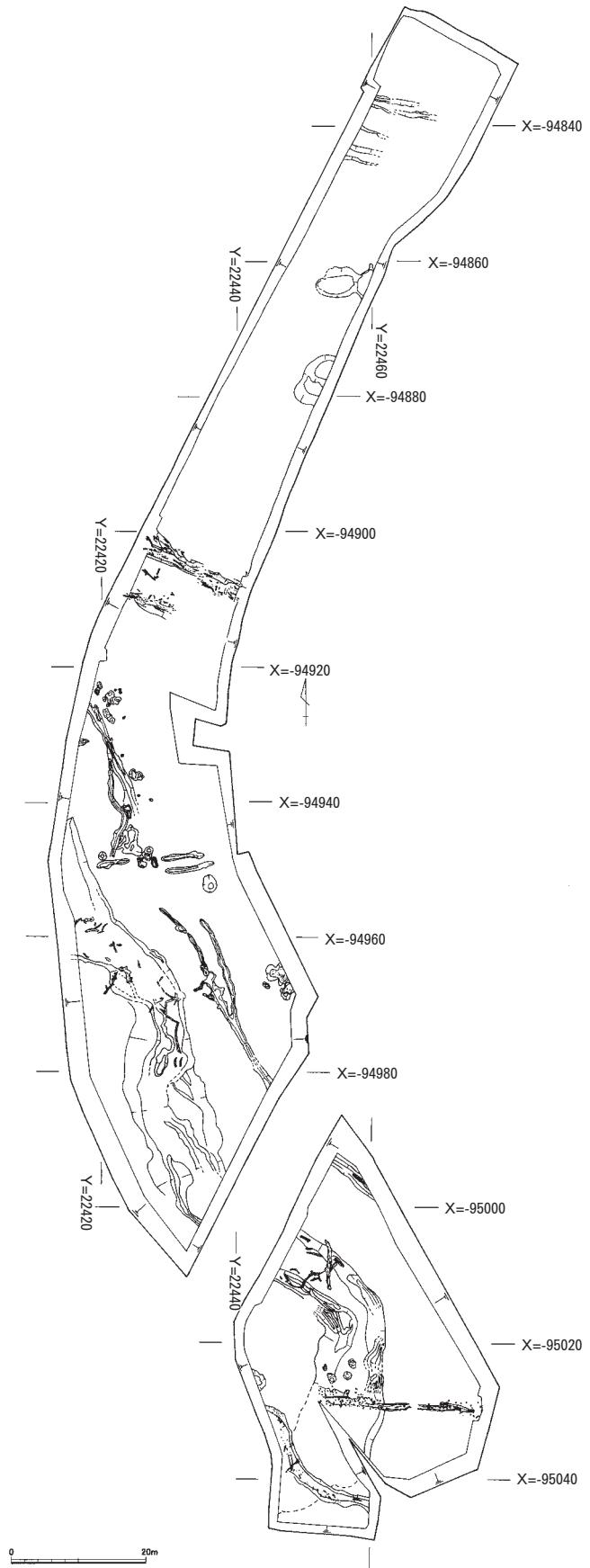


第2図 五丁・庵寺・於才迫遺跡の調査区 ( $S = 1/2500$ )

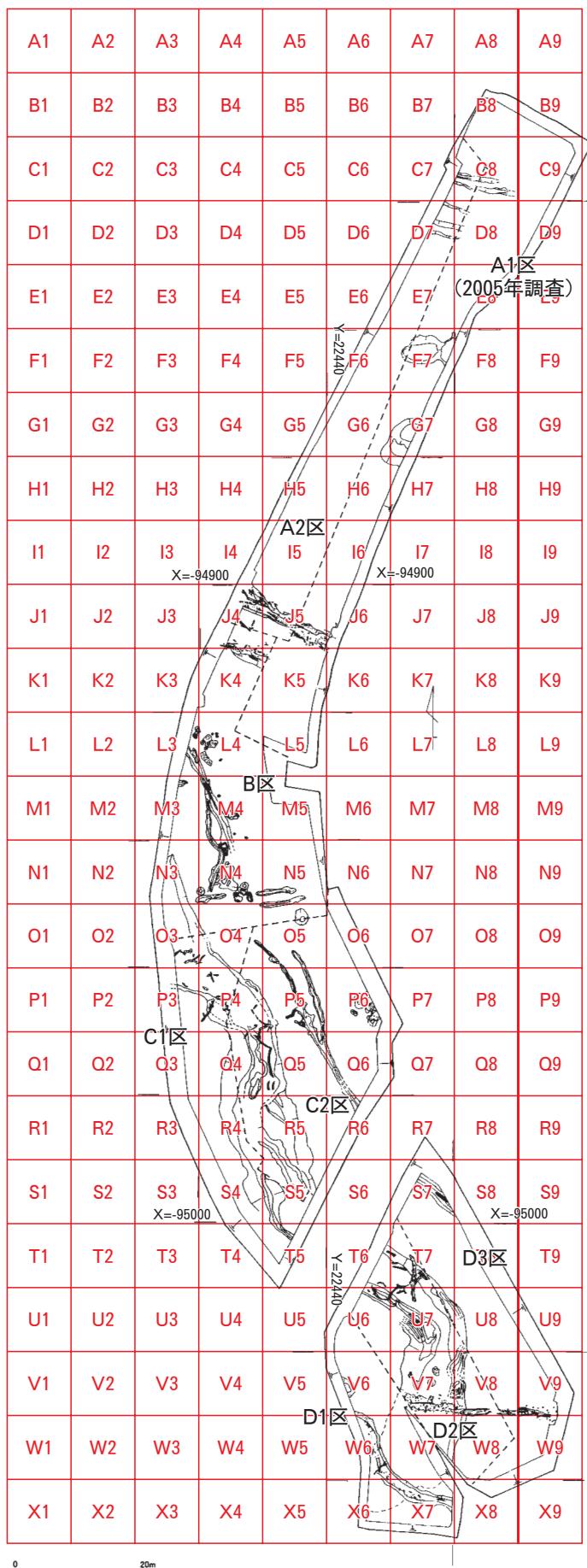
で、周囲に杭、内部には木材片が出土したほか用途不明のしゃもじ状木製品（A区SR03で同型のものが出土）が出土している。SK08は上述古墳時代中期頃の溝に切られている土坑で、突帯文土器・黒曜石・玉髓・珪化凝灰岩の石核・剥片が出土しており、縄文晩期～弥生前期にかけての遺構と考えられる。

**C区：**B区の南に位置し、庵寺・於才迫遺跡のあるの谷から流れ出る小河川から連続する水田排水路（この排水路は、圃場整備時に新設）を南限とする。黒色土化した包含層があり、奈良平安時代の遺物が比較的多く出土している。また、その下層ではB区西南端で検出していた自然流路SR04・05を約50mにわたって確認した。両流路は同じ場所で蛇行を繰り返し堆積速度も速かったみられることから、平面的に同時に形成された流路痕跡を追うことは困難を極めた。最終的に上層のSR04・下層のSR05の2時期に集約したが、異なる時期の流路がある可能性もある。SR04の東岸には集石遺構があり、そこを中心に弥生前期の遺物が比較的多く出土している。SR05は上層・突帯文土器と弥生土器の併存期、下層が突帯文土器のみからなる。このほか、SR04・05に平行するSD04（弥生時代前期）、A区SK02同様柵結合田下駄の部品の出土したSK18～20を検出した。

**D区：**排水路南側に位置する。古代遺物の包含層からは須恵器のほか木簡1点・木簡状木製品1点が出土している。D1区とした西寄りの調査区で杭による護岸の行われた溝SD05（弥生時代中期）を検出した。一方、D2・D3区では奈良平安時代の遺物包含層上に砂混じりの土・杭・石で構築された畦畔（畦2）を検出した。A区の畦1同様、仁摩平野に遺存していた条里地割に関わる遺構と考えられる。C区から続くSR04・05はここで上流部が西側にカーブして調査区西壁中に消える。



第3図 五丁遺跡 調査区全体図 (S=1/1000)



第4図 五丁遺跡 調査区地区割図 (S=1/1000)

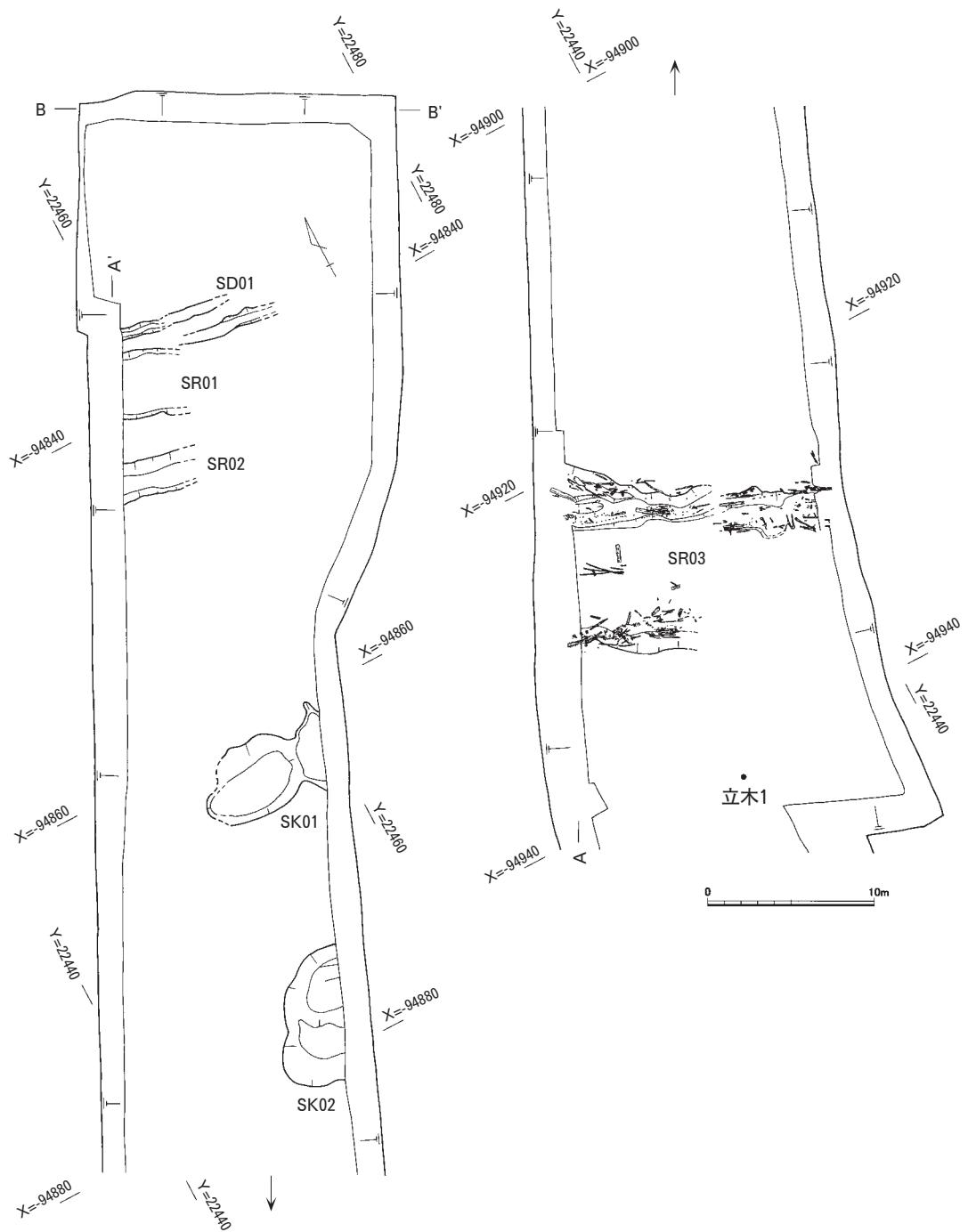
D区では上部の流路SR04からは遺物は出土せず、SR05上層より弥生前期の遺物、下層より突帯文土器・弥生土器が出土する。C区では弥生土器の出土していないSR05下層から弥生土器が出土しており、C・D区間では、SR04・05上下層の細分が連続していない。このほか、デイサイト製の筋砥石様の砥石が出土している。このほか土坑5基を確認した（いずれも遺物なし時期不明）。

## 第2節 A区の調査

主要地方道仁摩瑞穂線に南接し、五丁基幹農道に西接する。幅約20m長さ約110mの南北に長い調査区である。調査は2期に分かれ平成17年10~18年1月にかけて東側A1区の調査を実施し、同年4月より西側A2区の調査を実施した。

対象地はかつて条里プランを残す水田であったが、平成4~12年にかけての仁摩瑞穂線の改良・五丁地区の圃場整備によって大型水田への改変が行われた。この圃場整備は調査区の遺構についても影響を与えており、仁摩温泉津線に近い調査区北側には溝状の攪乱が確認されている（第6図北壁土層図）。

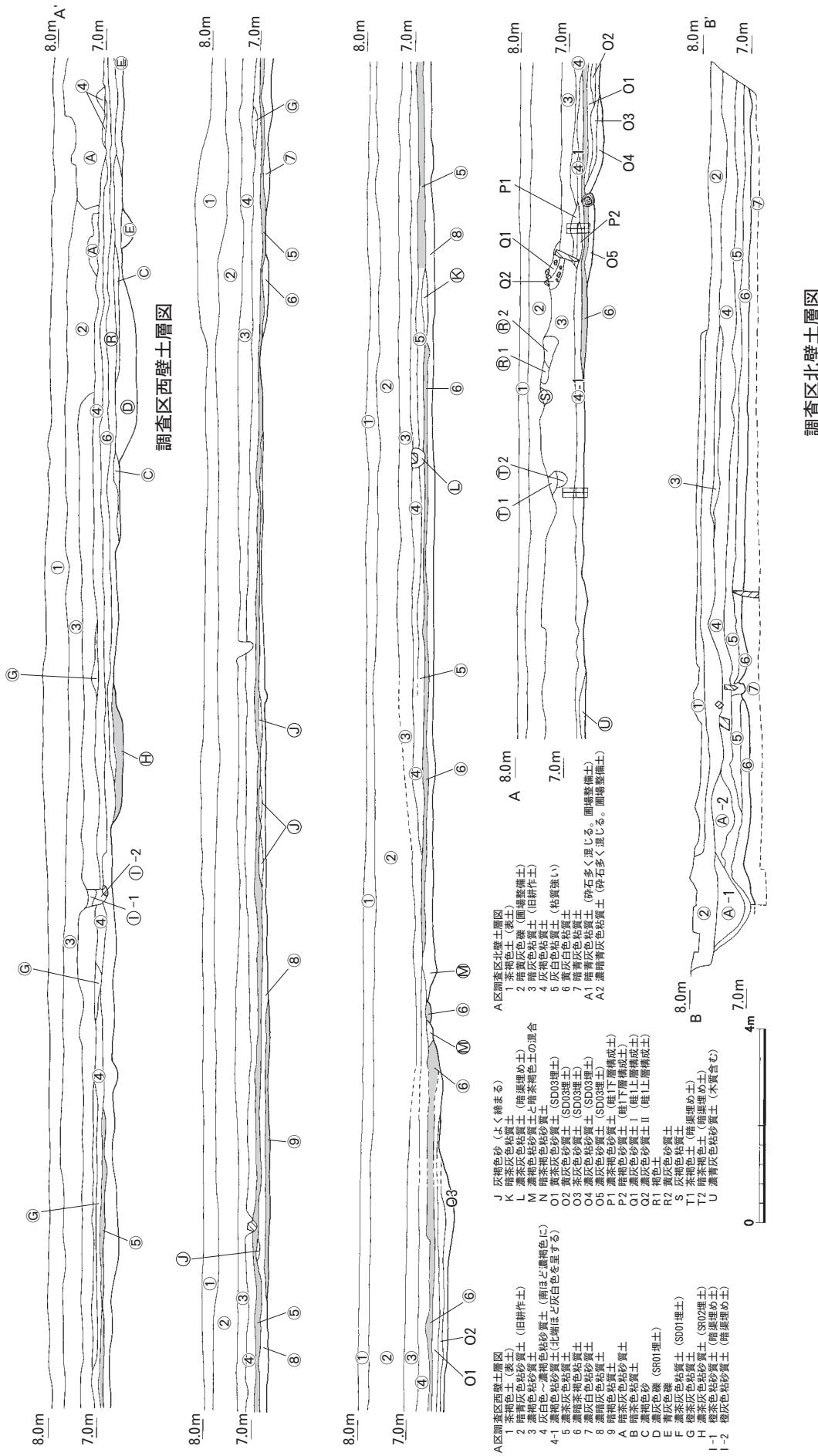
調査区の層序は、現表土（1層）・水田床土（2層）の下に、圃場整備以前の水田耕作土・床土（3層）が存在し、さらにその下に標高7.2m前後に灰白色～褐色の粘質土（4層。西にゆくほど色が黒褐色化する）が存在する。この4層の上面から中世の陶磁器類などが出土しており、4層上面に中世の遺構面が想定されたが、A区内では遺構を確認することができなかった（後

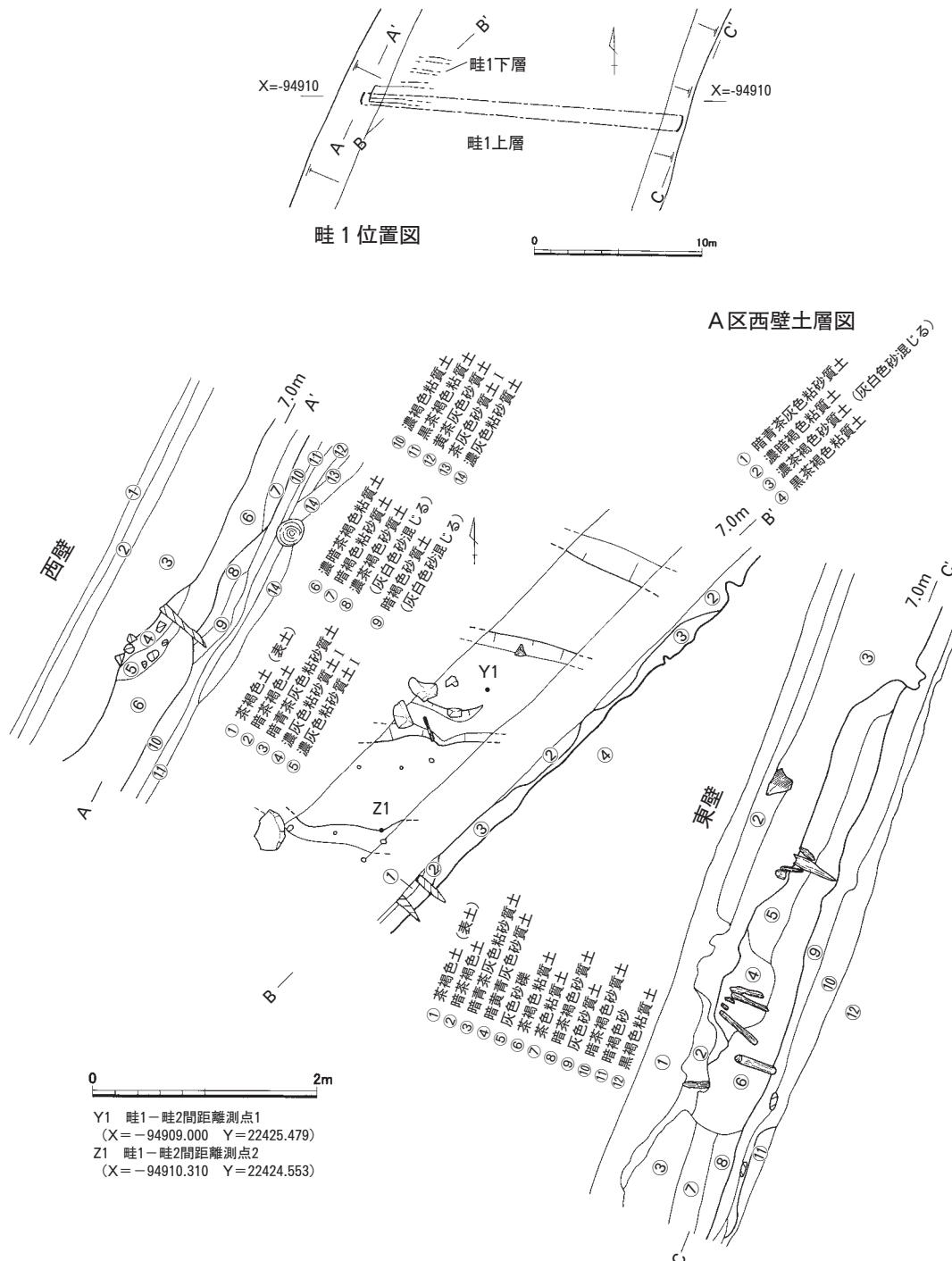


第5図 五丁遺跡 A区遺構配置図 (S=1/400)

述する畦1は見落として掘削)。また北部には茶灰色・茶褐色の粘質土(5・6層)が存在し、これらの中から古墳時代後期・奈良平安時代の遺物が出土している。この下には土壤化した暗茶褐色の土層(6層)が存在し、後述するSK01・02、SD01、SR01~03を被覆している。第6層からは同心円たたきのある須恵器甕片が出土していることから(非掲載資料)、古墳時代後期以降にと位置づけることができる。さらに、B区ではA区第6層に相当する土層から奈良平安時代の須恵器が出土することから(第23図-3・6)、本調査区では6層出土遺物は少ないものの同層は奈良・平安時代の遺物包含層であると認識しておく。

基盤となる層は青灰色・暗青灰色の粘質土である。ただし厳密な粘土ではなく、火山灰あるいは風化凝灰岩が二次的に堆積した粘土・シルト～細砂で<sup>2</sup>、水を含むとドロドロに溶解する。土壤化





第7図 五丁遺跡 A区畦1位置図・実測図 ( $S=1/400$ , 実測図 $1/60$ )

もほとんど認められず、調査区排水溝の掘削などでも遺物が確認されないことから以下には生活面・遺構面は存在しないものとして、以後基本的にこの青灰色粘質土を基盤層として調査を進めることとした。調査は第3層中位までを重機による掘削、第3層下位4層上面より人力による掘削を行った。

### (1) 畦畔遺構

#### 畦1 (第7図)

**規模と形態** A区南辺近くで確認した畦畔である。圃場整備以前の条里水田痕跡とされる道路の直

下に当たる。第4層を検出する段階では見落としており、第4層（中世遺物包含層）掘削中に人頭大の石・杭、および帶状に砂質を含む部分を確認していたが平面的に検出することができず、に掘削を行ってしまい、後に断面からそれらが畦畔であることを認識した。

わずかにSR03の土層堆積状況観察用のベルトで平面的に確認したにとどまる（第7図中の平面図、図版2参照）。

まず、調査区東西壁の観察では、圃場整備土の直下に砂質土・石・杭によって構成された幅約1mの畦が確認できる（第7図西壁4・5・東壁4）。西壁では圃場整備以前の耕作土(6)の上、

東壁では同層に堀込まれた礫層(5)・粘質土(6)の上に営まれていることから圃場整備以前の水田耕作中に機能したものである。さらにこの畦の下層標高6.8m前後にも暗褐色の砂質土・石・杭で構成された畦が確認できた（第7図西壁8・9、中央土層3、東壁土層11もその可能性がある）。その形態は平面的に検出できたSR03ベルト上では幅1mの畦2条の中間が幅0.8m前後窪んだ形状を呈しており、畦縁辺に人頭大の石が存在する。基本的にD区で確認できた畦2と同様の構造を持つものである。東西両調査区壁面での位置から方向を確認すると、先述の上層の畦がW-3.5-Sの東西畦となる（下層の畦は東壁で明確に確認できず方向は不明）。

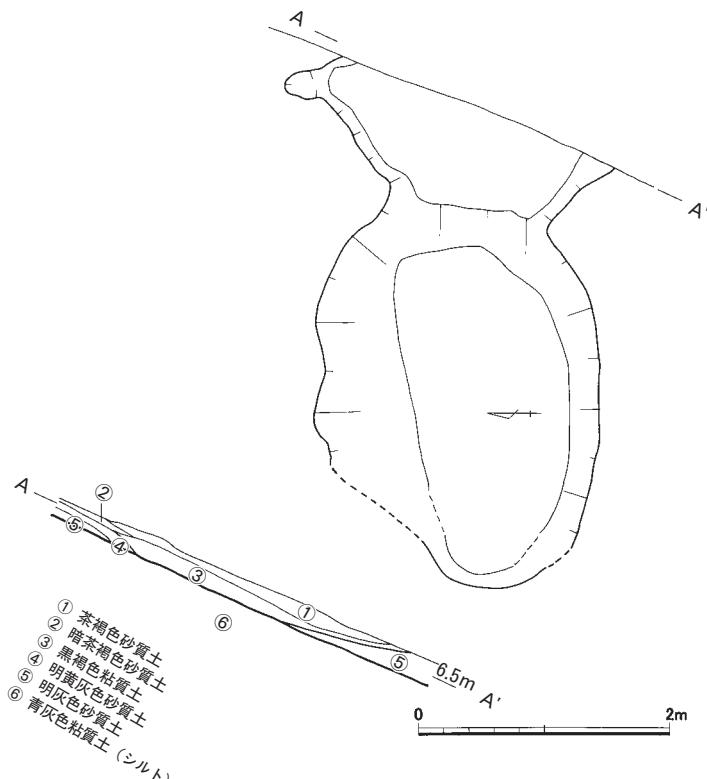
**遺構の時期と性格** まず上層の畦であるが中世遺物の包含層（第7図西壁10）より上にあり、圃場整備直前には図面・空中写真において道が存在したことからすると畦自体はこの道の敷設以前、出土遺物など確証はないが近世頃に構築されたものであろうか。下層の畦は中世遺構面より下に存在しており、古世のある時期に構築された可能性が高い。遺構の性格としては、その位置が旧条里水田に条里地割直下にあること、W-3.5-Sと、仁摩平野でかつて認められた条里地割の東西畦の方向と一致することなどからみて、条里プラン<sup>\*3</sup>に従った坪境の畦畔であると考えられる。

## (2) 土坑

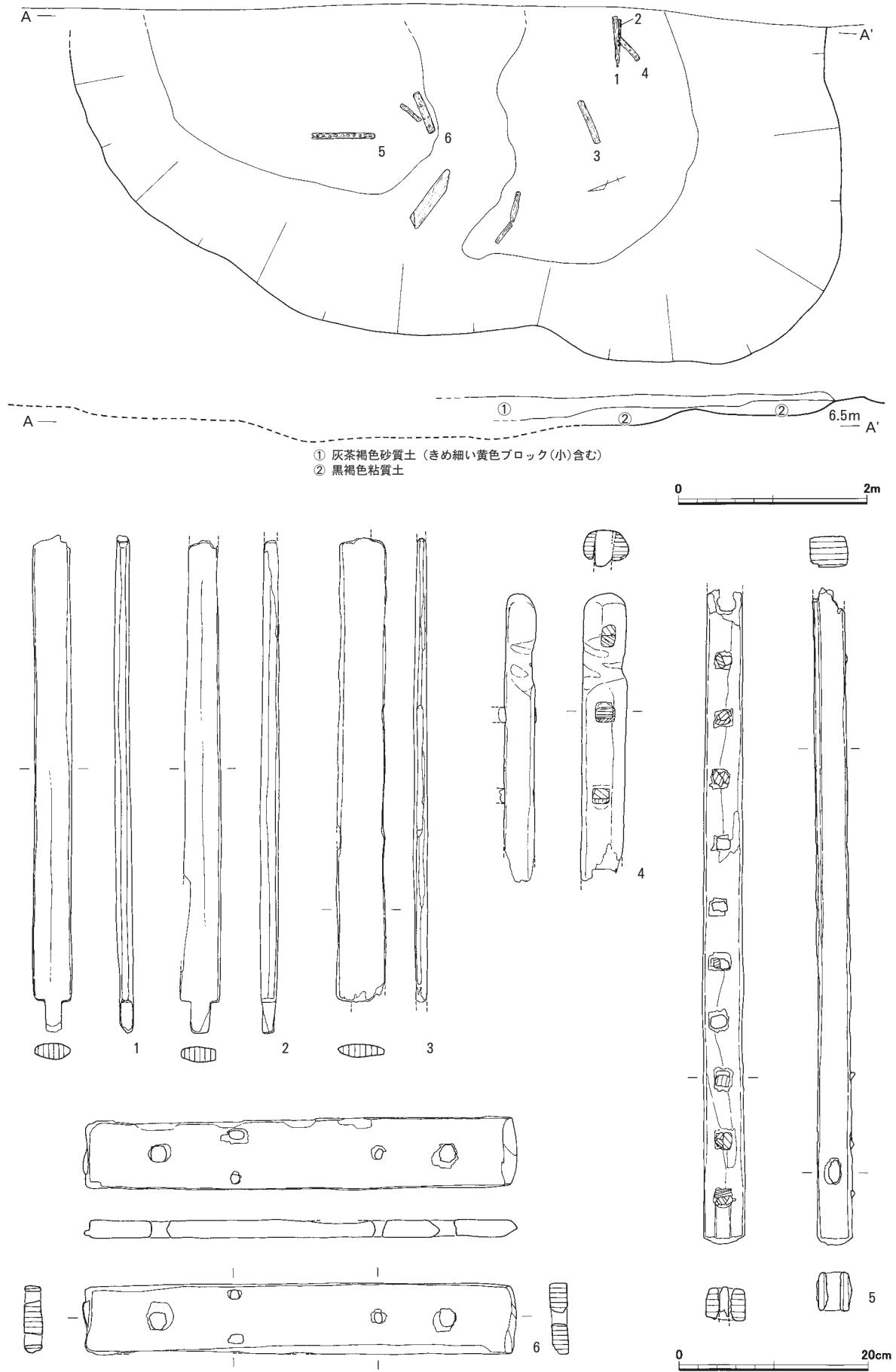
### SK01（第8図）

**規模と形態** 調査区中央東寄りに位置する。長軸4.0m、短軸2.3m、深さ0.2mを測り、二つの楕円形の土坑が連結したような構造をとる。堀込みは第6層下面からであり、浅くレンズ状の断面型を持つ。茶褐色～黒褐色の粘質土が堆積していた。

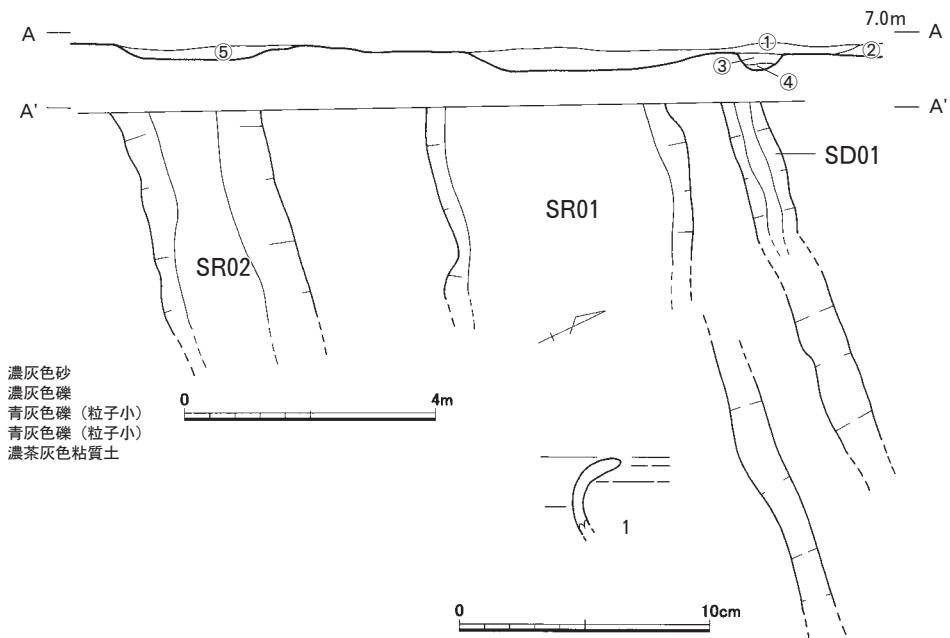
**遺構の時期と性格** 遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが堀込みの層位から中世よりも前にあることは確実で、その形態等からみると隣接するSK02との類似性が高く、SK02同様古墳時代中期頃と推測される。性格については不明であるが、形態の類似から後掲SK02、B区SK09～10、C区SK18～20同様、水田耕作に関わる溜升的なものであろうか。



第8図 五丁遺跡 A区SK01実測図 ( $S=1/60$ )



第9図 五丁遺跡 A区SK02実測図・出土遺物実測図 (S=1/60, 遺物S=1/6)



第10図 五丁遺跡 A区SD01・SR01・02実測図・出土遺物実測図 (S=1/120, 遺物 S=1/3)

### SK02 (第9図)

**規模と形態** 調査区中央東寄り、SK01の南に位置する。すべてを検出してないが長さ8.1m、幅3.6m、検出面からの深さ0.4mをはかる。SK01同様第6層下面から堀込まれており浅いレンズ状を呈す。黒褐色の粘質土が堆積する。

**出土遺物 (第9図)** 底部から3孔式大型枠型田下駄<sup>\*4</sup>の部品、不明木製品・土器小片が出土した。1～3は横桟である。いずれも桟の本体部分47cm前後で、長さ3.5cm程度の単独の枘が両端に削り出されている。縦枠の遺存状況から見て、枘は市田氏のいう枠から突出しない通枘B類であると考えられる<sup>\*5</sup>。横桟本体部分は面取りされ断面菱形を呈している。4・5は縦枠の一部である。ともに一辺2.0cm程度の方形の枘孔が穿孔されている。ただし、4は横桟・横枠のピッチ約8.5cmなのに對し5は約6.5cmと異なっており、両者は異なる個体の一部と考えられる。5にはいわゆる手綱孔が穿孔されているのに対し、4は先端より7.5cmの場所がくびれており、手綱を巻き付けた痕跡である可能性がある。同様のくびれに手綱を取り付ける事例位は民俗例で知られている(市田1990)。また、4・5はほとんどの枘孔に枘が遺存しているが、1～3は片方に枘を残していることからこれらの横桟と同一個体でない可能性もある。6は長さ49.5cm幅11.5cmをはかる3孔式の紐結合足板である。鼻緒の穿孔の外、前後に2つずつの他部材との結合用紐孔がみられる。これらはすでに記したように1個体の部品とは考えづらく複数個体の結合式田下駄の部材とみられる。

**遺構の時期と性格** 遺構の性格は不明であるが、複数個体の結合式田下駄が出土していることから水田耕作に関わる溜升的遺構であろうか。時期は結合式田下駄の出現時期である古墳時代中期以降<sup>\*6</sup>で土坑を覆う第6層形成以前となる。土師器を伴うC区SK18～20との類似性を考えれば、古墳時代中期と考えて矛盾しない。

### (3) 溝・自然流路

#### SD01 (第10図)

**規模と形態** A2区調査区北辺で検出した。A1区の調査でも溝らしい部分を確認していたが、調

査期間の制約もあり十分な状況が確認できなかった。上幅0.6m、下幅0.3mで東西約6m分を確認した。後述する流路SR01・02と異なり、明確な立ち上がりを持つ溝である。青灰色の荒い砂礫が堆積しており、流勢の強い水流によって埋まったとみられる。SR01の埋土によって被覆されている。

**遺構の時期と性格** 出土遺物はなく、第6層形成以前であるが詳細時期・性格は不明である。

#### SR01（第10図）

**規模と形態** A2区調査区北辺、SD01のすぐ南で検出した。A1区の調査でも溝らしい部分を確認していたが、調査期間の制約もあり十分な状況が確認できなかった。SD01のような明確な立ち上がりが見えず、自然流路として扱う。幅約4.0mで東西4m分を検出した。濃灰色砂によって埋没しており、この砂層はすでに埋没していたSD01も被覆している。埋没に当たっては一定の水流が想定される。

**遺構の時期と性格** 出土遺物はなく時期・性格等は不明である。

#### SR01（第10図）

**規模と形態** A2区調査区北辺、SR01のすぐ南で検出した。A1区の調査でも連続する流路・溝らしい部分を確認していたが、調査期間の制約もあり十分な状況が確認できなかった。SD01のような明確な立ち上がりが見えず、自然流路として扱う。幅約2.3mで東西4m分を検出した。濃茶灰色粘質土によって埋没しており、SD01・SR01に比較して水流が弱かったと推定される。

**出土遺物（第10図）** よく摩滅した単純口縁の土師器甕片が出土する。

**遺構の時期と性格** 出土遺物から埋没年代は古墳時代中期以降と考えられる。

#### SR03（第11・12図）

**規模と形態** A区調査区南辺近くで検出した。A1区の調査の段階では北岸の護岸施設を検出しが、南側には圃場整備時に重機の進入した痕跡と思われる長方形の攪乱があり南岸を検出し得なかった。A2区の調査では南岸を検出し、上幅で約10mに達する東西方向に流れる流路であることが確認された。明確な落ち込みが確認されず、深さも浅いことから自然流路と認識しているが、蛇行した痕跡、埋没後に周辺に移動した痕跡がなく人工的に開削されたものである可能性もある。

**層位** 須恵器甕片の出土した第6層に完全に被覆されており、古墳時代後期以後のある時点（C区の出土遺物から第6層はおそらく奈良平安時代の包含層）に埋没したと考えられる。流路内は黒茶色・褐色の粘質土と灰色砂層が互層になっており、流速の早遅が繰り返し訪れたのであろう。これは流路内に残存している木材・木製品の出土・検出レベルにも反映されており6.7m付近で確認されたもの（EE'中央付近）、6.5m付近で確認されたもの（EE'北側、GG'全般）、6.4m以下で確認されたもの（GG'）の3段階が認められる。それぞれ水平に出土することから、出土状況は自然流水によるもので埋没時期の差を示しているとみられ、3回程度流速が遅かった時期があると考えられる。また、BB'断面（第11図）では土層6・7で流路全体に広がることのない幅の狭い堆積層が確認されることから、流路がある程度埋まった段階で幅が縮小した時期があった可能性もある。

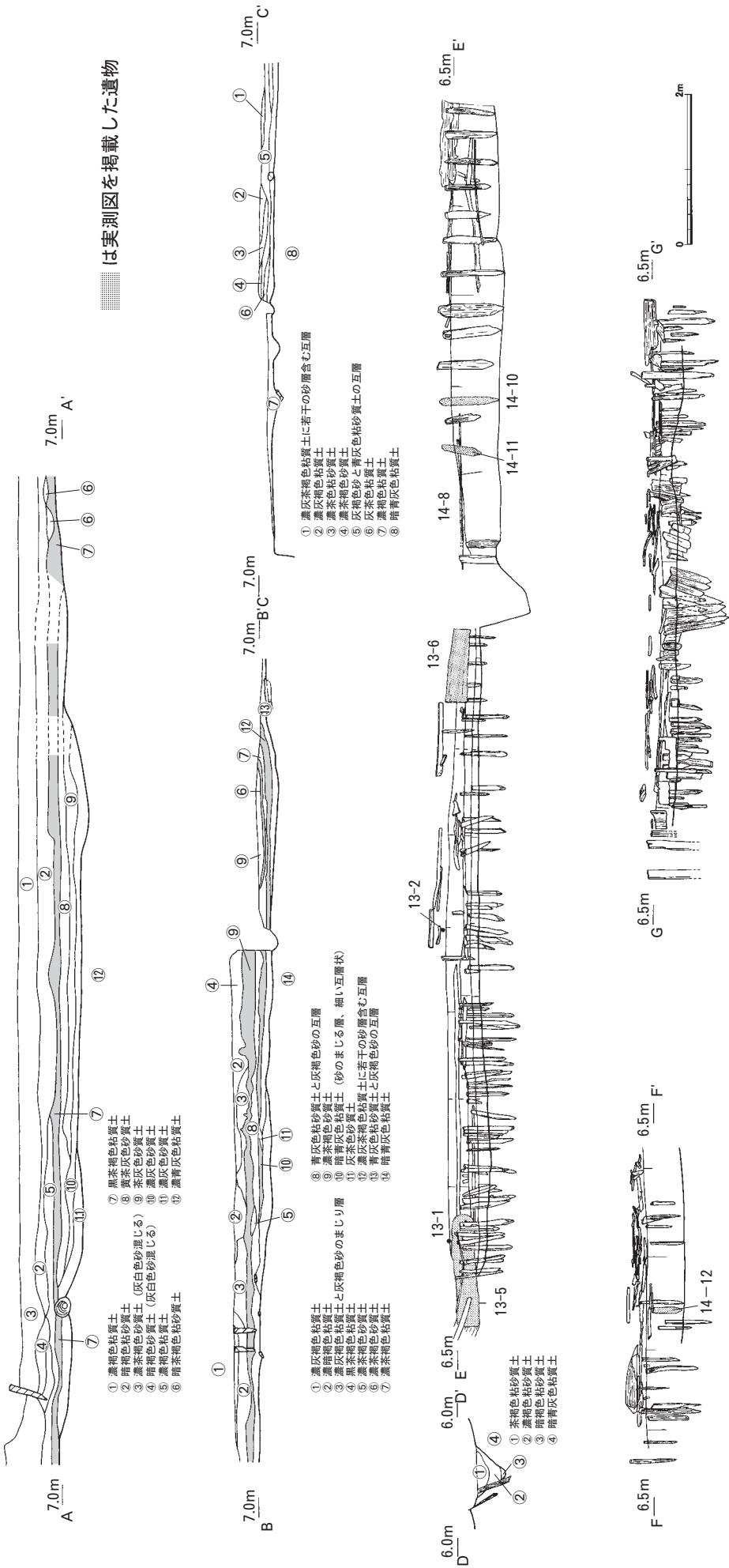
**岸辺の施設** 両岸には矢板・杭・横板によって主に次の3類型の施設存在する。

**(1)矢板列（疎）** A1区北岸、およびA2区の南岸東寄り（A1区近く）で検出した。おそらくA1区側両岸に施されていたのであろう。1mに2～3本程度、等間隔に残存長60～80cmの先端剣先状の矢板（第13図10～12）を打ち込んだものである。現存する矢板上端の検出レベルは6.6～6.7

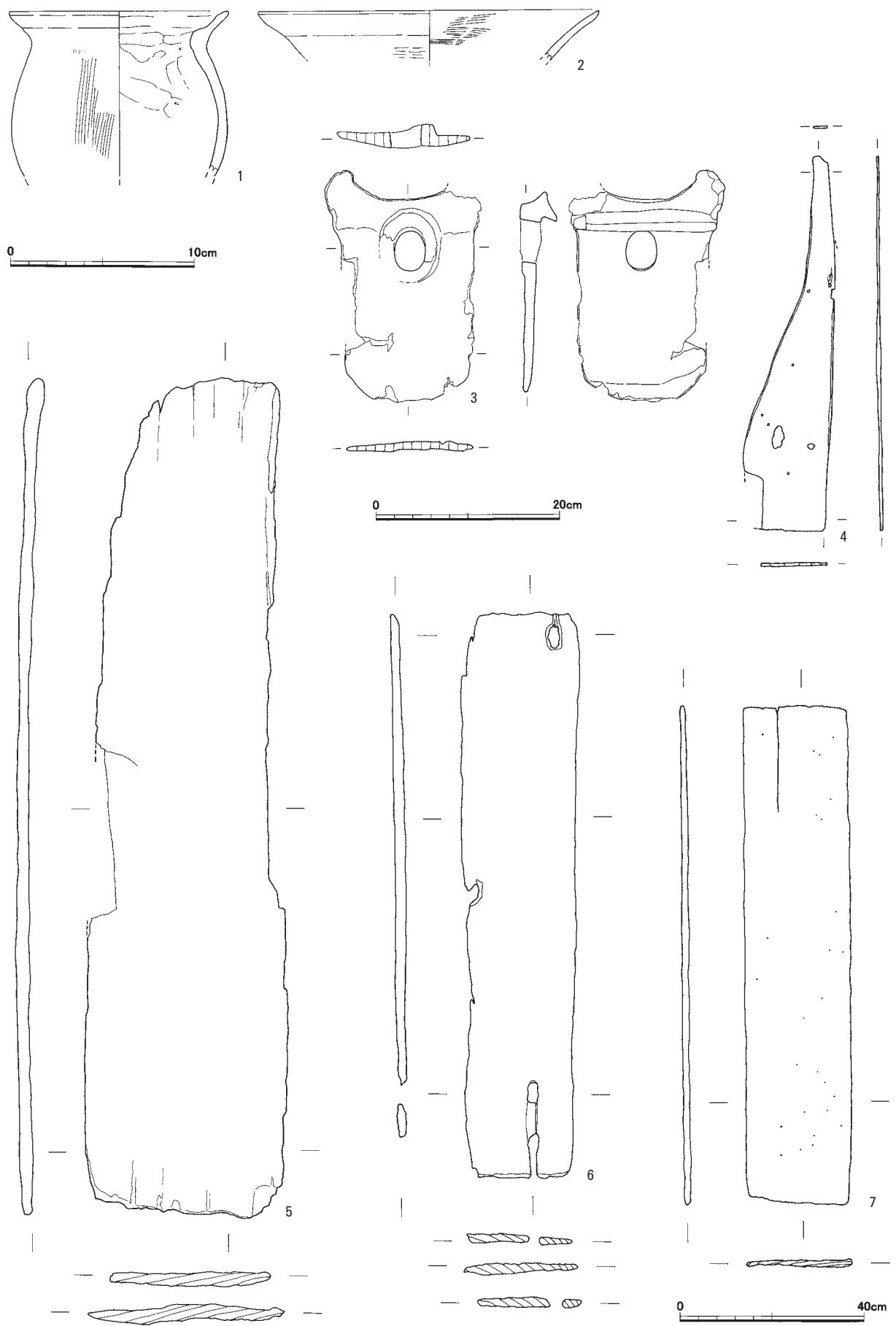


第11図 五丁遺跡 A区SR03実測図 (S = 1/80)

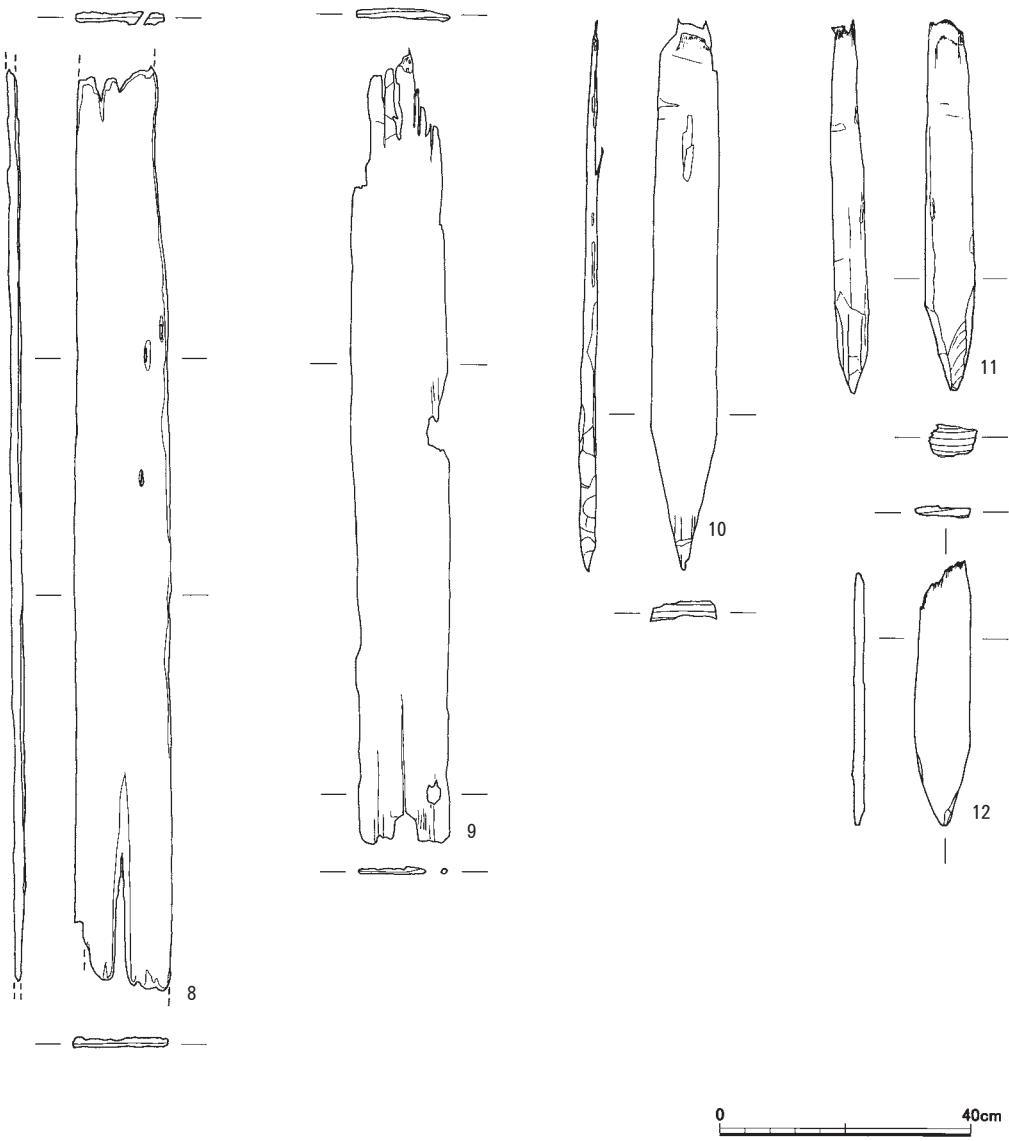
## は実測図を掲載した遺物



第12図 五丁遺跡 A区SR03土層図・立面図 (S=1/80)



第13図 五丁遺跡 A区SR03出土遺物実測図(1) (S=1/3, 3、4:S=1/6, 5~7:S=1/12)



第14図 五丁遺跡 A区SR03出土遺物実測図(2) (S=1/12)

mと(2)(3)よりも高く、流路埋没の最終段階近くで施された施設であるとみられる。残存する部材はないが、間隔が開いていることを念頭に置くと矢板間に横木のようなもの渡していた可能性も否定できない。護岸施設の可能性が高い。

(2)矢板列(密) A2区南岸で検出した。お互いに接するように密に矢板列を打ち込んだ施設である。検出レベルは6.4m程度でほぼそろっているが、打ち込みの浅いもの(GG'中央北寄り・南寄り)と深いもの(GG'中央部)がある。浅いものに関しては先端が剣先型に加工されることなくL状のまま打ち込まれたものも存在する。いずれも岸から流路内側に転んでおり(第11図DD'参照)、転びによって生じた空隙部分には茶褐色粘質土が堆積している。また、流路側に転んだ板の上から垂直に杭を打ち直した部分もある。いわゆる護岸施設と考えられる。

打ち込み深さの差、先端形状の違いは設置段階の差を示しており、検出レベルが一定なのは、腐朽する時点での水位が一定(=同時に埋没したを意味すると考えるのが合理的である)であったことを示していると考えられ、時期を分けて数回にわたりこの種の施設が設けられたと考えられる。

(3)横板固定施設 検出レベルのほぼ同じ丸杭を2列平行に打ち(2列の間の幅30~40cm)、その杭

に連ねて長さ1mを超える板（第12図5～7、第13図8・9）を横に立てたと考えられる施設である。杭の検出レベルは低いが、間に挟まれていた板の上端の検出レベルは高く6.5m程度である。A2区では北岸でEE'・FF'でそれぞれ1群、南岸西端でも1群が計3群確認されている。横に渡した板は原位置から移動し杭列間に平面的に倒れ込んでいるものが多いが、13-1・13-6は平行する2列の内側に立った状態で検出されているので杭列の内側に横板が配置された可能性が高い。杭が2列平行に打たれ同レベルで検出できた点、列間の距離が30cm程度あり一枚の板を挟む構造としては不自然な点を念頭に置くと、単純に出雲市蔵小路西遺跡F区などで検出されている1列の杭を岸際に打ち込み浸食面に横木を固定した護岸施設とは考えられない。①岸直近ではなく流路の中に設置された、②横板は2列ありその中に土を充填した土手状、あるいは中を通水させる溝状にした施設の可能性も検討するべきであろう。設置時期は中段階に位置づけられる。

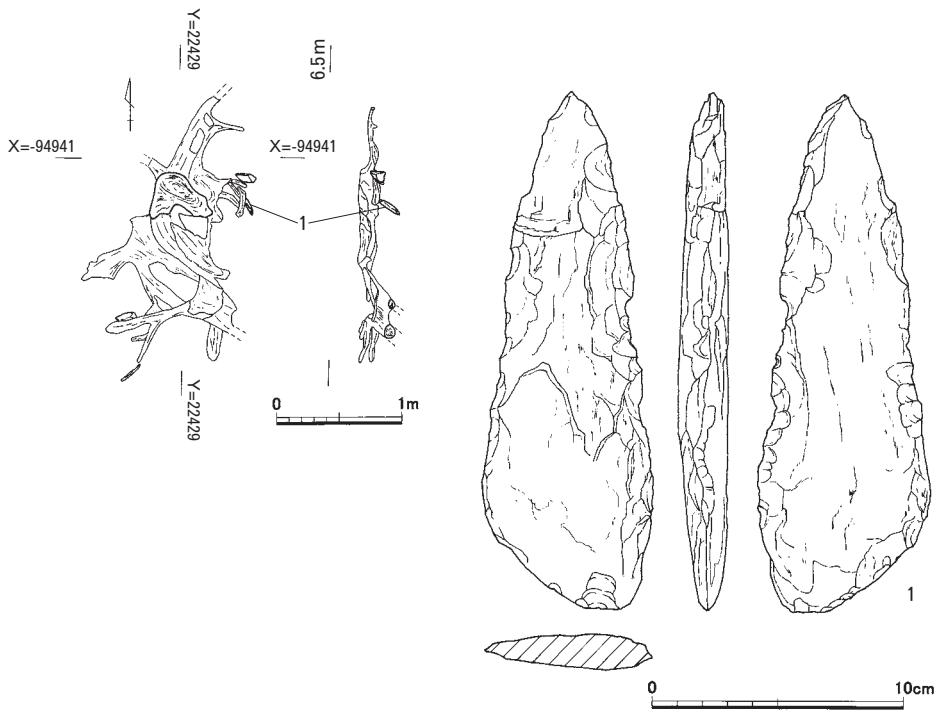
**出土遺物（第13・14図）** 1は土師器甕である。単純口縁を持ち外面ハケ調整・内面ケズリが施される。古墳時代中期以降の資料。2は同高坏である。若干外反する口縁を持ち、内外面にハケ調整がみられる。断片的資料であるが、1とあわせると出雲地域では古墳時代前期末～中期頃に位置づけられるであろう。ともに流路埋没最終段階のAA'断面7層出土。3は樹種アカガシ族の広鍬Ⅱ式A類<sup>7</sup>。幅16.9cm、長25.5cmで柄孔上端を半円のくり込み、A1型の隆起部を持つ。流路内最下層出土。4は樹種アカガシ族の不明木製品。涙滴型の下端を切り取り直線にしたような形状であったと考えられる。厚さ0.2cmときわめて薄い。類似資料がB区SK09より出土している（第21図-9）。5～9は前述岸辺の施設（3）に横架されていたと思われる板材である。表面の調整痕跡などはいずれも失われている。6・9には平面に穿孔が認められる。第13図10～12は岸辺の施設（1）に使用された矢板である。10・11にはA種刃先痕が残り鉄器による加工が推測される<sup>8</sup>。

**遺構の時期と性格** 上層埋土出土土師器より古墳時代中期頃に最終的に埋没したと考えられる。最下層から広鍬A式Ⅱ類が出土することから、縄文時代には遡り得ないであろう。その性格については繰り返しほぼ全面にわたり岸辺に杭・横材などで護岸その他の施設を設けている点からするときわめて強固に管理された流路であったことが想定される。また、流路の方向からしてB～D区で検出している庵寺・於才迫遺跡方面の谷からの流路とは考えられない。方向からは潮川支流の可能性が考えられるが、自然地形は北に向かって下がっており、周辺に先行する自然流路跡・埋没後に移動した流路痕跡が見えないことを勘案すると、人為的に閉塞可能な人工の溝・河川である可能性も否定できない。

### 立木1（第15図）

A区南端近くで確認された。検出時は株の部分が地山より若干頭を出している程度であり、地山青灰色粘質土中標高6.0m程度より生えていたと考えられる。木の周辺いずれも土壤化した黒色土はみられなかった。樹種は水辺の植生であるクワ属（第7章）で、水辺の環境を窺わせる。

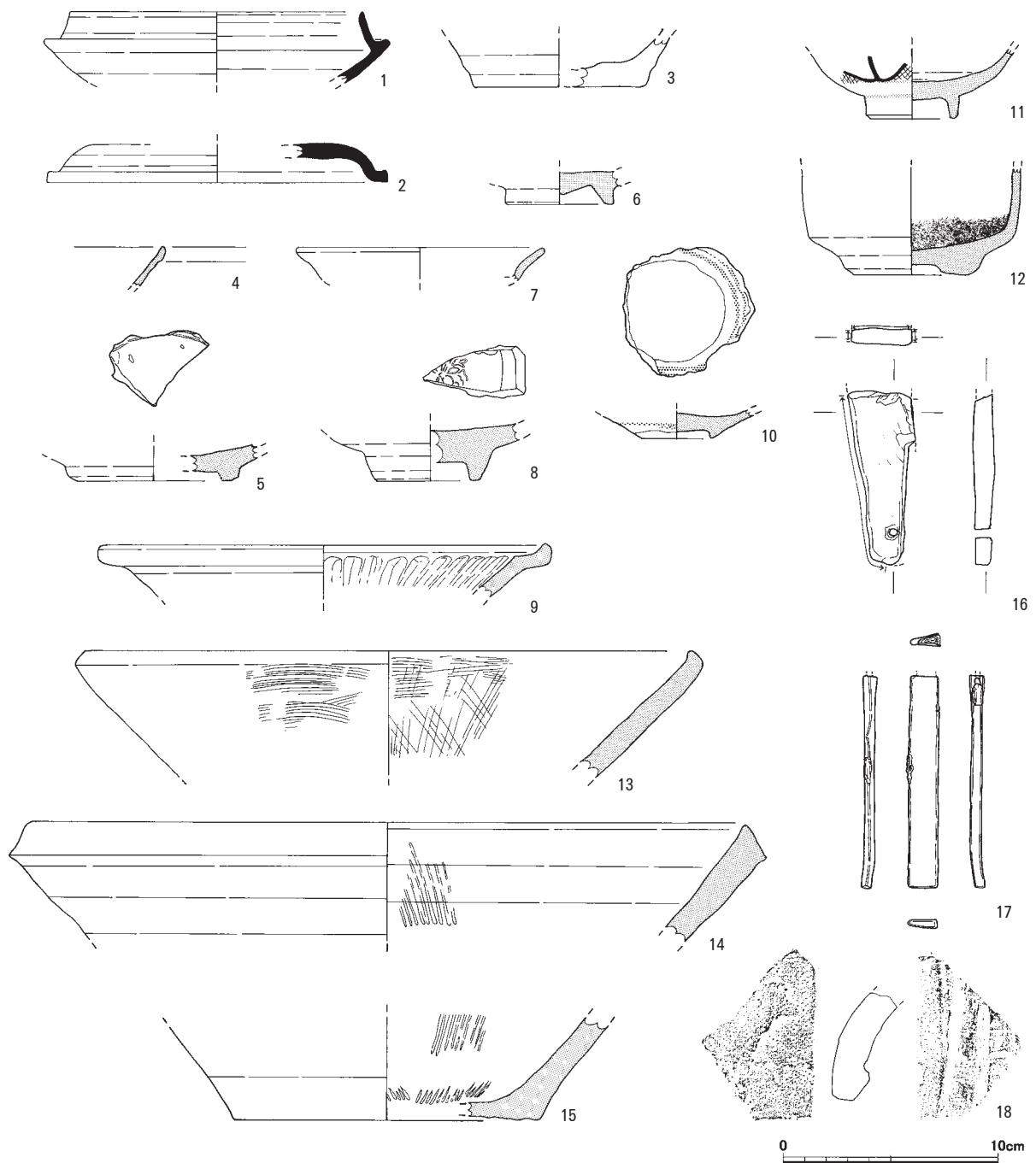
**出土遺物（第15図）** 立木1の根元に寄り添うように直立する形で出土した。長さ20.0cm、幅6.9cm、厚さ2.0cmをはかる緑色片岩製の打製石斧である。平面型は四周を加工し撥状に整えるが、現状ではやや刃部がやや左右不对称である。表裏面に自然面を残している。刃部には両面に擦痕による摩耗部分があり、不对称となっている部分にも及ぶので現在の形で使用されたとみられる。江津付近で採取可能であるが、中国山地側の資料に色調は近い。



第15図 五丁遺跡 A区立木1・周辺出土遺物実測図 (S=1/60, 遺物 S=1/3)

#### A区遺構外出土遺物（第16図）

調査の概要で記したように、11肥前系磁器を除く陶磁器類はすべて第3層中第4層上面からの出土である（なお、遺物観察表の「4層」は、第6図第3層に相当。注記時点の土層名である）。1は須恵器环身である。復元口径が14.8cmと大型であること、返りが段を持たず立ち上がりが高いことなどから日脚遺跡III期・陶邑TK10～43型式に相当する資料であるとみられる<sup>\*9</sup>。2は端部が下方に屈曲する蓋で久本奥窯跡4期の資料と類似する。8世紀後半に位置づけられる。3は土師器環で底部は回転糸切りである。4も白磁片で底部外面無釉、底部内面には段ならびに重ね焼きのあたりが残る大宰府碗IV類<sup>\*10</sup>、12世紀前半の資料である。6は削り出し高台・底部外面無釉の青磁碗である。7は端部が外反する青磁皿。釉薬は緑黄色で、同安窯I-1b類の皿であろうか。8は印花文を底部内面に持ち、外面は高台内中央以外を施釉する青磁碗。上田B・CのIIb類の碗で14～15世紀の資料である<sup>\*11</sup>。9は内面に幅広の連弁を持ち、端部を折り曲げ直立させる盤で13世紀後半～14世紀の資料である。10は青花の皿である。陶器質の胎土を持ち底部の釉を輪状に掻き取る資料で、鈴木秀典氏がG群とするものである<sup>\*12</sup>。16世紀後半～17世紀。11は底部内面の釉を輪状に剥ぎ取るいわゆる見込み蛇の目釉ハギの肥前系の磁器である。18世紀第3四半期頃か。12は底部畳付のみ釉を剥ぎ取る青磁で壺類で国産品であろう。13は内外両面にハケが施された在地の鉢である。14・15は備前の擂鉢である。上下に拡張のない口縁端部や擂り目の間隔などから備前III期、鎌倉時代後半の資料である<sup>\*13</sup>。16は頁岩製の不明石製品である。現存長8.0cmの長方形包丁形を呈し、右端部近くに穿孔がある。オモテ面ならびに左右両側面は研磨が顕著である。ウラ面・下端面は平坦なもののが割ったままの状況であり、2次的破損であるか本来の形状であるか判断できない。頁岩は久利産のものが良く知られているが緻密な構造なものであり搬入品の可能性がある。17は長さ9.9cmを計る刀子の柄部分である。銅製で尻は袋状に閉じてある。中には鉄製の茎が残る。類品は出雲市山持川遺跡III区・白枝本郷遺跡から出土している<sup>\*14</sup>。18は丸瓦片である。



第16図 五丁遺跡 A区遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)

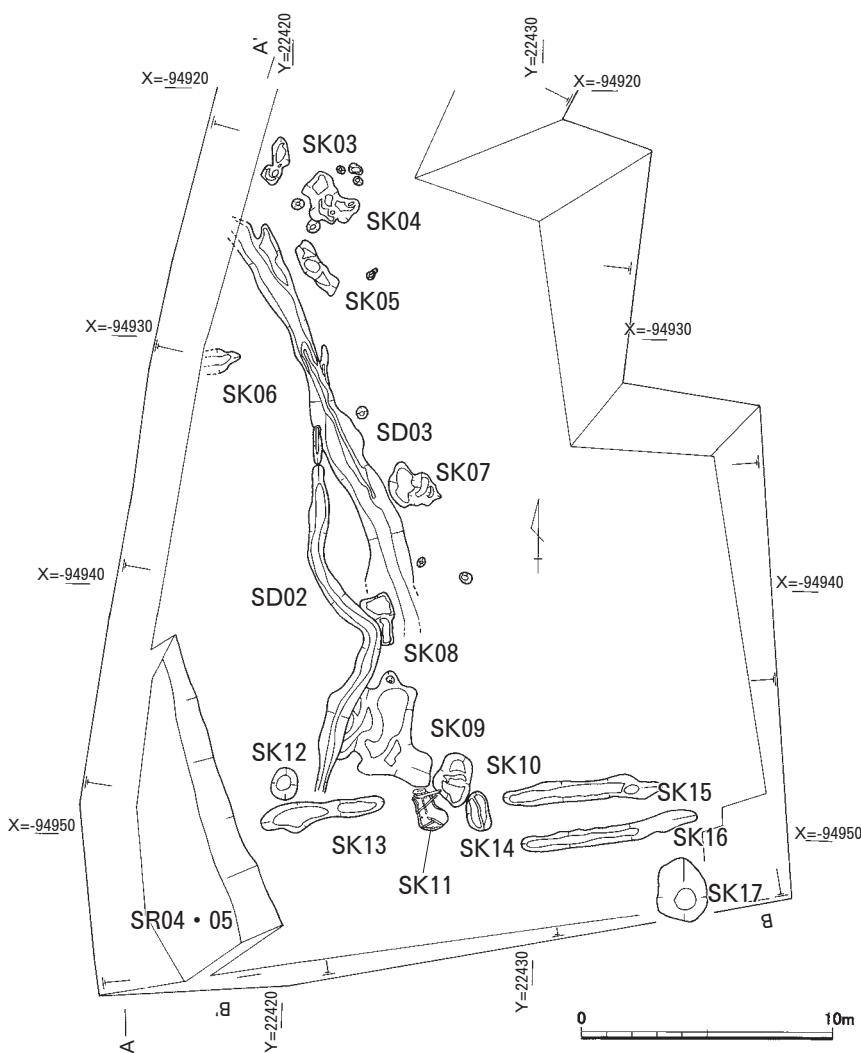
#### A区遺構外出土陶磁器片 (図版38)

いずれも小片により実測不能であった陶磁器片である。1中は白磁片。1右は漳州窯の皿であろう。2上左は白磁小壺、2上左中は龍泉窯の青磁碗小片、2上右中は片切りの鎬連弁を持つ竜泉窯青磁碗B2類、2上右は青磁片である。2中右は青花の皿、2下右は伊万里の皿、2下左中は肥前系陶器の皿、2下右中は瀬戸・美濃焼の壺、2下右は肥前系陶器壺、3中は備前焼擂鉢、3下左は在地の中世須恵器甕であろうか。3上右は常滑焼甕片、3下右は越前焼擂鉢である。

## 註

- \* 1 仁摩町教育委員会1998『清石遺跡外発掘調査報告書』、同1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』
- \* 2 渡邊正巳「五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」(庵寺遺跡Ⅱ報告書に掲載予定)。
- \* 3 「条里プラン」については金田章裕1985「条里プランの研究史と問題点」『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂により、条里地割・条里呼称法の両者を併せ、従来の条里制に代替する概念として使用する。
- \* 4 田下駄の型式については奈良文化財研究所1993『木器集成図録近畿原始編(解説)』、部位名称は潮田鉄雄1967「田下駄の変遷」『物質文化』10によった。
- \* 5 市田京子1990「広島県の田下駄」『木と民具』雄山閣出版。
- \* 6 中川寧2002「山陰における木製耕起具の変遷」『考古学ジャーナル』486、島根県教育委員会2006『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』。
- \* 7 中川寧註 6 論文
- \* 8 宮原晋一1988「石斧・鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究10』雄山閣出版
- \* 9 島根県教育委員会1985『日脚遺跡』・田辺昭三1966『陶邑古窯址群 I』平安学園
- \* 10 大宰府編年は横田健次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』による。鑑定担当たっては伊藤智氏にご教示を得た。
- \* 11 上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』
- \* 12 鈴木秀典1990「16世紀の貿易陶磁器に関する研究成果」『貿易陶磁研究10』
- \* 13 伊藤晃1995「備前」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- \* 14 島根県教育委員会2007『山持川遺跡Ⅱ・Ⅲ区(2)』、島根県教育委員会2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』

### 第3節 B区の調査



第17図 五丁遺跡 B区遺構配置図 (S=1/300)

～茶褐色の粘質土（4 A B層。西にゆくほど色が黒褐色化する）が存在する。ただし、遺物包含層である4層は薄く、A区で中世遺物の出土した4層上面も削り取られていると考えられ、遺構外出土の遺物も少ない。この調査区では比較的多くの遺構（土坑15・溝2）を検出したが、遺構はすべて4層除去後に基盤層である青灰色・暗青灰色の粘質土に埋込まれている状況で確認されている。調査は第3 A層までを重機による掘削、第3 B層以下について人力による掘削を行った。なお、SR04・05の一部が調査区にかかるが、第4節C区の調査にてまとめて記述する。

#### (1) 土坑

##### SK03 (第19図)

**規模と形態** 調査区北辺に位置する、長軸1.9m・幅0.7m・検出面からの深さ0.15mの長楕円形二つが接合した形状の深い土坑である。茶褐色の砂質土のが堆積していた。出土遺物はない。

**遺構の時期と性格** 堀込み・堆積土の類似から、SK04と同時期と考えられる。性格は不明。

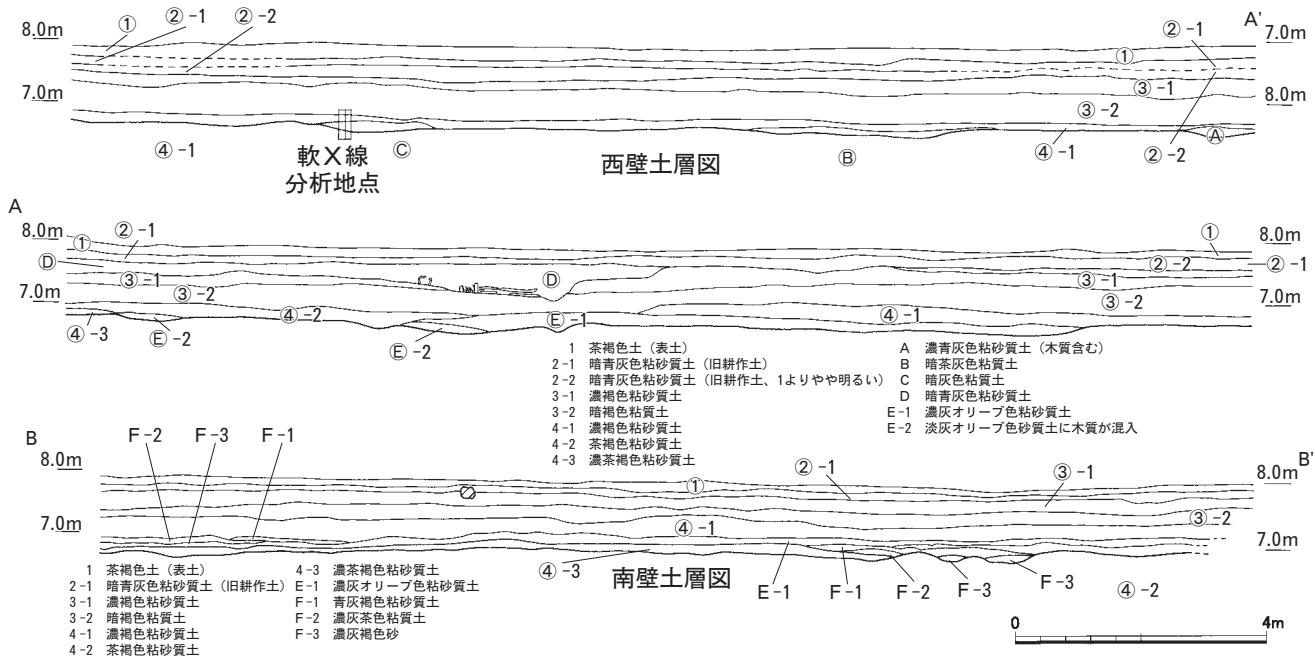
##### SK04 (第19図)

**規模と形態** 調査区北辺中央に位置する、一辺2.0m、検出面からの深さ0.3m程度の不整形な土坑

A区の南に位置し、東西約30m南北約40mの調査区である。調査は平成18年5月26日～7月28日にかけて実施した。

A区同様対象地はかつて条里制のプランを残す水田であったが、平成4～12年にかけての仁摩瑞穂線の改良・五丁地区の圃場整備によって大型水田への改変が行われていた。以前の地図を見ると、五丁基幹農道に当たる道路はまだ細く、B区に西接して於才迫・庵寺遺跡所在の谷からの水路が北流していた（第131図参照）。

調査区の層序は、A区同様、現表土（1層）・水田床土（2層）の下に、圃場整備以前の水田耕作土（3層）が存在し、さらにその下標高7.2m前後に濃褐色



第18図 五丁遺跡 B区調査区土層図 ( $S = 1/120$ )

である。複数の堀方が結合したように見えるが埋土は共有されており、同時に埋められたと考えられる。茶褐色の砂質土が堆積していた。

**出土遺物 (第21図)** 1は内外面ミガキ・底部外面に指頭圧痕の残る土師器坏である。端部はやや外反する。古墳時代中期の資料であろう。

**遺構の時期と性格** 堀込み・堆積土の類似から、SK04と同時期と考えられる。性格は不明。

#### SK05 (第19図)

**規模と形態** 調査区北辺、SK04の南に位置する。長軸2.5m・幅1.3m・深さ0.15mの隅丸長方形形状を呈し、中央部がやや深い土坑である。茶褐色の砂質土が堆積していた。出土遺物はない。

**遺構の時期と性格** 堀込み・堆積土の類似から、SK04と同時期と考えられる。性格は不明。

#### SK06 (第19図)

**規模と形態** 調査区北西辺、SD02の西に位置する。西側は調査区外に伸びる。長軸1.2m・短軸1.0m・深さ0.15mの土坑である。茶褐色の砂質土が堆積していた。出土遺物はない。

**遺構の時期と性格** 堀込み・堆積土の類似から、SK04と同時期と考えられる。性格は不明。

#### SK07 (第19図)

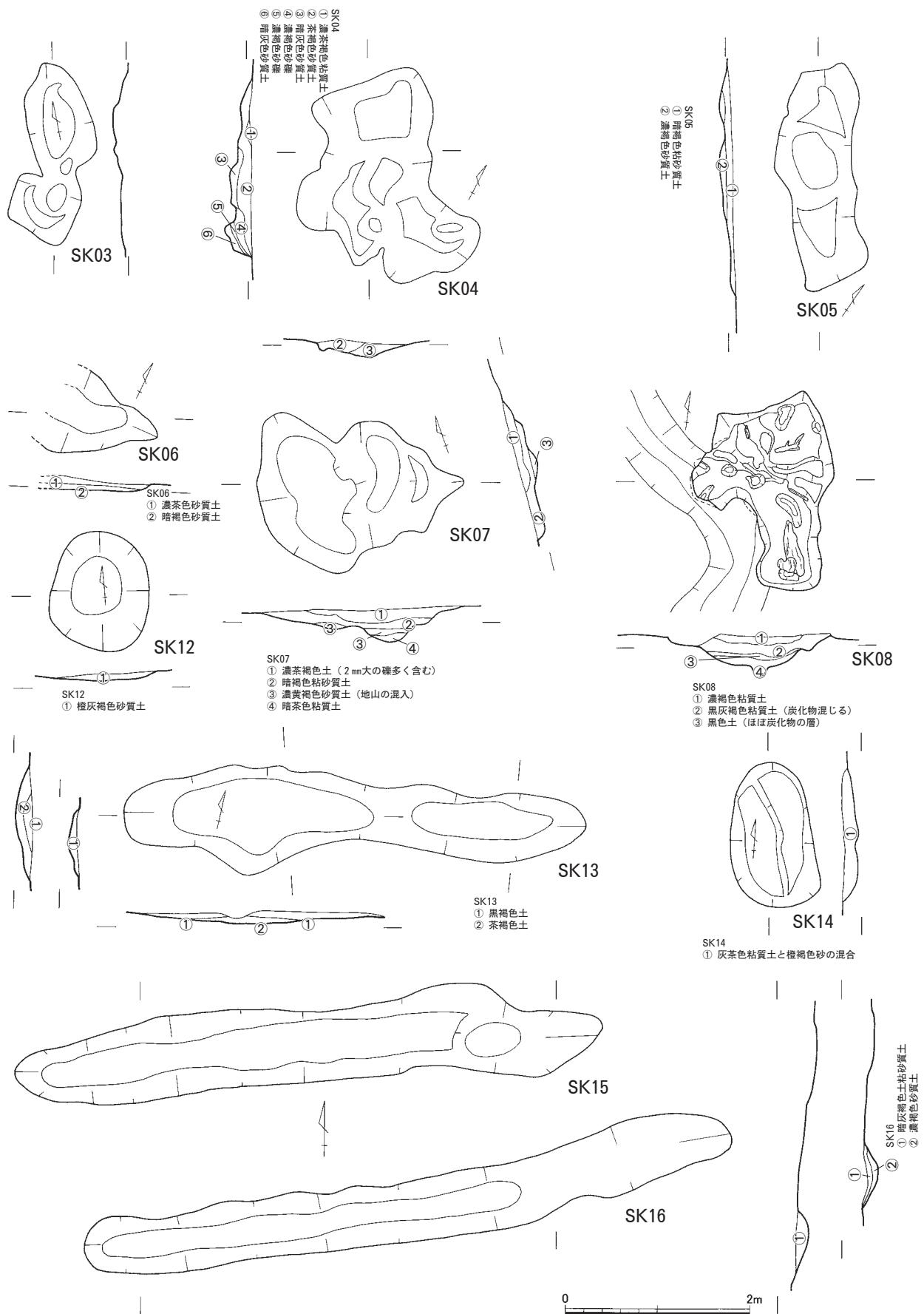
**規模と形態** 調査区中央北寄りに位置する。長軸2.3m・短軸1.8m・深さ0.4mのひょうたん形をした土坑である。茶褐色の砂質土が堆積していた。出土遺物はない。

**遺構の時期と性格** 堀込み・堆積土の類似から、SK04と同時期と考えられる。性格は不明。

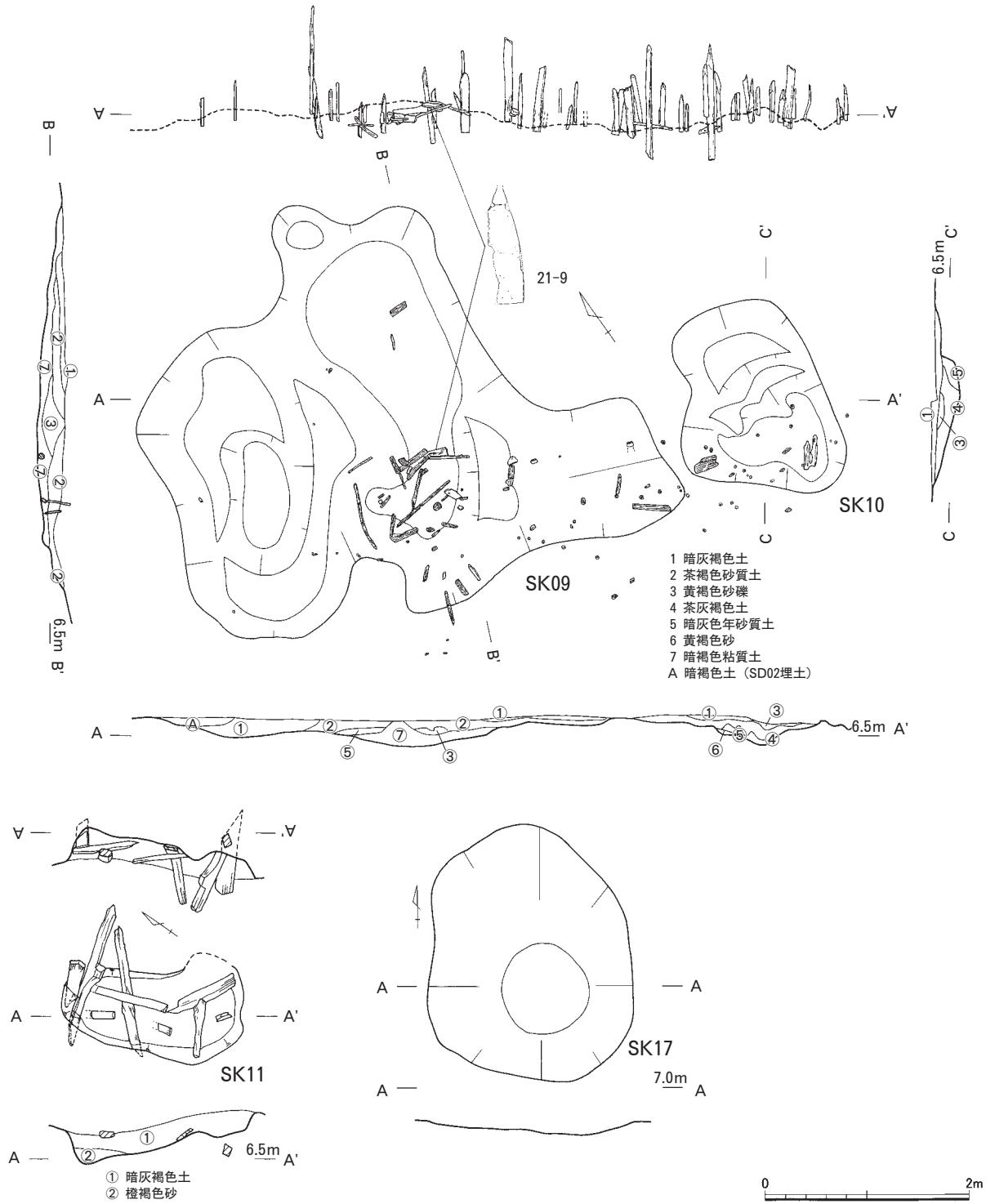
#### SK08 (第19図)

**規模と形態** 調査区中央に位置し、後述SD03に切られていた。長軸2.0m・短軸1.6m・深さ0.4mを測り、若干断面巾着状にオーバーハングする。埋土は茶～黒灰色の粘質土で、特に3層には炭が混入していた。また底部には自然木の断片も遺存していた。

**出土遺物 (第21図)** 埋土全般にわたり、縄文土器・石器が出土した。いずれも図化可能な代表的



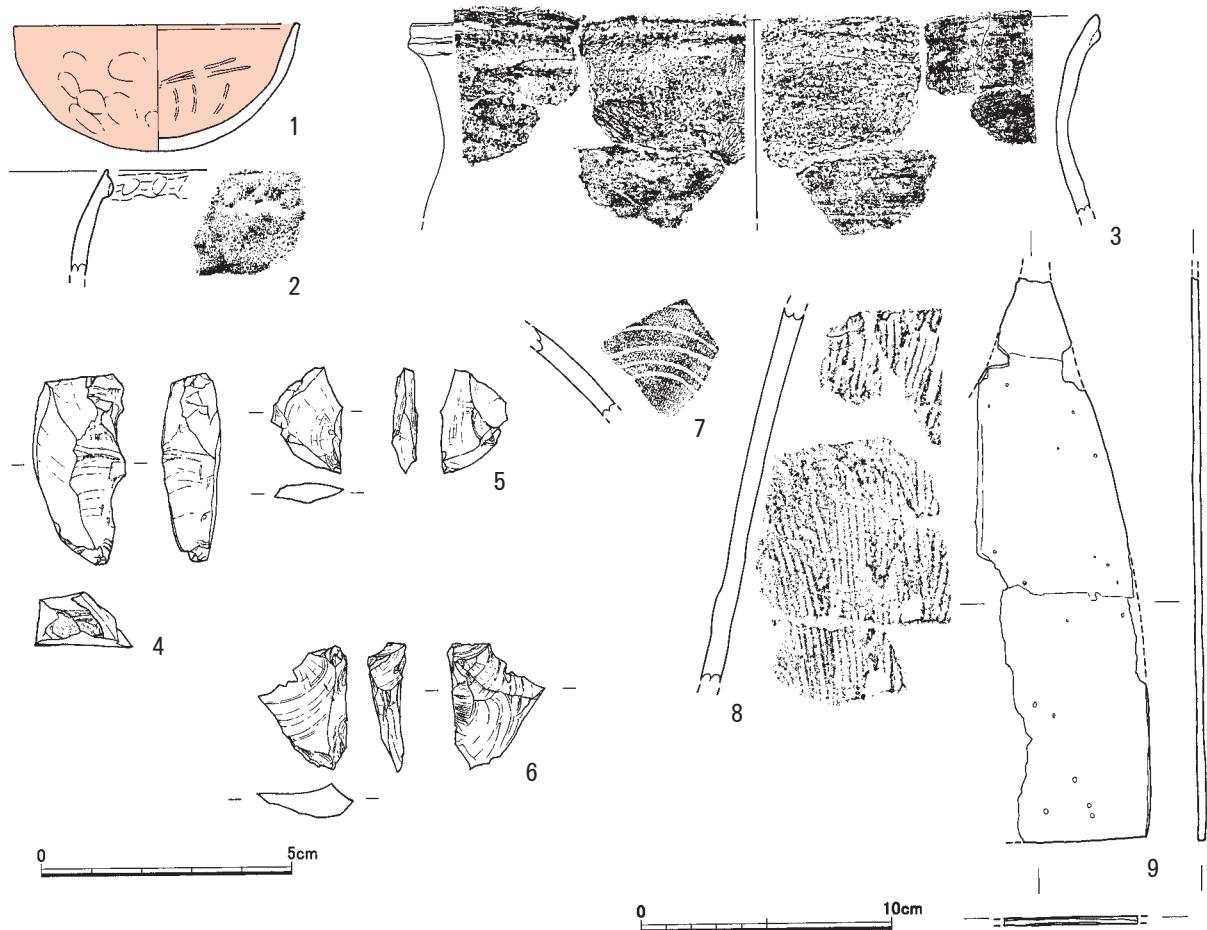
第19図 五丁遺跡 B区SK03~08・12~16実測図 (S=1/60)



第20図 五丁遺跡 B区SK09~11・17実測図 (S=1/60, 遺物 S=1/12)

資料のみ提示しており、特に石器剥片は多く出土している。2・3は突帯文土器の深鉢である。2は突帯は面取りされない口縁端部下に濱田O類の刻目突帯を有する。突帯文II期。3は肩を持つ深鉢であるが面取りされない口縁端部下に無刻目突帯を有する。いずれも突帯文II期の資料である。4・5は石核である。4は玉髓、5は凝灰岩中の玉髓が周辺の凝灰岩中に浸潤した硅化凝灰岩である。6は黒曜石の剥片である。黒曜石は隕石と考えられる。

**遺構の時期と性格** 後述する古墳時代中期の溝であるSD02に切られていること、堆積土が上述SK



第21図 五丁遺跡 B区SK04・07・09出土遺物実測図 (S=1/3、4~6:S=2/3)

03~06までと大きく異なる点、突帯文土器・石核・剥片の出土から縄文晩期～弥生前期の土坑と推定される。出土遺物は自然木・土器破片資料・炭など雑多である。廃棄土坑であろうか。

#### SK09・10（第20図）

**規模と形態** 調査区南中央に位置する。長軸2~4mの楕円形の深い土坑が横並びに近接している。西側2つは茶褐色の砂質土を共有する。SD02に切られている。また、両土坑の周辺特に南辺側に杭多数が打ち込まれており、SK09中央からは自然木・後述する不明木製品が出土した。杭群はいずれも遺構の底部付近の標高6.7m程度のレベルで検出しており、このままでは用をなさず、本来は高い位置から打たれたものと推定される。土坑の深さも当初は現状よりは深かったのであろう。

**出土遺物（第21図）** 7はヘラ書き重弧文を持つ弥生土器壺の体部である。松本I-2様式前後の資料。8は条痕を残す縄文土器である。9はA区SR03でも出土した。下を裁断した涙滴状をなす不明木製品である。SR03例同様厚さ0.4cmときわめて薄い。9がSR03では古墳時代中期の遺物と供伴すること、また遺存しづらい木製品であること、埋土がSK03~08に類似することから7・8は混入した遺物であろう。

**遺構の時期と性格** 一定の大きさを持つこと底部がほぼ平らで皿状であること、木製品が出土する点などがA区SK01・02、C区SK20などと共通しており、水田周辺の溜め升的遺構であろうか。時期は前述のように古墳時代中期であろう。

### SK11（第20図）

**規模と形態** 調査区南辺中央、SK009・10南に位置する。長軸1.7m・短軸1.1m・深さ0.3mの土坑である。内部には多数の木材・杭が遺存していたほか、灰褐色土・砂が堆積しており、SK03～07までの土坑と様相が異なる。土器の出土はない。

**遺構の時期と性格** 木製品の遺存状況も良好で、杭の検出レベルも7.1mと高くSK09・10と異なる。土器の出土はなく、SK09・10よりも新しい遺構である可能性が高い。遺構の性格は不明である。

### SK12（第19図）

**規模と形態** 調査区南辺西寄りに位置する。長径1.3m・短径1.1m・深さ0.1mの土坑である。内部には砂質土が堆積する。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** きわめて浅い土坑であり遺構の性格は不明である。

### SK13（第19図）

**規模と形態** 調査区南辺に位置する。長軸6.3m・短軸0.8m・深さ0.2mの溝状を呈する土坑である。東側にはSK15があるが両者は連続せず、その痕跡もない。また、SD02もSK13周辺で堀込みを確認できなくなっている。黒褐色土が堆積していた。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** 時期・性格ともに不明である。

### SK13（第19図）

**規模と形態** 調査区南辺に位置する。長軸6.3m・短軸0.8m・深さ0.2mの溝状を呈する土坑である。東側にはSK15があるが両者は連続せず、その痕跡もない。また、SD02もSK13周辺で堀込みを確認できなくなっている。黒褐色土が堆積しており、特に上層は黒色土壤化が著しい。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** 時期・性格ともに不明である。

### SK14（第19図）

**規模と形態** 調査区南辺に位置する。長軸1.5m・短軸0.9m・深さ0.15mの楕円形の土坑である。灰茶色粘質土と褐色砂が堆積していた。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** 時期・性格ともに不明である。

### SK15（第19図）

**規模と形態** 調査区南辺東寄りにSK16と平行して位置する。長軸6.3m・短軸0.85m・深さ0.1mの溝状を呈する土坑である。褐色の粘砂質土が堆積していた。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** 時期・性格ともに不明である。

### SK16（第19図）

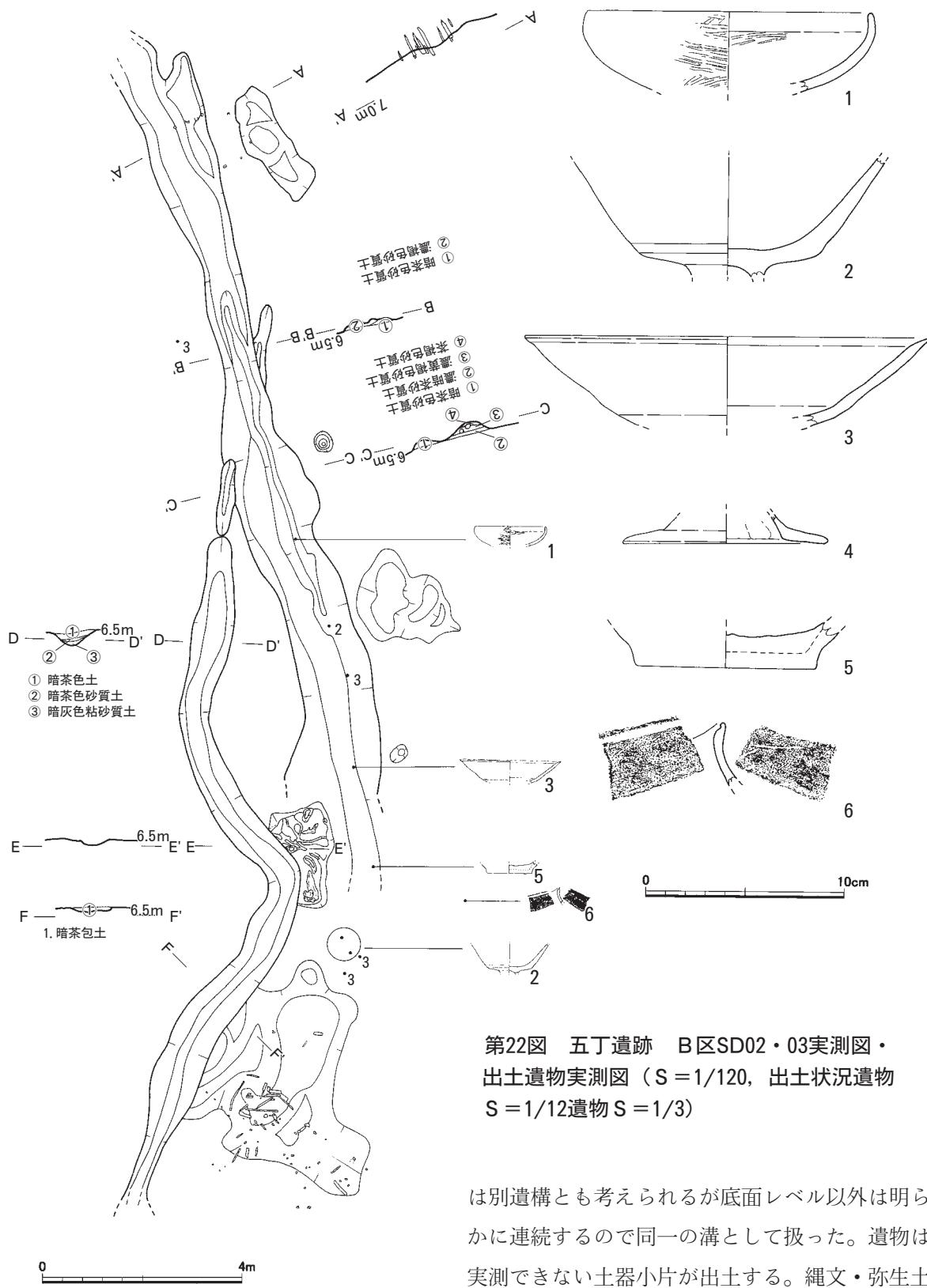
**規模と形態** 調査区南辺に位置する。長軸7.1m・短軸0.7m・深さ0.2mの楕円形の土坑である。灰茶色粘質土と褐色砂が堆積していた。遺物の出土はない。

**遺構の時期と性格** 時期・性格ともに不明である。

## (2) 溝

### SD02（第22図）

**規模と形態** 調査区中央を南北に蛇行する。幅0.4～0.7m・深さ0.4mであり、SK09・10付近から約20mの長さに渡って検出した。SK08・09・SD02を切っている。SD03と交差する部分あたりまでは北に向かって流れ、同地点付近で急激に浅くなっている。SD03と交差する地点以北について



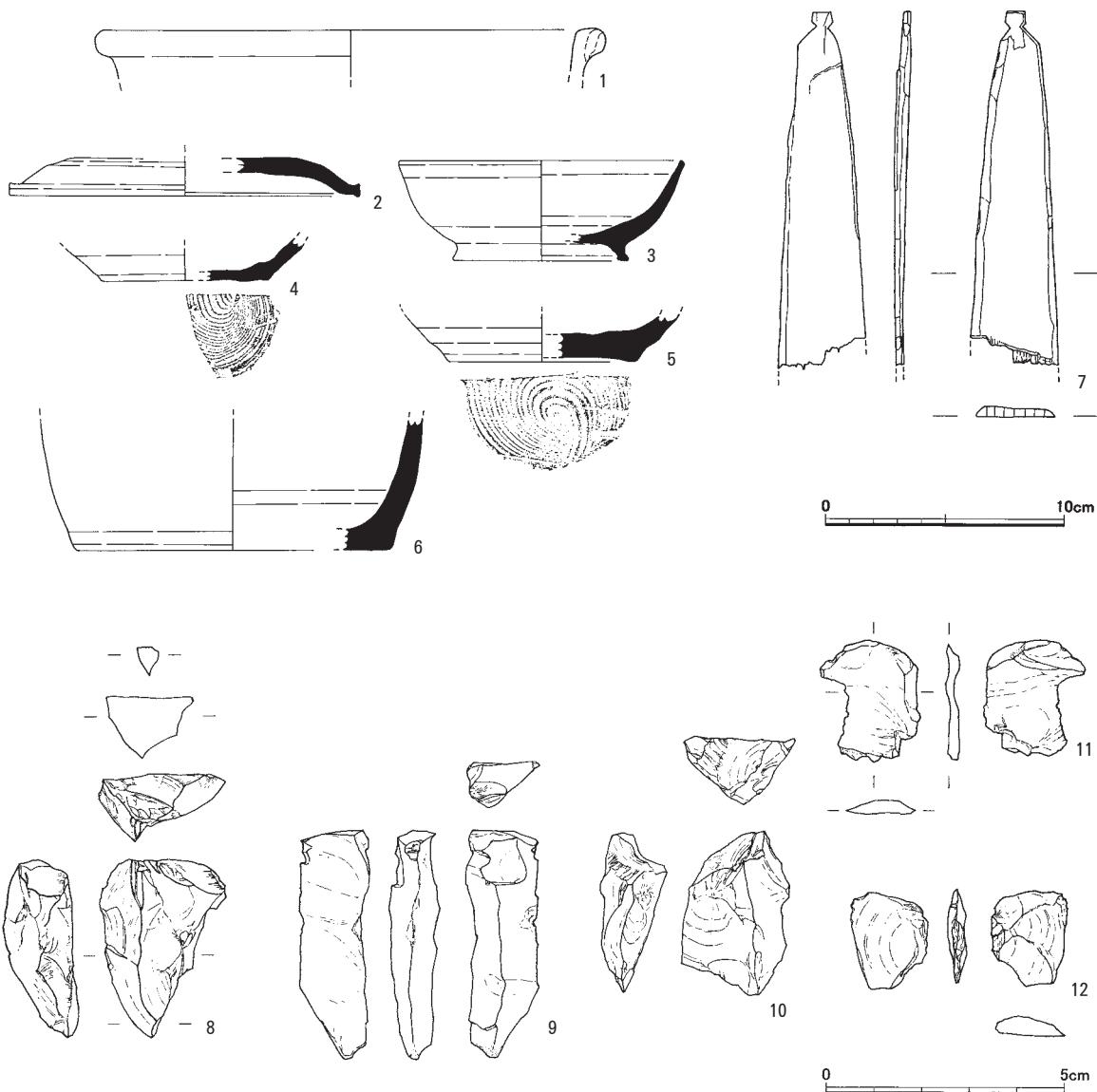
第22図 五丁遺跡 B区SD02・03実測図・  
出土遺物実測図 (S=1/120, 出土状況遺物  
S=1/12遺物 S=1/3)

は別遺構とも考えられるが底面レベル以外は明らかに連続するので同一の溝として扱った。遺物は実測できない土器小片が出土する。縄文・弥生土器が中心であるが土師器もみられる。

**遺構の時期と性格** 時期は土師器小片、SK09・SD03（古墳時代中期か）を切ること、第4層に被覆されていることから古墳時代以降中世以前と考えられる。性格は不明である。

#### SD03（第22図）

**規模と形態** 調査区中央を南から北に流れる。南端はSK09付近で溝の堀方が浅く広がり不明瞭になる。一方北端側には杭列を流れに直行させる堰状の施設が存在し、調査区西壁から調査区外に続



第23図 五丁遺跡 B区遺構外出土遺物実測図 (S=1/3, 8~12: S=2/3)

く。規模は幅1.4~1.6m・深さ0.4mを測り約18mの長さで検出した。SD02に切られている。遺物は第22図に出土地点を記したもの以外に土器小片が南端SK09・10付近からまとまって出土する。

**出土遺物（第22図）** 1は口縁端部を内傾させ、内外面にミガキを施す土師器環である。2は深い環部を持ち、直線的に外傾する土師器高環である。3は環部が浅く外傾の著しい土師器高環、4は内面に縦方向のケズリの入る高環脚部である。いずれも清石遺跡古墳時代土器溜出土品・ナメラ追遺跡II区溝状遺構1類に類似した資料が見られ、古墳時代中期中葉～後葉の資料である。5は弥生前期の土器底部、6は縄文土器浅鉢の波状口縁である。5・6はいずれも混入遺物である。

**遺構の時期と性格** 時期は出土遺物から古墳時代中期中葉～後葉と考えられる。性格はしがらみ状施設の存在から導水路であったと推定される。

### (3) 遺構外からの出土遺物（第23図）

1は突帯を口縁端部直下に貼り付け、玉縁状の口縁を呈する土器である。胎土には2mm大の石英を多く含み、弥生土器に類似することができる。玉縁下側がナデられており三田谷I遺跡から出土しているいわゆる突帯文系土器であろうか。2は端部が屈曲する須恵器蓋、3は丸みを帶び

た高台を持つ壙である。4・

5は無高台底部回転糸切りの壙である。6は壺底部。

7はオモテ面を調整、上部に抉りのはいった不明木製品である。下端は台形状に広がる。出雲市山持遺跡で抉り部の大きさは異なるが類似した構造の木製品が出土している<sup>\*1</sup>。8～10は石核、11・12は剥片である。

8のみ玉髓が、9～12は周辺凝灰岩に浸潤した硅化凝灰岩である。

#### 註

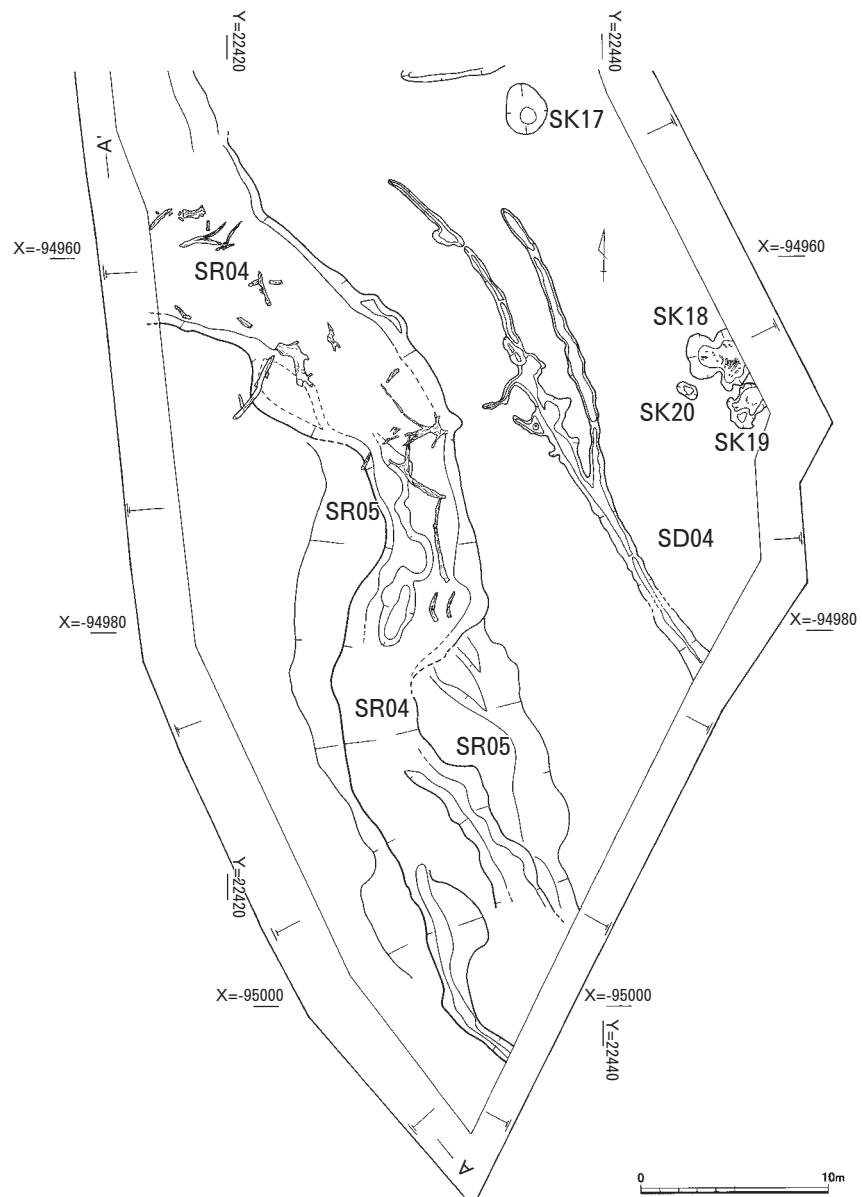
\* 1 山持遺跡Ⅱ区出土木製品  
(島根県教育委員会2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区vol2』第18図22)。

## 第4節 C区の調査

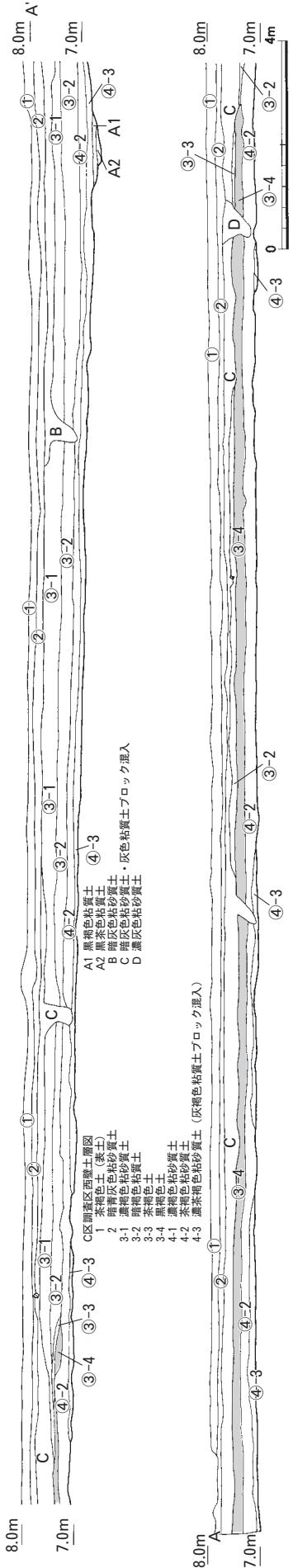
C区はB区の南に位置し、庵寺・於才迫遺跡の谷から流れる排水路(圃場整備にて現位置に移動)の西に位置する。調査期間は平成17年7月4日～10月31日。同調査区の南西側には五丁基幹農道があるがその農道を挟んで丘陵が迫っている地形である。なお五丁基幹農道の当該箇所については、圃場整備以前から道の位置は替わっておらず、仁摩平野の条里プランを現在も継承する。

調査区の層序は、A・B区同様、現表土(1層)・水田床土(2層)の下に、圃場整備以前の水田耕作土(3層)が存在し、さらにその下に標高7.2m前後に濃褐色～茶褐色の粘質土が存在する。ただし、A・B区と異なり、調査区中央より南、丘陵が西に迫る部分にはこの褐色系の粘質土の上に黒茶色土層が存在していた(第25図第3-2層)。C区はほかの調査区に比べ遺構外出土遺物が多いが、図示した須恵器(第46・47図)の大部分は、観察表でPNoでの取り上げとされる分を含めこの4-1層からの出土であり、第4-1層は奈良平安時代の遺物包含層と認定できる。

遺構としてはSK18～20の土坑群、SD04の溝1条を確認したほか、遺物包含層である4層を掘削除去した後、青灰色粘質土上面でただちに自然流路SR04・05を確認した。しかし、道路建設工事の工事用道路の設置のため、8月10日をもって調査区西側(第4図C1区)を国土交通省に引き渡



第24図 五丁遺跡 C区遺構配置図 (S = 1/400)



第25図 五丁遺跡 C区調査区  
土層図 (S=1/120)

さねばならず、C 1 区についてはほぼSR04の調査のみで下層のSR 05の調査は行えず不十分な調査となってしまった。SR04・05は蛇行する同一の河川の上下層として区分したものであるが、砂を中心として大木をも巻き込み、上下に離れた遺物が接合することから急速に堆積したと考えられる。さらに土層堆積状況から明瞭なように、流路自体は短期間にさらに多くの変遷を繰り返したものであり、SR04・05はその大別に過ぎない。なお、調査時点では川 1 ~ 9 とより多くの段階で分類していたが、個別の流路の消長を平面的に整合的に解釈することができず、結論的にSR04・SR05の 2 つに大分した。また、比較的安定しているSR05についてはさらに上層・下層に分別しており、自然流路を都合計 3 つの段階に区分した。

出土遺物はこれら 3 段階のいずれにも確認できたが、SR04の段階では C 区南、流路が東側に屈曲して弧をなす部分の内岸を中心に弥生土器がまとまって出土している。次いでSR05の上層からは、弥生土器と突帯文土器が出土、SR05下層からは突帯文土器・縄文土器のみが出土している。

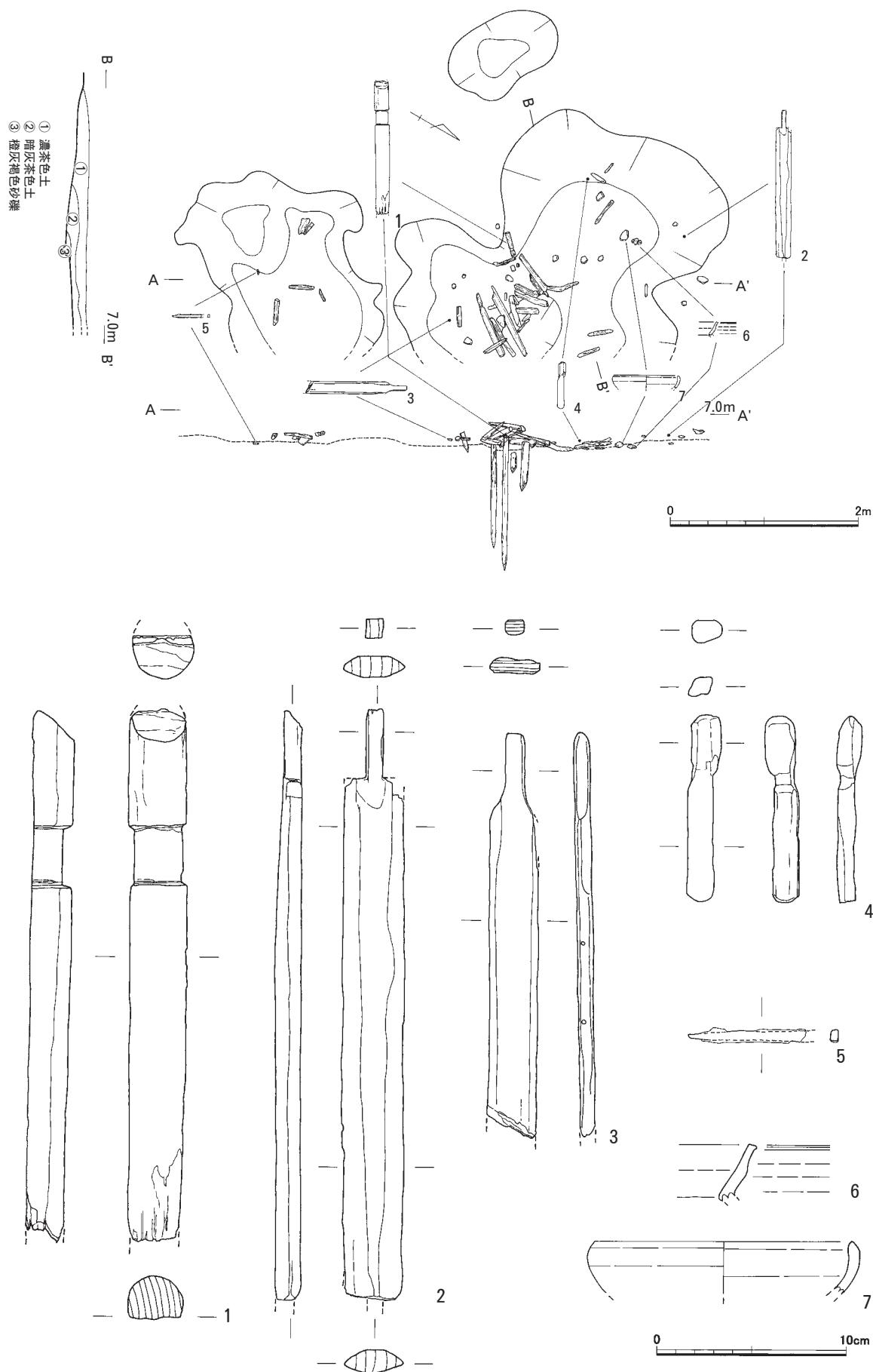
### (1) 土坑

#### SK18~20 (第26図)

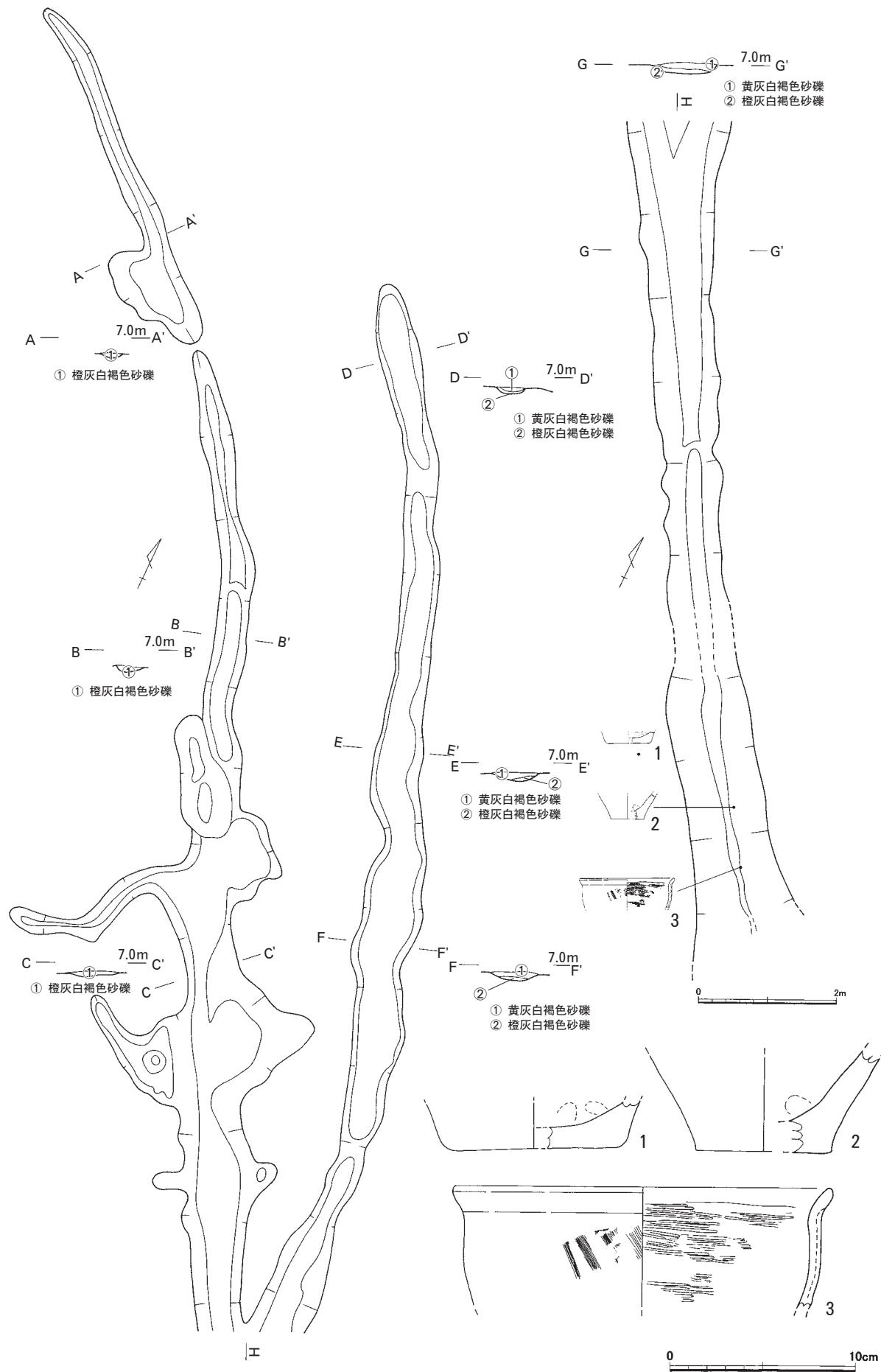
**規模と形態** 調査区東端に位置する。長軸2.4m・短軸1.6m (SK18)、同3.0m・2.6mの不正円形を呈する土坑 2 つと小型の土坑が隣接している。調査区外に続くため正確な規模は不明である。いずれも底が平坦で検出面から確認できる深さは10cm程度と浅い。暗茶色の土ならびに砂が堆積、緊縛具・杵型田下駄部品・刀子・土師器と自然木ほかの木材類が出土、中央には杭も打たれていた。

**出土遺物 (第26図)** 1 は材を円筒状に加工、表面を調整したうえで一部を段状に切り込みを入れ抉りを作った木製品。図での下面はワリ面が残るが、これが本来の姿か 2 次加工であるのかは判断できなかった。緊縛具であろうか。樹種スギ。2・3 はいずれも杵型田下駄の横桟である。幅3.5cm(2)、2.8(3)cmと A 区SK02出土品より一周り小型であるが、柄の作りだし・断面菱形に面取りされている点など横桟とみてよい。樹種はともにスギ。4 は不明木製品。上端から 4 cm 程度の部分が四方から抉り込まれている。5 は長さ7.1cm の角形鉄製品で釘であろう。6 は複合口縁退化した最終段階の口縁部を持つ土師器甕で、ナメラ迫遺跡 II 区溝状遺構 1 類の中に類似した資料が見られる<sup>2</sup>。古墳時代中期中葉～後葉の資料。7 は端部が内湾する土師器壺で出雲地域では古墳時代中期後葉に位置づけられる資料である。

**遺構の時期と性格** 遺構の時期は出土土師器から古墳時代中期後葉、



第26図 五丁遺跡 C区SK18~20実測図・出土遺物実測図  
(S=1/60, 出土状況遺物 S=1/12, 遺物 S=1/3)



第27図 五丁遺跡 C区SD04実測図・出土遺物実測図  
(S=1/80, 出土状況遺物 S=1/12, 遺物 S=1/3)

松山Ⅲ・Ⅳ、九景川様相4・5頃と推定される。遺構の性格は径2m前後、底部平坦という形状、田下駄・農具を含む木製品の残存などの類似性からA区SK02・B区SK09・10同様のものであることは確かで、溜め升的遺構であろうか。

## (2) 溝

### SD04（第27図）

調査区東側を南東から北西に流れる溝である。第24図では北西側で消失するがこれはあくまで検出状況における残存する堀込みの差によるもので、底面レベルは南東側の方が高い。

**規模と形態** 幅約0.8m深さ0.2mで本調査区で約30m分を検出しているほか、南側D区でも連続する遺構を検出している。形状は中間に広がる部分を持ち、北に向かって2本に分岐している。埋土は砂礫を中心であり、暗青灰色粘質土の基盤層に砂が堆積する形で検出した（調査時は砂3・砂4と呼称）。

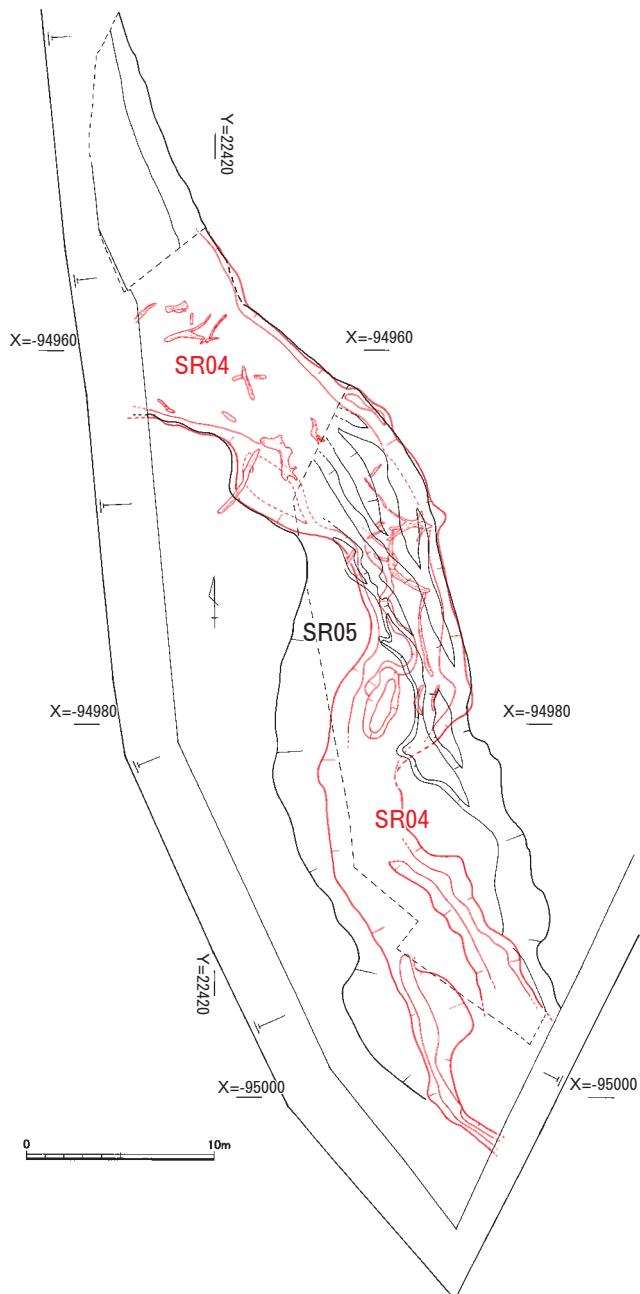
**出土遺物（第27図）** 1・2は弥生土器甕の底部である。3は弥生土器甕である。内外面ともハケによって調整される。いわゆる如意状口縁は未発達で体部に段もない。

**遺構の時期と性格** 出土遺物の時期から弥生時代前期と考えられる。溝の位置は後述するSR04・05とほぼ並行するが、底部のレベルをみると南側に向かって段をつけ深く掘削されている。南側への通水・あるいは南側からの導水を目的としたとみられるが詳細な性格は不明である。北側の遺存状況が悪く、SR04との関係も不明である。

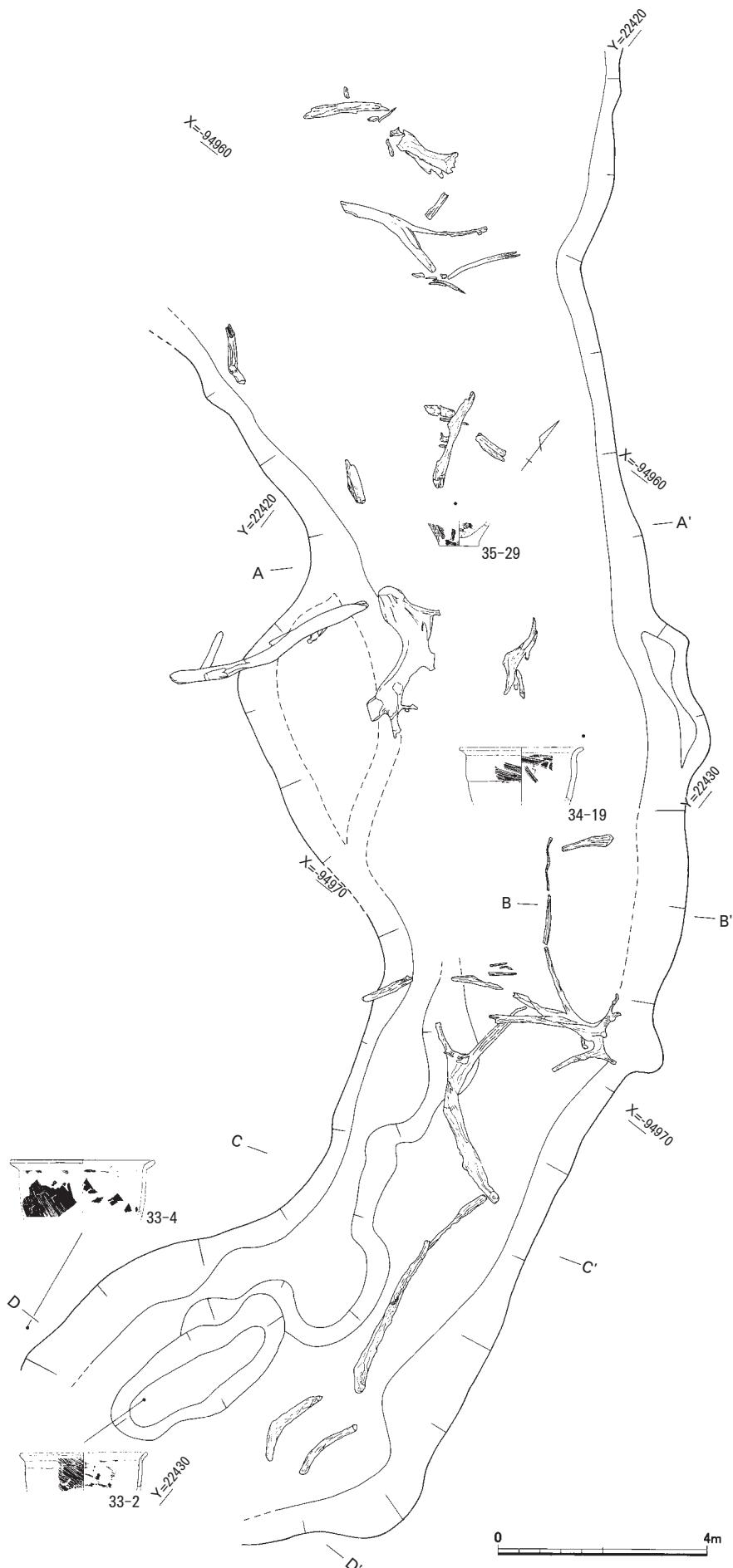
## (3) 自然流路

### SR04・05（第28図）

調査区西側を流れる自然流路で、上部の流路SR04、下部の流路SR05に2分している。これは平面的に変遷を追うことのできた単位であり、実際にはさらに多くの時期に別れ流路の蛇行が繰り返されたと考えられる。また調査の概要で記したとおり、道路工事との関係から、C1区に相当する範囲（第4図）では下層SR05を調査しておらず、SR04の調査も不十分であった。またB区ではSR04・05を区分せずに調査しておりSR04の平面形が確認できていない。記してお詫びしたい。流



第28図 五丁遺跡 C区SR04・05位置図 ( $S = 1/400$ )



第29図 五丁遺跡 C区 SR04実測図 (1) ( $S = 1/120$ , 遺物  $S = 1/12$ )

路はD区でも連続して確認されている。

五丁遺跡調査区の基盤層は一貫して北側が低く南側が高い構造を有しており、流路が南から堆積作用によって徐々に南に向かって移動していく痕跡もみられない。従って南に遷移していた潮川の本流とは考えられず、本遺跡から南の庵寺・於才迫遺跡の所在する谷(第2図)の小河川流路と考えるのが自然であろう。なお、圃場整備前まで同谷からの排水路が調査区西側現五丁基幹農道沿いに位置していた(現在は圃場整備によってC・D区の堺に移動)。

#### SR04 (第29~31図)

**規模と形態** 上層の流路である。C区の基本層序である第4層を除去したところ、暗青灰色粘質土の基盤層上面で、砂・木質混じりの埋土を検出した。調査区南側で西に、中央付近で東に、また北側で西に大きく蛇行しておりその度合いは下層流路SR05よりも激しい。幅は図上では4~6mとなるが、実際には複数時点の流路の集積の結果幅であり、堆積土中どこまでを上層流路の埋



写真1 庵寺・於才迫遺跡の谷の小河川

土とみるかによって異なることになる。D区でのSR04の底面レベルが6.5m前後であることを勘案すると、第30図EE'断面・FF'断面、第32図付近は明らかに上流部より浅くなってしまい、この部分についてはSR04上層流路の一部のみしか調査していなかったと考えられる。

**堆積状況** 堆積状況は平面上の蛇行の状況にかかわらず、いずれの断面図でも調査区外に丘陵の迫る西側にいくほど時期として遡る古い堆積層が確認され、東側に行くほど新しく、底部のレベルが高くなっている。また、西側ほど堆積物は砂礫になり、東側の最後の堆積層ほど黒茶色の木質が混入する層が多くみられるようになる。したがって、流路は上流から供給される多量の砂で西岸を埋めつつ、東岸を浸食しながら徐々に川底を高く東に移動

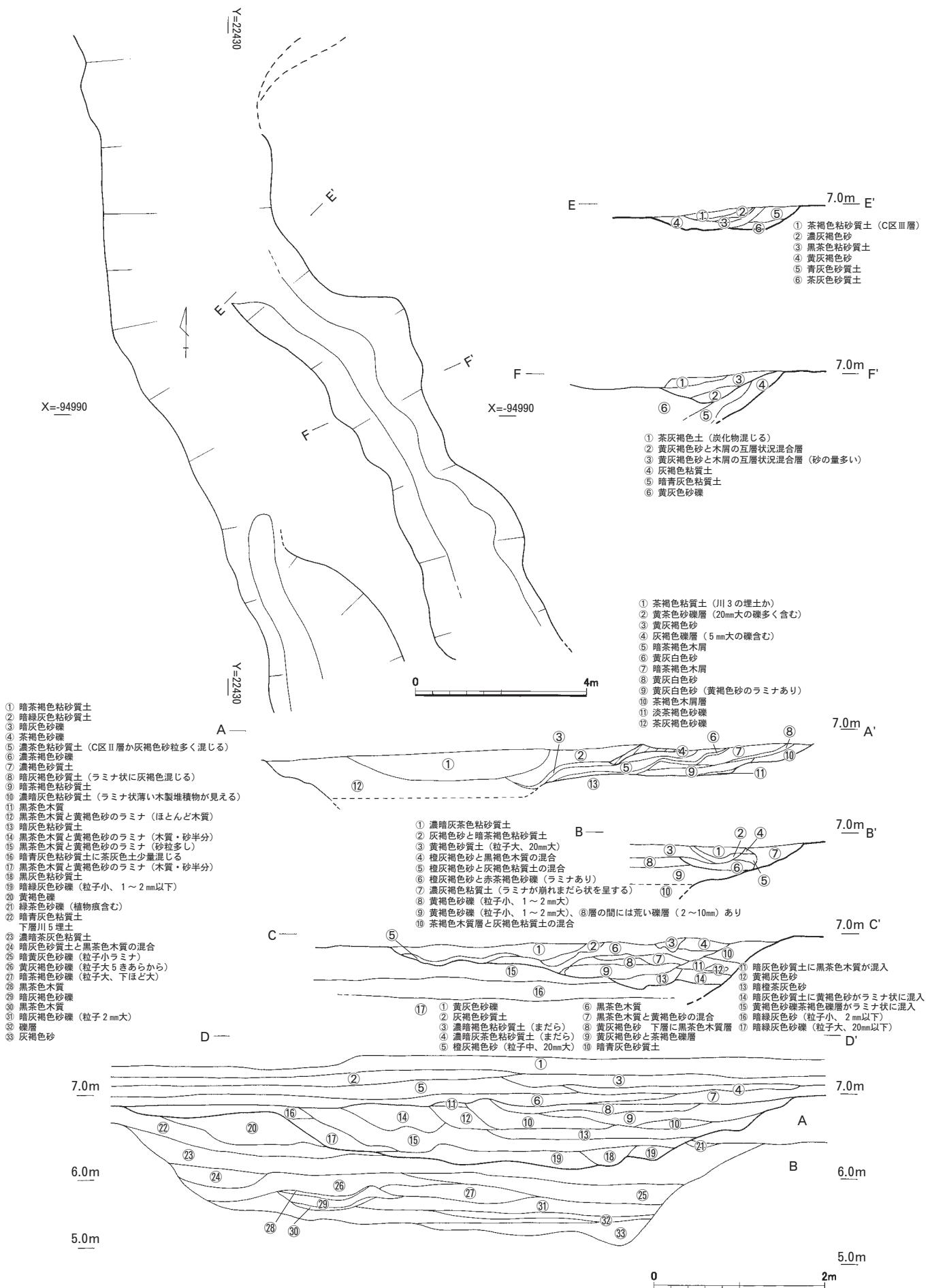
し、最後に再び幅広の深い流路（AA'・CC'断面の1・2層）となったとみられる。なお、流路の西岸は底東岸ほど明確でない。厳密にはSR04と認識した部分の西側は東側と同じ青灰色粘質土の基盤層を確認できておらず、砂層が連続している状況といってよく、さらに西側に旧流路が残っている可能性もある（D区SR04・05参照）。最上層の左右対称で両肩の確認できる断面であるEE'断面、またD区でのSR04の状況を、SR04が埋没する時点での流路とみると、その水量は決して多くなく、流路幅も2m程度であったと考えられる。現在の流路も庵寺遺跡上流では幅2m程度である（写真1）。ただし、第29図に示した下流・北側部分では、径0.3m長さ4m以上の流木も流されており、西側の砂礫堆積時点では、一時的なものであるにせよ、相応の流量があったとみられる。

**北側出土流木（第29図）** 流路の北側部分からは流水によって流されたと思われる自然木が多数発見された。いずれも砂礫層からの出土で、加工木材はない。樹種はヤナギ属が最多で・ムクロジ・カエデ・アセビ類似・スギ・クワ属など（第VI章参照）からなる。ムクロジ・カエデなど水辺に限定されない樹種もあるが、中心は水辺縁辺の植生で、流路周辺が水辺の植生を持っていたと想定される。

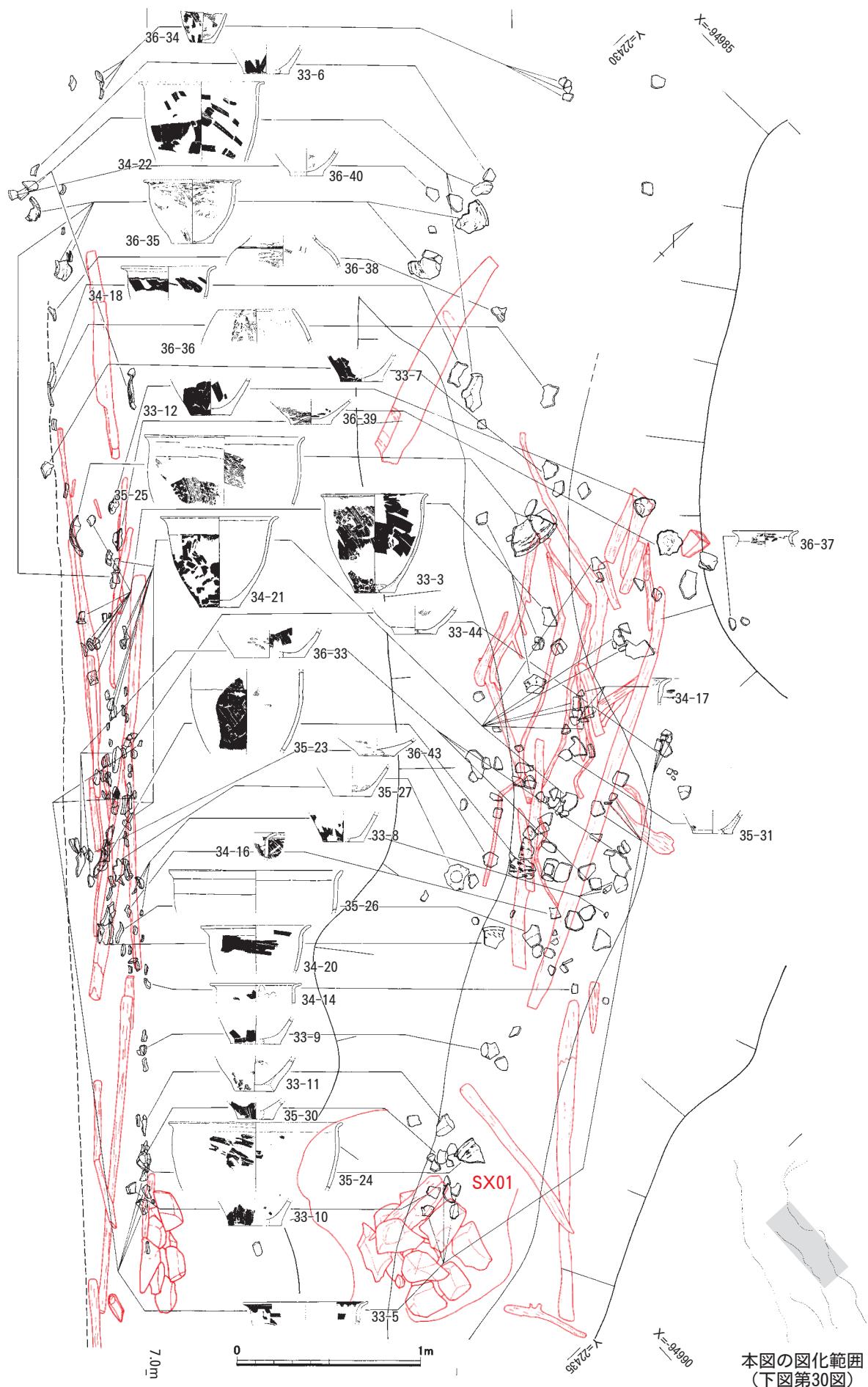
**土器だまり遺物出土状況（第31・32図）** まず、遺物出土状況について流路全般をみると、少量の破片が出土する流路の一般的出土状況状況で。特にB区の部分では破片資料が中心であった。ただし、第31・32図に示したEE'～FF''断面、さらにその南側では比較的まとまって弥生前期の土器が出土しており以下土器だまり呼称する。SR04出土として図化掲載した遺物の大部分はこの土器だまりからの出土である。また、この部分では自然木が流路に添うようにでまとまっており、土器片もこの自然木群に混入する形で出土している。土器の遺存状況、接合状況を確認すると、当該部分の資料では破断面の摩耗がほとんどみられず接合すること、完形品はみられないものの大型の破片に接合可能な資料が見られることから二次的移動は少ないと推定される。さらに第31図の断面図では土器の出土状況が南から北に傾斜して下がるいくつかの列として確認できることからこの部分の土器の集中的出土は何度か繰り返された土器の投棄・廃棄によるものと考えられる。

#### SX01ならびに自然木（第31図）

**規模と形態** SR04東岸に位置する、人頭大の石からなる直径約1.0m、高さ0.3mの集石遺構である。



第30図 五丁遺跡 C区SR04実測図(2)・土層図 (S=1/120, 土層図S=1/60)

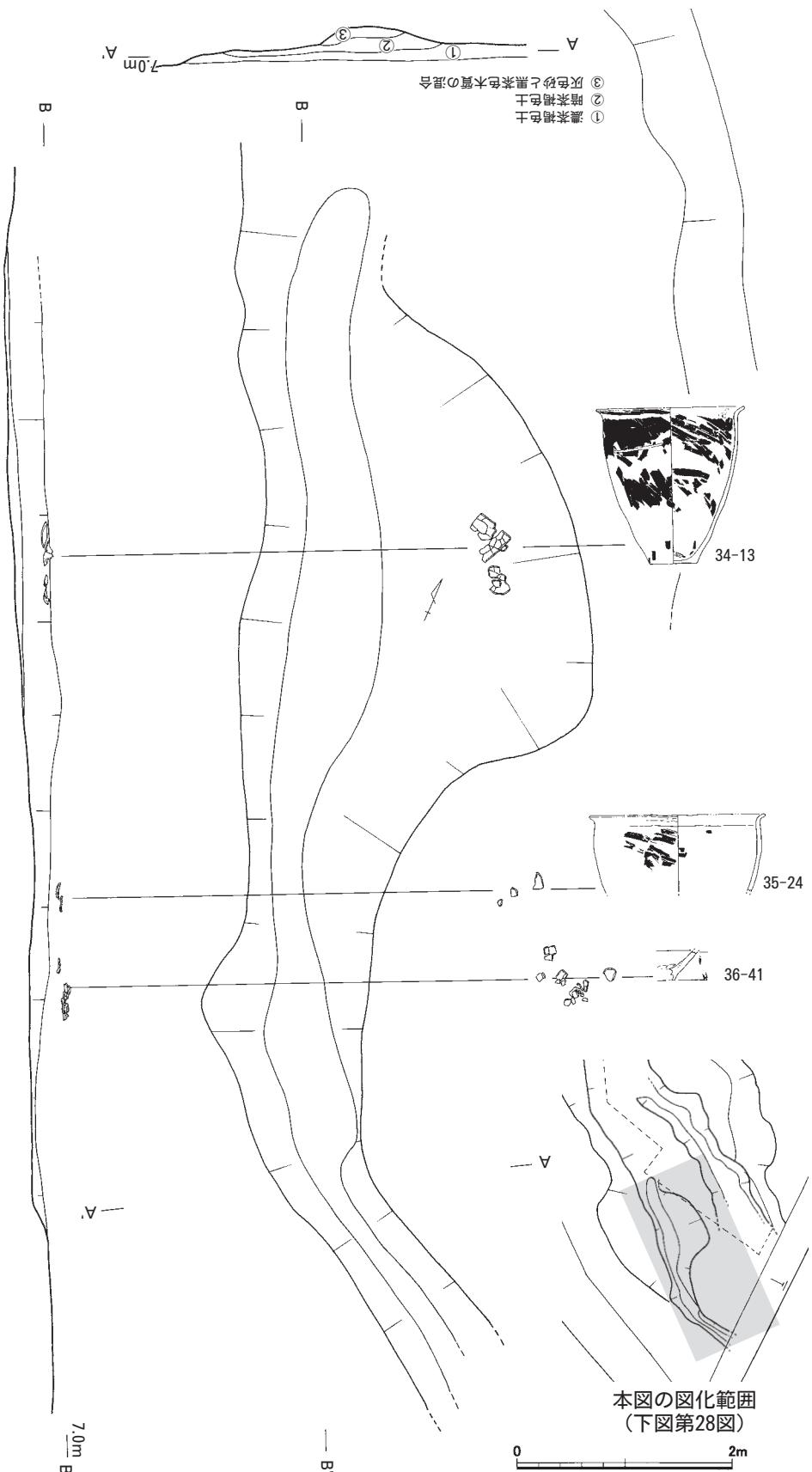


第31図 五丁遺跡 C区SR04土器だまり遺物出土状況図 (S = 1/30, 遺物 S = 1/12)

本図の図化範囲  
(下図第30図)

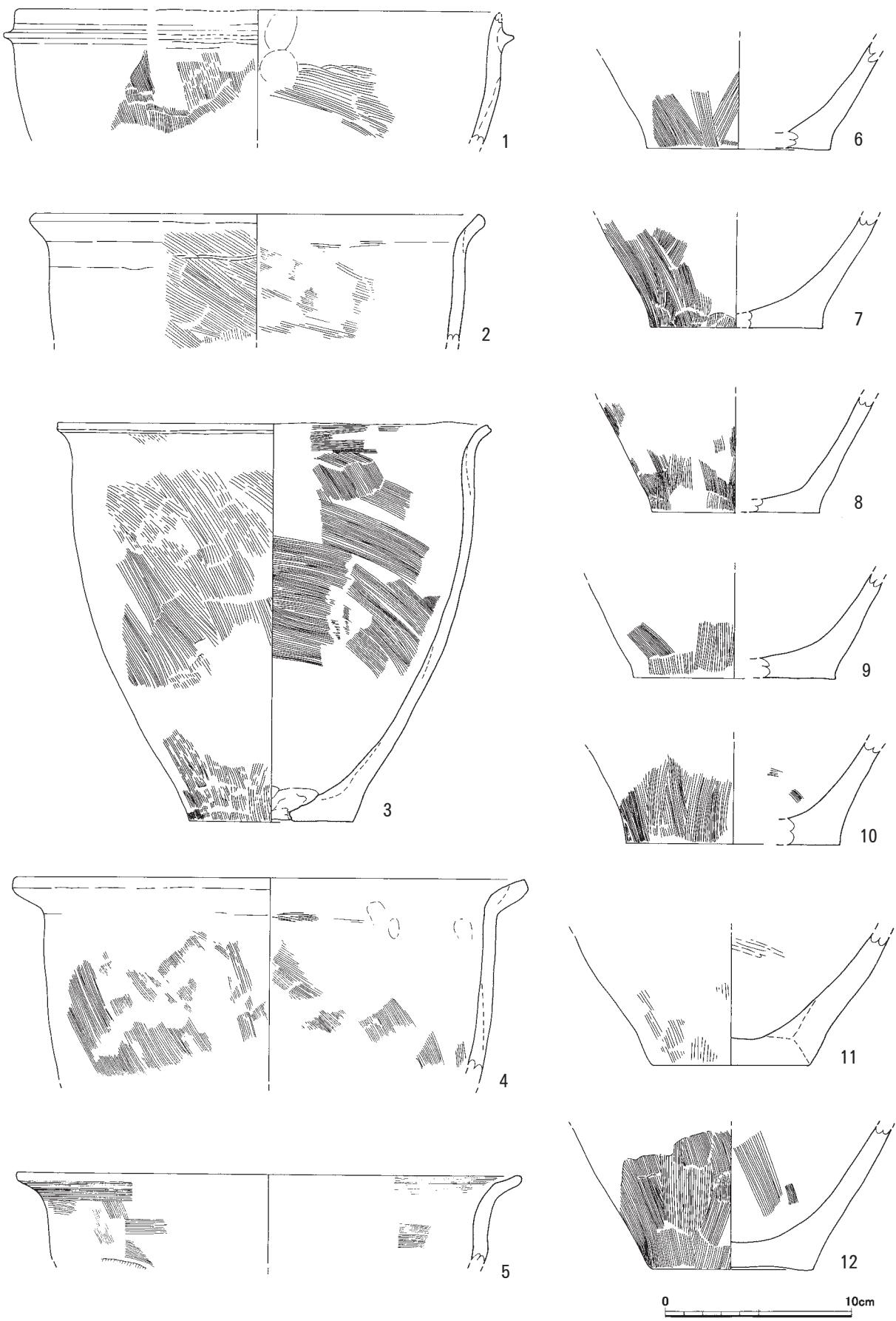
なお、SX01の構築にかかる堀方、下部構造などは一切確認できなかった。

このSX01から北側約4mの間に自然木が流路に平行に堆積している部分が確認された。なお、加工された木材・杭などの構築物は一切確認されていない。第31図断面図を見れば、この部分の自然木は南を高く北を低くしてかなりの北に下がるよう傾いて堆積している。これは流路の底面（すなわち水流の傾斜）よりも遙かに急であり、むしろ流路の肩の傾斜に添ったものと考えるのが自然である。すなわち自然の水流によってここに運ばれ堆積したのではなく、流路肩上面より投入されたもの、したがって人為的な施設を構成物であろう。自然木がSX01下流部分のみで確認されている点もあわせると両者は一体の構築物であり、流路肩に存在すること、杭などの構築物を持たない点（水流



第32図 五丁遺跡 C区SR04実測図(3) ( $S = 1/60$ , 遺物  $S = 1/12$ )

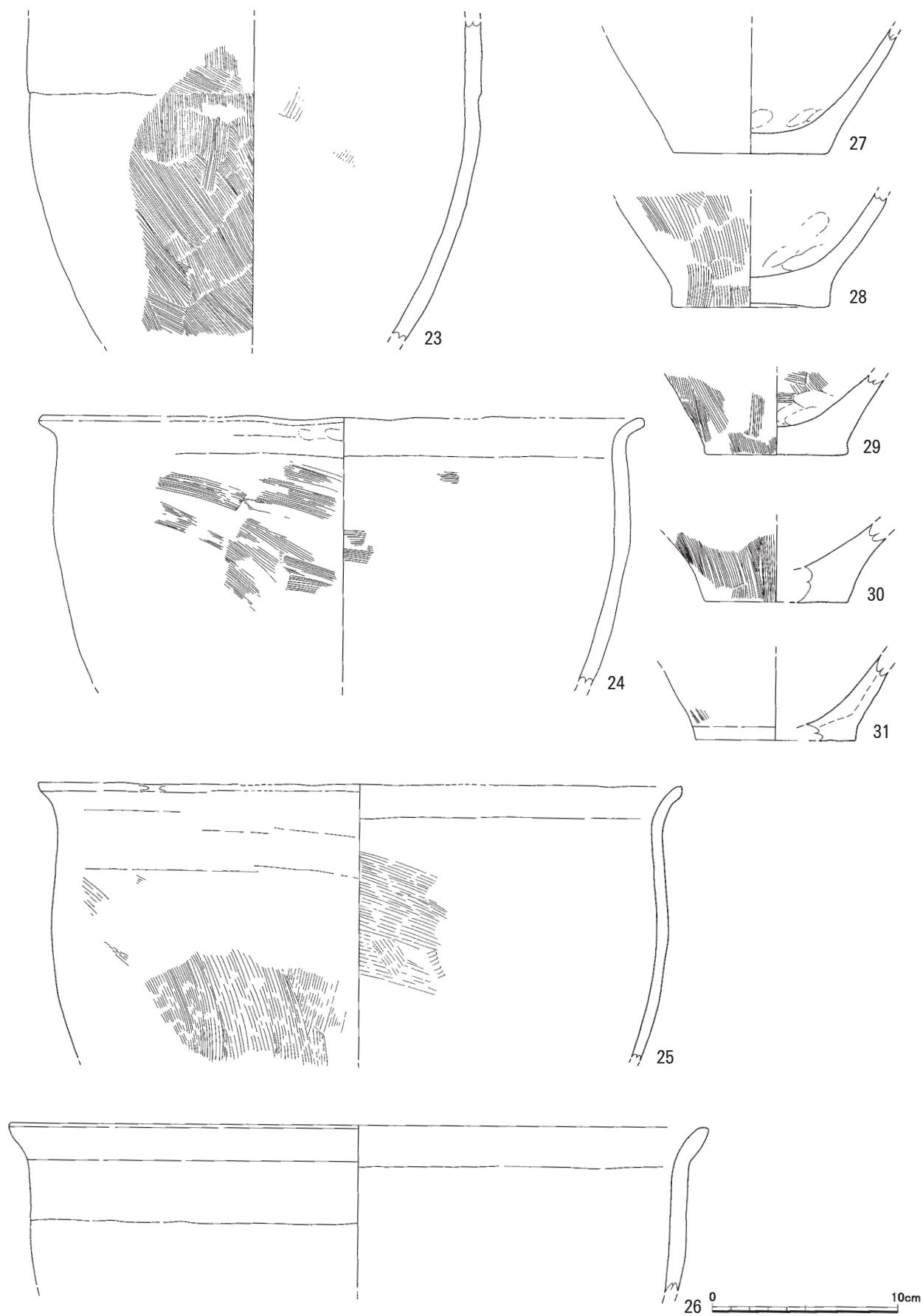
を制御する構造・機能はない)を想起すれば、肩側に立って流路の水流を利用する施設が想定される。土器の出土も念頭に置けば、洗い場のようなものが想定される。



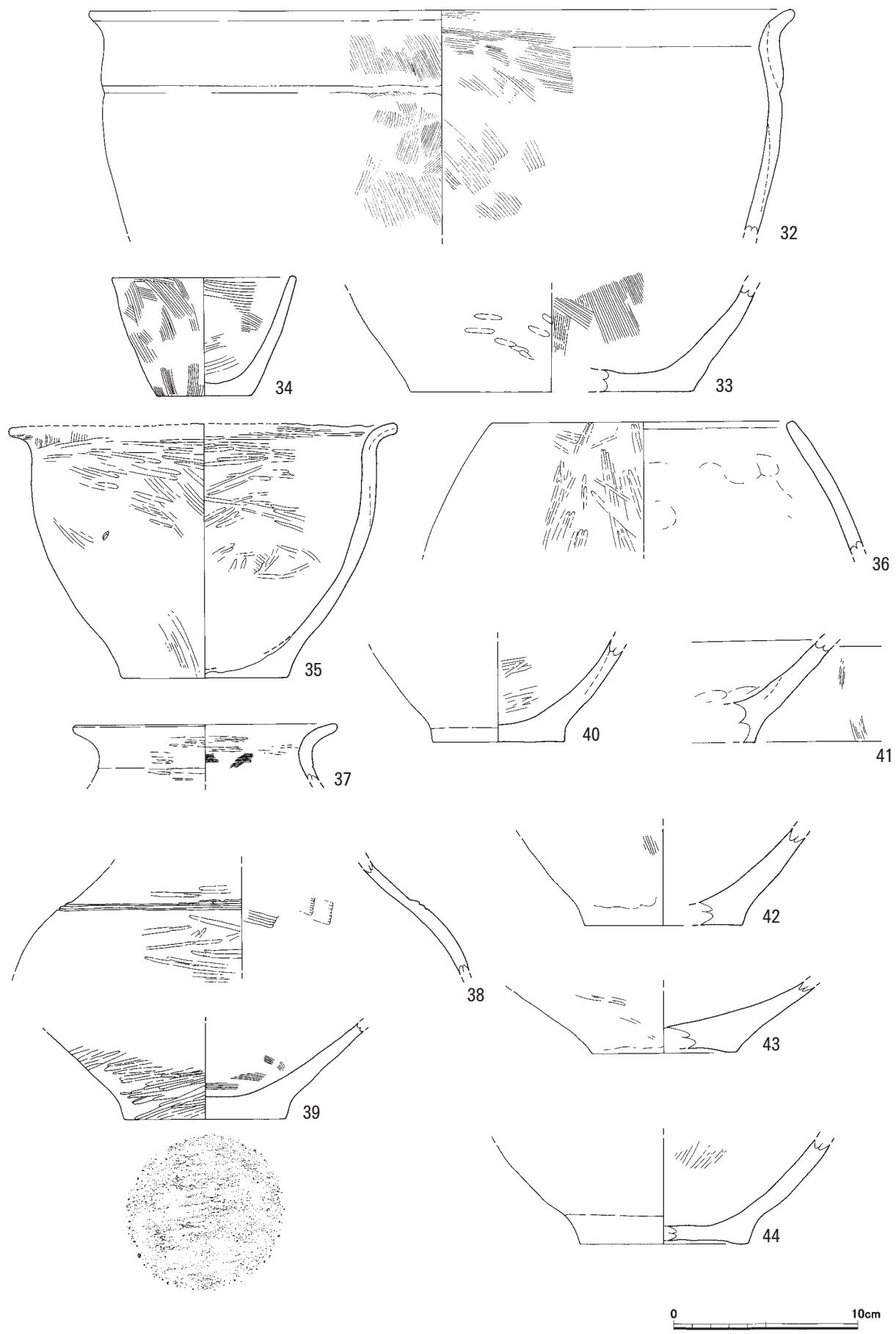
第33図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(1) (S = 1/3)



第34図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(2) (S = 1/3)



第35図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(3) (S = 1/3)



第36図 五丁遺跡 C区SR04出土遺物実測図(4) (S = 1/3)

#### SR04出土遺物（第33～36図）

1は突帯文土器～弥生土器移行期のいわゆる変容系突帯文土器である。直立する口縁端部のかなり下に無刻目の突帯を添付する。粘土紐内傾接合でハケ調整・胎土も大粒の砂流を含むもので藤尾「外来系第4群」に相当する<sup>\*2</sup>。2～33は弥生土器甕である。調整はいずれも体部ハケ、口縁部ヨコナデである。2～4は内外面ハケ調整で頸部に段・沈線等に持たない中型の甕である。2・3は如意状の口縁の外反がやや浅いもの。3は若干口縁部下端が下方につまみ出される。5は頸部にハケ工具を押し当て段を持たせた資料である。

13は外面頸部に太い工具を横になでて凹状の線を入れたもの。一般的な細い沈線とは異なる。14～17は口縁部小片である。15・17はハケ工具を当て弱い段を作り出す。また14・15は口縁端部をやや下方向につまみ出し、刻目はないものの「口縁下端突状甕」との関連性を窺わせる資料である。18～22は頸部にハケ調整の有無、工具押し当てによって段をもうける甕である。22も口縁端部が若干下方につまみ出される。

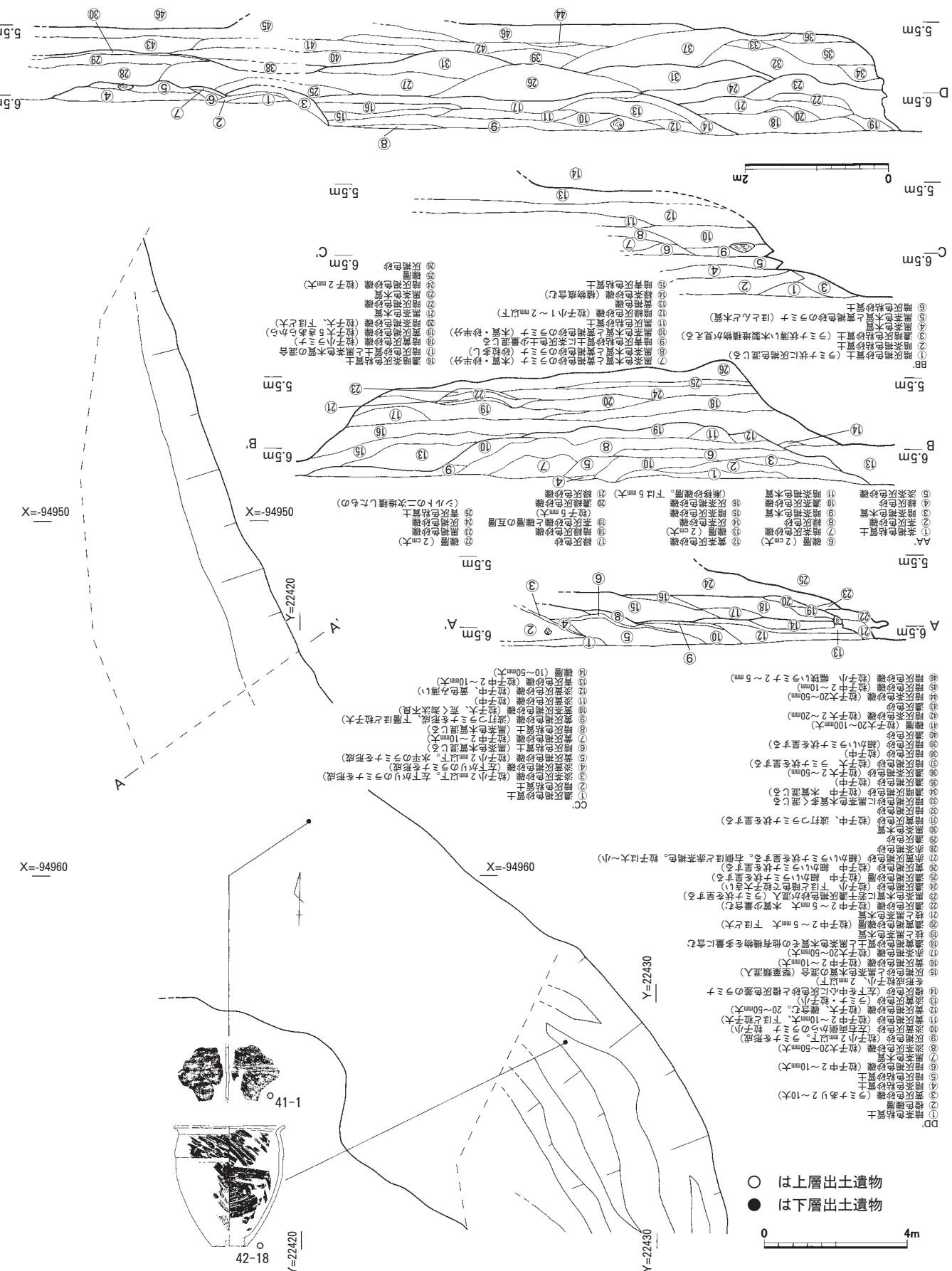
24～26は口径30cmを越える大型の甕である。32も大型の甕で肥厚させた貼り付け粘土による頸部の段が明瞭に残る。6～12・27～31は弥生土器甕底部としたが壺底部も含んでいる可能性がある。33は大型品の底部である。34は小型で体部が直線的に外傾する鉢である。35は如意状口縁を持つ鉢である。内外面ミガキにより調整される。36は無形壺である。外面はミガキ・内面はナデによる調整。37～39は弥生土器壺である。37は口縁部である。肥厚はほとんどなく、段も工具を当てて軽く施されている。38は壺頸胴部堀である。段を有し胴側に沈線2条が引かれる。39は底部である。外面ならびに底部には荒いミガキが施され、底部は円盤状を呈す。42～44は壺の底部か。40は円盤状の厚みのある底部を持ち、44は底部外側を窪め端部を突出させる。

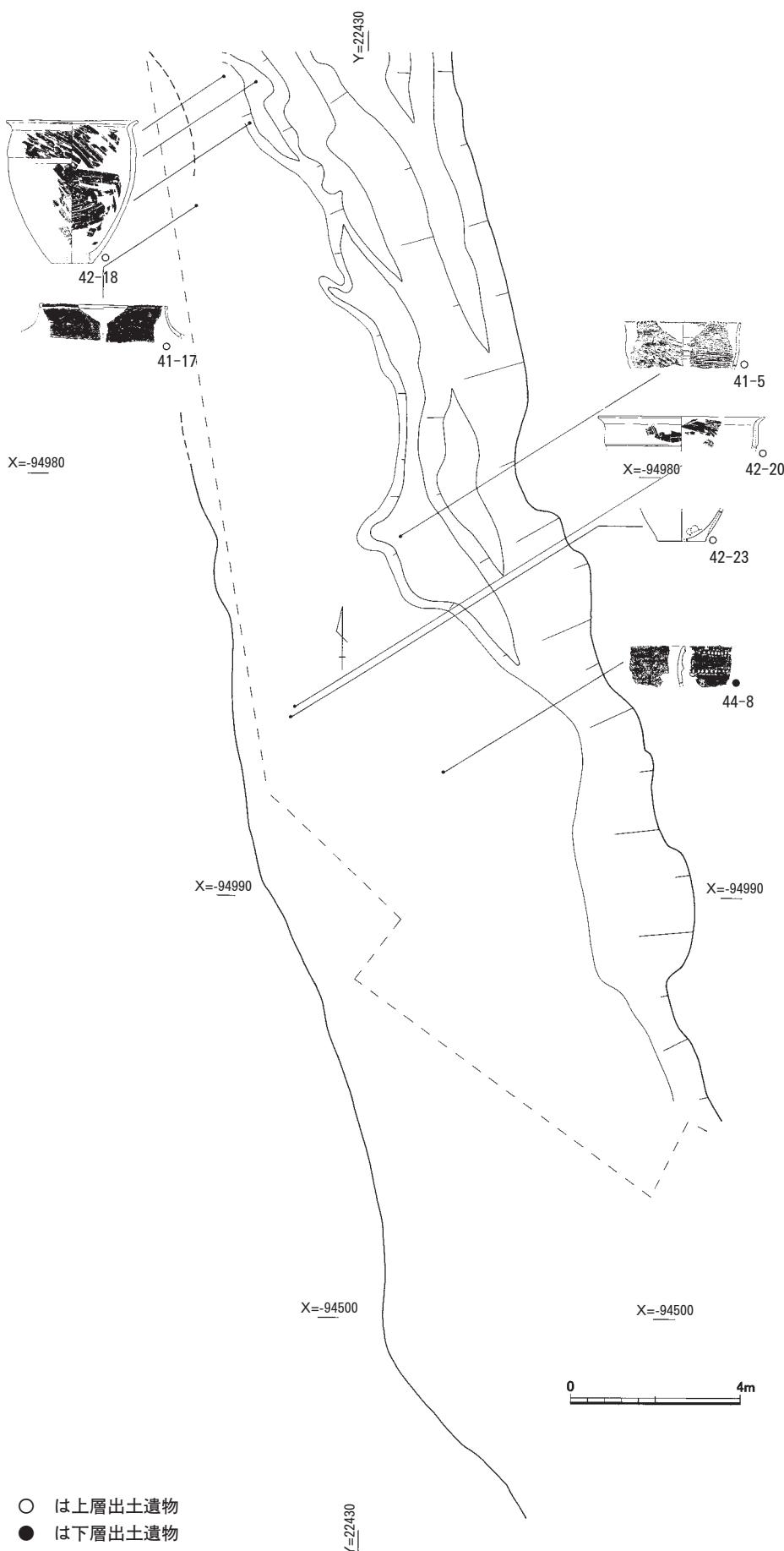
**流路の時期** SR04の土器だまりは流路の東肩に位置し、検出レベルも7.0m前後と高いことからSR04が最も東岸に近い位置にきた段階、最終的に幅広に戻る直前の段階を示している。厳密には土器が投棄された回数は複数回に及ぶと思われるが、出土する甕は、ハケ調整で頸部に段を持ち刻みを持たないものに限定され、「廃棄」の時期的な幅は同一型式内に限定される。これら土器だまり資料の時期は、削出突帯を持つ壺・沈線を持つ甕の出現する古屋敷遺跡の資料より先行し、松本出雲I-2様式に当たると考えられる。

#### SR05（第37・38図）

**規模と形態** B区南端からC区南端までの間、約60mにわたって検出したSR04の下層に位置する流路である。なお、B区の第28図に示した流路は事実上SR05完掘状況である。第37図断面BB'はSR04・05の土層断面を合成したため、両者の間に13の濃灰色粘質土が堆積するような土層断面図となっている。実際にはSR04・05いずれも濃灰色粘質土の堆積後に浸食された流路であり、14・16層はオーバーハング状に岸が削り込まれた後、流路が急速に埋まった部分と考えられる。SR05には同様の部分がしばしば確認されている。規模は上幅で8～10mである。蛇行の度合いは上層SR04よりも緩慢である。底部標高5.3m（北側）～5.5m（南側）である。

**堆積状況** 堆積状況はSR04と異なり、逆台形状の流路の断面が、下からレンズ状ないし水平に堆積していったことが窺え、完掘状態での流路全体幅の中で、ある時期の流路が蛇行・あるいはSR04のように度々に西から東へ移動していったような痕跡は不明瞭である。ただし第37図DD'断面では流路が左右に移動していたことが確認できる。堆積物は下層ほど荒い砂礫層を主体としており、ま

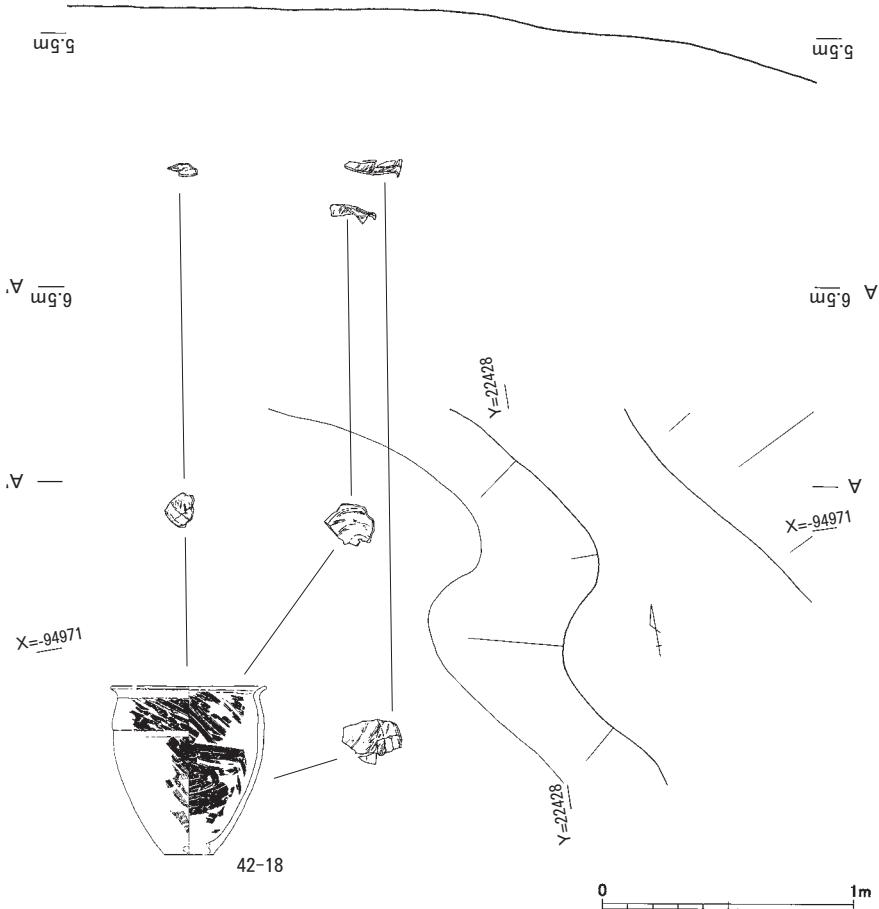




第38図 五丁遺跡 C区SR05実測図(2) (S = 1/150, 遺物 S = 1/12)

た流路全体に及ぶ堆積構造となっている。それがBB'断面23層、D D'断面第33層で木質の混在する小流路堆積が現れ、以後左右に流路が移動したことがわかる。このようにSR05の堆積構造は、BB'断面24層・DD'断面34層を基準とし、これらの層を含んでその上か下かによって大別可能であり、上の土層をSR05上層、これらの層を含まずその下の土層をSR05下層とする。

**遺物の出土状況（第39・40図）** 全般的にはSR04の土器だまり部分以外同様に破片が散在する状況であるといえるが、上述の上層・下層でやや異なる。まず、下層資料については、すべて破片資料で接合できた資料も皆無であった。水平・レンズ状堆積と相まって、下層出土遺物については二次的移動、時間的な幅を考える必要がある。これに対し上層の資料、特に弥生土器については、平面的に狭い範囲から破片が出土、接合できたものがしばしばみられる。第39図に示



第39図 五丁遺跡 C区SR05遺物出土状況拡大図(1)  
(S = 1/30, 遺物 S = 1/12)

出土)は洪水などで短期間に形成されたと考えられる。破片が接合した弥生土器は特にその堆積時点に廃棄されたものである可能性が高い。なお、C区のSR05ではSR04と異なり大きな流木の出土は確認できなかった。

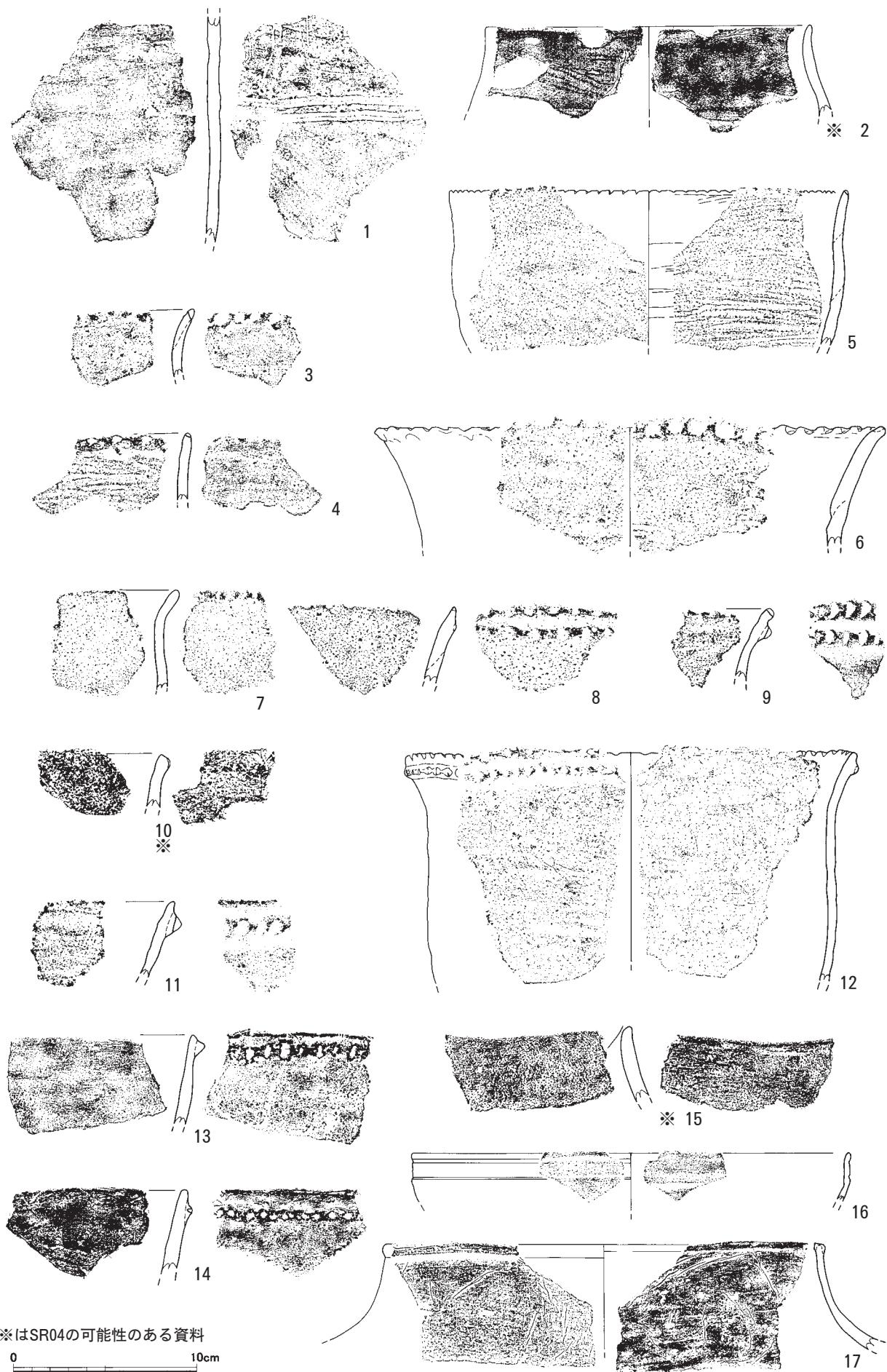
**SR05出土遺物** 先述のように上層・下層に分けて記述する。遺物取り上げ時点では、上層資料は「第3層」、下層は「第4層」注記し、標高が確認できる資料はおおむね標高5.7mを堺に上層・下層の分別している。

**SR05上層出土遺物（第41・42図）** 1は荒いナデの上に胴部外面に凹線を持つ深鉢で岩田式土器4類、縄文晚期前半の資料と考えられる。今回の報告資料中最古の資料である。2は浅鉢でくの字に屈曲、内外面にミガキの施される浅鉢でおそらく突帯文土器沢田式の資料である。3～14は突帯文土器深鉢である。3～5は器壁がほぼ直立し、口縁端部に刻目を持つ資料である。6は体部に屈曲を持つ深鉢で口縁端部に刻目を持つ。7は如意状に若干に外反する口縁を持ち刻目V類が口縁端部に施され胎土などは突帯文土器に類似する土器である。器面の調整（摩滅による）・粘土接合など不明（内傾接合か）で遠賀川系土器の影響を受けた土器であろうか。8～10は口縁端部およびその下に突帯を巡らした資料である。11～13は口縁に接して突帯の添付された資料。14は刻目に竹管を用いた資料である。15～17は浅鉢である。15は波状口縁を持ち体部を逆くの字に内反させる方形浅鉢で、口縁端部は単純に引き出される。沢田式の浅鉢である。16は浅い碗型を呈する浅鉢で口縁部

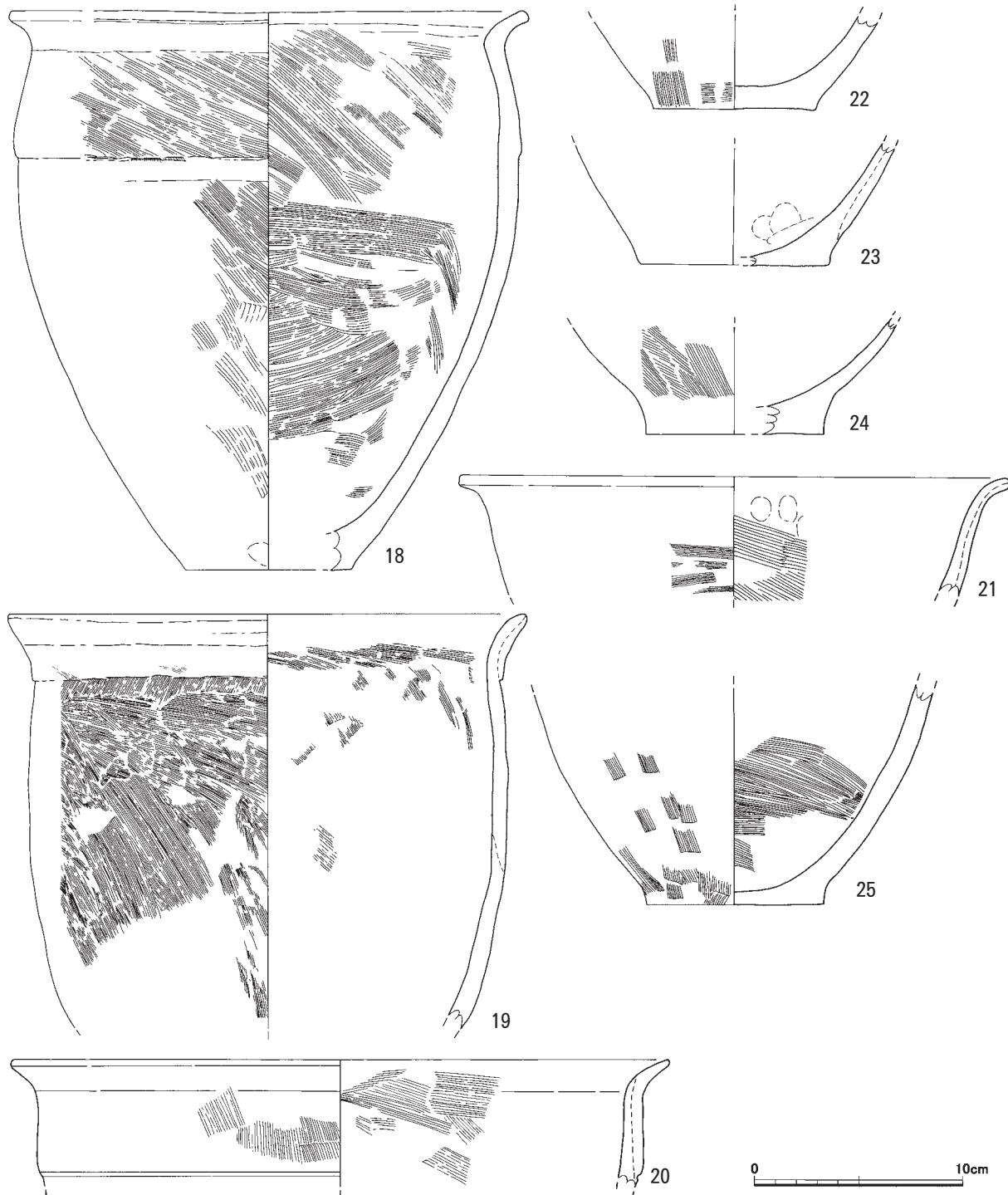
した甕（第42図-18）は、上下レベルでは20cmの差があるものの接合可能な全破片が径1mほどの範囲から出土しており、同様に第40図に図示した壺（第43図-26）は長さ4m程度の範囲に1個体の7割程度の破片が分布するが、検出レベルは最大60cmの高低差がある。これらの事例は、いずれも弥生土器は二次的な移動が少なく廃棄された地点からあまり移動していないことを示すと同時に、遺物のレベルの異なる遺物が接合すること=一度に厚い堆積層が形成されたことを物語っている。これは上層の時々の流路が移動する堆積状況に対応するもので、それぞれの土層（土器は砂層から



第40図 五丁遺跡 C区SR05遺物出土状況拡大図(2) (S=1/60, 遺物 S=1/12)



第41図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(1) (S = 1/3)

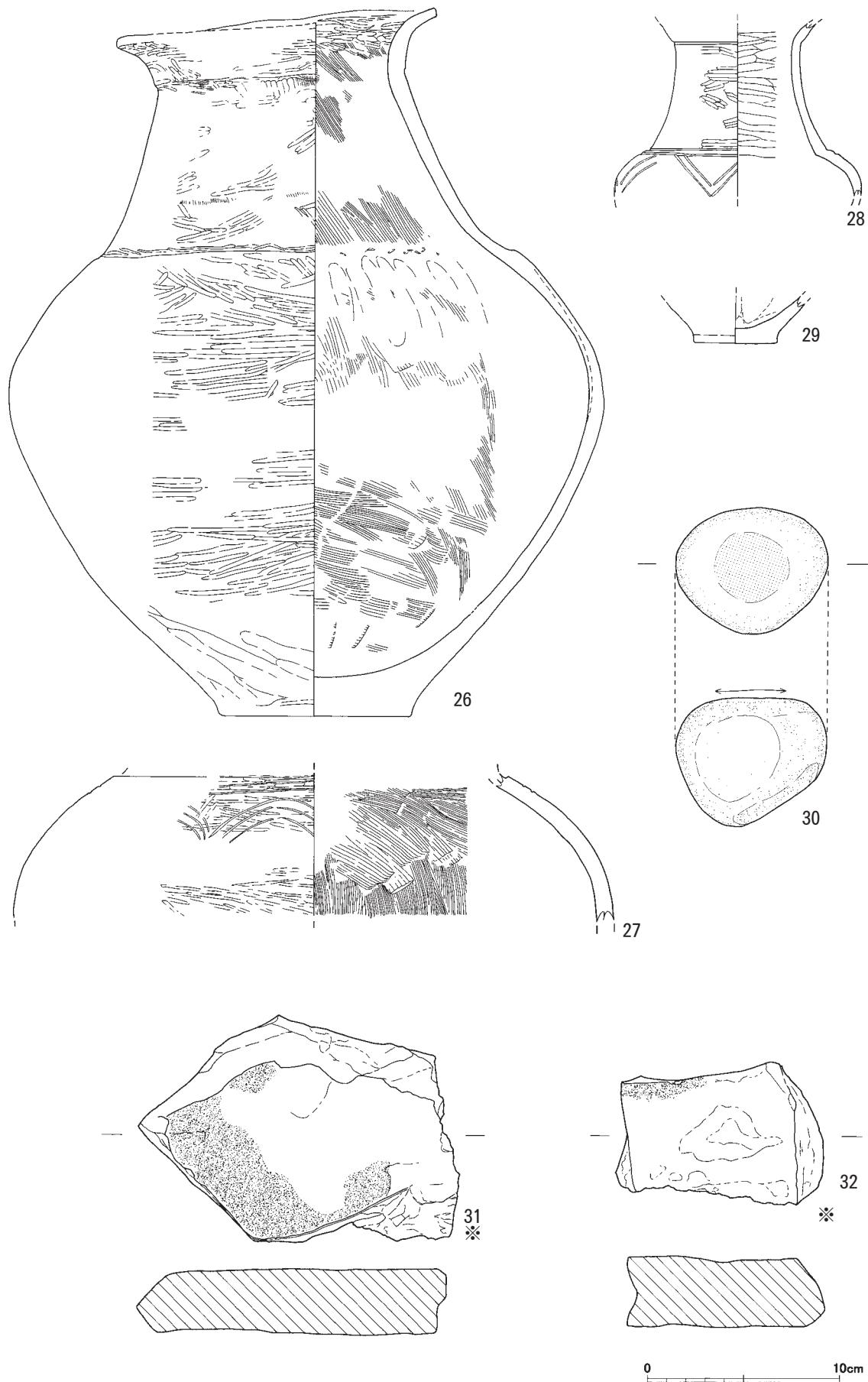


第42図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(2) (S = 1/3)

外面に凹線2条を持つ。17は平口縁で体部を逆くの字に内反させる資料。口縁端部は外側玉縁状を呈する。古市河原田式に同様の資料が確認される<sup>\*3</sup>。

18~20は弥生土器甕である。いずれも頸部に明瞭な段をもうけるもので、19・20では口縁部を肥厚させる貼り付け粘土を用いて段を形成していることが断面から観察できる。また、胴部が張る家根祥多氏のいう甕Aの形態をとどめている<sup>\*4</sup>。21は口縁部が外反する鉢である。22~25はいずれも外面ハケ、内面ハケ・ナデによって調整される弥生土器甕の底部。

26・27は弥生土器中型の壺である。26は約7割程度の破片を接合できた資料で、口縁頸部界・頸胴部界に段を有する。頸胴部界胴部側は工具の押し当て痕によって強調されるが、いわゆる沈線状



\*はSR04の可能性のある資料

第43図 五丁遺跡 C区SR05上層出土遺物実測図(3) (S = 1/3)



写真2 43-26壺の頸胴部界



写真3 43-27壺の胴部沈線

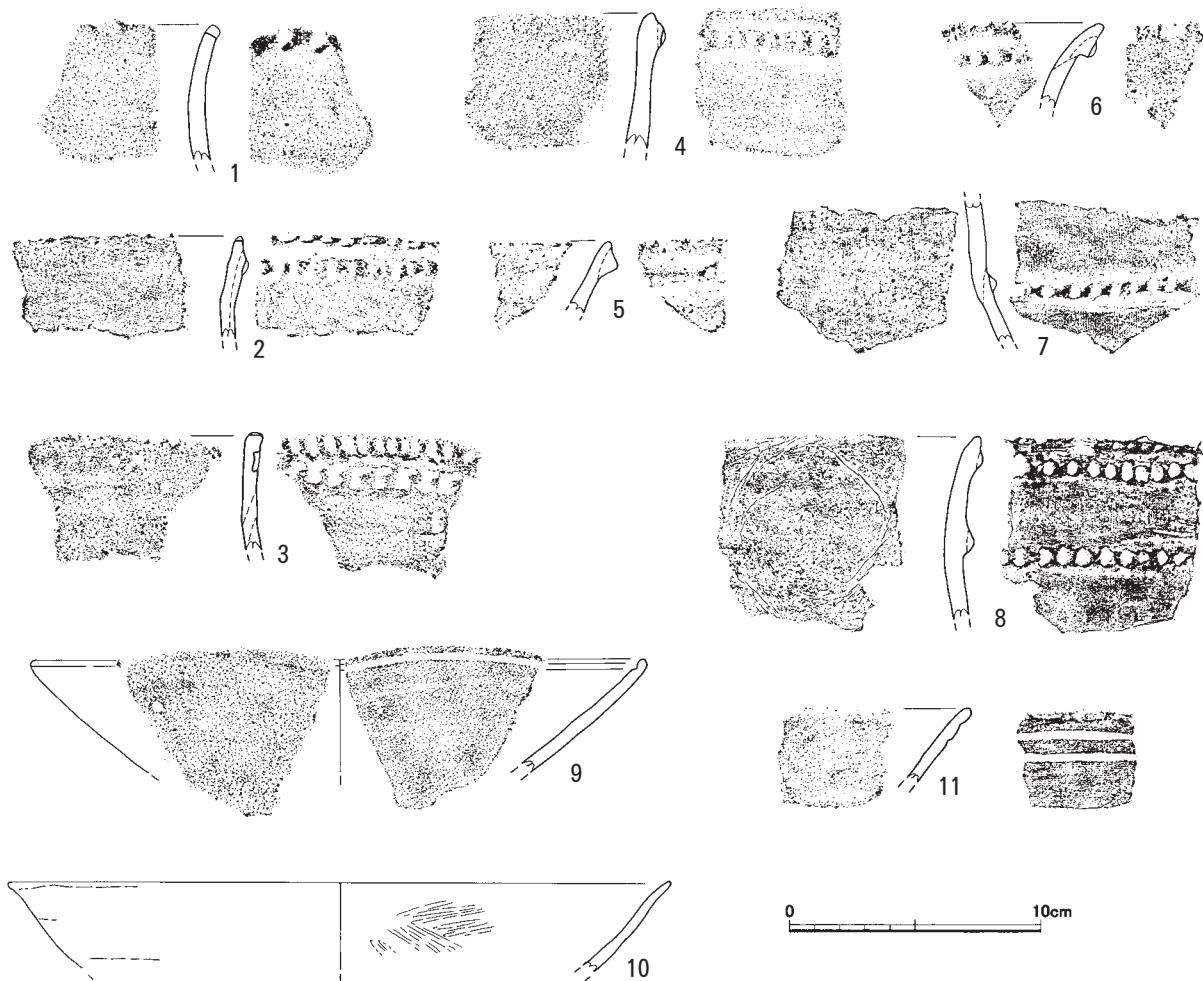
に全週してはいない。工具痕は不連続であり単体では葉巻状を呈する。ヘラ状工具ないし鋸歯状圧痕のつかない貝殻腹縁<sup>5</sup>と考えられる（写真2）。口縁肥厚部が比較的短いこと、明瞭な段を持つこと、頸胴部界が肥厚すること、内面に明瞭な指頭圧痕を残すこと、最大径が胴部中位にあることなどを特徴として挙げられるが、口縁部を直線的に外反させる出雲原山式（松本出雲I-1様式）よりは後出し、松本出雲I-2様式に該当すると考えられる。27は壺の体部で口縁頸部界下にヘラ状工具ないし鋸歯状圧痕のつかない貝殻復縁による沈線2条、体部上段に同工具による3条の山形文に近い重弧文が施される。かろうじて残る口縁頸部界に肥厚はなく、段は形骸化しているものと思われる。28・29は中型壺に比較して大粒の石英砂流を含まない胎土の小型の壺である。同一個体の可能性もある。直線的に外反する口縁部を持ち球状の体部上面にヘラ状工具によるものと思われる沈線2条の山形文が施される。また口縁頸部界・頸胴部界にも沈線が施される。

外面および内面頸部まで非常に丁寧なミガキが施されている。29はやや底部が側面から絞られて高くなっている。30はデイサイトあるいは安山岩の円礫を利用した擦石である。上面に擦痕が認められる。31・32は上面に焼痕跡のみられる凝灰岩製の擦石である。以上、SR05上層出土の遺物は複数地点の流路堆積土中の資料であるが、特に接合した弥生土器については、甕などにSR04出土遺物より若干先行した形態のものがみられ、本遺跡出土のいわゆる遠賀川式土器ではD区SR05出土遺物と並んで最古の資料となる。松本石見I-1～2様式、松本出雲I-2様式段階の資料と想定される。一方、これら遠賀川系土器と混在する突帯文土器は、口縁端部上面に刻目を施す深鉢から口縁端部直下に突帯を持つ深鉢、濱田突帯文I～III期の資料が混在しており、二次的に流入した遺物であることを予期させる。

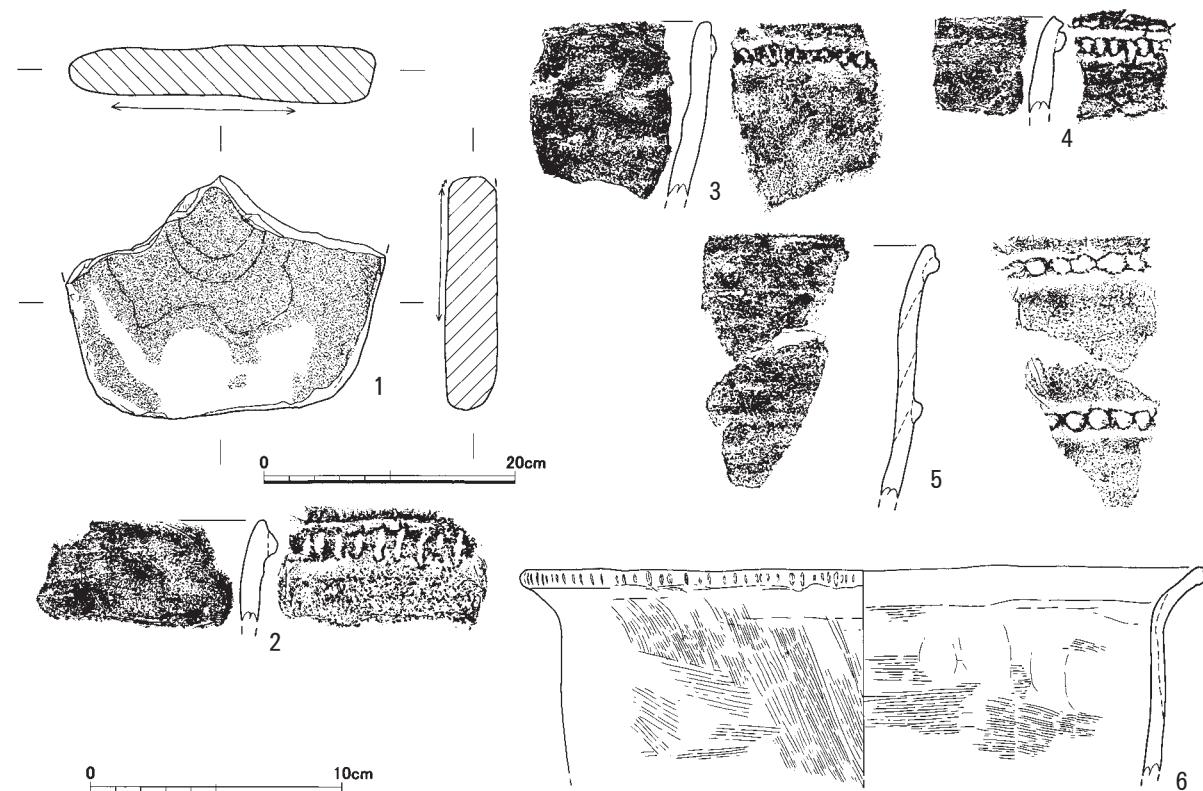
#### SR05下層出土遺物（第44図）

1～8は突帯文土器の深鉢である。1は端部上面に刻目を持つ資料。2・3は端部上面および端部の下に刻目突帯を巡らす資料である。4～6は口縁端部の下あるいは直下に突帯を巡らす。7・8は二条突帯の深鉢で、くびれ部上端あるいは上側に刻目突帯をめぐらす。6は遠賀川式土器の如意状口縁の影響を受けた変容系深鉢であろうか。9～11は浅鉢である。9は皿状を呈し、口縁部内側に沈線をめぐらす。10は一見すると土師器高坏のように見える内外面ミガキの施された皿状を呈する資料であるが、胎土・焼成とも縄文土器である。11も同様のプロポーションを持ち体部外面に2条の沈線を施す資料である。

これらの資料総体をみると体部の屈曲する深鉢で端部上端に刻目を持つ資料、2条突帯のある資料を含むとの対し、突帯文土器で後発的とされる無刻目突帯のある深鉢や、いわゆる砲弾型の深鉢がみられない。流路出土の破片資料であるが、上層で遠賀川系土器と混在している資料群よりやや



第44図 五丁遺跡 C区SR05下層出土遺物実測図 (S=1/3)



第45図 五丁遺跡 C区SR05出土遺物実測図 (S=1/3, 1:S=1/6)

まとめた資料と位置づけることができる。

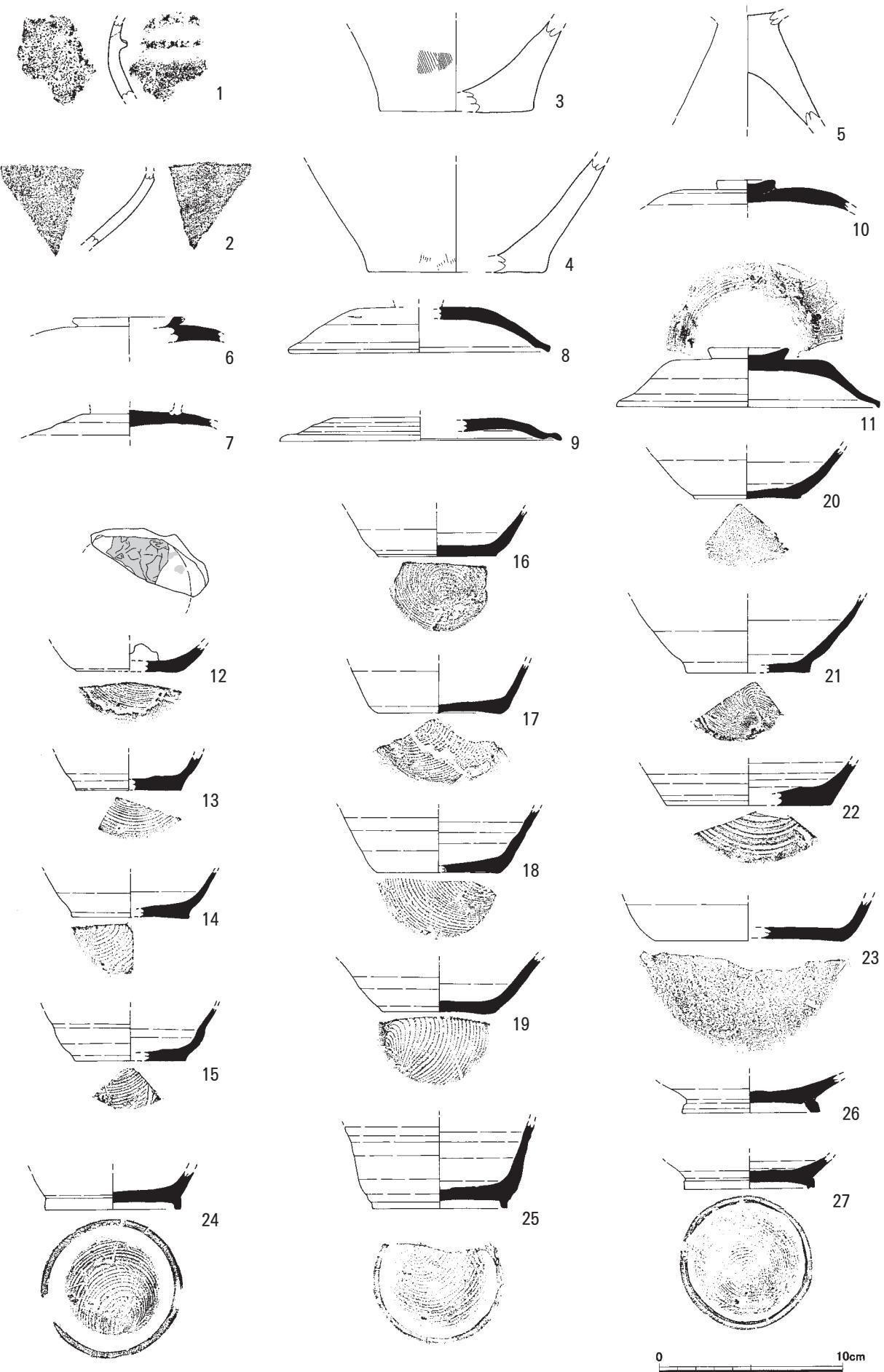
#### SR05出土資料（第45図）

上層・下層の特定のできなかった資料である。1は第43図31・32と類似する凝岩製の焼痕跡を持つ擦石である。本資料は中央部が擦痕により窪み、その上に焼痕がある。2～4は口縁端部の下に突帯を有する突帯文土器深鉢である。5は2条突帯を持つ資料。6は弥生土器甕である。内外面とも体部ハケ調整、外傾接合である。口縁端部の刻みは下端を突らせて施しているというよりも、端部中央付近に浅く刻んでいると認識できる。頸部に段は確認できない。

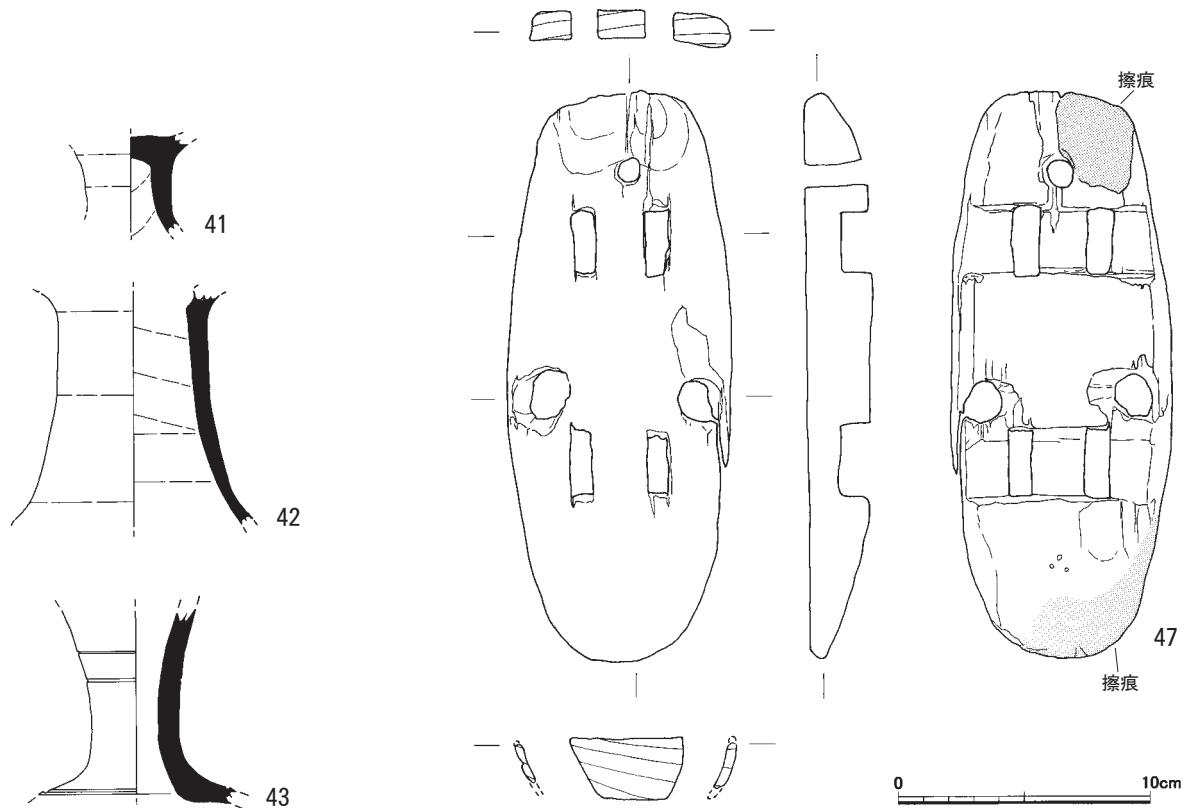
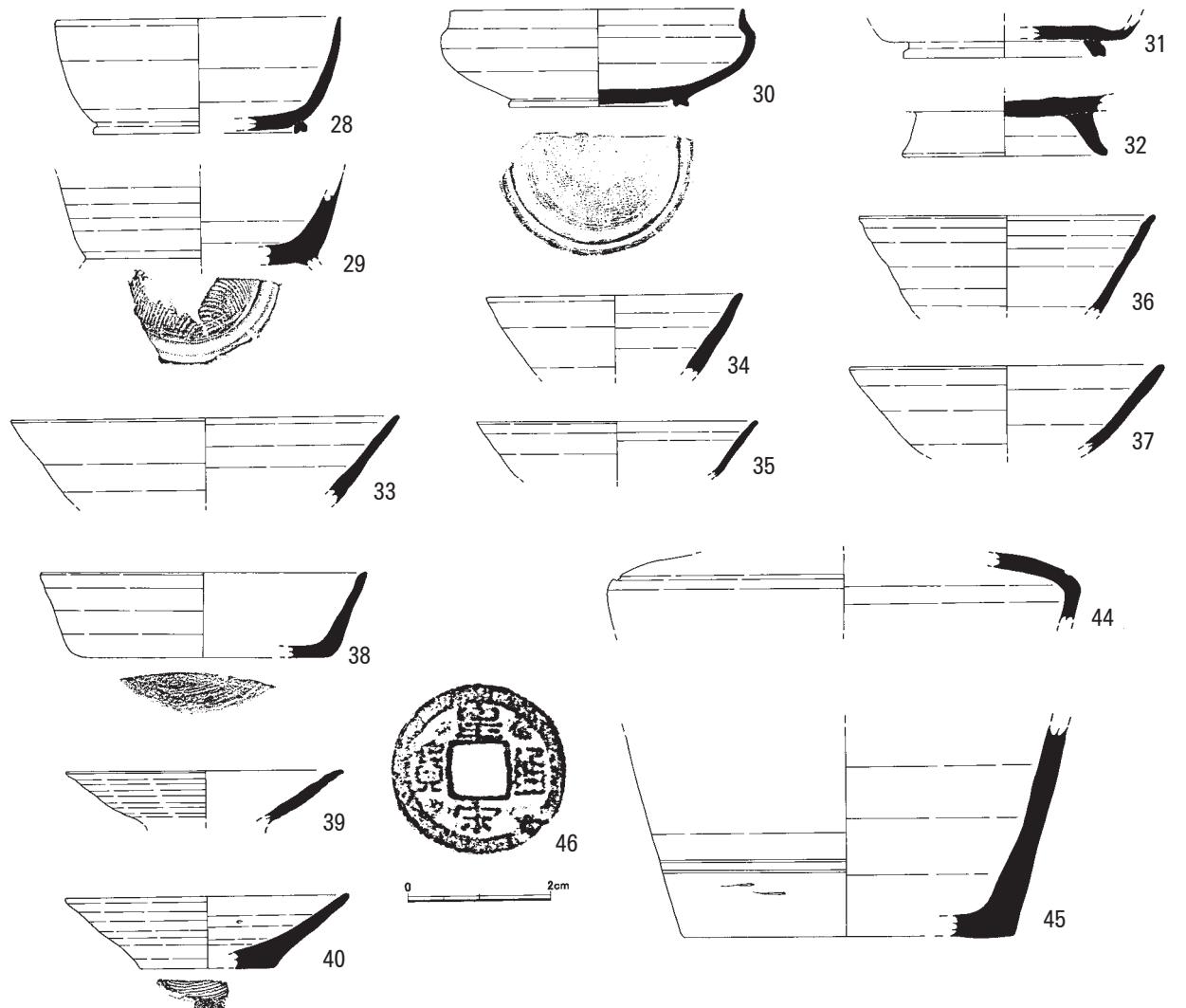
**流路の時期** 上層出土遺物のうち、接合する弥生土器は上層を形成する複数の流路痕跡のいずれの段階の資料か特定できないが、先に述べたようにSR04土器だまりの土器と比較して、若干ではあるが先行する要素を持っており、松本石見I-1～2様式とすることが可能である。これが流路上層の大まかな堆積時期（厳密には存続時期のうちのある一時点）を示す資料となろう。一方で、SR05の上層・下層の突帯文土器は破片資料で接合せず、かつ土器形式として幅のある資料（濱田突帯文I～III期）が混在している。両者の出土状況と時期幅の相違は、同じ流路出土資料とはいえそれぞれ異なる起源の資料群であることを窺わせる。結論的には上層弥生土器は流路が一時に堆積・SR05内で付け替わった洪水の時点近くに「廃棄」・流入した資料であり、突帯文系土器はその洪水によって某地点より運ばれた土器と考えると整合的に理解できる。すなわちSR05上層は松本石見I-1～2様式前半頃に埋没、SR04に移行していくと理解できる。上層を中心とする突帯文土器と遠賀川式土器の出土の理解については、第7章にて論じることとした。

#### (5) 遺構外からの出土遺物（第46・47図）

須恵器の多くが第4-1層（観察表では8層）出土である。1は2条突帯を持つ突帯文土器である。2は口縁部が逆くの字状に屈曲する浅鉢。3・4は弥生土器底部。5は土師器高坏である。6～11は須恵器蓋で6・7は輪状つまみ、10は中央の窪んだボタン状のつまみ、11は背が高く比較的径の大きい輪状つまみを持つ。6は松江市大井窯跡群出土資料に形態が類似する。11は久本奥窯跡の資料に形態的に似るが、つまみの形状は厚さ、取り付け具合など細部が異なるほか回転糸切り痕を残している。12～23は須恵器無高台の坏である。12は漆土器である。体部が直線的に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕を残す資料が中心である。23は底部ヘラきりの資料。24～32は須恵器の高台付坏である。直立気味の体部が目立つ（25・29・30）。また30は高台内外周を顕著にナデており、白坏・中祖遺跡で出土が知られる削り出し高台須恵器との関係が想起される。30は口縁端部を短頸壺のように屈曲・直立させる資料。底部ヘラ切りで仁摩町原田遺跡から類似の資料が出土する<sup>6</sup>。32はハの字の高い高台を持つ資料。高台の形態は益田市本片窯跡出土品に類似する<sup>7</sup>。33～37は底部の欠失した坏類。いずれも直連的に外傾する資料である。38～40は皿である。39・40は体部が強く外反する浅い皿で、中祖遺跡からさらに外反の進んだ皿が出土している。44・45は体部・肩部に沈線を巡らす須恵器壺である。D区でも類似の双耳壺が出土している。41・42は高坏、43は長頸壺の破片である。須恵器壺の中心となる直線的に外傾する壺は、半田浜西遺跡SD04で灰釉陶器片と出土しており、9世紀後半頃の年代が与えられる。46の皇宋通宝は渡来銭ではなく国内での模鋳銭である。『日本の貨幣』（東洋経済新報社1972年）所収のものとは「通」「寶」の字体が若干異なる。47は二枚平柄の露卯差歛下駄である。ヒノキ板目材を使用し芯側を上にする。上面に足のあたり痕跡、下面上下端には摩耗痕跡が残りよく使い込まれたことがわかる。左足用。



第46図 五丁遺跡 C区遺構外出土遺物実測図(1) (S=1/3)

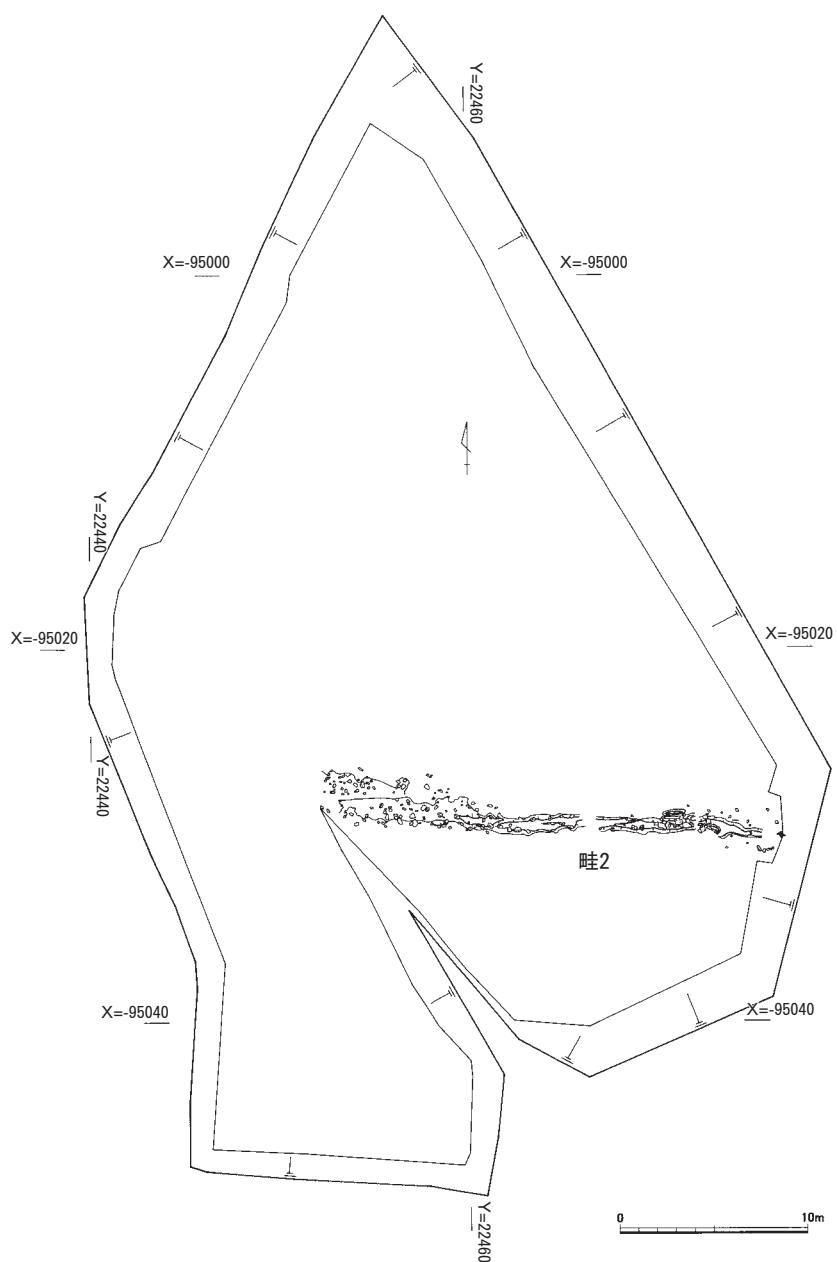


第47図 五丁遺跡 C区遺構外出土遺物実測図(2) (S=1/3, 46: S=1/1)

## 註

- \* 1 島根県教育委員会2007『中祖・ナメラ追遺跡』
- \* 2 藤尾慎一郎1999「中・四国地方の弥生I期突帯文系土器」『蔵小路西遺跡』島根県教育委員会。同2000「出雲平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告83』国立歴史民俗博物館。島根県教育委員会1990『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書III』ほか。
- \* 3 濱田竜彦1999「古市河原田遺跡出土の突帯文土器について」『古市遺跡群I 古市カハラケ田遺跡 古市河原田遺跡』鳥取県教育文化財団。
- \* 4 家根祥多1993「遠賀川式土器の成立をめぐって」『論苑考古学』天山社。
- \* 5 田畠直彦2003「長門北浦地域における弥生文化の成立」『立命館大学考古学論集III』立命館大学考古学論集刊行会
- \* 6 仁摩町教育委員会2001『原田遺跡外発掘調査報告書』。
- \* 7 益田市教育委員会1982『本片子遺跡・木原古墳』

## 第5節 D区の調査



第48図 五丁遺跡 D区遺構配置図(1) ( $S = 1/400$ )

五丁遺跡の発掘調査区最南端に位置する。A～C区の間に庵寺・於才迫遺跡からの谷の小河川・水田排水路が存在しているがこの排水路は圃場整備事業によって建設されたものであり、事業以前はC区西寄りの五丁基幹農道直下を流下していた。この排水路部分の調査は行われていないので状況は不明であるが、SD 04、SR04・05はとともにC・D区間で連続していると見られ、前述の水路建設の経緯とあわせ、少なくとも弥生時代前期までこの部分に現在のような流路はなかったと考えてよい。また、D区南辺の五丁基幹農道も、圃場整備以前の条里プランと同方向に設置されている。

調査区は南北60m、東西約40mの略長方形をしている。調査は西側工事用道路の取り付けを急ぐため、D 1区（第4図参照）のみ先行して8月2日～22日かけて角田徳幸調査員の協力を得て調査を実施

した。残るD 2・D 3区は9月7日～12月22日にかけて調査を行っている。

調査区の層序は（第49図参照）、現表土（1層）・水田床土（2層）の下に、圃場整備以前の水田耕作土（3層）が存在するところまでは各調査区と同様である。さらにその下に砂礫の混じる黒茶色粘砂質土層（3-2層）・黒茶色粘質土（3-3層）が堆積し、さらにその下に褐色の粘質土層（4層）が存在する。D区のこれらの土層とC区の土層はD区3-2層がC区3-2・3-3層に、D区3-3層がC区の3-4層におおむね対応すると考えられる。3-3層に対応するC区の土層からは奈良・平安時代の須恵器がまとまって出土しており、本調査区も須恵器の出土量はそれほど多くないものの同様の状況である。一方第64図に示した貿易陶磁器など中世遺物については確認できるものは3-2層が多く3-2層が中世遺物包含層と認識したが、一部3-3層出土の中世遺物

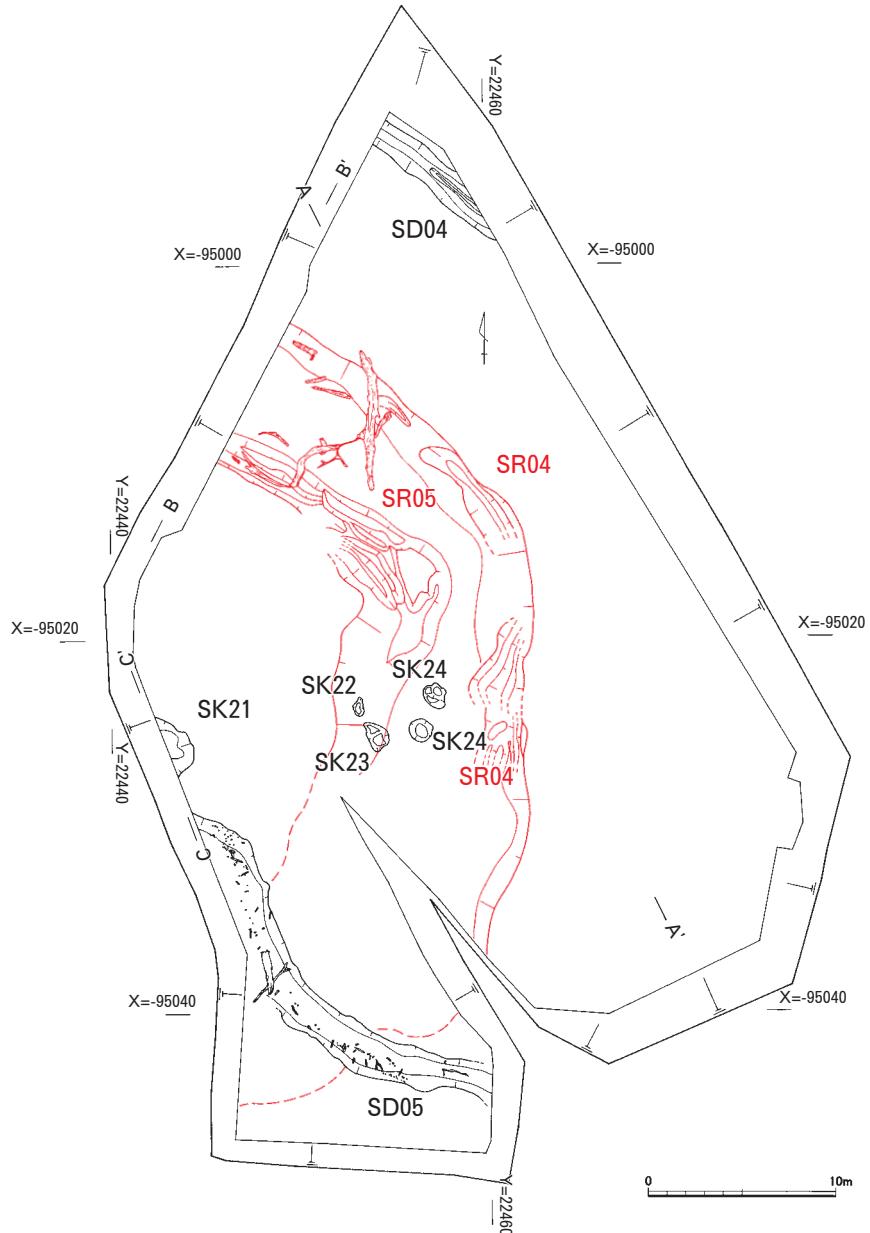
があり、3-3層まで中世遺物を含む包含層である可能性もある。4層の出土遺物はほぼ奈良・平安時代須恵器に限定できる。

第48図に示した遺構（畦2）は、この第4層上面に営まれたものであり、さらにこの第4層を除去した基盤層濃灰色粘質土（第60図DD'）上でSK21~25・SD05・SR04（第49図）を検出している（以上の関係は図版20-1・2参照）。調査は第3層上位までを重機による掘削、第3層中位4層上面より人力による掘削を行った。

### （1）畦畔遺構

#### 畦2（第52・53図）

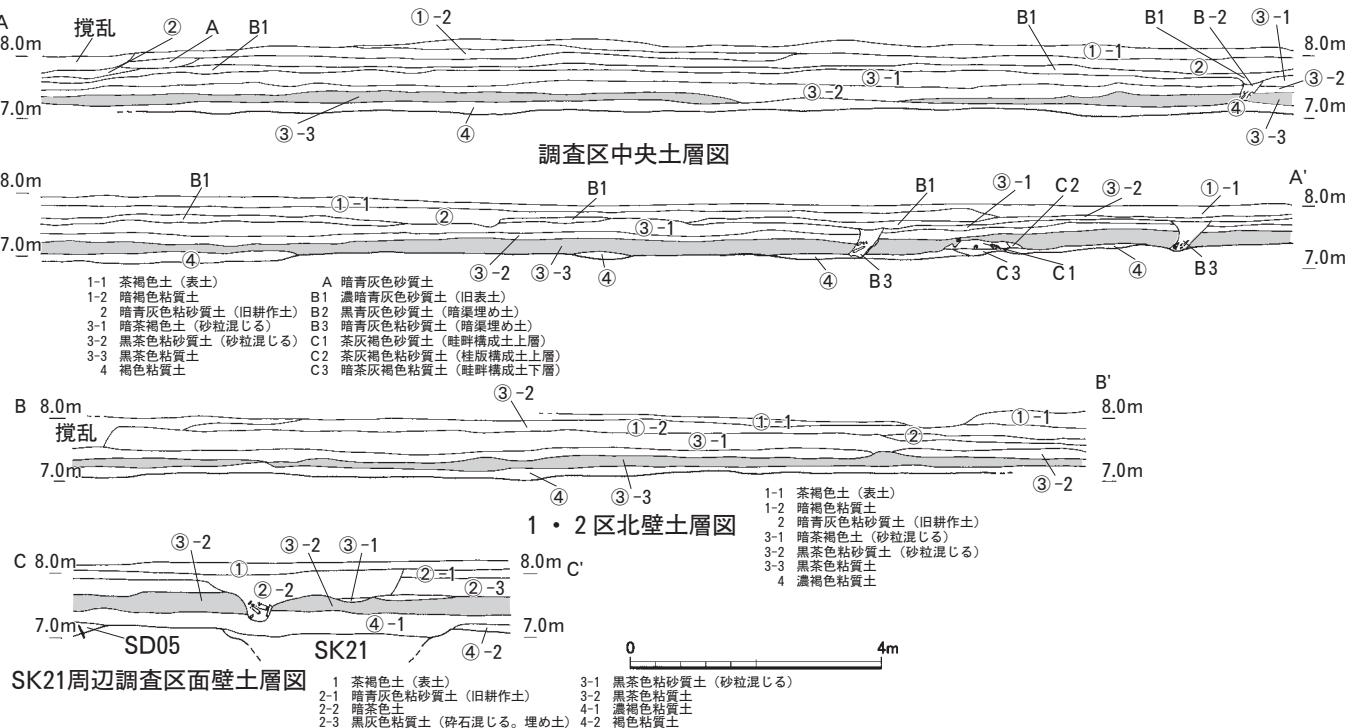
**位置と方向** A区で確認した畦畔から115~120m南で検出した東西方向の畦畔である。圃場整備以前の図面上（第131図参照）では、標高8.13mと8.09mの水田面の境界付近に当たり、畦



第49図 五丁遺跡 D区遺構配置図(2) (S = 1/400)

1とは異なり道にはなっていなかった。第50図のAA'断面下段のB3層とされる暗渠2条が、上述の圃場整備前の水田各面で使用されていた暗渠である。後述するように畦畔は砂質の畦本体構成土、石・杭などによって構成されているが、西に行くほど形態が乱れており、D1区では畦本体は確認できなかった。第50図CC'断面は畦2を西側に延長した部分の土層堆積状況を示すが畦本体はみられない。D2区でも西側では高まりを持った畦としては確認できず、石・杭が分布するにとどまる状況であった。方向は西端が幅広擔っているため正確に計測することができないが、概ねE-3.5°-S前後と考えられる。

**規模と形態** 圃場整備以前にも道路として畦が継承されていた畦1と異なり、まず圃場整備直前までの畦（第3層中に構築される）は検出できず、第3層下第4層上に構築されたの畦（畦1における下層の遺構）のみの検出にとどまった。第3層における近世～近代の畦は遺構として痕跡が残るような恒常的固定的な施設ではなかったのであろう。第4層上で検出された畦は、A区畦1と同様

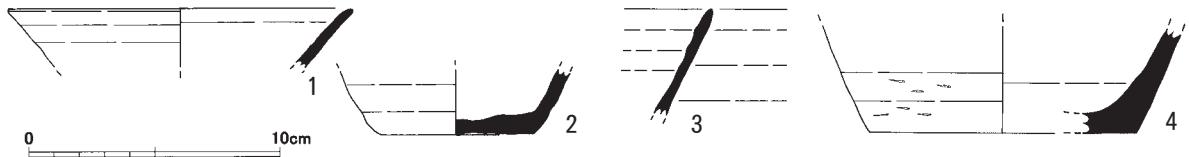


第50図 五丁遺跡 D区調査区土層図 (S=1/120)

の構造を持っている。すなわち、周囲と異なりやや砂質の畦本体上面に石が貼り付けられる、あるいは杭が打たれる構造である。幅は保存状況あるいは構築状況のよいBB'断面付近で約0.8m、高さは0.3mである。また、一部には畦に添って横木が置かれた部分もある（第52図東端付近）、これらの石・杭の前後関係は厳密には不明であるが、まず畦本体に石が半分埋め込まれているように存在していることからこの石と畦は同時に使用されたと考えられる。杭については、検出レベルが畦本体より上であること、畦西端付近で畦本体が崩れている部分でも杭が樹立されたままの部分があることから、おそらく畦の形態が失われた後に上面から打たれたものが含まれていると考えられる。また、東側第53図部分では畦中心よりやや北に並列して杭列が打たれているがこれは時期差を示しているある可能性がある。ここで両者の前後関係を考えると、畦がすでにあるところに杭を打つことは容易に可能であるが、既に打たれている杭を残して、ずらした位置に畦を作る可能性は低く（この場合杭は抜かれるであろう）、このあり方も杭が後出することを示唆する。

ここで、畦状遺構の存続時期について触れておく。第52図BB'断面をみると、畦構築後第3-2層が堆積、最終的には第3-1層（砂を含む粘質土）によって最終的に被覆されていることがわかる。東側D3区部部分の検出状況を見ると、第3-1層中で検出できた状況がわかる（写真5）。ただし第50図（畦2のちょうど中間地点の断面に相当）、第53図GG'断面では、第3-2層に全体が被覆されており、第3-2層中に完全に埋没していた部分もあると考えられる。このことは一見すると、畦の一部のみが第3-2層堆積後に頭を出していたように見受けられるが、先に述べた畦本体より後出する杭の存在を念頭に置けば、埋没部には杭が打たれるなどして畦全体が機能していたとみるべきであろう（なお、最初に述べたように、その後も遺構として残らない程度の構築物があった可能性を否定するものではない）。

この畦の構成土、石群などを取り払ったところ、下層に小さい連続するピット状の遺構を多数検



第51図 五丁遺跡 D区畦2付近出土遺物実測図 (S=1/3)

出した（第52・53図左側）一種の地業に相当し、畦の構築に当たり当時の地盤を少し掘り窪めてから畦の構築が行われたことを示している。なお基盤となる濃灰色粘質土は東側に行くほどやや高くなっている、この下層ピット状遺構も東側（第53図側）では確認できない。東側ではII'、JJ'断面に見えるように畦を構成する砂質土も消失しており、むしろ濃灰色粘質土を削り残すことで畦状の高まりが作り出されている。また西側を中心に基盤層上面の第4層中に木の枝・葉などが多数とはいえないものの混入していた。第4層の形成時に自然に入り込んだ可能性もあるが、特に流水があったとは考えられぬ粘質土中の出土であり、人為的に投入されたとも考えられる。

なお、構造全体をA区畦1と比較すると、畦1が実質的に畦2条とその間に挟まれる溝状遺構からなるのに対し、畦2は文字通りの畦1条のみの検出となった。これは、畦2の位置が仁摩平野の条里プランの南限に位置する（これより南に水田がない、ということを意味するわけではない）ことによるものと考えられる（第7章参照）。

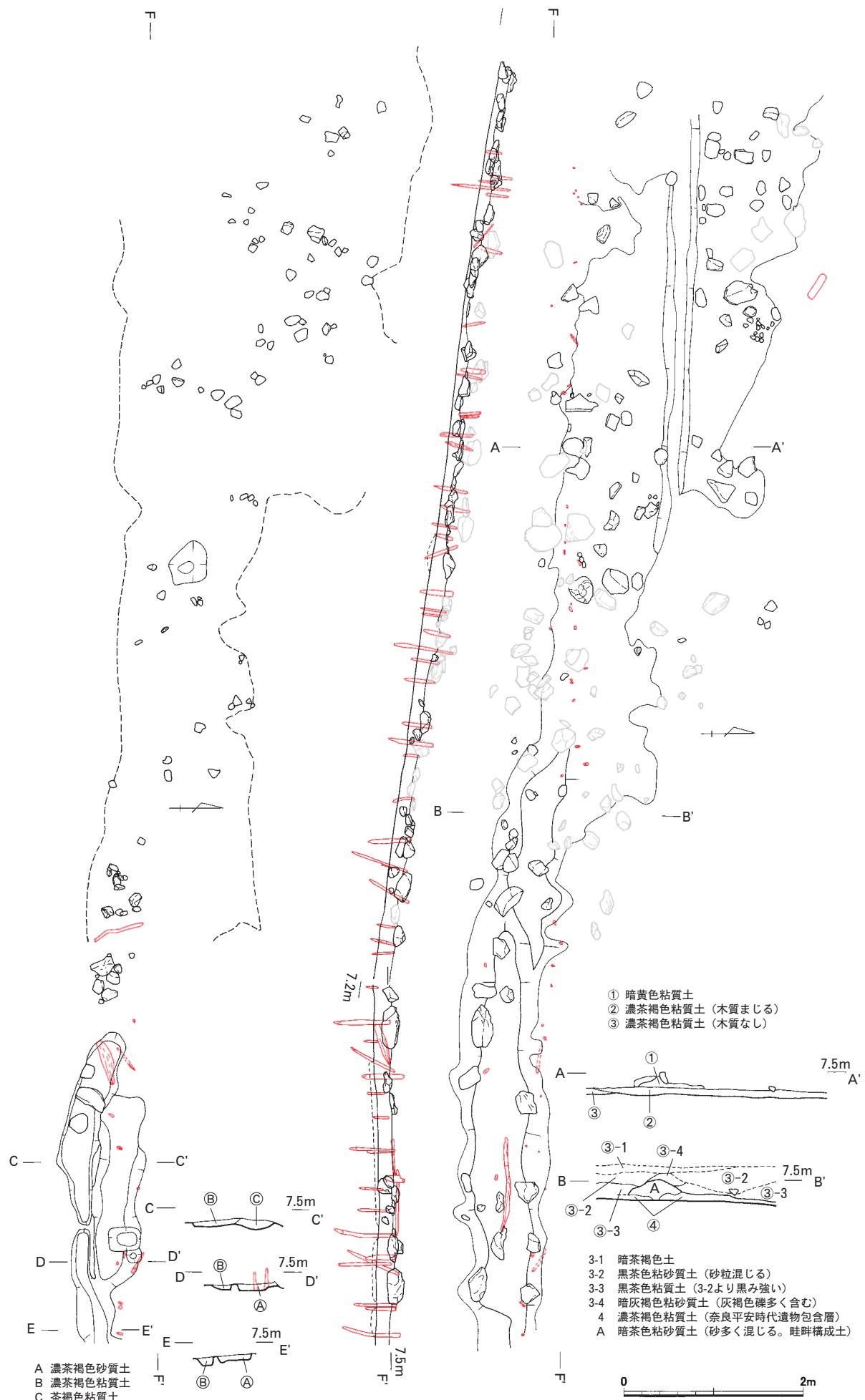
**畦2付近出土遺物（第51図）** 畦構成土からの出土土器はないが、畦付近において畦の構築された基盤となる第4層から以下の須恵器が出土している。1～3は須恵器壊である。いずれも直線的に立ち上がり外反する資料である。2は底部回転糸切り。4は須恵器壺片である。底部近くの外周をヘラケズリする。これらの資料は特に壊の形態が半田浜西遺跡SD04出土資料と類似、色調は淡青灰色であることから、9世紀代に位置づけられよう。

**遺構の性格と時期** 畦の位置は圃場整備以前の条里プラン下から検出された畦1からほぼ1町強（詳細は第7章参照）南に当たること、構造、方向が類似することから条里プランの1町毎の畦畔と考えられる。その時期については、畦構成土からの出土遺物はないが構築時の基盤層第4層の出土遺物が9世紀代の須恵器に限られている点をみれば、構築は9世紀以降と考えるのが妥当であろう。一方、その下限については、畦を最初に被覆している黒茶色粘質土（第52図BB'断面第3～3層=D区土層図3～3層）の形成時期となる。D区の土層堆積状況で言及したように、このD区3～3層に相当するC区の土層からは4層出土遺物と大差のない年代観の須恵器がまとまって出土している。また、D区遺構外出土遺物のうち須恵器はすべて第3～3層および第4層からの出土である。一方で、後出する遺物としては第64図17・18・28が3～3層出土と考えられる。後にあげた資料が混入品でなく、土層形成時点の資料であるとすれば、第3～3層の形成は遅く見積もると室町時代後半に降りる可能性もある。畦形成時期は9世紀～15世紀と幅を持たせて考えておく必要があるが、蓋然性が高いのは9世紀代である。

一方、遺構として検出できる構造を持った畦の最終的



写真4 畦2と3～1層(右側砂まじりの部分)



第52図 五丁遺跡 D区畦2実測図・下層実測図(1) (S=1/60)

な埋没時期は第3-1層頃と考えられ、15~16世紀頃とみられる。

## (2) 土坑（第54図）

土坑はいずれも第4層除去後、基盤層である濃灰色粘質土状に掘削されていた。いずれも出土遺物はない。

### SK21（第54図）

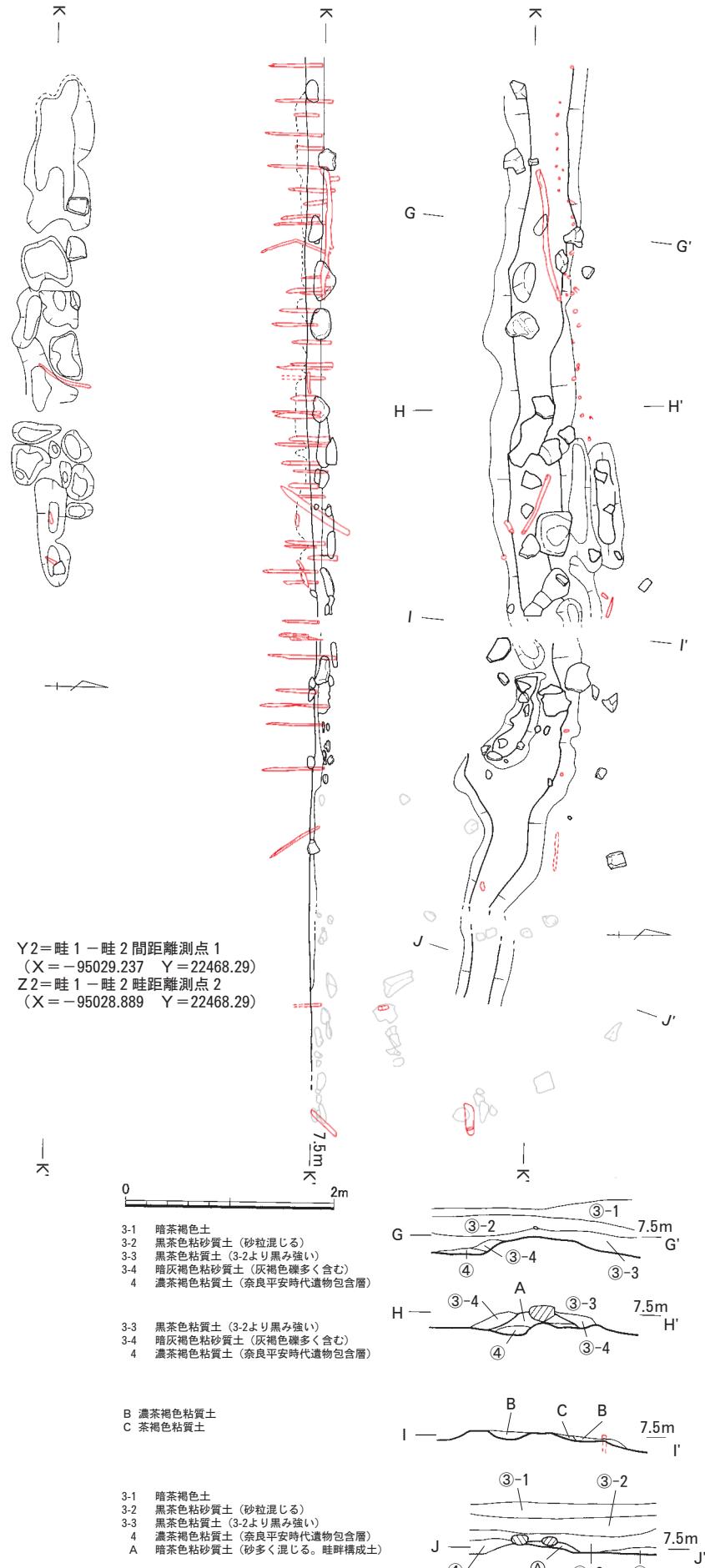
**規模と形態** D1区西寄り壁際で半分程度を検出した。長軸3.5m、深さ0.3mで黒茶色土が堆積していた。出土遺物はなく性格は不明である。

### SK22（第54図）

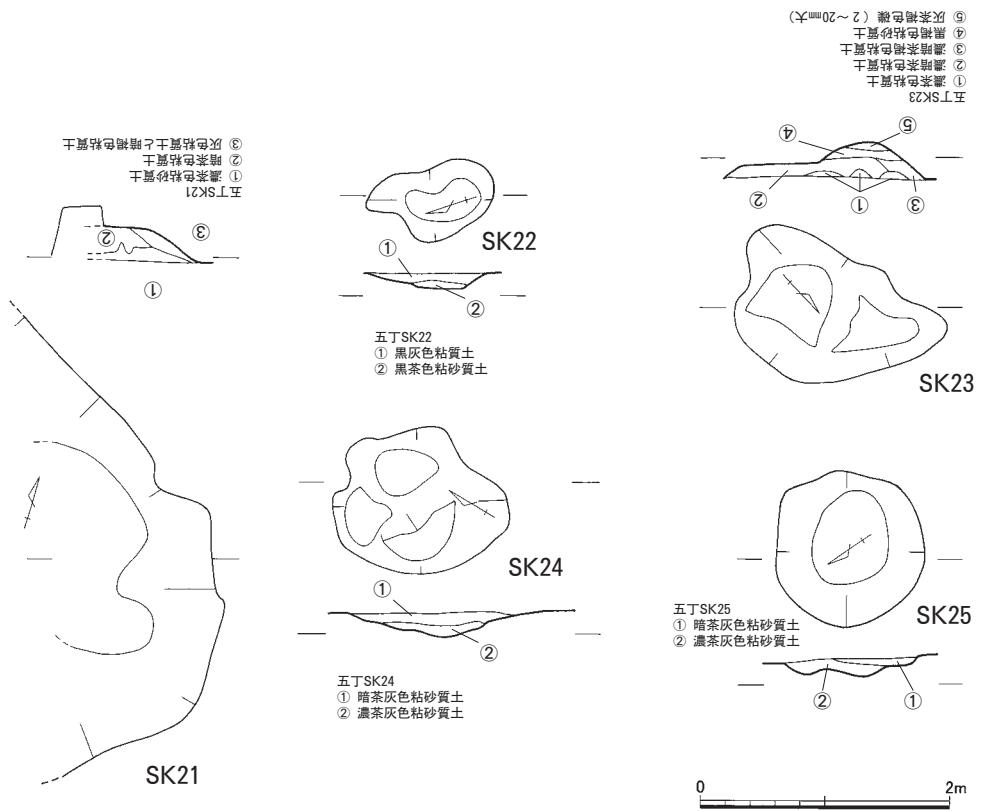
**規模と形態** D2区中央畦2の北側で検出した。ただし畦2とは検出土層が異なり、共存しない。後掲SK23~24を含め、4つの土坑が台形状に並ぶが、堀方は浅いレンズ状を呈し柱穴とは考えづらい。長軸1.1m・短軸0.6m・深さ0.15mの規模を持ち暗茶色系の粘砂質土が堆積していた。出土遺物はなく性格は不明である。

### SK23（第54図）

**規模と形態** D2区中央畦2の北側で検出した。SK22同様断面は浅いレンズ状を呈し柱穴とは考えづらい。暗灰色色系の粘砂質土が堆積していた。規模は長軸1.4m・短軸1.2m・深さ0.2mである。出土遺物はなく性



第53図 五丁遺跡 D区畦2実測図・下層実測図(2) (S=1/60)



第54図 五丁遺跡 D区SK21～25実測図 (S = 1/60)

格は不明である。

#### SK24（第54図）

**規模と形態** D 2 区中央畦 2 の北側で検出した。堀方は浅いレンズ状を呈し柱穴とは考えづらい。内部は 2 段堀のような構造を呈する。長軸 1.6m・短軸 1.2m・深さ 0.3m の規模を持ち暗茶褐色系の粘質土が堆積していた。出土遺物はなく性格は不明である。

#### SK25（第54図）

**規模と形態** D 2 区中央畦 2 の北側で検出した略円形の土坑である。堀方は浅いレンズ状を呈し柱穴とは考えづらい。径約 1.2m・深さ 0.15m の規模を持ち、暗茶灰色の粘砂質土が堆積していた。出土遺物はなく性格は不明である。

### (3) 溝状遺構

#### SD04（第55図）

**規模と形態** D 区東端で検出した。排水溝を挟んで C 区 SD04 に連続する遺構と考えられる。D 区では検出レベルが高まり、一方で底面のレベルは C 区より低くなっているため検出面での上幅は 1.6m、深さも 0.5m 程度と深さを増している。堆積物は C 区同様灰褐色の砂質土・砂である。

**出土遺物（第57図）** 1 は弥生土器甕である。口縁端部をやや下に拡張、内外面にハケ調整を施し頸部の段はない。SR04・05出土弥生土器同様石見松本 I - 1 ~ 2 様式の資料である。

**時期と性格** 溝の時期については出土遺物が示すとおり、弥生時代前期前半と考えられる。溝の構造は南に行くほど検出面から深く掘り下げる構造となっている。このため、C 区 GG' 断面の南（第 27 図）、そして D 区で 2 度階段状に底面レベルを下げている。これは高い方向に向かって意図的に底面レベルを維持して掘って下げたために生じたものであろう。このように想定すると溝は何ら

かの通水を目的としたと考えざるを得ない。堆積土が砂であることも埋没時に通水していたことを示す。現状では自然地形の高い南側端で底面レベルが低い（約6.6m）が、北端側も下がっている。地形の高い南側に導水するというよりも、南側調査区外のSR04・05流路面から取水し底部のレベルをほぼ水平に作り、北側の流路水面より高いところに導水した施設、すなわち用水路ではないかと想定される。

#### SD05（第56図）

**規模と形態** 調査区西寄りD1区で第4層除去後基盤層上で検出した。SR04・05埋没後、埋土を切って堀込まれている。検出状況で上幅1.8～2.4m、下幅0.8～1.3m、深さ0.5m程度の断面逆台形状を呈する溝で、堆積土は砂と粘質土が互層状をなす。底部のレベルは南側で6.8m、北側端で6.7m程度であり、北に向かって流れていると考えられる。西岸に杭がたれているが、DD'断面ではこの杭を東側に打ち、その西側に横板（第57図-5）を配した部分がある。横板は杭ごと東側に倒れており、その部分にも砂礫が堆積しているが（DD'断面3・4層）、本来は西側を護岸した施設であったとみられる。また南端付近には溝に直行する方向に杭が密集する部分があり（AA'断面）いわゆるしがらみ状遺構である。

**出土遺物（第57図-2～5）** 2・3は平底の弥生土器甕底部である。外面は縦方向のミガキ、内面はミガキ・ハケで調整する。器壁は薄い。4は甕である。逆L字状に口縁が外側に屈曲、端部をやや上側に肥厚させる。胴部上半内外面ハケ調整、口縁部ナデである。2～4はいずれも松本石見III-1様式に該当する。5は長さ239cm、幅57cmをはかるスギの板材である。板としての加工以外に加工痕跡はない。

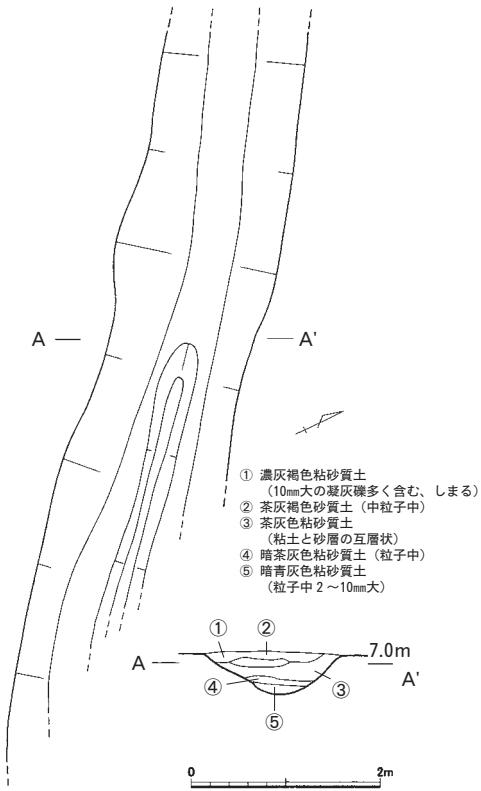
**時期と性格** 溝が埋没した時期は出土物から弥生時代中期中葉と考えられる。掘削された時期は不明であるが、SR04・05が完全埋没した後になり、最大限遡って前期中葉となる。今回の調査で唯一の弥生時代中期遺構である。砂質の埋土・護岸・しがらみ状遺構の存在からみて水路として機能したことは間違いない。

#### (4) 自然流路

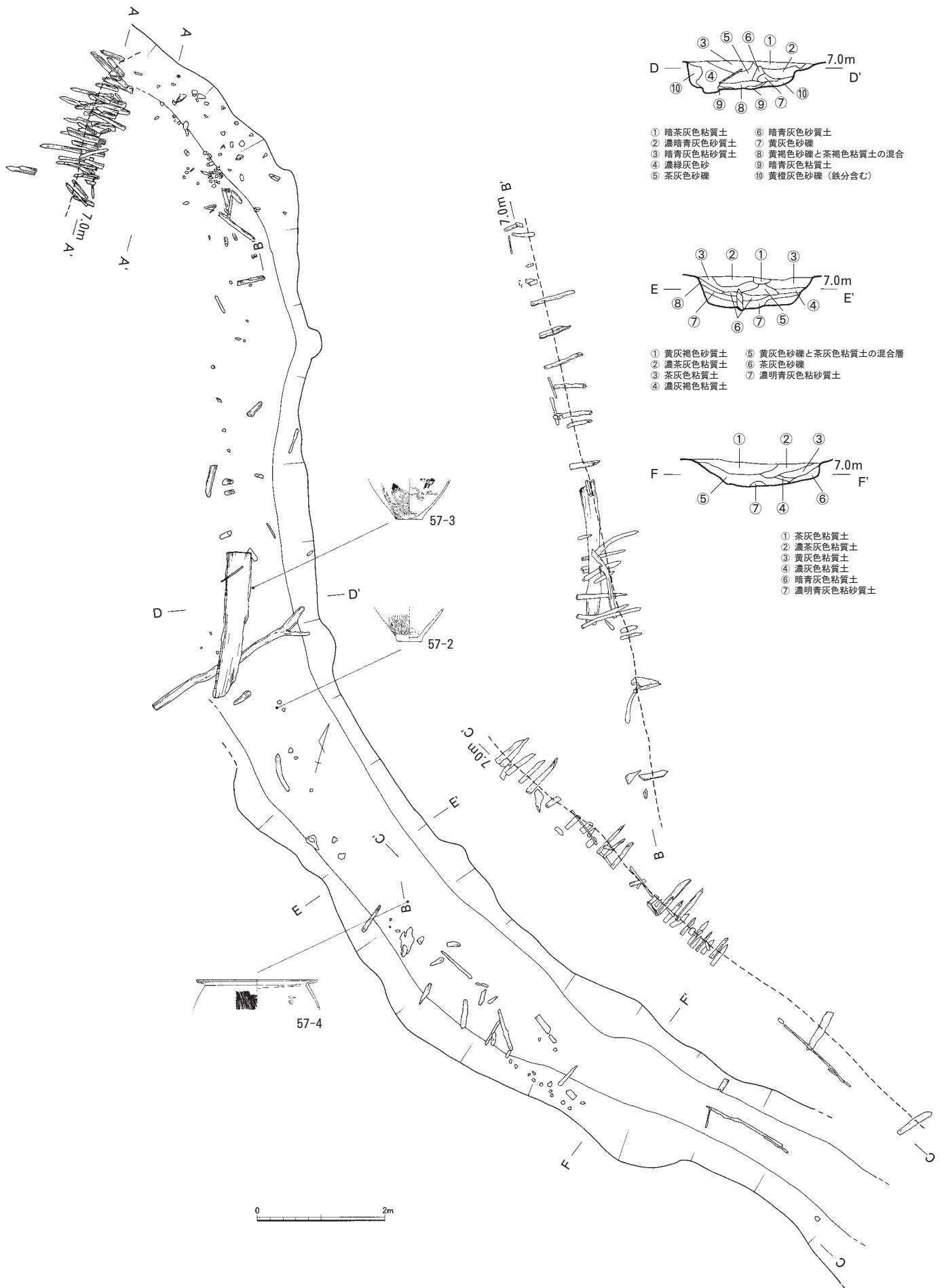
##### SR04（第58図）

**位置と方向** C区SR04に続く自然流路である。調査区中央を南から北に向かい、東に屈曲しながら流下していたと考えられる。D1区部分は未調査で、上面でのみ検出している（図版19参照）。後述するSR05との関係でいえば、SR05の一番東端に位置する流路痕跡である。

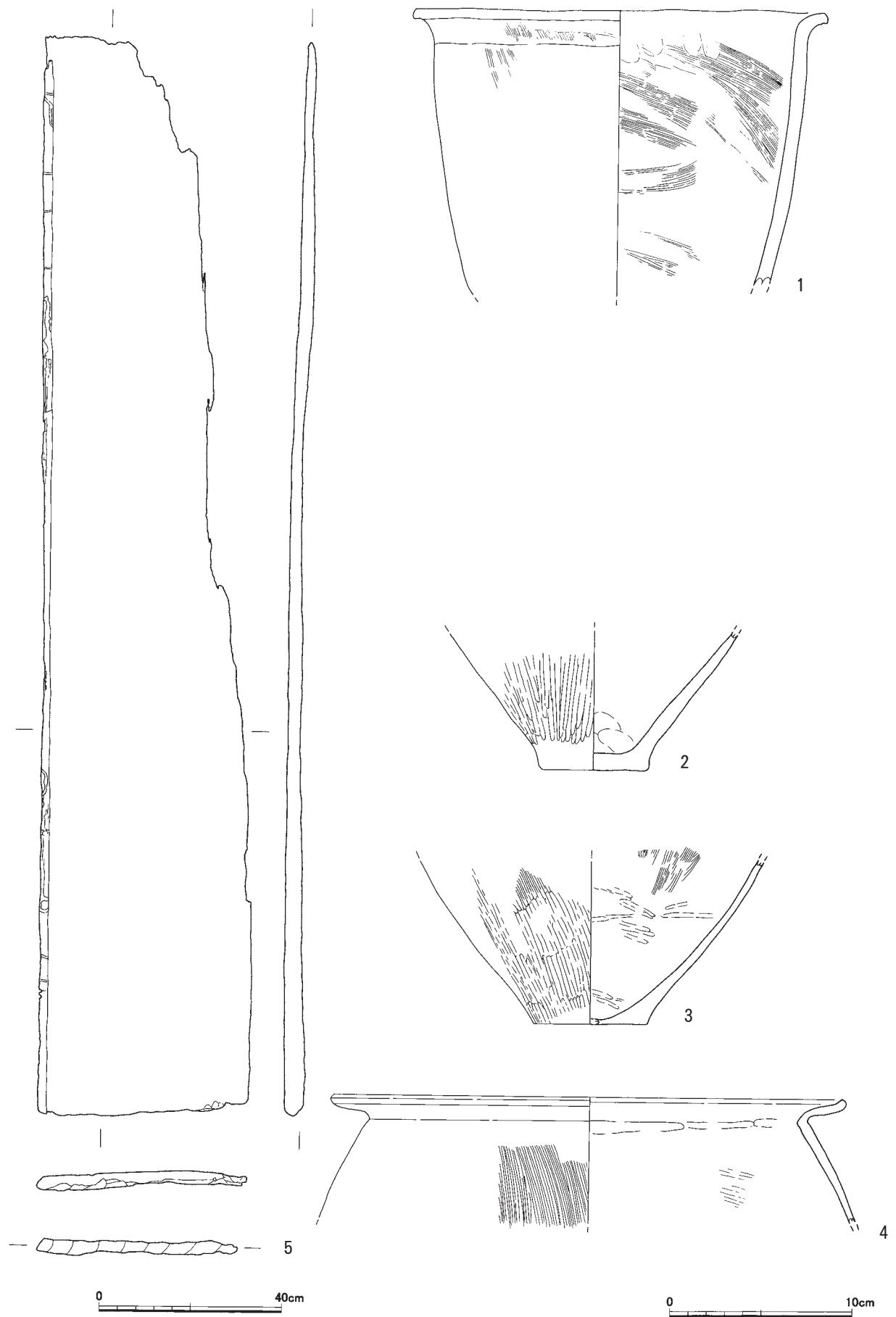
**規模と形態** 調査区の部分でしか検出できず全体の流れを平面的に確認できなかった。また、検出面での上幅は2.4～3.0m程度となっているが、第60図AA'等を見るとC区同様最後は幅広の砂質の堆積（同図2～7層）を持つ流路があったとみられ、この幅広の流路も図に反映されていない。記



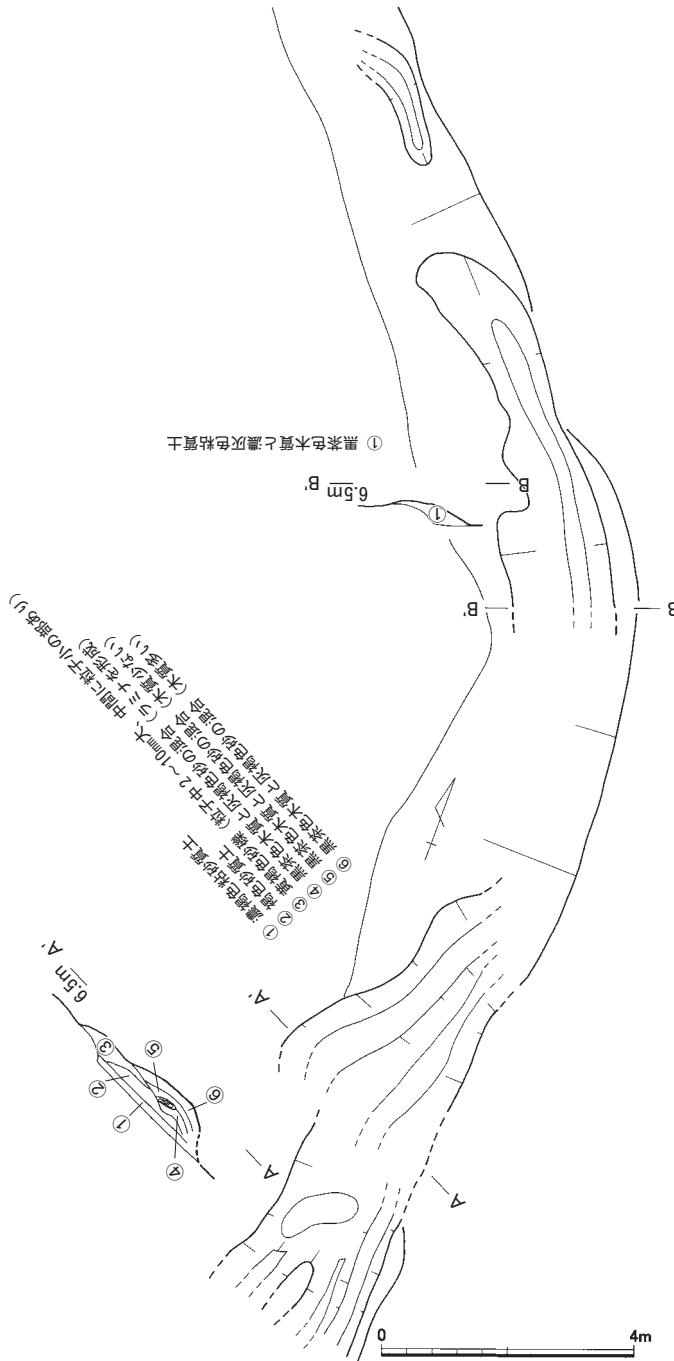
第55図 五丁遺跡 D区SD04実測図  
(S=1/80)



第56図 五丁遺跡 D区SD05実測図 ( $S=1/80$ , 遺物  $S=1/12$ )



第57図 五丁遺跡 D区SD04・05出土遺物実測図 (S=1/3, 5: S=1/12)



第58図 五丁遺跡 D区SD04実測図 ( $S = 1/120$ )

6 m前後で、底面の標高は5.8m（北側）～6.0m（南側）である。約40mにわたって検出しており、SR04はSR05の東岸に位置してほぼ同じ位置になる。ただし、C区SR05でも述べたように、西岸は全体に砂質土で構成されており、CC'、DD'ではこれが同一の流路堆積物か、それとも基盤層として流路の浸食・堆積以前に形成された層であるのか判断がつかない状況になっている。これに対し東岸は一貫して灰色系の粘質土で明瞭に肩を検出できた。

**堆積状況** C区同様、逆台形状の流路の断面が、下からレンズ状に堆積していくことが窺え、特に下層ほどその状況がよく見て取れる。C区ではSR04の下に左右に蛇行する流路痕跡が確認でき、その部分を上層と呼称していたが、SR04の検出が不十分であったこともあり、SR04とSR05上層

してお詫びしたい。

**堆積状況** 第58図では確認できないが、第60図の土層断面を確認するとC区のSR04同様、西側ほど古く砂礫を中心とする流路痕跡があり、それが東側に移動しながら徐々に川底をあげていったことが窺える。それに伴い堆積物も次第に砂・シルト化し、木質を含むようになったと考えられる。最後に浅く幅広の流路となり、砂が堆積する。

**出土遺物** C区と異なり、SR04部分には遺物は認められなかった。これは上述のようなSR04検出の不十分さによる可能性が高く、後述するSR05の上層に混在していると考えられる。

**時期と性格** 出土遺物はないが、C区SR04に連続する流路であることは間違いないなく、同様に最東岸の堆積時期が弥生時代前期前半頃と推定される。その後、弥生時代の中期中葉（SD05）以前に完全に埋没したと考えられる。性格は庵寺・於才迫遺跡方向にある谷の小河川流路である。

#### SR05（第60・61図）

**位置と方向** C区SR05の上流部分に当たる。調査区中央を南から北に向かい、東に屈曲しながら流下していた流路である。D1区部分は未調査で、上面でのみ検出している（図版19参照）。

**規模と形態** 上幅9m前後、下幅2～

の分離ができなかった。以下AA'断面39層以上、BB'断面23層以上、CC'断面28層以上、DD'断面の22層以上の、流路が西から東岸内で移動した痕跡のある部分を上層とし、上記の土層より下でSR05内全体でレンズ状に堆積している部分を下層とする。繰り返すが、上層についてはSR04の堆積層との分別ができなかった。

#### SR05上層出土遺物（第61図）

先述のように、出土層位の認識の不備からC区のSR04・05に対応すると

しか言及できない遺物である。1～7は弥生土器である。1は口縁端部が若干内湾する鉢で、口縁部外面にヘラ書きによる沈線2条を施す。内外面にはあまり丁寧でないミガキが施される。2・3は甕であり、2はハケ工具を当てることによって頸部に若干の段を作り出し、3は頸部無段のもので口縁端部を若干下に引き延ばす。4～6は底部である。7は完形品の壺である。口縁部は広く外反し口縁頸部界には段を有する。頸胴部界にはヘラ書きの沈線3条があり、この部分には赤斑状を呈する部分があるが胎土中に赤褐色の砂粒があるため、彩色かどうか判断が難しい。胴部上位には逆転有軸羽状文が（写真5）、羽状部・上下界線の順に施され（軸は2条）、下位は丁寧なヘラミガキが施される。プロポーションは下ぶくれである。

#### SR05下層出土遺物（第61図－8・62図）

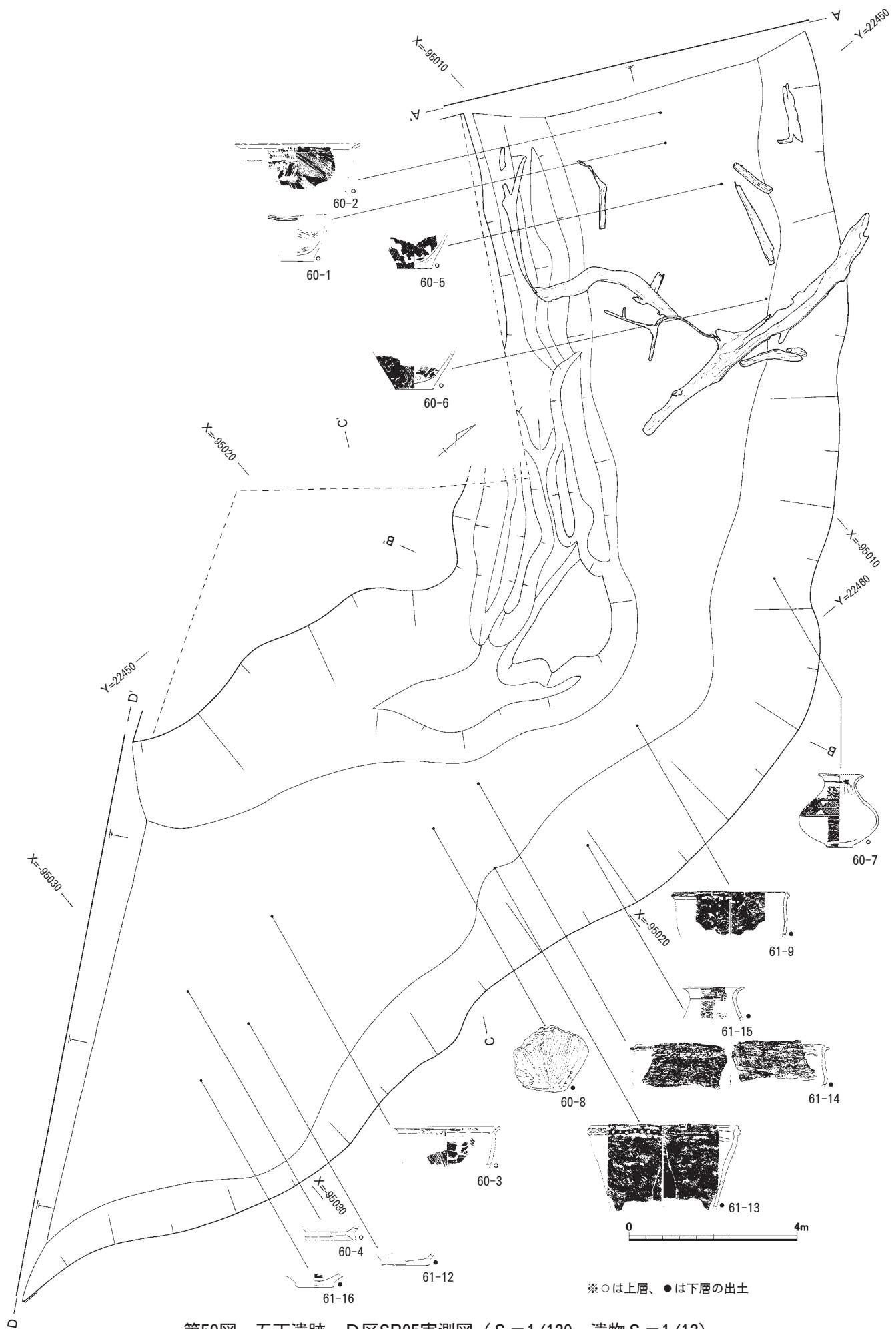
第61図の8は大江高山周辺で見られるデイサイト製の砥石である。A面・B面に数条の溝状使用痕が残る。一見古墳時代の玉作に使用される筋砥石状であるが、施溝された部分は断面薬研状を呈しており、断面半円形=丸いものを研ぎ出したという状況と若干異なる。またB面側には幅広の使用痕があるが、鉄器の砥石のように直線的・平滑な使用痕ではなく、ナメクジが這ったような、磨石的な痕跡となっている。類似の資料が古屋敷遺跡弥生時代包含層・川向遺跡から出土している<sup>\*1</sup>。

9・10は突帯文土器深鉢である。口縁端部下に刻目突帯を巡らす。11は口縁端部を若干外傾させる浅鉢である。口縁端部は玉縁状を呈するというより外反気味であり、沢田式の深鉢に類似する。12は縄文土器底部である。13・14は大型の深鉢である。13は口縁端部を面取りし、その下に指により背紋された突帯が巡る。14は上方に引き上げた口縁部に高さのある突帯が巡る資料。15～17は弥生土器である。15は小型の壺である。口縁端部は貼り付けによる肥厚を段にしている。内外面にミガキを施す。16は壺底部。17は頸部無段の甕である。如意状口縁が十分に発達していない。

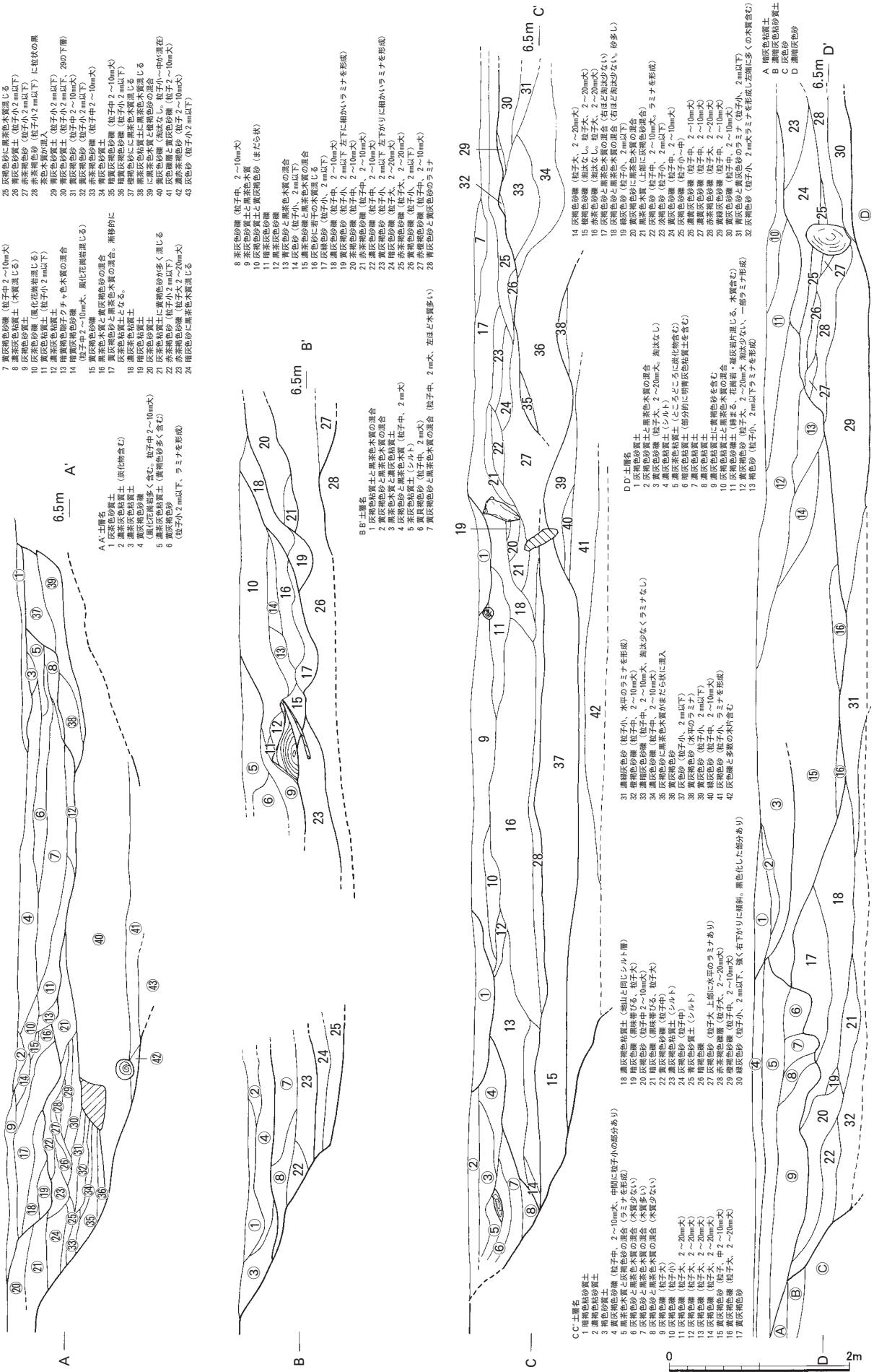
**時期と性格** ここで上層として扱った資料は、松本石見I-1～2様式に相当する。7はI-2様式の中でも後出する資料であろう。一方下層の資料は濱田突帯文Ⅲ期を中心とするものであるが、若干弥生土器が出土している。これらについては主に出土地点のレベルから下層と判断したが、実際には上層の流路が局所的に深くなった地点のものないし、C区SR05上下層いずれともと異なる時点の流路の可能性もある。SR04・05の性格についてはC区SR04・05を参照。



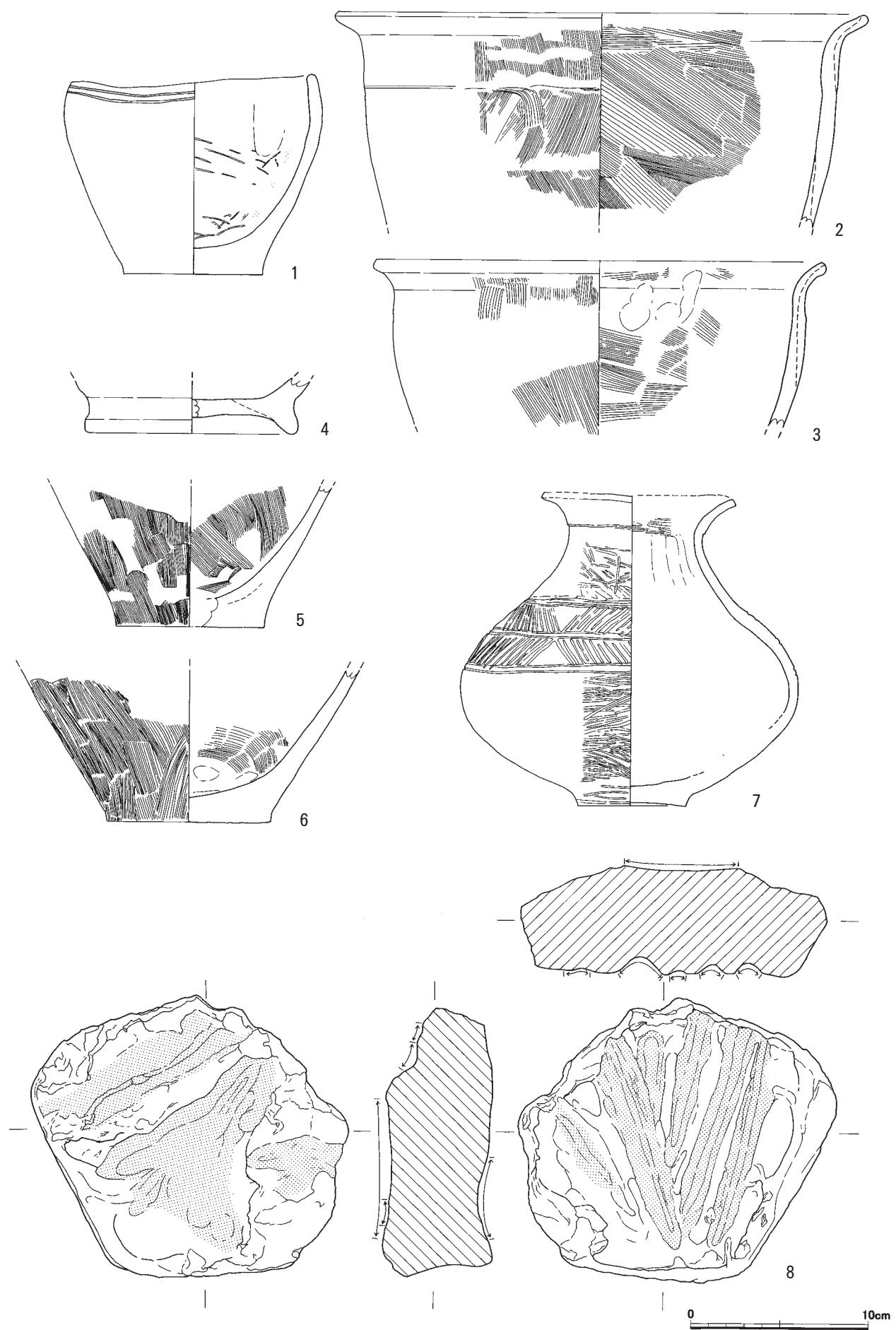
写真5 61-7壺の有軸羽状文



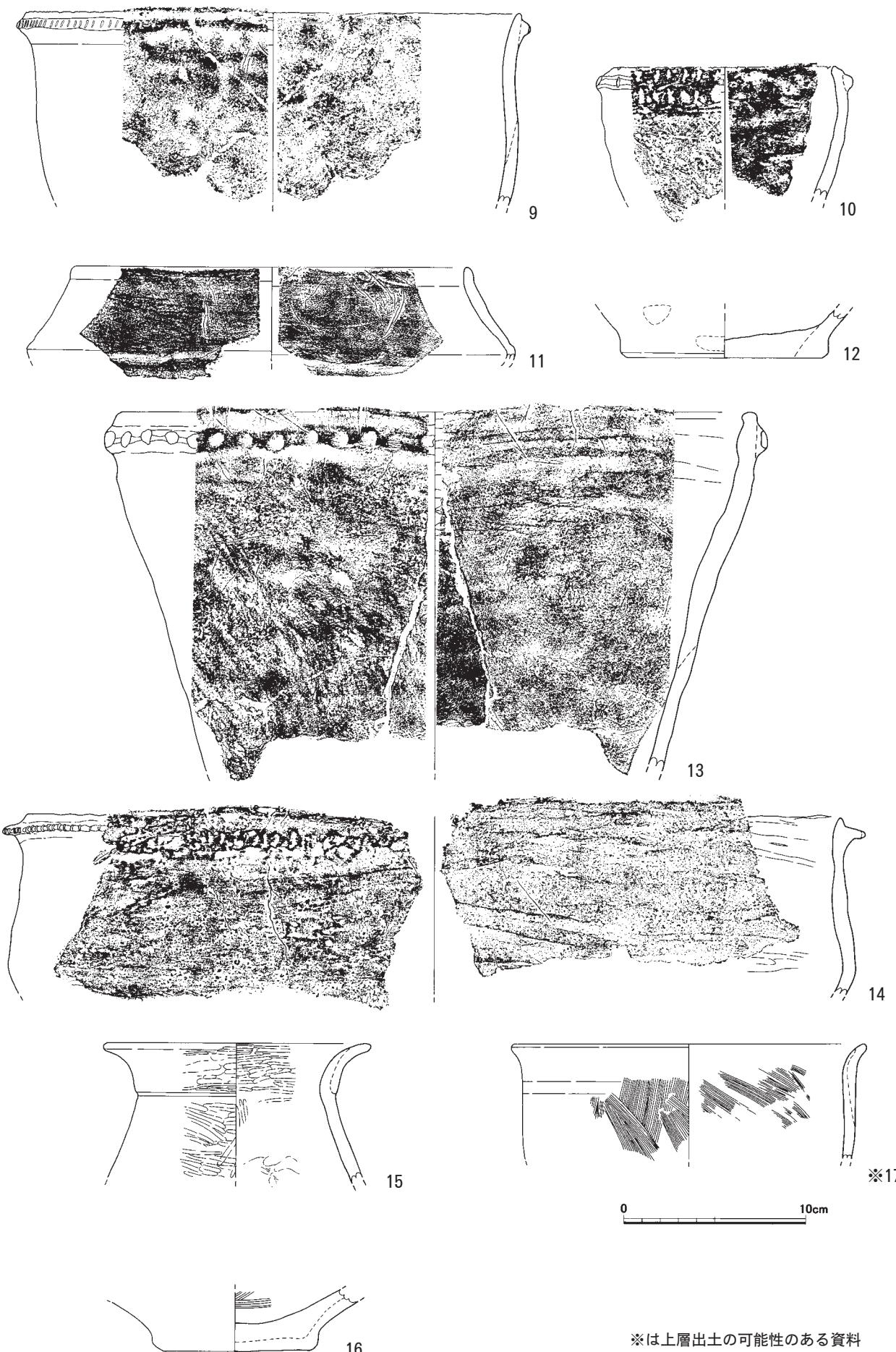
第59図 五丁遺跡 D区SR05実測図 ( $S = 1/120$ , 遺物  $S = 1/12$ )



第60図 五丁遺跡 D区SR05土層図 (S = 1/60)



第61図 五丁遺跡 D区SD05上層・下層出土遺物実測図 ( $S = 1/3$ )



第62図 五丁遺跡 D区SR05下層出土遺物実測図 (S = 1/3)

\*は上層出土の可能性のある資料

## (5) 遺構外出土遺物 (第63・64図)

須恵器が第3-3・4層、陶磁器類が第3-2層出土、17・18の土師器が3-3層から出土する。

1は須恵器蓋である。天井部に回転糸切り痕・輪状つまみがとれた痕跡を残す。2~9は無高台の坏である直立し外反するものと(3・4)、やや丸みを帯びるものがある(5・7)。以上はナメラ迫遺跡でも出土し、同遺跡II類・III類の須恵器と併存すると考えられている<sup>\*2</sup>。暦年台の付与は困難を伴うが、出雲部では9世紀前半頃と考えられている資料である<sup>\*3</sup>。

10・11は高台付坏で、10は立ち上がりが急で底部回転ヘラ切りである。11は削り出し高台状の底部を持つ資料で、白坏遺跡などで出土するものと同様であり10世紀初頭の年代が与えられる<sup>\*4</sup>。12は丸みを帯びた坏口縁部である。

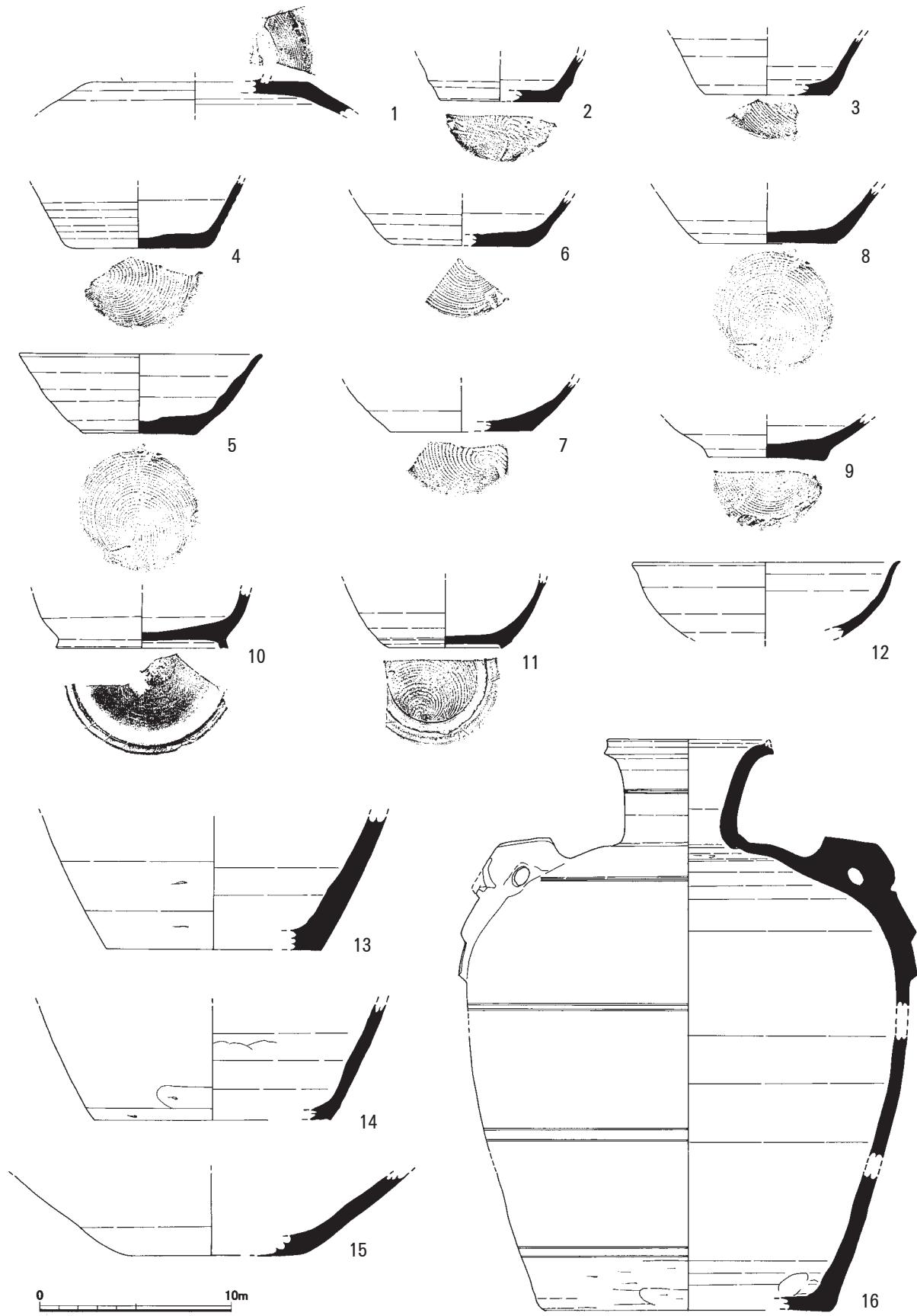
13・14は壺底部で、底部に近い体部外周をヘラケズリする。15は小さな底部に広く外反する器形で、敲きなどみられず鉢状の資料であろうか。16は双耳壺である。接合しない3破片からなるが、底径などが合致し同一個体と判断した。2条ずつの圈線を頸部から体部にかけて5カ所施条している。底部に近い体部外周にはケズリを施す。11はいわゆる足高高台のある土師器坏である。12は底径4.2cm程度に絞り込まれた坏である。11・12は第3-3層出土の資料となる。11は太く開いた高台の形態から、12は清石遺跡SK02で柱状高台と供伴している土師器坏皿類に類似することから、柱状高台土師器の年代である概ね12世紀前後の資料であろう<sup>\*5</sup>。19は肥前陶器の丸型碗である。高台は底面無釉、高台内面立ち上がりがやや直線的で、器形は呉器手碗に似るが先行するもので唐津系陶器のII-1~III期、17世紀代の資料であろう。20は体部中間で屈曲、口縁は若干玉縁状を呈し高台を有する白磁皿である。胎土はやや荒さが目立つ。大宰府V類の皿で11世紀後半~12世紀前半の資料と考えられる<sup>\*6</sup>。21は白磁皿Ⅷ2類。22は瀬戸美濃の天目碗片である。23は底部外面無釉・内面鉄釉の陶器で、上部が開口する火入れ・香炉である。在地あるいはいわゆる須佐唐津系の資料か<sup>\*9</sup>。24は長さ7.3cmをはかる鎌である。25は保存状況不良であるが刀子片であろうか。26・27は滓碗型滓である。26は重量624gで、鉄分を置く含み磁性を有している。27は165gである。28・29は漆器である。低い高台を持ち、28は肉眼で黒色に見える漆が塗布されている(樹種ケヤキ属)。29は内面に赤色の矢羽根状文様が施されている(樹種シイ属)。30は木簡状木製品で第3-3層から出土した。長さ9.5cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmで下端を尖らせる木簡学会051型式が半分に割れたものである<sup>\*7</sup>。両平面にケズリ調整が行われているが墨書は認められない。樹種スギ。31は木簡である。第3-3層から2片に分かれて出土、接合した。上端はキリオリのち左方向からの側面ケズリ<sup>\*8</sup>、文字のあるオモテ面のみケズリ調整を施す。釈文は「□□□□」で判読できない。樹種ヒノキである。

第64図-31 木簡1 「□□□□

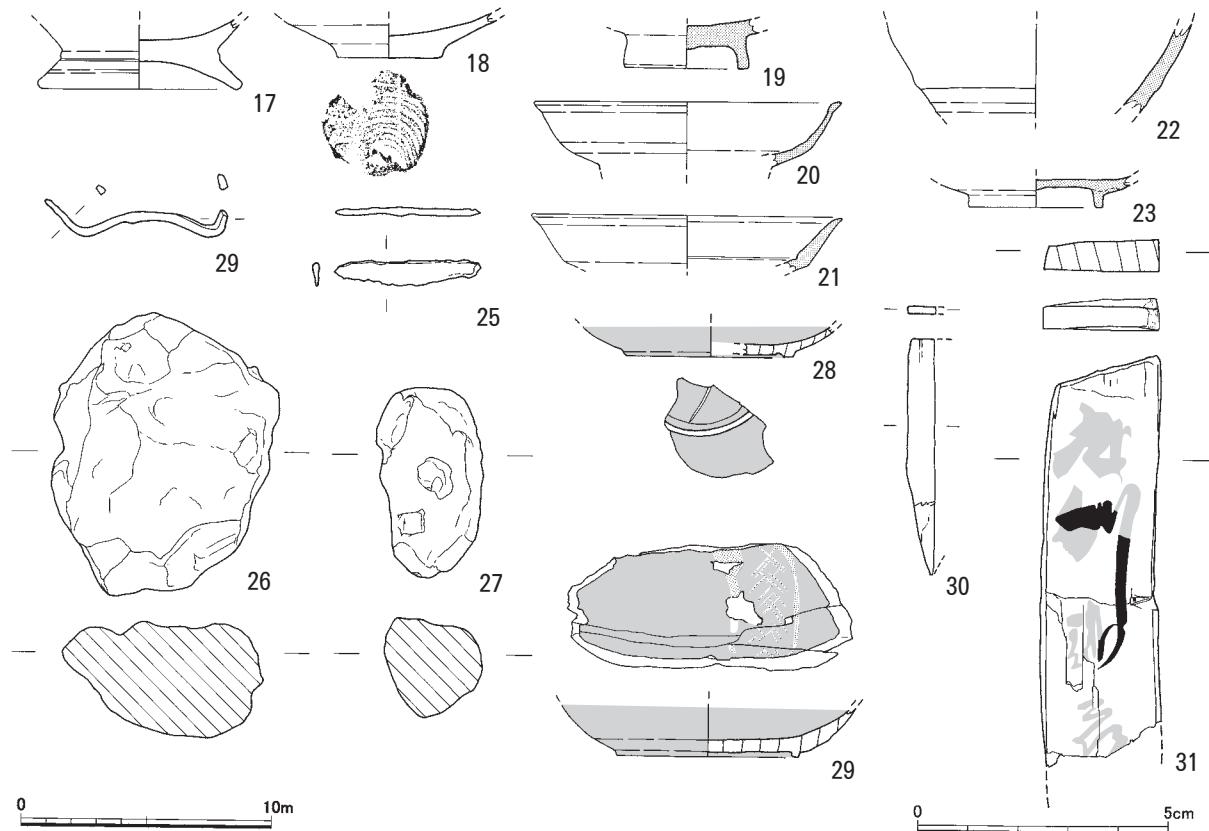


写真6 62-15壺の断面

(73)×23×6 019



第63図 五丁遺跡 D区遺構外出土遺物実測図(1) (S=1/3)

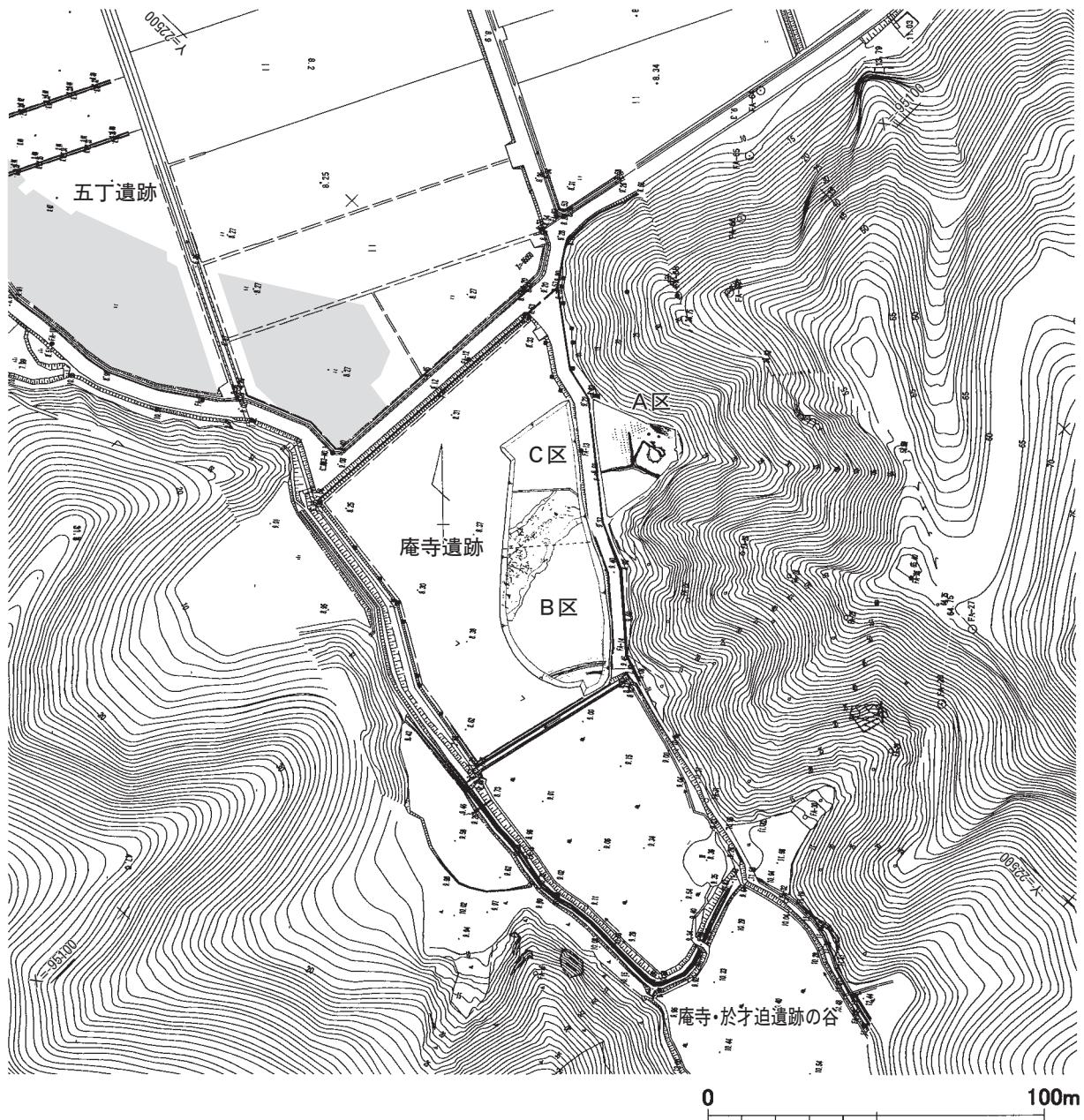


第64図 五丁遺跡 D区遺構外出土遺物実測図(2) (S=1/3, 30:S=2/3)

註

- \* 1 仁摩町教育委員会1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』第45図-8、同1993『川向遺跡発掘調査報告書(I)』第27図ST17。
- \* 2 角田徳幸2008「総括」『中祖遺跡・ナメラ追遺跡』島根県教育委員会。
- \* 3 丹羽野裕2005「出雲における9~10世紀須恵器の様相」『平安時代前期の土器様相』山陰中世土器検討会。
- \* 4 大田市教育委員会1989『白坏遺跡発掘調査概報』。
- \* 5 島根県教育委員会1999『蔵小路西遺跡』橋本久和1995「山陰」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- \* 6 大宰府編年は横田健次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』による。鑑定担当たっては伊藤智氏にご教示を得た。
- \* 7 木簡学会2008「凡例」『木簡研究30』。
- \* 8 木簡の調整技法については山中章1997「考古資料としての古代木簡」『日本古代都城の研究』柏書房(初出1992)によった。

## 第4章 庵寺遺跡の調査



第65図 庵寺遺跡 調査区位置図 ( $S = 1/2000$ )

### 第1節 遺跡と調査の概要

庵寺遺跡は五丁遺跡は大田市仁摩町大国97・98・3150ほか、通称庵寺と呼ばれる丘陵周辺に所在する。分布調査の段階においては、遺跡は、標高65mの庵寺の丘陵上の山城跡があるものと認識されており、当初は遺跡名称も「庵寺城跡」であった。しかし、平成18年度に再度遺跡を踏査した結果、①庵寺丘陵上には古墳群が所在する。②庵寺丘陵の裾部にも平坦面が存在し（のちの調査区A区）、遺跡が存在する可能性がある、の2点を再確認するに至った。現在はこのうち丘陵上の古墳群その他の遺跡を庵寺古墳群、丘陵裾部の遺跡を庵寺遺跡と呼称しており、今回報告する遺跡はこの庵寺遺跡の一部約3700m<sup>2</sup>である。

庵寺遺跡は潮川左岸の南に入る谷状地形（特に地元で名称がないため庵寺・於才迫遺跡の谷とす

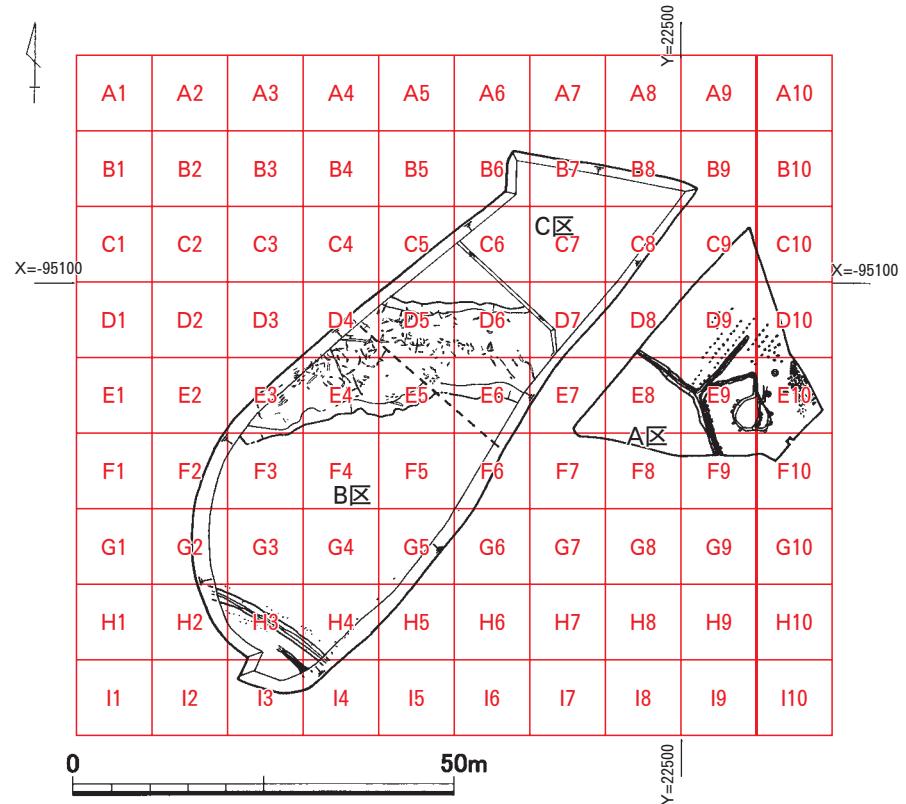
る)に位置する。第3章で扱った五丁遺跡はこの谷の下流に当たる北方に所在しており、遺跡の実態としては両遺跡は連続する遺跡と認識することも可能である。調査対象地は標高8~10mの平坦地であり、国土交通省による用地買い上げ前はA区が荒蕪地、B・C区が水田であった。

庵寺遺跡周辺の遺跡については、北側に縄文晩期~弥生前期から始まり中近世に至る遺物の分布する五丁遺跡(本書第3章)が所在し、また五丁地区農地環境整備(圃場整備)に際して、仁摩町教育委員会により末

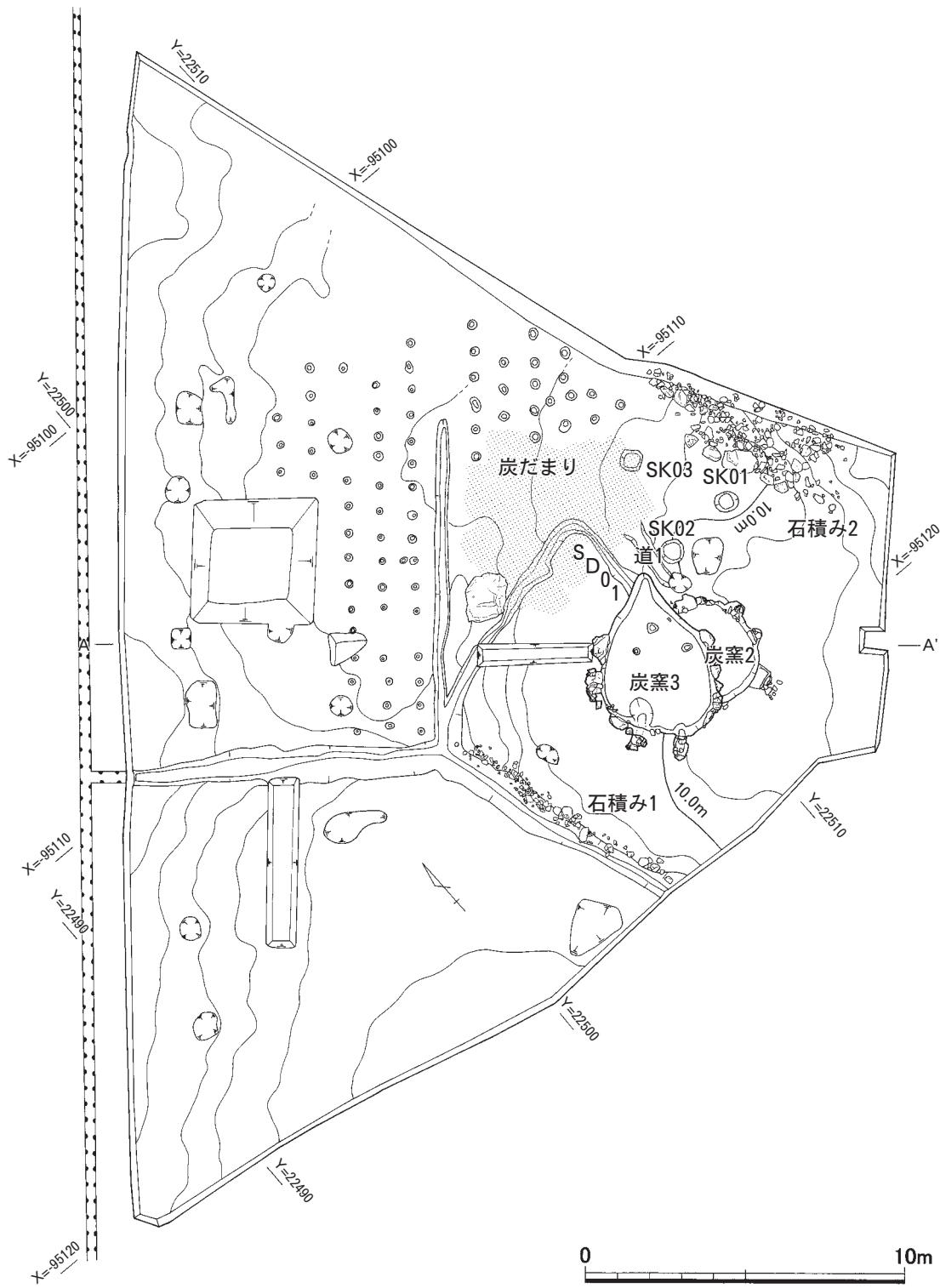
ヶ坪遺跡・古屋敷遺跡の発掘調査が行われている<sup>\*1</sup>(第2図参照)。このうち、末ヶ坪遺跡では中近世の遺物の散布が、古屋敷遺跡では弥生時代前期前半後葉の土坑その他、また、中世ならびに近世の建物跡や遺物が出土している。

さて、発掘調査対象範囲は仁摩温泉津道路本道へのインターチェンジ本体部分に当たる。当初は庵寺の丘陵下の平坦地(A調査区)のみが遺跡の範囲であったが、五丁遺跡の調査などから谷部にも遺跡が広がる可能性があるため、農道西側について平成19年4月18~24日にかけてトレンチ調査を実施した。その結果、奈良平安時代の須恵器を中心に遺物の散布が認められたため、谷部(B・C区)についても遺跡の調査対象範囲に含めることとした。以下、A区を平成19年4月23日~7月30日、B区を同年5月14~8月10日に、C区を同年8月17日~10月25日に、A区第3黑色土以下を10月~11月5日に調査した(第65図)。なお、B・C区は廃土処理上2回に分けて調査を実施したが、主要な遺構であるSR01がB・C両調査区にかかるなど一体性が高い。したがって報告書では、第2節でA区を、第3節でB・C区をまとめて記述することとした。また全調査区に対して、第66図に示した10mのグリッドを設定している。調査結果の概要は以下の通りである。

**A区:** 調査区東側、庵寺丘陵の懷に抱かれるような小平坦部である。国土交通省による買収以前の土地使用状況は荒蕪地で、柿の木が植えられていた。本調査区では3層の土壤化した黑色土層、および遺物の出土する灰色粘質土層1層を検出、それぞれの面で調査を行っている。第1の黑色土は表土直下のもので、この層の下層から重複する炭窯3基、土坑3、炭だまり1、溝1条、石組み2カ所を検出した。続いて第2黑色土層(第69図8層)を調査したが、ここでは弥生土器~近世陶磁器が出土しており、堆積土層は近世の形成と想定され、遺構も確認されなかった。次いで第3黑色



第66図 庵寺遺跡 調査区地区割図 (S=1/1000)



第67図 庵寺遺跡 A区第1黑色土下層遺構配置図 (S = 1/200)

土層（第69図第23～25層）では加工段風に山側が削り込まれ、柱穴数カ所を確認、古墳時代中期頃の遺物が出土した。その下には灰オリーブ色シルト層（第69図）があり、ここでは弥生時代前期の遺物が出土した。

**B・C区** 調査区西側、農道の西に位置する。国土交通省による買収以前の土地使用状況は水田であった。南側に位置するB区の調査では、南端付近で丘陵裾から谷に向かう溝2条を確認した。溝

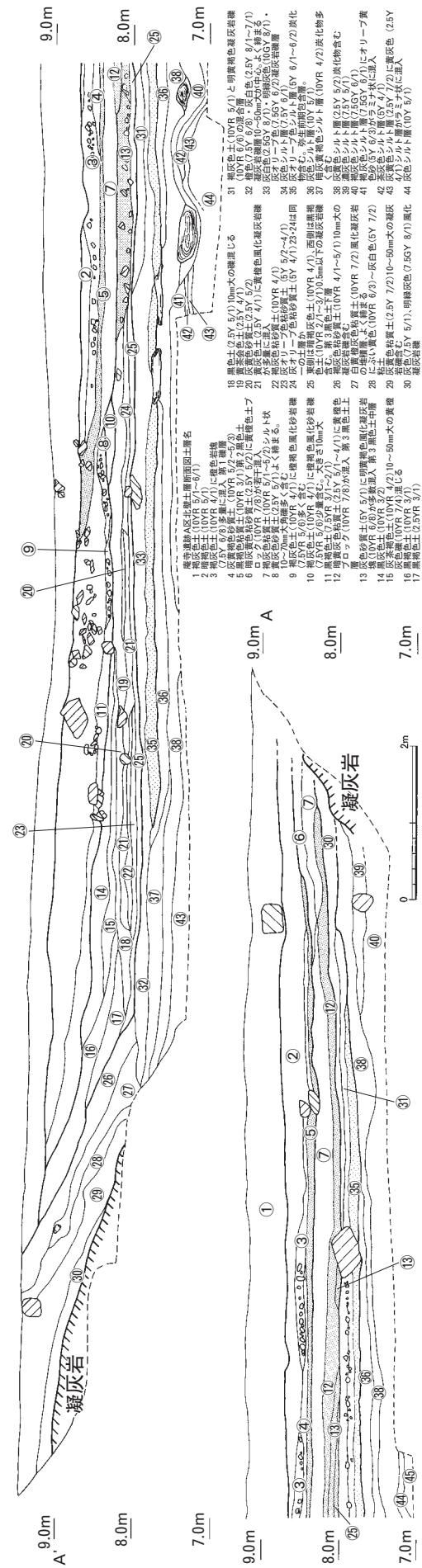
からは古墳時代の遺物が出土するが、この溝周辺の包含層第Ⅲ層からは奈良平安時代の須恵器が多数出土している（第91図）。また溝に平行して杭列があり、さらに砂質土による畦もあったと考えられる。C区ではⅢ層までには遺構は確認できなかった。B・C区全体ではIV層除去後に、土坑・溝と、A区の小さな谷から南西に流化する低地状の自然流路SR01を検出した。このうち流路堆積物は五丁遺跡の流路とは異なり、黒茶色の粘質土を中心とするものであり、流水は少ないと考えられる。この流路SR01の主として上層から加工木材片とともに34個の単独型4孔田下駄が出土している。これは単一遺跡からの田下駄出土点数としては県内最多である。

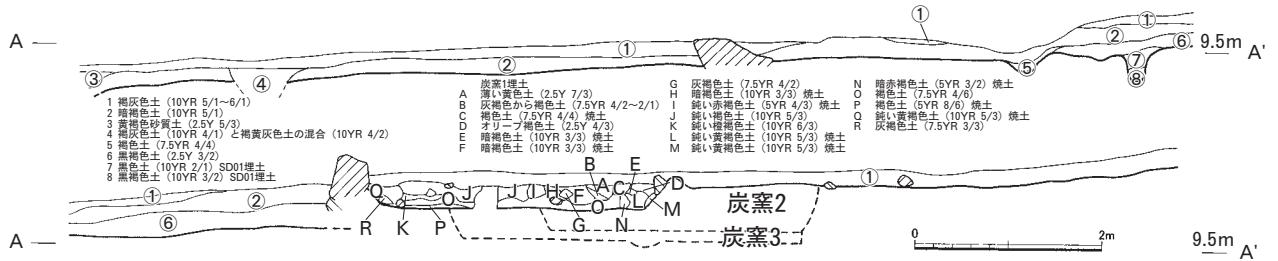
## 第2節 A区の調査

庵寺丘陵の西麓に位置し、調査前の状況で標高9.5～11mの緩斜面を呈していた。調査区の基本層序は調査の概要で述べたように、主として3層の土壤化した土層（黒色土層と略称）を確認しており、このうち第1・2黒色土層までを平成19年4月23日～7月30日にかけて調査し、第3黒色土層・灰オリーブ色シルト層を10月22日～11月5日に調査した。

調査区の層序は以下の通りである。まず現表土下に暗褐色土（第68・69図の2層）が存在しており、この暗褐色土を第1黒色土とした。次いで第68図3・4層は凝灰岩の崩壊した礫を多量に含む崖錐性堆積物であり、無遺物層と判断した。その下第5層が第2黒色土で、先述のように弥生～近世遺物が出土している。この第2黒色土層の下にさらに崖錐性堆積物層があり、その下標高8.0m付近に再び黒色土が現れる（第68図12・13・25層）。この第3黒色土の下には黄灰色の崖錐性堆積物が若干堆積、その下には灰オリーブ色シルトが存在する。このシルト上には、乾燥によるひび割れ痕跡が確認されており（写真7）、土壤に被覆されることなく一時に上述崖錐性堆積物に覆われたものと推定される。このシルトの下は褐色～灰色シルト（第68図36層以下の土層。第3章五丁遺跡の基盤層青灰色粘質土に相当する）

が続き、一部木質を含む層があるものの土壤化した 第68図 庵寺遺跡 A区土層図（S=1/80）





第69図 庵寺遺跡 A区第1黒色土土層図 (S=1/80)

層がみられないこと、中央のトレンチ・調査区排水溝掘削等でも遺物が出土しないことから以下は無遺物層・基盤層として調査を停止した。調査は基本的に黒色土層は人力による掘削、中間崖錐性堆積物は小型の重機によって除去した。

### (1) 第1黒色土除去後の遺構について

第67図は第1黒色土除去後の遺構図であるが、このうち調査区中央に位置するY字状の溝はコンクリート擁壁にU字溝にて連結されており、調査時まで機能していた。この擁壁は平成4～12年の五丁地区圃場整備に関わって構築された現代のものであるが、溝はA区全体のかさ上げによって浅くなっている、若干さかのぼるものと考えられる。

### (2) 小ピット群 (第67図・図版40-1)

調査区中央北側寄り付近に、直径15～20cm、深さ2cm程度の小ピットを9列71個確認した。堀込みは表土下であるが浅く、一定の間隔を開けているが横列縦列とともに並んで方格格子状をなすわけではないことから、ごく近年に行われた何らかの植樹・植栽にかかる掘削痕跡と想定している。出土遺物はない。

### (3) 炭窯

#### 炭窯1～3（第70図）

A区中央東南よりの表土下で検出した。調査前は基準となる大型根石の一部のみが地表に突出しているだけの状態であった（第69図）。表土を剥いた状態で根石列と環状の焼土2列を検出したため、炭窯が2基重複している可能性を想定し、上層の炭窯を炭窯2・下層を炭窯1として調査を開始した。しかし、調査の進展に伴って最終的に3基の炭窯が重複関係にあることが判明したため、最終的に当初の炭窯2（一番上の炭窯）を炭窯1に、当初の炭窯1（中位の炭窯）を炭窯2に、新たに発見した最下層の炭窯を炭窯3と呼称変更している。第70図は三者の関係を示したものであるが、同一箇所で重複しているものの、主軸が炭窯1北東、炭窯2南西、炭窯3正北と異なっており、結果として底面・焼き口・ショウジなどは共有されておらず、修復・上部構造の再構築といったものではないことがわかる。それぞれが先行する炭窯の根石を除去し、実質的に新造されていると考えられる。

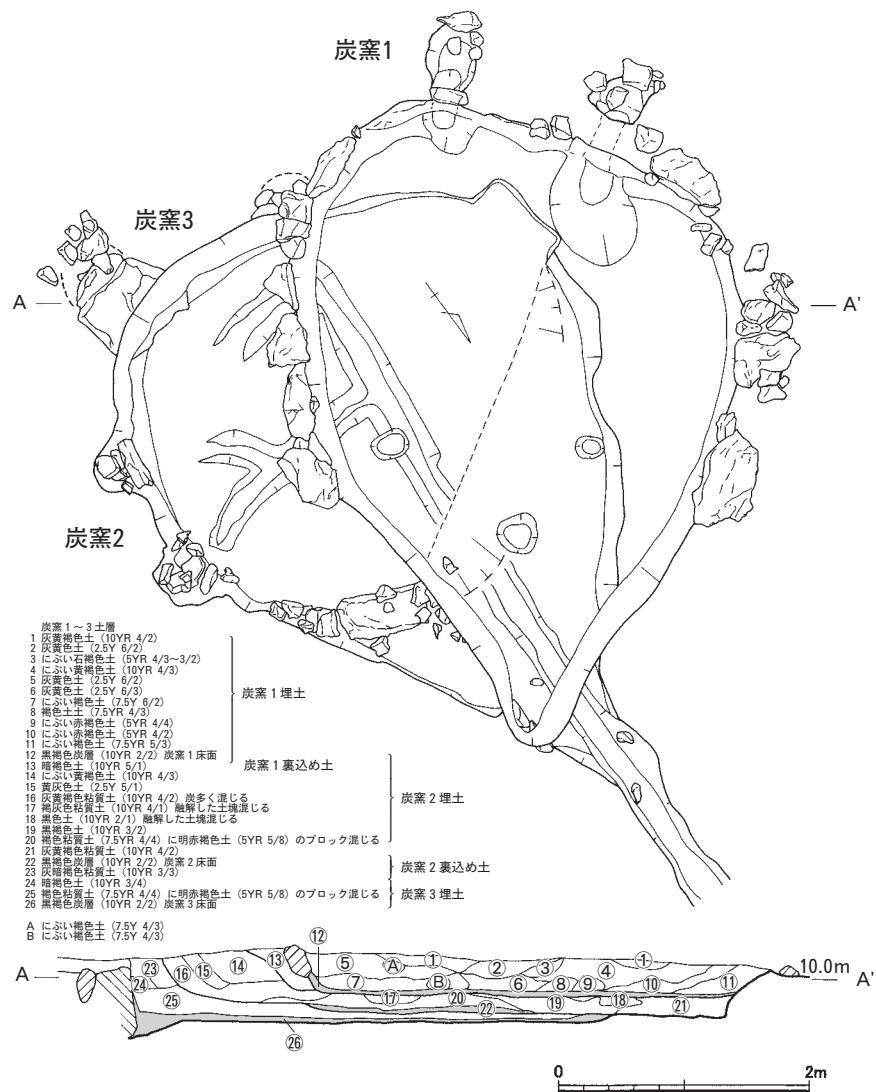
ただし、これら3基の炭窯の構築・使用はそれぞれ異なる時期に無関係に行われたかというと、そのように考えることも難しい。すなわち最下層にある炭窯3に伴う暗渠SD01は、現在まで使用してきた排水路に接続するよう構築されており、炭窯3廃絶後も調査区全体では同じ土地利用が継続し、現在に至っていると考えられるからである。また、上層の炭窯1・2に暗渠排水がないこ

とも、継続的に同じ場所に炭窯を構築したため炭窯3の暗渠をそのまま利用したと考えれば理解しやすい。加えて、断片的ではあるが下層の炭窯2・3の埋土をみると土壌化した黒色土がみられず、下層の炭窯廃棄後、天井が抜け落ちた状態で一定期間が経過したとは考えられない。以上の点から、炭窯1～3は形態・焚き口の方向など若干変化しながらも、継続的に営まれた炭窯と考えてよく、その年代は後述する炭窯1の熱残留磁気測定の年代観1770年代より若干遡るもので、概ね18世紀代ととらえておきたい。

### 炭窯1（第71図）

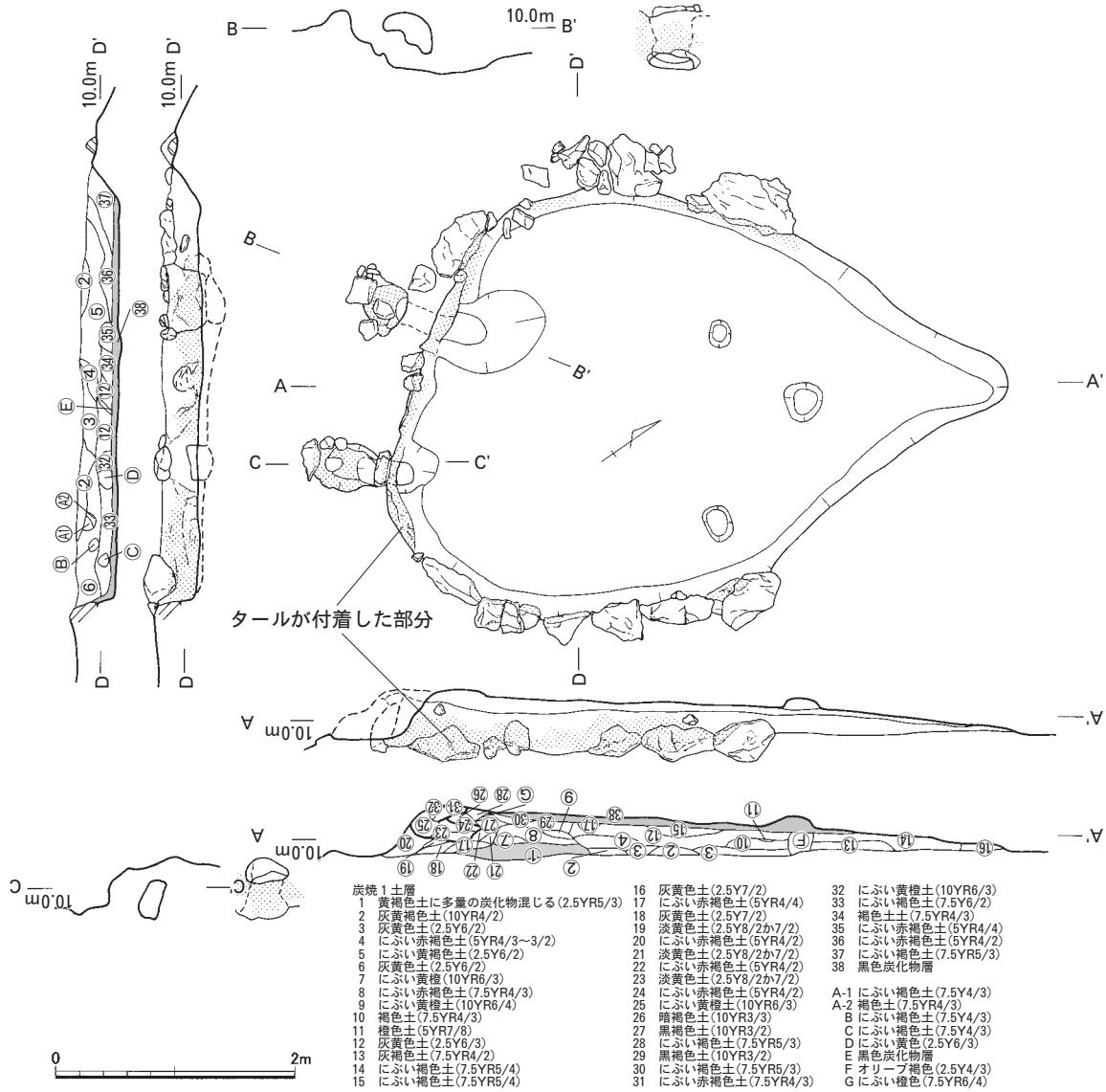
**規模と形態** 上述炭窯の最も上層に位置する炭窯である。

規模は全長約5.0m、最大幅3.3mで検出面からの深さ0.45mであった。基底部には根石



第70図 廬寺遺跡 A区炭窯1～3重複実測図 (S=1/60)

が置かれており、平坦地に底部付近を堀込み、窯本体の大部分を地上に構築する構造であったと考えられる。床面は窯内後方のショウジ側に傾いており、特にショウジ前面には焼成する木材から発生する水分を呼び寄せるよう窪地的部分が作られ、ショウジの煙道口は窯全体の底面レベルより低く作られていることがわかる（AA'断面）。このような構造は、焚き口を閉塞したまま炭化・冷却をおこなう、黒炭製炭用の窯の特色とされている（岸本1984）。平面形はいわゆるイチジク形を呈しており、両側面には大型の石が根石として使用され、壁体を平面的に規制しているが、煙道・ショウジの位置や平面形は左右非対称であり規模も大小の区分とされる長さ4.0mを越える大炭窯ということができる。遺存状況を見ると根石以下はほぼ完全な形で残るが、壁のタール付着部分は残存高30cm程度で上端が欠損しており、上部構造は完全に失われている。また、煙道部は側面を石組みにてくみ上げた部分の一部のみ残存していた。残存する煙道部にはタールの付着した石が充填されており、窯の廃棄に当たって上部構造が意図的に取り払われたとみられる。おそらく煙道部その他に小石が多く使用されていたと思われるが、多くが後述する石組み1・2に転用されたとみられる。また、窯本体内部の埋土は崩落した天井部・側壁部と思われる黄褐色～赤褐色を呈する焼土ブロックが混乱した堆積状況で充填されていた。これも前述のように窯廃棄時に上部構造を意図的に埋め



第71図 廬寺遺跡 A区炭窯1実測図 (S=1/60)

込み平坦にしたことを示している。床面にはショウジ前のくぼみを中心に粉炭が堆積していたが、厚さは厚いところで5cm程度であり既存の製鉄遺跡に伴う炭窯に比較すると焼成の頻度は低かったと考えられる。「かわら木」が行われた痕跡はない（横田町2003）。また、後述する炭窯2・3を調査するため床面は堀抜いているが直接的な防湿のための地下構造は認められなかった。しかし、最下層の炭窯3の下に暗渠SD01が確認されている。この暗渠が同じ場所に営まれた炭窯1・2にも共通する地下構造として利用されたのであろう。

**時期と性格** 出土遺物はない。窯の形態からは、中世以前に遡るとされる平面三角形などの形状ではないこと、根石を置いて大部分を地上に構築していることなど近世以降の炭窯の特徴をよく備えている（安間2007）。熱残留磁気測定の結果（第6章第3節）では、炭窯の比熱部分はAD420、A D1375、AD1775年頃の形成との結果が出ている。後述第2黑色土層には周辺から近世18世紀の陶磁器が出土していることから前二者の年代は考えられない。また窯体に使用されたと考えられる焼石が後述石組みに転用されていること、その石組み1・2は現在まで機能していたことを考えれば

一番現代に近い年代

を考えるべきである。

現在のところ1775年・

18世紀後半頃の可能

性を想定する。なお、

炭窯の熱残留磁気測

定による年代につい

ては、炭窯の最終操

業時の熱残留磁気と

なるので、修築が繰

り返される場合、窯

の設置時期との年代

差が問題になる<sup>\*2</sup>。

しかし、当炭窯につ

いては改築が明瞭で

あること、また最上

層の炭窯1でも床面

の粉炭の厚さからみ

て操業期間は短いと

考えられるので、炭

窯構築の年代と熱残

留磁気の年代間は若

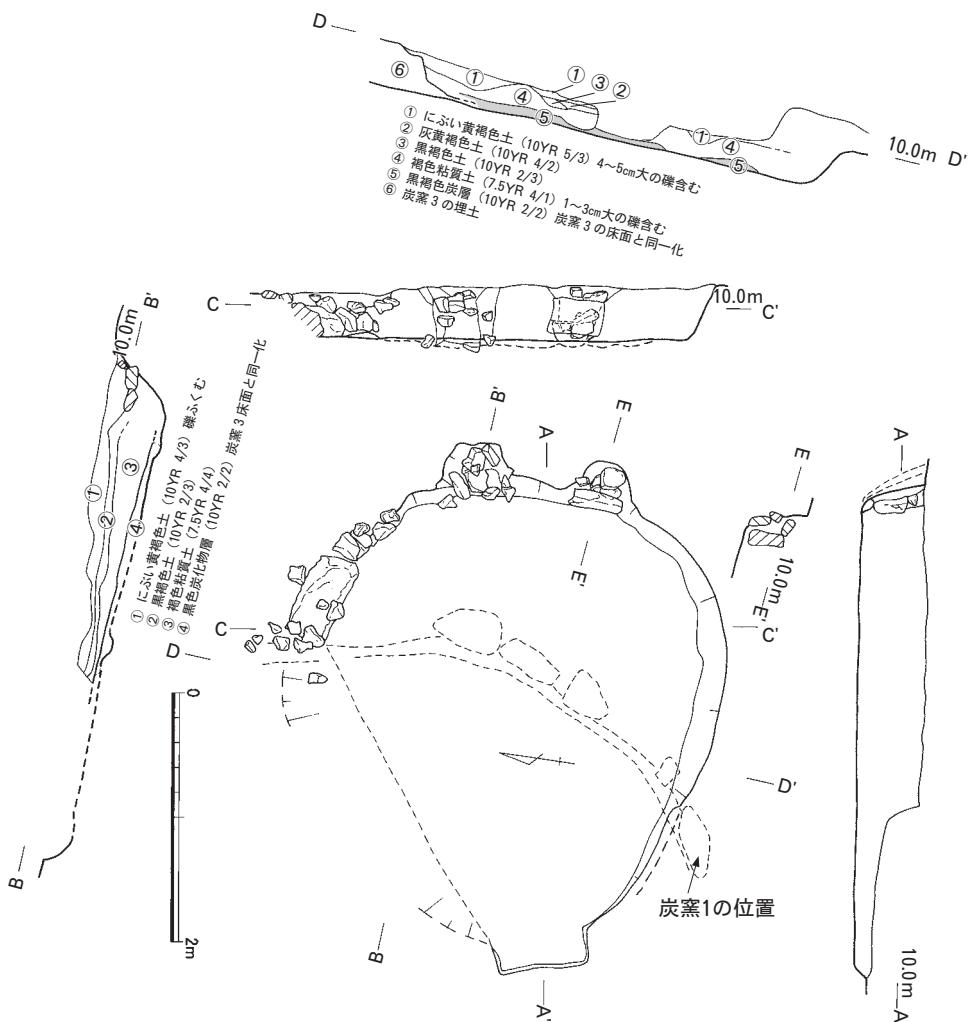
干遡る程度と考えて

よいであろう。また、元土地所有者の話によると終戦直後に土地を購入したが、その段階では既に平坦地となっており、炭窯の痕跡はなく、炭を焼いていたとの伝承もなかったという。

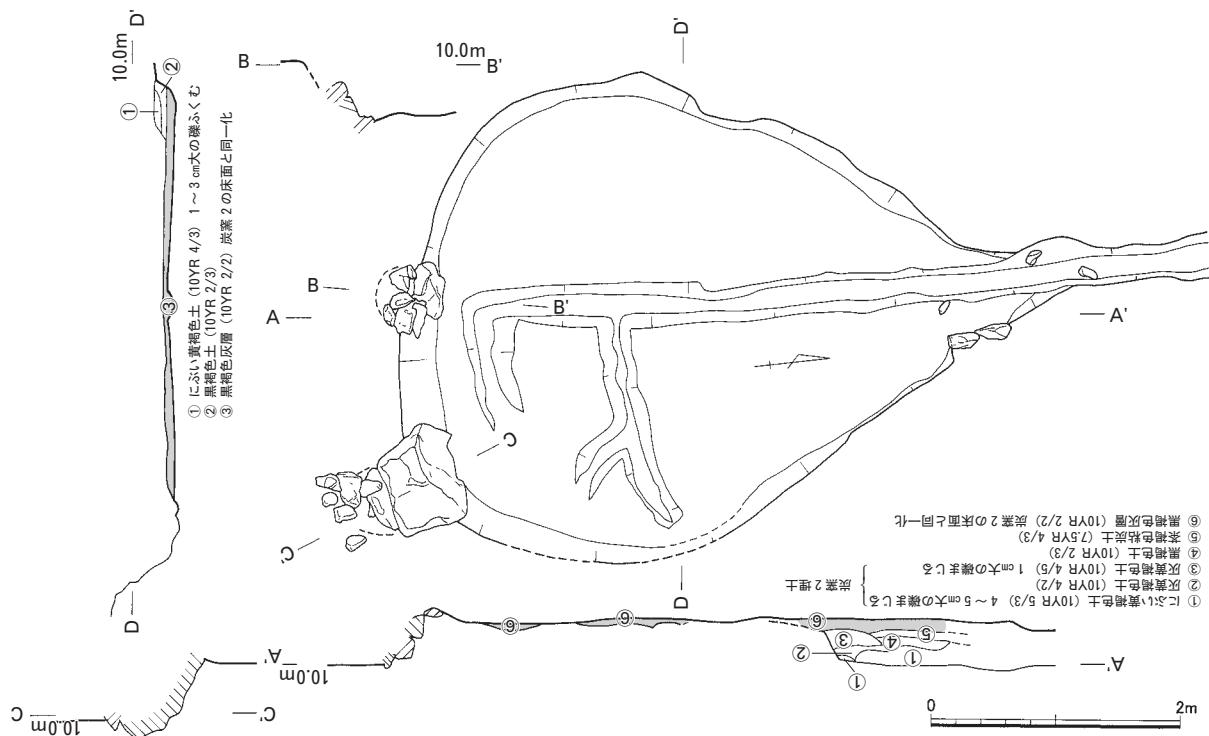
性格は黒炭製炭用の大型炭窯であるが、製品が一般家庭用のものであるか、製鉄関連のものであるのか等は明らかでない。

### 炭窯2（第72図）

**規模と形態** 炭窯1～3の中位に位置する炭窯である。炭窯1・3に比べて遺存状況は不良で、西半分窯の焚き口方向は炭窯3によって破壊され、わずかに基底部のみが確認されているに留まる。規模は推定で全長約4.3m、最大幅約3.5mで、検出面からの深さ4.5mであった。平面形はいわゆるイチジク形というよりもほぼ円形を呈しており、炭窯1・3とはやや異なる。煙道・ショウジの位置や平面形はほぼ左右対称で、規模も大小の区分とされる長さ4.0mを越えており大炭窯ということができる。底部の根石は北側左側面にのみ確認され右側面には見られない。構造は炭窯1同様、平坦地に底部付近を堀込み、窯本体の大部分を地上に構築する構造であったと考えられる。ただし、床面の傾斜はほとんど見られず、ショウジ前面も平坦なままである。ショウジは2カ所でいずれも下部は石組みによって構築し、煙道口には横長のいわゆる歯石を設置する。内部には炭窯2廃棄時点での不要となったと思われる石が充填されていた。壁面にはタール付着が全く認められず上部構造



第72図 庵寺遺跡 A区炭窯2実測図 (S=1/60)



第73図 廬寺遺跡 A区炭窯 3 実測図 (S=1/60)

は完全に失われている。窯の廃棄に当たって上部構造が意図的に取り払われたとみられる。おそらく煙道部その他に小石が窯本体内部の埋土は褐色～黒褐色系の砂質土などであった。炭窯1より若干不明瞭ではあるが、天井部・側壁部の破片であろう。床面にはショウジ前のくぼみを中心に粉炭が堆積していたが、厚さは厚いところで5cm程度であり既存の製鉄遺跡に伴う炭窯に比較すると焼成の頻度は低かったと考えられる。炭窯1同様「かわら木」が行われた痕跡はない（横田町2003）。

**時期と性格** 出土遺物はない。一方窯の形態からは、炭窯1と同じく平面略円形・根石を置いて大部分を地上に構築していくことなど近世以降の炭窯の特徴をよく備えている（安間2007）。性格は大型炭窯であるが、製品が一般家庭用のものであるか、製鉄関連のものであるのか等は明らかでない。炭窯1～3の解説で述べたように下層炭窯3の廃絶直後に再構築されたと考えるのがよいであろう。ただし、窯1・3とは構造が若干異なっており、窯の構築者が異なる、あるいは目的が微妙に異なる可能性はある。

### 炭窯3（第73図）

**規模と形態** 炭窯1～3の下位に位置する炭窯である。規模は全長約4.8m、最大幅約4.0mで、3期の中ではもっとも規模が大きく、また暗渠排水を持つのが特徴である。平面は左右対称ないわゆるイチジク型を呈しており炭窯1に比べても整っている。煙道・ショウジは2ヵ所であるが、奥正面と左奥であり左右対称ではない<sup>3</sup>。底部の根石は焚き口部左側面に若干認められるだけであった。ショウジはいずれも下部は石組みで構築、煙道口には横長の歯石を設置するものであるが奥壁左側の煙道喉の歯石は幅80cm、高さ100cmときわめて大型である。内部には炭窯2廃棄時点で不要となっと思われる石が充填されていた。構造は炭窯1同様、平坦地に底部付近を堀込み、窯本体の大部分を地上に構築する構造であったと考えられる。

**時期と性格** 出土遺物はない。炭窯1と同じく平面イチジク形、大部分を地上に構築していると考

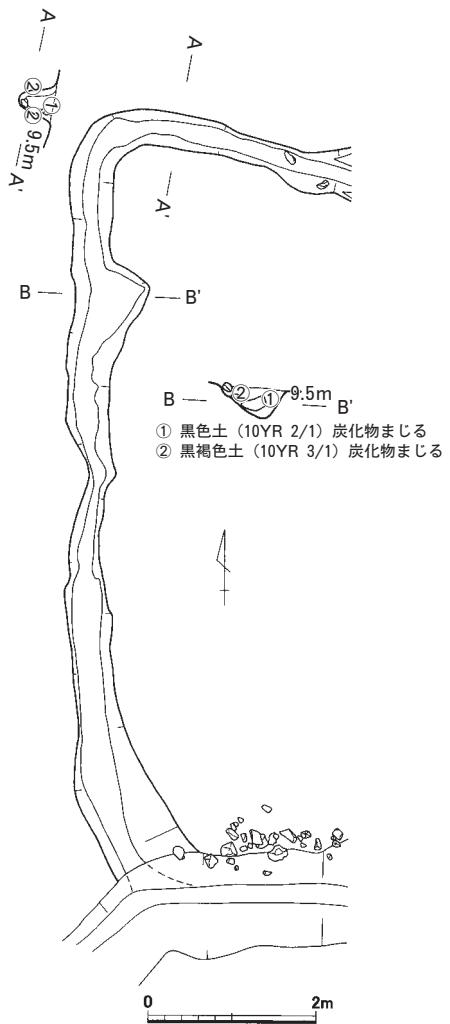
えられる点など近世以降の炭窯の特徴をよく備えている。3基の中では一番平面形が整っており、暗渠も設置されるなど丁寧な作りであるが、ショウジ位置は非対称である。炭窯1～3解説で述べたように炭窯1の年代からさほど遡らない時点に構築されたとみるのがよいと思われる。性格は大型炭窯であるが、製品が一般家庭用のものであるか、製鉄関連のものであるのか等は明らかでない。

### 暗渠SD01（第74図）

炭窯1・2と異なり、炭窯3には暗渠が存在する。この暗渠は炭窯3の底面中央を貫通するほか、北側にも枝状に掘削されている。これら窯内の暗渠については、ここでは暗渠としたが内部に石・枝など通水性のよいものが充填されていた痕跡はなく、開渠であった可能性もある。一方、窯外では暗渠は深さを増し内部に石を充填しており、埋土には多くの粉炭が混じっている（第74図BB'断面）。平面的に見ると窯を西後3m程度で西に折れ、現在も調査区中央を流れる溝に接続している。このあり方は明らかに調査区北側、すなわち炭窯のない平坦部分への自然浸潤排水を避け、現在の水路に連結することを目的としており、国土交通省による用地買収前土地利用形態とほぼ一致している。

**時期と性格** 出土遺物はない。炭窯3と同時に構築されたのは

明らかで、炭窯3は炭窯1の廃絶年代をさほど遡らないのである 第74図 庵寺遺跡 A区SD01実測図（S=1/90）



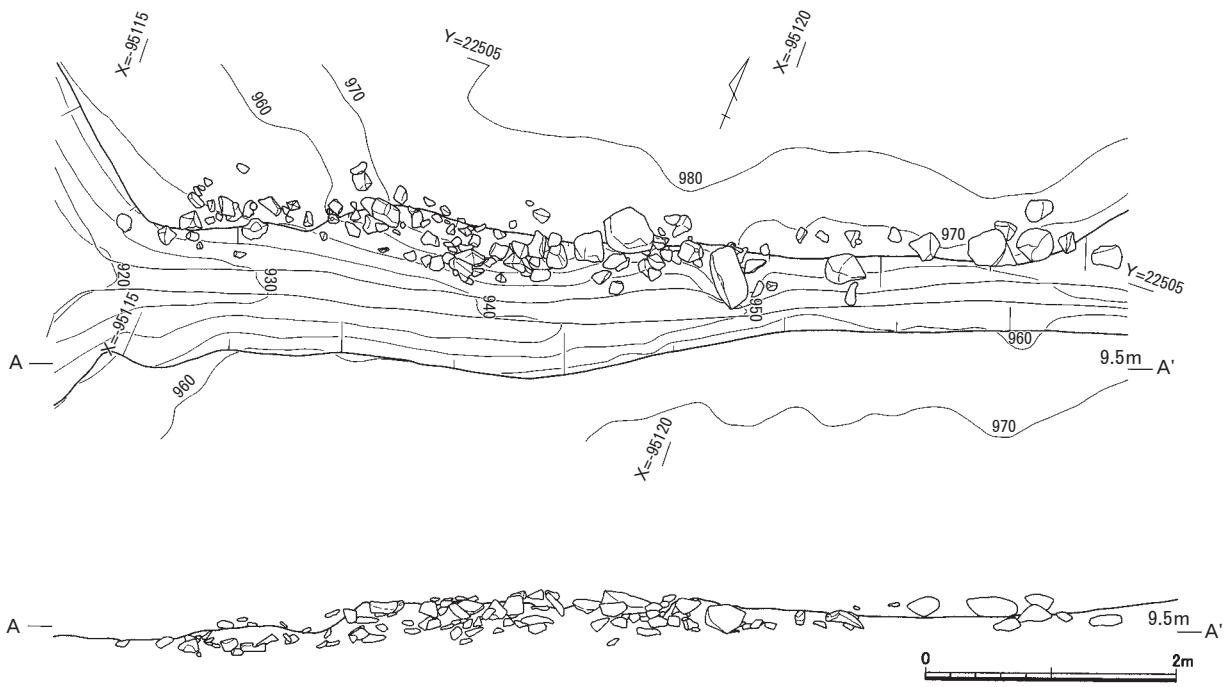
### (2) 石組み

#### 石組み1（第77図）

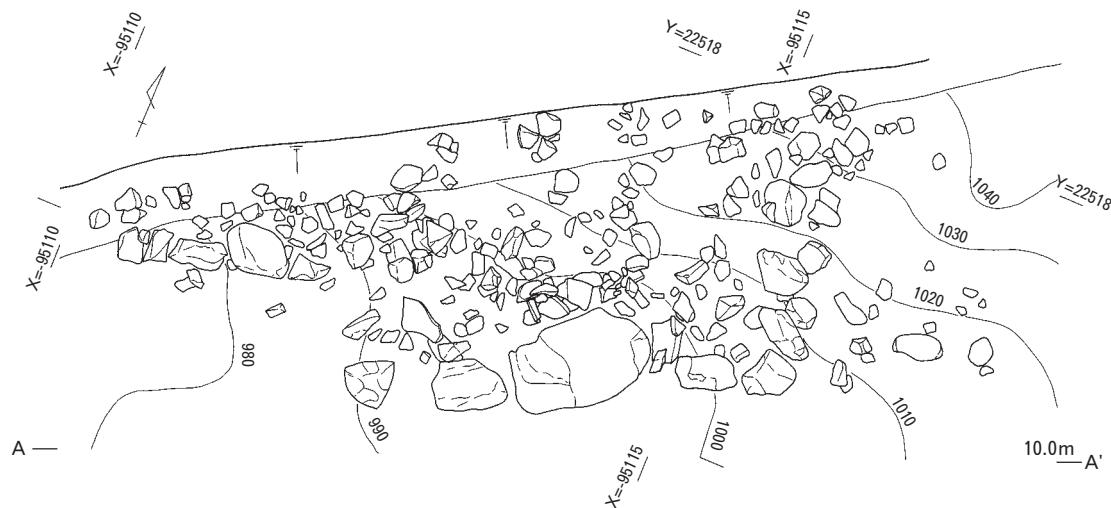
**規模と形態** 調査区中央炭窯の南に位置する。この部分には今まで庵寺丘陵からの谷水が流れる利用されていた素堀溝が存在していたが、その溝にたまたま表土を除去したところ検出したものである。基本的には長さ約7.5m、幅0.8mに渡り人頭大～長さ40cm程度の自然石を溝の北側（炭窯側）に積み上げたものである。裏込石など存在せず、石組みの内側も盛り土が行われた痕跡もなく、いわゆる石垣ではない。多くの石（特に小型の石はほぼすべて）が一部焼け焦げており、炭窯を構成していた石が窯を解体した際に寄せ集められ、積み重ねられたものと考えられる。

東寄りに位置する。長軸4.0m、短軸2.3m、深さ0.2mを測り、二つの楕円形の土坑が連結したような構造をとる。堀込みは第6層下面からであり、浅くレンズ状の断面型を持つ。茶褐色～黒褐色の粘質土が堆積していた。

**遺構の時期と性格** 遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが、焼石の転用を考えると前述炭窯1～3の廃絶・再構築と無関係とは思われない。また石の置かれた溝には暗渠SD01が接続しているので、炭窯3より遡ることもないであろう。炭窯同様概ね18世紀代以降に構築されたものであろう（徐々に構築された可能性もある）。



第75図 廬寺遺跡 A区石組み1実測図 ( $S=1/60$ )



第76図 廬寺遺跡 A区石組み2実測図 ( $S=1/60$ )

### 石組み2(第78図)

**規模と形態** 調査区東寄り炭窯のすぐ東に位置する。この部分は調査区外に庵寺丘陵の崖線が迫っているが、その崖線に積み上げた状況である。規模は長さ6m、幅2m程度で、石組み1同様に拳～人頭大の石積み重ねられているが、石組み1とは若干異なり、土と一緒に積み重ねられている状況で、子細にみると石の出土状況には上下2回程度のまとまりがあるようである(AA'断面)。石群1と同様に小型の石の大部分には焼痕跡がみられ、炭窯の上部構造を解体したときに出ていた廃材が積み置かれたものと考えられる。なお、図中にある長さ1m程度の石はおそらく基盤層に含まれて

いる石と考えられ、焼痕

跡もみられない。

**遺構の時期と性格** 遺物

が出土していないため正

確な時期は不明であるが、

石組み 1 同様炭窯 1 ~ 3

の廃絶・再構築と無関係

とは思われない。炭窯同

様概ね18世紀代以降に構

築されたものであろう

(徐々に構築された可

能性もある)。性格につい

ては庵寺丘陵の斜面の崩

落防止はほとんど期待で

きず、炭窯解体によって

生じた廃材を重ねた痕跡

とみてよいであろう。

### (3) 土坑

#### SK01 (第77図)

**規模と形態** 調査区東寄り、炭窯の東側約 3 m に位置する。表土除去後に確認した。平面形は直径約 1.2 m の略円形で、深さは検出面より 0.35 m であった。

**時期と性格** 出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

#### SK02 (第77図)

**規模と形態** 調査区東寄り、炭窯 1 の焚き口付近にある進入路堀込みのすぐ東に位置しており、この進入路によって切られていた。また、上層は窪んでおり、炭が堆積している。

炭窯のすぐ東に位置する。土除去後に確認した。平面形は直径約 1.3 m の略円形で、深さは検出面より 0.3 m であった。

**時期と性格** 出土遺物はないが、切り合い関係より炭窯 1 の操業以前に掘削され、また埋没して窪地状になっていたと考えられる。性格は不明である。

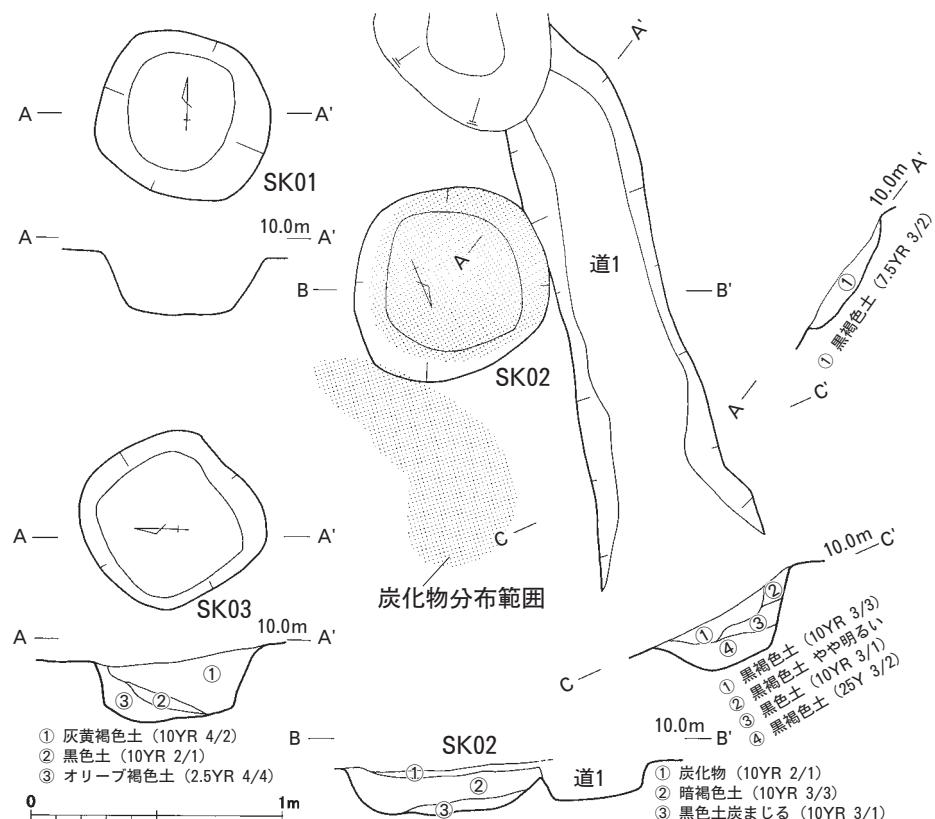
#### SK03 (第77図)

**規模と形態** 調査区東寄り、炭窯 1 ~ 3 の北東約 3 m に位置する。土除去後に確認した。平面形は一辺約 1.1 m 前後の隅丸方形で、深さは検出面より約 0.4 m であった。

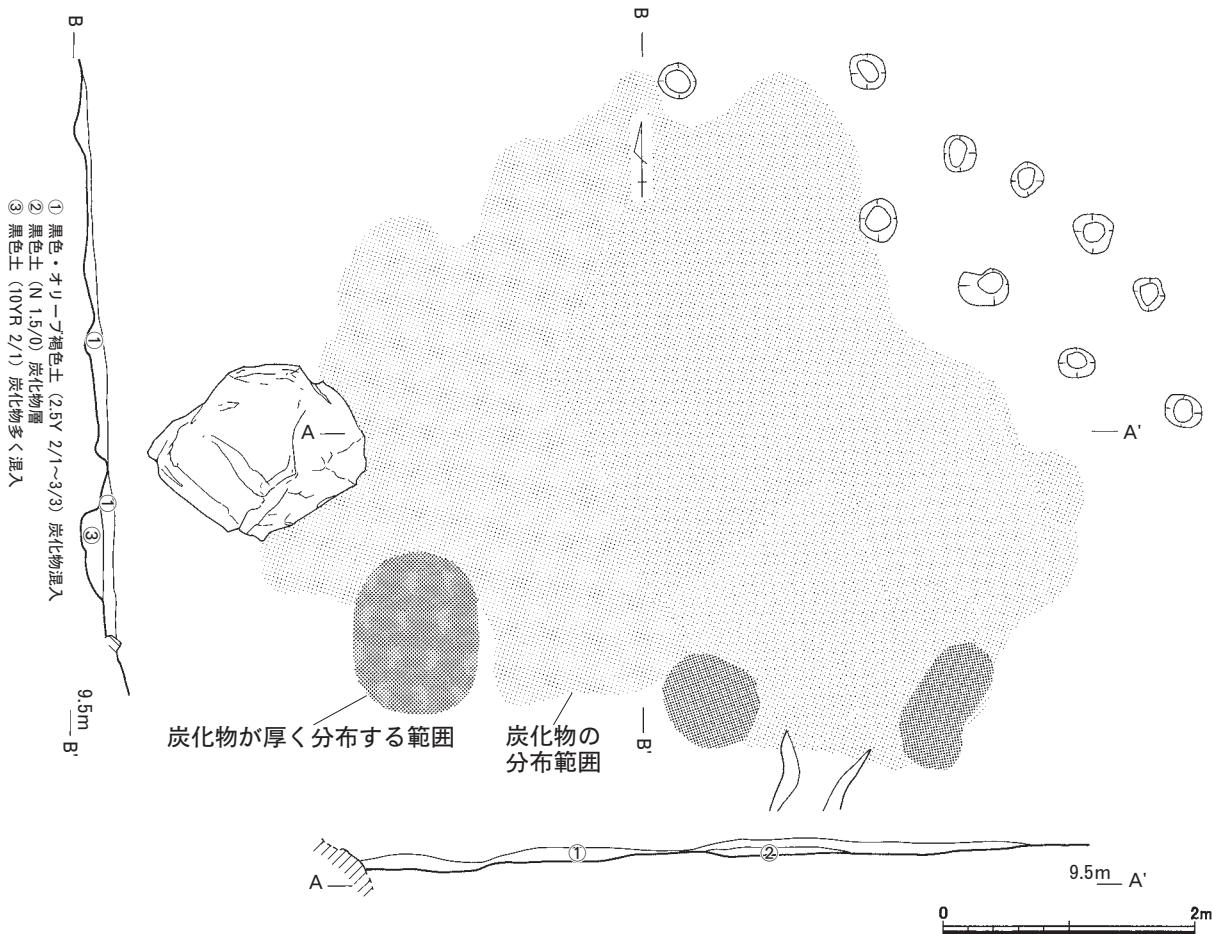
**時期と性格** 出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

### (4) 炭溜まり

**規模と形態** 調査区中央、炭窯の北側斜面で表土除去後に確認した。範囲は約 6 m × 5 m で厚さは 10 ~ 20 cm であった。炭窯 3 に伴う暗渠 SD01 は完全にこの炭が溜まりによって被覆されていた。炭窯に近い部分では確認できず、むしろ炭窯から炭を取り出す作業によって書き出された炭層と考えられる。局所的に特に黒く炭が堆積している箇所が 3 カ所あり、これらが窯から取り出した炭の集



第77図 庵寺遺跡 A区SK01~03道1実測図 (S=1/30)



第78図 廬寺遺跡 A区炭溜り実測図 (S = 1/60)

積・梱包等の作業場所であった可能性もある。

**時期と性格** 出土遺物はないが、炭窯1～3に関わる炭溜まりであることは確実であり、18世紀頃のものと考えられる。

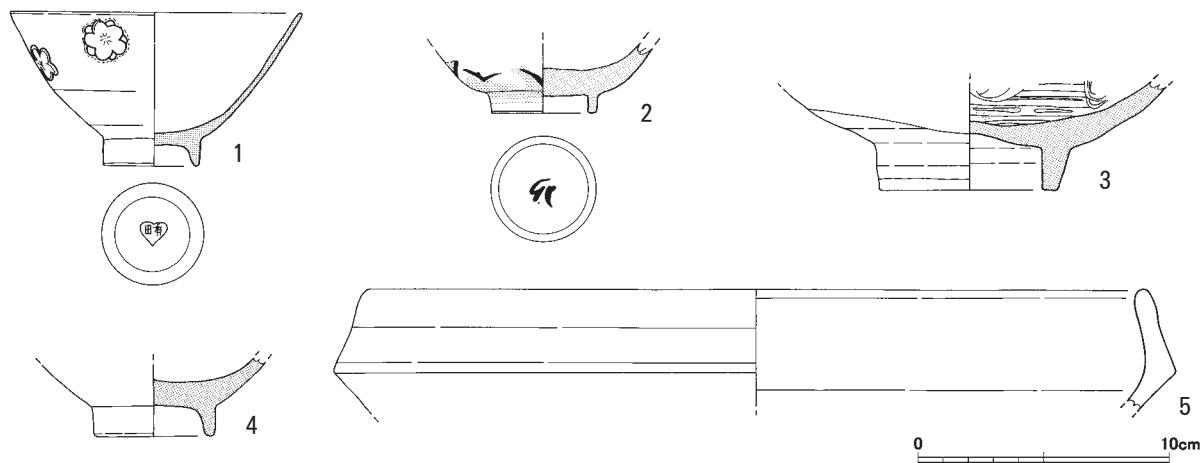
#### (5) A区炭窯付近出土遺物（第79図）

79-1は佐賀県有田町産の磁器碗である。朱字金縁の梅花がプリントされる。底部にハートマークに囲まれた「有田」の文字のあるいわゆるハート有田の飯碗である。時期は、大正から昭和戦前期である。2は肥前磁器である。底部畳付き以外全面施釉、雪輪草花文が染付されるいわゆる「くらわんか碗」である。波佐見産と考えられ、時期は九陶V-2期、18世紀後半の資料である。3は肥前系陶器・二彩唐津の鉢である。内面には刷毛目による波状文が施され、畳付きとあわせ重ね焼きに使われた白化粧土が付着する。底部外面に腰鋸しないのが肥前系の鉢として不自然で、地方窯の模倣品の可能性がある。時期は九陶V期1780年～1860年代。4は肥前系陶器でいわゆる呉器手碗である。九陶III期、17世紀後半代と考えられる。5は土師質の焙烙である。

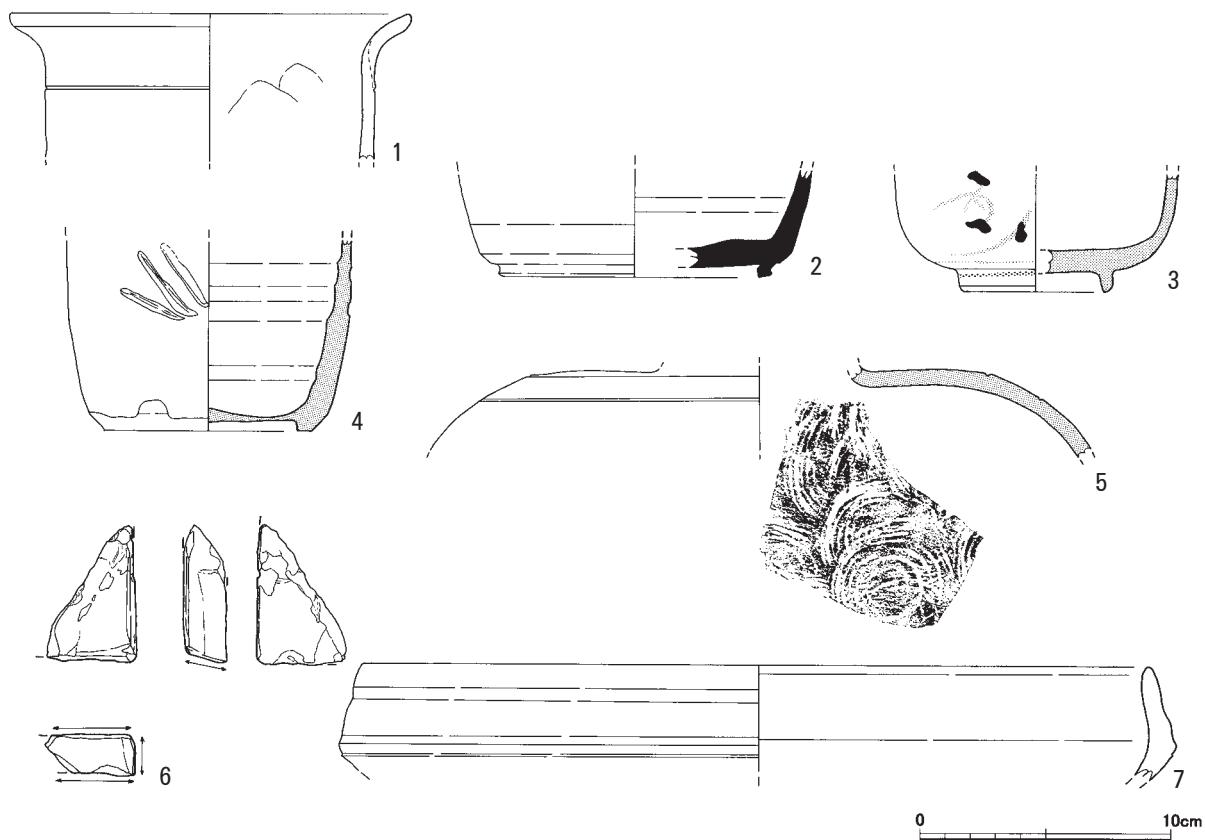
出土遺物はいずれも炭窯に直接伴うものではないが、古い資料で17世紀後半～18世紀代であり、先の炭窯操業推定時期の18世紀と大きく矛盾しない。

#### (6) A区第1・第2黒色土出土遺物（第80図）

第80図は、炭窯周辺以外の第1黒色土層の出土遺物、ならびに第2黒色土層の出土遺物である。第2黒色土層の出土遺物にも18世紀代の肥前系陶器が含まれており、この時期に崖錐成堆積物によ



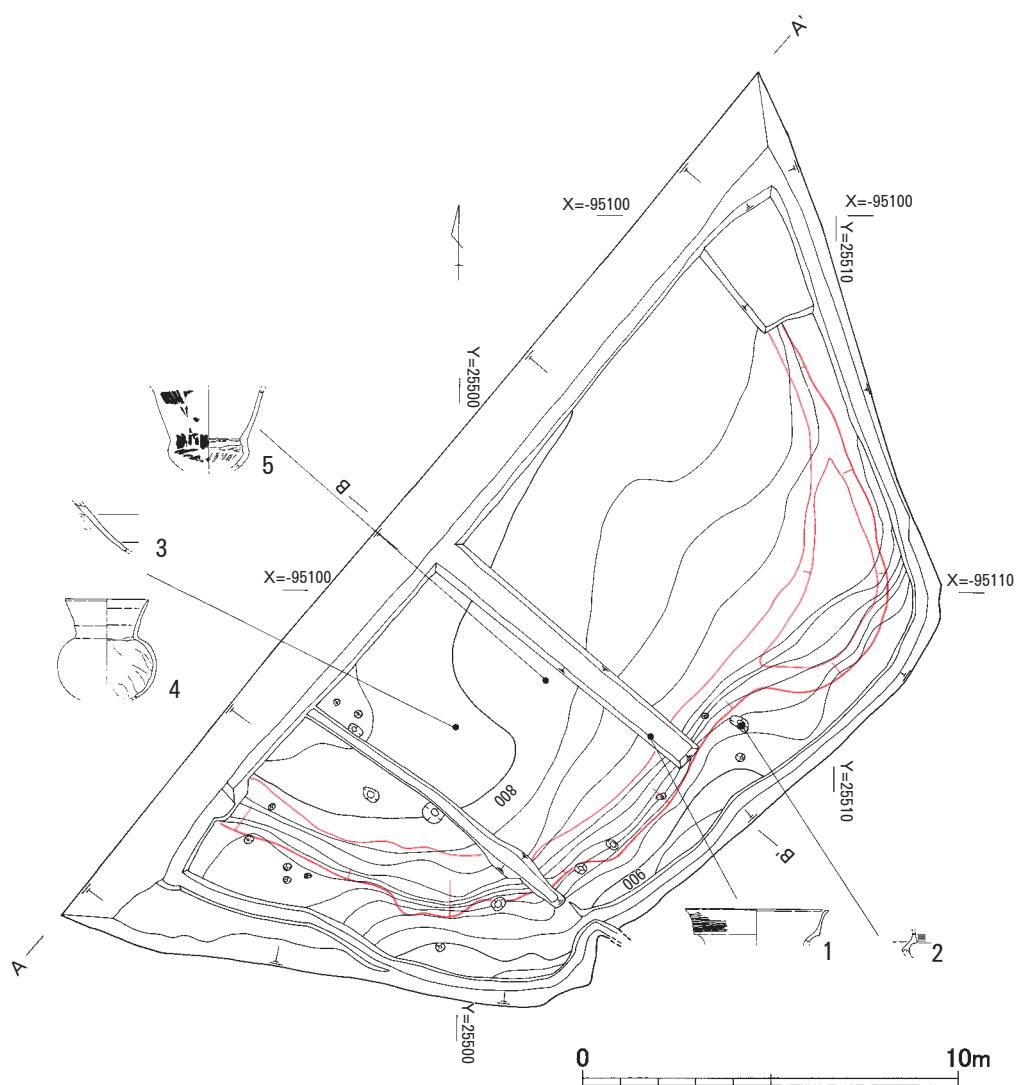
第79図 庵寺遺跡 A区炭窯付近出土遺物実測図 (S=1/3)



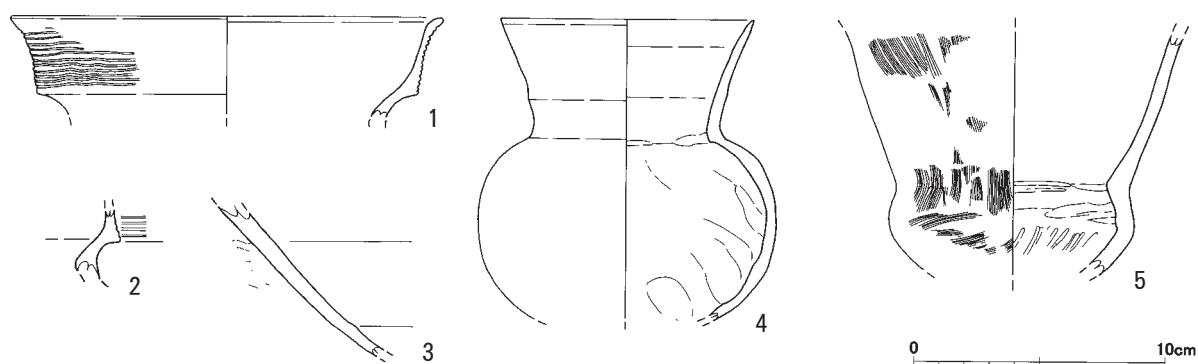
第80図 庵寺遺跡 A区第1・第2黒色土出土遺物実測図 (S=1/3)

り調査区が埋め立てられ調査区全体が嵩上げされ、その後炭窯ほかの遺構が構築され第1黒色土層が堆積したのであろう。

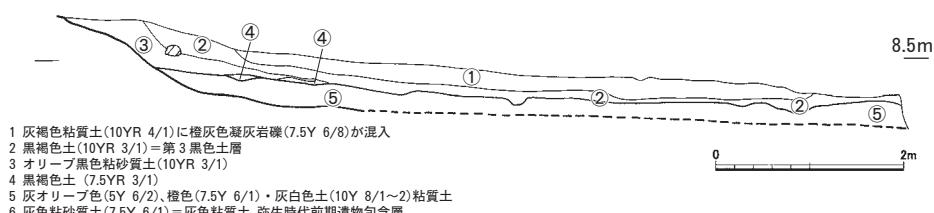
80-1は弥生土器甕である。如意状口縁で頸部無段・頸胴部界に断面薬研状の沈線1条を施す。松本石見I-2様式の資料。2は須恵器高台付壺である。体部は直線的に立ち上がり、底部は回転糸切りを丁寧にナデ消している。3は肥前系磁器、陶胎染付の碗である。九陶V-1期、17世紀末～18世紀前半の資料である。4は茶褐色の飴釉が施され底部内面に重ね焼き痕跡があることから、上部が開放された香炉・火消などの類である。外面に3本の沈線からなる装飾が2カ所以上確認されるが、瀬戸美濃II類例があり、写したものであろうか。飴釉を好む石見焼喜阿弥窯のものであろ



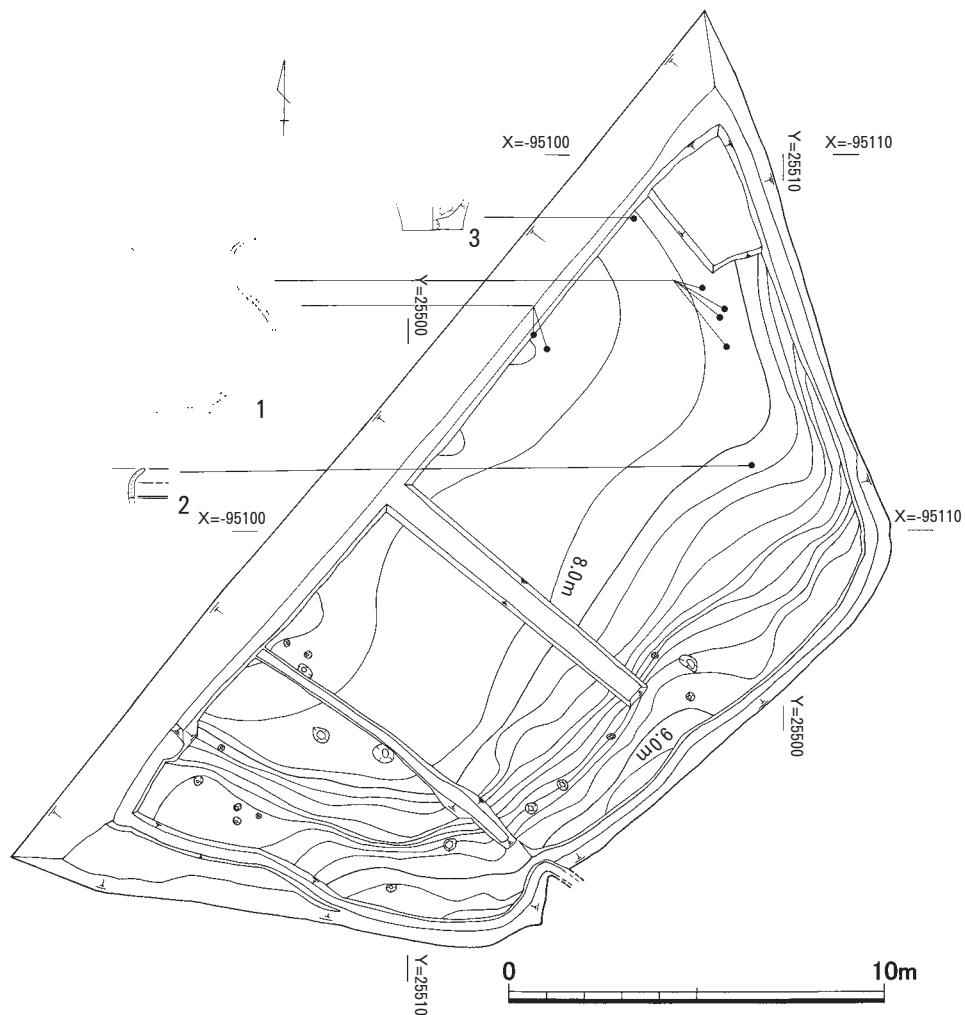
第81図 庵寺遺跡 A区第3黒色土下層遺構実測図 (S=1/200、遺物 S=1/12)



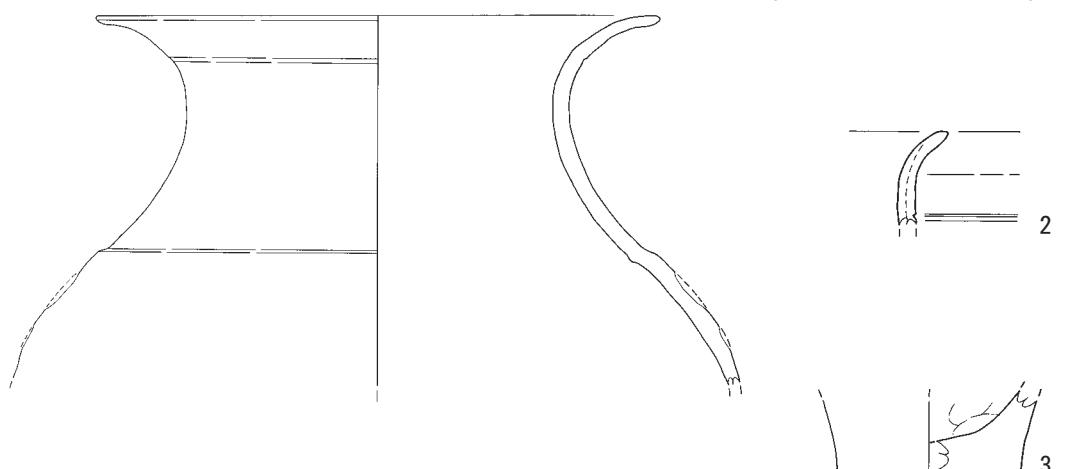
第82図 庵寺遺跡 A区第3黒色土出土遺物実測図 (S=1/3)



第83図 庵寺遺跡 A区第3黒色土・暗灰色粘質土土層図 (S=1/80)



第84図 廬寺遺跡 A区暗灰色粘質土遺物出土状況図 (S = 1/200, 出土遺物 S = 1/12)



第85図 廬寺遺跡 A区暗灰色粘質土出土遺物実測図 (S = 1/3)

うか。時期は19世紀代と推定される。5は肥前系陶器壺・甕類の肩部である。外部に沈線、肩上部には鋸釉の上に黒茶色の釉がかかる。内面は青海波のタタキ具痕跡を有する。九陶I-2期、16世紀末～17世紀前半の資料であろうか。6は砂岩製の砥石である。現存する4面に研ぎ面が確認される。7は土師質の焙烙である。

#### (7) 第3黒色土下層遺構（第81図）

第81図は第3黒色土（第68図12・13・25層）を除去した状況を示したものである。調査区東側の庵寺丘陵裾部には急激な落ち込みがみられ、周辺にはピットが確認されることから一種の加工段と判断される。ピットは加工段上部に比較的集中しており、崖を壁として利用し、崖状に垂木をかける構造の建築物があった可能性もある。ただし、いずれのピットも並んでおらず、掘立柱建物ほどの建築物を復元できるものはなかった。

#### (8) 第3黒色土層出土遺物（第82図）

1は弥生土器甕である。複合口縁部外面には櫛書きによる沈線が施される。口縁端部は外反し先端は丸みを帯びている。口縁部は薄く、松本石見V-4様式、出雲地域でいうところの草田3～4期<sup>4</sup>、弥生時代後期の資料である。2は弥生土器甕である。内傾する拡張された口縁部に擬凹線を有する。松本石見V-1様式、弥生時代後期初頭の資料であろう。第83図5層上層から出土している。周辺から接合しない破片資料が数点出土。3は鼓形器台脚部の破片である。大型で外面のハケなどが消失しており、鼓形器台の最末期、古墳時代前半頃のものであろう。4は土師器小型丸底壺である。体部内面ケズリ、外面はナデによって調整されている。ナメラ迫遺跡1類・清石遺跡土器溜まりの資料と巨視的にみると類似しており、古墳時代前期末～中期に位置づけられる。5も小型丸底坪であるが、4と異なり口縁部が大きく外反し、体部最大径を上回るいわゆる坪、九景川遺跡小型丸底壺A類である。外面には口縁部に縦方向のハケ、体部に横方向のハケが施される。九景川様相1、古墳時代前半の資料であろうか。

#### (9) 暗灰色粘質土層と出土遺物（第84・85図）

第3黒色土を除去すると灰白色の風化凝灰岩層があり、その下に灰オリーブ色あるいは灰白色の粘質土層がみられる。第3章五丁遺跡でも生活面の存在が想定しづらいので基盤層として調査を行わなかった土層であるが、若干土壤化し暗褐色を呈する部分が存在し（暗灰色粘質土）、調査区排水溝掘削で遺物が出土したため、全体にこの部分を掘削してみた。その結果、遺構は確認できな



写真7 弥生土器85-1の出土状況と基盤層のひび割れ

かったが、第84図に示したような弥生前期中葉、松本石見I-2様式頃の遺物を検出している。なお暗灰色粘質土を剥ぐと、灰白色粘質土が現れるが、この面には乾燥によるひび割れ痕跡が確認できた（写真8）。ひび割れ痕跡がそのまま暗灰色粘質土に被覆されていること、暗灰色粘質土も土壤化の度合いが少ないことから、乾燥・暗灰色粘質土による被服・風化凝灰岩層の堆積は比較的短時間に生じたものと考えられる。

1は弥生土器壺である。全般的に保存状況

が不良で、赤褐色を呈している。口縁部は朝顔状に極度に外反し、段も不明瞭である。下ぶくれで体部最大径は器高の下位にある。2は弥生土器甕である。如意状口縁を持ち頸部無段・片葉研状の沈線1条を巡らせる。3は弥生土器底部である。いずれも五丁遺跡出土資料より後出する資料であり、松本石見I-2様式に該当刷する前期前葉～中葉にかけての資料となろう。同時期の頸部に沈線を持つ弥生土器甕は上層の第2黒色土からも検出されており、この周辺で弥生前期中葉頃に人間の活動があったことは間違いないまい。

\* 1 仁摩町教育委員会1998『清石遺跡外発掘調査報告書』、同1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』

\* 2 是田敦「炭窯について」『尾白I遺跡・尾白II遺跡・家ノ脇II遺跡3区・川平I遺跡』島根県教育委員会2003年。

\* 3 奥壁と奥壁片方のみ煙道がつく事例は尾白I遺跡SG02（島根県教育委員2003『尾白I遺跡・尾白II遺跡・家の脇遺跡3区・川平I遺跡』）に類似する

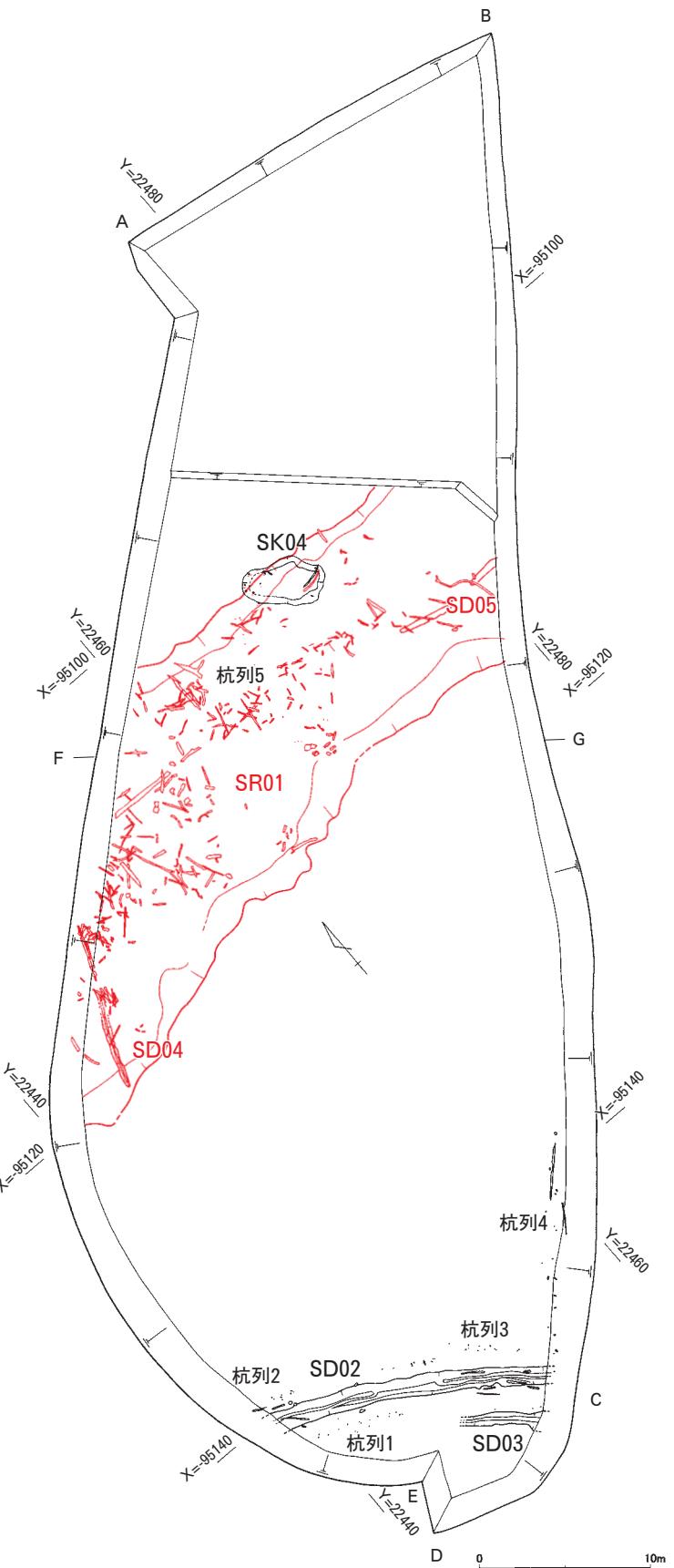
\* 4 赤澤秀則「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会。

### 第3節 B・C区の調査

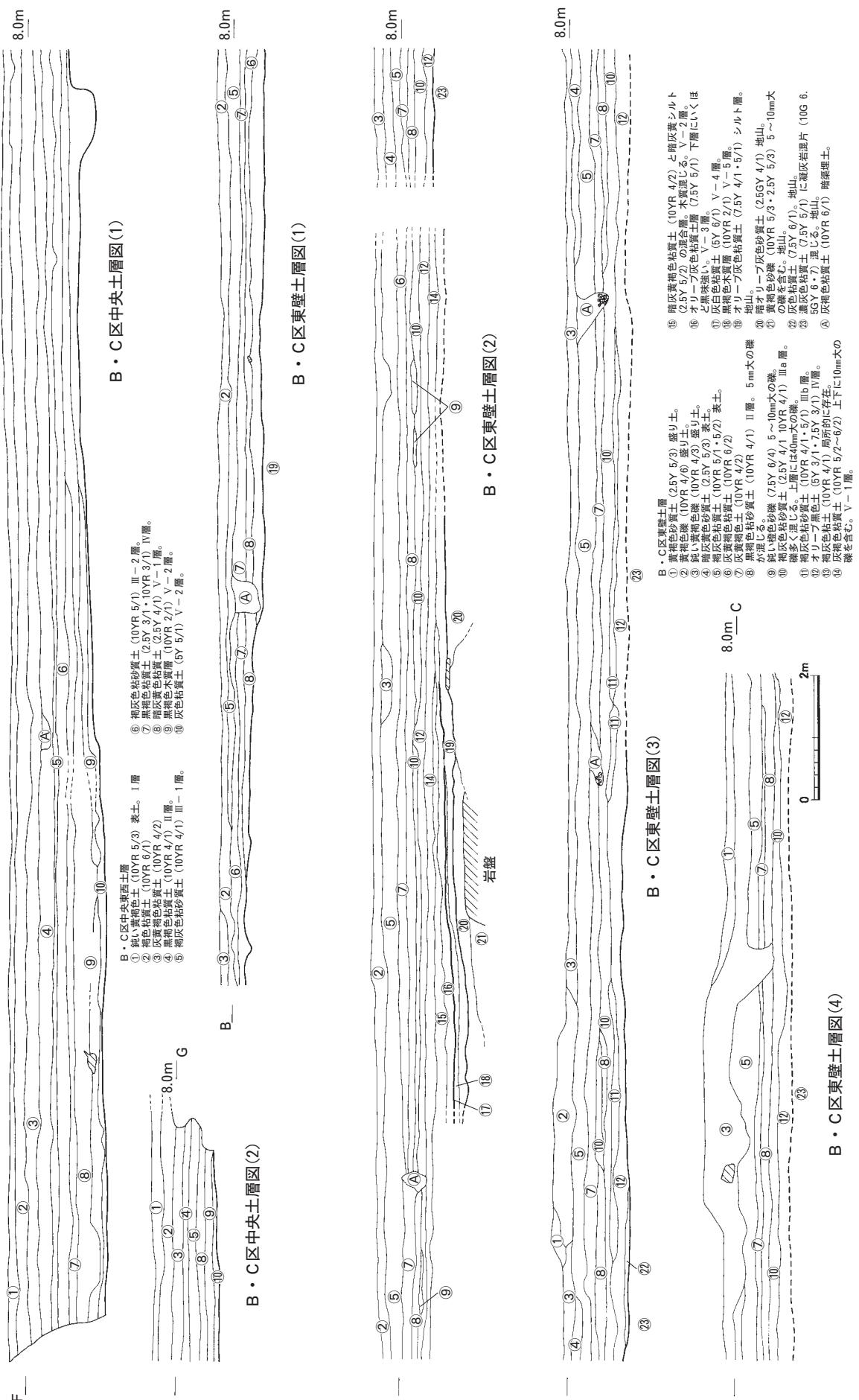
B・C区は庵寺の丘陵西裾下の谷部、国土交通省による用地買収前は標高8.3～8.5mの水田であった。調査の概要で述べたように平成19年4月に実施したトレンチ調査の結果、須恵器が出土したことから遺跡の範囲に含めた調査区である。また、廃土処理の関係から谷奥に当たる南側を5月14～8月10日に調査し（B区）、谷の出口側に当たる北側を8月17日～10月25日調査した（C区）。この過程でSR01を一時に調査することができず、時間的に余裕のあったC区では、B区よりも深く掘削を行っている。ただし、中心となるSR01については両調査区にかかること、両調査区間で遺跡の性格に大きな差異はないことから、特に断らない限り、B・Cをまとめて報告する。

調査区の基本層序（第87・88図）は上から盛り土・表土、次いで黒褐色粘質土（第Ⅱ層）があり、その下にやや明るい褐灰色の粘砂質土が存在する（第Ⅲ層）。さらにその下には、調査区の一部、後述する流路SR01に伴って低くなっている部分に黒褐色の粘質土が堆積（第Ⅳ層）、そして流路の堆積土（第Ⅴ層）がある。基盤層はⅢ～Ⅴ層の下に位置する灰色粘質土（上述のように場所によって堆積層の有無がある）で、調査区東側の庵寺丘陵近くでは凝灰岩の岩盤あるいは風化凝灰岩混じりの状況で、西側ほど風化シルト・粘質土化している。

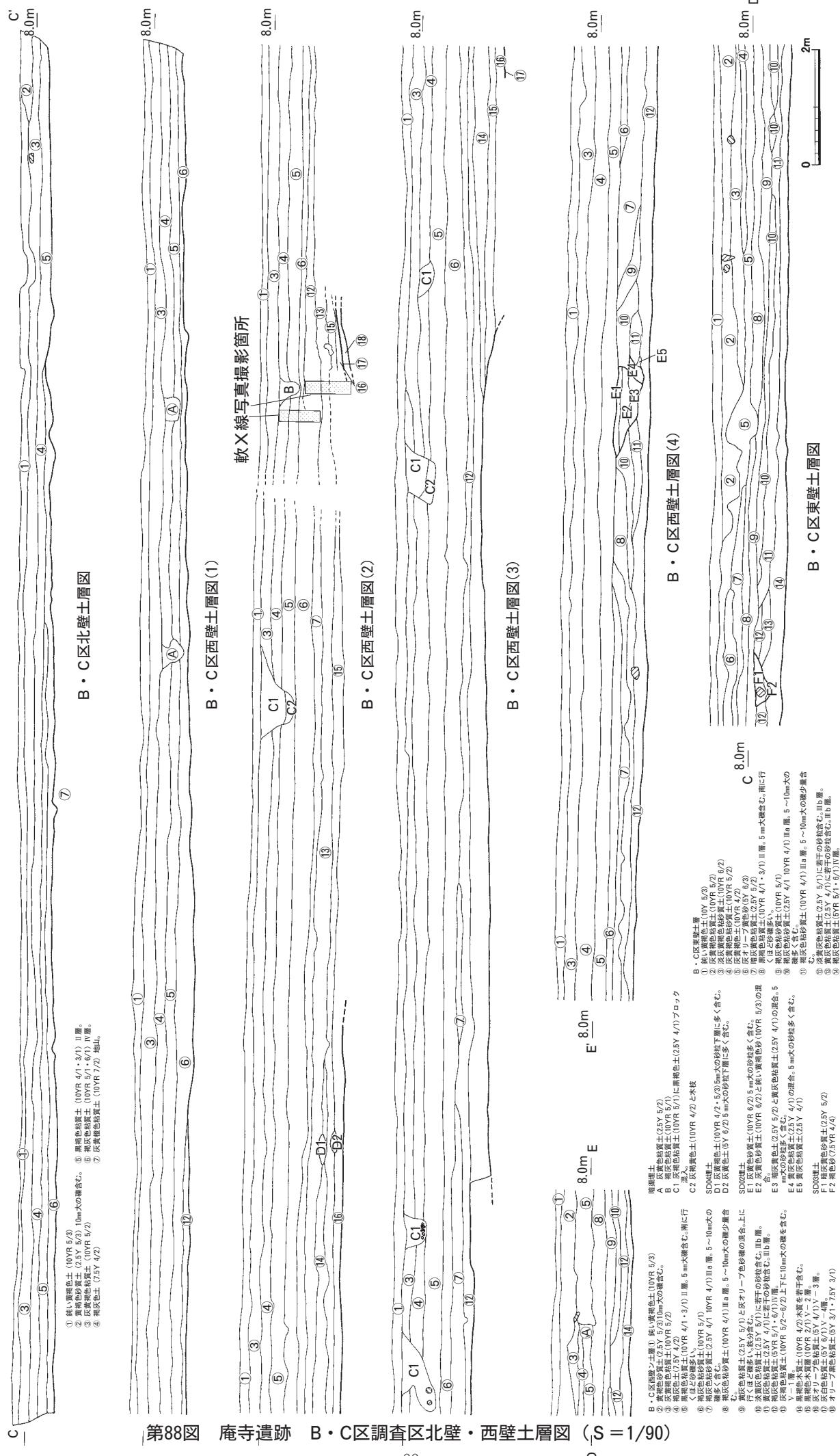
なお、調査前の地形では南側が谷奥、北側が谷出口であったが、上述基盤層は谷出口側の方が高い。また流路SR01も北東側が高く、南西側が低い。これは一見すると周辺地形と齟齬するように感じられる。しかし、実際には第65図のように、調査区北側に谷を閉じるように降る尾根があり、その尾根によって基盤層が高くなっている。

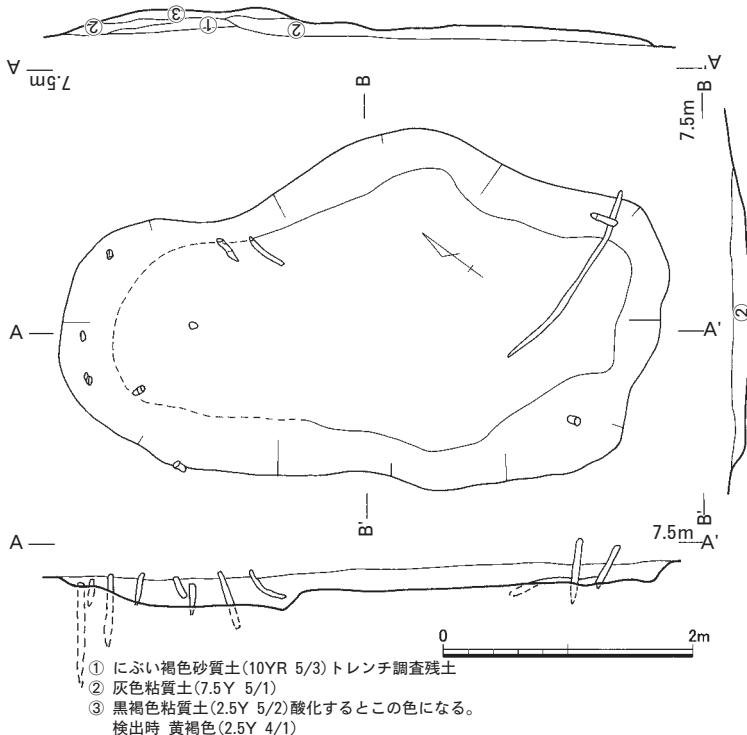


第86図 庵寺遺跡 B・C区遺構配置図 ( $S = 1/400$ )



第87図 庵寺遺跡 B・C区調査区中央・東壁土層図 (S=1/90)





第89図 廬寺遺跡 B・C区SK04実測図 (S=1/60)

で、断面レンズ状で周囲に杭の打たれた浅い土坑を検出した（SK04）。なお、IV層からは古墳時代前期の遺物が出土している。以上を上層の遺構として先に記述する。

この第IV層の下からはさらに埋没していた流路SR01を検出した。また、この流路上面で山側からの溝あるいは自然流路も確認している（SD04・05）。いずれも砂質土が堆積しており、粘質土を中心とするSR01の堆積物とは大きく異なり容易に確認できた。特にSD04は流入した木材が認められた。

最後に検出したSR01は幅10mほどの自然流路と考えられるが、堆積物は黒色の粘質土を中心とするもので、湿地的状況を呈していたと思われる。この流路内から田下駄34点を含む木材等を検出している。またこの流路に直行する杭列1カ所を確認している。

## 1. 上層の遺構

### (1) 土坑

#### SK04（第89図）

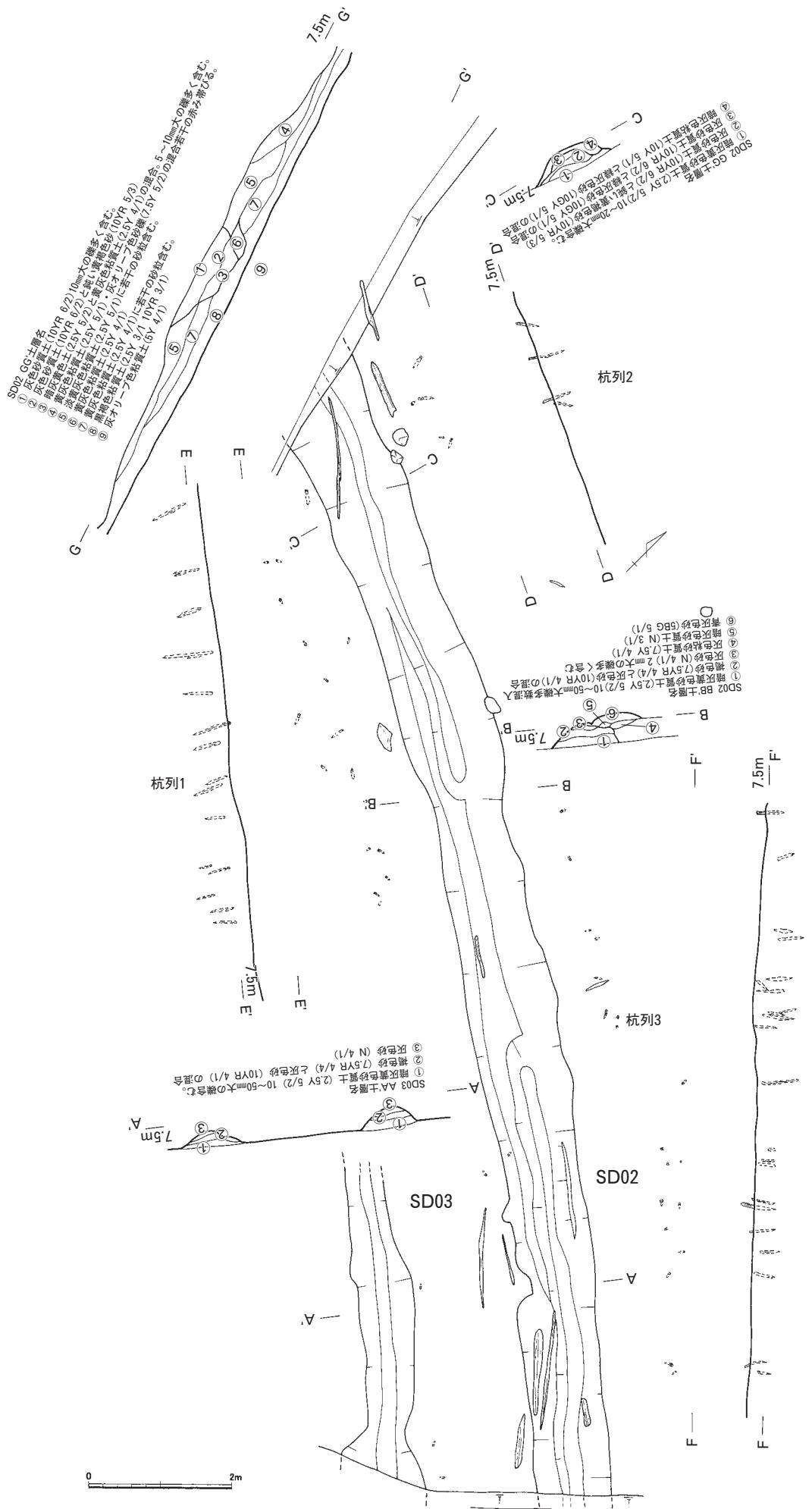
**規模と形態** 第IV層除去後に検出した浅い土坑である。完全に埋没したSR01の上に営まれており、埋土は第IV層であることから、SR01と区別して上層の遺構とした。規模は長軸4.8m、短軸2.9m程度の不整形をなし、断面はレンズ状で底が広く平坦である。また土坑の端部付近には若干の杭列が確認できる。ただし、杭がうち込まれた時期は厳密には特定できない。埋土は第IV層の黒褐色粘質土であった出土遺物は上述杭以外にはない。

**時期と性格** SR01が完全に埋没し、いったんほぼ平坦となった段階で第IV層中から堀込まれた土坑である。土器の出土がないことから年代の特定は困難であるが、第IV層出土遺物からは古墳時代前期～中期の年代が与えられる。このようにみると、第3章五丁遺跡の調査で触れた浅いレンズ状を呈し、杭列を周囲に打つ土坑（B区SK09-第20図参照、C区SK18～20-第26図）と同様の時期・

るものと考えられる。またこの谷全体の流路は谷のさらに西側・現在の水路側に存在しており、あくまでA区に発する小流路であると考えられる。

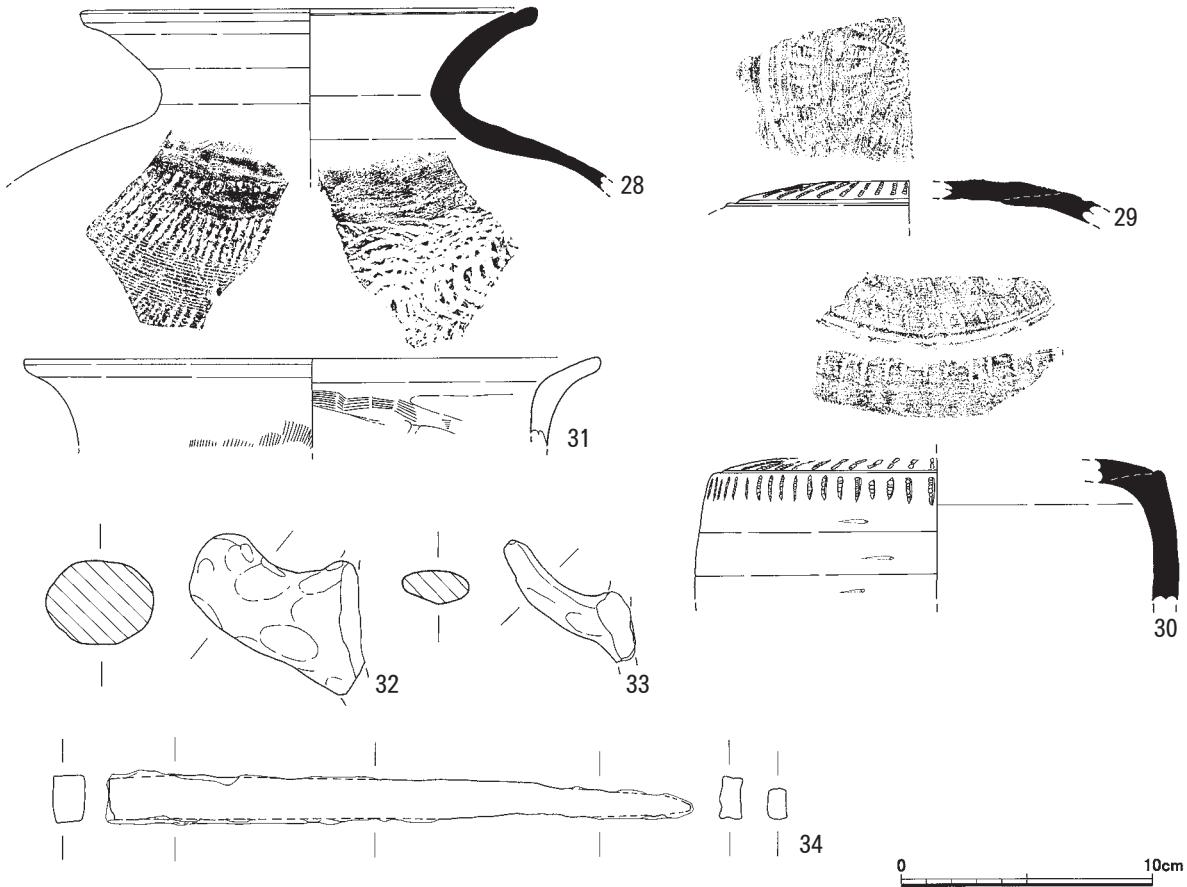
調査区では調査区南端のSD02・03付近の第III層上面で奈良平安時代の遺物包含層を調査、その下からSD02・03を検出した。これらの溝には杭列が伴っており、畦畔であった可能性が高い。SD02・03自体からは耳環を含む古墳時代の遺物が出土している。このほか調査区に東壁近くでも杭列を検出している。

次いで第IV層を除去した段階





第91図 庵寺遺跡 B・C区Ⅲ層出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第92図 庵寺遺跡 B・C区III層出土遺物実測図（2）（S=1/3）

構造を有しているといえる。五丁遺跡のこれら土坑からは木製農耕具片が出土しているので水田耕作に伴う溜め升的遺構と評価したが、本例も同様のもであろう。

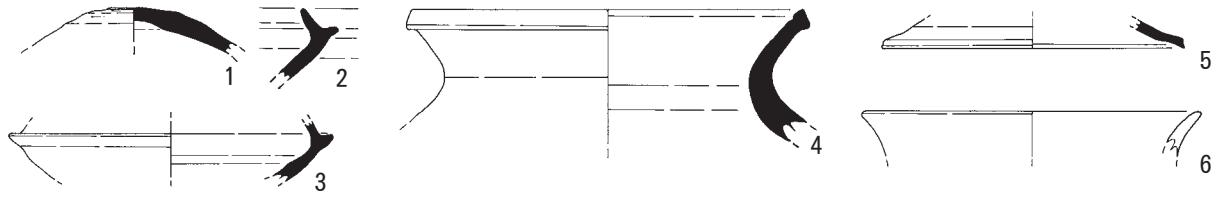
## (2) 溝・杭列

### SD02・03、杭列1～3（第90図）

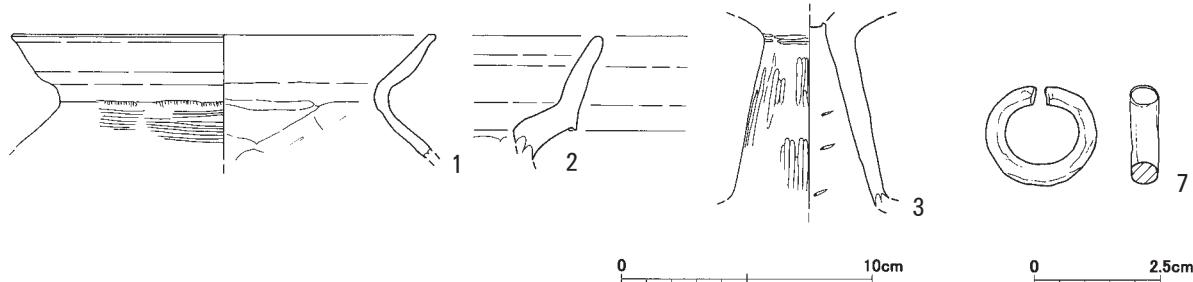
**規模と形態** 調査区南端付近で確認した溝である。2条とも南東から北西に降るもので、いずれも端部は確認していない。第90図GG'断面を確認すればわかるように、この溝の両側には若干の砂を含む高まりが確認され、これらがすべて第III層（第88図のCC'断面7層）に被覆されている。また、ほぼこの高まりの中に収まる杭列が溝に平行して確認されている（杭列1～3）。なお、杭列に添って横に渡した木もある。一部は溝の流水によって運ばれたものと考えられるが、一部は本来的に杭間に横架させていた構築物であろう。結論的には五丁遺跡で確認された畦1・2同様の畦畔遺構とみられる。

溝本体の規模はSD02が幅約1.3mである。SD02はBB'・GG''断面で確認できるように厳密には2時期が存在するようである。すなわちGG'の7層から堀込まれている、6層を堆積土とする溝と、5層上から堀込まれている、1～3層を堆積土とする溝である。ほぼ同じ場所で繰り返し畦状遺構と溝が営まれたのである。どちらも堆積物は砂・砂質土である。次いでSD03は幅0.8m程度の溝で調査区内で広く薄くなって消滅してしまっている（図版50-1）。溝状の構造を持っている箇所については砂・砂質土が堆積している。

**第III層出土遺物（第91・92図）** この溝・畦の周辺を中心として第III層から奈良平安時代の須恵器その他が出土している（出土状況は図版50-3参照）。1は古墳時代の須恵器蓋坏である。頂部は



第93図 庵寺遺跡 C区SD01・02出土遺物図 (S=1/3, 7: S=2/3)



第94図 庵寺遺跡 B・C区IV層出土遺物実測図 (S=1/3)

ケズリが省略されるもの。2～6は須恵器蓋である。2・3は輪状のつまみを有するもの、4～6は端部が屈曲し下側に引き出される資料である。4～6は端部形状がナメラ迫遺跡のI類、江津市久本奥窯跡VI期の資料に類似する。7～14は無高台の壺である。7は体部がやや丸みを帯びるもの、8は急角度で立ち上がるものである。9・10は小型の資料。11～14は底部に回転糸切り痕を残し体部が直線的に外反する壺である。大きくみればナメラ迫遺跡のII類須恵器、久本奥窯跡のVII期に相当する。16～19は高台付壺である。高台は広がるもの(19)、下方に向けて引き出されるもの(17・18)があり、底部調整も高台の形態に対応、前者はヘラ切り後者は回転糸切りである。時期は前者が久本奥窯跡のV期・後者がVI期の資料となる。20は墨書き土器であり壺体部外面に正位で「□(土偏の文字)」が墨書きされる。21は穂。23は高壺の脚部である。24は体部が逆くの字に内反する資料で底部内面はきれいにナデられていることから壺類と考えられる。底部ヘラ切り。五丁遺跡出の口縁が屈曲する壺(第47図30)のような特殊な器種であろうか。25は短頸壺の口縁部である。26・27は須恵器壺類の底部である。26は底部外周にケズリを施す。27は内外面にハケ状工具痕を残す。また底部内面外周におろし目のような刺突痕跡があり、鉢状の資料である可能性もある。29・30はともに小片であるが、ハケ状工具木口を当てた刺突文を施す点に特徴がある。29は平瓶あるいは提瓶の一部と考えられるが、体部上面あるいは正面肩に沈線、刺突3条を施す。30は瓶類あるいは長頸壺の肩部と考えられ、角部分の頂部側に2条、体部側に1条の刺突を施す。31は土師器甕片、32・33は甕取手である。総じて土師器・煮炊具の出土量は少なかった。以上の資料は、輪状つまみを持つ蓋(2・3)が出雲地域の編年では8世紀前半代に位置づけられるものであるが、それ以外の時期の判断できるものは概ね久本奥窯跡のV～VII期(中心はVII期)の資料、8世紀後半～9世紀代と位置づけることができよう。34は長さ23.2cm、重さ230gを測る大型の釘である。

#### SD02・03の出土遺物 (第93図)

これに対し、SD02・03埋土から出土している資料は第93図の通りである。1は古墳時代的な蓋壺で、頂部外面を調整しない口径の小型化した資料である。7世紀後半。2・3は古墳時代の須恵器壺身で、詳細は不明であるがかなりの退化などから7世紀前半の資料となろう。4は頸部をくの字外反させ端部のみを肥厚させる甕である。類似品が中祖遺跡III区礎石建物跡から出土している<sup>\*1</sup>。5は口縁端部を下方に若干引き出す須恵器蓋で、須恵器蓋の最終段階の資料であり8世紀後半以降

9世紀代と考えられる。6は土師器の小型の甕である。7は長径2.9cm、短径2.6cm、太さ0.7cmの橢円形を呈する銅製の耳環である。鍍金の有無は不明である。

**SD02・03の時期と性格** 第Ⅲ層出土遺物は世紀後半以降9世紀代と考えられ、SD02・03出土遺物は全体としてみると7世紀代の資料(1~3)と8世紀後半以降9世紀代の資料(4・5)が併存する。前述のように第Ⅲ層がSD02・03被覆しているのでSD02・03を7世紀、これらが8世紀後半~9世紀に被覆されたと考えて矛盾はないが、第Ⅲ層出土遺物はSD03が平坦になって溝として認識できなくなった部分から出土しており、SD02・03の遺物出土状況は第Ⅲ層遺物の出土状況と酷似しているといえ、むしろ第93図の1~3の方が小片で流入した遺物である可能性がある。同時代の耳環についてもこれが溝に廃棄されたと考えることもできるが、溝の先端側丘陵上の庵寺古墳群あたりから崩れ落ち混入した可能性も想定してよいだろう。結論的にはSD02・03の年代は第93図4・5の資料から判断するべきで、8世紀後半~9世紀であるとみられる。

以上をまとめればSD02・03は杭列、砂を含む畦状遺構と一体として構築され、8世紀後半~9世紀頃に機能していた畦畔と考えるのが妥当であろう。

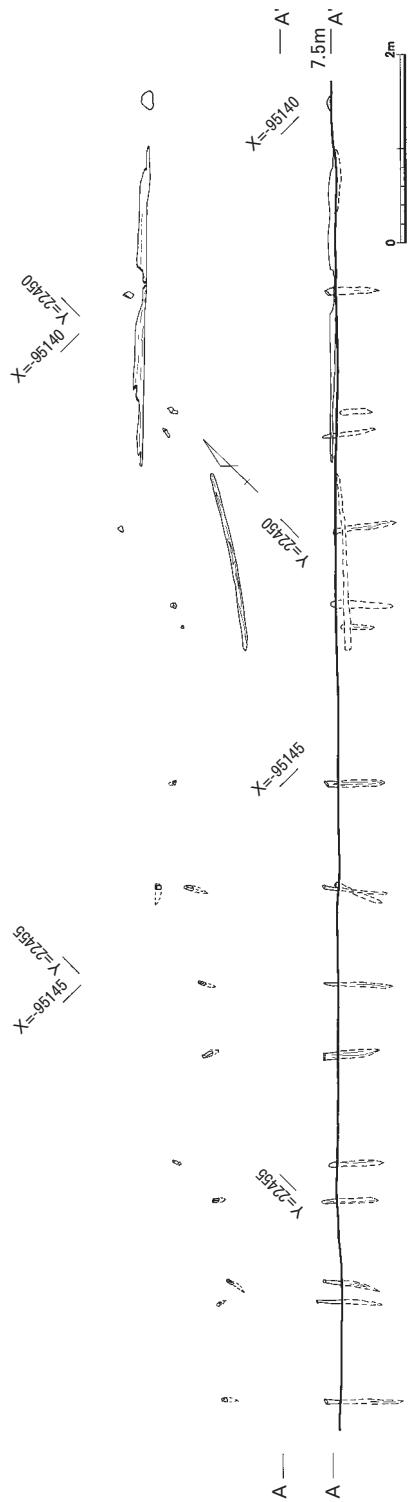
#### 杭列4(第95図)

**規模と形態** 調査区東側道路際で検出した。標高7.5~7.8m付近で横に並べた木と遺存状況で長さ50~60cmの杭列を約11mにわたって検出した。杭列北端付近で横断面の土層も確認してみたが堆積状況に変化はみられなかった。第88図BB'断面の10層(Ⅲ層に相当)上から打たれているものと考えられ、横木と一体となって機能した者と考えられる。

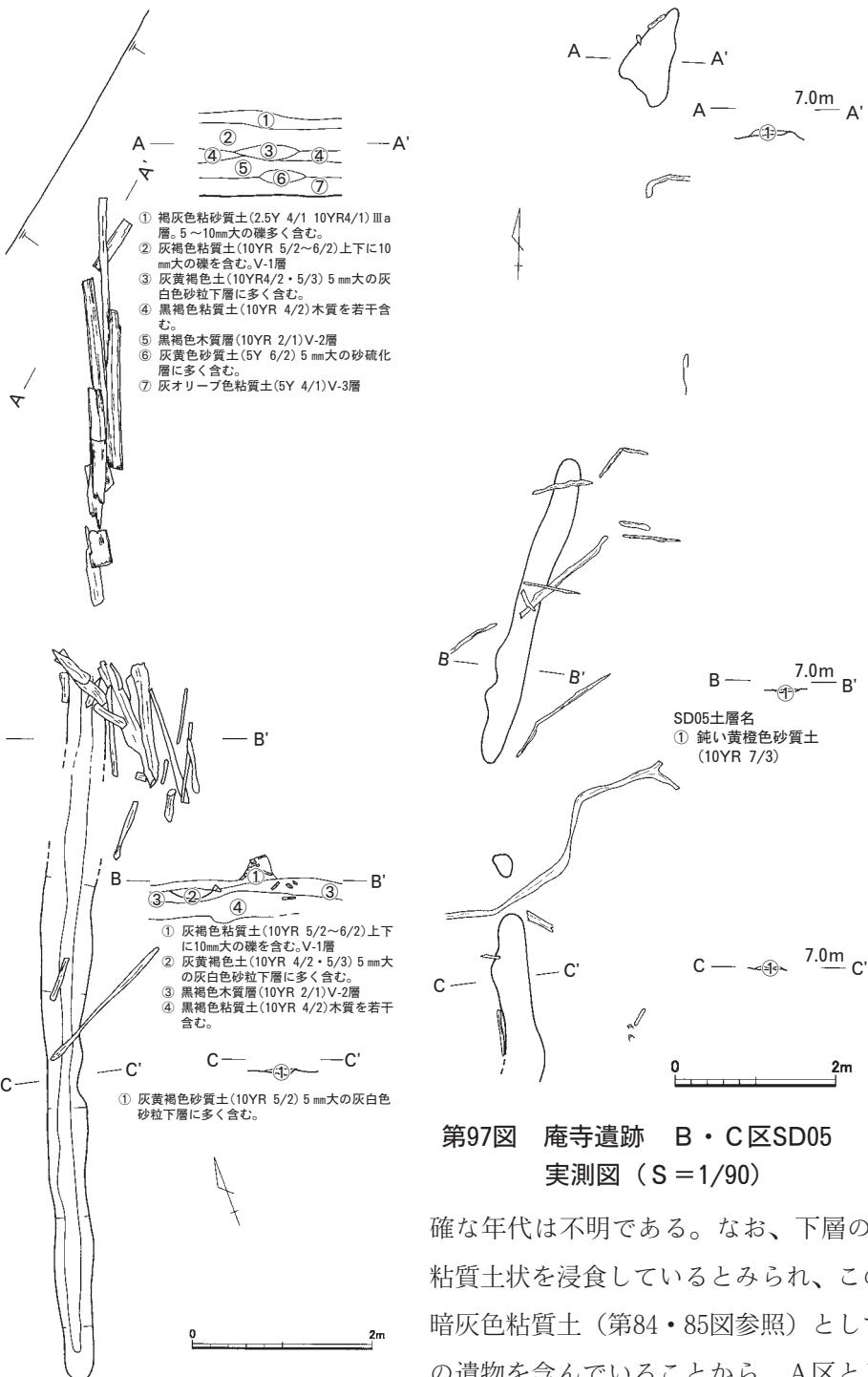
**時期と性格** 杭列に関わると断定できる遺物はなく、時期は不明であるが、先述のSD02・03、およびそれに伴う杭列と打たれた面が同じである点などからみて、古墳時代後期以降、おそらく奈良・平安時代に設けられたものであろう。性格は不明であるが、現在の水田際に位置するものであり東側が傾斜面になることを想定すると、水田の東側を区画したものであろうか。

#### 第IV層出土遺物(第94図)

第94図に示したのは、第IV層中から出土した遺物である。第IV層はSK04の埋土で、後述する下層の遺構SR01が埋没後、調査区全体がほぼ平坦になったときの土層でもある。したがって、上層の遺構の上限、下層の遺構SR01ほかの年代の下限となるものである。1は単純口縁を持つ土師器の甕である。頸部外面には横方向のハケを残す。口縁は全体に内湾、端部のみ外側に引き出される。2は弥生土器複合口縁の甕である。上端は丸みを帯び厚みも残る。複合口縁部外面は摩滅が著しく、



第95図 庵寺遺跡 B・C区杭列4  
実測図 (S=1/80)



第96図 庵寺遺跡 B・C区SD04 実測図 (S=1/80)

A種刃先痕が残る)の年代観とも整合するものである。

### (1) 溝

#### SD04 (第96図)

**規模と形態** 調査区西端中央付近で約10mにわたって検出した。SR01の最終堆積層である灰褐色粘質土 (AA'断面V-1層) の下で確認されており、田下駄を含め多くの木材が溝に添って検出されている (ただし、厳密にSD04内出土であるかについては不明である。BB'断面の木材出土位置参照)。これらのことから、溝には水流があり、木材が流れ込む状況にあったと考えられる。南東か

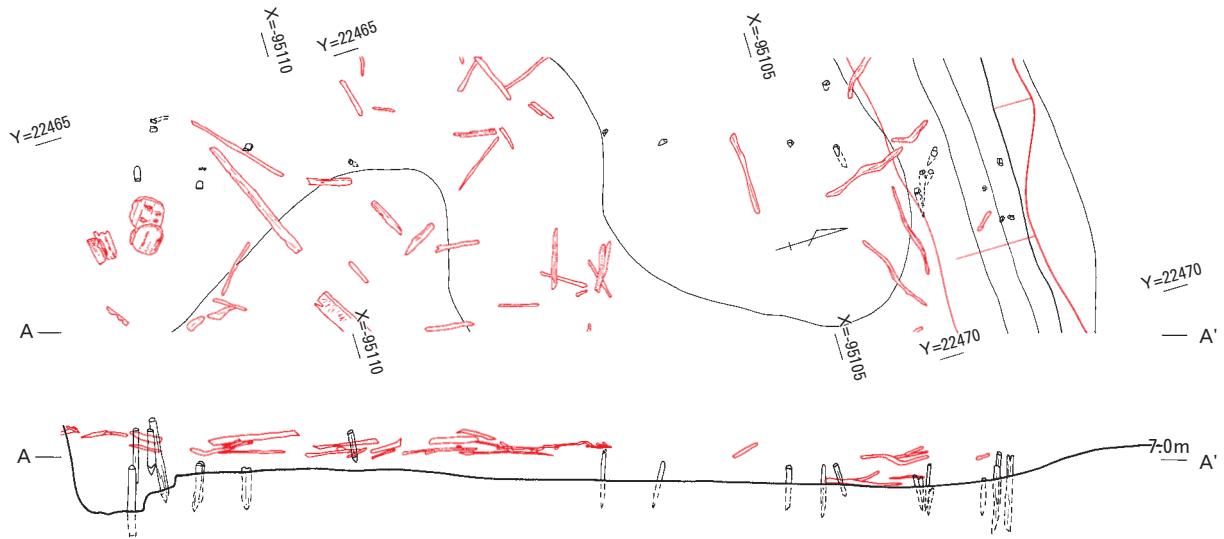
現状では擬凹線等を確認できないが存在した可能性も否定できない。出雲地域での草田編年3期の資料とみられる<sup>\*2</sup>。3は土器高坏脚部である。円盤充填技法、脚外面には縦方向のミガキが確認される。坏部が欠損するため詳細な時期は不明であるが、古墳時代前期の資料とみてよい。このように、第IV層は古墳時代前期頃に形成されたとみられる。

## 2. 下層の遺構

下層の遺構は、第IV層の堆積以前、SR01が窪地状に残っていた段階の遺構であり、杭列5、SD04・05、SR01である。これらの遺構はいずれも土器の出土が全くみられず、正

第97図 庵寺遺跡 B・C区SD05 実測図 (S=1/90)

確な年代は不明である。なお、下層の遺構、特にSR01は灰色粘質土状を浸食しているとみられ、この灰色粘質土はA区では暗灰色粘質土 (第84・85図参照) として弥生時代前期中葉以降の遺物を含んでいることから、A区とB・C区の土層の厳密な対応関係は不明ながら弥生時代前期中葉以前には遡らないであろう。これは田下駄ほか多量の出土木製品 (多くは鉄器による



第98図 廬寺遺跡 B・C区杭列5実測図 ( $S=1/80$ )

ら北西に流下する。ただし、検出した溝は上幅で約0.3m程度で、砂質土の堆積物を持つもののさして水量があったとは思われない。また、確認できるのはSR01内の概ね標高7.0m以下の地点のみで、IV層の直下に基盤層が存在する場所では確認できなかった。

**時期と性格** 出土遺物はSR01との分離が難しく、SR01出土品で述べるが、第104図の1などはこのSD04の出土遺物である可能性が高い。性格は不明であるが、SR01方向に伸ばされた素堀の溝である。

#### SD05 (第97図)

**規模と形態** 調査区中央SR01内の東辺で東西方向に約14mの間で断続的に検出した。検出面はSD04同様にSR01最終堆積層である灰褐色粘質土の下である。幅は最も広いところで約30cmで、厚さは5cm程度である。SD04のように溝に添って木製品が堆積した痕跡もみられないため、存続時期はきわめて短いのであろう。

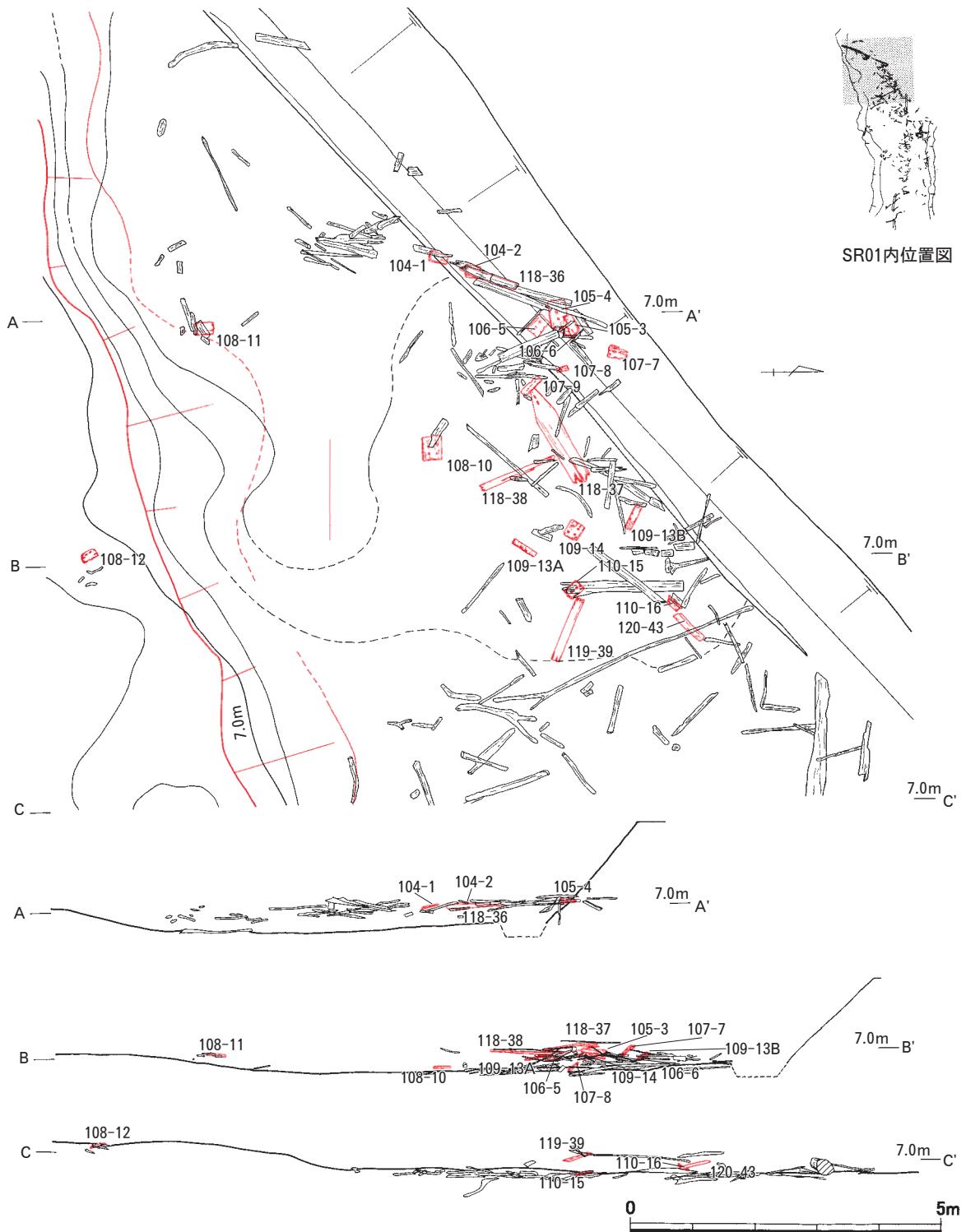
**時期と性格** にぶい黄橙色砂質土の帯として検出しており、大変浅いことからSR01のある時点(流量が増え鉄砲水的状況になった際の)の流路そのものである可能性もある。時期は不明である。

#### (2) 杭列

##### 杭列5 (第98図)

**規模と形態** SR01中央付近でちょうど流路に直行する方向に渡された杭列である。C区側調査時に検出したため、B区側の状況は不明である(第98図はC区側のみの図面である)。検出はSR01の最上層埋土内であり、おそらくSR01の最終埋没時点まで遺存していたものと考えられる。なお杭列の縦断については、北端付近で土層堆積状況を確認したが、土手のようなものは認められず、杭単独で機能したのであろう。また、周辺には水平に堆積する板材ほかが認められたが、特に杭列5に引っかかってまとまっている状況は確認できなかった。すなわちSR01の幅いっぱいに滞水し、それをせき止めていえるような構造物であったとは考えづらい。下が通水する木道的形態であろうか。

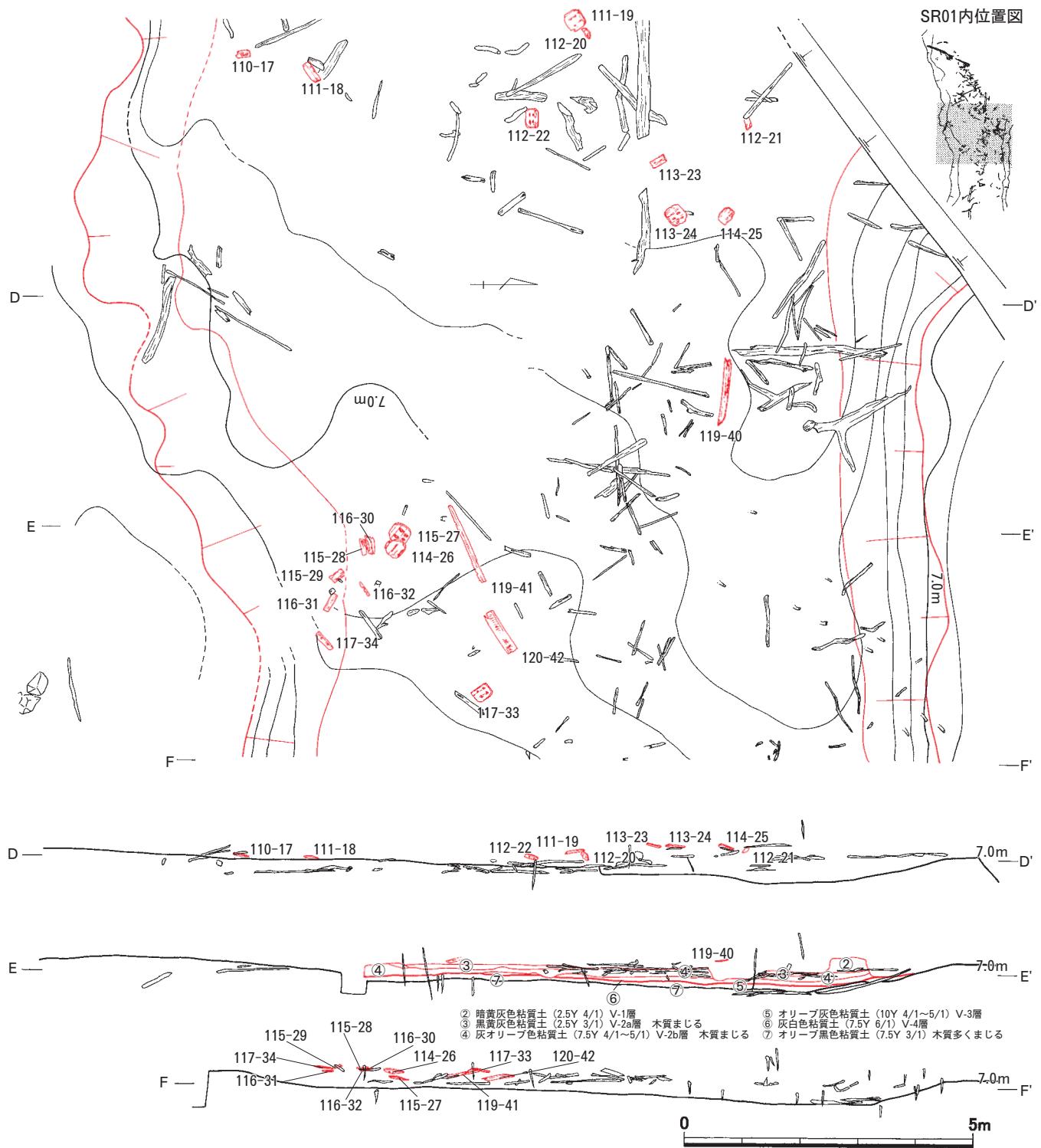
**時期と性格** 出土遺物はなく、設営時期は不明である。性格については上述のようにSR01の東辺



第99図 庵寺遺跡 B・C区SR01(北)実測図・遺物出土状況図(1)(S=1/100)

で東西方向に約14mの間で断続的に検出した。検出面はSD04同様にSR01最終堆積層である灰褐色粘質土の下である。幅は最も広いところで約30cmで、厚さは5cm程度である。SD04のように溝に添って木製品が堆積した痕跡もみられないため、存続時期はきわめて短いのであろう。

**時期と性格** 杭以外の出土遺物はなく詳細な時期は不明である。にぶい黄橙色砂質土の帶として検出しておらず、大変浅いことからSR01のある時点（流量が増え鉄砲水的状況になった際）の流路そのものである可能性もある。時期は不明である。

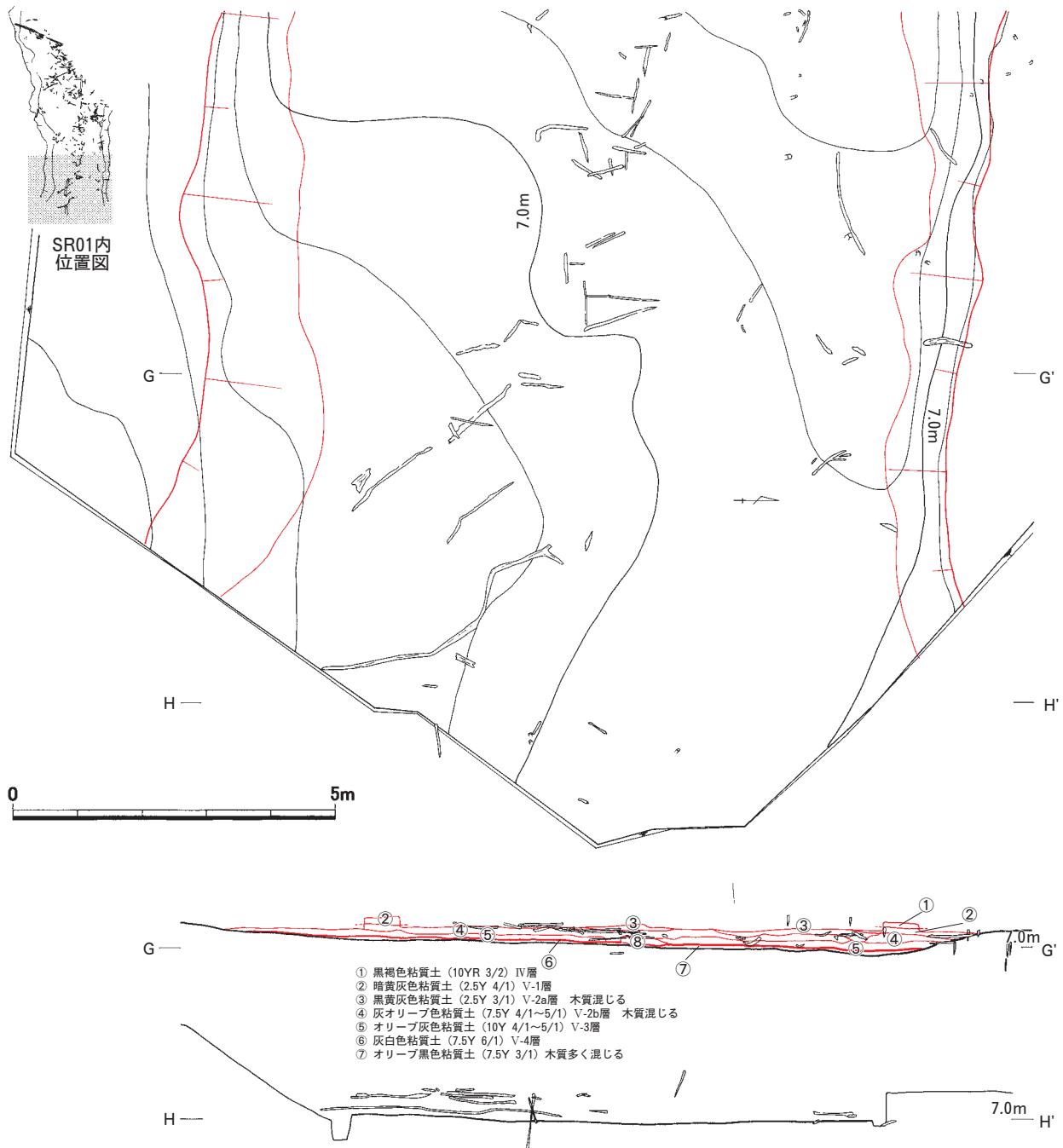


第100図 廬寺遺跡 B・C区SR01(中) 実測図・遺物出土状況図(2) (S=1/100)

### (3) 自然流路

SR01 (第99~101図)

**規模と形態** B・C区中央をほぼ東西に、東側庵寺丘陵から西に流下する自然流路の痕跡である。第IV層黒褐色粘質土を剥いだ下で初めて検出しており、既述のようにIV層以上には全くその痕跡を残していない。検出状況では幅は約12m。EE'断面に見えるように北側に最も低い部分がみられ、肩も北側は明瞭なのに対し、南側はなだらかな傾斜で肩は若干不明瞭である。また、流路の先端はA区であるがこちらでは明確な形で流路痕跡を確認していない。なおB区(南側部分)は、調査が



第101図 廬寺遺跡 B・C区SR01(南) 実測図・遺物出土状況図(3) (S=1/100)

不十分であったため、第99・100図に示した底部の等高線がC区(北側部分)と合致しない。

#### 土層堆積状況(第99~101図)

土層は調査区全体土層で第V層とした土層群に当たり、上から暗黄灰色粘質土(V-1層)、黒灰色粘質土・灰オリーブ色粘質土(V-2層)、オリーブ灰色粘質土(V-3層)、灰白色粘質土(V-4層)、オリーブ黒色粘質土(V-5層)が堆積する(場所によって若干色調は異なる)。なお、V-3層はきわめて薄く2~3cm程度の堆積層であり、図中ではラインで示している。きめの細かい灰白色粘土で洪水の末端などで確認されるものとみられるので、仁摩の平野側が溢水したときに一時的に堆積したものであろう。このうち、V-2層が木製品を含む層であり、V-3・5層からは後述するような一部の木製品を除き木製品は出土せず、多くが自然木であった。なお2・3・5層には多く平面や断面に付かした以外に多数の木質・葉などが含まれており、いわゆる湿地であつ

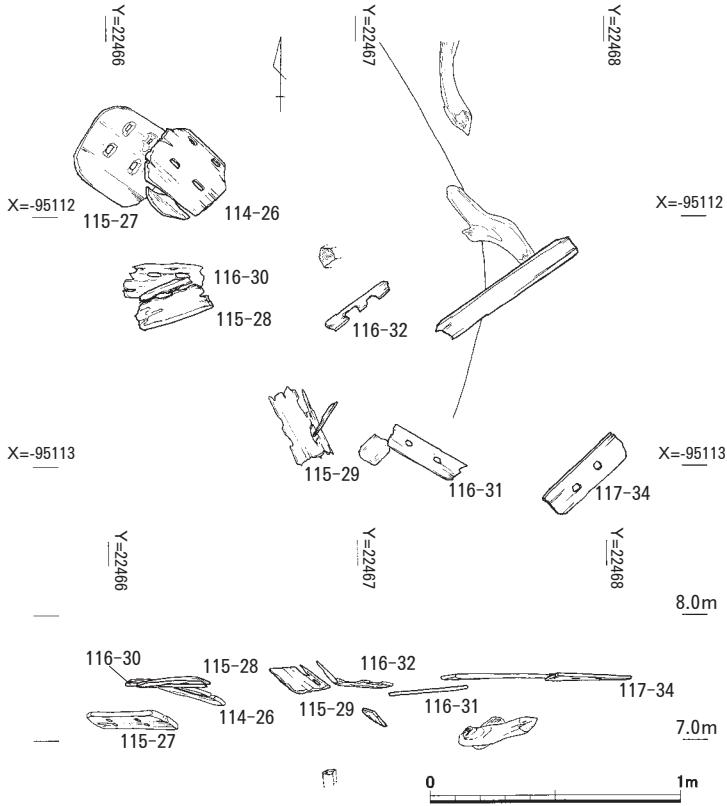
たことを窺わせる。なお砂質土の堆積はほとんどみられず、一言で言えば浸食作用の痕跡とそれを埋める堆積層が確認できない。流路の先端がすぐに庵寺丘陵にぶつかることから考えても水量の多い流路があったとは考えられないだろう。また、木製品・自然木の出土状況を見ても、中央付近にやや東西に固まる部分がみられるが（第100・101図）、木の方向が流水に平行（すなわち東西）になっている様子はなく、方向はばらばらである。また垂直分布をみても、水平に堆積しているというよりかは斜行して突き刺さるように堆積している木製品・自然木が多いことが認められ（拡大図102・103も参考）。

照）、幅12mほどの低地部全体が東西方向の水流によって帶水していたとは考えづらい。結論的には水流の影響をほとんど受けない滞水域、すなわち沼ないし湿地的状況であったとみられる。おそらく庵寺遺跡の谷本流がせき止められるなどして、基盤層形成時から窪地状になっていた部分に沼・湿地が形成されたのであろう。

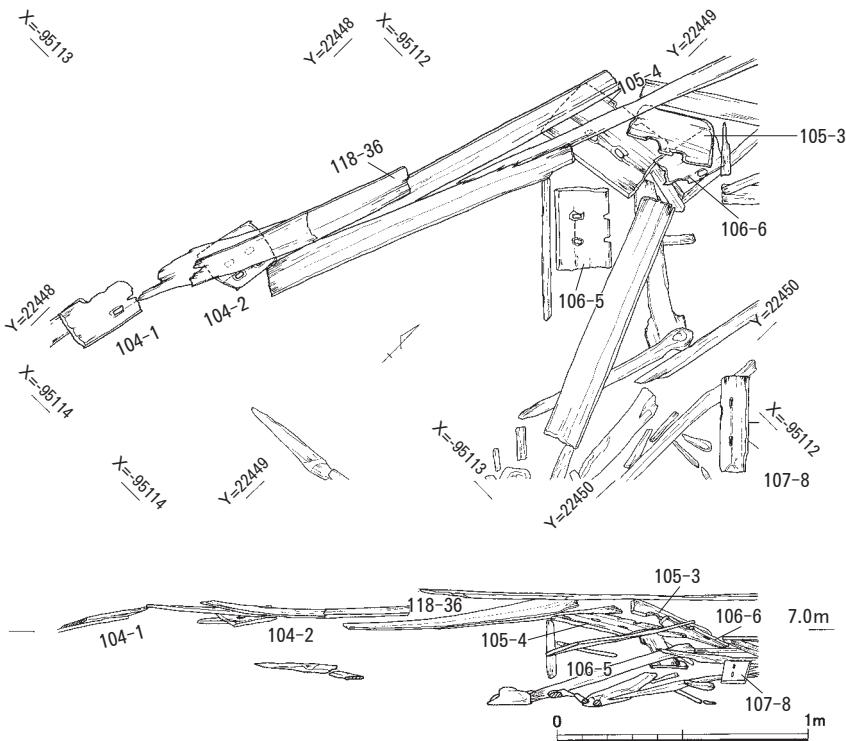
**形成・埋没の時期** 出土木製品については数が多いため、出土状況の理解とあわせ後述する。まず、木製品以外の土器その他の出土遺物は1点もなく、正確な時期は不明といわざるを得ない。SR01の最終埋土であるV-1層上を被覆する第IV層（黒褐色粘質土）の出土遺物の年代が古墳時代前期であることから古墳時代前期がその下限であり、上限はA区の基盤層灰色粘質土状上に確認された若干土壤化を受けた暗灰色粘質土（松本石見I-2様式の土器が出土）、弥生時代前期中葉より後と考えられる。

**木製品の出土状況について（第99図～103図）** 木製品は大部分がV-2層上面から出土しており、V-3～5層からは自然木の出土が中心であることは先に述べた。では下層から出土する木製品はどういう理解すればよいのであろうか。第102図は田下駄が集中的に出土した地点の出土状況拡大図である。まず平面的にみると、26・27の田下駄（第114・115図に掲載）、28・30の田下駄が隣接して出土していることが理解される。次にこれら遺物の垂直分布を確認すると、28・30がほぼ同レベルからの出土であるのに対し、26・27の出土レベルは大きく異なっており、27がV-3層相当のレベルから出土したことになる。

ここで、個別の遺物の遺存状況を確認してみよう。まず28・30の田下駄は、ともにV-1層出土ではほかの木製品と同レベルであるが、全体に輪郭を喪失、中心に近い部分のみが遺存するという不良な遺存状況である。これに対し、26・27の田下駄の遺存状況は異なっている。すなわち、V-1



第102図 庵寺遺跡 B・C区SR01田下駄多数  
出土地点A実測図 (S=1/30)



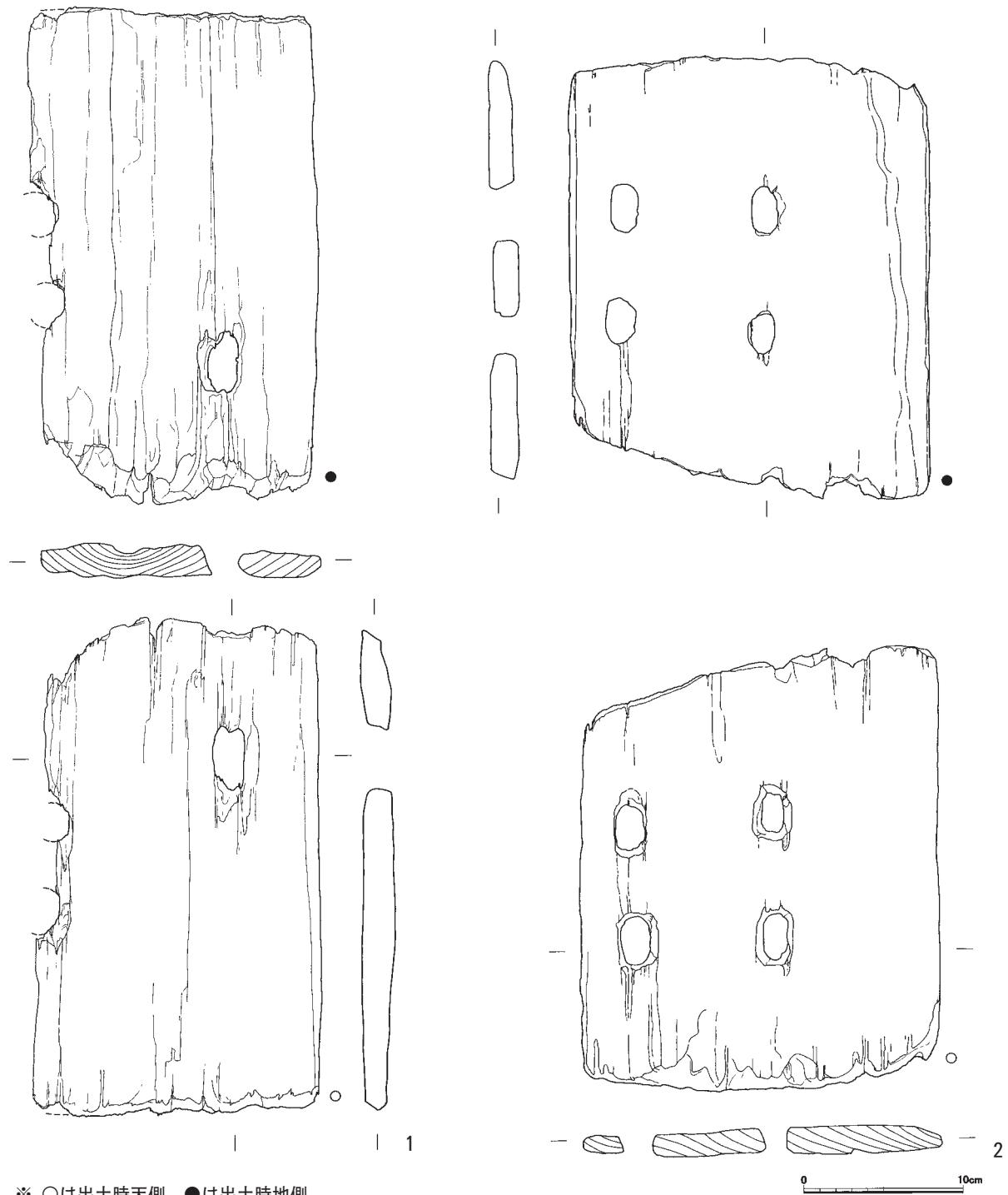
第103図 廬寺遺跡 B・C区SR01田下駄多数出土地点B実測図  
(S=1/30)

おり（第8章参照）、天側にケズリ調整がみられないのは保存状況により残らなかったのではない。その証拠として穿孔部分はきわめて保存状況良好である。同様の事例は第100図に示した19・20でも当てはまる。両者は平面的に隣接、19は出土時地側の保存状況が良好で天側は不良、これに対し下層から出土する20は天・地両面とも保存状況が変わらない（図版70）。なお、調査の手順上、上層の遺物ほど検出・取り上げまでにかかる日数が多くかかるので、V-2層上面出土の木製品については調査による検出後天側の劣化が進行した資料もある。しかし、出土状況写真をみても出土時点である程度の天側の状況劣化は確認できる（図版56、細かいひび割れのみ調査時の劣化である。）。

27・20の保存状況は、V-3層相当のレベルから出土する資料が、廃棄後すぐに土あるいは水にパックされているため、と考えるのが自然である。このように下層のV-3層相当レベルから出土している田下駄としてはほかに8・10・15・20が存在するが、いずれも天側・地側の保存状況がほぼ同様であるといえる（8・10・15はともに良好、20はともにやや不良）。一方、26ほかV-2上面から出土している多くの田下駄・木製品は出土時の天側の保存状況が悪く、地側のみ良好な保存状況を示しているので、出土時の状況で一定時間天側のみの腐食が進行する状況放置された後、埋没したのであろう。まず、V-2層上面出土の木製品とV-3層相当のレベルから出土した木製品は埋没時の状況が異なることが確認できる。

以上のような状況はそれぞれの遺物が埋没した時期と状況が異なることを示している、と一般的には考えられる。しかし、平面的な出土状況を見ると、前述26・27、19・20のように上層で田下駄が確認されたところの下層から田下駄が発見される例がある。また、上層の資料でも、平面的に近くに保存状況や形状の類似する田下駄の存在する組み合わせが多い（28・30、29・32、31・34、1・2、3・6、4・5、17・18、24・25）。これらは偶然的に近傍から出土した可能性もあるが、やはり2枚一セット、1足分が出土地してい可能性が高い。そこでV-3層相当の出土資料を見ると、

層出土である26の出土時の天側は、田下駄使用時の上面と想定され、一部に表面のケズリが確認されるもののきわめて遺存状況が悪いのに対し、地側（田下駄使用時の下面）の遺存状況はよい。一般的に出土時の地側は保存状況が良好であるのに対し天側は不良であることが多いが、V-3層出土の27（第115図・図版72参照）について、両面ともきわめて保存状況が良好であった。補足すると27は出土時の天側が田下駄使用時の下面、同地側は田下駄使用時の上面である。田下駄表面の調整は田下駄使用時の上面のみに行われて



※ ○は出土時天側 ●は出土時地側

第104図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図（1）（S=1/4）

出土時天側のみ保存の劣化した資料がないことが注目される。天側の劣化している資料は、天側が空間で一定時間が過ぎた後埋没したこと確認でき、確実にV-2層上面出土資料の埋没との間に時間差があることが確認できるのであるが、この意味においてV-3層相当レベル出土資料には、上層出土資料と確実に時間差があると言い得る資料がないといえる<sup>\*3</sup>。V-3層に含まれる木製品以外の自然木は持ち帰らなかったため、田下駄とそれ以外の遺物の遺存状況に差があるのか今となっては確認不能であるが、下層の田下駄は埋没させられた可能性があり、平面的な出土位置の近接とあわせて考えると、上層から湿地に埋め込むように「廃棄」された資料であると推測することが可能である<sup>\*4</sup>。

以上の検討から、出土している田下駄ほかの木製品は、その出土したレベルに関わらず最終的な埋没の時点がほぼ一緒であると考えられる。また、遺物が腐朽しやすい木製品であることを念頭に置けば、それぞれが「廃棄」されてから埋没するまでの時間幅も、劣化の著しい資料（28・30、29・32）が最も古く廃棄されたのであろうが、全体としてそれほど長くないと考えてよい。すなわち、田下駄を含む木製品は全体として同時性の高い資料群であると考えられ、以下そのように位置づけて記述する。なお、上層のほぼ同じレベルからの出土資料同士の例であるが、13の田下駄は出土時は2片の資料が接合したものである。資料の同時性をを示すものであろう。

#### SR01出土遺物（第104～120図）

出土遺物のうち、用途の明瞭なものはすべて田下駄であった。したがって田下駄として考えるとやや不審な点のある資料も単独式の田下駄の可能性のあるものとして扱っている<sup>5</sup>。確認できるものの多くは4孔であり、2孔間の広い方を前、狭い方を後ろと判断した。すべての資料に共通することとして、樹種がスギであること、また使用に当たっての足のアタリ痕跡がみられなかったことが挙げられる（そのためこの2点については特に記述しない）。また実測図中○の付してある図が出土時の天側であり、●の付してある図が出土時地側に当たる。部位名称については本書例言の凡例を参照のこと。なお117図35はSR01出土ではなくB区基盤層直上で発見したものであるが、同様の資料であるのでまとめてここで記載する。

#### 田下駄

1（第104図）は単独式横型田下駄の可能性のある資料である。緒孔は3孔と判断した。後ろ側の孔は平面穿孔なのか側面キリカキなのか不明、上面・下面の判断もできなかった。（右）側・（後）側は田下駄使用時の原型であるか不明であるが（右）端は摩滅痕跡がある。上下面とも未調整のI類型。木取りは心材である。2とセットの可能性が高い。

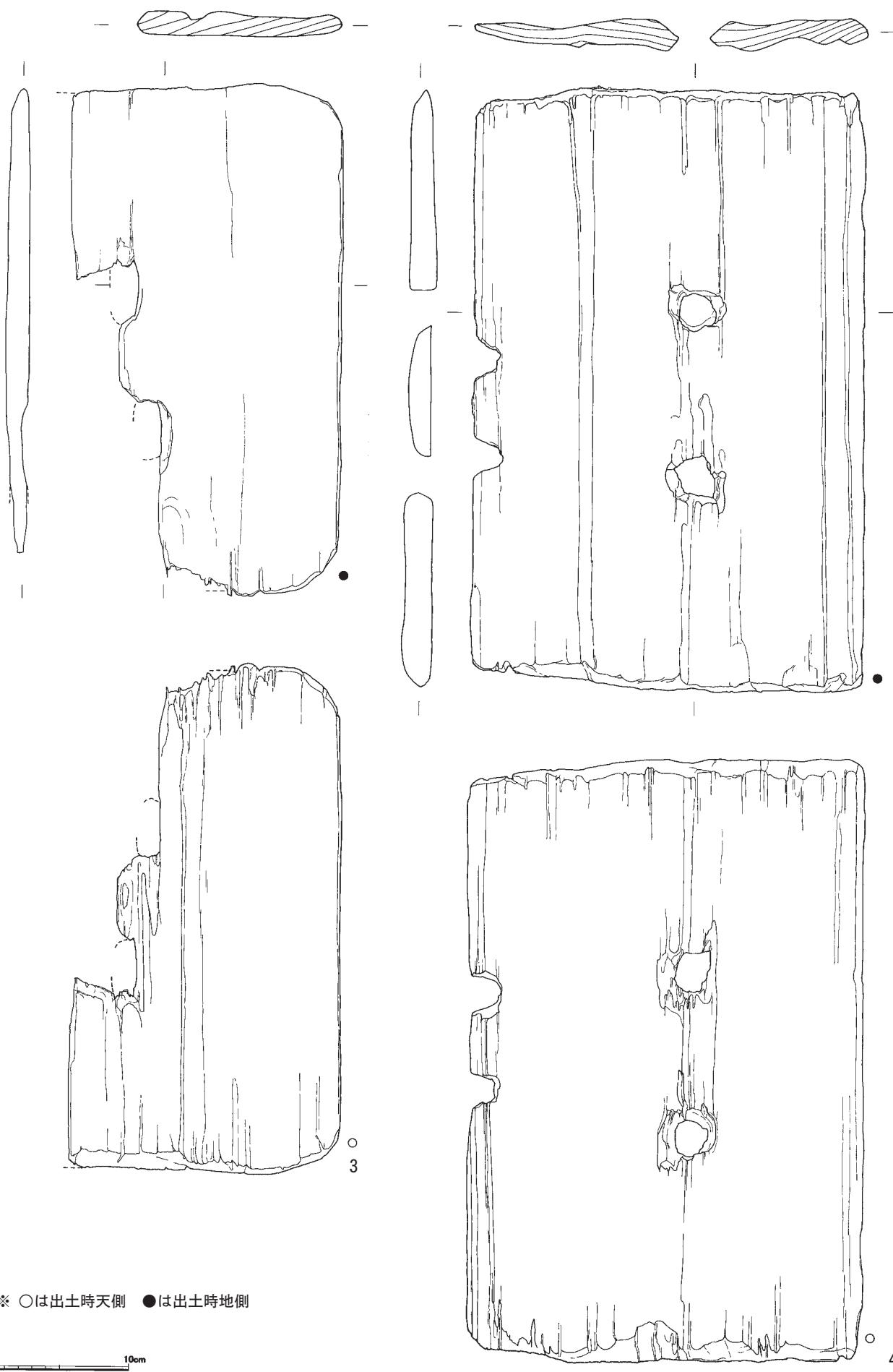
2（第104図）は単独式横型4孔田下駄で、完形品と考えられる。上面・下面の区別は緒孔の穿孔方向ならびに緒孔間の摩滅から判断した。左端下面が摩滅する。原材はVI 1類型。追い柾目材で中心方向を上面にしている。1とセットの可能性が高い。

3（第105図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。（後）端部は欠損し緒孔は2孔のみ確認される。上下面是緒孔間の摩滅により判断した。前後左右は不明。下面（左）端に摩滅がみられる。上面のみ若干の調整痕跡が確認され原材はB類。木取りは追い正目で中心方向を下にしている。6とセットか。

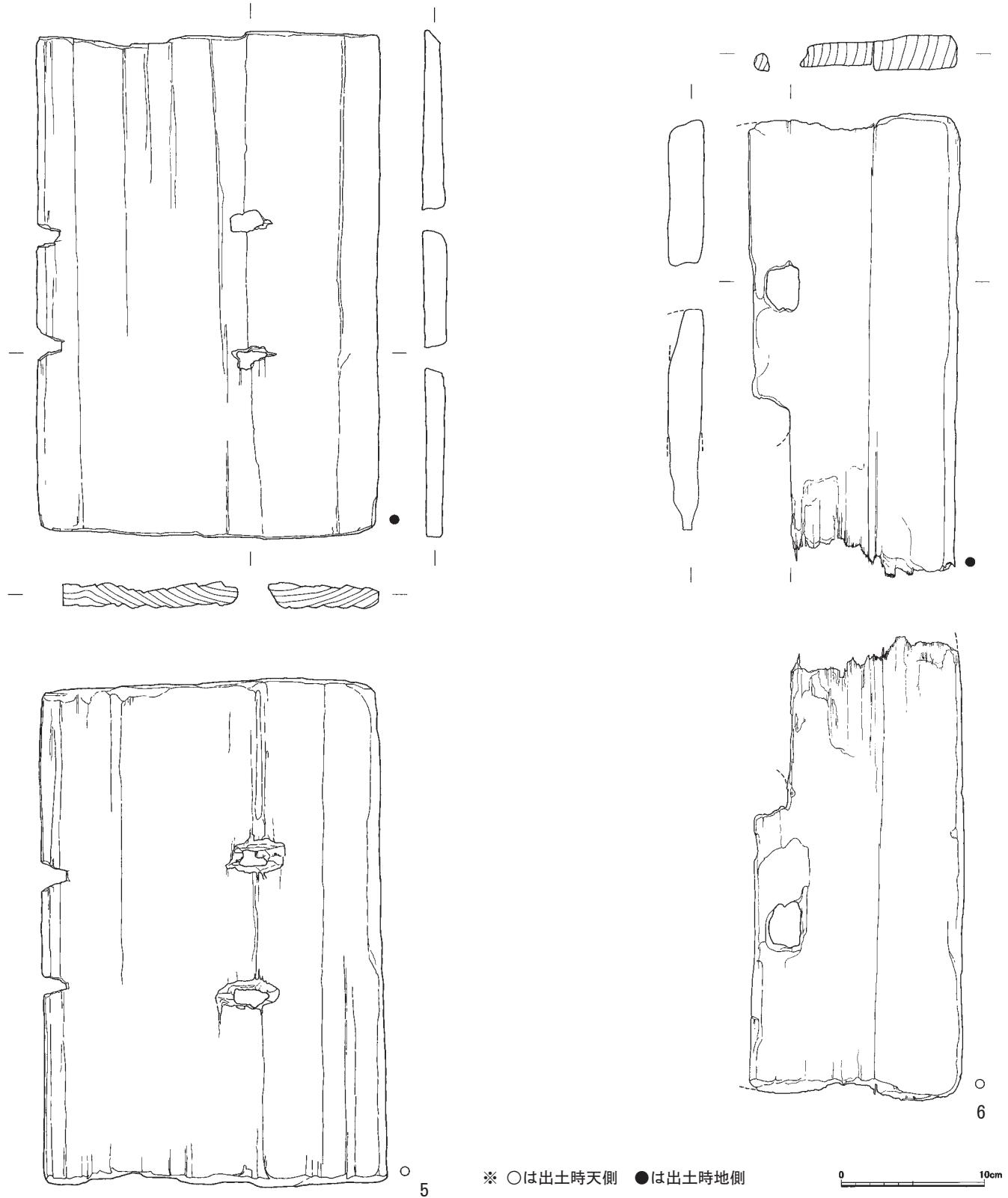
4（第105図）は単独式横型4孔田下駄の完形品である。緒孔の穿孔方向・緒孔間の摩滅により上下を判断している。前2孔は穿孔は両面から行われているが下面からの穿孔が主体、後ろ2孔は明瞭な側面キリカキであり、本体に欠損はない。前ならびに左端に摩滅痕跡があり、特に下面に顕著である。上下面とも未調整で原材はI類型。木取りは板目で中心方向を下にする。5とセットか。

5（第106図）は単独式横型4孔田下駄の完形品である。緒孔の穿孔方向により上下を判断している。前2孔は下面からの片面穿孔、後ろ2孔は明瞭な側面キリカキであり、本体に欠損はない。右端下面に若干の摩滅が、右前緒孔に穿孔時の木ッ端が残る。上下面とも未調整で原材はI類型。木取りは板目で中心方向を上面にする。4とセットか。

6（第105図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。（後）・（右）端部は欠損し緒孔は2孔のみ



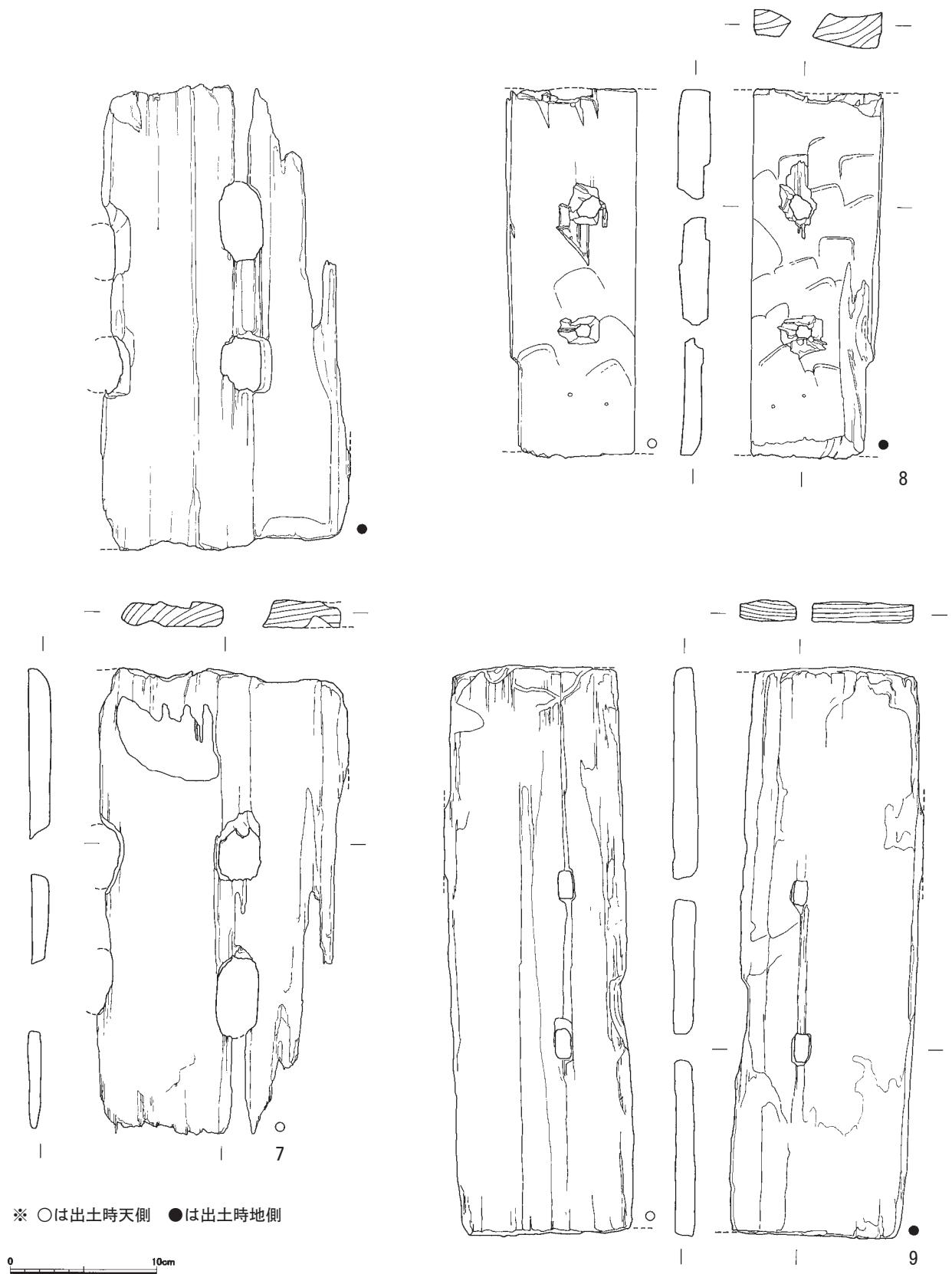
第105図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図（2）（S=1/4）



第106図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図（3）（S=1/4）

確認される。上下面是緒孔間の摩滅により判断した。前後左右は不明。上面（前）・（右）端に若干の摩滅がみられる。上下両面ともに若干の調整痕跡が確認され、原材はVI 2類。木取りは柾目である。3とセットか。

7（第106図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。（右）端部以外は欠損する。前後左右は確認できたが上下面是不明である。（上）面（前）・（右）端に若干の摩滅がみられる。原材はI類



第107図 龍寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(4)(S=1/4)

型。木取りは追い柾目で、中心方向を下面にする。

8(第106図)は単独式横型4孔田下駄と推定される。前後左右上下は不明。(前)・(後)端部は欠損し緒孔は2孔のみ確認され、(上)(下)両面より穿孔されている。上面(前)・(右)端に若干の摩滅がみられる。上下両面ともに幅3cm前後の曲刀刃先痕による調整痕跡が確認され、原材

はVI 2類。木取りは芯に近い追い柾目である。

9(第106図)は単独式横型4孔田下駄と推定される。前後左右は不明。上下は緒孔間の摩滅状況により判断した。(後)端部は欠損し緒孔は2孔のみ確認される。穿孔面は不明で両面であろうか。上面(前)端に若干の摩滅がみられる。上下両面ともに幅3cm前後の曲刃刃先痕による調整痕跡が若干であるが確認され、原材はVI 2類。木取りは板目で中心方向を下にする。

10(第108図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。端部の摩滅により上下を判断している。4孔ともノミ状工具によって、小さく両面から行われている。前下面に顕著な摩滅がみられる。上面は5cm程度の直刃刃先痕が良好に残り、下面是木割時に分厚く残ったと思われる部分のみケズリといったと考えられ5cm程度の曲刃刃先痕が残る(調整C類)。木取りは板目で中心方向を上面にする。

11(第108図)は単独式無孔田下駄の完形品と推定される。前後左右・上下ともに不明。保存状況は全般に不良で、調整の有無も不明であるが未調整のI類か。(上)面(右)端に若干の摩滅がみられる。木取りは枝分かれ部分である。

12(第108図)は単独式横型4孔田下駄である。緒孔の穿孔方向により上下を判断している。ただし全面的に依存状況が悪く、原材の調整等は不明である。木取りは柾目。

13(第109図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。出土状況で述べたように、B区内で前側B、後側Aの2片に分かれて出土したものが接合した資料である。上下は左右両端の角落としを泥離れをよくする加工の一種(すなわち下面)と判断して決定した。緒孔は小さく、ノミ状工具によって両面から穿孔されている。上面は幅6cm前後の曲刃刃先痕と幅4cm前後の斜行する加工痕が確認され、下面是斜行する幅4cm程度の加工痕が確認される。前者は田下駄成形後の加工痕である。また下面面取り部分は、幅2~3cmで刃端痕の明瞭に残るノミ状工具によって加工されている。斜行する工具痕跡には刃端痕跡が不明瞭であり、ヤリガンナ状の工具による連続的な加工の可能性も想定される。板目材であるが、年輪の湾曲はほとんどみられず、原材は大型材であったと考えられる。表面調整の時期は厳密には不明であるがII類の可能性が高い。

14(第109図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。4孔ともノミ状工具によって両面から穿孔されているが、穿孔時の加工痕は明瞭、緒の擦痕はなく使用頻度は低い模様。上面・下面とも幅5cm程度の曲刃刃先痕が良好に残り、上面の痕跡の割り付けから原材段階での調整と考えられ、原材はII類となる(写真9参照)。木取りは板目材。15とセットか。

15(第110図)は単独式横型4孔田下駄である。緒孔の穿孔方向により上下を判断している。前2孔は穿孔は両面から行われているが下面からの穿孔が主体、後ろ2孔も平面穿孔であり後端が欠損しているものと判断される。下面左端に若干の摩滅痕跡があるが、緒孔は加工痕跡が明瞭で薄くなった加工残部がそのま確認でき、使用の頻度は低い。上下面とも未調整で原材はI類。木取りは枝分かれ部分である。14とセットか。

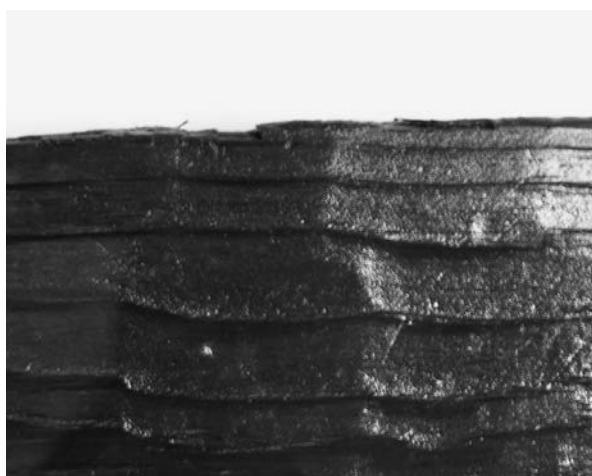
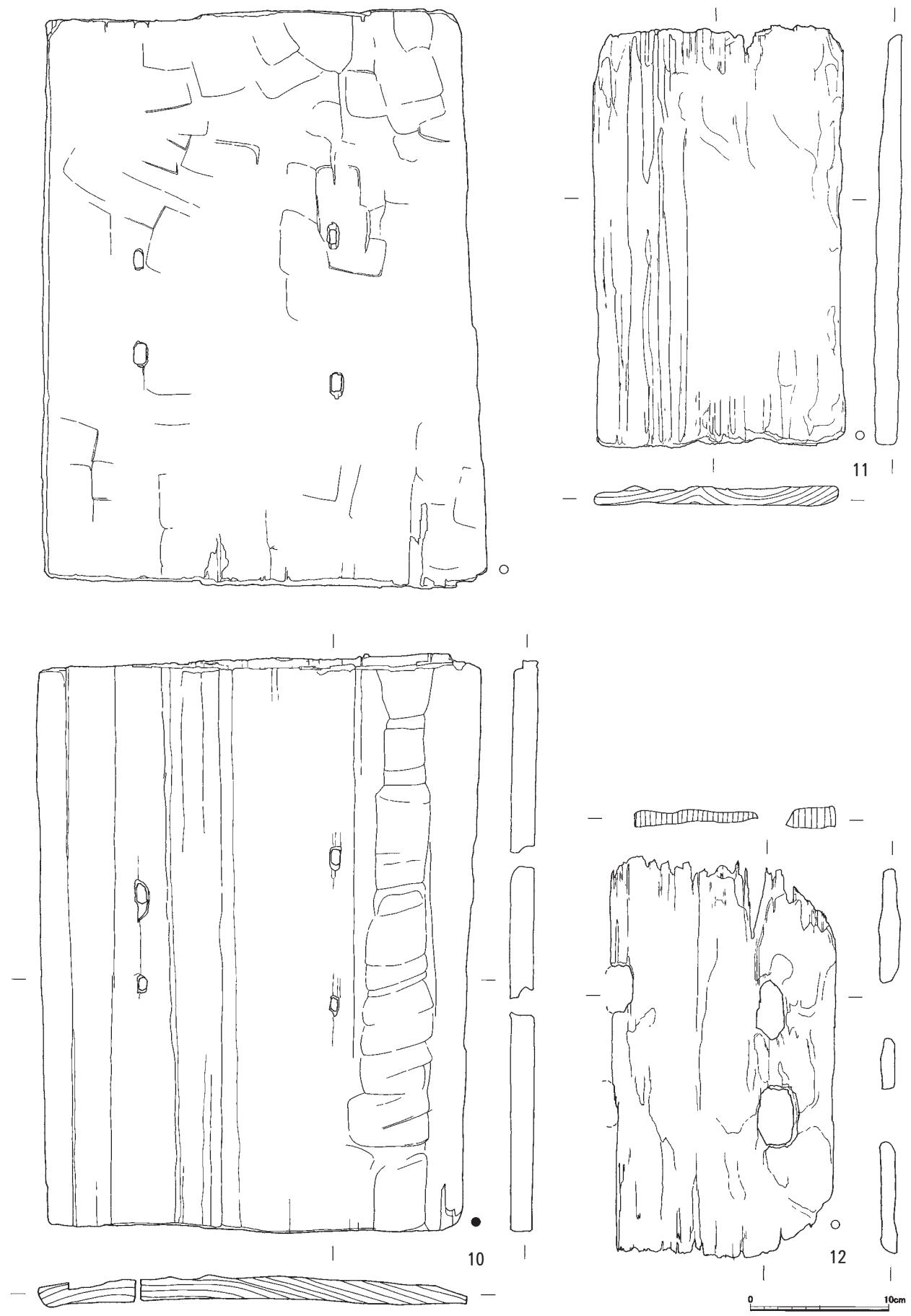
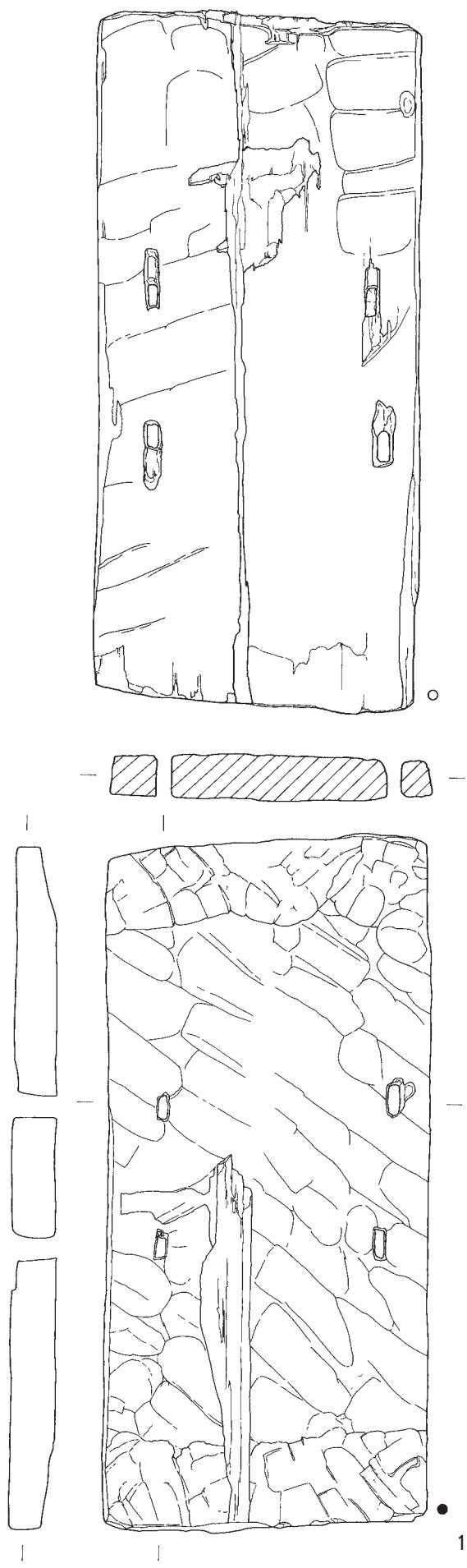


写真8 田下駄14の上面前端の半裁された調整痕

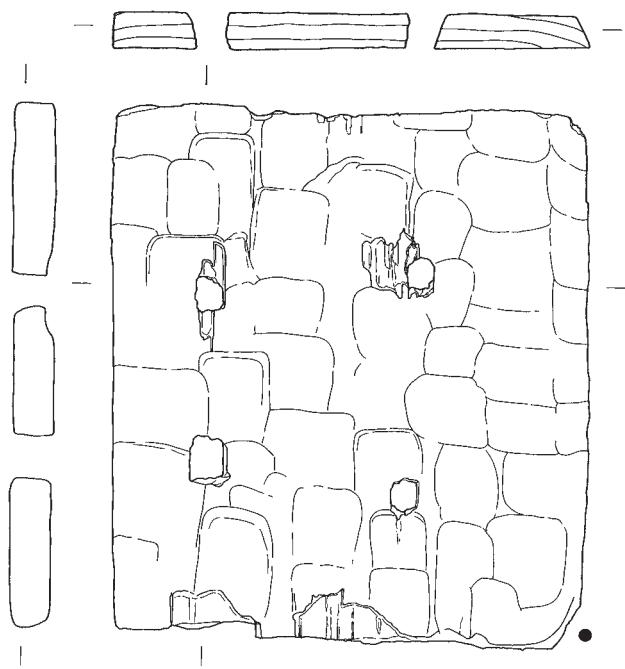


※ ○は出土時天側 ●は出土時地側

第108図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(5) (S=1/4)



13

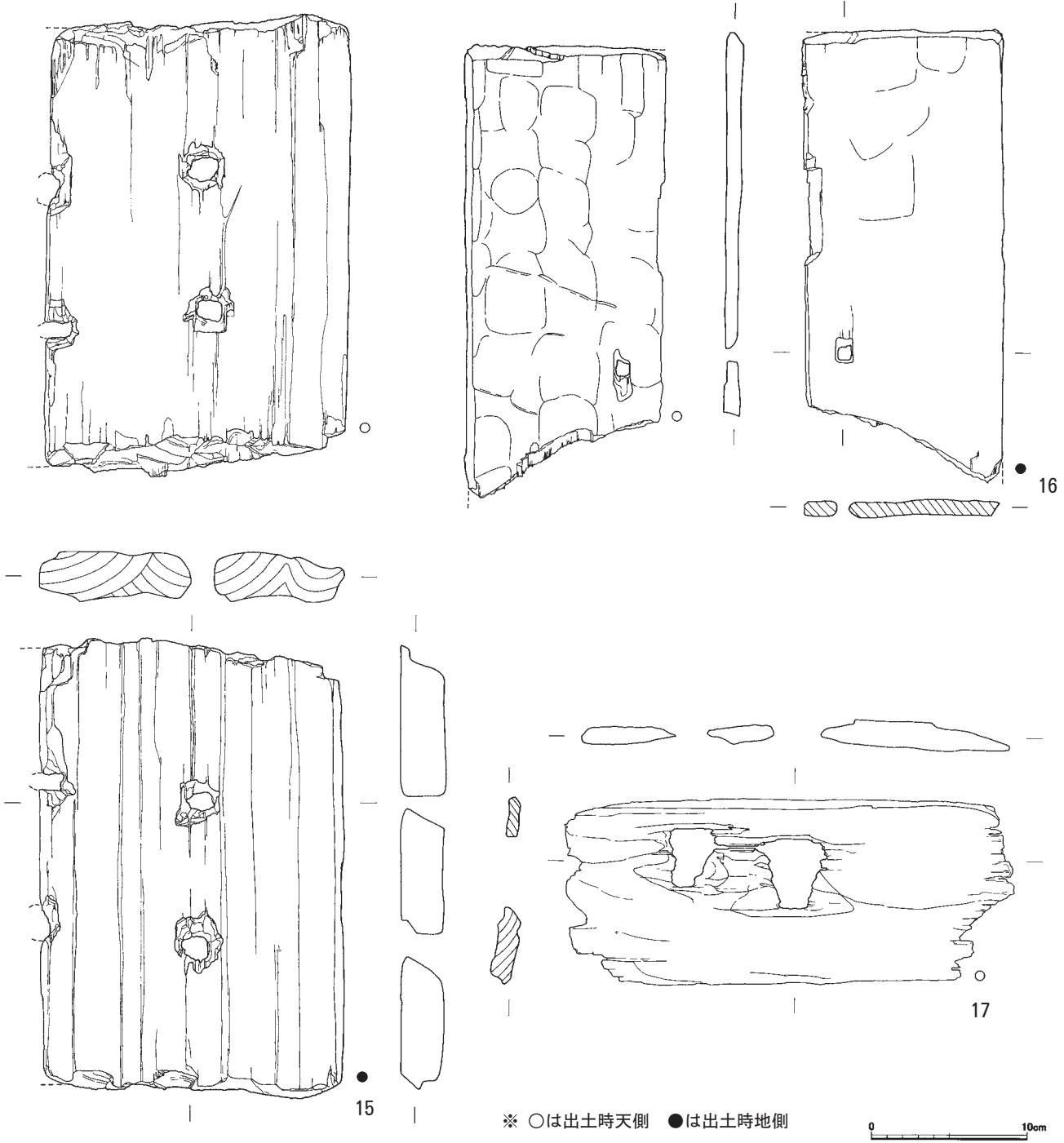


14

※ ○は出土時天側 ●は出土時地側



第109図 麦寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(6) (S=1/4)

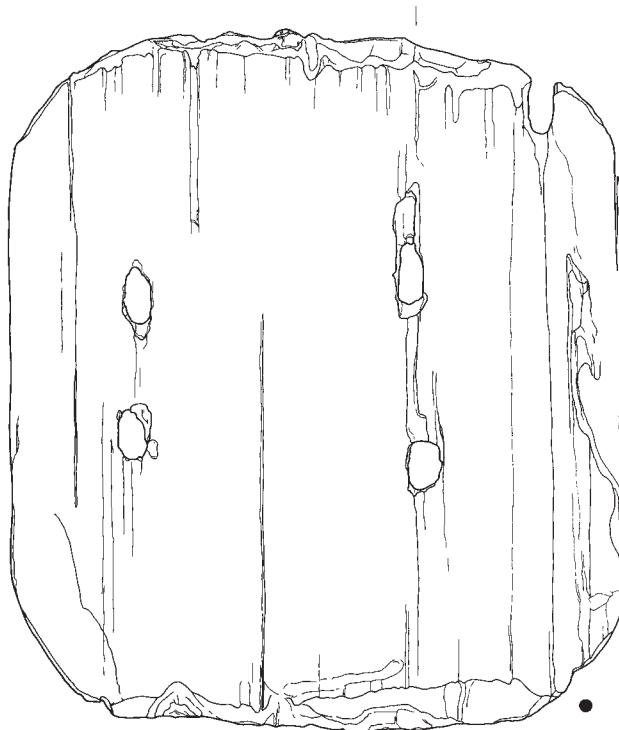
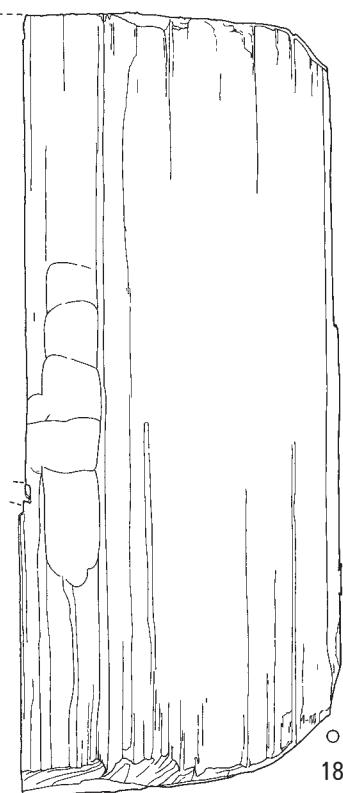
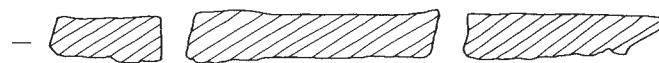
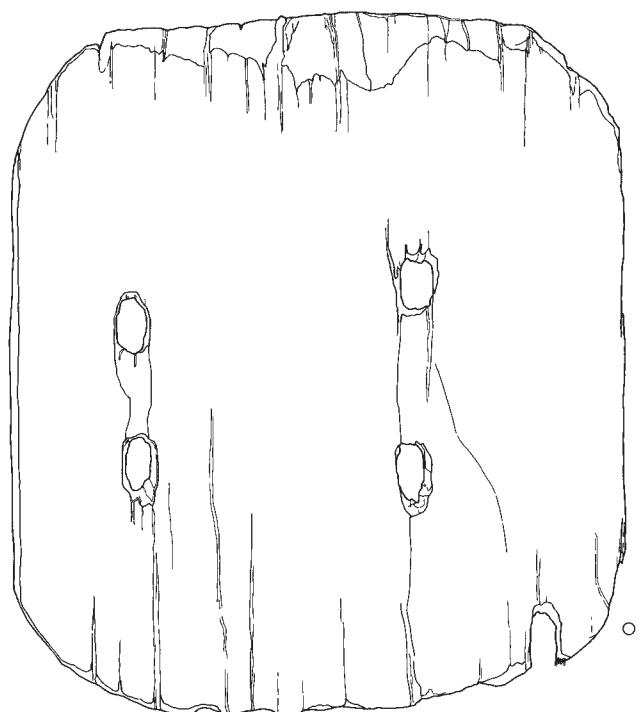
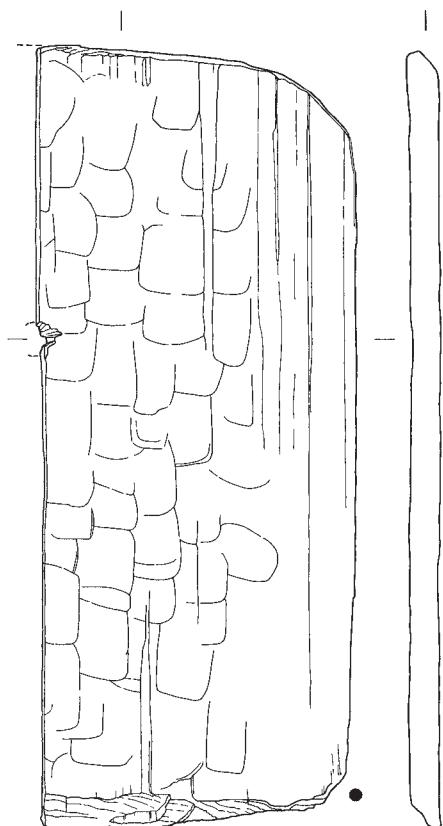


第110図 龍寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図（7）（S=1/4）

16（第110図）は単独式4孔田下駄と推定される。緒孔の穿孔方向により上下を判断しているが、前後左右は不明である。上下面とも幅約6cmの曲刃刃先痕が残る。下面（後）端部に一部のみの残存する刃先痕があり、調整は原材段階のものと推定される。II類。木取りは追い柾目材であるが、年輪のカーブは確認できず、大型の材であったと推定される。

17（第110図）は単独式4孔田下駄の可能性がある材である。全体に腐食し原形をとどめず、わずかに緒孔と考えられる孔2カ所が残るのみである。ただし、緒孔自体には摩滅痕があり相当程度使用された個体である可能性はある。材は芯に近い板目材。

18（第111図）は単独式4孔田下駄と考えられる。緒孔は1カ所しか残存しないため、前後左右・上下も不明である。緒孔が平面穿孔であるので（後）端部が欠損していると考える。上下面とも

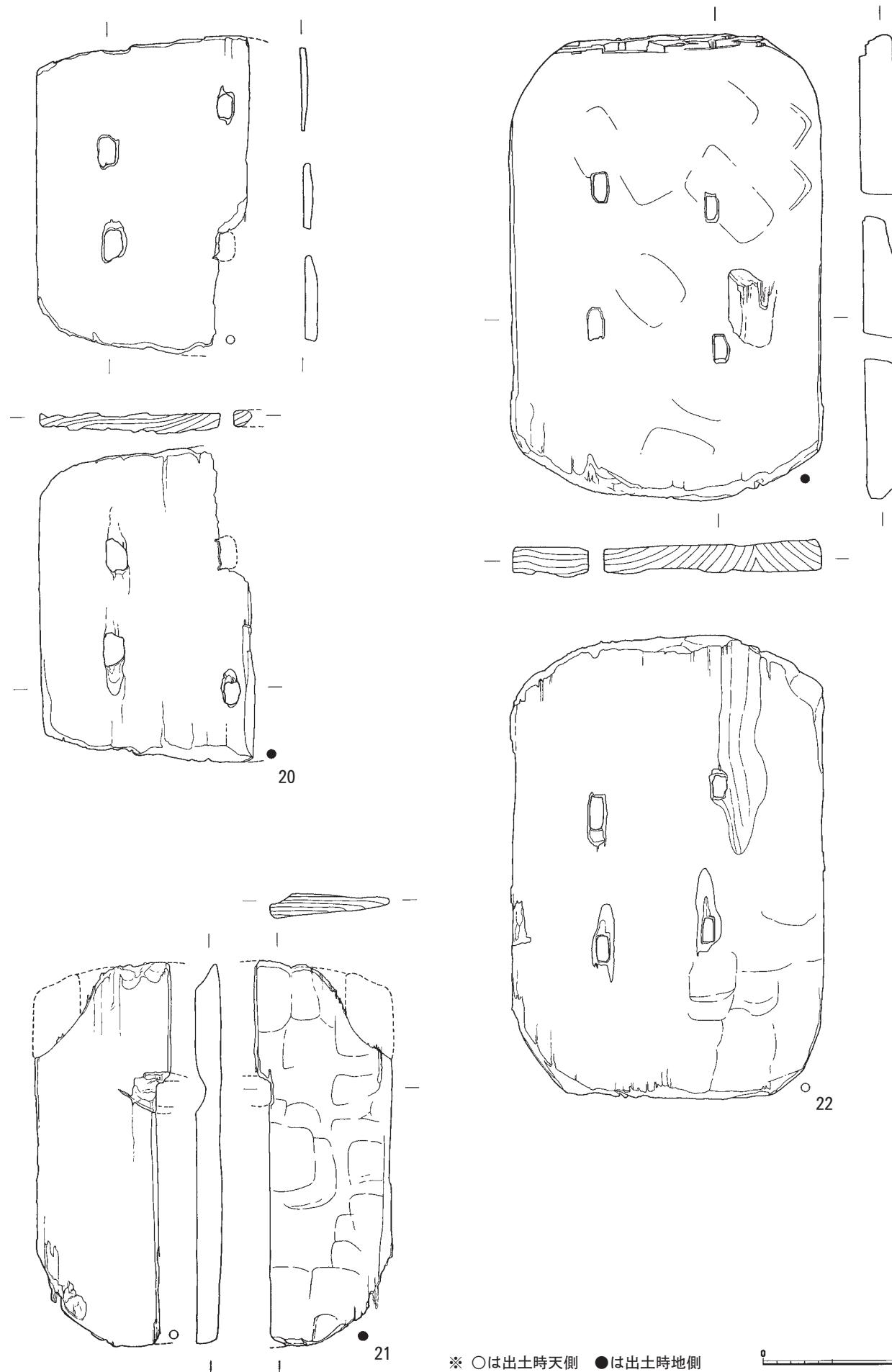


19

0 10cm

※ ○は出土時天側 ●は出土時地側

第111図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図（8）（S=1/4）



\* ○は出土時天側 ●は出土時地側

第112図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(9) (S=1/4)

(右) 端に摩滅が確認される。調整は(上)面が全面にわたり幅4cm程度の曲刃刃先痕、(下)面が一部に幅4cm程度の曲刃刃先痕を残している(調整C類)。III 1類型。木取りは板目。

19(第111図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。緒孔の穿孔は両面から行われており、緒孔間の摩滅も両面に認められる。端部の摩滅の多い側を下面と判断下が、上面左端にも顕著な摩滅があり、上面・下面が逆転する可能性もある。上下面とも未調整のI類型。木取りは追い柾目材である。大きさが異なるが出土位置からは20とセットの可能性が高い。

20(第112図)は単独式横型4孔田下駄である。緒孔の穿孔方向から上下を判断した。全体の形状はほぼ完形であるがきわめて薄く下面左端部に摩滅がみられる等、一見すると保存状況の不良に見える痕跡も埋没時の状況によるものではなく、いずれも使用状況と判断した。上下両面とも未調整で原材はI類型である。木取りは板目。出土状況から19とセットになると考えられる。

21(第112図)は単独式4孔田下駄と考えられる。緒孔は1カ所しか残存しないため、前後左右は不明であるが、緒孔の穿孔方向が平面片面穿孔であることから、上下を決定、また(前)端部が欠損していると考える。上面(前)(右)端に若干の摩滅が確認されるが、穿孔は痕跡は非常に明瞭で摩滅はない。調整は上面のみに全面にわたり幅5cm程度の曲刃刃先痕が確認され、(右)(前)端部付近に田下駄形状に添った刃先痕跡が見えることから、田下駄加工時に調整が行われたものと判断される。III-1類。木取りは板目。なお、(前)(左)端は出土時には存在したが、整理過程で紛失している。

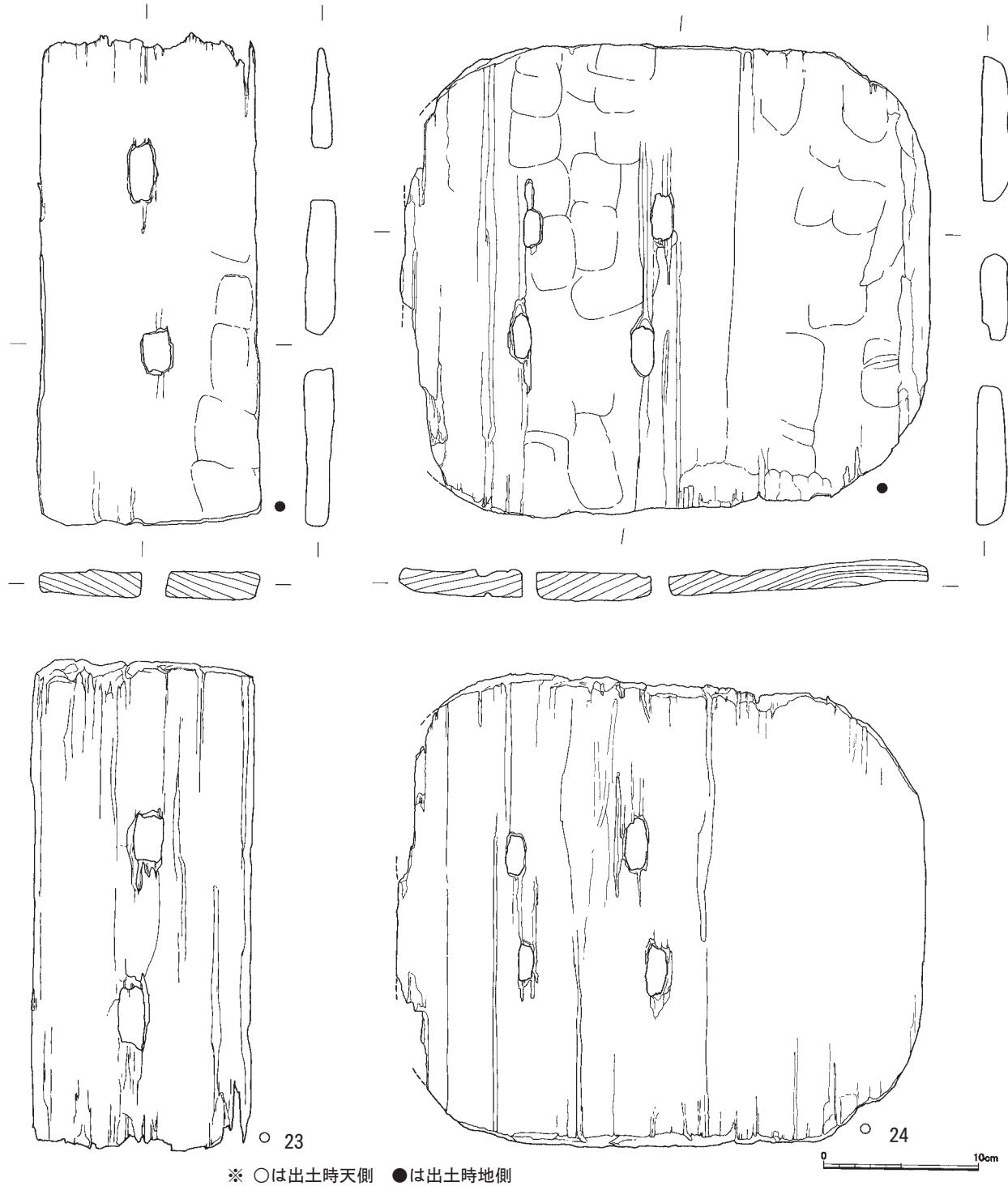
22(第112図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。ただし緒孔の位置が不正四辺形をなし、厳密には前後左右の特定が難しく、縦型田下駄の可能性もある。緒孔は片面から平面穿孔される。上下面の右端、下面の左端に摩滅がみられるが、上面の左端はキリオリ過程の工具痕が明瞭に残り使用痕跡はない。調整は上面が全面にわたり斜行する幅5cm程度の曲刃刃先痕、下面が木目に平行な同様の曲刃刃先痕を残している。原材はVI 2類型。木取り枝別れ部分。

23(第113図)は単独式4孔田下駄と考えられる。緒孔は2カ所しか残存していないため、前後左右は不明である。緒孔が平面片面穿孔であることから上下を判断した。なお、(前)(後)いずれの端が欠損しているのかも不明であり、2孔田下駄である可能性も否定できない。下面(左)端に摩滅が確認される。調整は上面(前)端が生きていると仮定すると、田下駄形にあわせた幅4cm程度の曲刃刃先痕が残ることになり、原材はIII 1類となるが、前述のように前端が生きているか不明でありII類の可能性もある。木取りは追い柾目。

24(第113図)は単独式横型4孔田下駄の完形品である。木目方向と足の位置関係からは横型田下駄となるが足板は全体としては縦長の形状を呈している。緒孔は片面穿孔で、緒孔間の摩滅とあわせ上下を決定した。上面は前端部・下面是左右両端部に若干の摩滅が残る。上面のみ幅約5cmの曲刃刃先痕が残るが田下駄可



写真9 田下駄27後左端部 隅丸の田下駄形状に整合する刃先痕

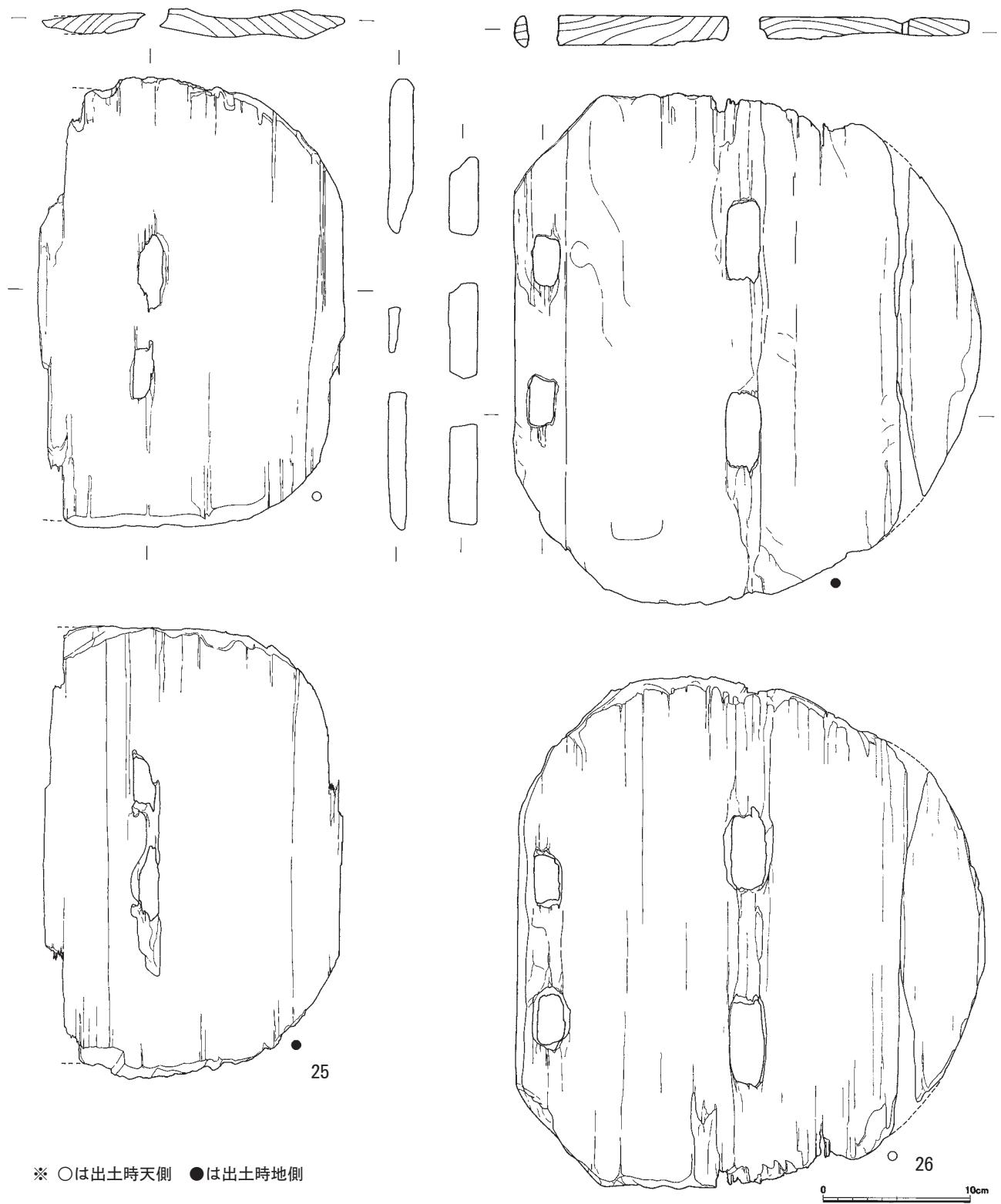


第113図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (10) (S = 1/4)

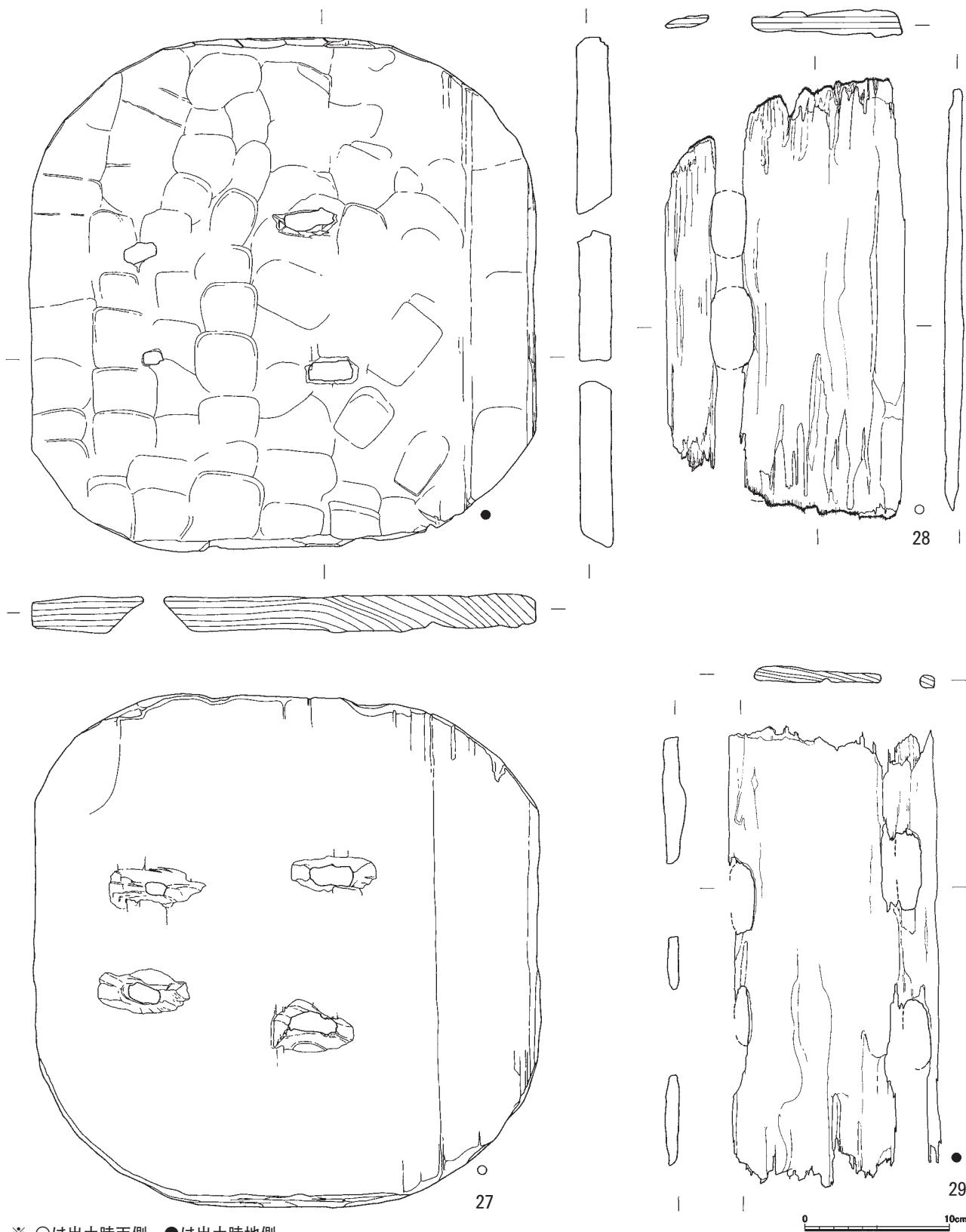
能との関連性は不明である。原材はVI 1類型となる。木取りは追い柾目材で、中心方向を下にする。25とセットの可能性が高い。

25(第114図)は単独式横型4孔田下駄と考えられる。緒孔は2孔しか残存しないが、幅などは前述24と同様であり、後端部分が欠損するとみるとほぼ同型に復元可能である。緒孔は片面穿孔で、緒孔間の摩滅とあわせ上下を決定した。上面は前端部・下面是左右両端部に若干の摩滅が残る。上面は腐食のため調整不明、下面是未調整である。木取りは心材に近い柾目材で、中心方向を下にする。24とセットの可能性が高い。

26(第114図)は単独式横型4孔田下駄のほぼ完形品である。後側の緒孔は端部に近い位置に穿孔



第114図 麦寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図(11) (S=1/4)



第115図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (12) (S=1/4)

される。緒孔は両面穿孔であるが、緒孔間の明瞭な摩滅から上下を決定した。上面は前後端部、下面是ほぼ端部全体にわたり摩滅が残る。上面には腐食のため調整不明、下面是未調整であり、原材はVI 1 類型。木取りは枝分かれ部分を含む。27とセットの可能性が高い。

27（第115図）は単独式横型4孔田下駄の完形品である。緒孔は片面穿孔であり、穿孔方向から上下を決定した。下面の左右両端部に若干の摩滅が残る。上面のみ幅約5cmの曲刃刃先痕が明瞭に残り、端部の刃先痕跡の割り付けから田下駄制作時の調整と考えられる。原材はIII-1 類型。木取りは追い柾目材で中心方向を下にする。26とセットの可能性が高い。

28（第115図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。全体に遺存状況が悪く、前後左右上下は不明である。緒孔は2カ所のみが推定できるにとどまる。木取りは板目材。30と遺存状況が類似、重なって出土しており（第102図参照）、セットの可能性が高い。

29（第115図）は単独式横型4孔田下駄と考えられる。全体に遺存状況が悪く、前後左右上下は不明である。緒孔は4カ所確認できる。木取りは板目材。31ないし32とセットの可能性がある。

30（第116図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。遺存状況は不良であるが、穿孔方向から上下を決定した。上面には幅5cmの曲刃刃先痕が残る。緒孔は2カ所のみ残るが、緒孔間の摩滅は両面に確認できる。木取りは柾目材。28とセットの可能性が高い。原材と加工の関係はVI 1 類型。

31（第116図）は単独式横型4孔田下駄と推定される。全体に遺存状況が悪く、前後左右上下は不明である。緒孔は2カ所のみ確認できる。木取りは板目材だが、木目は波打っている。34と遺存状況が類似、セットの可能性がある。原材と加工の関係はI 類型。

32（第116図）は横型4孔田下駄の可能性がある資料である。全体に遺存状況が悪く、前後左右上下は不明である。緒孔は2カ所の痕跡を確認できる。木取りは追い柾目材。29と遺存状況が類似、セットの可能性がある。

33（第117図）は単独式横型4孔田下駄のほぼ完形品に近い資料。緒孔は片面穿孔であり、穿孔方向から上下を決定した。上面のみ幅約5cmの曲刃刃先痕が明瞭に残り、端部の刃先痕跡の割り付けから田下駄制作時の調整と考えられる。原材はIII-1 類型。木取りは追い柾目材で中心方向を下にする。

34（第117図）は単独式横型4孔田下駄の可能性がある資料。緒孔は片面穿孔であり、穿孔方向ならびに緒孔間の摩滅から上下を決定した。上面（左）端に若干の摩滅が残る。原材はI 類型。木取りは板目材。31と遺存状況が類似し、セットになる可能性がある。

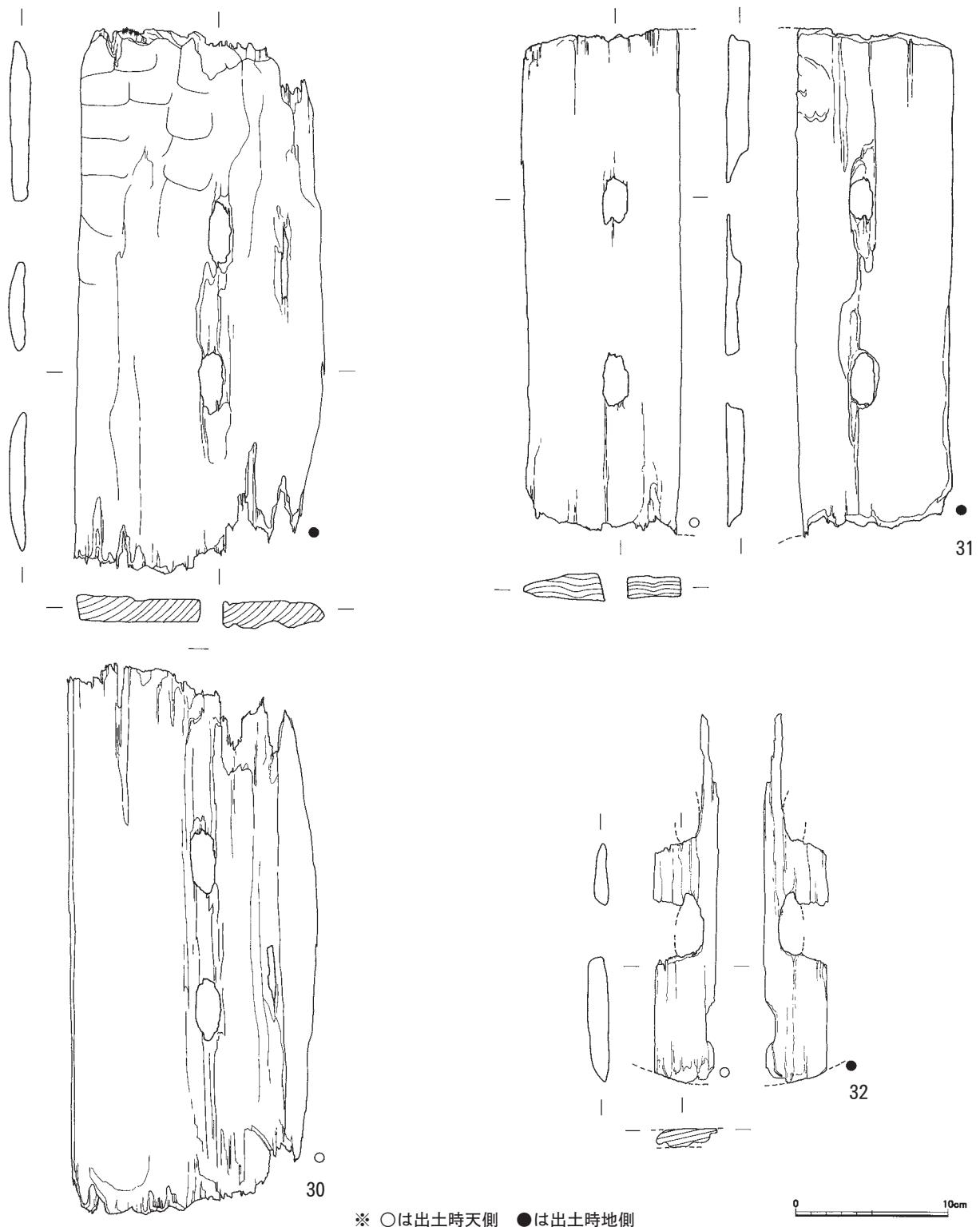
35（第117図）は単独式横型4孔田下駄の可能性がある資料。全体に遺存状況が悪く、前後左右上下は不明である。木取りは追い柾目材。本資料のみSR01河道外から出土しているが、同様の資料であるのでまとめて記載した。

### 加工された板材

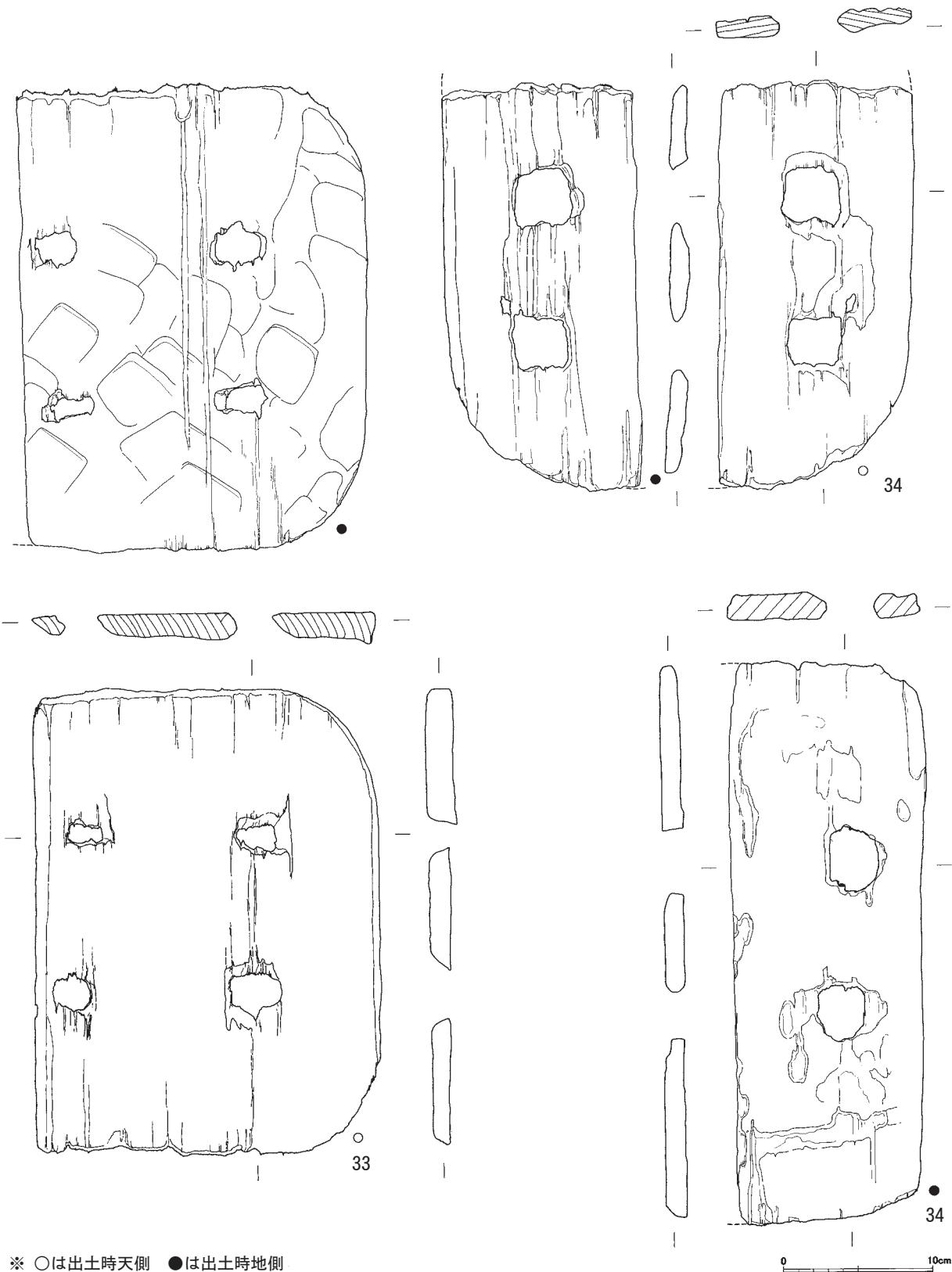
加工された板材は、主要なもの、調整・穿孔などがなされているものののみ取り上げ、割ったままの板材などは取り上げを行っていない。それでも田下駄以外で用途の明確なものは37の矢板にはほぼ限定されており、他の木製農具などは確認できなかった。

36は長さ94.2cm幅12.9cmの板材である。明瞭な加工・調整痕跡はない。

37は長さ263cm、幅49.2cmの矢板である。下端は欠損する。先端部付近に横長の孔が2つあるが穿孔されたものか、腐朽によって生じたものか不明である。ほぼ水平な状況で出土しており、流さ



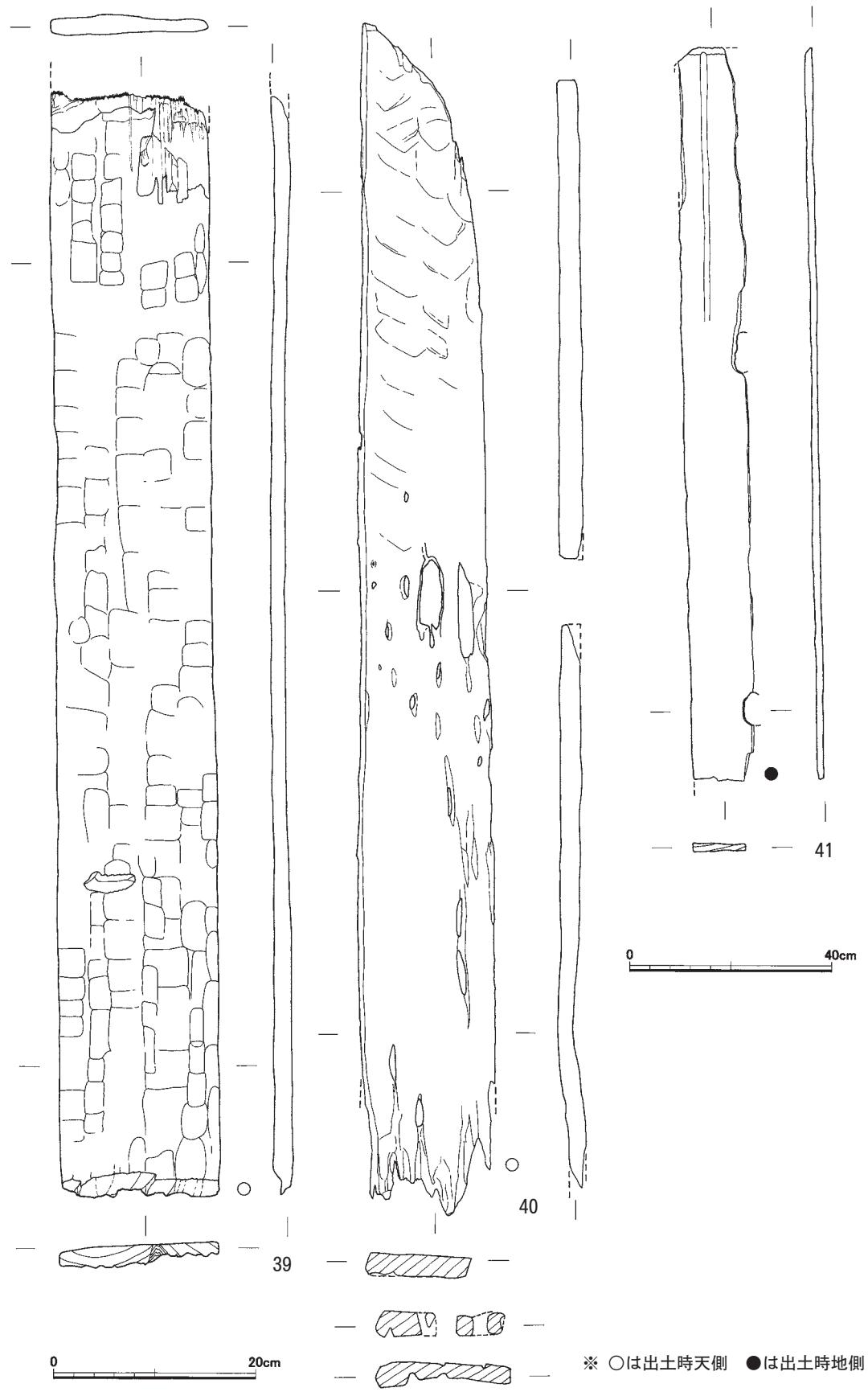
第116図 庵寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (13) (S = 1/4)



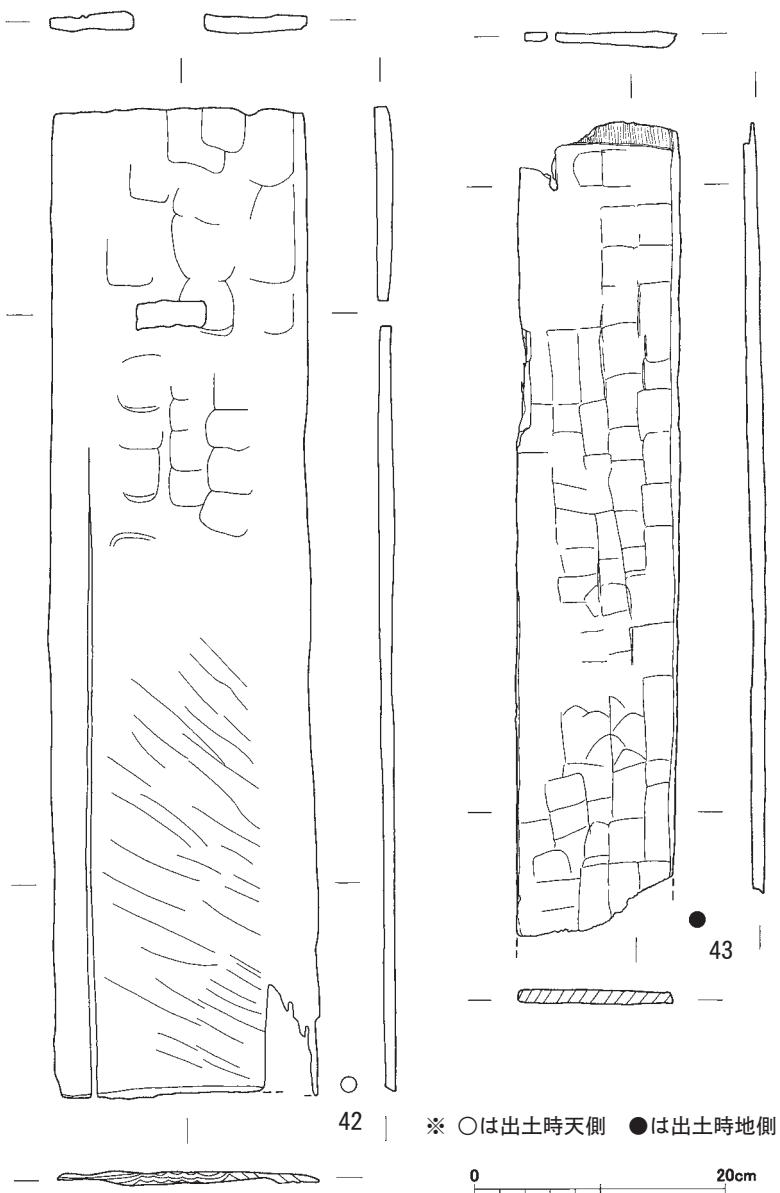
第117図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (14) (S=1/4)



第118図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (15) (S=1/6, 37: S=1/12)



第119図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (16) (S=1/6, 41: S=1/12)



第120図 廬寺遺跡 B・C区SR01出土木製品実測図 (17)  
(S=1/6)

42は四周にほぼ欠損の確認されない長さ76cm・幅20cmの板材で、1面に横斧による調整ならびに斜行するケズリ痕跡(図中下側)が確認される。また図中上側から1/4程度のところに横長の穿孔が施されている。樹種はスギである。

43は図中下端の欠損する板材である。一面に横斧によるとみられ留調整が施される。また上端はオモテから刃を入れて切断した痕跡が残る。下端は欠損。

#### B・C区遺構外出土遺物(第121図)

1・2は須恵器蓋である。1はつまみが欠損、天井部の肩が明瞭で皿ないし浅い壺を天地逆にしたような形状で、回転糸切り痕を残す資料である。中祖遺跡でII類とされる資料に類似するものがある。2は断面が三角状を呈する輪状つまみを持つ蓋である。3・4は無高台の壺、5・6は高台付壺である。3・6は底部ヘラ切りで、下端に高台を引き出す特徴から久本奥窯跡のVI期頃の資料であろう。4・5は回転糸切りである。7は須恵器高壺脚部である。8は脚部として図化したが、内面に自然釉がかかっており甕の口縁であろう。中祖遺跡に類例がある<sup>6</sup>。9は自然釉が多量に付

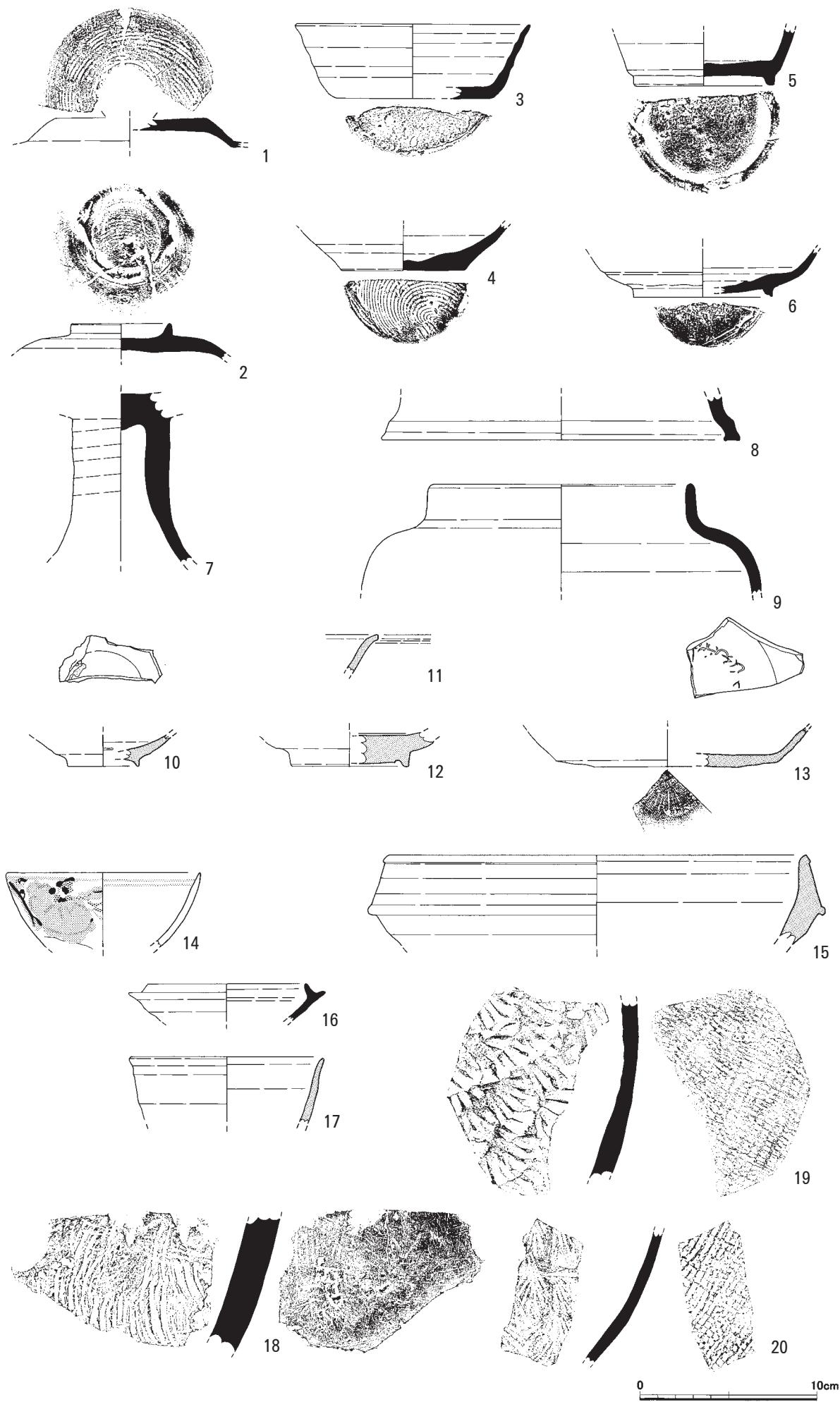
れてきたものであろうか。樹種スギ材。

38は長さ130cm、幅12.6cmの板材である。実測図下側(以下同じ)が上面から削り込まれ、断面がレ字状に加工される。また中央部付近に穿孔が認められる。上端は欠損。樹種はスギである。

39は1面のみ横斧で調整された板材である。長さ108cm、幅15cmで図上下側は板両面からの加工によって切断された痕跡が明瞭に残る。上側は欠損。樹種はスギである。

40は図上上側がフクラ切先の刀身状になる長さ116cm、幅13cmをはかる木製品である。取り上げ時地側のみ横斧による調整痕跡が確認できた。天側は保存状況が悪く、不明である。図中中央付近に横長の穿孔が確認される。それ以外の孔は腐朽によるものと考えられる。

41は長さ144cm、幅14cmの板材である。図中右端を欠損と判断したが、2カ所で横長の穿孔が確認される。また図中上端は角が落とされ、オモテ面から端部断面がレ字状になるよう削り込まれている。樹種はスギである。



第121図 廬寺遺跡 B・C区遺構外出土遺物実測図 (S = 1/3)

着した短頸壺である。10は灰緑色の釉と、白色砂粒の混じる胎土を持ち、内外面に砂目の残る李朝青磁の皿である。11は青磁碗の端部である。12は竜泉窯系の碗で上田DあるいはE類で16世紀代の資料。13は内面に草花文、体部が鈍角に内傾する皿で、大宰府の白磁皿VII類、12世紀の資料である。14は肥前系磁器波佐見産の丸碗である。波佐見V-2期1750~70年代の資料である。15は備前焼擂鉢である。口縁端部より備前焼IV期14~15世紀代のものと考えられる。16は須恵器坏身で口径が最も小型化した時点の資料。17は李朝磁器碗である。黒色の差粒を持つ胎土に淡緑灰色の釉が施される。18~20は須恵器の甕片である。19・20は外面に格子目タタキ、内面にいわゆる車輪状のタタキの施される資料である。仁摩大橋・善興寺橋遺跡、孫四田遺跡・ヒヨドリヶ市遺跡・千後田遺跡・入石遺跡、清石遺跡・コヲスミ遺跡・大月遺跡など仁摩平野の須恵器出土遺跡のほぼすべてから出土が確認されている<sup>\*7</sup>。

\* 1 島県教育委員会2008『中祖遺跡・ナメラ追遺跡』。

\* 2 赤澤秀則1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会。

\* 3 いうまでもないことであるが、これはあくまでも必要条件であって十分条件ではない。V-2層とV-3層の形成に時間差があると考えることも先述の通り可能である。

\* 4 なお本書では、意図的であるか否かにかかわらず、物理的な意味で遺物が人間の管理から離れ、再び物理的な関与がなくなった場合、最初に管理から離れた段階を「廃棄」と表現する。埋納してそのままになったものなども「廃棄」となる。

\* 5 なお、単独型田下駄の緒孔は3孔ないし4孔であるものが一般的であるが、田下駄出土遺跡からはしばしば1孔・2孔あるいは足板全体形状のみの類似する無孔の板が検出され、いずれも単独型田下駄であると認識されている（秋山浩三1993「大足の再検討」『考古学研究』40-3）。本書も確証はないが単独型田下駄以外の木製品が出土していないことから同様の立場をとる。

\* 6 中祖遺跡第35図137（島根県教育委員会2008『中祖遺跡・ナメラ追遺跡』）。

\* 7 仁摩町教育委員会1998『清石遺跡外発掘調査報告書』・同1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』、同2005『仁摩大橋遺跡・善興寺遺跡』。

## 第5章 於才迫遺跡の調査

### 第1節 遺跡と調査の概要

於才迫遺跡は大田市仁摩町大国3136・112字於才迫に所在する。遺跡は庵寺・於才迫遺跡の谷の東斜面にある小谷に所在し、調査前の状況は植林された杉林であった。

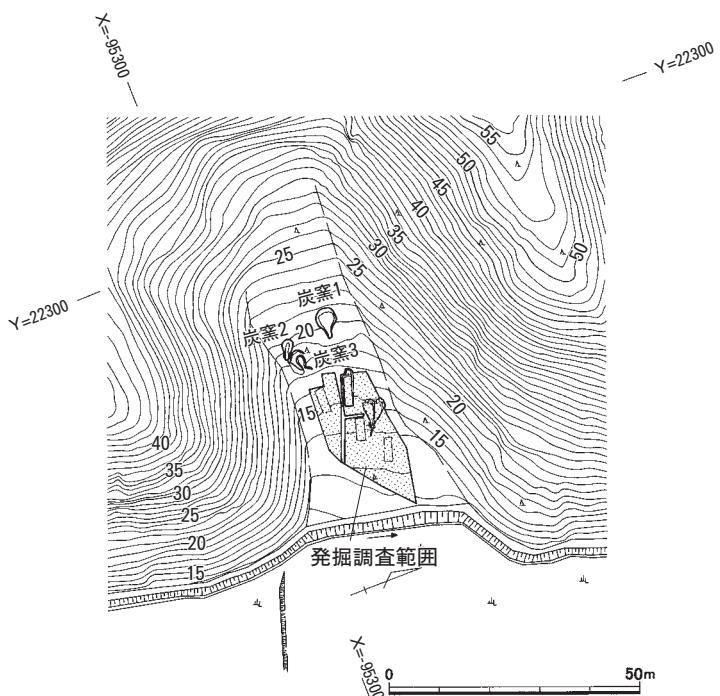
谷は奥にいくほど傾斜を増し、標高15m以上は急傾斜で周辺の山体を形成する堆積岩の崩壊した岩塊が広がっており、これより上方には遺跡の所在は想定できず、概ね標高15mまでを概ねの遺跡の範囲とした。なお、後述するように炭窯3基がこの周辺に埋没せず残存していた。

発掘調査は平成18（2006）年5月1日～31日にかけて埋蔵文化財調査センター角田徳幸調査員によりトレンチ調査が実施され、このうち中央部東のトレンチ2の断面にて土坑状の施設が確認された。また、炭化物層も広がっていた。続いてその斜面北側のトレンチ5とその中間を掘り下げたところ、焼石群・焼土が確認された。なお、これ以外のトレンチではいずれも遺物・遺構とも確認できなかった。また、トレンチ調査によって表土下20～40cmから下はこの谷を埋める崖錐成堆積物で構成され、遺物も発見できないことも明らかになり（第127図13層以下）、本調査ではこの暗灰黄色砂質土の上面で調査を終了している。

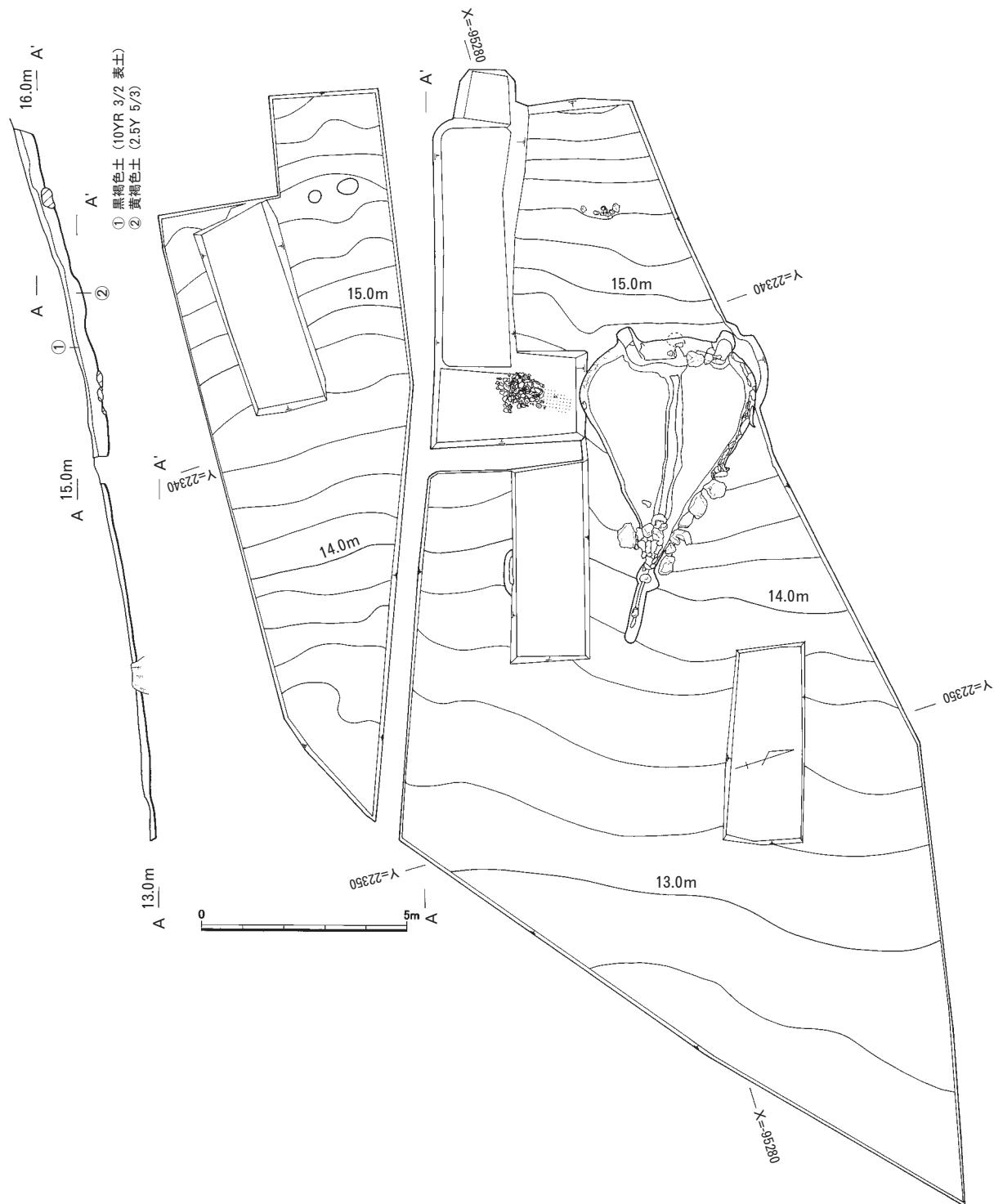
以上のトレンチ調査結果により遺跡の範囲を確定し、翌平成19（2007）年11月1日から平石が本調査を実施した。狭い調査範囲ではあったが、谷川の水田部はモリアオガエル繁殖地のため廃土を捨てることができず、南側・北側に分けて調査区内で廃土を移動させながらの調査となった。12月5日約250m<sup>2</sup>の調査を終了し、結果として炭窯1基と石群2を検出した。

#### 基本層序（第123・127図）

調査区は調査前の状況で平坦となっていたが、炭窯4を破棄した後に谷中央部の低い部分トレンチ5・2の周辺を埋めて平坦にさせた結果であると考えられる。これは調査前まで現地に植えられていた杉の植林に関わるものと考えるのが自然であろう。先に述べたようにトレンチ調査によって深掘りした部分で（第127図）、表土からの深度1m程度で凝灰岩塊群が出現、その上の13層も凝灰岩ブロックを多量に含む崖錐成堆積物の無遺物層であった。したがって、調査は表土下の濃褐色土層までにとどめた。



第122図 於才迫遺跡 調査区位置図（S=1/1500）



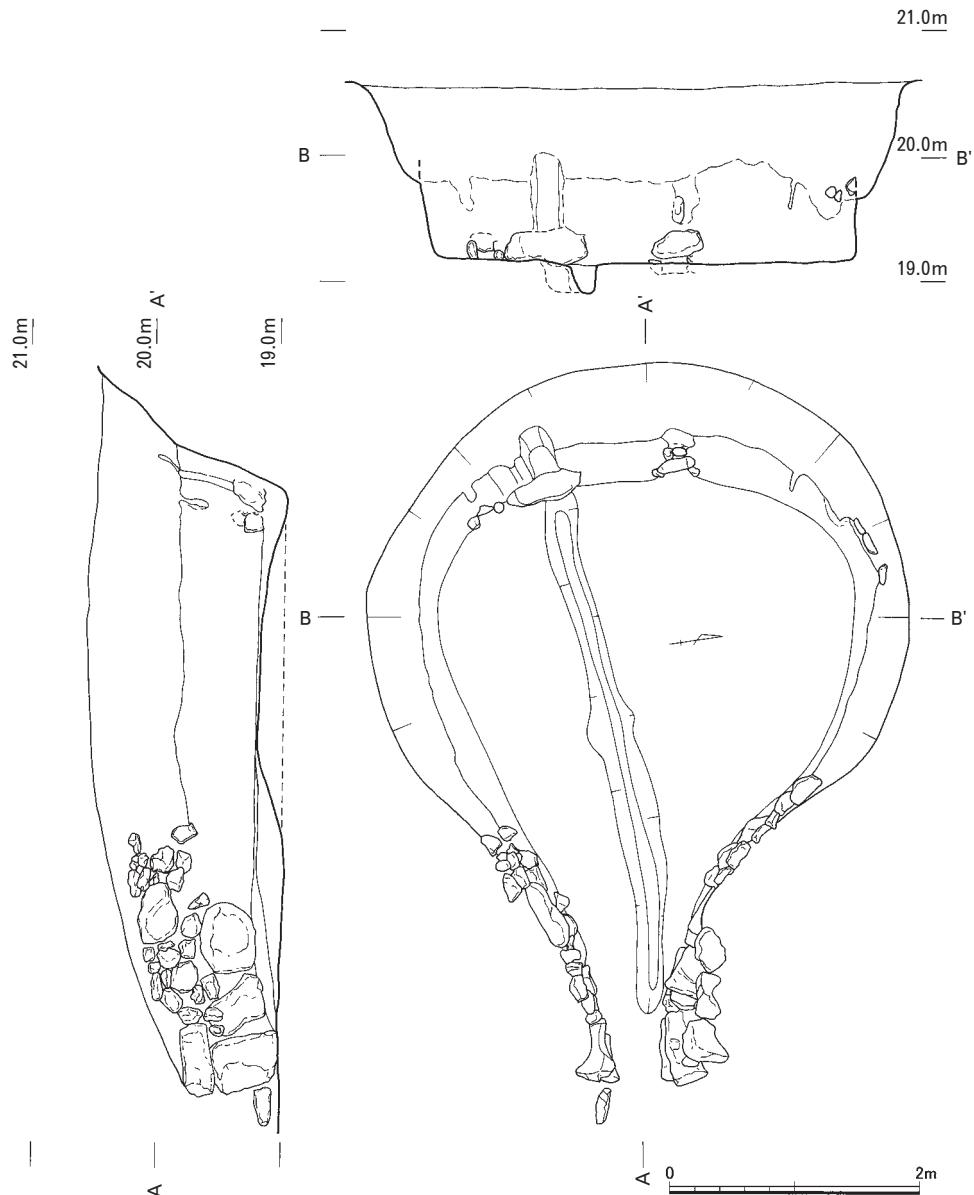
第123図 於才迫遺跡 調査区遺構全体図 ( $S = 1/150$ )

## 第2節 調査の内容

### (1) 炭窯

#### 炭窯 1

**規模と形態** 調査区外西側の斜面、標高20m付近に埋没せずに残っていた炭窯である。現代のものと判断されるので発掘調査は実施せず、清掃と写真撮影・図面作成にとどめた。窯本体は直径約4.2mの略円形を呈し、焚口から前半部分には枕石ならびに内面の石組みが残る。奥壁-焚口間は約5.3mでほぼ東に向かって開口している。長軸は壁体は全体として粘土で構成されており、床面より高さ50cm程度のところまでタールのが付着、焼成された痕跡をみることができるが50cm以上部分に



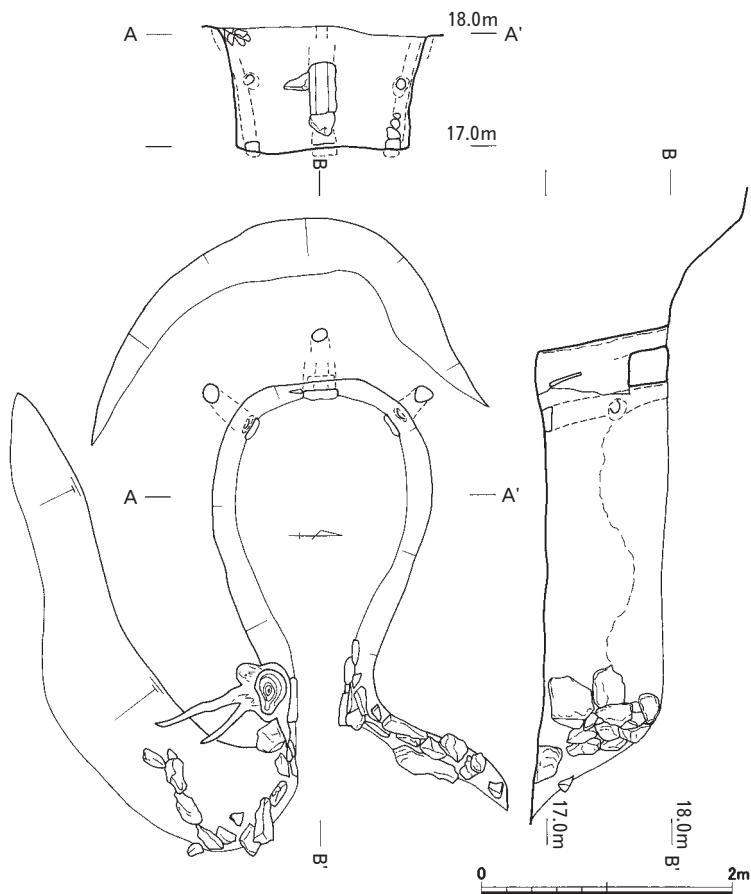
第124図 於才迫遺跡 炭窯1実測図 ( $S = 1/60$ )

については堀方が掘り鉢状に広がっており、屈曲した部分に甲（家根）をかけたものと考えられる。ショウジは焚き口に正対する位置とその左側の2カ所に設けられており、いずれも歯石を設置するが煙道部そのものは土製であり石積みは行われていない。底面には被覆されない開渠の排水溝が存在し、焚き口下から左側のショウジ下部まで伸びている。床面はほぼ平面であり特に奥側に向かって傾斜しているわけではないが、ショウジへの導水は確実で内面が土製であることも含め、いわゆる黒炭の製炭窯の構造を有している。なお、床面壁際も若干ではあるが窪んで排水溝状を呈していた。床面へ粉炭が堆積していたものの掃除で除去されてしまい量は少なく、操業回数も少ないものと想定される。

**時期と性格** 上記のように、現代の黒炭製炭窯であったと考えられる。

#### 炭窯2（図版76）

調査区外の西側斜面、標高19~20mに位置し、埋没しかけているあるいは未成であったと考えられる現代の炭窯であり、記録は写真撮影にとどめた。炭窯3の上に位置する。規模は長軸4m、幅



第125図 於才迫遺跡 炭窯3実測図 ( $S = 1/60$ )

2 m程度である。東南東に開口する。

### 炭窯3(第125図)

**規模と形態** 調査区外西側斜面の南辺の先述炭窯2のすぐ下、標高18m程度に埋没せずに残存していた。規模は焚口から奥壁までの距離2.7m、幅が1.7m程度でほぼ真東に開口する。炭窯1同様、現代の遺構であると考えられるので清掃・写真撮影・図面作成のみの実施にとどめた。西側の山側は馬蹄状に削り込まれており東側は特に南側が土手状になっていること、壁体上面が平坦であることから、斜面に平坦面を作成しそこに土製の窯体を構築した半地上式の窯であると判断できる。壁体前方の焚口両袖には枕石が設置され、この部分のみ石積みがなされる。

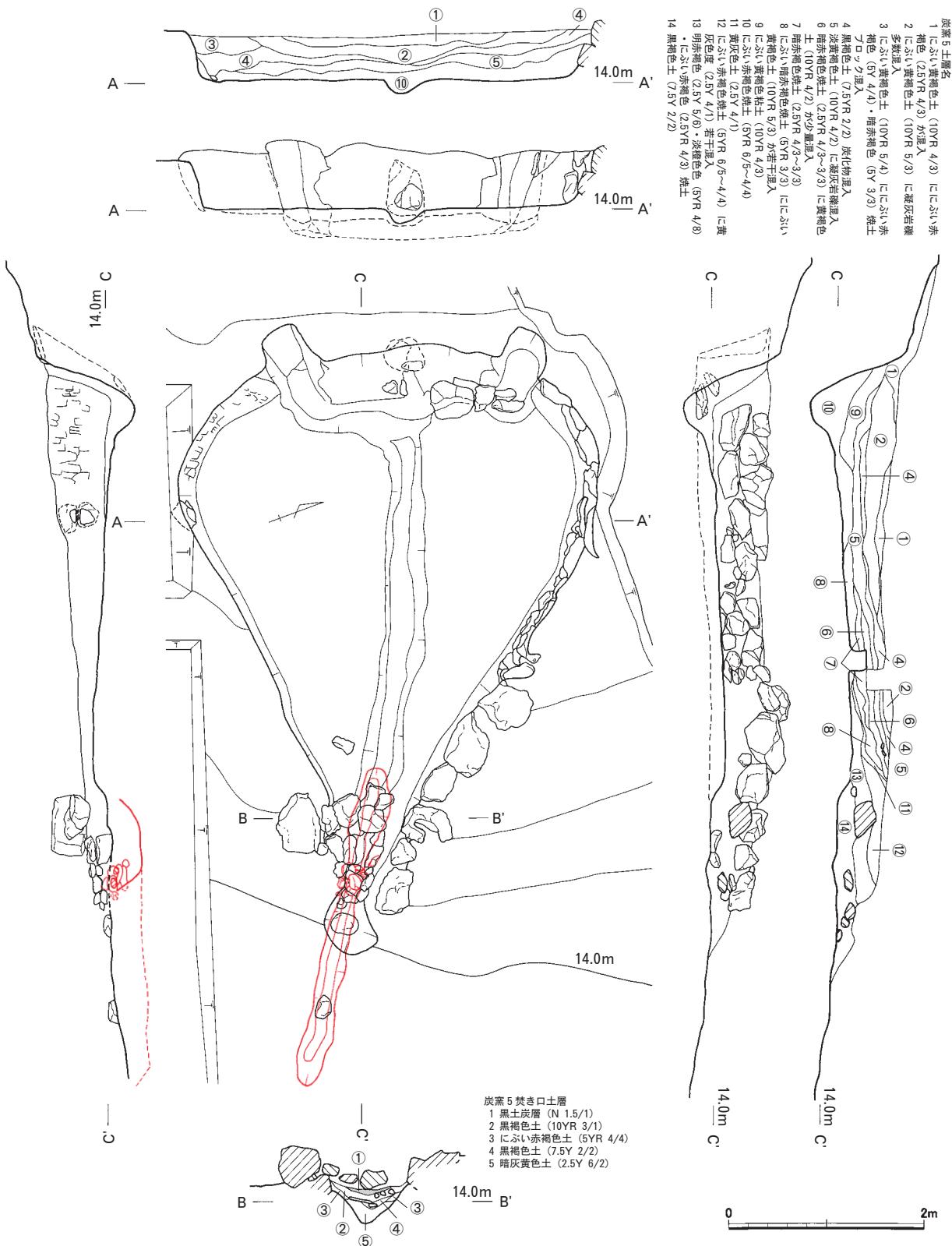
一方、奥壁には三ヵ所にショウジが設置されており、それぞれに歯石が確認される。また、本ショウジは煙道中間に開口部があり（当初からの開口か崩落したのか不明）、脇の腰中ショウジにはそれぞれ煙道の中間に穴が開けられている。煙道は窯上部平坦面でも確認できるが、直径は15cm程度であり、いわゆる杉の丸太を軸に粘土を積み上げ、丸太を引き抜いて構築する式のものであったと推定される。床面には炭窯1のような排水用開渠は確認されなかった。ただし、図版77に見えるように床中央に筋状に粉炭の厚く堆積する部分があり、この地下に暗渠があるものと推定される。推定される暗渠は本ショウジに続いている。

**時期と性格** 全体が土製であること、排水溝がショウジに続いていたことから、炭窯1同様に黒炭製炭窯であったと考えられる。本炭窯は庵寺～於才迫遺跡の炭窯の中では最も規模が小さくいわゆる小型の窯に相当し（安間2007）、製鉄用などではなく一般消費用であったと考えられる。時期は現代である。

### 炭窯4(第126図)

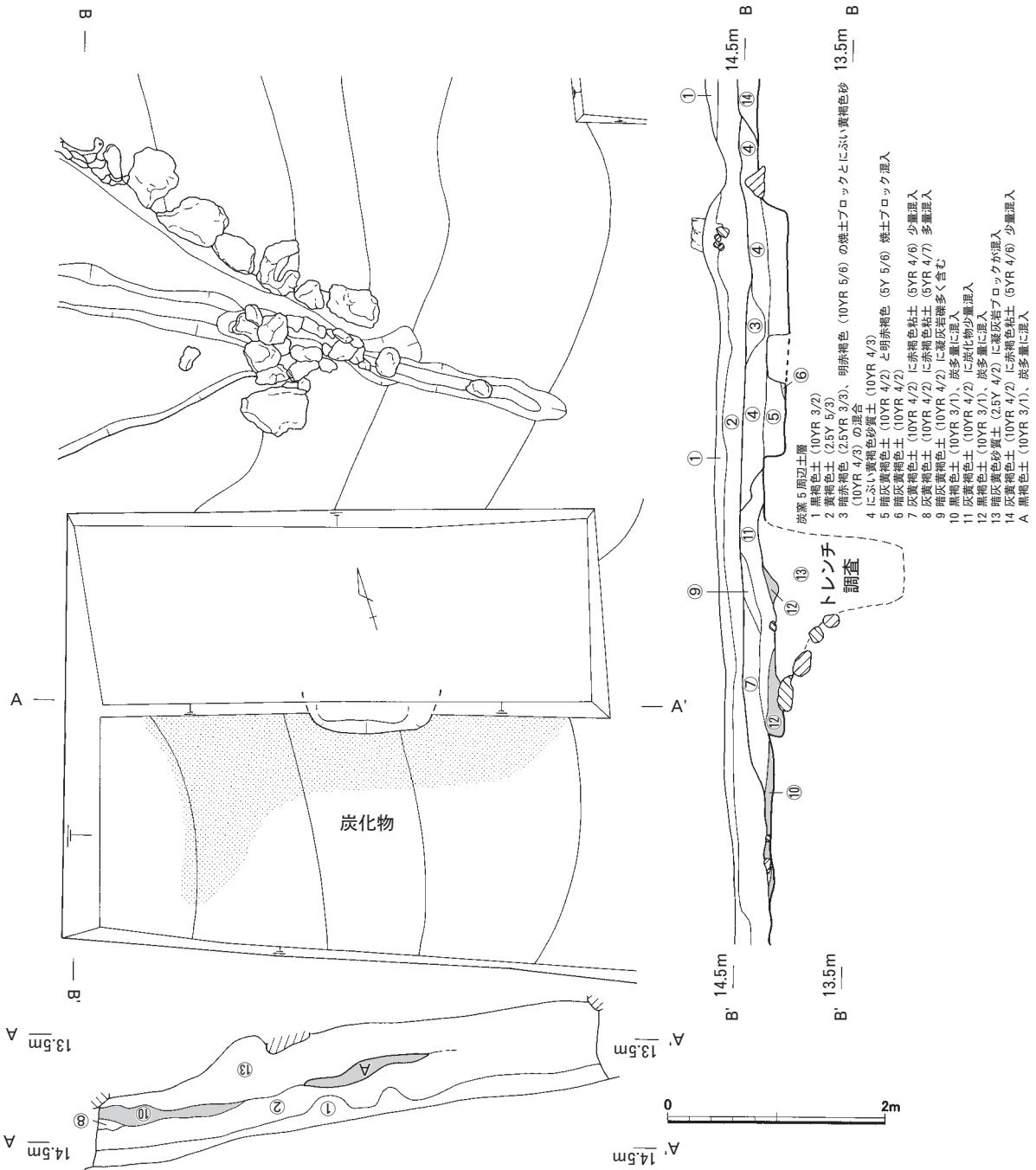
**規模と形態** 調査区内、標高14m程度の斜面で発掘により検出した窯である。調査以前には全くの平坦な斜面であり、表土下の黄褐色土を剥いだ段階で検出した。前述のように窯廃絶後、窯体は平坦にならされ黄褐色土を敷き詰めたのちに、現在みる杉の植林が行われたものと考えられる。

平面形はイチジク形を呈し、焚口から奥壁までの距離5.8m、最大幅4.0mと4基の窯の中では最大規模を誇る。基本的に土製半地上式の窯と考えられるが、右側北壁（斜面側）には石積みが施さ



第126図 於才迫遺跡 炭窯 4 実測図 (S=1/60)

れている。全体に前面ほど削平の度合いが大きく、焚口部は枕石が残り、一部が内側に転落している。焚口は幅0.3m程度ときわめて狭い。なお、奥壁正面・左側面には埋め殺しとなっている長軸0.5~1m程度の石を確認した。当初ショウジの歯石なるかと想定し周辺を掘削したが明らかに埋め殺しであり、奥壁正面に位置することと窯幅最大となる位置に所在することから、窯体構築に当たって



第127図 於才迫遺跡 炭窯4周辺図 (S=1/60)

規模を決定するために配置されたものと推定される。ショウジは奥壁左右2カ所に粘土をつき固めて作られていた。また窯床中央には窯奥に向かって傾斜する排水開渠が設けられており、粉炭が堆積していた。この排水溝は奥壁前で「字状に分岐して左右のショウジ分かれている。また右ショウジ手前は蓋石が被せられていた。この周辺はよく比熱しており、炭化物も付着してきわめて堅い状態に凝固しており、幅15cm程度の掘削工具痕跡が残っていた。上面で観察しても掘り返し再度粘土で壁面を構築した痕跡は見えないところから、先に述べた側面根石のところまでは基盤層を堀込んで窯体が構築されているとみられる。

**暗渠** 上述の排水溝とは別に、窯焚口付近の排水溝のさらに下部に幅0.3m、深さ0.4m、長さ3.3m

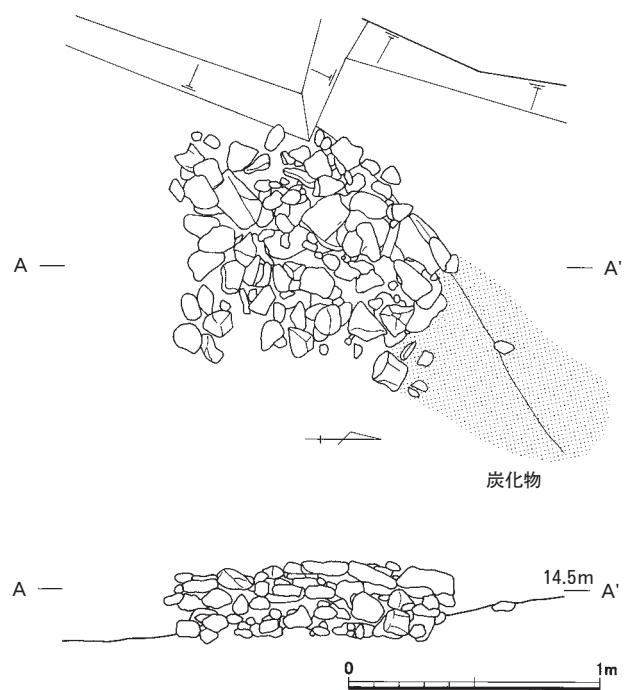
ほどの暗渠が確認された。暗渠は窯外に向かって下がっているが、そのまま土中で止まっており、自然に地下に浸潤させる構造であった。また、暗渠内は石などは少量しか存在せず、暗灰黄色土が堆積していた。あるいは木の枝など有機質のものが充填されていた可能性もある。

**堆積物** 堆積物は黄褐色・赤褐色の焼土塊などを含む土層であるが、一応レンズ状の堆積が確認でき、庵寺遺跡炭窯1（本書第4章）のように窯天井部を破壊し無秩序に投げ込んだ様子は見られない。ただし掘り返した痕跡などもないことから操業時に自然に堆積したものとも考えられず、窯が廃絶した後、一定程度の時間が経過、次第に天井・壁等が崩れ落ち、その後杉林造成に伴って破壊されたと考えられる。

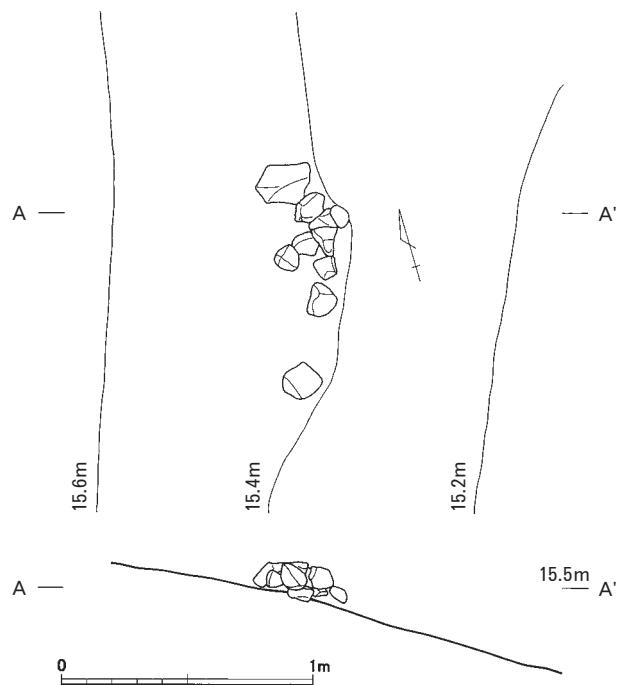
**時期と性格** 出土遺物はなく遺物による年代決定はできなかったが、熱残留磁気測定を実施しており、地磁気年代の候補としてAD80, AD1075, AD1900が挙げられている。イチジク形を呈し半地上式であるという窯の形態からは近世よりも遡る可能性はほぼあり得ず、結果として1900年±20年が妥当であるが、18世紀とされた庵寺遺跡の炭窯とも類似し、年代が遡る可能性もある（第4章第2節）。性格については、土製であること・ショウジに向かって傾斜する排水溝の存在から黒炭製炭用の大型炭窯とすることはできる。

## （2）周辺の炭溜まり（第127図）

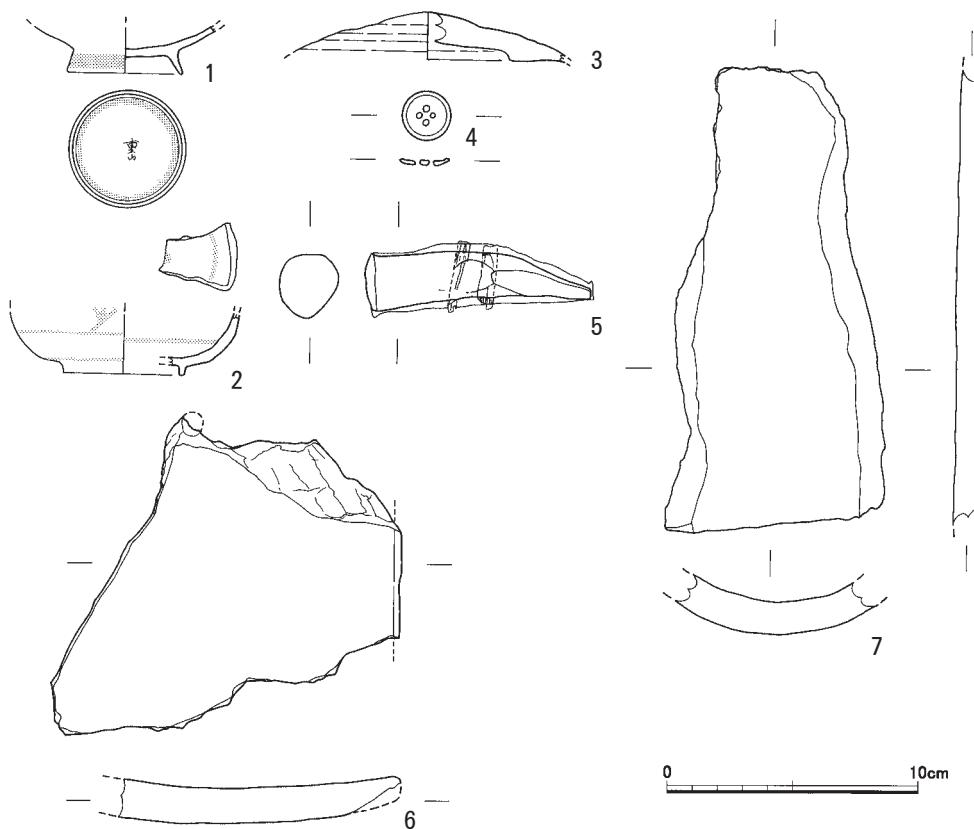
トレンチ2では断面に土坑状の遺構、炭化物層を検出していた。これらを平面的に確認するため、炭窯4の南側の黄褐色土を剥ぐと、炭溜まりが検出された。ただし、炭窯4を横断する第127図BB'断面で確認すると、炭窯壁体7・9・11層の下に炭化物層が潜り込んでおり、炭窯4構築時の基盤層13層の上に炭溜まりが存在したようである。また、土坑状の遺構はほとんどがトレンチにかかって破壊されてしまいその性格は不明であった。出土遺物はない。



第128図 於才迫遺跡 集石1実測図 (S=1/30)



第129図 於才迫遺跡 集石2実測図 (S=1/30)



第130図 於才迫遺跡 出土遺物実測図 (S=1/3)

### (3) 集石遺構

#### 集石1 (第128図)

**規模と形態** トレンチ調査時にトレンチ2・5の中間で検出していた石群である。直径約1.0m、高さ0.3mの規模で拳～人頭大の石を集積したもので、すべての石に焼痕跡があった。本調査で周辺を精査した結果、炭窯4構築時の基盤層の炭溜まり上に集められたものであることが判明している。

**時期と性格** 窯の焚口閉塞時の下地に使用された、あるいは補修などで除去された石の集積であると考えられる。炭窯4に伴うものと考えられ、炭窯4に伴うものであろう。

#### 集石2 (第129図)

**規模と形態** 炭窯4の斜面上方、標高15.4m前後の地点に位置する。南北約1 mの範囲に渡って、拳～人頭大の石が集積されていた。

**時期と性格** 出土遺物はなく、時期性格とも不明である。

#### 遺構外出土遺物 (第130図)

いずれも調査区表土、あるいは黄褐色土層から出土した。1はコバルト染付の使用された磁器碗で、銘「重山」が記される。戦後のものか。2は肥前系磁器の小丸碗である。見込みにコンニャク印判・あるいは手書きの五弁花文が見え、九陶IV～V期18世紀前半代の資料と考えられる。3は産地不明の蓋。4はプラスチック製ボタン。5は金槌である。6は内外面に施釉されている土管である。7は燻しの棧瓦である。1・4～6は現代の資料。このほか実測不能の小片であったが須恵器片が1片出土している。

### 第3節 まとめ

於才迫遺跡はトレンチ調査時に集石・土坑状の遺構、炭化物層が確認され本調査を実施した結果、炭窯1基を確認した。この炭窯は平面形イチジク形でショウジ2カ所を持ち、窯奥に下がる排水溝・暗渠を持つ、半地下式構造で焚口周辺のみ石積みにする点など、庵寺遺跡の炭窯と同様の形態をしており、規模も似通っている。当地域における黒炭製炭様の大型炭窯の一般的形態であったと考えられる。一方、地上に遺存していた炭窯1～3は平面丸型（炭窯1）、小規模（炭窯3）など微妙に異なる点がある。また完全に窯体が被覆されていたこと、18世紀代の肥前系磁器の出土などを念頭に置くと、熱残留磁気測定の年代観1900年頃より遡り、庵寺遺跡炭窯同様の18世紀代の炭窯の可能性もある。このように推定する場合、谷自体は崖錐成堆積物で埋まっており一定の傾斜があることから、窯全体が地滑りなどで移動し、焼成時の残留磁気の方位が動いてしまったと理解することになる。

いずれにせよ、本遺跡の調査によって庵寺遺跡A区炭窯とあわせ、近世・近代に仁摩平野周辺部の谷地形において土炭焼きが盛んに行われた時期のあったことが確認された。一方、炭窯以前の遺物は全く出土せず、五丁・庵寺遺跡で確認されている弥生前期・古墳時代中期・奈良平安時代、中世のいずれの時期においても人の往来がある程度（須恵器小片の出土）で積極的な土地利用がなされていないことが確認された。この事実も、それぞれの時代の人々の居住範囲・集落立地を考える上での参考になるものと思われる。

# 第6章 自然化学分析

## 第1節 五丁遺跡・庵寺遺跡における堆積相の軟X線観察

渡辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

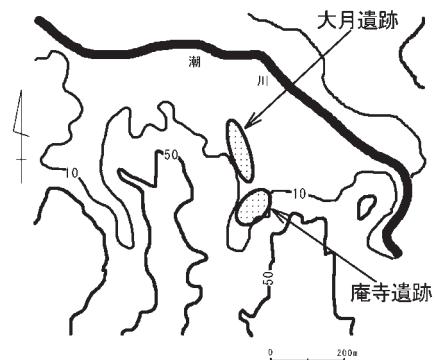


図1 遺跡の位置

### (1) はじめに

庵寺遺跡・五丁遺跡は、島根県中部、大田市仁摩町大国地内に位置する。中国山地から日本海に注ぐ潮川の下流部の沖積平野内で、潮川に流れ込む支流の下流部に五丁遺跡、上流部に庵寺遺跡が立地する（図1）。本報告は、両遺跡において実施した液状化痕を含む層及び耕作層と考えられる層の層相を、軟X線写真を用いて観察・記載したものである。

### (2) 試料採取及び試料調整、軟X線写真撮影について

図2の五丁遺跡の調査区平面図、及び図3の庵寺遺跡の調



図2 五丁遺跡試料採取地点位置図

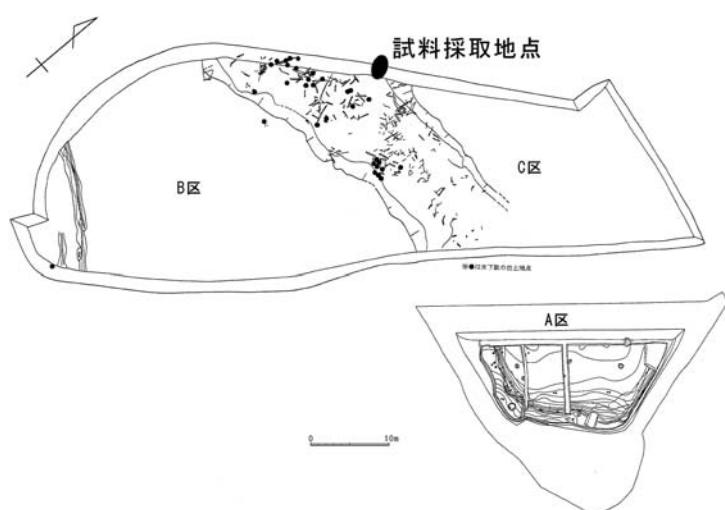


図3 庵寺遺跡試料採取地点位置図 (S=1/1000)

査区平面図に、試料採取地点を示す。更に図3、4の各地点断面図に試料採取層準を示した。試料は現地で大まかに整形して持ち帰り、試験室内で調整を行った。また、以下の手順によって各試料の軟X線写真を撮影した。①増感紙を挟んだ印画紙をケースの直下に置く。②40～45kVp・4mA程度の電流を50秒～1分20秒かけて試料の上方60～70cmより照射し感光させた。記載に当たり、「土壤記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修, 1989）」を参考に行った。

### (3) 軟X線観察結果

上位から下位に向けて各試料の記載を行う。また図版として、地点ごとに実視写真、軟X線写真のほか、軟X線写真に解析結果を重ねた図も示す。

#### 1) 五丁遺跡 No.1 地点

① 3層 粒度はシルト質粘土である。軟X線写真の色調はやや暗く、直線的なチャンネルが上下方向に認められ、特に右側で著しく多い。チャ

ンネルの多くはP-1層まで続くが、一部は4-1層まで続いている。直線的なチャンネルが上下方向に伸びることから、チャンネルの多くは根跡と考えられる。中央部では下位のシルトが、噴き上がるようなラミナとして認められる。また、ラミナに沿って細粒のペッドが配列する様子も認められる。右側上部では水平方向のラミナが認められるほか、右側中部には構造の不明りょうな部分がある。

**②P-1層** 粒度は粘土質シルトである。軟X線写真的色調はやや明るく、直線的なチャンネルが上下方向に多く認められ、特に左側で多い。チャンネルは上位の3層から続くものと、P-1層から始まるものがある。チャンネルの多くは、4-1層まで続いている。また、水平方向に伸びる短いチャンネルも認められる。水平方向のチャンネルは、P-1層内で認められるラミナの方向と一致し、層理面に沿った根跡である可能性もある。ペッドの発達は全体的に弱いが、部分的に二次ペッドが認められるなどペッドの発達が強い部分が認められる。ラミナも認められるが、斜交するなど乱れている。

**③P-2層上部** 粒度はシルトであり、軟X線写真的色調がやや明るく、直線的なチャンネルが上下方向に多く認められる。チャンネルは3層又はP-1層から続くものと、P-2層上部から始まるものがあり、4-1層まで続いている。右側上部ではペッドの発達が強く、二次ペッドも認められる。また中央下部では、水平方向のラミナが認められる。

**④P-2層下部** 粒度は細砂質シルトであり、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が混じる。軟X線写真的色調は明るい。軟X線写真で大きく白く抜ける部分は、実視写真ではオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位から続くものと、P-2層下部から始まるものもある。多くは4-1層まで続くが、一部はO5層まで続いている。ペッドの発達は全体に弱いが、根跡と考えられる部分では強い傾向にある。また、根跡と関連して粘土質シルトのブロックが入る。

**⑤4-1層** 粒度はシルトで、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が混じる。軟X線写真的色調はやや明るく、直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位から続くもののほか、4-1層から始まるものがある。これらのチャンネルは、6層又はO5層まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。ペッドの発達は全体に弱く、左側で下位からの液状化に伴いわずかに認められる。一方右側では、細砂のラミナが水平方向に並ぶのが認められる。

**⑥6層** 粒度はシルト質粘土で、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が混じる。実視写真的色調は暗い（黒い）く、腐植物が濃縮していると考えられる。軟X線写真的色調はやや暗く、細礫（粗砂）が明るい色調を示す。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。P-2層下部又は4-1層から続くものと、6層から始まるものがあり、O5層まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。左側には上下方向のラミナとブロック（あるいは擬礫）が吹き上がるような状

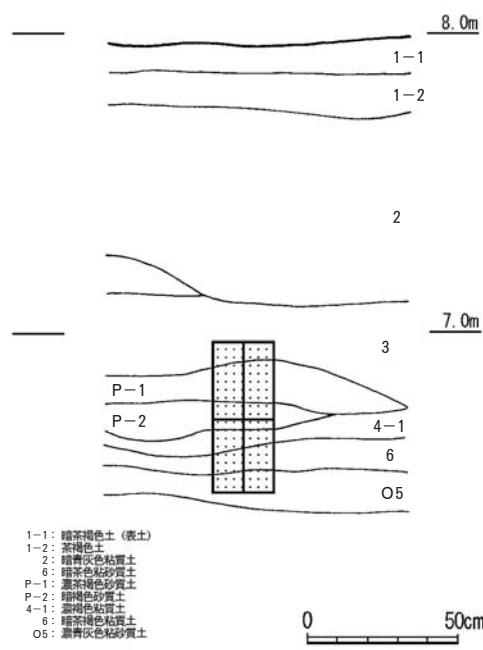


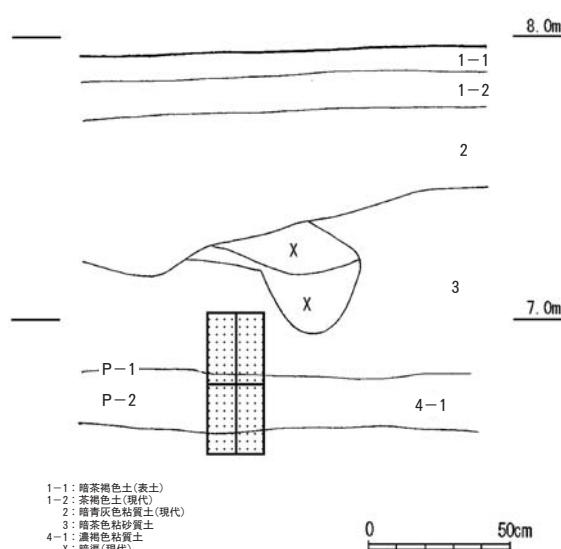
図4 五丁遺跡No.1 地点層準  
(S = 1/60)

態で認められ、液状化跡と考えられる。また中央部に、水平方向のラミナが認められる。

⑦O 5層 粒度はシルトである。軟X線写真的色調はやや明るく、直線的なチャンネルが上下方向に認められる。上位から続くものと、O 5層から始まるものがある。ペッドの発達は弱く、ごく細粒のものが目立ち、二次ペッドも目立たない。一方で、実視写真では上部（6層との境界近く）の色調がやや暗く（黒く）、土壤化の影響が認められる。また軟X線写真でも、この層準の一部で二次ペッドが発達している様子が認められる。

## 2) 五丁遺跡 No. 2 地点

① 3層上部 粒度は細砂質シルト。軟X線写真的色調は明るく、大きく白く抜ける部分は実視写



真ではオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルの多くは3層下部まで続くが、一部は4-1層上部まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。ペッドの発達が強く二次ペッドをなす部分も多いが、ほとんどは根跡と考えられる上下方向のチャンネル周辺である。一方、根跡と考えられる部分の間には、細砂のラミナが認められる。

② 3層中部 粒度はシルトである。軟X線写真的色調はやや明るい。右側中央の暗い部分は、礫が抜けたことによる試料整形時のへこみである。

図5 五丁遺跡No. 2 地点層準 ( $S = 1/60$ )

直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の3層上部から続くものと、3層中部から始まるものがあり、3層下部又は4-1層上部まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。ペッドの発達は全体に弱く、成型時のへこみに伴うものである。

③ 3層下部 粒度は細砂質シルトで、径数ミリまでの、粗砂あるいは細礫が混じる。軟X線写真的色調は明るい。細砂と考えられる色調のごく明るい部分が噴き上がるようなラミナ、あるいはブロック（擬礫）状に分布する。このような乱れた構造は、地震による液状化に由来すると考えられる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の3層上部又は3層中部から続くものと、3層下部から始まるものがある。多くは3層下部で終えるが、4-1層上部まで続くものもある。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。右側には水平方向のラミナが認められる。

④ 4-1層上部 粒度は細砂質シルトである。軟X線写真的色調が明るく、右側の大きく白く抜ける部分は実視写真でオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位から続くものと、4-1層上部から始まるものがある。チャンネルの多くは4-1層下部まで続くが、4-1層上部で終わるものもある。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。ペッドの発達は弱く、ごく細粒のものが目立ち、二次ペッドも目立たない。軟X線写真右側上部にはラミナ状の部分が認められるが、試料整形の削りムラの可能性がある。

⑤ 4-1層下部 粒度はシルトで、多くの細礫や中央部の数cmのブロックを含む。軟X線写真の色調はやや明るく、細礫やブロックは更に明るい色調を示す。これらのブロックや細礫は下位の地山に由来する可能性が高い。また、大きく白く抜ける部分は、実視写真ではオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の4-1層上部から続くものと、4-1層下部から始まるものがある。チャンネルの多くは地山上部まで続くが、地山中部まで続くものもある。ペッドの発達は強く、二次ペッドも認められる。

⑥ 地山上部 粒度は細砂質シルトである。軟X線写真の色調は明るく、右側で白く抜ける部分は実視写真でオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。軟X線写真では上部と中部に明確な違いが認められないが、実視写真では上部は中部より暗く、上位の6層下部に近い色調を示す。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の6層下部から続くものと、地山上部から始まるものがある。チャンネルは地山中部又は下部まで続いている。ペッドの発達は中度であり、二次ペッドも認められる。以上の事柄から地山上部は、地山が土壤化を受けたものであると考えられる。

⑦ 地山中部 粒度は細砂質シルトである。軟X線写真の色調は明るく、白く抜ける部分は実視写真でオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の4-1層下部から続くものもあるが、多くは地山上部あるいは中部から始まる。これらのチャンネルは、地山下部まで続いている。ペッドの発達は、根跡と考えられる部分で強い。ペッドの認められない場所では、水平方向のラミナが認められる。

⑧ 地山下部 粒度はシルト質細砂である。軟X線写真の色調が中部より更に明るく白く抜ける部分は実視写真では黒褐色を帯びることから、マンガン斑が染み出したものであることが分かる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の4-1層下部又は地山上部から続くものと、地山下部から始まるものがある。ペッドの発達は弱く、ごく粗粒のペッドが目立つ。

### 3) 五丁遺跡 No.3 地点

① 3-2層上部 粒径はシルトで、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が混じる。軟X線写真の色調はやや明るく、細礫（粗砂）が明るい色調を示す。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルの多くは3-2層下部まで続くが、一部は4-1層まで続いている。ペッドの発達は、根跡と考えられる部分で強い。一方、ペッドの認められない場所では、水平方向のラミナが認められる。

② 3-2層下部 粒径は粘土質シルトで、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂がわずかに混じる。軟X線写真の色調はやや暗く、細礫（粗砂）が明るい色調を示す。左端にはシルトのブロックがやや明るく

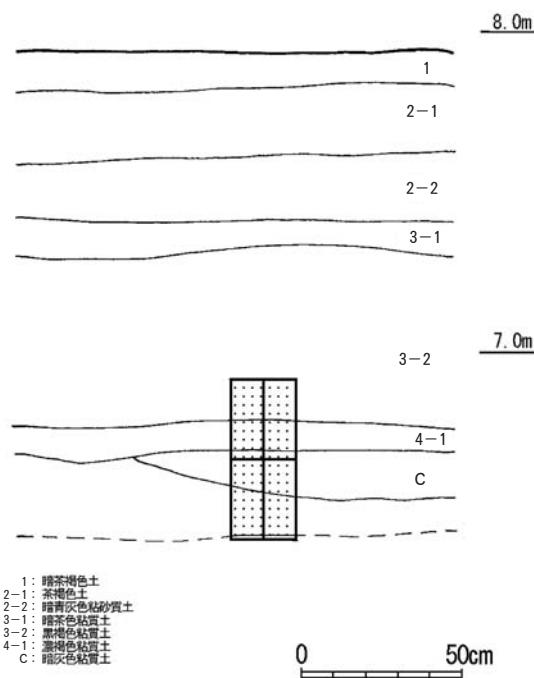


図6 五丁遺跡No.3 地点層準 (S=1/60)

認められる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の3-2層上部から続くものと3-2層下部から始まるものがある。多くは3-2層下部で終わるが一部は4-1層まで続いている。ペッドの発達は全体に弱い。また、ペッドの認められない場所では、水平及びやや左下がりのラミナが認められる。

**③4-1層** 粒径は細砂質シルトで、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が混じる。軟X線写真の色調は明るく、細礫（粗砂）が明るい色調を示す。軟X線写真で大きく白く抜ける部分は、実視写真ではオレンジ色を帯びることから、褐鉄鋼（酸化鉄）が染み出したものであることが分かる。中央部で細礫、粗砂のラミナが浮き上がるよう認められ、地震による液状化の影響が示唆される。また、一部で上位との境界が不鮮明になっている。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の3-2層上部または3-2層下部から続くものと、4-1層から始まるものがある。多くは4-1層で終わるが、一部は下位のC層まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。ペッドの発達は強く、二次ペッドも認められる。

**④C層** 粒度は粘土質シルトで、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂がわずかに混じるほか、地山由来と考えられる1cm程度の小ブロックや別に径数cmのブロックが認められる。軟X線写真の色調はやや暗く、径数ミリまでの細礫あるいは粗砂が明るい色調でわずかに混じるほか、地山由来と考えられる1cm程度の小ブロックが明るい色調で認められる。明らかな根跡が中央やや上部にあり、ここではペッドの発達が強い。このほか、ペッドの発達が強い部分とペッドの発達が弱い部分がブロック状に分布する。これらブロック状の部分を埋めるように、地山のブロックやペッド、粗砂が巻き上がるようなラミナ状に配列する傾向にある。このような構造は、地震による液状化によるものと考えられる。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位の4-1層から続くものと、C層から始まるものがある。チャンネルの多くはC層で終わるが、一部は地山まで続いている。また、水平方向の短いチャンネルが認められる。

**⑤地山** 粒径はシルト質細砂である。軟X線写真の色調が明るい。直線的なチャンネルが上下方向に認められる。チャンネルは上位のC層から続くものもあるが、多くは地山最上部あるいは地山内部から始まる。また、左側上部にある水平方向のチャンネルは、試料整形時にできたクラックである。ペッドの発達は弱く、ごく粗粒のペッドが目立つ。

#### 4) 廃寺遺跡上部

**①4層上部** 粒度は粘土質シルトで、実視写真の色調が暗く、土壤化を受けていると考えられる。軟X線写真の色調はやや暗く、明るい色調で径数mmまでの細礫あるいは粗砂が混じる。黒く抜けた部分は試料整形時に礫が抜けた跡である。

上下方向の直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルの多くは3層中部まで続くが、一部は4

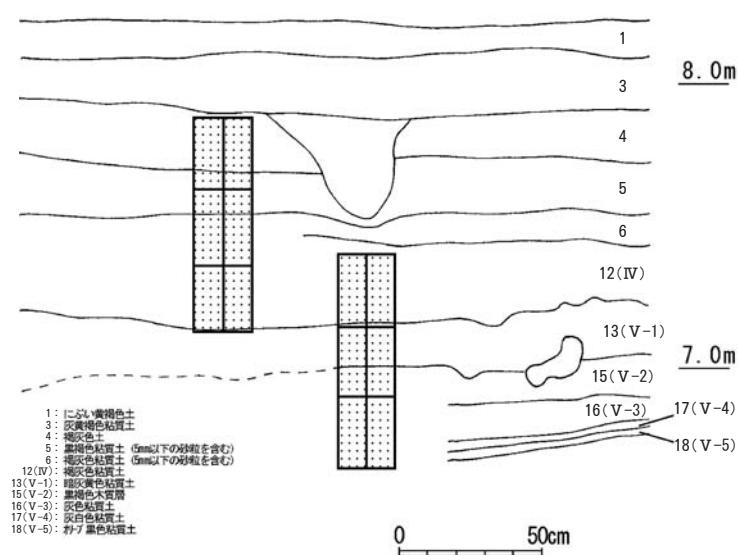


図7 廃寺遺跡上・下層準 (S=1/60)

層まで続く。これらのチャンネルには断続的なものもあるが、多くは上下方向に伸びることから、多くは根跡と考えられる。また、ペッドはほとんど認められない。

② 4層中部 粒度はシルトで、実視写真では上下方向の暗部が目立つ。上下方向の暗部は軟X線写真での根跡と考えられるチャンネルに重なり、根跡に沿って上部の土壤が混入しているものと考えられる。軟X線写真の色調が左右で異なるが、左側が暗いのは試料整形時のむらによる。また、径数mmまでの細礫あるいは粗砂が混じる。黒く抜けた部分は、試料整形時に礫が抜けた跡である。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルは上位から続くものと、4層中部から始まるものがある。チャンネルの多くは、4層下部で止まるが、一部は5層まで続く。ペッドは、ほとんど認められない。中央部で水平方向のラミナが認められ、地層境界の可能性もある。

③ 4層下部 粒度は細砂質シルトで、数mmから1cm程度の角礫が多量に認められる。実視で顕著であった礫が、軟X線では白く抜けた。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルの多くは上位から続き、下位の5層にいたる。ペッドはわずかに認められる程度である。また、地層の下底には礫が並ぶ。

④ 5層 粒度は粘土質シルトで、粗砂が全体に混じる。実視写真の色調は黒く、土壤化を受けているあるいは腐植が濃縮していると考えられる。軟X線写真の色調はやや暗く、実視で認められた粗砂が白く抜けた。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルは上位から続くものもあるが、4層と5層の境界部から始まるものがある。またチャンネルの多くは、6層まで続いている。ペッドはほとんど認められない。

⑤ 6層 粒度は粘土質シルトで、粗砂あるいは細礫が顕著で、1cmほどの礫も認められる。実視写真では上部でやや暗色を示すが全体に明るい色調を示す。軟X線写真の色調はやや暗く、実視で認められた粗砂が白く抜けた。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルは上位から続くものもあるが、5層と6層の境界部から始まるものもある。ペッドの発達は中度でほぼ全域に認められる。

⑥ 12(IV)層最上部 (以下の土層については本文中はローマ数字の土層番号で表記する) 粒度は細砂質シルトで、全体に粗砂が目立つ。実視写真でやや黒い色調を示す。また、試料採取時の乱れがフォルダー境界部に認められる。軟X線写真の色調は明るく、白く抜けた細礫がわずかに確認できる。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルの多くはIV層最上部から始まり、中部まで続く。ペッドの発達は全体に弱い。

⑦ 12(IV)層上部 粒度はシルトで、全体に粗砂が目立つ。実視写真でやや暗い色調を示す。軟X線写真の色調はやや明るく、白く抜けた細礫が僅かに確認できる。上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。チャンネルの多くは上位のIV層最上部から始まり、中部まで続く。ペッドの発達は全体に弱い。

⑧ 12(IV)層中部から下部、V-1上部 粒度は粘土質シルトで、上部でわずかに粗砂が確認できる。実視写真では全体に明るい色調を示すが、明るい色調の部分が掌状に下位から貫入する。また、これに引きずられるように暗色の部分が貫入している。軟X線写真の色調はやや暗い部分に、暗いV-1上部が下位から掌状に貫入する。また、細礫が粘土質シルトの部分にわずかに確認できる。上部には上下方向に直線的なチャンネルが顕著に認められる。中部から下部でもチャンネルが認められるが、細く目立たない。ペッドの発達は全体に弱い。

## 5) 庵寺遺跡下部

①12(IV)層中部1・2 1、2ともに粒度はシルトで、粗砂が混じる。実視写真は暗黄褐色で、根跡沿って検出した褐鉄鉱が顕著である。軟X線写真の色調はやや明るく、粗砂を多量に混じる。また小礫も含まれる。暗色で粘土と判断できる。明るい色調の粗砂が混じるほか、細礫もごくわずかに認められる。根跡と考えられる上下方向に延びる直線的なチャンネルの多くは、中部1の上位から続き、中部2で止まる。このため、上部1では上部2に比べやや明るい色調を示す。

②12(IV)層下部 粒度は粘土で粗砂が混じる。実視写真では上下に比べやや明るい色調で暗黄色を示す。軟X線写真の色調は暗色で、明るい色調の粗砂が混じるほか、細礫もごくわずかに認められる。更に、上位から続く根跡と考えられる直線的なチャンネルが上下方向に延びる。ペッドの発達は弱く、ほとんど観察できない。

③12(IV)層最下部1 粒度は粘土で、粗砂がまばらに混じる。実視写真では暗黄褐色を示すほか、黄褐色の部分が右上がりのラミナを成す。軟X線写真の色調は暗色で、やや明るいシルト質の部分が中央でラミナを成し、粗砂が散在する。また、細礫もごくわずかに認められる。更に、上位から続く根跡と考えられる直線的なチャンネルが上下方向に延びる。

④12(IV)層最下部2 IV層最下部1に切れ切れの状態で残る。ほぼ水平に堆積するが、上下層との境界は乱れる。粒度は粘土で、実視写真では暗褐色を示す。軟X線写真の色調は下位の7層1上部より更に暗い。

⑤13(V-1)上部 粒度は粘土で、実視写真では暗黄灰色を示す。ほぼ水平に堆積するが、上下層との境界は乱れる。軟X線写真の色調は暗く、上部がやや明るい色調であるが、試料整形時の斑と、試料間の色調差と考えられる。ペッドは観察できなかった。わずかに細礫を含む。

⑥13(V-1)中部 粒度は粘土質シルトで、黒色の植物片をわずかに含む。実視写真では黄灰色を示す。ほぼ水平に堆積するが上位のV-1上部との境界は乱れる。軟X線写真の色調は下部のV-1下部同様にやや暗い。一方で植物片のラミナが認められることでV-1下部と区別できる。

⑦13(V-1)下部 粒度は粘土質シルトで、黒色の植物片をわずかに含む。実視写真では黄灰色を示す。また、植物片はラミナを成し、V-2とV-1上部の間に楔状に貫入する。軟X線写真の色調は下部のV-2に比べわずかに暗い。また暗い色調を示す植物片がラミナを成す。

⑧15(V-2) 粒度は粘土質シルトで、黒色の植物片を含む。実視写真では暗灰色を示す。また、植物片はラミナを成し、下位の7層3上部に貫入を受ける。軟X線写真の色調はやや暗く、植物片が顕著なラミナを成す。

⑨16(V-3)上部 粒度はシルトで、黒色の植物片を多量に含む。実視写真では黄灰色を示す。また、植物片はラミナを成し、上位のV-2に楔状に貫入する。軟X線写真の色調は植物片の影響でやや暗いが、マトリックスはやや明るい。植物片が顕著なラミナを成し、マーブル状に貫入する。

⑩16(V-3)下部 粒度はシルトで、黒色の植物片を右側に含む。実視写真では黄灰色を示す。軟X線写真の色調はやや明るい。ごく粗粒のペッドが粗く分布し、発達は弱い。直線的なチャンネルが認められ、多くは上位のV-3上部との境界から始まる。

⑪17(V-4) 薄層で、粒度はシルト、実視写真では灰白色を示す。軟X線写真の色調はやや明るい。

⑫17(V-4)上部 薄層で、粒度はシルト、植物片を含む。実視写真では黄灰色を示す。軟X線

写真の色調はやや明るく、植物片がラミナを成している。

⑬18(V-5)中部 粒度はシルトで、細粒の植物片を含む。実視写真では黄灰色を示す。下位の7層5下部との違いはほとんどない。軟X線写真の色調はやや明るいが、下位のV-5下部に比べ色調が暗い。ペッドの発達は強く、中～粗粒のペッドが密に分布する。

⑭18(V-5)下部 粒度は砂質シルトで、細粒の植物片を含む。実視写真では黄灰色を示す。上位のV-5中部との違いはほとんどない。軟X線写真の色調は明るく、上位のV-5中部に比べても色調は明るい。ペッドの発達は弱く、中～粗粒のペッドがやや粗く分布することで上位のV-5中部と区別される。

#### (4) 液状化痕について

両遺跡の調査地内で、液状化痕と考えられる地層の乱れが多数観察された。前述の観察とは別に、液状化痕の記載を行った。

##### 1) 五丁遺跡 No.1 地点

調査地点は、大畦畔の可能性のある凸地を挟む層準である。6層の一部が「脈状」に4-1層に貫入している。細かく見ると、6層の一部がブロック化している。更にブロックの周辺が粘土化し、垂直方向のラミナとして認められる。更に、粘土のラミナ内には小ブロックが引きずられるように含まれる。3層内では、P-1層上面から粘土中に噴き上がるよう継く、シルトのラミナが観察される。更にこのラミナに沿って、細粒のペッドが配列する様子が認められる。また、これらのラミナと直交するような水平方向のラミナが部分的に認められる。

##### 2) 五丁遺跡 No.2 地点

調査地点では、各層がほぼ水平堆積する。4層下部では、シルト中に噴き上がるよう継く細砂のラミナが観察される。細砂は所によってブロック（凝礫）状に分布している。

##### 3) 五丁遺跡 No.3 地点

調査地点では、各層がほぼ水平堆積する。4-1層の中央部では、上位の3-2層（シルト）中に噴き上がるよう継く細礫、粗砂からなるラミナが認められる。C層には顕著な大小のブロック（凝礫）が存在する。大きなブロックには、ペッドの発達が強いものや、逆にペッドの発達の弱いものが顕著である。一方小さなブロックは、色調から地山に由来すると考えられる。これら大きめのブロックの間を縫ってシルト～粘土が巻き上がるよう継くラミナが認められる。また、小さめのブロック及び粗砂は、シルト～粘土のラミナに取り込まれるように配列している。これらの乱れた構造は、前述6層の細砂、粗砂の噴き上がるようなラミナに継く。

##### 4) 庵寺遺跡

庵寺遺跡では、V-3からIV層にかけて、明らかな液状化痕が認められた。また、V-3下部から下位では層理面が波打つなど、液状化痕の可能性が指摘できるが、液状化痕と断定できない状況である。

① 6層中部から7層1上部 上部下段及び下部上段の試料で観察できる。上部下段試料でIV層最上部は土壤化の影響を受け、やや黒色を帯びる。また根跡と考えられるチャンネルの多くはIV層最上部から中部まで継ぎ、IV層下部まで継ぐものもある。IV層中部1からはじまるチャンネルも若干認められるが、不鮮明でIV層下部、V層との関係が明確ではない。液状化と考えられる堆積層の乱れは、V-1上部の堆積物がIV層最下部、下部、中部を貫き、IV層中部で掌状に広がるように認め

られる。また、IV最下部2とした粘土薄層はV層に引きずられるように上方へ伸びているが、層厚が薄いために小ブロック化している。チャンネルによる地層の切り合いから、IV層最上部堆積後、6層が堆積するまでに起こった地震による液状化である可能性が示唆される。下部上段試料では上部下段試料ほど激しい変形を受けていないものの、V-1上部が波打ち、IV層最下部1より上位が変形を受けている。またIV層最下部1の下位で層を成していたはずのIV層最下部2は断裂し切れ切れになっている。

②V-1上部からV-3上部 下部中段から下段の試料で観察できる。V-1上部と中部の境界が乱れ、液状化による可能性が指摘できる。しかし、堆積構造が明確でないことから、液状化によると断定はできない。最も明らかな液状化痕は、V-3上部がV-2に楔状に貫入している部分である。ここでは、V-3上部、V-2に多量に含まれる植物片が配列する。これらの動きに伴い、V-1下部も、ここでは楔状に変形したと考えられる。また、V-3下部から下位では層理面が波打つなど、可能性があるものの明確な液状化跡と認めにくい状況である。

#### (5) 耕作土層の可能性について

一般に、耕作層ではペッドが強く発達しラミナなどの堆積構造は認められないとされている。以下では、各地点の堆積層ごとに耕作土の可能性を考えていく。

##### 1) 五丁遺跡 No.1 地点

前述のように、五丁遺跡No.1地点は大畠畔の可能性のある凸地を挟む層準である。水平堆積を成す3層、4-1層及び6層に耕作土の可能性があった。

①3層 ペッドの発達が弱く、層内で様々な方向のラミナが認められるなど、液状化による影響が強く、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

②4-1層 今回の観察で4-1層でのペッドの発達は弱く、細砂のラミナが水平方向に並ぶ部分も認められた。一方で、4-1層には液状化痕が強く刻まれており、堆積構造とされるラミナも、液状化による影響ととらえることが可能である。したがって、ここでは液状化の影響が強く、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

③6層 4-1層同様に液状化の痕跡が強く、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

##### 2) 五丁遺跡 No.2 地点

各層がほぼ水平堆積する。水平堆積を示す3層、4-1層のほか、地山上部に耕作土の可能性が指摘できる。

①3層上部 ペッドの発達が強く二次ペッドをなす部分も認められるが、ほとんどは根跡と考えられる上下方向のチャンネル周辺である。一方、根跡と考えられる部分の間には、実施で細砂のラミナが認められる。ラミナの成因について、下部で顕著な地震痕に連続する可能性も指摘できる。このことから、耕作層か否かの判断ができなかった。

②3層中部 ペッドの発達が弱く、成型時の「へこみ」も認められた。堆積時の構造が認められないことから耕作の可能性が指摘されるが、断定には至らなかった。

③3層下部 ラミナが認められるが、液状化の影響によるととらえることが可能である。したがって、ここでは液状化の影響が強く、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

④4-1層上部 ペッドの発達は弱く、ごく細粒のものが目立つ。明確な二次ペッドも目立たな

いなど、耕作土とする判断材料に乏しかった。ただし、耕作を否定するものではない。

⑤4-1層下部 ペッドの発達が強く、二次ペッドも認められるなど、耕作層の可能性が高い。

⑥地山上部 ペッドの発達は中度であり、二次ペッドも認められる。実施写真では上部の色調は中部・下部より暗く色調を示すなど、耕作に関連した可能性が高い。

### 3) 五丁遺跡 №.3 地点

各層がほぼ水平堆積する。水平堆積を示す3-2層、4-1層、C層に耕作土の可能性が指摘される。

①3-2層上部 中～粗砂からなる水平方向のラミナが認められる。一方、ペッドの発達は、根跡と考えられる部分で強い。ラミナが顕著であることから、耕作に関連した可能性は低い。

②3-2層下部 径数cm大のブロック（あるいはペッド）が認められる一方で、中～粗砂からなる水平あるいは左下がり方向のラミナが認められる。液状化により下位の4-1層が3-2層に噴き上がっており、ラミナはこの影響である可能性もある。したがって、ここでは液状化の影響が認められ、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

③4-1層 液状化による細礫、粗砂のラミナが明らかなことから、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

④C層 径数cm大のブロックが幾つか認められる。また、これらのブロック状の部分を埋めるように、地山の小ブロックや粗砂、細砂、シルトがラミナ状に配列する。一方で、大ブロック中のペッドの発達は強い傾向にある。ラミナを地震による影響であると考えた場合、大ブロックは分断された本来の堆積物ととらえられる。このように液状化の影響が強く、軟X線観察から耕作層について判断することはできなかった。

### 4) 庵寺遺跡

①4層 砂粒が混じるシルトであり、層相手的には耕作土層の可能性が指摘できる。しかし、4層中部にラミナが認められるほか、下部下底部でも細礫のラミナが認められる。また、4層上部から伸びる根跡（チャンネル）に沿って土壤化が認められるなど、耕作土層である可能性は低い。

②5層 砂粒が混じるシルトであり、層相手的には耕作土層の可能性が指摘できる。また色調も黒く、腐植あるいは微少な炭の收れんを予想させる。さらに5層上面から生じるチャンネルが認められ、5層上面が旧地表面であり土壤化を受けていた可能性が指摘できる。一方でペッドがほとんど認められないなど、耕作土と判断するには否定的な面もある。

③6層 砂粒が混じるシルトであり、層相手的には耕作土層の可能性が指摘できる。ペッドは全域に認められるが、発達は中度である。さらに5層上面から生じるチャンネルが認められ、4層上面が旧地表面であり土壤化を受けていた可能性が指摘できる。以上のことから6層が耕作土であった可能性は高い。

④IV層最上部・上部 砂粒が混じるシルトであり、層相手的には耕作土層の可能性が指摘できる。また色調も黒く、腐植あるいは微少な炭の收れんを予想させる。さらにIV層上面から生じるチャンネルが認められ、IV層上面が旧地表面であり土壤化を受けていた可能性が指摘できる。一方でペッドがほとんど認められないなど、耕作土と判断するには否定的な面もある。

⑤IV層中部・下部・最下部 わずかに砂粒が混じる粘土である。液状化が激しく、ペッドやラミナなどの構造を確認することはできなかった。

⑥V-1層中部～V-3層上部 砂粒をほとんど含まないシルトから粘土である。V-2、V-3上部では植物片が多量に含まれるなどの特徴を示す。ペッドも全く確認できず、チャンネルも少なかった。また、植物片がラミナ状に並び、耕作による地層の乱れは観察できなかった。

⑦V-3層下部 砂粒をほとんど含まないシルトから成る。ペッドは全体に分布するがペッドの粒径はごく粗粒で、発達は弱い。直線的なチャンネルが上位層との境界部から多数認められる。腐植の收れんなどは認められなかつたが、チャンネルの分布からV-3層下部上面が旧地表面であった可能性が指摘できる。ただし、耕作に用いられたか否かを判断する情報が少なかつた。

⑧V-4・5層上部 V-4層は灰白色シルトの薄層、V-5層上部は黄灰色の薄層である。また、V-5層部では植物片がラミナ状に配列する。これらのことから考えて、両層とも耕作土ではない。

⑨V-5層中部・下部 共に淘汰の良い黄灰色シルト層であり、チャンネルはほとんど認められない。中度に発達した小粒状で中～粗粒のペッドが全体に分布する。以上のことから、両層ともに耕作土であった可能性がある。

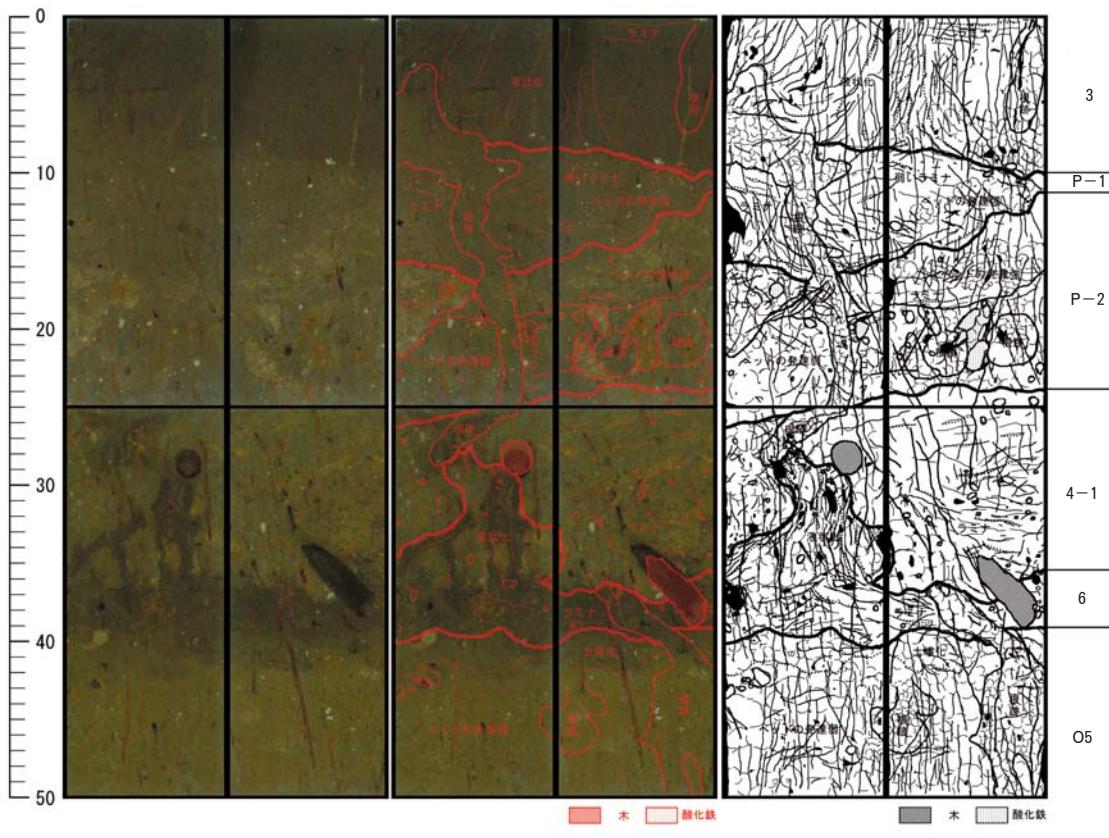
#### (6) まとめ

今回の軟X線観察によって堆積構造及び土壤構造が記載された。一方で、液状化による地層内の乱れが激しく、堆積時の構造をとどめていない層もあった。このため、耕作層の判定が困難な地点、層準が多かった。

今回観察に使用した試料を分割し、花粉分析、植物珪酸体分析を行うことにより、耕作に関する微化石資料が蓄積されることになる。微化石分析結果から耕作土としての指標が得られることにより、軟X線観察で耕作土との判断がつかなかつた層準についても、耕作土か否かの判断ができる可能性がある。また、庵寺遺跡のV層を中心とする河川（凹地）堆積物についても、その詳細が明らかになる可能性が指摘できる。

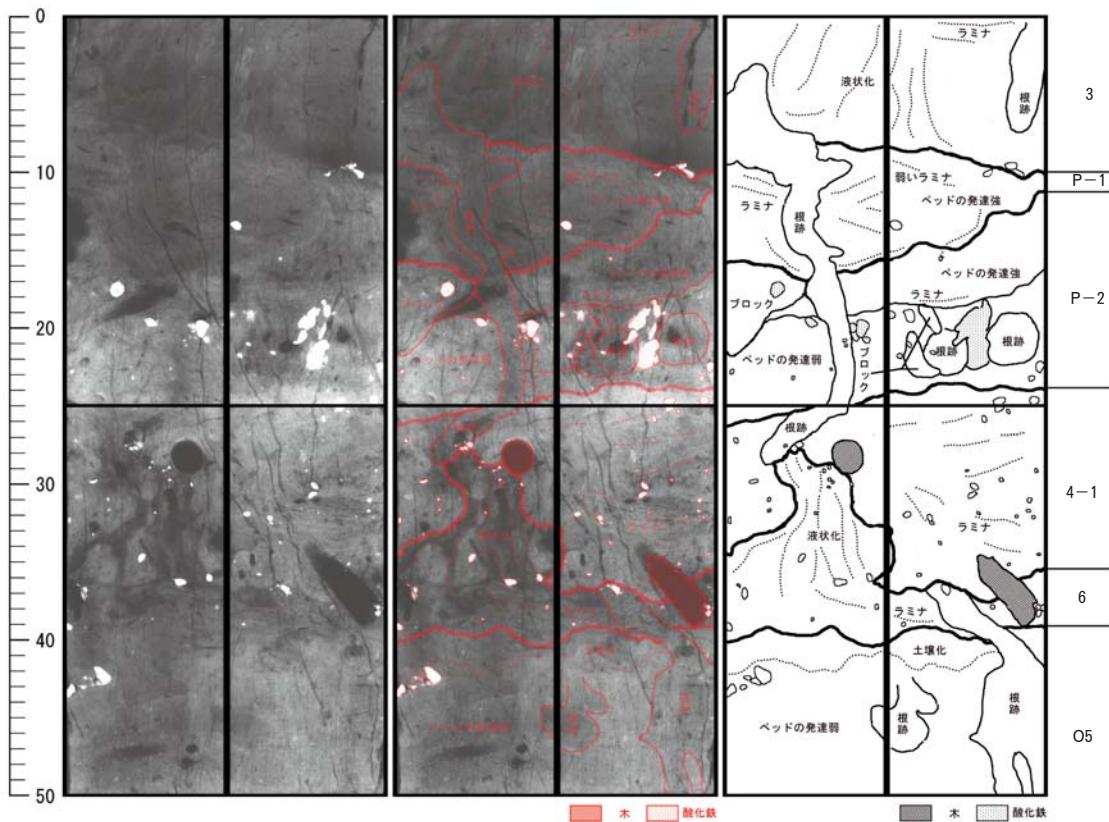
#### 引用文献

久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壤薄片記載ハンドブック. p.176, 博友社.



実視写真

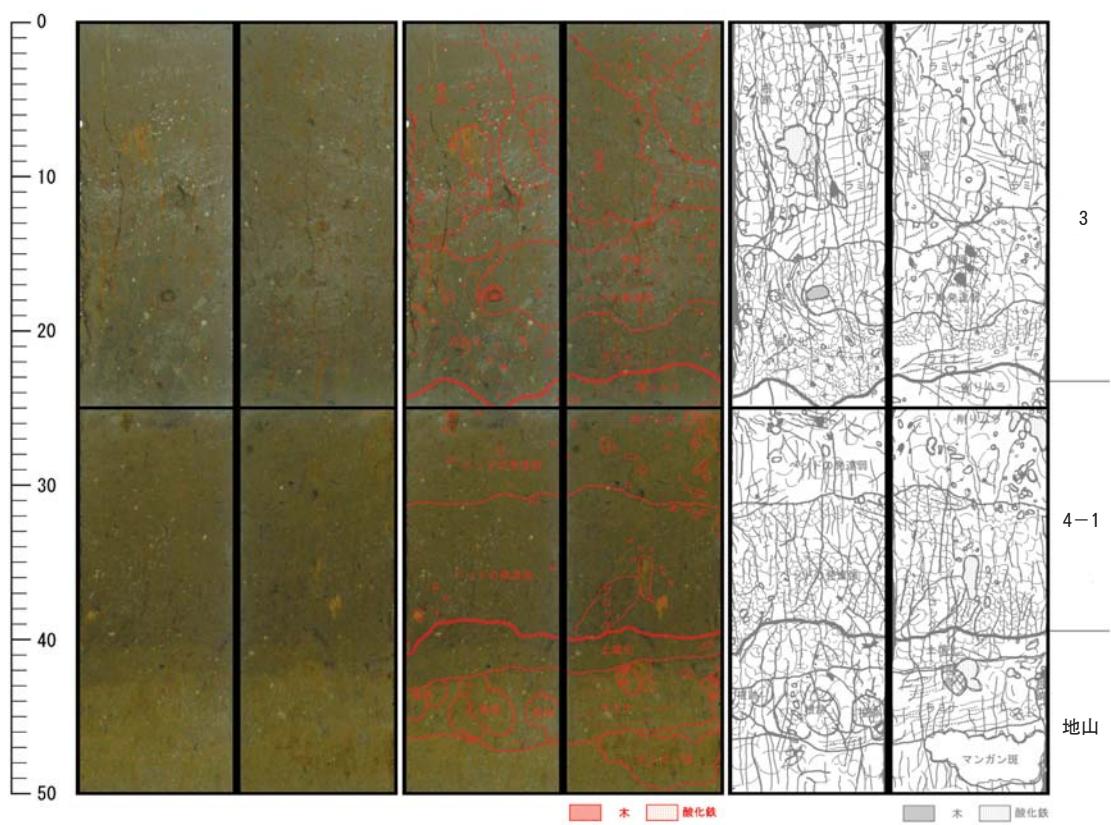
解析結果（ペットド・ラミナ詳細）



軟X線写真

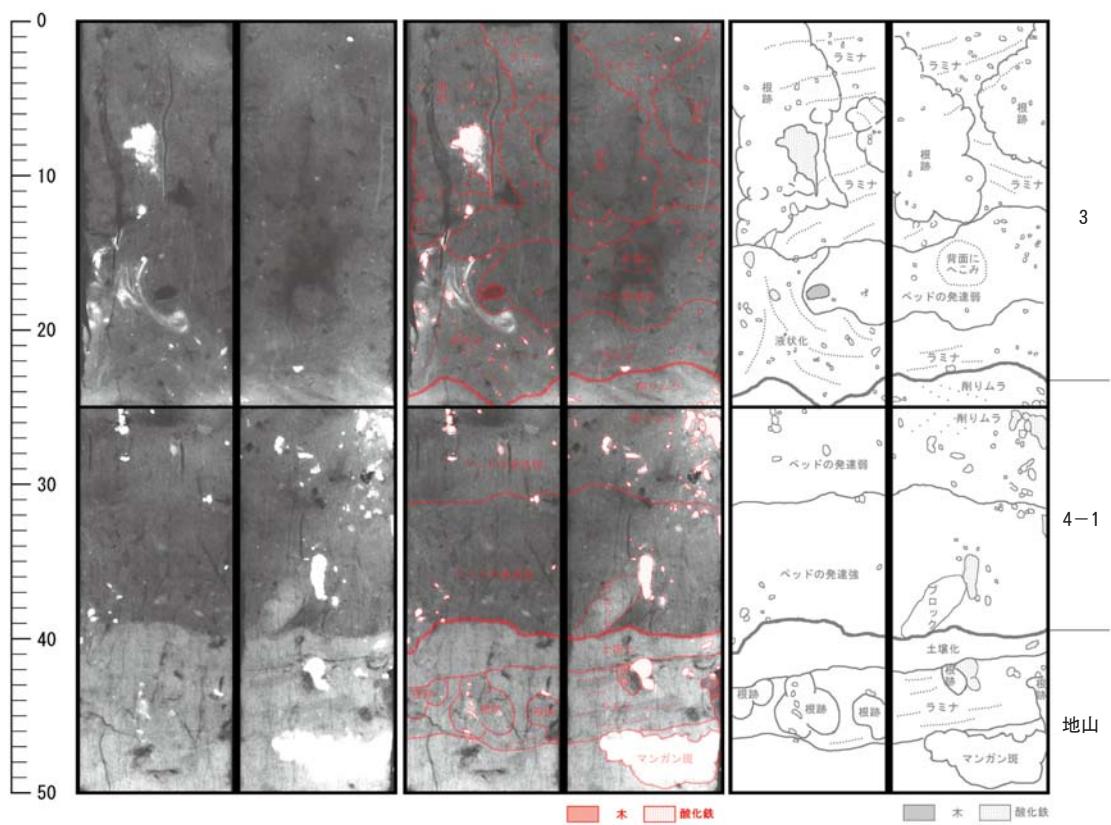
解析結果（概略）

図版1 軟X線観察結果（五丁遺跡 No.1 地点）



実視写真

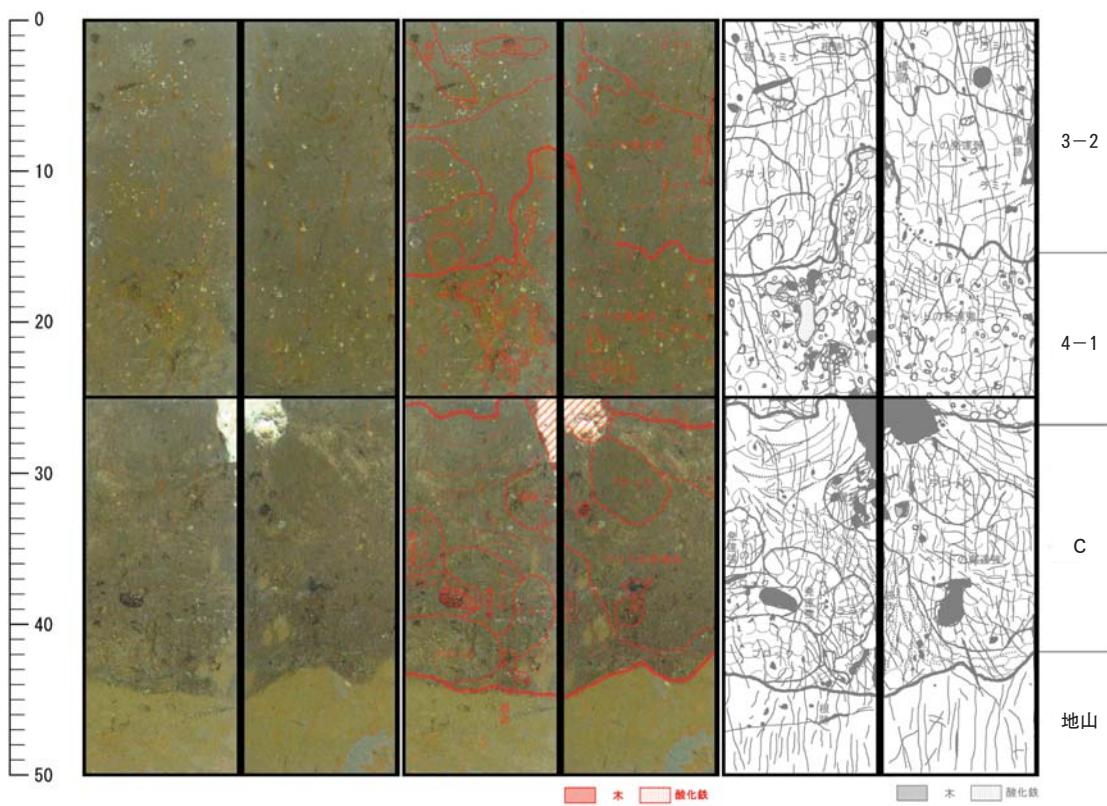
解析結果 (ペッド・ラミナ詳細)



軟X線写真

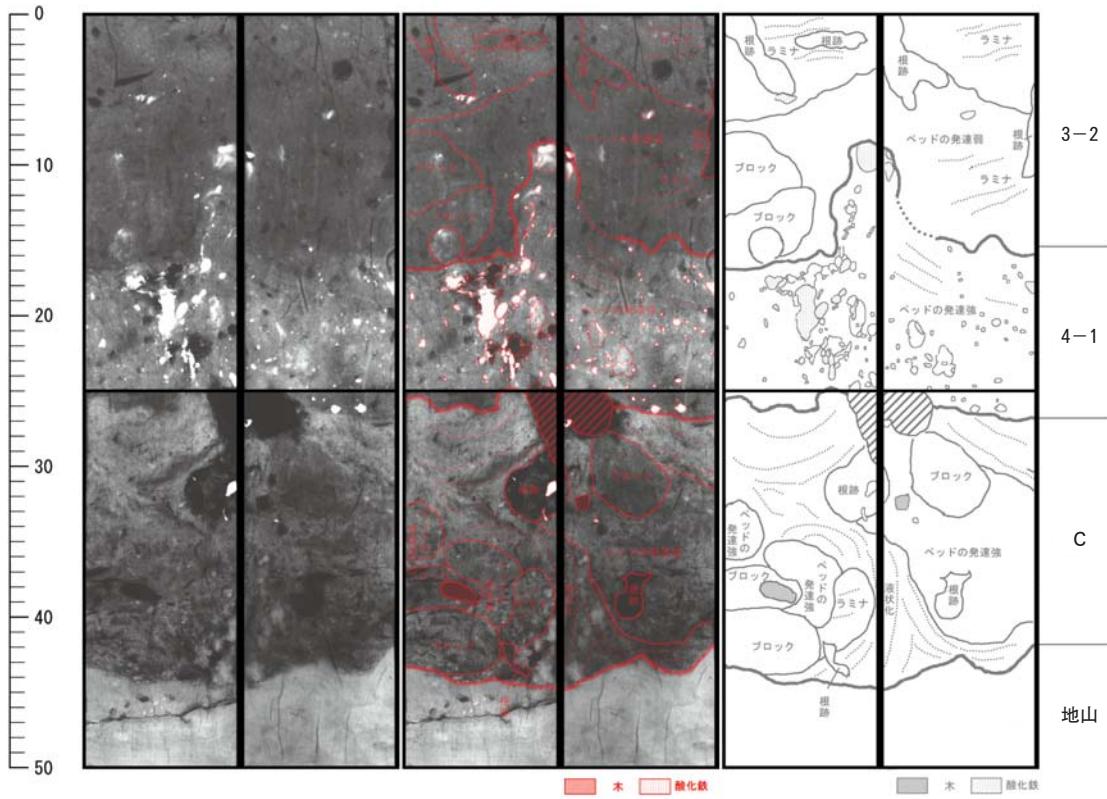
解析結果 (概略)

図版2 軟X線観察結果 (五丁遺跡 No.2 地点)



実視写真

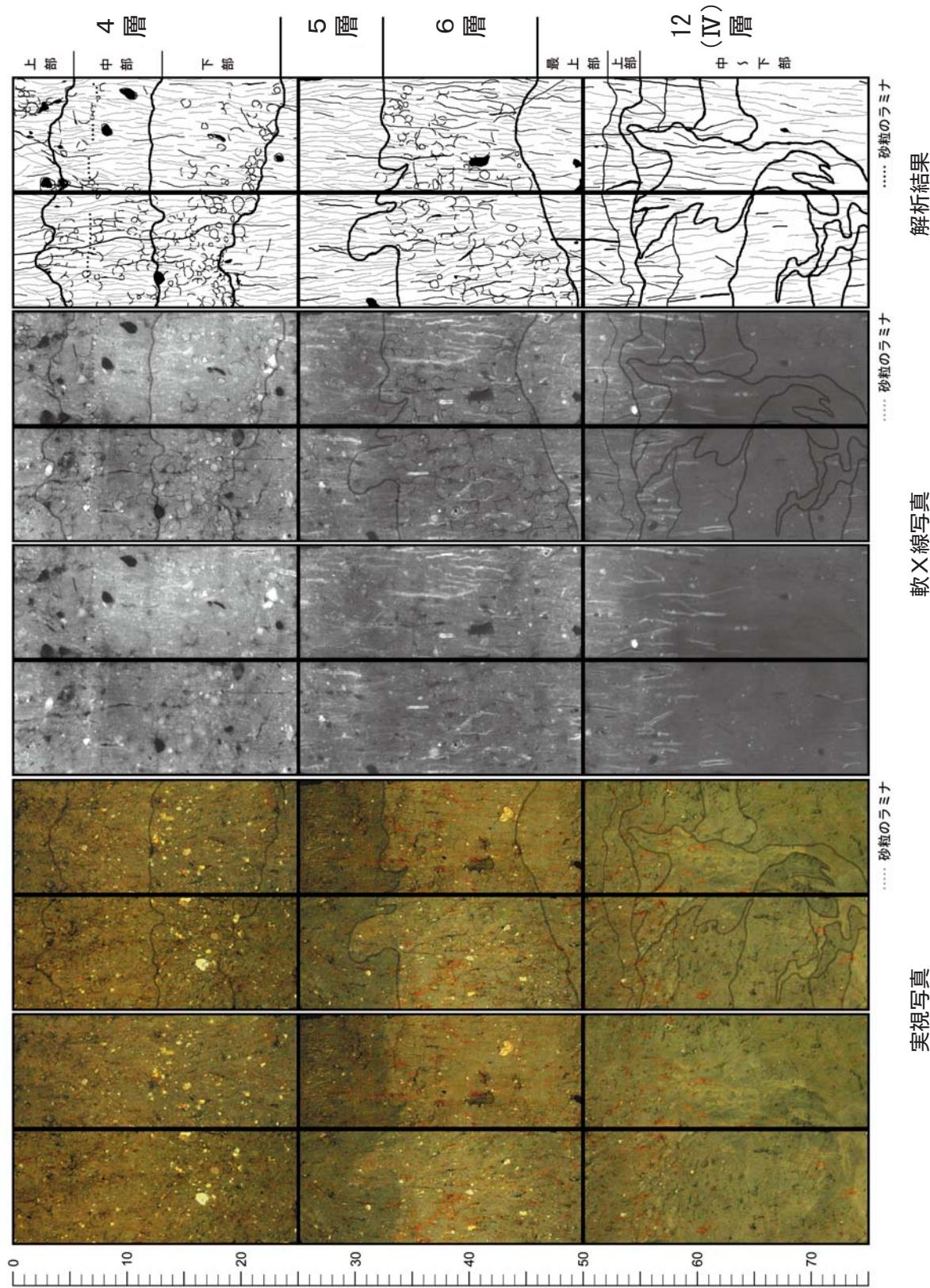
解析結果（ペッド・ラミナ詳細）



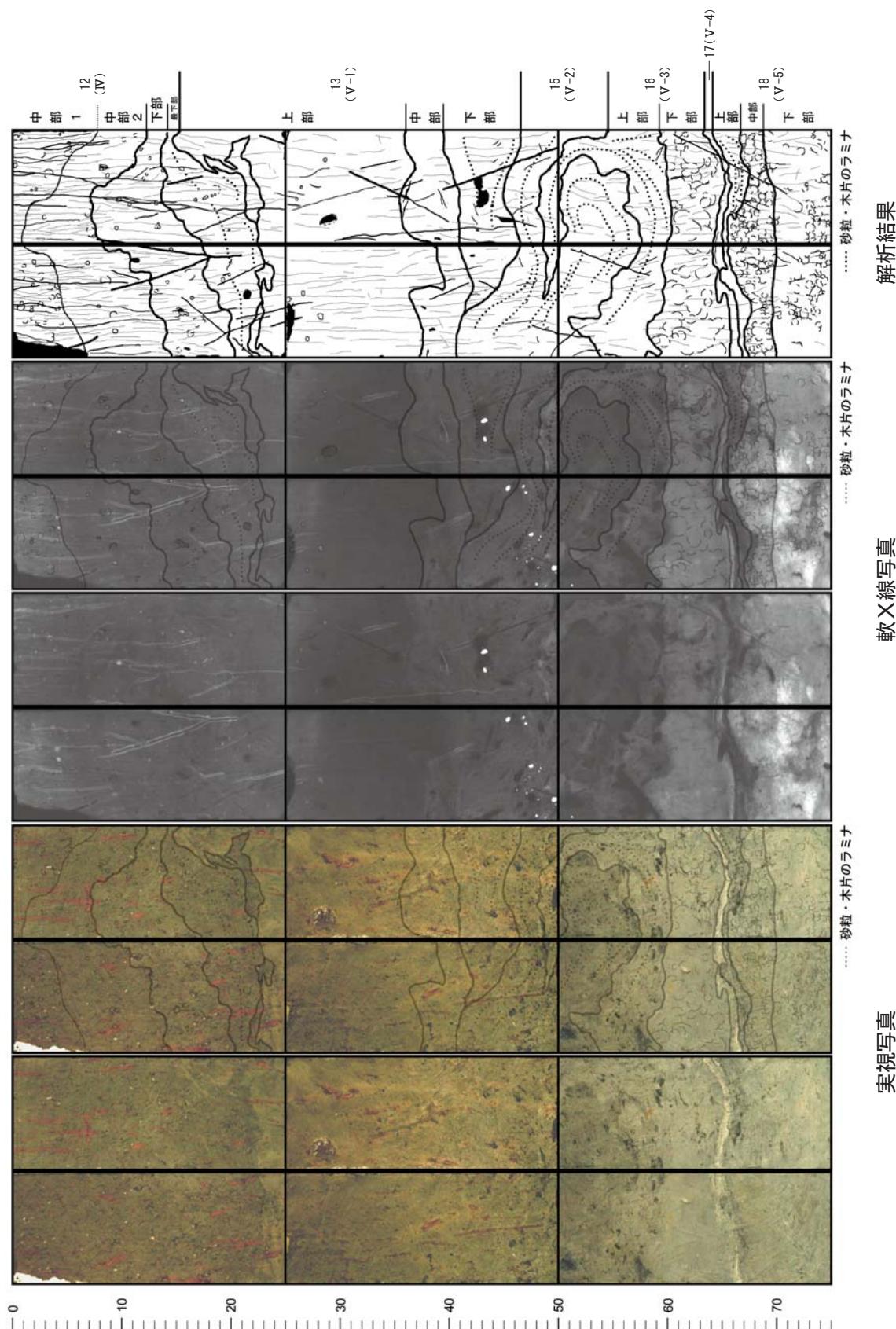
軟X線写真

解析結果（概略）

図版3 軟X線観察結果（五丁遺跡 No.3 地点）



図版4 軟X線観察結果（庵寺遺跡 上部）



図版5 軟X線観察結果（庵寺遺跡 下部）

## 第2節 五丁遺跡発掘調査に伴う出土樹種同定及び種実分析

古野 毅・渡辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

### (1) はじめに

五丁遺跡は、島根県中部、大田市仁摩町大国地内に位置し、中国山地から日本海に注ぐ潮川下流部の沖積平野内で、潮川に流れ込む支流沿いに立地する。

本報告は、五丁遺跡発掘調査に伴い検出された立木、及び弥生時代前期に埋まったと考えられる流路跡SR04から出土した流木群と種実群の記載を行ったものである。

### (2) 分析試料について

調査トレンチ内で発見された立木3本、及びSR04埋土から出土した流木14本について樹種同定を行った。さらに、SR04埋土から洗い出した種実を対象に種実同定を行った。樹種同定を行った試料一覧を表1に示すとともに、立木および流木の分布、種実同定試料の採取地点を図2に示す。樹種同定試料は現地にて、文化財調査コンサルタント株式会社が必要量を採取し、種実同定試料は島根県教育委員会が採取保管した試料から必要量を分取した。

樹種同定に当たり、顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2000）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

種実同定に当たり、0.25mm目の篩で水洗し細粒物を除去した試料から、肉眼あるいは実体顕微鏡下で同定可能な植物遺体を選別し、同定・計数した。同定は現生標本および図鑑類との対比により行い、試料ごとに分類群別、部位別に計数し、同定・計数結果を表形式にまとめた。同定後の試料

を、調査地点毎ごと分類群別にガラス瓶に入れ、60%エタノールにて液浸標本とした。液浸標本は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにて保管されている。

### (3) 樹種同定結果と記載

分類群ごとに代表的な試料（下線試料）の記載を行い、顕微鏡写真を図版に示した。また、同定結果を表1にまとめた。

#### 1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

試料No. : 16 (W06072813)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚及び樹脂道は存在しない。年輪幅は非常に狭く（平均0.05mm）、早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は非常に狭い（2～5細胞）。樹脂細胞は晩材部に多く存在し、

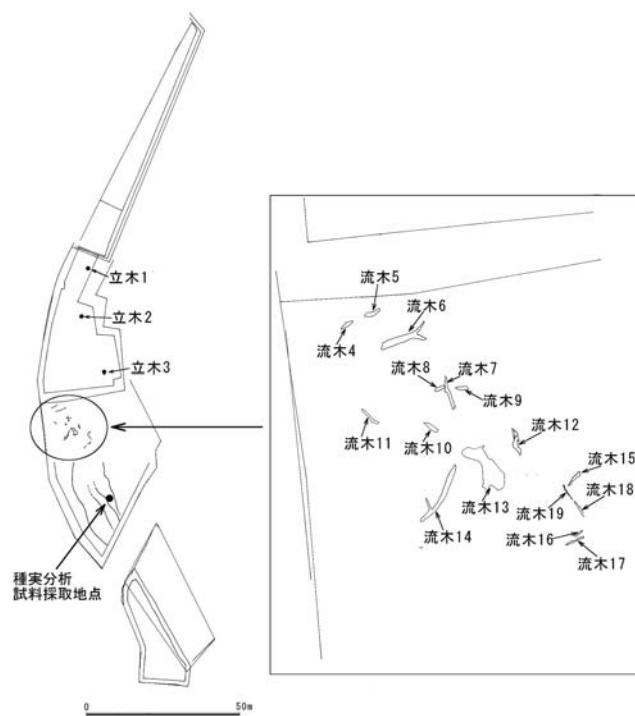


図1 立木、流木および種実分析試料採取位置  
(S=1/2000)

接線方向に配列する傾向がある。放射組織は1～25細胞高である。分野壁孔はスギ型で、通常2個存在する。以上の組織上の特徴から、スギと同定した。

## 2) ヤナギ属 *Salix* sp.

試料No. : 4 (W06081801), 5 (W06081802), 6 (W06081803), 7 (W06081804), 11 (W06081808), 13 (W06081810), 14 (W06081811)

記載：年輪幅が非常に狭い部分がある。80～100 $\mu\text{m}$ の道管がほとんど単独ないし1～2個放射方向に複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布は密で、年輪の最外層で直径がやや小さくなっている。道管のせん孔は单せん孔で、道管の側壁は交互状である。道管放射組織間壁孔はふるい状を示す。放射組織は両端に1～2個の直立細胞をもつ單列異性型で、高さは1～25細胞高である。軸方向柔組織は年輪界に沿ってターミナル状に明瞭に認められる。以上の組織上の特徴から、ヤナギ属と同定した。

## 3) クワ属 *Morus* sp.

試料No. : 1 (W06072801), 2 (W06072802), 3 (W06072803), 17 (W06081814)

記載：環孔材で、径100～200 $\mu\text{m}$ の道管が単独ないし2～3個複合して多列に配列している。孔圈の幅は非常に広い。孔圈外では道管の大きさが徐々に小さくなり、接線状、斜状、小塊状に不規則に集合して散在している。道管せん孔は单せん孔で、小道管にらせん肥厚が認められる。ほとんどすべての道管内腔にチロースが発達して顯著である。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は異性で、1～8細胞幅で40細胞高に達する。ほとんど平伏細胞からなるが、上下縁辺に1～数個の直立細胞が存在する。5～8細胞幅の紡錘形放射組織が目立つ。以上の組織上の特徴から、クワ属と同定した。

## 4) カエデ属 *Acer* sp.

試料No. : 9 (W06081806), 12 (W06081809)

記載：径50～70 $\mu\text{m}$ の道管が単独ないし2～3個放射方向に複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布数は少ない。道管せん孔は单せん孔で、道管相互壁孔は交互状である。道管内腔に着色物質が存在し、豊富である。放射組織は同性で、1～7細胞幅で30細胞高まであり、3～7細胞幅の紡錘形放射組織が目立つ。軸方向柔組織はターミナル状が明瞭であり、散在状ないし短接線状のものも認められる。以上の組織上の特徴から、カエデ属と同定した。

## 5) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn.

試料No. : 8 (W06081805), 10 (W06081807)

記載：径150～220 $\mu\text{m}$ の道管がほとんど単独ないし2個放射方向あるいは斜め方向に複合して、2～3列に配列する環孔材である。道管の分布は疎であり、孔圈外では道管の大きさは徐々に小さくなり、年輪の最外層では小道管が3～4個放射方向ないし小塊状に複合して散在している。道管せん孔は单せん孔で、小道管にらせん肥厚が認められる。道管相互壁孔は交互状である。道管内腔に着色物質が認められるが、少ない。放射組織は同性で、1～3細胞幅、3～30細胞高である。軸方向柔組織は周囲状から帶状を示し、特に孔圈外では3～10細胞幅の帶状柔組織が顯著となっている。木部纖維に隔壁が認められる。以上の組織上の特徴から、ムクロジと同定した。

## 6) アセビ類似 cf. *Pieris japonica* (Thunb.) D. Don

試料No. : 15 (W06081812)

記載：年輪幅は非常に狭い（平均0.72mm）。径60～100μmの道管が単独ないし放射方向に2～3個複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布数は少ない。道管せん孔は階段せん孔と思われるが、劣化のためはっきりしない。道管相互壁孔は交互状である。道管内腔に着色物質が認められる。放射組織は異性で、上下縁辺に1列の方形細胞ないし直立細胞をもち、1～2細胞幅で、高さは15細胞高以下で低い。軸方向柔組織は散在状で少ない。木部纖維に隔壁が存在し、非常に顕著となっている。以上の組織上の特徴からアセビの可能性が指摘できるが、断定できないことからアセビ類似とした。

#### (4) 種実同定結果と記載

主な分類群の特徴を以下に示とともに、顕微鏡写真を図版に示す。また、また、同定結果を表2にまとめた。

##### 1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 幼果

花柱・柱頭が保存されている。柱頭は短く、傘状で外側を向く。

##### 2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* 幼果

殻斗に輪状紋が認められるので、アカガシ亜属と同定できる。しかし、果実頂部（花柱・柱頭）が欠損しており、これ以上の同定には至らなかった。

##### 3) コナラ属 *Quercus* 果実

果皮片の他に、尻（果実底部にある殻斗との付着部）の付着した破片や、尻のみのものも含まれていた。尻は径が小さく、突出するものも見られた。

##### 4) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC. 種子

黒色で表面には細かい網目紋があり、一方の側面には短い臍がある。少し欠損箇所がある。

##### 5) カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子

黒色で表面には大きな深い網目紋があり、一方の側面には細長い臍がある。

##### 6) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 種子

黒色でやや扁平な半月形。表面には微細な浅い網目紋がある。

##### 7) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. et Arg. 種子

黒色で球形～やや扁平な球形。Y字型の臍があり、表面には瘤状ないし棍棒状の隆起が密にある。

##### 8) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 幼果、種子

幼果は完形のものと、未熟果の果皮片が出土した。種子は小さな破片であった。

##### 9) マタタビ *Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim. 種子

側面観は橢円形、上面観は両凸レンズ形。表面には穴が規則的に分布する。破片はマタタビ属に控えた。

##### 10) エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 種子

広卵形で頂部から3本の縦溝が走る。表面には、細かな網目紋があり、ざらつく。

##### 11) クサギ *Clerodendron trichotomum* Thunb. 核

黒灰色ないし黒褐色。側面観は橢円形、上面観は三日月形。一方の膨らんだ面には大きな浅い網目紋がある。もう一方の面は平滑であるが、欠損している。

##### 12) アサ *Cannabis sativa* Linn. 種子

楕円状レンズ形。下端には楕円形の臍がある。アサとしては小型のように思われる。

### 13) タデ科 Polygonaceae 果実

黒色で二面の卵形。長さ2.2mm、幅1.3mm程度。

## (5) 古植生復元

樹種同定を行った17試料の内、ヤナギ属が8試料、クワ属が4試料、ムクロジが2試料で、スギ、カエデ属、アセビ類似が各1試料であった。また種実同定ではイチイガシなどの極相林要素が検出されるものの、カラスザンショウ、アカメガシワ、マタタビ、ニワトコを始め、タラノキ、クサギといったいわゆる二次林要素が多く検出される。

今回の試料を採取した流路SR04は、弥生時代前期に埋没したと考えられている。渡辺・山田(2009)によれば、弥生時代前期の当地域の局地花粉帯はV帯c亜帯(あるいはc'亜帯)が対応する。ここでは、スギ属が卓越するほか、アカガシ亜属などの照葉樹林要素、アカメガシワ属などの二次林要素が卓越する。

樹種同定でスギは検出されるものの1個体だけで、種実も検出されなかった。また、アカガシ亜属もイチイガシやアシ類の幼果としてわずかに検出されるのみであった。このことから、河9沿ではスギやアカガシ亜属の分布量が少なかった可能性がある。アカガシ属亜帯に限っては、丘陵上や丘陵斜面に分布していた可能性が高い。一方、ヤナギ属、クワ属など、河原などの湿地状の場所に生育する樹種が多く検出された。これらは微量であるが花粉分析でも検出されているほか、クワ属は種実としても検出されている。先のスギと比べこれらの種類は花粉の生産量が少ないとから、河9の近辺に生育していたと考えることができる(クワは立木として検出されている)。カラスザンショウやアカメガシワは花粉でも検出されている。日当たりの良い林縁や裸地にこれらの樹木が先駆的に生育していったものと考えられる。

一方、草本花粉ではアサとタデ科がわずかに検出されるのみである。近辺の草本植生がこれだけ貧弱であるとは考えられず、分析試料が砂質であることから、微少な種実が流れていたと考えられる。

## (6) まとめ

五丁遺跡で出土した立木、流木の樹種同定・記載を行った結果、6分類群が確認できた。また、種実同定結果では26分類群(不明・菌核を含む)が確認できた。これらの多くは、河川周辺近くに生育していたと考えられる。特に、クワ属は立木として検出されていた。また、アカメガシワは同時期の花粉分析結果で高率を示す傾向にあるなど調査地点近辺で生育していたと考えられた。

## 引用文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985)木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.  
渡辺正巳(2000)長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定. 長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ-1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書-, 247-249, 財団法人大阪市文化財協会.  
渡辺正巳・山田和芳「五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」(『庵寺遺跡Ⅱ』掲載予定)

表1 試料の詳細および同定結果

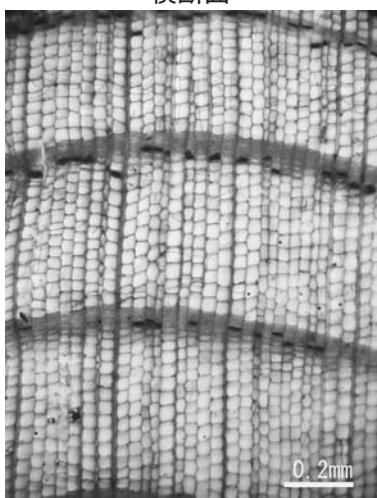
試料名	整理番号	樹種名	種類	遺構	時代	備考
立木1	W06072801	クワ属	立木		弥生時代前期	五丁遺跡
立木2	W06072802	クワ属	立木		弥生時代前期	五丁遺跡
立木3	W06072803	クワ属	立木		弥生時代前期	五丁遺跡
流木4	W06081801	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木5	W06081802	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木6	W06081803	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木7	W06081804	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木8	W06081805	ムクロジ	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木9	W06081806	カエデ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木10	W06081807	ムクロジ	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木11	W06081808	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木12	W06081809	カエデ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木13	W06081810	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木14	W06081811	ヤナギ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木15	W06081812	アセビ類似	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木16	W06081813	スギ	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡
流木17	W06081814	クワ属	流木	SR04	弥生時代前期	五丁遺跡

表2 種実同定結果

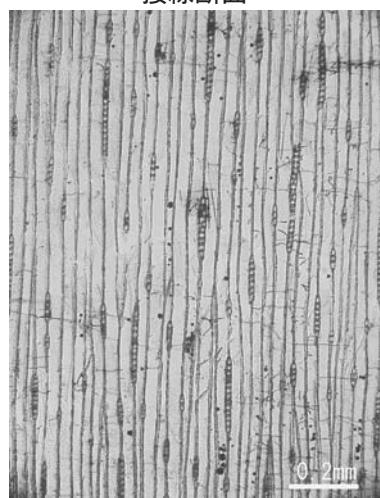
分類群名	部位	個数
イヌガヤ	種子	(4)
イヌシデ	果実	3
イチイガシ	幼果	1
コナラ属アカガシ亜属	幼果	3
コナラ属	果実	(7)
クワ属	種子	8(1)
サクラ属サクラ節	核	(1)
フユイチゴ	核	1
キイチゴ属	核	2
センダン	核	2(1)
サンショウ	種子	1
カラスザンショウ	種子	4(3)
キハダ	種子	1
アカメガシワ	種子	6(9)
トチノキ	幼果	1(1)
	種子	(2)
マタタビ	種子	7(1)
マタタビ属	種子	(2)
ヒサカキ	種子	(1)
タラノキ	核	1(1)
エゴノキ	種子	1(2)
クサギ	核	(1)
ニワトコ	種子	7(3)
不明	芽	5
アサ	種子	1
タデ科	果実	1
菌核		2

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don : 試料No.16 (W06072813)

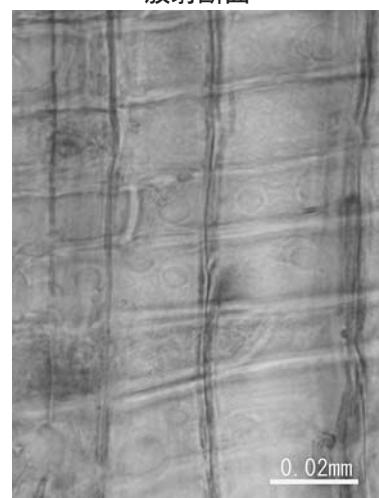
横断面



接線断面

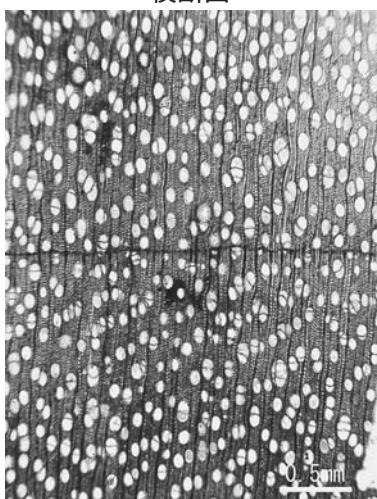


放射断面



ヤナギ属 *Salix* sp. : 試料No.13 (W06081810)

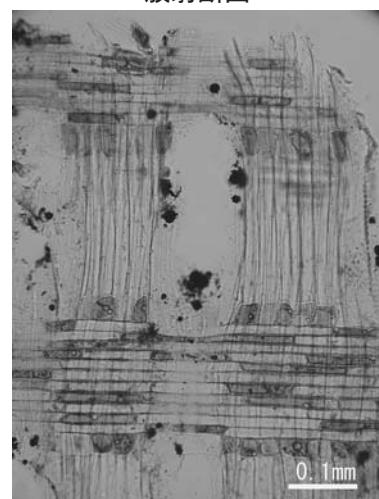
横断面



接線断面



放射断面



クワ属 *Morus* sp. : 試料No.3 (W06072803)

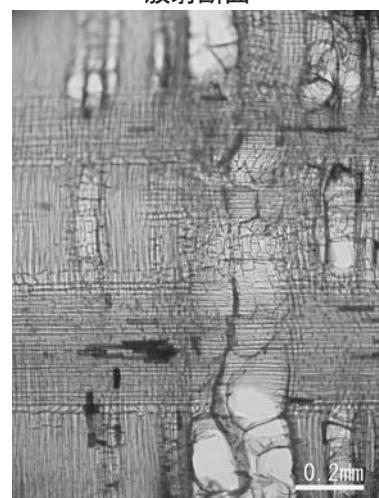
横断面



接線断面

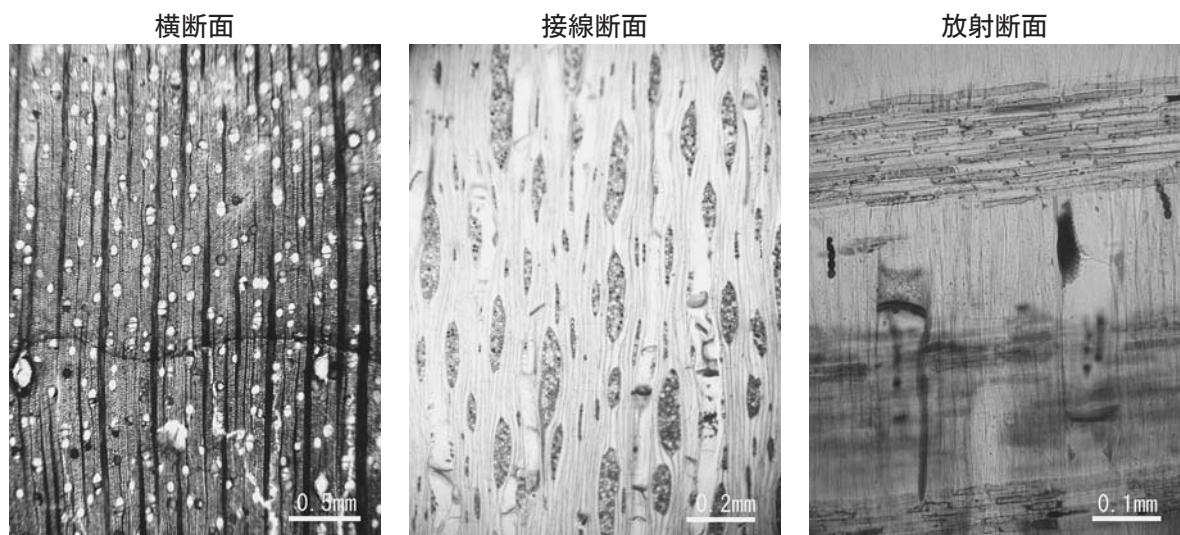


放射断面

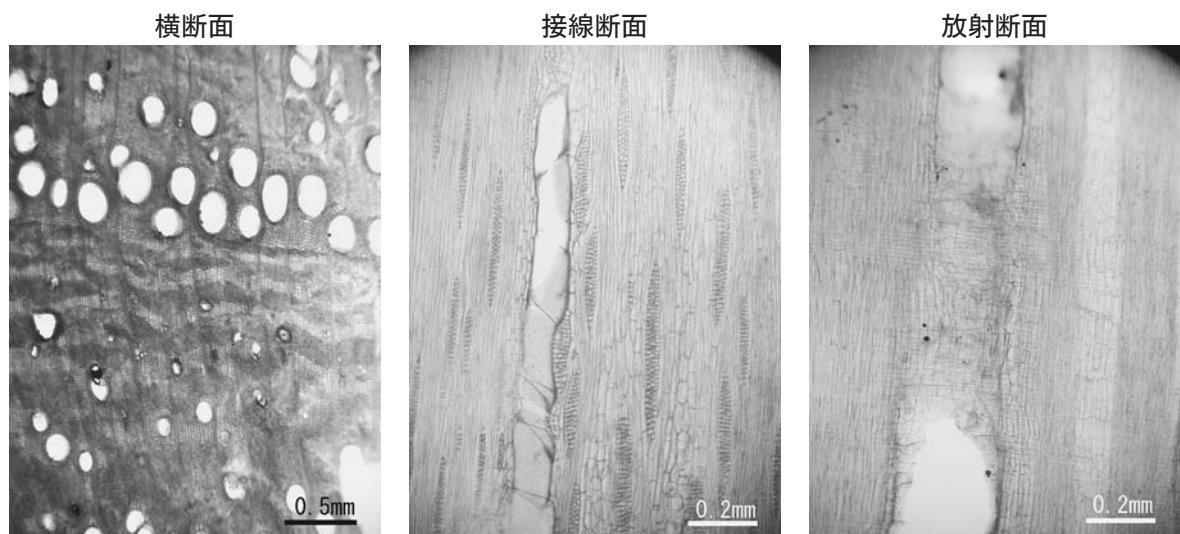


図版1 出土木顕微鏡写真1

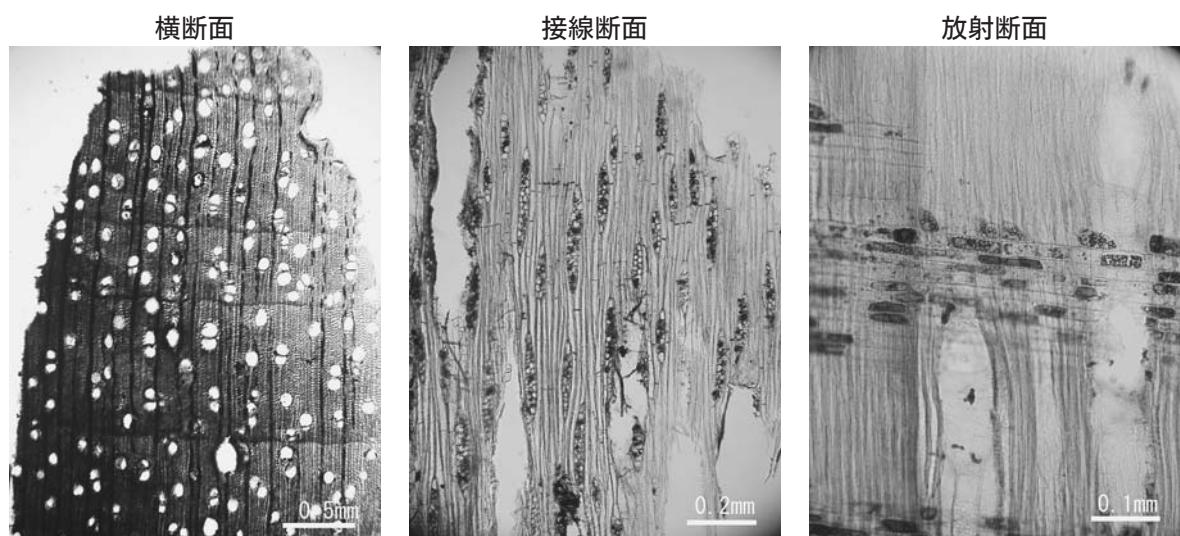
カエデ属 *Acer* sp. : 試料No.9 (W06081806)



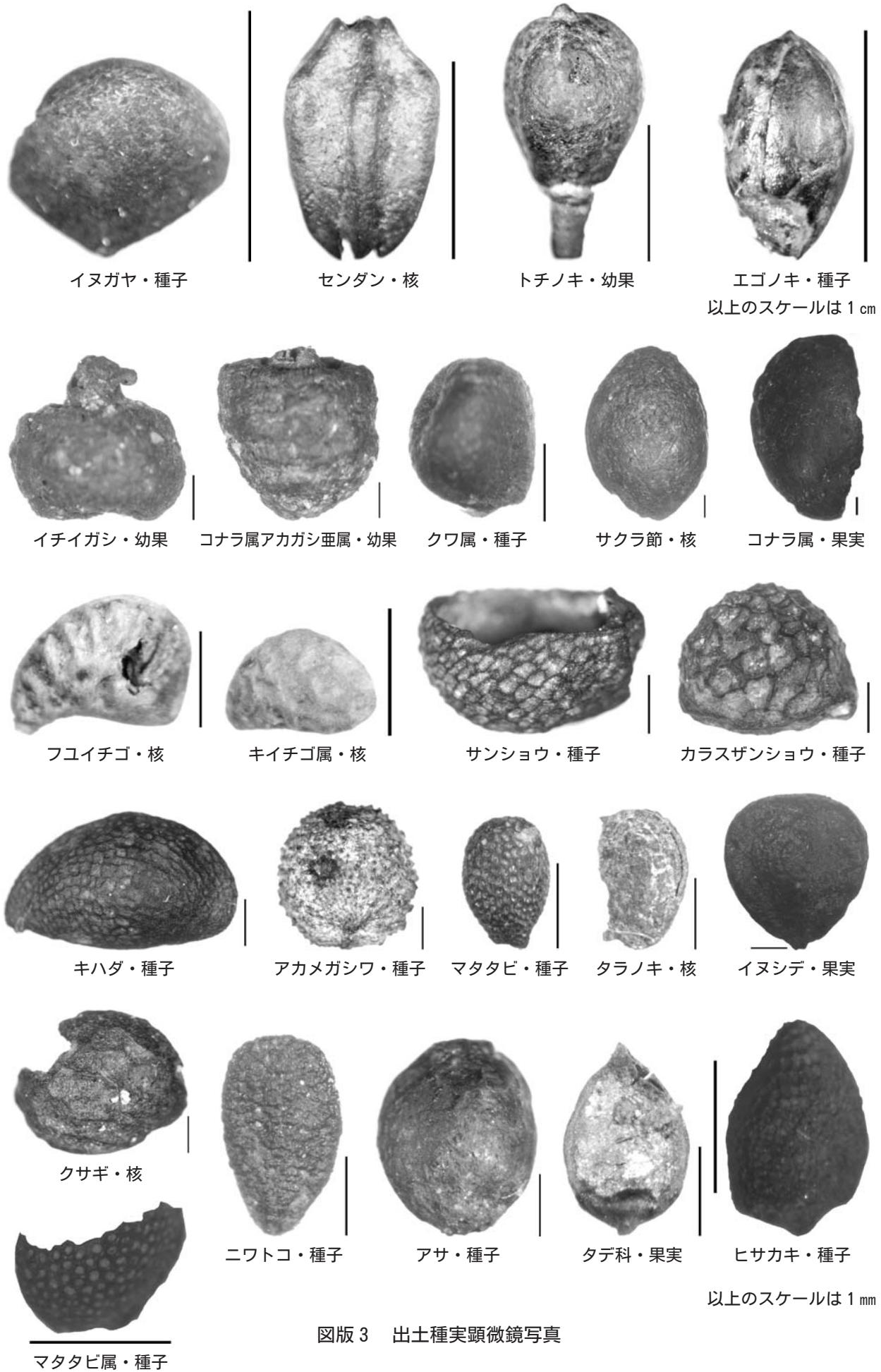
クロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. : 試料No.10 (W06081807)



アセビ類似 cf. *Pieris japonica* (Thunb.) D. Don : 試料No.15 (W06081812)



図版2 出土木顕微鏡写真2



図版 3 出土種実顕微鏡写真

### 第3節 廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の地磁気年代

時枝 克安（法吉データ）

#### 1. 地磁気年代測定法の概要

##### [仕組]

地磁気は偏角、伏角、強度の3要素で表され、さらに、各要素は緩急さまざまな周期で変動する多数の成分の和で表現できる。この地磁気の変動のなかでも10年以上の時間経過で変化が顕著になる緩慢な変動は地磁気永年変化と称されており、地磁気年代測定法において時計の働きを担っている。すなわち、過去の地磁気の方向変化を表すグラフに年代を目盛り、地磁気の方向から年代を読みとる。しかし、ある焼土の焼成年代を知ろうとするとき、焼成時の地磁気がどこかに記録されており、それを測定できなくては何時焼けたかを知ることはできない。焼成時の地磁気は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順は、まず、焼土の熱残留磁気を測定して焼成時の地磁気の方向を求め、次に、この地域の地磁気永年変化曲線のグラフを利用して、得られた方向に近い点の年代目盛りを読みとる。

地磁気中で土壤、粘土、砂、岩石等が焼けると、これらは熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の担い手は磁鉄鉱などの磁性粒子であり、熱残留磁気の方向は焼けたときの地磁気の方向に一致する。高温で得られた熱残留磁気は非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鉄鉱では575°C）以上に再加熱されるか、落雷によって誘起されるような非常に強い磁場中に置かれないとぎり、数万年以上時間が経過しても変化しない。焼土がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、加熱時の地磁気の方向に新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を正しく記憶していることになる。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをグラフにしておけば、このグラフを「時計」の代わりとして焼土の最終焼成年代を推定できる。この「時計」では地磁気の方向が「針」に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の「針」の位置を記憶している。日本では、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線（標準曲線）が広岡によって詳しく測定されているので、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については中島等、および、広岡による解説<sup>1,2)</sup>が参考になる。

##### [特徴]

- ①焼成位置が不变の焼土だけを試料として焼土の焼成年代を測定できる。
- ②原理が簡明であり、測定が比較的簡単である。

##### [問題点]

###### ①地磁気の地域差

地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違している場合がある。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときには地域固有の標準曲線を決定して、焼土の残留磁気の方向と比較する必要がある。今まで、中国地域では、広岡による西南日本の標準曲線から求めた地磁気年代と考古学的年代が大きく食い違う例はほとんどない。したがっ

て、中国地域の焼土については、西南日本の標準曲線を使用してその最終焼成年代を正しく推定できる。

### ②土器編年への依存

地磁気年代は地磁気変動という物理現象を利用するので、土器編年に左右されないと思われがちであるが、土器編年に強く依存している。古記録などに基づく少数の年代定点を除くと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れるほど地磁気年代は土器編年の影響をより強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増えると、地磁気年代は土器編年との相互依存から脱却できるが、現状ではやむをえない。

### ③適用できる年代範囲の限界

詳細な標準曲線の作製には、残留磁気と年代という2種類のデータの組み合わせが多数必要であり、現在、地磁気年代法を適用できる年代域は紀元以後に限られている。紀元以前については、多数の熱残留磁気データが報告されているが、信頼できる年代値を伴うものは少なく、紀元以前の標準曲線は未だ確立されていない。

## 2. 遺構と試料

庵寺遺跡（島根県大田市仁摩町大国）の炭窯1は焚口から奥に広がるイチジク型（最大幅330cm、奥行き520cm）をなし奥壁に2つの煙道をもつ。定方位試料は左右の側壁の立ち上がり部分の赤く焼けているところから10ヶづつ、合計20ヶを採取した。

於才迫遺跡（島根県大田市仁摩町大国）の炭窯4も同じく焚口から奥に広がるイチジク型（最大幅390cm、奥行き550cm）をなし、奥壁に3つの煙道をもつ。北側の壁には石組みが使用されている。定方位試料は左右の壁の立ち上がり部分の赤く焼けているところから5ヶづつ、奥壁の立ち上がり部から4ヶ、変形しにくい奥壁両端の湾曲部上端（床面からの高さ60cm）から6ヶ、合計20ヶを採取した。両炭窯とともに年代の決め手となる遺物は出土していないが、形態や構造からいざれも江戸時代以降のものと推定されている。試料採取法としては、整形した焼土塊に樹脂製ケース（24×24×24mm）を被せて隙間を石膏で充填し、ケース上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定している。炭窯は一般に焼成度が低く、放置されている間に壁が土圧で変形する例が多いので、試料採取場所として、変形し難い①壁の立ち上がり部分、②奥壁の両端の湾曲部を選んでいる。

## 3. 測定結果

試料の残留磁気をスピナー磁力計で測定した。この結果、自然残留磁気の方向がかなり分散したので、全試料に対して消磁磁場が10mTの交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、2次的磁気汚染を除去する方法であり、ほとんどの場合、この方法により残留磁気の方向のまとまりを改善できる。図1に示された交流消磁（10mT）後の残留磁気の方向のうち小円内のまとまりの良いものを元にして地磁気年代を推定する。小円内のデータから計算した残留磁気の平均方向、Fisherの信頼度係数（k）、および、95%誤差角（ $\alpha_{95}$ ）を次表に示す。kの値が大きく、 $\alpha_{95}$ の値が小さいほど、残留磁気の方向がよく揃っていることを意味している。

## 1 廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の残留磁気の平均方向と誤差の目安となる数値

遺構	Im(度)	Dm(度E)	k	$\alpha_{95}$ (度)	n / N	消磁磁場
廬寺遺跡炭窯1	47.27	3.52	511	2.67	7/20	10mT
於才迫遺跡炭窯4	49.75	-4.64	2451	0.98	10/20	10mT

Im : 平均伏角 k : Fisherの信頼度係数 n / N : 採用試料数/採取試料数

Dm : 平均偏角  $\alpha_{95}$  : 95%誤差角

## 4. 地磁気年代

図2は廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線<sup>3)</sup>である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代値を読みとる。同様にして、点線の楕円から年代誤差を評価する。なお、標準曲線が狭い範囲で重なり合うために、各炉について複数の年代値が読みとれる。

すなわち、廬寺遺跡炭窯1では、AD420, AD1375, AD1775、於才迫遺跡炭窯4では、AD80, AD1075, AD1900が地磁気年代の候補となる。一方、窯の形態と構造から窯の操業時期は江戸時代以降と推定されているので、地磁気年代として、廬寺遺跡炭窯1について AD1775±45、於才迫遺跡炭窯4についてAD1900±20を選んだ。

### 廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の地磁気年代

遺構	地磁気年代
廬寺遺跡炭窯1	AD1775 ± 45
才迫遺跡炭窯4	AD1900 ± 20

### 参考資料

- 1 広岡公夫(1995)「考古資料分析法」、考古学ライブラリー、65、田口勇、斎藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101
- 2 中島正志、夏原信義「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9、ニュー・サイエンス社
- 3 広岡公夫(1978)考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向、第4紀研究 15, 200-203

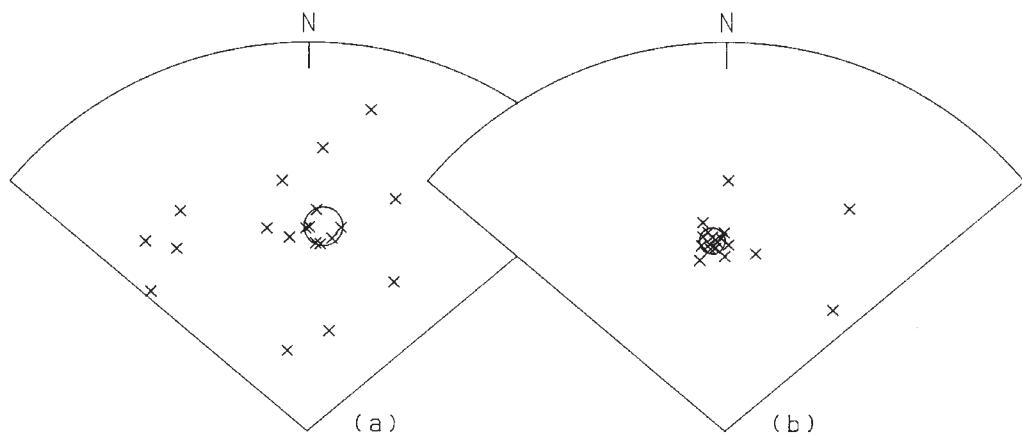


図1 廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の交流消磁(10mT)後の残留磁気の方向小円内の揃ったデータから地磁気年代を求める。  
(a) 廬寺遺跡炭窯1 (b) 於才迫遺跡炭窯4

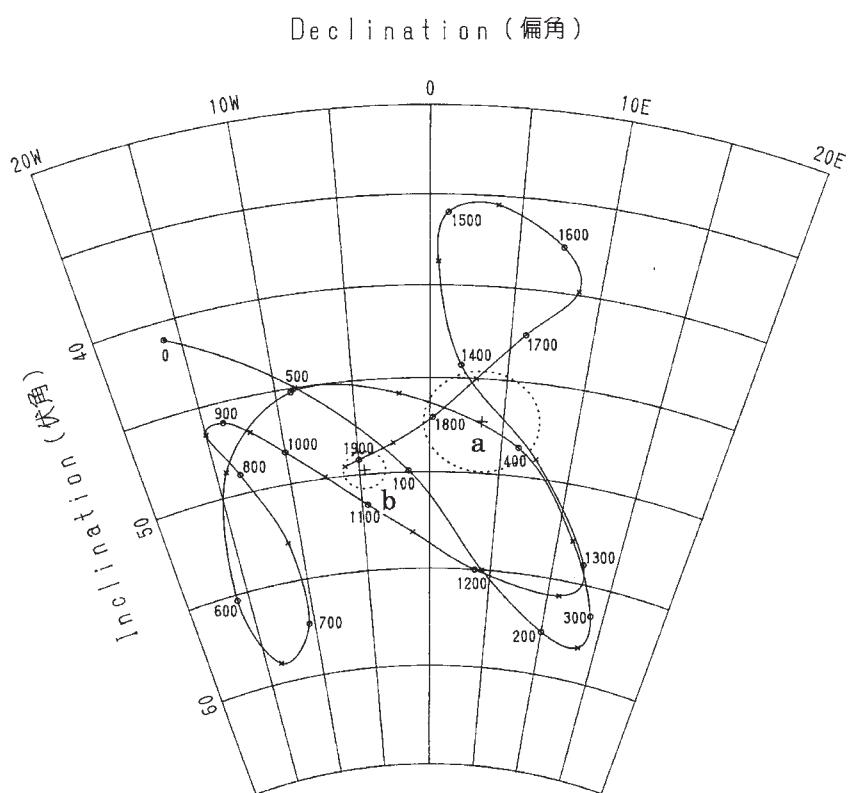


図2 廬寺遺跡炭窯1、於才迫遺跡炭窯4の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線。  
(a) 廬寺遺跡炭窯1 (b) 於才迫遺跡炭窯4

## 第7章 総括

### 第1節 はじめに

本書では、五丁遺跡・庵寺遺跡・於才迫遺跡の発掘調査成果を報告している。このうち五丁遺跡・庵寺遺跡については、遺跡名称は別にしているものの実質的に隣接しており、存続時期も大きくは弥生時代前期～奈良・平安時代で実質的には連続する一遺跡とみてよい。また、周辺に同様の条件を持つ遺跡が所在し仁摩町教育委員会によって調査されており、それらの遺跡とあわせて検討することで、五丁遺跡・庵寺遺跡の性格を明確にすることができる。これに対して於才迫遺跡は山間部の斜面に存在し、遺跡自体の性格も近世・近代の炭窯のみと大きく異なっている。

そこで、本書では五丁遺跡・庵寺遺跡調査については、以下本章でまとめて記述し、於才迫遺跡については第5章於才迫遺跡の調査第4節にて総括するにとどめたい。

### 第2節 五丁遺跡・庵寺遺跡の変遷

#### (1) 遺跡の環境

ここであらためて、遺跡の立地について概観してみたい。第131図は、主要地方道仁摩瑞穂線の移設・圃場整備前、遺跡周辺図である。この状況は、1947年撮影の米軍による空中写真（写真11）と基本的に変わっておらず、戦前まで遡るものである。次の第132図は、圃場整備以前の水田標高から等高線を試みに入れたものである。1947年の段階では条里プランを横長に分割した水田が主要な構成要素であり、水田一枚は水平に整地されているため、等高線を入れるとどうしても水田畦畔付近に集中することになるが、地図上南側の山際に、周囲より低い箇所が存在することが読み取れる。これは庵寺・於才迫遺跡のある谷からの流路痕跡、あるいは潮川沿いに高い部分を潮川によって形成された自然堤防とみれば、その後背となる低地であったと推測できる。遺跡はまさにこの谷に所在しており、言い換えれば、潮川の直接的影響を受ける位置ではない。

以上が現代に残る地形からの復元できる状況である。実際の発掘調査の状況をみても、上述の流路推定地からはSR04・05が検出され（第133図）、位置と方向から庵寺・於才迫遺跡のある谷（ないしその支流）からの流路痕跡とみられる。したがって、上述の圃場前の地形観察は、そこに見える痕跡が昭和24年以前のいつの時代のものかただちに論じることはできないものの、遺跡周辺地形の一般論的説明としては成り立つ。後述する基盤層形成以後の基本的な地形は、多くが近代まで継承されているとみてよいだろう。なお、図中潮川流路（近世）とした部分は図上・空中写真からも旧河道の可能性が想定されるが、仁摩町教育委員会の発掘調査成果（孫四田遺跡）によると、南側水田と全く異なる粘砂土・粘土が細かく互層上をなす堆積状況であり、肥前系の陶磁器が比較的浅い地点から出土するとされるので、近世の潮川流路と判断した。

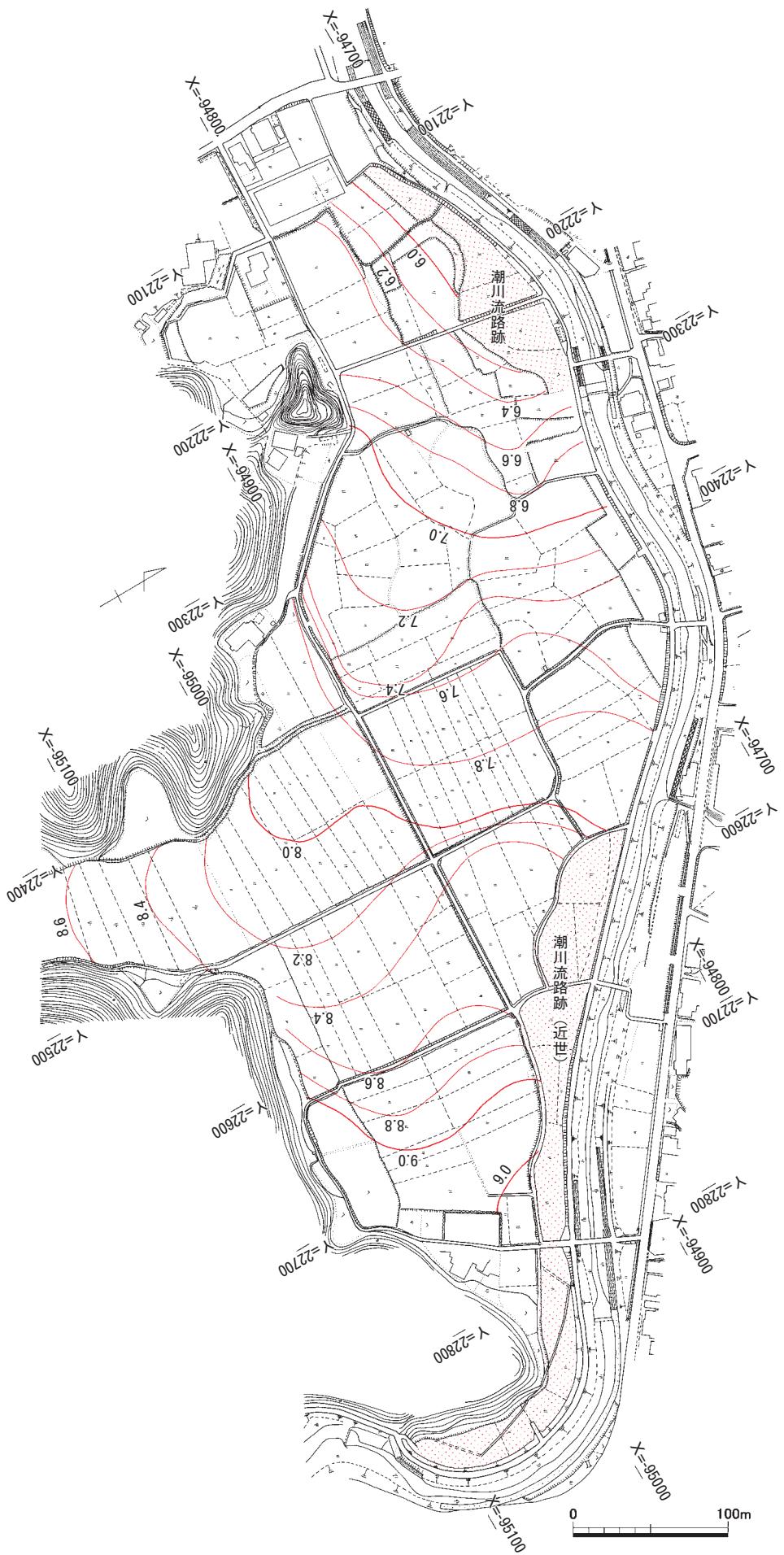
以下、この図の範囲を字名をから以後本書では五丁地区と呼称する。

**基盤層以下の状況** 一方、五丁・庵寺遺跡ではともに基盤層としたのは五丁遺跡では青灰色・暗青灰色の粘質土、庵寺遺跡では褐色・灰色のシルトである。両層は中間に未調査の部分があるので、厳密には連続するものかどうかは不明であるが、ともに弥生時代前期（詳細な時期は若干異なるが）の遺物が上から出土するので、巨視的にみれば同一土層と考えられる。

この灰色シルトの基盤層、あるいはさらにその下層の堆積状況については、渡邊正巳氏の分析が



第131図 五丁・庵寺遺跡周辺圃場整備前の状況 (S=1/4000)



あり<sup>\*1</sup>、基盤層については若干のイオウ・窒素の存在から当初塩分濃度の高かった水域が徐々に淡水化した扇状地ないし河川性堆積環境後の後背湿地のような場所に当り、洪水によって運ばれた混濁物が一気に堆積したもので、堆積後も地下水位が非常に浅い湿地帯と評価されている。ここでは詳述しないが、さらに下層はイオウ濃度が高く明瞭な海成堆積物が含まれている砂礫層が存在し湾であったと推定されている。詳細は庵寺遺跡Ⅱに譲るが、基本的には弥生時代前期以前に既に海水の影響が及ぶ状況ではなく、周辺はほぼ淡水化し主として河川の影響を受ける状態であったとすることができる。

## (2) 繩文晚期～弥生時代前期の様相（第133図）

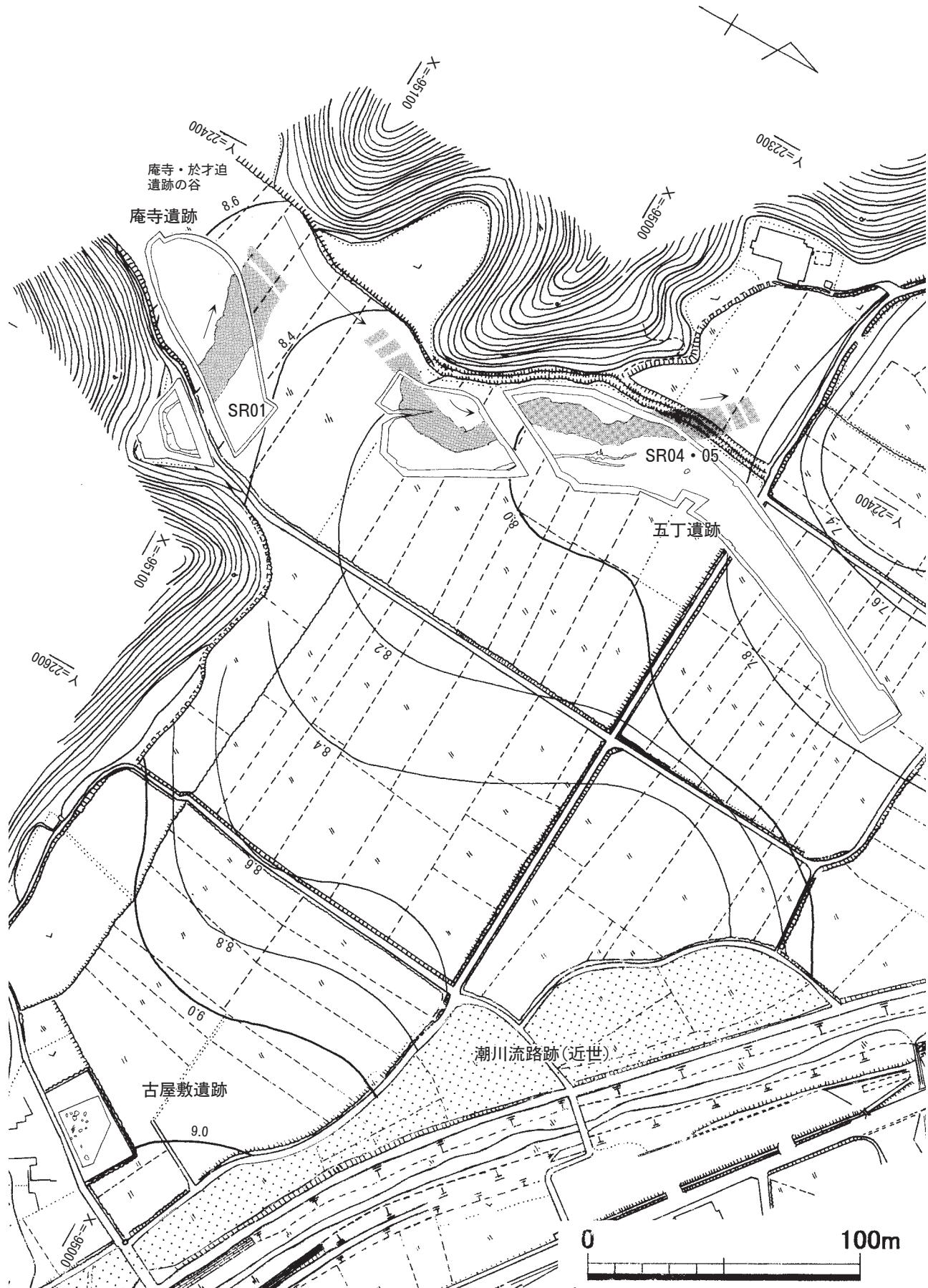
前述基盤層の堆積後、五丁・庵寺遺跡で初めて本格的に人間の活動が確認される時期である。現在のところ、最も古い遺物は第41図SR05出土の岩田式4類の繩文晚期前葉の深鉢であるが、これは1点のみの出土であり、この段階では庵寺・於才迫遺跡の谷上流部を含めた範囲での人間の活動が確認されるにとどまり、その詳細は不明である。

次いで繩文晚期後葉中葉、原田式（篠原式）に相当する端部に刻目がある深鉢は、流路に散在しており、この頃から遺物の量は次第に増える。さらに、突帯文土器が登場する段階では、SR05から濱田突帯文Ⅰ～Ⅲ新段階の資料が混在した状態で一定量出土し、SR05上層では出土レベル的にみると松本石見I-1～2様式の弥生土器と一緒に出土している。

この状況については、本文第3章第4節で記したように、突帯文土器については接合できる資料はほとんどなく、弥生土器（遠賀川式土器）のみ一定範囲での接合が確認できることから、SR05上層は弥生土器の堆積層であり、その堆積土に突帯文土器が流入していると考えられる。このように、五丁遺跡出土の突帯文土器は基本的には河川流路への流れ込み資料と位置づけられるが、その中心は古市河原田式・沢田式（突帯文Ⅱ期）で、肩の屈曲部に二条突帯を巡らせる深鉢、端部が逆くの字に内反する浅鉢など、典型的な資料を確認することができる。また、突帯文土器が出土する唯一の遺構であるSK08の時期も同じく突帯文Ⅱ期であり、結論としては明確な遺構の検出は少ないものの、突帯文Ⅱ期には調査区の近傍に集落などが存在した可能性が高い。なお、突帯文土器は五丁遺跡では出土するが谷奥の庵寺・於才迫遺跡では全く出土しておらず、庵寺・於才迫遺跡の谷側奥東側に集落が展開していた可能性は現時点では低いと言わざるを得ない（谷の西南斜面については可能性が残る）。

また、従来石見海浜部ではその存在がほとんど知られていなかった2条突帯の深鉢は<sup>\*2</sup>、一定量存在することが確認された。

一方弥生土器（遠賀川式土器）は、遺跡内の3地点、4カ所から出土されている。まず五丁遺跡では①SR05の上層、②SR04の土器溜まりからまとまった資料が出土している。①は洪水などに起源するとみられる砂礫層中から破片となって出土しているが、よく接合し、移動は少ないものと考えられる。②は流路に面した水場とみられ、細かくは数次からなる廃棄の集積と考えられるが、土器の様相はほぼ同一時期を示している。③はSD04であり、出土資料点数は少ないが、甕の様相は①・②と同じである。このように、①～③から出土した土器、特に甕は次に挙げるような特徴を持つ一群である。ただし、堆積状況からは確実に①→②の順が想定され、壺などには差がみられる。**甕** 如意状口縁を持ち、内外面がナデ・ハケにより調整され、外傾接合、頸部に段を持つものと持たないものが混在する。一方、頸胴部界を沈線によって区画するものは一点も確認されない。



第133図 五丁地区の縄文晩期～弥生前期の様相 (S = 1/2000)

**甕口縁部の刻みについて** ここで板付Ⅱa段階以降に一定広がりをもって確認されている、甕口縁部下端の刻みについて触れてみたい。山陰地域においては、そもそも瀬戸内・近畿地方と異なり、弥生前期土器の甕口縁の刻みが少ないことが指摘されおり<sup>3</sup>、まとめた資料としては、山陰の遠賀川式土器のうち最古に位置づけられる出雲市原山遺跡出土のいわゆる原山式の甕、長瀬高浜遺跡出土例などが挙げられるにすぎない。今回報告する五丁・庵寺遺跡についてもこの傾向は顕著であり、口縁端部下端あるいは段に刻目のある甕は1例も確認できず、段を有さず口縁中央に浅い刻目のある資料が1例確認されたのみである（第45図-6）。周辺遺跡をみても、仁摩町内では古屋敷遺跡遺構外出土資料に1例確認できるのみである（第134図参照）。一方、本遺跡資料の端部の調整をみるとナデで丸く収めるものと、強いナデによって下端を尖らせるものがあることは認められるので、いわゆる口縁下端にアクセントを付けを尖らせる調整は存在する（なお、小さな突帯を添付する事例はない）<sup>4</sup>。

**壺** 点数が少ない上破片が多く、総体をとらえるのは難しい。堆積状況から先行するとみられる①の壺は口縁が肥厚、短く丸みをもって外反し、頸胴部界は明瞭であるが、ヘラ・あるいは貝殻先端を横方向に引いたミガキないし沈線状の強調がみられる。最大径は器高の中央付近となる。体部上面に山形文を持つ資料もある。次に後出するとみられる第61図7は低い器形に強く外反する口縁部、頸胴部界に沈線を持つなど後出する要素がみられる。

**その他** このほかに小型精製の壺、鉢などが確認される。

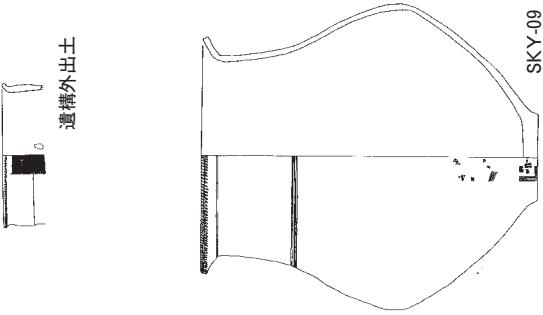
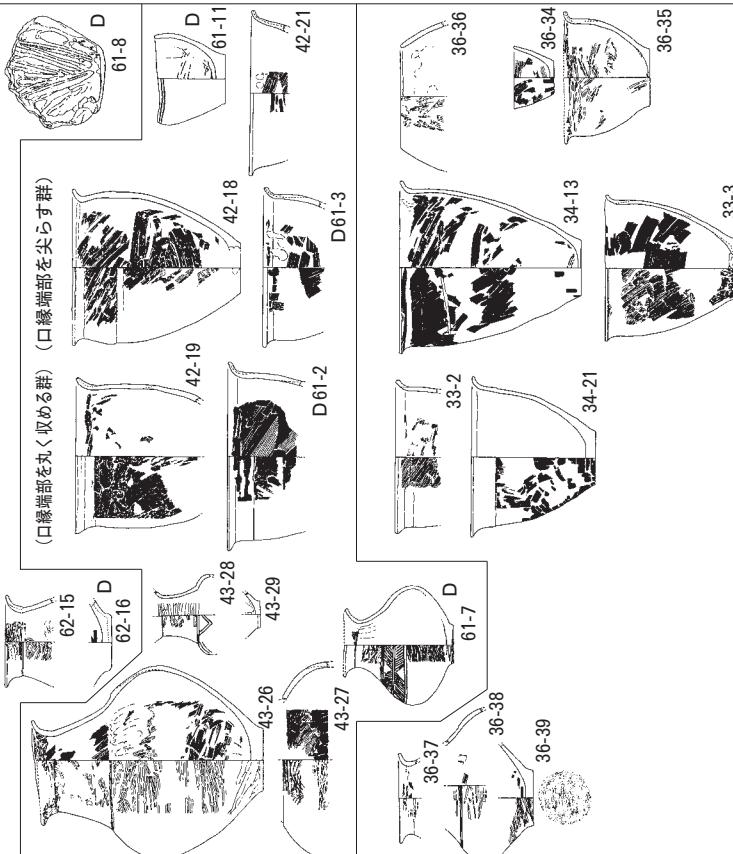
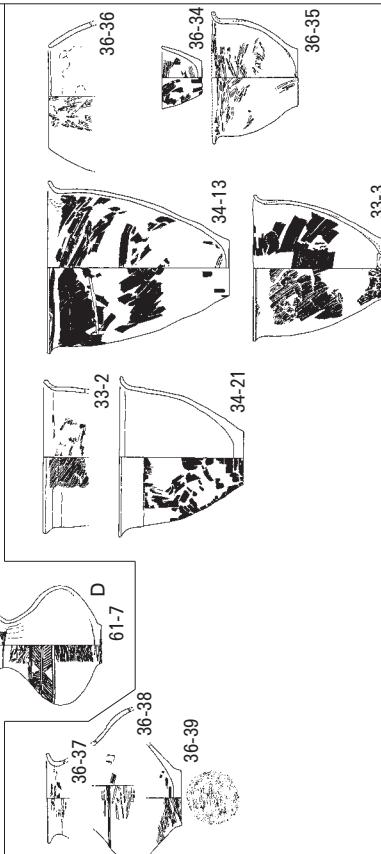
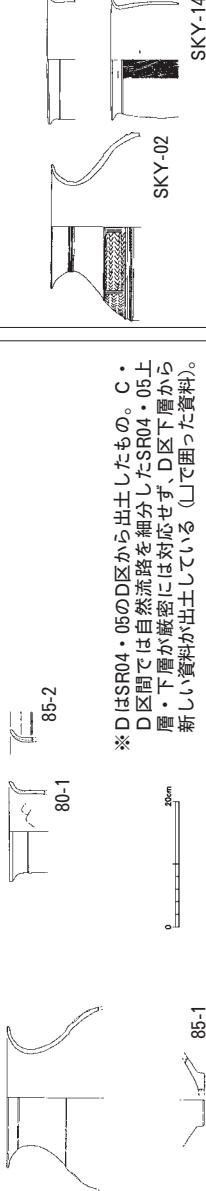
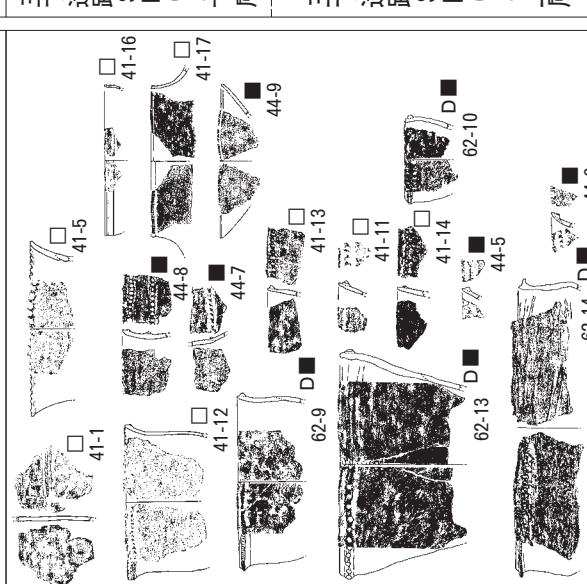
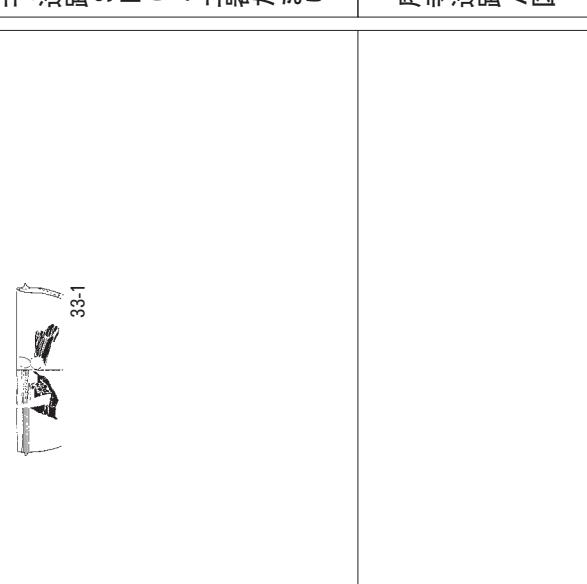
最後に④庵寺遺跡A区の最下層、若干土壤化した褐灰色粘質土中からの資料、同区の遺構外出土遺物にみられる資料がある。こちらは遺存状況が不良であるが、甕については頸胴部界に明瞭な沈線を持ち、胴部の張りはなく、壺については強く外反する口縁部が確認できる。

**時期** これらの時期については、石見地域の弥生前期土器の資料が少ないとから編年上に位置づける上では困難が伴うが、壺については、古屋敷遺跡SKY02出土資料の中心をなす口縁頸部界・頸胴部界に突帯を伴う資料には先行すると位置づけられる。なお、甕については古屋敷遺跡SKY02は段を持つものと沈線を持つものが共存している。このSKY02は松本石見I-2様式（5段階区分の出雲で当てはめればI-3様式）<sup>5</sup>とされる。

一方で古屋敷SKY02に先行する松本石見I-1様式は、発表当時資料が少なく、ここでは出雲地域で比較する。出雲I-2様式は講武氏元遺跡出土例などが標識土器であり、壺には削り出し突帯が確認され、甕は口縁下端に刻みをもつが、頸胴部界には沈線が用いられている。さらに先行するI-1様式は出雲原山式に該当し、壺は端部が直線的に外反、頸部が太く体部下半が丸い形態をとり、甕は口縁下端に刻みをもち体部の段にも刻みをもつことが知られる。

これらの資料を相互に比較し、壺の口縁頸部界は段→削り出し突帯、頸胴部界は段→沈線、甕の頸胴部界は段+刻み→段→沈線の順で要素が出現すると考えると<sup>6</sup>、④の資料と古屋敷遺跡SKY02がほぼ同時期で松本出雲I-3様式、①②の資料は頸胴部界に沈線が見られない分だけ先行するものでかつ松本出雲I-1様式には遡らないもの、概ね松本出雲I-2様式に該当するとみられる。

**古屋敷遺跡** ここで隣接する古屋敷遺跡の状況を見てみたい（以下古屋敷遺跡の状況については仁摩町教育委員会1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』による）。古屋敷遺跡は、第133図に図示しているように、五丁遺跡東約300mの丘陵裾部に位置する。標高8.8m付近に（茶褐色）黄褐色～明灰色の粘砂土を基盤層として、土坑16基が検出されている。なお、トレンチ調査時の土層堆積状況

古屋敷遺跡出土資料	
弥生土器（遠賀川式土器）	
五丁遺跡 S R 0 5 下層	 <p>遺構外出土</p>
五丁遺跡 S R 0 5 上層	 <p>(口縁端部を丸く收める群) (口縁端部を尖らす群)</p>
五丁遺跡 S R 0 4 土器たまり	
庵寺遺跡 A 区	 <p>SKY-02 SKY-14</p>
繩文・突帯文・突帶文	
五丁遺跡 S R 0 5 (□は上層出土 ■は下層出土)	
五丁遺跡 S R 0 4	
庵寺遺跡 A 区	

第134図 出土地点別 繩文晩期～弥生前期土器一覧 (S = 1/12)

\* D はSR04・05のD区から出土したもの。C・D区間では自然流路を細分したSR04・05上層・下層が対応せず、D区下層から新しい資料が出土している(口で囲った資料)。

を見ると、遺構群のすぐ東側がおそらく潮川ないしその支流によって削り込まれ、砂礫の堆積した痕跡が確認される。この流路の時期は不明であるが、中世遺構面が上位に存在することからそれ以前である。したがって、この遺跡の位置は好むと好まざるとに関わらず、潮川本流の影響を強く受たと想定される。古屋敷遺跡の出土遺物は、総体としてみると松本石見I-2~3様式で、五丁・庵寺遺跡と比較すると以下の点が指摘できる。A突帯文土器が全く出土しておらず、後述中山B式を除くと遠賀川式土器のみで構成されている。B五丁・庵寺遺跡出土土器より明らかに後出する、口縁部の段が消失、口縁頸部界が突帯・多条の沈線からなる壺、同じく口縁頸部界が沈線によって表現される甕が出土している。C備後北部~石見山間部にかけて分布する中山B式土器が出土している。

**縄文晚期～弥生前期遺跡の分布と時期** 以上のような土器の位置づけを行った上で、五丁地区での縄文晚期～弥生前期の遺跡分布をみてみよう。まず、五丁遺跡流路からの出土状況から見て、庵寺・於才迫遺跡の谷出土の流域では、縄文晚期中葉から人々の活動があり、特に突帯文II期にはB・C区の近くでの活動が認められる。続いて弥生土器の分布からは、松本出雲I-2様式頃、五丁遺跡のC・D区の周辺で人間の活動が盛んになったことは間違いない。一方、ほぼ同時期に潮川本流の影響を受ける古屋敷遺跡周辺でも人間の活動が盛んになり、以後弥生時代前期末まで継続する。これに対し、五丁遺跡では松本出雲I-2様式を過ぎると活動の痕跡は途絶え、谷奥の丘陵裾部庵寺A区で若干土器が検出されるにとどまり、以後弥生時代中期末頃まで遺構・遺物が途絶える。なお、五丁遺跡の流路で確認される突帯文土器は先に述べたように、庵寺・於才迫遺跡の谷からの流れ込みの資料であるが、遠賀川式土器の影響を受けて変容したと思われる突帯文系土器（第33図1・41図7・44図6）も含まれており、突帯文III期新ないしIV段階まで五丁遺跡周辺での人間の活動を認めることができる。また、五丁遺跡の流路SR05は出土遺物がほぼ突帯文土器に限られる下層、弥生土器が併存する上層とではやや堆積状況が異なり、前者は淘汰されない粗い砂礫を中心とした流路の断面では大きなレンズ状態の堆積構造が確認されるのに対し、後者の段階では頻繁に流路が変わり上方細粒化構造が顕著である（第3章第3節）。二つの河道の間に周辺環境の変化があった可能性もある。

**まとめ** 以上のように、五丁・庵寺遺跡、古屋敷遺跡は、時期的に重なる部分をもちつつ、その立地や供伴する遺物を違えていると考えられる。ただし、いずれの遺跡も人間の生活の中心である集落の居住域との関係は不明であり<sup>7</sup>、さらに集落の周辺地域を含んだ村落（共同体）の活動の中での役割・位置づけは明らかでない。これらの相違が、五丁地区に存在した単一の村落の残した異なる種類の活動の痕跡なのか、異なる性格の村落・集落が存在したものによるのか、あるいは突帯文土器と遠賀川式土器との共存関係などについては、関連資料の増加を待ち、周辺遺跡の資料の精査などを経て検討する必要があるであろう。

### (3) 弥生時代中期～古墳時代中期の様相（第135図）

ここでは、弥生時代前期以降、古墳時代中期までの様相について説明する。遺跡全体でみると遺物の量が減るが皆無ではなく人間の活動が確認できる時期であり、一般的時代区分に拘らず、上記の期間をまとめて表記する。

弥生時代中期の資料は、遺構外出土遺物を含めて五丁遺跡D区SD05でのみ確認されている。時期は松本IV-1様式で弥生中期後葉の資料が出土している。また弥生時代前期のSR04・05を切っ



第135図 五丁地区弥生中期～古墳時代中期の様相 (S=1/2000)

ているので少なくともこの時期には流路は埋没して位置を変えていたものと推測される。遺構の性格は堰状施設があることから用水路と考えられるが、溝の方向からこの用水路は庵寺・於才迫遺跡の谷の流水を利用したものではなく、潮川本流から、自然堤防を横切って構築されたものである可能性が高い。これには現在の水利（第131図参照）と似た状況と考えねばならず、用水の設置など水田耕作に大きな変革があった可能性がある。

このほか、庵寺遺跡の流路SR01は古墳時代前期以前に埋没していること、A区で基盤層直上から弥生時代前期中葉の遺物が出土していることから、弥生時代の可能性があるが土器の出土がないため厳密な年代は不明であり、出土田下駄の年代も不明である（田下駄については別途考察）。

五丁・庵寺遺跡の周囲では、孫四田遺跡2区で松本石見IV-2～V-1様式の土器いわゆる備後塩町式土器とともに出土しているが、遺物は古墳時代前期までの遺物と混在しており遺跡の状況は不明である。いずれにせよ、弥生時代前期までの遺物が出土する遺跡は弥生時代中期に存続することはないようで、この間に人間による活動の状況が大きく変わったことが推測される。

次いで、古墳時代前期～中期にかけての状況を見ると、まず、ほぼ遺跡の全域にわたり底部が平坦で直径2～3mの土坑が散在する状況を看取できる。この土坑の特徴としては、上記の構造のほか、箱型田下駄、不明木製品など、農耕具の可能性のある木製品が確認される、杭を周囲に打ち周囲を区画していること、黒褐色の堆積土を持つものが多いことが挙げられ、本文中で指摘したように耕作地周辺の溜め升状遺構であることを指摘した。一方で、第6章自然化学分析の成果では、庵寺遺跡SK04が営まれた第V層上位と埋土となる第IV層はペッドの発達が大きく、プラントオパールのgあたり粒数も6000/gを越えることから水田耕作がされた可能性が高いとされる<sup>\*8</sup>。また、庵寺遺跡の第IV層は結果としてそれ以前に存在した庵寺古墳群からの谷状地形を埋めており、以後現在みられるような平坦な谷が出現したと考えられる。このようにまず、庵寺遺跡において、遺跡全域の水田化された時期が概ねこの古墳時代前期～中期頃と推定できる。

五丁遺跡ではこの時代の堆積層がなく、これらの遺構を被覆する奈良・平安時代の堆積層しか確認できず、当該期の水田の有無を確認することはできない。しかし、東西に流れると推定される流路SR01・02・03、SD01の存在が注目される。

これらはまず大きく東側に位置するSR01・02、SD01と西側のSR03に大別できる。東側のSR01・02、SD01はいずれも礫から小石といってよい砂礫が堆積しており、1点のみ単純口縁の土師器が出土している。これに対し、SR03の堆積構造は粘質土と砂層の互層状を呈し、また両岸には護岸、ないし水路・土手状施設が設けられていたされていた。また、SR03上層の出土遺物は単純口縁の土師器甕であり古墳時代中期以降頃、流路埋没後の窪地的状況の出土遺物には須恵器甕片が存在することから古墳時代後期以前には埋没したのであろう。また、先述した溜め升状土坑の一つであるB区SK09からは、SR03出土品と酷似した不明木製品が出土しており土坑とSR03の存続時期は重なり、敢えて言えば農具を使った類似の活動の舞台だったとみてよい。

以上の流路は、まずその方向から、上流部は庵寺・於才迫遺跡の谷ではなく潮川の本流ないし支流であることがわかる。一方、潮川本流の堆積構造は、①古屋敷遺跡B区で弥生時代の遺構面を削り込み中世には埋没している河道跡、②平成5年度調査の京円原遺跡の下層<sup>\*9</sup>、これは推定河道の近接地である、③孫四田遺跡I区南側で確認できる（第137図）。このうち①の堆積物は灰色砂・砂礫を中心としてSR01・02、SD01と類似し、SR03とは大きく異なる。一方で、②は明灰色粘砂な

いし明灰色砂・暗灰色粘質土、③は黄褐色～灰色の粘質土ないし粘砂から構成されており、SR03と類似する。

①が谷から平野部への展開部分、②・③が平野部での流路外縁にそれぞれ位置することを念頭に置けば、おそらく東側の流路群は潮川本流の一部ないし近い支流、西側のSR03は本流からの影響が少ない支流ないし用排水路の可能性があるだろう。これは、堆積物以外の要素、SR03の両岸が丁寧に護岸される、平行する水路ないし土手状の施設をもつことや農具の出土からも首肯されるものである。

以上、調査区内に点在する溜め升状遺構、潮川本流から分水された支流ないし水路の存在は、五丁遺跡～庵寺遺跡が全面的に水田化した可能性を示唆するものであると考える。一方で、潮川本流に近い流路が調査区内に存在したことも認められる。五丁遺跡で古墳時代の水田は確認できないが、これはその後奈良・平安時代にも水田面がかさ上げされることなく耕作が続いたため、古墳時代単独の耕作土が存在しないと考えるのが妥当であろう。

古墳時代前～中期の遺物は、全体として出土量が少なく、既述の遺構出土のほか包含層からの出土はほとんどないといってよい。わずかに、庵寺遺跡の丘陵縁辺で若干の弥生時代後期～古墳時代中期の土器、ならびに加工段が確認されるにとどまる。周辺の遺跡に目を転じると潮川下流の北岸、清石遺跡で良好な土器溜まりが検出されており、弥生時代前期からの生活域の移動が認められる。

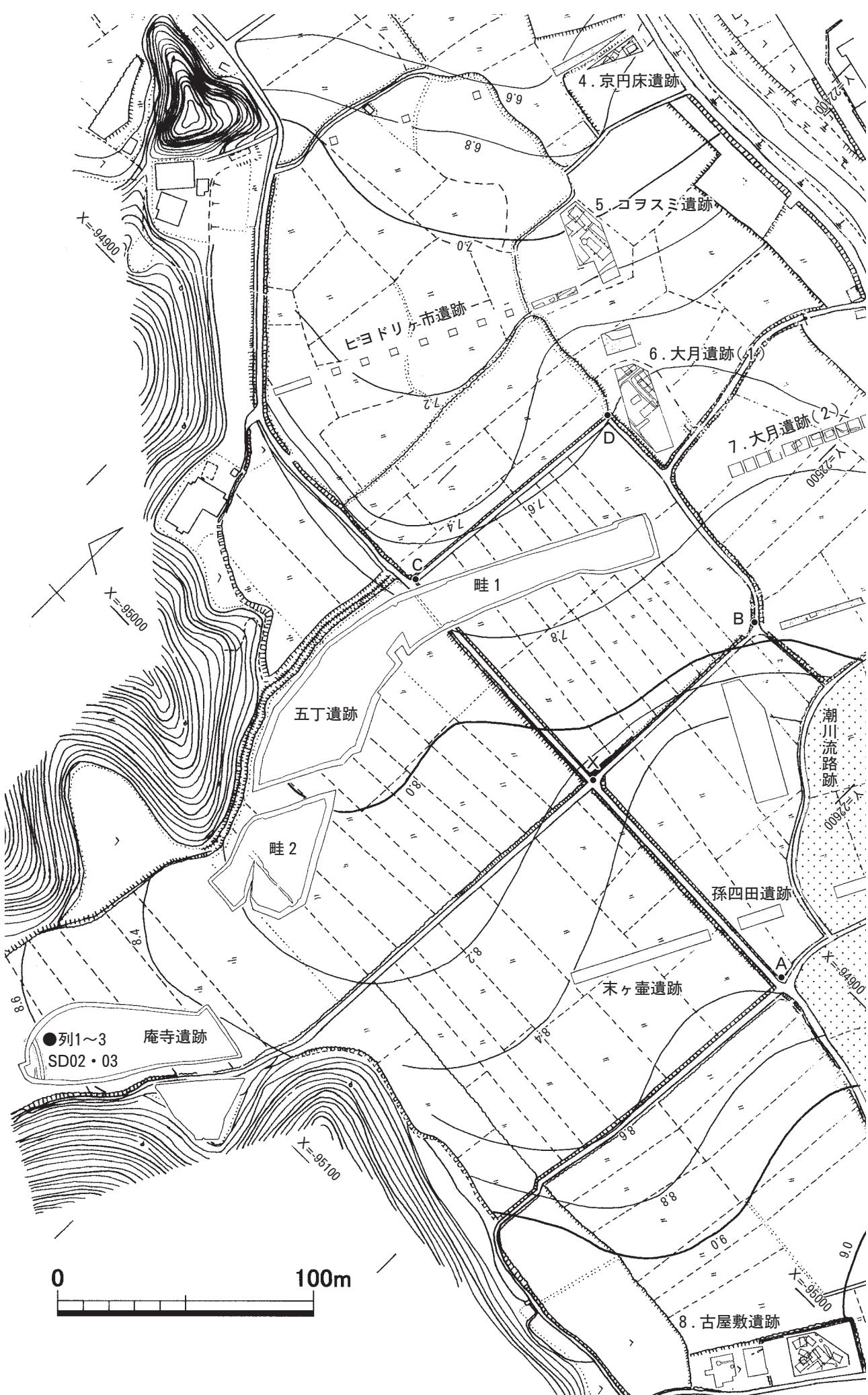
#### (4) 奈良・平安時代～中世の様相（第136図）

古墳時代後期～飛鳥時代（7世紀末まで）の遺構は全く確認されていない。また遺物についても須恵器若干が各調査区から出土するのみで、遺跡の詳細は不明である。

次いで奈良・平安時代には、調査区の南端から北端まで、土色・堆積物の変異、出土遺物の多少はあるものの同じ8世紀後半の遺物包含層が存在しており、遺跡全体が安定した状況となる。また、この包含層は古墳時代中期とした五丁遺跡SR03が窪地状になったところの覆土（須恵器甕片が出土）をさらに被覆しており、五丁遺跡内が現在にみるようにはほぼ平坦化したと考えられる。

この時期に確認されている遺構、ないしその可能性のある遺構は五丁遺跡D区の畦2、A区畦1、庵寺遺跡のSD02・03およびそれに伴う杭列1～3である。いずれも畦畔とそれに伴う溝、すなわち水田畦畔ないし用排水路と考えられ、後述する条里畦畔の成立とも関連するのでその時期決定根拠については再説しておく。

**五丁遺跡D区畦2**：畦の構成土からの出土遺物はない。しかし畦構築以前、基盤層上のD区4層茶褐色粘質土中に須恵器小片が混入していることから、その上限は9世紀頃と確認できる。また、畦2はD区3～3層黒茶色粘質土によって頂部を残し被覆されており、その後は若干頭を出すだけの状態であった模様である。最終的には3～2層によって覆われたが、その後も杭を打たれるなどの形態で同じ場所に畦畔が存続したものと考えられる。したがって3～3層は構築の時期の下限を示すわけであるが、この土層はC区南端（C区では3～4層）からD区にのみ存在しており、その中には多くの9世紀第の須恵器が含まれていた。それ以外の遺物としてはD区で2点のみ中世前半に降る土師器壺が出土している。この3～3層は黒茶色粘質土であり、上方表土黑色土からの堀込みがあっても調査時にその判別は不可能であることを念頭に置くと、土師器壺には上方からの混入の可能性がないとはいえない。現段階では圧倒的多数をしめる須恵器の年代観である9世紀が畦構築の下限第1候補である。



第136図 五丁地区の奈良・時代～中世の様相 (S=1/2000)



写真11 圃場整備前の仁摩平野空中写真（1947年撮影）※□は第136図の範囲

**先行する畦が存在したか** これらの遺構の下にかつて畦畔が存在した可能性は、条里地割の形成時期を考える上での論点となるので以下所見を述べておきたい。まず、現在の畦畔の地業と思われるピット群（第52・53図左側）について。第50図D区中央土層図はこの地業状の部分を含んだ畦2の断面であるが、畦本体の構成土と畦下層としている地業部分の構成土は異なっており、時期が異なる可能性はある。しかしども第4層上方に存在することを考えると、時期はともに9世紀以降と考えられる。このほか、同一地点に構築し直され、新しい時代の方が大きい堀方をもつ、ないし地下構造をもたない場合は確認できることになる。ただし、同じ場所に同じような畦を再構築する場合、それ以前の畦の痕跡が完全になくなる形（一度撤去して掘り返す）で再構築する必然性は少ない（たとえ隣接していても場所が変わった場合、畦が幅広の道になる場合など機能が変更される場合、元の畦が撤去される可能性は大いにある）。したがって、畦2については9世紀中に畦が構築されており、その畦は形を変えつつその後も継続した点を重視したい。

**五丁遺跡A区畦1** A区畦1は主に壁面での確認にとどまったため、その時期判断は限定的なものにならざるを得ないが、まず、上層の畦は圃場整備前の水田に存在したことは、空中写真（写真12）や土層断面図（第7図）で確認できる。問題となる下層の畦は第7図でA区の遺構外出土遺物のうち、中世陶磁器類が上面から出土した4層の下に端が若干潜り込んでおり、一応中世以前と考えられる。また畦の下層に位置する4-1層からも8世紀後半～9世紀頃の須恵器が出土している。この状況は畦1とほぼ同じである。また、両者は畦本体が若干砂混じりの茶褐色土で構成され、石を配すること、杭が打たれることなど畦一般の形態と言えばそれまでであるが、構造的な類似が認められる。一方、平面的には畦1は2つの畦と中間の溝状部分からなり、畦1条のみの畦2とは異なるが、これは畦1が北側にも条里地割が広がるのに対し、畦2は後述するように条里の畦畔であっても一番南に位置することによるものと理解することもできよう。結論的には畦2同様、畦1も9世紀頃に構築されたと考えて矛盾はない。

**8世紀後半～9世紀の遺物包含層3-2層** 若干脇道にそれるが、畦2を被覆する3-2層は明確な黒色土・黒褐色土であり、土層分層も容易であった。この層から本遺跡では比較的まとまった須恵器が出土している。この中には双耳瓶などのやや珍しい器種が含まれ、混入の可能性を考慮しなければ第64図31の木簡も同層の出土となる。土層上に遺構も確認できず、本来水田であったところを埋める必然性はないこと、C区南ならびにD区西部分にしか存在しないことを念頭に置くと、C・D区の南の丘陵斜面（現農道部分など）ないし頂上部などに何らかの重要施設があった可能性がある。

**庵寺遺跡SD01・02、杭列1～3** 庵寺遺跡で述べたように、これらは溝とその両側の畦畔の杭列であると考えられる。このうち、溝からは古墳時代後期の耳環なども出土しているが、溝中から小片ではあるが須恵器蓋・甕が出土（第93図4・5）、一体に8世紀後半～9世紀頃の須恵器が散在していることからこの遺構群も8世紀後半～9世紀頃には機能していたものと推測される。

**五丁・庵寺遺跡の畦畔遺構と条里地割** 以上述べてきた8世紀後半～9世紀頃の畦畔は歴史的にはどのように位置づけられるであろうか。第136図に示したように、このうち畦1・畦2は圃場整備前の条里プランに伴う畦畔・道路（以下条里地割と表記）の直下に位置していることがわかる。条里プランの方向や間隔を測定することは、地割が失われている現在となっては困難であるが、試みに第136図に示した1/2000図面上のX地点を起点に東西・南北の道路をその施工方向と見なすと、

表2 五丁地区条里の地割間距離

	計測位置	南北(m)	東西(m)
1	畦1-畦2(中央間)	122.279	
2	畦1-畦(畦端間)	121.028	
3	第136図XA間		108
4	第136図XB間	88	
5	第136図XC間		104
6	第136図CD間	98	

#### 凡例

- 1は第7図Y1と第53図Y2の国土座標値を元に、N-3.5-Eの条里プランを仮定したときの数値。
- 2は第7図Z1と第53図Z2の国土座標値を元に、N-3.5-Eの条里プランを仮定したときの数値。
- 3～6は1/2000図面上での計測

条里地割の方向は約N-3.5-Eとそれに直行する軸であったと推定できる。一方、坪間の距離は、表1に示したように第136図に残る痕跡では89m～108mであり、推定畦1・畦2間距離の117～118mとは異なるが<sup>\*10</sup>、これは畦2の位置が仁摩平野条里プランの南限の地割であるためと仮定しておく<sup>\*11</sup>。あくまでも圃場整備前の状況でしかなくいつまで遡るのかは不明であるが、畦2を東に延長した畦畔の北と南で水田の区画が異なっている。すなわち、北側は中央の東西・南北いずれかに畦が入りさらに1/2が細分されるいわゆる半折形の典型的な条里地割になっているのに対し<sup>\*12</sup>、南側山裾までは半折形をとらない。このことも、畦2が

条里プランの南限地割であることを傍証するものである<sup>\*13</sup>。

また、畦2では圃場整備前には既に水田中の小畦畔となっているため明確ではないが、畦1では今回検出した8世紀後半～9世紀に構築された畦が、その後も連続的に同じ場所に當まれ、圃場整備前の畦畔・道路に至ったことが認められる。そして、この圃場整備前まで残っていた畦畔・道路は空中写真によって仁摩平野の全域にわたって同じ方位・等間隔に確認できるもので（写真11参照）すでに中澤四郎氏ほかによって仁摩平野の条里として指摘されてきたものの一部にあたる<sup>\*14</sup>。以上迂遠な説明を加えてきたが、今回の調査によって、仁摩平野の条里プランのうち、古墳時代には既に水田開発が進んでいたと思われる部分については<sup>\*15</sup>、9世紀に条里地割が施工され、以後継続したことがほぼ確認できた。

**庵寺遺跡の畦畔** 一方、ほぼ同時期と考えらられる庵寺遺跡のSD02・03、杭列1～3については、弓状に屈曲し、直線を呈さず、方向もN-56.5-Wと条里地割とは一致せず、近年までの水田畦畔ともやや異なる。したがって、1町を基準とする方格の条里プランに基づいてこの施設が作られた可能性はないが、畦2との距離は、110～120m程度となり（1/2000図面上計測）、谷状地形を前提にしつつも、1町を意識したものであった可能性もある。ここでは、谷部については条里地割が施行されないことを確認しておく。

**土坑の埋没・潮川の位置について** さて、同時期の遺跡内の変動要素としては、古墳時代中期にみられた溜め升的土坑の消失、SR01～SR03、SD01の埋没と平坦化が挙げられる。このうち、土坑の埋没については、これらを被覆する第4層・4-1層（8世紀後半～9世紀の須恵器を含む包含層と推定）が耕作土である可能性が指摘されることとあわせれば、条里地割の施工と同時に、条里内の不要な施設の水田化が進められた結果である可能性があるだろう。一方、SR01・02、SD01は潮川本流に近い流路痕跡であると想定したが、同じく埋没し第4層によって完全に被覆されており、以後調査区内でこのような砂礫の堆積は確認されない。潮川本流は8世紀後半～9世紀頃には調査区北側に流路が移動し南に戻ることはなかったと考えられる<sup>\*16</sup>。河道の変遷が自然のものであるのか人為的なものであるのかは不明であるが、条里地割の施工と相関する可能性はあるだろう。

**中世以降の状況** 五丁・庵寺遺跡とともに中世の遺構は確認されていないので、中世の状況を本格的に論じることはできないが、旧仁摩町の実施した発掘調査の成果を受けて、若干に中世の状況につ

表3 五丁地区遺跡の中世建物軸方位

1. 清石遺跡★

文献1		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 3° - W	12世紀中葉～13世紀初頭
SB_02	S - 1° - E	12世紀中葉～13世紀初頭
SB_03	S - 5° - E	12世紀中葉～13世紀初頭
SB_04	S - 3° - E	12世紀中葉～13世紀初頭
SB_05	S - 3.5° - W	12世紀中葉～13世紀初頭
SB_06	S - 2° - E	12世紀中葉～13世紀初頭

2. 入石遺跡

文献1		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 2° - E	11C後半～12C
SB_02	S - 7° - E	11C後半～12C
SB_03	S - 1° - E	11C後半～12C
SB_04	S - 6° - E	11C後半～12C
SB_05	S - 11° - E	11C後半～12C

集落11C後半～13世紀にかけて五丁地区の東側と西側で形成。14C～16Cにかけてはほぼ中央で形成されている。

3. 千後田遺跡

文献2		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 23° - W	12C中～13C中
SB_02	S - 24° - W	12C中～13C中
SB_03	S - 19° - E	12C中～13C中
SB_04	S - 6° - E	12C中～13C中
SB_05	S - 6° - E	12C中～13C中
SB_06	S - 1° - W	11C後半～12C前半
SB_07	S - 30° - W	11C後半～12C前半
SB_08	S - 8° - W	11C後半～12C前半

4. 京円原遺跡★

文献2		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 23° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_02	S - 21.5° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_03	S - 10° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_04	S - 28° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_05	S - 20° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_06	S - 4° - W	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_07	S - 23° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉
SB_08	S - 1° - E	包含層11C後半～14C初頭15C後葉～16C後葉

★は潮川に近接する遺跡

5. コヲスミ遺跡

文献1		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 0.5° - E	14～16世紀か？
SB_02	S - 0° - E	14～16世紀か？
SB_03	S - 5° - E	14～16世紀か？
SB_04	S - 1° - W	14～16世紀か？
SB_05	S - 4° - W	14～16世紀か？
SB_06	S - 7° - E	16世紀頃
SB_07	S - 3° - W	14～16世紀か？
SB_08	S - 4° - W	14～16世紀か？

6. 大月遺跡I区

文献1		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 3° - E	不明（遺構面遺物から遺構面17Cより前）
SB_02	S - 1° - E	不明（遺構面遺物から遺構面17Cより前）
SB_03	S - 4° - E	不明（遺構面遺物から遺構面17Cより前）
SB_04	S - 3° - E	不明（遺構面遺物から遺構面17Cより前）

註) 包含層からコヲスミと同じ遺物出土

7. 大月遺跡★

文献2		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 14° - E	不明（包含層遺物から集落は15Cを中心に）
SB_02	S - 30° - E	不明（包含層遺物から集落は15Cを中心に）
SB_03	S - 27° - E	不明（包含層遺物から集落は15Cを中心に）

8. 古屋敷遺跡

文献2		備考
遺構名	軸	
SB_01	S - 15° - W	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_02	S - 34° - W	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_03	S - 5° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_04	S - 10° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_05	S - 8° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_06	S - 7.5° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_07	S - 4° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_08	S - 17° - W	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_09	S - 47° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_10	S - 1° - W	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_11	S - 39° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）
SB_12	S - 17° - E	不明（包含層11C後半～12世紀）

文献1 仁摩町教育委員会1998『清石遺跡外発掘調査報告書』

文献2 仁摩町教育委員会1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』

いて触れてみたい。表2は仁摩庁実施の調査報告所に見える建物の桁行・梁行のうち、いずれか南北に近くなる側の軸の方位が国土座標上の真北に対して何度触れているかを示したものである。これをみると、N-3.5-Eのから±5°の軸をもつ範囲内の建物が（表中黒ぬり白ヌキ文字の建物）、中世の全時期を通じて確認できる掘立柱建物54棟の半数を占める27棟に達しており、前述条里地割に規制された土地利用が中世を通じてなされていたことが推測される。

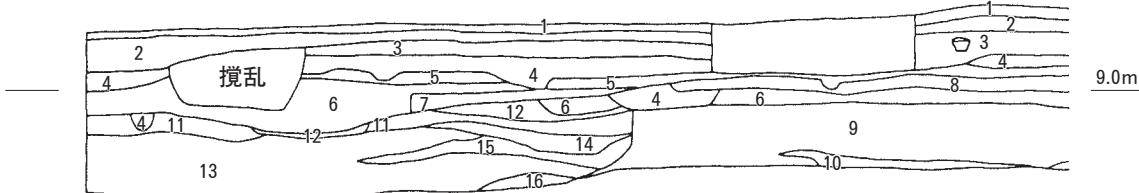
特に表中5. コヲスミ遺跡・6大月遺跡(1)は、条里坪境CDの延長上に建物が存在しているので、仁摩平野全体の条里プランに適合するものではないが、その建物軸はまさに条里地割とほぼ整合し、規制されていたと考えるのが妥当である。一方で、4. 京円原遺跡、7. 大月遺跡では約20～30°東に触れた建物の一群あり条里地割に則さない事例のように見えるが（表2網掛け）、この両遺跡の調査区は現代の潮川の河道本流に接している位置にあり、先述の約20～30°東に軸の触れた建物は現河道にほぼ直行している。中世の河道は厳密には不明ではあるが、現潮川流路より北側にしか想定できない。これらの建物は河川に近接し、その地形に規制されている可能性がある。

以上述べてきたように、五丁地区では中世を通じて、9世紀に成立している条里地割が一部は変更を加えられながらも、中世を通じて土地利用を規制していたことが窺える。

**条里プランに基づく地割の施工時期・地域における開発の諸相** このように、五丁遺跡・庵寺遺跡の調査で発見された畦畔その他の遺構によって、圃場整備以前にみられた条里地割が古代に遡って存在したこと、またその範囲が谷部には及んでいないことが確認されたことは大きな成果であると考えられる。一方で、今回検討の対象となった地域が古墳時代中期以降には概ね水田化していた地域であることは看過できない。

条里地割の施工時期を巡っては、歴史地理学・文献史学の立場からは条里プランによる土地表示法の完成を8世紀中葉とみて、7世紀後半から平安時代にかけて重層的に成立した地割が集積され、

### 1. 古屋敷遺跡B区東壁



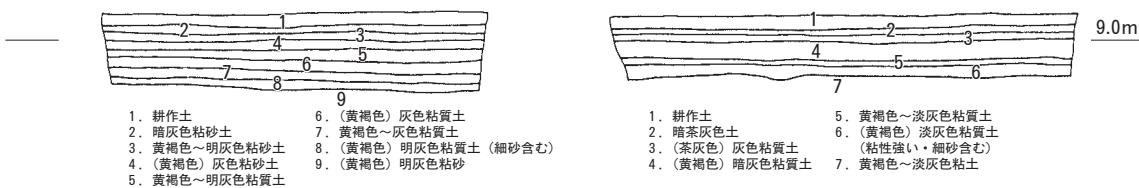
1. 耕作土  
2. 暗茶灰色粘質土  
3. 黄褐色・明灰色粘質土  
4. 暗灰色粘質土

5. (灰色) 黄褐色粘質土  
6. 茶褐色～灰色粘質土  
7. 暗灰色粘砂土  
8. 黄褐色～明灰色粘質土

9. (茶褐色) 黄褐色～明灰色粘砂土  
10. 茶灰色砂  
11. 茶灰色粘砂土  
12. 暗灰色砂

13. 暗灰色砂砾  
14. (茶褐色) 黄褐色砂 (小石含む)  
15. 暗茶灰色土  
16. 明灰色砂

### 2. 孫四田遺跡 1区D区東壁



1. 耕作土  
2. 暗灰色粘土  
3. 黄褐色～明灰色粘土  
4. (黄褐色) 灰色粘土  
5. 黄褐色～明灰色粘土

6. (黄褐色) 灰色粘土  
7. 黄褐色～灰色粘土  
8. (黄褐色) 明灰色粘土 (細砂含む)  
9. (黄褐色) 明灰色砂

### 1区C区東壁

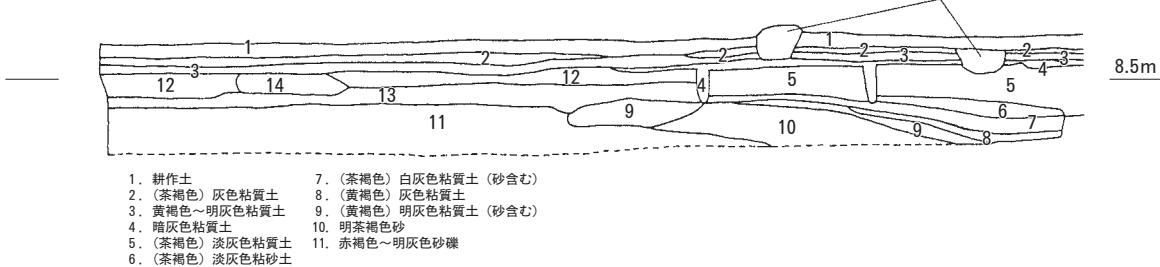


1. 耕作土  
2. 暗茶灰色土  
3. (茶灰色) 灰色粘土  
4. (黄褐色) 暗灰色粘土

5. 黄褐色～淡灰色粘土  
6. (黄褐色) 淡灰色粘土  
(粘性強い・細砂含む)

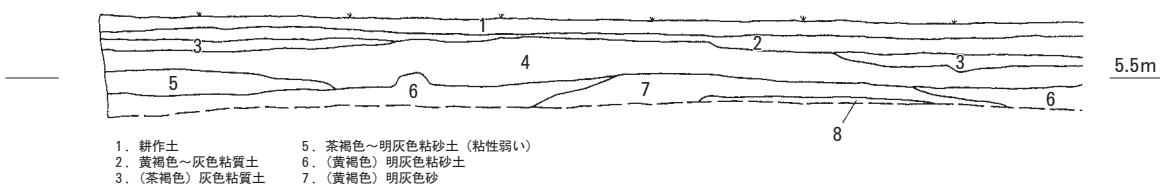
7. 黄褐色～淡灰色粘土

### 3. 孫四田遺跡 2区東壁



1. 耕作土  
2. (茶褐色) 灰色粘土  
3. 黄褐色～明灰色粘土  
4. 暗灰色粘土  
5. (茶褐色) 淡灰色粘土  
6. (茶褐色) 淡灰色粘砂土

### 4. 京田原遺跡 (西壁を鏡像反転)



1. 耕作土  
2. 黄褐色～灰色粘土  
3. (茶褐色) 灰色粘土  
4. 茶褐色～明灰色粘土  
5. (茶褐色) 淡灰色粘土  
6. (茶褐色) 淡灰色粘砂土

7. (茶褐色) 白灰色粘土 (砂含む)  
8. (黄褐色) 灰色粘土  
9. (黄褐色) 明灰色粘土 (砂含む)  
10. 明茶褐色砂  
11. 赤褐色～明灰色砂砾  
12. (茶褐色) 淡灰色粘砂土

1～3. 島根県仁摩町教育委員会 1999「五丁地区遺跡群発掘調査報告書」

4. 島根県仁摩町教育委員会 1998「清石遺跡外発掘調査報告書」より一部改め転載

第137図 五丁地区潮川流路推定地の堆積状況

現在の条里地割が形成された見る金田章裕氏の説が一般的な理解の一つとしてあげられる<sup>\*16</sup>。一方、個別の条里地割の遺構については、奈良県内の調査を中心に近年まで残っていた条里地割下から異なる水田が確認され、条里地割が平安時代後期、12世紀頃までしか遡り得ない地域があることが知られている<sup>\*17</sup>。一方で、駿河国の静清平野のように8世紀前半に遡る広範な埋没条里の地割が確認されている地域もある<sup>\*18</sup>。また、地方支配の契機として、実際の個別条里地割の施工の問題とは別に国郡境界などが条里プランと同時期に整備されたとする、地域計画線として政治的役割を重視する見解も出されている<sup>\*19</sup>。条里地割の施工を地域社会の中でとらえるのであれば、やはり条里プラン成立とその実際の施工が、環境・条件のもとでどの範囲に対して、いつ施工されたか個別具体的に検証することが必要であると考えられる。今回の調査範囲に限って言えば、平野全体の条里プランに関わる地割が8世紀以前にはおそらく未成立で、9世紀以降に施工されたことになる。しかし、仁摩平野においては古代山陰道が条里プランの基軸となっている可能性が指摘されており<sup>\*20</sup>、郡家

の所在も推定されているので、7世紀末ないし8世紀前半に後の条里プランに引き継がれる地域計画線が存在した可能性も否定できない。地域の首長による先行する開発の有無、潮川の河川流路の移設・固定化、中央との交通路などの諸問題について、それら個別事象を明らかにしつつ、条里地割全体の形成過程を明らかにすることが豊かな地域史の構築につながるものと考えられる。

### 第3節 庵寺遺跡出土田下駄について

本節では、庵寺遺跡流路SR01から多量に出土した単独横型田下駄（以下、他の型式と区分する必要がない場合は田下駄と表記する）について検討したい<sup>21</sup>。まず、出土状況などについての所見を概括すると、田下駄の出土層位はSR01埋土中のV-2層を中心とし、その下層からの出土もあるが、表面の遺存状況・水平的な位置関係からみて上下に分布する資料でも同時期の一足分であると考えられる（第4章第3節）。また、このようなセット関係が確認できることは、田下駄「廃棄」後の移動などが少なく、「廃棄」時点の状況が比較的良好に出土状況に反映されていると考えられる。供伴する土器がないため、田下駄の詳細な年代は不明であるが、基盤層の上面からは弥生前期の土器が出土（第85図A区暗灰色粘質土層出土遺物）、上層のIV層からは古墳時代前期の土師器が出土していることから（第94図）、弥生時代～古墳時代前期までの間に位置づけられる。また、第6章で示した自然化学分析（軟X線観察）その他によって<sup>22</sup>、埋没前の堆積層V-3層からは水田を直接的に示すものではない若干のプラントオパールが検出され、周辺に水田があった可能性が指摘されている。一方、V-2層での耕作の可能性は少ないとされ、埋没後の土層V-1層上面が水田耕作面となった可能性が指摘されている。したがって田下駄出土地点SR01は田下駄が「廃棄」されたとき、水田そのものではなかったと考えられる。

**出土地点について**さて、出土地点からは田下駄のほか、明確な農耕具類の出土はなく、加工された板材が出土するのみであった。単独田下駄出土の遺跡には田下駄以外に明確な農耕具の出土しない遺跡があることが知られ<sup>23</sup>、松江市雲垣遺跡（単独型田下駄7点出土。田下田以外には棒状木製品が出土する。弥生時代中期）<sup>24</sup>、法吉遺跡（単独型田下駄5点出土、他に明確な木製品なし。弥生時代後期～古墳時代）<sup>25</sup>、鳥取市桂見遺跡などがある<sup>26</sup>。特に桂見遺跡では、弥生時代～古墳時代前期の木器溜まり2カ所から、単独田下駄合計64点が出土しているが、出土状況は巨視的に見ると当遺跡との類似点が多い。この木器溜まりは、自然河川状の窪地に流れ込んだ資料群であると考えられているが、木器溜まり1ではほかの木製品としては大型建築部材・桶など、木器溜まり2では箱・槽・建築部材などで田下駄のみがまとった資料を構成し、鋤鍬などの土木・掘削具、収穫具は存在していない。特に田下駄の出土状況についての言及はないが、田下駄がまとめて「廃棄」された地点にほかの資料が流入した可能性も想定されよう。後述するように単独田下駄は製作が容易であることから、保管・管理も粗雑であった可能性があり、他の製作に労力の必要な農具とは異なり、日常的に水田近傍などに集積されていた可能性を検討する必要があるだろう（なお、民俗例では結合型の田下駄である大足などとも保管が異なるとされる）<sup>27</sup>。なお、庵寺遺跡B・C区については田下駄の生産場所ではないかとの類推が可能であるが、個別資料解説で述べたように、履き物の下駄のような足跡痕跡のある田下駄は存在しないものの、端部に摩滅、ないし緒孔内面が摩耗している資料は多くみられた。もちろん、緒孔部分に穿孔時的小断片が残るような資料（第106図-5〔以下、田下駄はSR01出土遺物の通し番号で田下駄5のように表記〕、前左緒孔を下面から

表4 麻衣寺遺跡 田下駄遺跡観察表

No.	穿孔 数	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	造形	遺存 状況	木取り 状況	調整痕跡	上面	下面		製作技法の復元	製作技法の復元	備考			
										未調整	使用痕 跡	調整痕跡	未調整	使用痕 跡	調整痕跡		
1	方形	3	(32.5)	(18.0)	(1.4)	芯持材	1/2	保存状況不良だが平滑な部分があり、調整ありか。	D	なし	木口1方向に明顯な摩滅。	未調整	側口1方向に若干の摩滅。側板材を田下駄に成形。	側口1方向に若干の摩滅。側板材を田下駄に成形。	I	スキ	
2	方形	(2)	29.0	(23.0)	(1.2)	追い歯	完形	保存状況不良だが平滑な部分があり、調整ありか。	D	なし	保存状況不良であるが、未調整か。	未調整	側板材を上下切断し、上面に調整がされた田下駄。	側板材を上下切断し、上面に調整がされた田下駄。	IV 1	スキ	
3	隅丸方形	(1)	36.0	(19.5)	1.6	板目	1/2	保存状況不良だが平滑な部分があり、調整ありか。	D	不明	未調整	未調整	側板材を上下切断し、上面に調整がされた田下駄。	側板材を上下切断し、上面に調整がされた田下駄。	IV 1	スキ	
4	方形	4	43.5	23.5	1.5	板目	完形	保存状況なし。	D	なし	未調整	未調整	側板材を田下駄に成形。	側板材を田下駄に成形。	I	スキ	
5	長方形	4	35.0	23.5	1.0	俵	完形	保存状況なし。	D	なし	未調整	未調整	側板材を田下駄に成形。	側板材を田下駄に成形。	I	スキ	
6	方形	(2)	32.0	(19.5)	2.2	板目	1/2	保存状況不良だが平滑な部分があり、調整ありか。	D	なし	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	IV 2	スキ	
7	方形か	4	32.0	(17.0)	(1.5)	追い歯	1/2	保存状況不良であるが、未調整か。	D	未調整	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	スキ	
8	方形	(2)	25.0	(8.5)	1.9	追い歯	1/4	幅3cm前後の曲刃先真ん。	D	なし	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	IV 2	スキ	
9	方形か	(2)	38.0	(11.5)	1.5	板目	1/2	幅3cm前後の曲刃先真ん、刃端不明瞭。	D	遺存する3方向に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	IV 2	スキ	
10	方形	4	41.0	37.0	1.5	追い歯	完形	幅5cm前後の直刃先真ん。刃端の残るものもある。	D	なし	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	III 1	スキ	
11	方形	0	31.0	18.5	(1.1)	枝部分	完形	保存状況不良であるが、未調整か。	D	未調整	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	無孔式田下駄か。	
12	隅丸方形	4	(17.0)	29.0	(1.0)	板目	1/2	保存状況不良。	D	不明	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	不明	スキ	
13	長方形	(2)	44.5	21.0	2.8	追い歯	完形	先6cmの曲刃先真ん。	D	なし	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	II 2	2打が接合した資料	
14	方形	4	28.0	25.0	1.6	板目	完形	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	A	右端のみ若干摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	A	左端のみ若干摩滅		
15	方形	4	27.0	19.0	1.0	枝部分	1/4	保存状況不良。	D	未調整	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	D	未端右側に若干の摩滅	
16	長方形か	(1)	(29.0)	(12.5)	1.2	追い歯	1/4	幅4cm前後の斜行する加工痕。刃先、刃端のい、いと見えないのが不明、下面と同様。	A	(前端)に明瞭な摩滅	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃先、刃端のい、いと見えないのが不明、下面と同様。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	D	未端右側に若干の摩滅		
17	不明	(2)	29.0	(11.5)	1.5	板目	1/4	保存状況不良。	D	不明	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	II 2	2打が接合した資料	
18	隅丸方形	(1)	41.0	(16.5)	1.3	追い歯	1/2	体に及んでいないか、足のあたりは幾つある。	B	なし	3~4cm程度の曲刃先真ん、刃端不明瞭。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	C	未端右側に若干の摩滅	
19	隅丸方形	4	39.0	31.0	1.6	追い歯	1/4	未端右側に若干の摩滅。	D	未調整	左端に明瞭な摩滅	左端に明瞭な摩滅	左端に明瞭な摩滅	左端に若干の摩滅	D	左端に若干の摩滅	
20	隅丸方形	4	19.5	(15.5)	1.5	板目	1/2	未調整。	D	調整なし。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	スキ	
21	隅丸方形	(1)	27.0	(10.0)	1.5	板目	1/2	5cm程度の刃先真ん。	B	前端に明瞭な摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	C	未端右側に若干の摩滅		
22	隅丸方形	4	33.0	24.0	2.0	俵	完形	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	D	前端に若干の摩滅	未端右側・後端に若干の摩滅	未端右側・後端に若干の摩滅	未端右側・後端に若干の摩滅	D	前端右側・後端に若干の摩滅		
23	方形	(2)	31.5	(14.5)	1.4	追い歯	1/2	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	B	後端に摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	D	未端右側に若干の摩滅		
24	隅丸方形	4	34.5	30.5	1.5	板目	1/2	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	D	前端に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	D	未端右側に若干の摩滅		
25	丸形	2	30.5	21.5	1.5	芯	1/2	保存状況不良。	D	なし	後端に摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
26	丸形	4	34.5	32.0	1.5	追い歯	完形	幅5cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	B	なし	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
27	隅丸方形	4	35.5	35.0	2.0	板目	1/2	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
28	隅丸方形	(1)	32.0	(12.0)	1.0	板目	1/2	保存状況不良。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
29	方形か	4	31.5	(13.0)	(1.2)	板目	1/2	保存状況不良。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
30	隅丸方形	(2)	29.0	(17.0)	1.8	追い歯	1/2	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	VII 1	未取り縫合の横型田下駄。	
31	方形	(2)	33.5	(10.5)	1.2	板目	1/2	追い歯なし。	D	調整なし。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	スキ	
32	不明	(2)	24.0	4.0	1.5	板目	小片	保存状況不良。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	III 1	スキ
33	隅丸方形	4	31.5	23.0	1.5	板目	1/2	幅4cm前後の曲刃先真ん。刃端不明瞭。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	スキ
34	隅丸方形	(2)	27.0	(12.5)	1.0	板目	1/2	保存状況不良であるが、未調整か。	D	不明	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	I	スキ
35	隅丸方形	(2)	38.0	(13.0)	1.5	板目	1/2	腐食のため、不明瞭だが、全体に平滑で調整はあつた。	D	なし	保存状況不良であるが、未調整か。	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	未端右側に若干の摩滅	不明	スキ

みると使用時に折損するはずの小断片が残っている)も存在し、穿孔のない板材(田下駄11)、緒孔数・位置が典型的でない資料(田下駄16・17)も存在するが、無孔式田下駄が3ないし4孔式田下駄としばしば同時に出土する事は指摘されており<sup>\*28</sup>、5も使用痕跡のほとんどない事例と考えればよい。ただし、単独型田下駄は加工が簡単、属性が少ないことを念頭に置けば、調査時に単なる木切れと認識したものに、田下駄製作を意図した未製品がないとはいえない。結論的には、庵寺遺跡SR01が田下駄製作場所であった可能性は否定も肯定できないが、使用された田下駄が集積ないし「廃棄」されていた場所であることは確実であろう。

**田下駄の製作** 一般に単独型田下駄は民俗例などでも「必要に応じて作り、使い捨てる」とされている(市田1990)。資料から窺える加工工程・作業量の少なさなどから、出土遺物についても同様の理解が一般的で、論理的には問題ないと思われるが、以下本遺跡出土例から若干の検討を行ってみたい。

出土している田下駄から、単独田下駄として機能するために最低限必要な作業工程としては、以下の工程が復元できる。

①材を割って板状に加工する。原材加工段階と仮称する(これはあくまでも田下駄としての原材という意味である)。

②左右を切断する(左右端のキリ・オリ)。なお、出土している田下駄はすべて木目方向に対し直行させて足をおく横型田下駄である。成形段階と仮称する。

③緒孔を穿孔・緒鼻を通す。穿孔法は、穴状にする表面穿孔(片面・両面がある)、側面を切り欠く側面キリカキに大別できる。調整段階と仮称する。

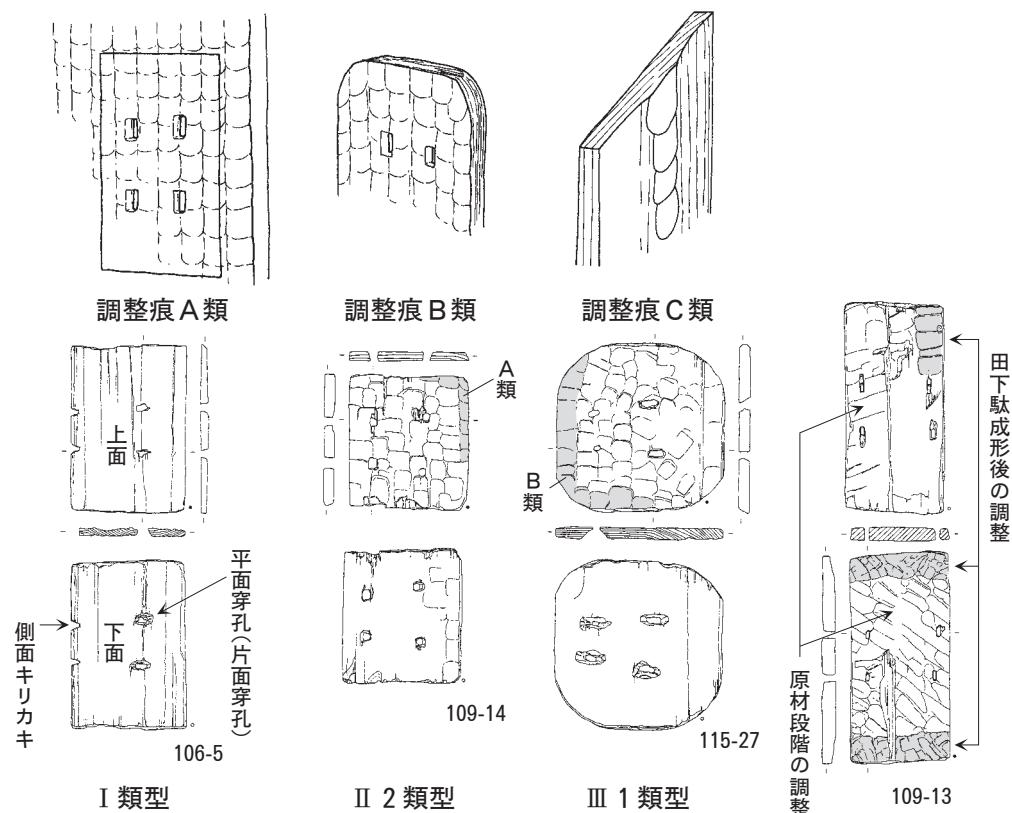
この作業工程のみで製作されている田下駄は、資料としては上面・下面ともワリの面を残し、緒孔のみが穿孔される、という属性をもつことになる(例として田下駄4など)。さらに、確実に田下駄製作に伴う痕跡として、④平面の角落とし、ならびに端部下面側を削る資料がある(田下駄13)。これはおそらく資料の機能性との相関があり<sup>\*29</sup>、本遺跡出土以外の類例を検討する必要があり本書では検討しない。

これに対し、本遺跡の資料には一定程度表面に横斧などによる調整痕跡が認められる資料が、決して少なくない量である18点存在している(なお6点は保存状況不良により不明である)。これについては、本来表面調整がなされていた板材を2次的に転用したと当然考えられるが、田下駄成形後に必要以上の機能が付与されている可能性がある。まず、調整の痕跡を田下駄成形との前後関係からA～D類に分類する(第138図)。

**調整痕A類** 成形以前の段階に施されたもの。これは作業効率に考えれば原材に施された加工であり、田下駄に関わる加工でないと考えられる。田下駄端部で加工単位が不自然に分割されているものである。

**調整痕B類** 田下駄としての成形段階の後、調整段階に施されたもの。田下駄の加工痕跡である。田下駄の輪郭に沿って加工単位が確認されるもの、田下駄中央部のみに調整が施されているもの(田下駄18)がこれに当たる。

**調整痕C類** 原材加工段階(板製材時)に必然的に施されたもの。B類とは異なり、原材加工に必然とされるものである。したがって、田下駄製作・原材製作のいずれに関わるものでもよい。具体例としては、ワリによって生じたこぶ状の部分をケズリ落とした加工が挙げられる(田下駄10下面)。



第138図 田下駄の調整と類型

**調整痕D類** 保存状況からA・Bいずれか判断のできないもの。調整は原材に存在したのが、田下駄成形後に施されたのか不明である。

以上のように調整が田下駄としての加工と相関するかを確認すると、本遺跡の田下駄は、原材の加工度、田下駄成形後の加工について次の類型に分類可能となる（IV類は遺物の保存状況に左右される、観察上の仮の類型）

**I類型** 表面の調整の施されない資料（1・4・5・7・11・15・19・20・25・31・34）。

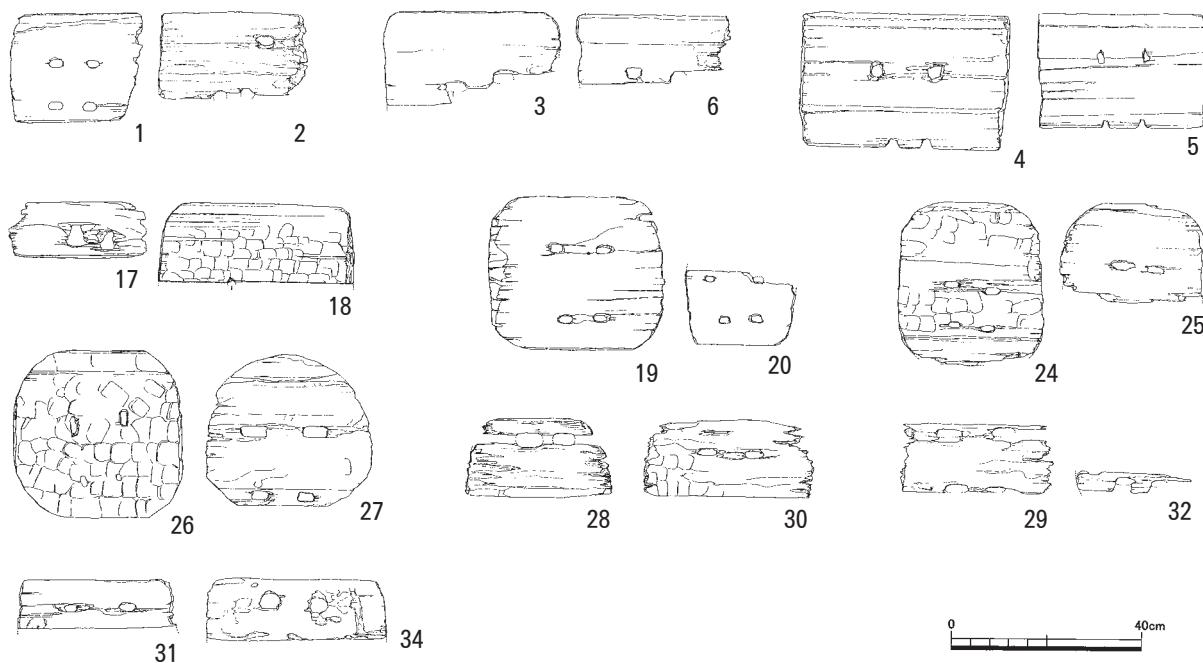
**II類型** 調整痕A類が施される資料。両面にあるものをII 2類とする（13・14・16）。

**III類型** 調整痕B類が施される資料。片面のみのものをIII 1類とする（10・13・18・21・23・27）。

**(IV類型)** 調整痕がD類としか確認できない資料。片面のものをIV 1類型（2・3・24・26・30・33）、両面に加工が施されるものをIV 2類型とする（6・8・22）。

これをみると、まず田下駄成形以後の調整痕跡B類のある資料で、両面に調整が施された確実な資料は存在していないことがわかる。前後関係の不明な調整D類しか確認できないIV 2類型には、論理的には田下駄成形後調整のIII 2の資料が含まれている可能性があるが、検出されたIII類はすべて片面のみの調整で残る一面は未調整ないし調整痕C類（板製材に関わると考えられる加工）であることから、その可能性は低い。一方で、調整痕Aが施される資料には両面に加工痕がみられる資料が多い。

**上面調整田下駄の存在** 以上の検討から、表面の調整された田下駄には、表面調整されていた原材を2次利用した田下駄と、片面のみ田下駄成形後に調整したものがあるが、田下駄成形後両面を調整したものはない、と結論づけることができる。この田下駄成形以降の片面調整は、普通に考えて



第139図 出土状況からセットとなると考えられる田下駄 (S=1/16) ※左右は番号順である

足を乗せる上側を調整したものとみるのが自然であろう。まず、田下駄13は表裏面の調整された原材から田下駄を成形しているが、その後左右両端下面の角落としのない側を再度調整している（幅広の加工痕）。この角落としは泥離れをよくする加工と考えられるので、再加工は田下駄製作時の上面に行われていることになる。また、ここで緒孔の穿孔方向を確認すると、明確な片面表面穿孔の資料である田下駄21・27は、非穿孔側を調整している。また加工痕D類のみしか観察できない資料のうち、緒孔片面穿孔の資料2・33も非穿孔側を調整している（第139図）。これらの資料からは、いずれも製作時に上面の足を乗せる部分の調整が行われたことを追認することができる。このことは同時に、若干循環論法じみたことになるが、片面穿孔の非穿孔側が上面として意識されていたことを示すものである。なお、端部の摩耗・緒孔間の鼻緒のこすれによるくぼみなどの使用痕跡は、必ずしも上述の製作時の下面にあるとは限らず（特に端部の摩耗）、使用時には上下左右が入れ替わることがあったと考えられる。単独田下駄は機能上最低限の加工しか加えられていないが、片面調整の資料については、原材の加工ではなく足を乗せる部分のための調整である可能性があるといえよう。

**セット関係の検討から** 次に出土状況から田下駄のもつ属性に若干検討を加えておきたい。出土状況から、特に平面的な位置関係や遺存状況からセット関係が類推される資料は、1・2、3・6、4・5、17・18、19・20、24・25、26・27、28・30、29・32、31・34の10組である（第140図）。この10組の形状をみると、大きさは若干異なる組み合わせはあるものの、端部を角落としにするか否か（方形=1・2、4・5、3・6、19・20隅丸形=24・25、26・27、28・30）、後端側の緒孔を側面キリカキにするか否か（4・5）、が共通する。さらに、田下駄24は横型田下駄であるものの緒孔間距離から推定される前後関係では横長になる資料であるが、セットとなる25も破片ながら同様の形状が推定される。したがって、田下駄24の形状は偶然横長となっているのではなく、明らかに意図して作られたものであることは確実である。この、セットとなる2個体間の類似性は、製作

上の特徴がそのまま「廃棄」時点まで継承されている可能性もあるが、何らかの機能に対応しているため、セットで共通している可能性もある。特に大きさや表面調整が異なる組み合せは（4・5、24・25、26・27）、製作時が異なる個体が使用時にセットとされている可能性は高いだろう。したがって、これらの要素は、同じ要素をもった田下駄でないと一足として使用できない何らかの機能に由来する—その機能がなんなのかは不明であるが—可能性があるだろう。

**小結** 以上の検討から、あくまでも本遺跡資料の分析に限られるが、調整の施される田下駄については表面調整済み原材を転用したものと田下駄成形後に調整されたものがあること、また、その平面的形状に機能的意味がある可能性を指摘できた。はじめに述べたように、本田下駄は比較的短い時間内での埋没が想定される資料であり、木取りや、使用工具の推定など検討可能な要素は多く存在する。周辺地域の同時代資料を合わせ再検討することで本稿では触れることができなかった農業経営を巡る条件を検討することが可能となり、第2節で述べてきたような弥生時代前期以来の五丁地区における開発の進展の様相を考える上での重要な資料となるであろう。

\* 1 渡邊正巳2009「五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」(庵寺遺跡IIに掲載予定。)

\* 2 濱田竜彦同2000「因幡伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』、同2001「沖丈遺跡の突帯文土器と石見東部の地域性」(『沖丈遺跡』邑智町教育委員会)。なお、2条突帯の深鉢ならびに口縁を逆くの字状に屈曲させる浅鉢は江津市埋築遺跡からも出土している(江津市教育委員会2002年『埋築遺跡』)。

\* 3 「土器持寄会の記録」土器持寄会論文集刊行会編2000『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会。第10回持ち寄り会における濱田延充・濱田竜彦・田畠直彦氏の発言など。

\* 4 いわゆる「口縁下端突状甕」の要素を指す(「土器持寄会の記録」土器持寄会論文集刊行会編2000『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会)。何回か概念の整理がなされているが、ここでは第4回持ち寄り会における豆谷和之氏の発言を念頭に置いている。

\* 5 仁摩町教育委員会1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』、田端直彦2003「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集III』。

\* 6 佐原真氏以来の弥生前期土器の一般論的理解の適用である(佐原真1967「山城における弥生文化の成立」『史林』50-5。例として磯田由起子1988『島根考古学会誌5』)。近年の見直し論については特に触れないが、それぞれは後出する要素あるが、先に出現した形態がその後取って代わられてしまうかどうか不明であり、後述するように段がある甕をすべて沈線のある資料に先行させて考えてよいかは検討を要する。

\* 7 なお、五丁遺跡C・D区で確認されているSD04は流路に添っており、上流側に対して水平に掘り下げていることから、流路上流からの導水・用水路の可能性がある。

\* 8 花粉・プラントオパールなど微化石分析については、本書に掲載していない。渡邊正巳2009「五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」(庵寺遺跡IIに掲載予定)に拠る。

\* 9 仁摩町教育委員会1998『清石遺跡外発掘調査報告書』。

\* 10 2点間の座標から、国土座標と異なる方位の平行軸線間の距離を計算するに当たっては、伊藤智氏のご教示を得た。期して感謝したい。

\* 11 そのほかには、10m程度の条里余剩帶(古代道)があった可能性などが想定されるが、本調査区内では検出されていない。

\* 12 半折形については米倉二郎1932「農村計画としての条里制」『地理学論叢1』。また、落合重信1967『条里制』(吉川

弘文館）を参照した。

- \*13 末ヶ坪遺跡の遺跡名の由来となった末ヶ坪の字名も南端をであることを示している可能性がある。
- \*14 中澤四郎1950「出雲・石見に於ける条里制」『人文地理』2-1、同1991『隱岐・出雲・石見の条里』。
- \*15 後述するように、条里地割の施工自体は、時代的に重層している可能性があり、從来仁摩平野の条里とされていたものの中にもさらに時代が降ってから施工された地割が含まれている可能性がある（例として、潮川流路推定地の第138図井代・東が坪など）。
- \*16 なお、庵寺・於才迫遺跡の谷からの一時的な砂礫の堆積はC区で確認されている（遺構でないので本書非掲載）。
- \*17 代表的なものとして金田章裕1985『条里と村落の歴史地理研究』（大明堂）、同1998「奈良時代の土地管理と小字地名の名称」『古代莊園と景観』（東京大学出版会）、同2002『古代景観史の探求』（吉川弘文館）。
- \*18 寺沢薰1987「奈良県多遺跡の条里遺構と二、三の問題」『条里制研究』3 奈良県立橿原考古学研究所2006『箸尾遺跡I』。
- \*19 矢田勝1990「静岡平地北部における条里型地割の復元と立地環境の変遷」『静岡県埋蔵文化財研究所研究紀要III』静岡県教育委員会。同1996「東海道と条里遺構」『古代駿河国律令社会考』。山田成洋1996「静清平野における埋没条里地割の施工年代について」『古代駿河国律令社会考』。
- \*20 荒井秀規2009「領域区画としての国・評（郡）・里（郷）の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所
- \*21 中林保1978「石見国」『古代日本の交通路III』大明堂。
- \*22 35点の田下駄のうち、34のみがSR01外からの出土であるが、形態等は一緒であり、まとめて論じる。
- \*23 前掲註1論文。
- \*24 中川寧2006「木製品各論」『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』島根県教育委員会。
- \*25 松江市教育委員会2001『雲垣遺跡発掘調査報告書』。
- \*26 松江市教育委員会2003『法吉遺跡発掘調査報告書』。
- \*27 鳥取県教育文化財団1996『桂見遺跡』。
- \*28 市田京子1990「広島県の田下駄」『木と民具』雄山閣。
- \*29 秋山浩三1993「大足の再検討」『考古学研究』159。
- \*30 大足などの足板を反らせることについては、「軽くするため」（＝泥離れをよくするとの意味か。平石）の報告がある（市田1990）。

表5 五丁遺跡・庵寺遺跡・於才迫遺跡出土遺物觀察表

## 五丁遺跡出土遺物觀察表

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(㎝) 長さ(㎝)	口径(㎝) 幅(㎝)	底径(㎝) 厚さ(㎝)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
9	1	A	SK02	木製品	大足・横桟		52.8	4.0	1.8					スギ
9	2	A	SK02	木製品	大足・横桟		52.4	4.3	2.0					スギ
9	3	A	SK02	木製品	大足・横桟		49.4	4.8	1.4					スギ
9	4	A	SK02	木製品	大足・縦桟		30.4	4.5	3.9					スギ
9	5	A	SK02	木製品	大足・縦桟		69.3	4.2	3.6					スギ
9	6	A	SK02	木製品	大足・踏板		45.9	7.5	2.0					スギ
10	1	A	SR02	土師器	甕	小片	(3.0)	—	—	1mmの大白色砂粒含む	内面：10YR7/3 外面：10YR7/3	良好	内面：磨滅のため不明 外面：磨滅のため不明	
13	1	A	SR03	土師器	甕	小片	(9.1)	<12.0>	—	粗く3mm以上の砂粒含む	内面：10YR5/2 外面：10YR5/2	良好	内面：体部ケズリ口縁部強いナデ 外面：体部ナテ後ハケメ	体部外面に炭化物付着
13	2	A	SR03	土師器	高坏	小片	(3.2)	<18.0>	—	1mmの砂粒含む	内面：10YR7/3 外面：10YR3/10	良好	内面：ナデ・ハケ 外面：ナデ・ハケ	
13	3	A	SR03	木製品	平鍬		25.5	16.9	3.9					アガカシ属
13	4	A	SR03	木製品	不明木製品		(40.8)	9.2	0.2					アガカシ
13	5	A	SR03	木製品	板		185.0	44.0	3.0					スギ
13	6	A	SR03	木製品	板		123.3	25.0	2.3					スギ
13	7	A	SR03	木製品	板		107.0	22.6	1.5					スギ
14	8	A	SR03	木製品	板		148.2	15.3	2.0					
14	9	A	SR03	木製品	板		128.0	15.1	1.3					
14	10	A	SR03	木製品	杭		88.5	10.7	2.8					
14	11	A	SR03	木製品	杭		59.5	7.9	5.2					
14	12	A	SR03	木製品	杭		54.4	7.2	5.0					
15	1	B	立木1周辺	石器	打製石斧	完形	20.7	6.9	2.0				重さ342.5g	
16	1	A	ポイントE PNO10 第5層	須恵器	坏	小片	(3.4)	<14.8>	—	1mmの白色砂粒含む	内面：5PB6/1 外面：5PB6/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
16	2	A	4層	須恵器	蓋	小片	(1.8)	<16.0>	—	1mm程度の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N5/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
16	3	A	PN-19層	土師器	坏	小片	(2.3)	—	<7.8>	1mm程度の砂粒含む	内面：2.5Y8/1 外面：2.5Y8/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
16	4	A	第4層P-11	白磁	碗	小片	(1.8)	—	—	精緻	内面：2.5Y8/1 外面：2.5Y8/1	良好	内面：施釉 外面：施釉	
16	5	A	P-25	白磁	碗	小片	(1.7)	—	<8.0>	精緻	内面：5Y7/2 (施釉) 外面：10Y7/1 (釉薬なし)	良好	内面：施釉 外面：施釉	
16	6	A	東溝第4層	青磁	碗	小片	(1.6)	—	—	1mm以下の砂粒含む	内面：緑灰色 外面：緑灰色・灰色	良好	内面：施釉 外面：施釉	削り出し高台
16	7	A	P-15 D6 6層	青磁	皿	小片	(1.5)	<11.6>	—	精緻	内面：7.5Y7/3 外面：7.5Y7/3	良好	内面：施釉 外面：施釉	同安窯産か
16	8	A	E 6壁 清掃中	青磁	碗	小片	(2.8)	—	<6.0>	精緻	内面：10Y7/1 外面：10Y6/2緑灰色	良好	内面：施釉・底部陰花文 外面：施釉・高台内窯道具痕、中央無釉	
16	9	A	4層	青磁	皿	小片	(2.5)	<21.2>	—	精緻	内面：緑灰色 外面：緑灰色	良好	内面：施釉 外面：施釉	
16	10	A	表土層	染付	皿	小片	(1.3)	—	3.3	精緻	内面：2.5Y8/2、無釉 外面：5Y7/2、無釉	良好	内面：施釉・染付・底部釉ハギ 外面：施釉・染付・高台内無釉	
16	11	A	B8第2層	肥前 磁器	碗	1/2 未満	(3.1)	—	4.3	精緻	内面：7.5YR7/1 (釉薬なし) 外面：7.5Y8/1 (釉薬)	良好	内面：施釉・底部蛇ノ目見込み釉ハギ 外面：施釉	
16	12	A	PN-2	青磁	筒形香炉	小片	(5.0)	—	<5.4>	精緻	内面：2.5GY8/1 外面：2.5GY6/1	良好	内面：回転ナデ 外面：施釉底部釉	蛇ノ目高台、見込み部分砂塗布。波佐見産か
16	13	A	不明	瓦質 土器	擂鉢	小片	(6.0)	<28.0>	—	1mm以下の砂粒含む	内面：7.5Y 8 /1 外面：10YR8/1	良好	内面：ハケ 外面：ハケ	
16	14	A	東溝	備前 陶器	擂鉢	小片	(5.6)	<32.8>	—	1~5mm程度の砂粒含む	内面：N6/0 外面：N5/0	良好	内面：回転ナデ・擂り目あり 外面：回転ナデ	
16	15	A	第4層	備前 陶器	擂鉢	小片	(4.9)	—	<10.4>	2~4mmの砂粒含む	内面：7.5Y7/2 外面：2.5YR5/2	良好	内面：ナデ・擂り目あり 外面：ナデ	
16	16	A	P-50	石器		小片	(8.0)	(2.8)	0.9				重さ37g	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(cm) 長さ(cm)	口径(cm) 幅(cm)	底径(cm) 厚さ(cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
16	17	A	第4層 PNO09	金属 製品	刀子(柄)	9.9	1.4	0.6					重さ19g	
16	18	A	51028	瓦	丸瓦	小片	(8.2)	(5.6)	(1.5)	0.5mm以下の砂粒含む	内面：5Y7/1 外面：5Y7/1	不良	内面：布目圧痕、端部ケズ リ 外面：縄目タキのちミガ キ・ナデか	
21	1	B	SK04	土師器	坏	1/2 以上	5.1	16.4	—	1mm以下の砂粒、金 雲母若干含む	内面：10YR7/2 外面：10YR7/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ下部指頭圧痕	内外面とも全面赤 彩
21	2	B	SK07	縄文 土器	深鉢	小片	(4.0)	—	—	3mm以下の白色砂粒 含む	内面：10YR6/2 外面：10YR 6 /1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯O類	
21	3	B	SK07	縄文 土器	深鉢	小片	(7.7)	<27.4>	—	粗く1～4mmの白色 砂粒含む	内面：10YR7/2 外面：10YR7/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下無 刻目突帯	
21	4	B	SK07	石器	石核		3.7	1.8	1.2				重さ8.2g	
21	5	B	SK07	石器	石核		2.1	1.3	0.4				重さ1.1g	
21	6	B	SK09	石器	黒曜石	完形	2.6	1.9	0.7				重さ1.9g	
21	7	B	SK09	弥生 土器	甕	小片	(3.8)	—	—	2mm程度の砂粒多く 含む	内面：10YR6/6 外面：10YR7/3	良好	内面：ナデ 外面：ナデ・重弧文	
21	8	B	SK09	縄文 土器	深鉢	小片	(10.4)	—	—	2～3mmの砂粒含む	内面：2.5Y3/1 外面：2.5Y7/3	良好	内面：ナデ 外面：条痕	
21	9	B	SK09	木製品			(25.7)	5.8	0.4				アカガシ属か？	
22	1	B	SD03	土師器	坏	小片	(4.0)	<14.2>		0.5mm以下の砂粒少 量含む	表面：10YR 3/2 断面：10YR 7/3	良好	内面：口縁部ナデ、ほかナ デ後ミガキ 外面：ナデ後ミガキ	
22	2	B	SD03	土師器	高坏	1/2 未満	(6.5)	—	—	1～5mm程度の砂粒 含む	内面：2.5Y7/3 外面：2.5Y7/3	良好	内面：磨滅のため不明 外面：磨滅のため不明	
22	3	B	SD03	土師器	高坏	1/2 未満	(4.4)	<20.6>		2mm以下の赤褐色砂 粒含む	表面：5YR 7/3 断面：5Y 4/1	良好	内面：ナデか 外面：ナデか	
22	4	B	SD03	土師器	高坏	小片	(1.5)	—	<10.4>	0.5mm以下の砂粒・ 全雲母含む	内面：10YR6/3 外面：10YR6/3	良好	内面：ケズリ 外面：ナデ	
22	5	B	SD03	縄文 土器	深鉢？	小片	(1.9)	—	<9.2>	2mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y6/4 外面：2.5Y8/3	良好	内面：磨滅のため不明 外面：磨滅のため不明	
22	6	B	SD03	縄文 土器	浅鉢	小片	(3.0)	—	—	1mm以下の白色砂粒 含む	内面：10YR4/1 外面：10YR4/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
23	1	B	PNO20	突葉文 系土器	甕	小片	(2.0)	<21.0>	—	2mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y6/3 外面：2.5Y6/3	良好	内面：ナデ 外面：ナデ	
23	2	B	西溝	須恵器	蓋	小片	(1.7)	<14.8>	—	3mm程度の白色砂粒 含む	内面：N3/0 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
23	3	B	土器8 8B層 PNO8	須恵器	坏	1/2 未満	5.2	<12.0>	<7.4>	1mm程度の白色砂粒 含む	内面：10YR5/1 外面：10YR5/1	良好	内面：回転ナデ・底部ナデ 外面：回転ナデ・底部回転 糸切り	
23	4	B	PNO161	須恵器	坏	小片	(1.3)	—	<7.0>	1mm程度の黒色砂粒 含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ・底部ナデ 外面：回転ナデ・底部回転 糸切り	
23	5	C	土器6 6層P6	須恵器	坏	小片	(2.0)	—	<4.0>	1～2mmの黒色砂粒 含む	内面：N6/0 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ・底部ナデ 外面：回転ナデ・底部回転 糸切り	胎土 2.5YR6/4
23	6	C	P-56層	須恵器	壺	小片	(5.5)	—	<13.2>	1mmの黒色砂粒含む	内面：N7/0 外面：5PB7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ底部ナデ	
23	7	B	第6層	木製品			(14.8)	3.4	0.4					
23	8	B	L3 9層 ベルト	石器	石核	完形	3.7	2.6	1.6				重さ9.9g	
23	9	B	L3 6層	石器	石核	完形	4.8	1.5	1.0					重さ5.9g
23	10	B	L3 6層	石器	石核	完形	3.4	2.3	1.4					重さ6.8g
23	11	B	L3 6層	石器	剥片		2.5	2.0	0.3				重さ1.6g	
23	12	B	L3 6層	石器	剥片		2.1	1.5	0.4				重さ1.5g	
26	1	C	SK18	木製品	繫縛具か		(28.0)	3.0	2.3				スギ	
26	2	C	SK18	木製品	大足・横桟		(31.1)	3.3	1.3				スギ	
26	3	C	SK18	木製品	大足・横桟		(21.5)	2.6	0.8				スギ	
26	4	C	SK18	木製品			(10.0)	1.7	1.2					
26	5	C	SK19	鉄製品	釘か		(6.5)	0.6	0.3				重さ9.0g	
26	6	C	SK18	土師器	甕	小片	(3.0)	—	—	0.5mm以下の砂粒・ 金雲母含む	内面：7.5YR5/4 外面：10YR2/1	良好	内面：ナデ 外面：ナデ口縁端部スス付着	
26	7	C	SK18	土師器	坏	小片	<2.8>	(13.6)	—	1mm大の砂粒少量含 む	内面：10YR2/1 外面：10YR2/1	良好	内面：ナデ 口縁端部全面 スス付着 外面：ナデ 口縁端部全面 スス付着	
27	1	C	SD04	弥生 土器	甕	小片	(2.5)	—	<9.2>	1～3mm程度の白色 砂粒含む	内面：2.5Y4/6 外面：2.5Y5/6	良好	内面：指頭圧痕あり 外面：磨滅のため不明	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(㎝) 長さ(㎝)	口径(㎝) 幅(㎝)	底径(㎝) 厚さ(㎝)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
27	2	C	SD04	弥生土器	甕	小片	(5.1)	—	<13.4>	粗く2mm以上の砂粒含む	内面:10YR7/3 外面:5YR6/4	良好	内面:指頭圧痕 外面:磨滅のため不明	
27	3	C	SD04	弥生土器	甕	小片	(6.6)	<20.8>	—	2mm以上の白色砂粒含む	内面:7.5YR2/2 外面:7.5YR4/4	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	
33	1	C	SR04	突帯文系土器	甕	小片	(7.0)	<26.4>	—	粗く1mm程度の砂粒含む	内面:10YR4/1 外面:10YR1.7/1	良好	内面:ハケ 外面:ハケ・口縁端部やや下に無刻目突帯	内傾接合。
33	2	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(7.0)	<28.0>	—	粗く1mm程度の砂粒含む	内面:7.5YR7/4 外面:7.5YR7/4	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	
33	3	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(15.5)	—	<9.2>	1~5mm程度の砂粒含む	内面:10YR4/3 外面:10YR6/3	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	焼成後底部窄孔
33	4	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(11.0)	<27.2>	—	粗く3mm以上の砂粒含む	内面:10YR5/3 外面:10YR3/2	良好	内面:体部ハケ後ナデ口縁部ナデ 外面:体部ハケ口縁部ナデ	
33	5	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(4.8)	<27.4>	—	2~6mm程度の砂粒含む	内面:10YR6/3 外面:10YR7/3	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	
33	6	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.8)	—	<10.0>	粗く1~2mmの白色砂粒含む	内面:10YR2/1 外面:10YR7/6	良好	内面:ナデ 外面:ハケ	
33	7	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.8)	—	<9.4>	粗く3mm以下色砂粒含む	内面:10YR2/2 外面:10YR6/6	良好	内面:ナデ 外面:ハケ	
33	8	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(6.3)	—	<9.2>	粗く1~5mm以下の砂粒含む	内面:10YR5/2 外面:10YR7/2	良好	内面:ナデ 外面:ハケ	
33	9	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.8)	—	<11.0>	粗く2mm以下の砂粒含む	内面:10YR7/4 外面:10YR7/3	良好	内面:ナデ 外面:ハケ	
33	10	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.5)	—	<11.6>	粗く2mm程度の砂粒含む	内面:2.5Y6/3 外面:2.5Y5/2	良好	内面:ハケのちナデ 外面:ハケ	
33	11	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(7.2)	—	<8.6>	2mm以上の砂粒含む	内面:10YR5/3 外面:10YR6/4	良好	内面:ハケのちミガキ 外面:ハケ	
33	12	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(7.8)	—	<9.0>	粗くて1~2mmの砂粒含む	内面:2.5Y7/3 外面:2.5Y7/3	良好	内面:ハケのちナデ 外面:ハケ	
34	13	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(29.3)	<27.2>	<8.5>	粗く2mm程度の砂粒含む	内面:7.5YR6/1 外面:7.5YR7/2	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:ハケ	頸胴部界に沈線条のものあり
34	14	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(4.4)	<20.0>	—	1~4mm程度の砂粒含む	内面:5YR6/4 外面:5YR6/3	良好	内面:指頭圧痕、ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	15	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(3.7)	—	—	粗く2mm以下の砂粒含む	内面:2.5YR7/2 外面:10YR5/2	良好	内面:口縁部不明 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	16	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.8)	—	—	粗く2mm程度の砂粒含む	内面:7.5YR2/1 外面:7.5YR7/8	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	17	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.3)	—	—	粗く2~3mmの砂粒含む	内面:10YR2/1 外面:10YR4/1	良好	内面:摩滅のため不明口縁部ナデ 外面:口縁部ナデ	
34	18	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(6.9)	<21.0>	—	粗く3mm程度の砂粒含む	内面:10YR7/3 外面:10YR7/8	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	19	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(10.5)	<24.0>	—	粗く1mm以下の砂粒を含む	内面:10YR6/4 外面:10YR8/4	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	20	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(10.2)	<24.0>	—	2~3mmの白色砂粒含む	内面:7.5YR4/1 外面:10YR2/1	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	21	C	SR04	弥生土器	甕	1/2以上	19.9	<27.8>	8.6	粗く3mm程度の砂粒含む	内面:10YR7/2 外面:10YR7/3	良好	内面:摩耗により不明 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
34	22	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(17.4)	<37.2>	—	粗くて2~3mmの砂粒含む	内面:10YR4/3 外面:10YR2/2	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
35	23	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(17.0)	—	—	3mm程度の砂粒含む	内面:10YR4/6 外面:10YR5/4	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:ハケ	
35	24	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(14.6)	<38.0>	—	粗くて2~3mmの白色砂粒含む	内面:10YR5/3 外面:2.5Y6/2	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
35	25	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(15.0)	<34.8>	—	3mm程度の白色砂粒含む	内面:5YR3/1 外面:10YR3/2	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	外面に顕著な炭化物付着
35	26	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(8.8)	<38.0>	—	粗く1~3mmの砂粒含む	内面:10YR7/2 外面:7.5YR8/2	良好	内面:体部ハケ、口縁部ナデ 外面:体部ハケ、口縁部ナデ	
35	27	C	SR04	弥生土器	甕	1/2未満	(6.8)	—	8.4	粗く3mmの大白色砂粒含む	内面:10YR5/3 外面:10YR6/3	不良	内面:ナデ 外面:ナデ	
35	28	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.9)	—	<8.4>	2mm以上の砂粒含む	内面:7.5Y7/4 外面:2.5Y6/1	良好	内面:ナデ 外面:ハケ	
35	29	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(4.4)	—	<7.8>	2mm以下の白色砂粒含む	内面:7.5YR7/3 外面:7.5YR7/3	良好	内面:ハケ 指頭圧痕あり 外面:ハケ	
35	30	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(4.3)	—	<7.8>	粗く2mm以下の砂粒含む	内面:10YR5/3 外面:10YR6/3	良好	内面:ナデ一部ミガキか 外面:ハケ	
35	31	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(4.8)	—	<8.8>	粗く2~3mmの砂粒含む	内面:10YR7/3 外面:10YR6/3	良好	内面:ナデ一部ミガキか 外面:ハケ	
36	32	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(12.2)	<39.8>	—	粗く1mm以下の砂粒を含む	内面:10YR7/4 外面:10YR4/3	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	
36	33	C	SR04	弥生土器	甕	小片	(5.6)	—	<8.0>	1~3mm程度の砂粒含む	内面:2.5Y6/3 外面:2.5Y6/3	良好	内面:ハケ 外面:ミガキか	
36	34	C	SR04	弥生土器	鉢	1/2未満	6.5	<10.0>	<5.0>	1~3mm程度の砂粒含む	内面:10YR4/6 外面:10YR5/4	良好	内面:ハケ 外面:ハケ	
36	35	C	SR04	弥生土器	鉢	1/2未満	(13.8)	<21.3>	9.0	2mm以上の砂粒含む	内面:10YR2/2 外面:10YR2/2	良好	内面:ハケ ミガキ 外面:ハケ ミガキ	外面に糊痕あり
36	36	C	SR04	弥生土器	鉢	小片	(7.4)	<16.0>	—	2mm大の砂粒含む	内面:10YR7/2 外面:10YR7/2	良好	内面:一部指頭圧痕のちナデ 外面:ナデ ミガキ	
36	37	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(3.1)	<14.2>	—	1mm程度の黒色砂粒含む	内面:10YR7/4 外面:10YR7/4	良好	内面:体部ハケ 口縁部ナデ 外面:ミガキ 口縁部界を沈線条に強調	
36	38	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(5.8)	—	—	1mm程度の白色砂粒含む	内面:2.5YR6/2 外面:2.5YR7/2	良好	内面:ハケのちナデ 外面:ミガキ	
36	39	C	SR04	弥生土器	壺	1/2以上	(5.3)	—	8.3	粗く2~3mm程度の砂粒含む	内面:10YR2/1 外面:10YR7/3	良好	内面:体部ナデ一部ハケ底 外面:ミガキ	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(cm) 長さ(cm)	口径(cm) 幅(cm)	底径(cm) 厚さ(cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
36	40	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(5.5)	—	7.2	2mm以下の砂粒含む	内面：10YR7/8 外面：10YR7/3	やや不良	内面：体部ミガキ底部ナデ 外面：摩滅のため不明	
36	41	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(5.6)	—	—	粗く5mm以下の赤色砂粒含む	内面：7.5Y6/8 外面：7.5Y5/1	良好	内面：磨滅のため不明 外面：ハケ	
36	42	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(5.3)	—	<8.6	粗く1mm程度の白色砂粒を含む	内面：10YR7/4 外面：10YR6/4	良好	内面：ナデ 外面：ナデ一部ハケ	
36	43	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(4.8)	—	<7.8	粗く2~3mm程度の砂粒含む	内面：7.5YR7/3 外面：10YR7/2	良好	内面：摩滅のため不明 外面：ナデのちミガキ	
36	44	C	SR04	弥生土器	壺	小片	(5.7)	—	<9.2	2mm以内の砂粒多く含む	内面：10YR7/3 外面：7.5YR7/3	良好	内面：ナデのちハケ 外面：摩滅のため不明	
41	1	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(12.5)	—	—	1mm以下の砂粒含む	内面：10YR6/6 外面：10YR4/2	良好	内面：粗いナデ 外面：条痕部に沈線2条	
41	2	B	SR05上層	縄文土器	浅鉢	小片	(5.2)	<18.0	—	1mm以下の砂粒含む	内面：10YR4/2 外面：10YR4/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
41	3	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(3.5)	—	—	2mm以上の白色砂粒含む	内面：2.5Y6/2 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部刻目D類	
41	4	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(3.7)	—	—	2mm以上の白色砂粒含む	内面：10YR2/2 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部刻目	
41	5	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(8.5)	<21.6	—	粗く1mm以上の砂粒含む	内面：10YR4/2 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部刻目D類	
41	6	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(6.5)	<17.4	—	2mm大以上の砂粒含む	内面：10YR6/3 外面：10YR7/4	良好	内面：粗いナデ・条痕 外面：粗いナデ口縁部端部刻目Y類条痕	
41	7	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(5.0)	—	—	2mmの砂粒含む	内面：2.5Y2/1 外面：2.5Y6/2	良好	内面：不明 外面：不明・口縁部端部刻目V類	
41	8	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(3.7)	—	—	1~3mm程度の砂粒含む	内面：2.5Y7/2 外面：N7/0	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部刻目O類下刻目突帯O類	
41	9	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(4.0)	—	—	1mm以上の白色砂粒含む	内面：10YR5/2 外面：2.5Y7/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部下刻目突帯D類	
41	10	B	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(3.0)	—	—	2mm以上の砂粒含む	内面：7.5YR4/2 外面：5YR4/3	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部下刻目V類	
41	11	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(4.2)	—	—	1mm程度の砂粒含む	内面：10YR1.7/1 外面：10YR4/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻目突帯D類	
41	12	C	SR05上層	縄文土器	深鉢	1/2未満	(12.6)	<24.6	—	2mmの砂粒多く含む	内面：10YR5/1 外面：10YR5/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻目突帯D類	外側巻き貝による 条痕か?
41	13	B	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(5.0)	—	—	粗く1mm以下の砂粒含む	内面：2.5Y4/1 外面：2.5Y4/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻目突帯V類	内外とも炭化物 が付着
41	14	B	SR05上層	縄文土器	深鉢	小片	(4.3)	—	—	1mm以上の砂粒含む	内面：10YR4/3 外面：10YR4/3	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部や下 刻目突帯T類	
41	15	B	SR05上層	縄文土器	浅鉢	小片	(4.2)	—	—	1mm以下の砂粒含む	内面：2.5Y6/3 外面：10YR5/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
41	16	C	SR05上層	縄文土器	浅鉢	小片	(2.7)	<24.0	—	1mm大の砂粒を含む	内面：10YR2/2 外面：10YR2/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ 沈線2条	
41	17	C	SR05上層	縄文土器	浅鉢	小片	(5.2)	<24.4	—	粗く1mm以下の砂粒含む	内面：2.5Y6/2 外面：2.5Y6/2	良好	内面：ナデ後ミガキ 外面：ナデ後ミガキ	
42	18	C	SR05上層	弥生土器	甕	1/2以上	27.0	<35.0	<8.0	粗く1~5mmの砂粒含む	内面：10YR7/4 外面：10YR7/2	良好	内面：体部ハケ、口縁部ナデ 外面：体部ハケ、口縁部ナデ	
42	19	C	SR05上層	弥生土器	甕	1/2未満	(19.2)	<25.0	—	粗く2mm程度の砂粒含む	内面：2.5Y6/2 外面：10YR6/3	良好	内面：体部ハケ、口縁部ナデ 外面：体部ハケ、口縁部ナデ	
42	20	C	SR05上層	弥生土器	甕	小片	(6.1)	<31.4	—	粗く2mm以上の砂粒含む	内面：10YR6/3 外面：10YR6/3	良好	内面：体部ハケ、口縁部ナデ 外面：体部ハケ、口縁部ナデ	
42	21	C	SR05上層	弥生土器	甕	小片	(5.8)	<26.4	—	2mm以上の砂粒含む	内面：10YR6/2 外面：2.5Y4/2	良好	内面：体部ハケ口縁部指頭 圧痕 外面：ハケ	
42	22	C	SR05上層	弥生土器	甕	小片	(4.1)	—	<7.8	1~2mmの白色砂粒含む	内面：10YR4/3 外面：10YR5/3	良好	内面：ナデ 外面：ナデ ハケ	
42	23	C	SR05上層	弥生土器	甕	小片	(5.7)	—	<9.2	粗く2mm程度の白色砂粒含む	内面：10YR6/3 外面：10YR6/4	良好	内面：磨滅のため指ナデ痕 跡のみ 外面：磨滅のため不明	
42	24	C	SR05上層	弥生土器	壺か	小片	(5.2)	—	<8.4	2mm大の白色砂粒含む	内面：10YR7/3 外面：10YR7/2	良好	内面：磨滅のため不明 外面：ハケ	
42	25	C	SR05上層	弥生土器	甕	1/2未満	(10.6)	—	8.6	粗く2mmの砂粒含む	内面：10YR5/4 外面：10YR6/6	良好	内面：ハケ 外面：ハケ	
43	26	C	SR05上層	弥生土器	壺	1/2以上	35.8	16.8	10.0	0.5mm以下の黒色砂粒と1mm大の赤色砂粒少量含む	内面：10YR8/2 外面：10YR7/6	良好	内面：底部ナデ体部ハケ頭 部ハケ後ナデ口縁部 ミガキ 外面：ミガキ	
43	27	C	SR05上層	弥生土器	壺	小片	(7.9)	—	—	2mm大の砂粒含む	内面：10YR5/8 外面：10YR6/2	良好	内面：ハケ 外面：ミガキ・ヘラ書き重 弧文・頸胴部界に沈線	
43	28	C	SR05上層	弥生土器	壺	1/2未満	(9.0)	<8.2	—	1mm大の砂粒を含む	内面：10YR1.7/1 外面：10YR1.7/1	良好	内面：ミガキ 外面：頸部ミガキ肩部沈線 2条体部V字文	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(cm) 長さ(cm)	口径(cm) 幅(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
43	29	B	SR05 上層	弥生 土器	壺	小片	(2.4)	—	4.4	1mm大の砂粒を含む	内面：2.5Y5/1 外面：2.5Y5/2	良好	内面：ナデ 指頭圧痕あり 外面：ナデ	
43	30	B	SR05 上層	石器	叩き石	完形	7.8	8.0					重さ493.8g	
43	31	B	SR05 上層	石器	焼け石	小片	(11.8)	(15.2)	3.5				重さ667.7g	
43	32	B	SR05 上層	石器	焼け石	小片	(7.5)	(10.1)	3.7				重さ330.7g	
44	1	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(5.3)	—	—	1~3mm程度の砂粒 含む	内面：2.5Y8/1 外面：2.5Y8/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部 刻目D類	
44	2	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(4.1)	—	—	1~3mm程度の砂粒 含む	内面：2.5Y2/1 外面：2.5Y7/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部 刻目O類口縁部下刻 目突帯D類	
44	3	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(4.7)	—	—	1~2mm程度の砂粒 含む	内面：10YR6/2 外面：10YR6/6	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部 刻目D類口縁部下半 竹管状刺突痕2条か?	
44	4	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(5.4)	—	—	1mmの白色砂粒含む	内面：10YR4/1 外面：5YR5/4	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯D類	
44	5	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(3.0)	—	—	1~4mm程度の砂粒 含む	内面：2.5Y6/2 外面：2.5Y7/2	良好	内面：磨滅のため不明 外面：口縁部下無刻目突帯	
44	6	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(3.3)	—	—	1~3mm程度の砂粒 含む	内面：2.5Y7/2 外面：2.5Y8/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯D類	遠賀川式土器影響 を受けた突帯文系 土器か?内傾接合
44	7	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(5.7)	—	—	2mm以上の白色砂粒 含む	内面：2.5Y2/1 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ二条突帯体 部刻目突帯O類	内傾接合。
44	8	C	SR05 下層	縄文 土器	深鉢	小片	(7.3)	—	—	粗く1mm以上の砂粒 含む	内面：2.5Y5/3 外面：2.5Y6/3	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部下 部二条刻目突帯D類	口縁部炭化物付着 体部に穿孔ありか?
44	9	C	SR05 下層	縄文 土器	浅鉢	小片	(4.5)	<24.6>	—	1mmの砂粒多く含む	内面：10YR1.7/1 外面：10YR2/1	良好	内面：ミガキか?口縁部沈 線1条 外面：ミガキか?	
44	10	C	SR05 下層	縄文 土器	浅鉢	小片	(4.6)	<26.6>	—	1mm程度の砂粒含む	内面：2.5Y3/1 外面：2.5Y3/1	良好	内面：ミガキ 外面：ナデ	
44	11	C	SR05 下層	縄文 土器	浅鉢	小片	(3.3)	—	—	1mmの白色砂粒含む	内面：2.5Y2/1 外面：2.5Y4/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ・沈線2条あり	
45	1	B	SR05	石器	すり石	1/2以上	24.4	(18.6)	6.6					重さ2150g
45	2	B	SR05	縄文 土器	深鉢	小片	(4.0)	—	—	粗く1mm以上の砂粒 を含む	内面：10YR5/2 外面：10YR4/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯V類	
45	3	B	SR05	縄文 土器	深鉢	小片	(7.0)	—	—	粗く1mm以上の砂粒 を含む	内面：7.5YR2/1 外面：10YR4/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯V類	
45	4	B	SR05	縄文 土器	深鉢	小片	(3.7)	—	—	粗く1mm以上の砂粒 を含む	内面：2.5Y5/2 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下刻 目突帯V類突帯上部 に沈線	
45	5	B	SR05	縄文 土器	深鉢	小片	(10.0)	—	—	粗く1mm以下の砂粒 含む	内面：5Y2/1 外面：2.5Y6/2	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部下二 条刻目突帯Y類	内傾接合。
45	6	B	SR05	弥生 土器	甕	小片	(8.4)	<27.4>	—	1mm大の砂粒含む	内面：2.5Y5/3 外面：2.5Y6/4	良好	内面：口縁部ナデ体部ハケ 外面：口縁部ナデ体部ハケ 口縁端部に刻目	
46	1	C	R 4	縄文 土器	深鉢	小片	(4.0)	—	—	2mm以上の白色砂粒 含む	内面：2.5Y7/3 外面：2.5Y7/3	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ2条刻目突 帶磨滅のため不明	
46	2	C	N 5 表土 掘削	縄文 土器	浅鉢	小片	(3.8)	—	—	2mm以上の砂粒含む	内面：10YR2/1 外面：10YR7/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
46	3	C	西側土層 一番上セ クション	弥生 土器	甕	小片	(5.9)	—	<8.6>	粗く1mm程度の白色 砂粒含む	内面：2.5Y4/2 外面：2.5Y6/4	良好	内面：ナデ 外面：ハケ	
46	4	C	P4 3層	弥生 土器	甕	小片	(5.9)	—	<8.8>	2~3mmの砂粒含む	内面：10YR6/6 外面：10YR7/3	良好	内面：磨滅のため不明 外面：ハケあるが磨滅	
46	5	C	PNO149	土師器	高環	小片	(6.1)	—	—	細かい	内面：10YR8/3 外面：10YR8/3	良好	内面：ナデ 外面：摩滅のため不明	
46	6	C	R 4	須恵器	蓋	小片	(1.4)	—	—	1~3mm程度の砂粒 含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：頂部ナデ体部回転ナデ 外面：頂部ナデ体部回転ナデ	つまみ径6.2
46	7	C	Q5 3層	須恵器	蓋	小片	(1.5)	—	—	1mm以下の砂粒含む	内面：10Y7/1 外面：10Y7/1	良好	内面：頂部ナデ体部回転ナデ 外面：頂部ナデ体部回転ナデ	
46	8	C	PNP134	須恵器	蓋	1/2未満	(2.5)	<14.4>	—	2~3mmの黒色砂粒 含む	内面：5PB7/1 外面：5PB7/1	良好	内面：頂部ナデ体部回転ナデ 外面：頂部ヘラ切り・回転 ヘラ切り後回転ナデ 体部回転ナデ	
46	9	C	R 4	須恵器	蓋	小片	(1.3)	<15.6>	—	1~2mm程度の砂粒 含む	内面：N6/0 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
46	10	C	P5 3層	須恵器	蓋	小片	(1.7)	—	—	1mm以下の白色砂粒 含む	内面：10BG5/1 外面：10BG5/1	良好	内面：頂部ナデ体部回転ナデ 外面：頂部回転ナデ肩部回 転ヘラケズリ	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(㎝) 長さ(㎝)	口径(㎝) 幅(㎝)	底径(㎝)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
46	11	C	P 6	須恵器	蓋	1/2 未満	3.3	〈14.4〉	—	1~2 mmの白色砂粒 含む	内面:10BG6/1 外面:10Y7/0	良好	内面:頂部ナデ体部回転ナデ 外面:頂部回転糸切り体部回転ナデ	
46	12	C	R4 8層	須恵器	坏	小片	(1.2)	—	〈4.6〉	1 mm程度の黒色砂粒 含む	内面:10R3/1 外面:N7/0	良好	内面:漆付着 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	13	C	PNO140	須恵器	坏	小片	(2.0)	—	〈5.8〉	1~2 mmの赤褐砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	14	C	残土 処理中	須恵器	坏	小片	(2.4)	—	〈6.4〉	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N6/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	15	C	P 4	須恵器	坏	小片	(2.8)	—	〈6.0〉	細かい	内面:N6/1 外面:N6/1	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	重ね焼き痕跡A型
46	16	C	Q4 8層	須恵器	坏	小片	(2.0)	—	〈6.6〉	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:N8/0 外面:N8/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	17	C	Q5 3層	須恵器	坏	小片	(2.7)	—	〈7.0〉	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:10BG7/1 外面:10BG7/1	良好	内面:体部回転ナデ底部回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	18	C	溝	須恵器	坏	小片	(3.5)	—	〈6.6〉	1 mmの黒色砂粒含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	19	C	S4 S5 4層	須恵器	坏	小片	(3.8)	—	〈6.2〉	1 mm以下の砂粒含む	内面:N6/0 外面:N6/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	20	C	PNO137	須恵器	坏	小片	(2.8)	—	〈5.8〉	1 mm以下の黒色砂粒 含む	内面:N6/0 外面:N6/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	21	C	S5 4層	須恵器	坏	小片	(4.1)	—	〈6.8〉	1 mm以下の砂粒含む	内面:10Y7/1 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	22	C	溝	須恵器	坏	小片	(2.3)	—	〈8.8〉	1~2 mm程度の砂粒 含む	内面:5Y8/1 外面:5Y8/1	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	23	C	Qベルト 清掃中	須恵器	坏	小片	(2.2)	—	〈10.4〉	1~2 mmの黒色砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:底部ナデ体部回転ナデ 外面:底部ヘラ切り後ナデ 体部回転ナデ	
46	24	C	排水溝	須恵器	坏	1/2 未満	(2.0)	—	7.4	1 mm以下の黒色砂粒 含む	内面:N6/0 外面:N6/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	25	C	PNO219	須恵器	坏	1/2 以上	(4.5)	—	〈3.7〉	1 mm大の白色砂粒含む	内面:5B6/0 外面:5B6/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
46	26	C	PNO124 PNO125	須恵器	坏	小片	(2.2)	—	〈7.6〉	1 mm以下の黒色砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切りのちナデ	底部外面へラ書き ありか?
46	27	C	PNO122	須恵器	坏	1/2 未満	(1.5)	—	〈7.2〉	1 mm程度の白色黒色 砂粒含む	内面:N7/0 外面:5YR6/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	高台内側にヘラ痕 跡あり
47	28	C	PNO169	須恵器	坏	1/2 未満	〈12.0〉	〈9.0〉	—	1 mmの白色砂粒含む	内面:7.5GY6/1 外面:7.5GY6/1	良好	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	
47	29	C	Q4 8層	須恵器	坏	小片	(3.9)	—	〈10.0〉	1 mm程度の砂粒含む	内面:N7/0 外面:N4/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回転糸切り	
47	30	C	PNO174	須恵器	坏	1/2 未満	4.1	〈12.6〉	〈7.6〉	1 mm大の黒色砂粒含む	内面:N8/0 外面:N7/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部ヘラ切り後回転ナデ	肩から下は自然釉
47	31	C	P 6 3層	須恵器	坏か皿	小片	(1.4)	—	〈8.5〉	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:5B6/1 外面:5B6/1	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	32	C	R 5	須恵器	壺	小片	(2.7)	—	〈8.6〉	1 mm以下の黒色砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ底部ナデ 外面:体部回転ナデ・下端 回転ヘラケズリ	
47	33	C	溝	須恵器	坏	小片	(3.7)	〈16.4〉	—	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:N8/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	34	C	R 5	須恵器	坏	小片	(3.3)	—	〈10.8〉	1~3 mm程度の砂粒 含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	35	C	東南溝	須恵器	坏	小片	(2.4)	〈11.8〉	—	1 mm程度の白色砂粒 含む	内面:N6/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	36	C	S5 4層	須恵器	坏	小片	(4.1)	〈12.4〉	—	0.5 mm以下の白色砂 粒含む	内面:N6/0 外面:N6/0	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	37	C	Q6 0層	須恵器	坏	小片	(3.6)	〈13.3〉	—	1 mm以下の砂粒含む	内面:N7/0 外面:N7/0	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデ	
47	38	C	S4 → S5 ベルト	須恵器	坏	小片	3.6	〈13.6〉	〈10.0〉	1 mmの白色砂粒含む	内面:N7/0 外面:N6/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回 転糸切り	
47	39	C	R4 8層	須恵器	皿	小片	(2.2)	〈11.8〉	—	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:5PB7/1 外面:5P6/1	良好	内面:体部回転ナデ 外面:体部回転ナデのち沈線	沈線 8 条
47	40	C	不明	須恵器	皿	小片	(3.0)	〈12.0〉	〈5.6〉	1 mm程度の砂粒含む	内面:N6/0 外面:N7/0	良好	内面:回転ナデ 外面:体部回転ナデ底部回 転糸切り	
47	41	C	Q6②③層	須恵器	高环	小片	(3.9)	—	—	1 mm以下の白色砂粒 含む	内面:N6/0 外面:N6/0	良好	内面:ナデ 外面:体部回転ナデ	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(㎝) 長さ(㎝)	口径(㎝) 幅(㎝)	底径(㎝) 厚さ(㎝)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
47	42	C	PNO166	須恵器	高环	小片	(9.3)	—	—	1~4 mmの白色砂粒含む	内面：5Y7/1 外面：5Y7/1	良好	内面：体部回転ナデ 外面：体部回転ナデ	
47	43	C	排水溝	須恵器	壺	小片	(7.8)	—	—	1 mm以下の白色砂粒含む	内面：N6/0 外面：2.5YR6/0	良好	内面：体部回転ナデ 外面：体部回転ナデ	沈線3条(頸部に2条、頸部下部に1条)
47	44	C	PNO141	須恵器	壺	小片	(2.8)	—	—	1 mm以下の黒色白色砂粒含む	内面：5PB7/1 外面：5PB6/1	良好	内面：体部回転ナデ 外面：体部回転ナデ	肩部に沈線1条
47	45	C	排水溝	須恵器	壺	小片	(8.8)	—	<14.2>	1 mm以下の黒色砂粒含む	内面：7.5Y6/1 外面：N6/0	良好	内面：体部回転ナデ 外面：体部回転ナデ下部へラケズリ	沈線2条
47	46	C	Q5 3層	古錢	皇宋通宝		2.4	2.4	0.1					
47	47	C	PNO34	木製品	下駄		(22.5)	7.9	2.6					ヒノキ
51	1	D-3	畦2付近	須恵器	壺	小片	(2.3)	<13.8>	—	1 mm以下の砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
51	2	D-2	畦2付近	須恵器	壺	小片	(2.6)	—	<6.4>	1 mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
51	3	D-2	畦2付近	須恵器	壺	小片	(4.3)	—	—	1 mm以下の砂粒含む	内面：2.5YR3/1 外面：2.5Y6/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
51	4	D-2	畦2付近	須恵器	壺	小片	(4.2)	—	<10.8>	1 mm以下の黒色砂粒含む	内面：N6/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ヘラケズリ	
57	1	D-3	SD04	弥生土器	甕	小片	(15.6)	<22.4>	—	粗く3 mm以下の白色砂粒含む	内面：10YR7/4 外面：10YR6/4	良好	内面：体部ハケ口縁部ナデ 外面：口縁部ハケ	
57	2	D-1	SD05	弥生土器	甕	小片	(7.5)	—	6.4	1 mm以下の白色砂粒含む	内面：10YR6/2 外面：10YR6/2	良好	内面：ナデ 指頭圧痕あり 外面：ミガキ	
57	3	D-1	SD05	弥生土器	甕	小片	(9.5)	—	<12.2>	1 mm大の砂粒を含む	内面：10YR5/4 外面：5YR3/1	良好	内面：ハケ ミガキ 外面：ミガキ	
57	4	D-1	SD05	弥生土器	甕	小片	(7.0)	<28.8>	—	粗く1 mm以下の砂粒が含む	内面：2.5Y6/2 外面：2.5Y7/3	良好	内面：体部ハケ口縁部ナデ 外面：体部ハケ口縁部ナデ	
57	5	D-2	SD04	木製品	大板		238.7	45.6	3.3					スギ
61	1	D-2	SD05上層	弥生土器	鉢	完形	11.3	13.7	7.8	粗く1 mm以下の長石粒が含む	内面：10YR6/3 外面：10YR6/3	良好	内面：ナデ ミガキ 外面：ナデ ミガキ 端部沈線2条	
61	2	D-2	SD05上層	弥生土器	甕	小片	(12.0)	<30.2>	—	粗く2 mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y7/8 外面：2.5Y7/8	良好	内面：ハケ 外面：体部ハケ口縁部ナデ	
61	3	D-2	SD05上層	弥生土器	甕	小片	(9.5)	<25.2>	—	粗く1 mm以下の砂粒を含む	内面：10YR2/1 外面：10YR6/8	良好	内面：体部ハケ指圧痕口縁部ハケ 外面：体部ハケ後ナデ口縁部ハケ	
61	4	D-2	SD05上層	縄文土器	深鉢	小片	(3.0)	—	<12.0>	2 mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y7/3 外面：2.5Y7/3	良好	内面：磨滅のため不明 外面：磨滅のため不明	
61	5	D-2	SD05上層	弥生土器	甕	小片	(8.0)	—	<8.6>	粗くて2 mm以下の砂粒含む	内面：10YR7/3 外面：10YR7/4	良好	内面：ハケ 外面：ハケ	C区SR04内の土器と接合
61	6	D-2	SD05上層	弥生土器	甕	小片	(8.6)	—	<9.4>	1 mm大の砂粒多く含む	内面：10YR8/4 外面：10YR7/3	良好	内面：ハケ 外面：ハケ	
61	7	D-2	SD05上層	弥生土器	壺	完形	17.7	10.7	7.8	1~2 mm大の白色砂粒、一部赤色砂粒含む	内面：2.5Y7/2 外面：2.5Y7/2	良好	内面：口縁部ミガキ 外面：体部頸部ミガキ口縁部ナデ	体部ヘラガキ沈線とヘラガキ有軸羽状文
61	8	D-2	SD05下層	石器	砥石	完形							重さ2100g	
62	9	D-2	SD05下層	縄文土器	深鉢	小片	(10.6)	<27.2>	—	2 mm以上の砂粒含む	内面：10YR4/2 外面：10YR5/3	良好	内面：粗いナデ 外面：口縁部下刻目突帯V類・粗いナデ	内傾接合。
62	10	D-2	SD05下層	縄文土器	鉢	小片	(7.4)	<12.0>	—	粗い	内面：10YR7/6 外面：7.5YR7/1	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ口縁部端部・下部刻目突帯V類	
62	11	D-2	SD05下層	縄文土器	浅鉢	小片	(5.2)	<21.8>	—	細かく2 mm以下の砂粒含む	内面：2.5Y5/2 外面：2.5Y5/2	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
62	12	D-2	SD05下層	縄文土器	深鉢？	小片	(2.5)	—	<11.6>	1 mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y4/1 外面：2.5Y7/3	良好	内面：粗いナデ 外面：粗いナデ	底面が凸凹
62	13	C	SD05下層	縄文土器	深鉢	小片	(20.0)	<34.6>	—	やや粗く2 mm以下の長石粒含む	内面：10YR5/1 外面：10YR5/1	良好	内面：条痕 外面：粗いナデ口縁部下刻目突帯V類	
62	14	D-2	SD05下層	縄文土器	深鉢	小片	(9.8)	<45.2>	—	粗く2 mm以上の砂粒含む	内面：2.5Y6/3 外面：2.5Y8/4	良好	内面：条痕 外面：粗いナデ口縁部下刻目突帯V類	
62	15	D-2	SD05下層	弥生土器	壺	小片	(7.4)	<14.8>	—	粗く1 mm以上の砂粒を含む	内面：7.5YR8/6 外面：7.5YR5/3	良好	内面：ミガキ 外面：ミガキ	
62	16	D-2	SD05下層	弥生土器	壺	小片	(3.3)	—	<9.0>	1 mm程度の白色砂粒含む	内面：10YR5/3 外面：10YR7/3	良好	内面：ハケ 外面：磨滅のため不明	
62	17	C	SD05下層	弥生土器	甕	小片	(6.3)	<19.6>	—	粗く2~3 mm程度の砂粒含む	内面：10YR6/6 外面：10YR7/1	良好	内面：体部ハケのちナデ口縁部ナデ 外面：体部ハケ口縁部ナデ	
63	1	D-2	壁面清掃中	須恵器	蓋	小片	<1.5>	—	—	1 mm以下の白色砂粒含む	内面：10G5/1 外面：10G5/1	良好	内面：回転ナデ 外面：頂部回転糸切り後ナデ肩部回転ヘラケズリ体部回転ナデ	
63	2	D-2	北溝掘	須恵器	壺	小片	(2.2)	—	<6.3>	1 mm以下の黒色砂粒含む	内面：10BG5/1 外面：10BG5/1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	3	D-2	V7①層	須恵器	壺	小片	(3.0)	—	<6.6>	1 mm以下の黒色白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	

図	番号	区	出土地点	種別	器種品目	遺存	器高(cm) 長さ(cm)	口径(cm) 幅(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考 樹種
63	4	D-2	PNO306	須恵器	坏	小片	(3.2)	—	<7.0>	1mm程度の黒色砂粒含む	内面：7.5Y8/1 外面：7.5Y8/1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	5	D-1	PNO233 PN 0234 PNO23 5 PNO238	須恵器	坏	1/2以上	4.2	12.7	6.1	1mm以下の白色砂粒含む	内面：7.5YR4/2 外面：10BG7/0	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	6	D-1	V6 3層	須恵器	坏	小片	(2.4)	—	<7.2>	1mm以下の黒色白色砂粒含む	内面：5BG6/1 外面：5BG6/1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	7	D-1	V6 3層	須恵器	坏	1/2未満	(2.4)	—	<7.6>	1~2mmの白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	8	D-2	PNO351 ②	須恵器	坏	小片	(2.7)	—	<7.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：5PB6/0 外面：5B6/0	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	低部タール状のもの付着
63	9	D-3	PNO412	須恵器	坏	小片	(1.7)	—	<6.2>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：5BG6/1 外面：5BG6/1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
63	10	D-2	PNO324	須恵器	坏	小片	(2.9)	—	<9.0>	細かく1mmの黒色砂粒含む	内面：5B7/1 外面：5B7/1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部ヘラ切り後ナデ	
63	11	D-1	W7 V7 3層	須恵器	坏	小片	(3.5)	—	<5.8>	1mmの白色砂粒含む	内面：5B4/0 外面：N4/0	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	胎土 2.5YR5/4 ケズリだし高台
63	12	D-1	V6 3層	須恵器	坏	小片	(3.9)	<14.0>	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：5YR5/1 外面：2.5Y5/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
63	13	D-1	W7 V7 3層	須恵器	壺	小片	(7.0)	—	<11.2>	1~2mmの白色砂粒含む	内面：N6/0 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ下端ヘラケズリ	
63	14	D-2	PNO279	須恵器	壺	小片	(6.0)	—	<12.4>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N6/0 外面：10BG3/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ下端ヘラケズリ	
63	15	D-3	V 9	須恵器	鉢	小片	(4.1)	—	<19.4>	1~2mmの黒色白色砂粒含む	内面：10Y7/0 外面：10Y7/0	良好	内面：回転ナデ後ナデ 外面：回転ナデ後ナデ	内面は磨滅
63	16	D-2	PNO317 P NO318 P NO321	須恵器	双耳瓶	1/2未満	30.0	8.5	<15.0>	1mmの大白色砂粒含む	内面：N6/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ体部下端ヘラケズリ	2条の沈線5ヵ所
64	17	D-2	PNO320	土師器	坏	1/2未満	(2.7)	—	<8.2>	細かく1mm程度の赤色砂粒含む	内面：5YR7/3 外面：5YR7/3	やや不良	内面：ナデ 外面：体部ナデ体部下回転ナデ底部ナデ	
64	18	D-3	PNO434	土師器	坏	1/2未満	(1.9)	—	4.2	精緻	内面：2.5Y8/2 外面：2.5Y8/2	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
64	19	D-2	PNO263	肥前陶器	坏	小片	(1.7)	—	<5.0>	精緻	内面：2.5GY7/1 外面：2.5GY7/1	良好	内面：施釉 外面：施釉	
64	20	D-2	PNO264	白磁	皿	小片	(2.5)	<12.4>	—	精緻	内面：10GY7/1 外面：10GY7/1	良好	内面：施釉 外面：施釉	
64	21	D-2	T7	白磁	皿	小片	(2.1)	<12.4>	—	精緻	胎土：7.5Y8/1 釉薬：7.5Y7/1	良好	内面：施釉 外面：施釉	底部内面外周に沈線
64	22	D-2	PNO266	瀬戸美濃	天目碗	小片	(3.5)	—	—	精緻	胎土：2.5Y8/2 釉薬：2.5Y3/1	良好	内面：施釉 外面：体部中位より上施釉下位より露胎ヘラケズリ	
64	23	D-3	5~2層	陶器	香炉	小片	(1.3)	—	<5.4>		内面：5YR4/4 外面：2.5Y7/3	良好	内面：施釉 外面：体部回転ナデ底部回転ヘラ切り	
64	24	D-2	PNO370	鉄製品	鎌	完形	7.3	0.7	0.4					重さ6.0g
64	25	D-2	PNO265	鉄製品	刀子		(5.8)	1.0	0.2					重さ4.4g
64	26	D-2	PNO288	鉄滓	?形滓	完形	11.3	9.4	4.5					重さ624.8g
64	27	D-2	PNO291	鉄滓	?形滓	完形	7.8	4.1	3.8					重さ165.2g
64	29	D-2	PNO269 D-2 排土中	木製品	皿		(底径7.0)		(1.3)					ケヤキ
64	30	D-2	PNO303	木製品	碗		(底径7.2)		(2.0)					シイ属
64	31	D-2	PNO.272 060921	木製品	木簡状木製品	9.5	(1.0)	0.3						スギ
64	32	D-2	PNO.270 060921	木製品	木簡		(7.3)	2.3	0.6					ヒノキ

### 庵寺遺跡観察表

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
79	1	A	炭窯付近	有田磁器	碗	1/2以上	7.2	11.6	4.0	精緻	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：釉薬 外面：釉薬(梅の模様プリント)底部ハート有田	
79	2	A	炭窯付近	肥前磁器	碗	1/2未満	(2.6)	—	4.2	精緻	内面：2.5GY7/1 外面：5B4/1(釉薬)	良好	内面：釉薬 外面：釉薬染付底部刻印か?	胎土N7

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
79	3	A	炭窯付近	肥前陶器	皿	小片	(4.4)	—	7.0	2mm以上の砂粒含む	内面：5Y4/3 5Y6/3 外面：5Y3/2	良好	内面：体部施釉刷毛目 外側：体部回転ナデ施釉底部回転ヘラケズリ	底部に近いところは無釉
79	4	A	炭窯付近	肥前陶器	碗	1/2未満	(3.2)	—	<5.0>	精緻	内面：2.5Y6/3 外面：2.5Y8/2	良好	内面：釉薬 外側：釉薬	呉器手碗
79	5	A	炭窯付近	土師器	焰烙	小片	(5.0)	<29.0>	—	1mm程度の砂粒含む	内面：5YR7/6 外面：5YR7/6	良好	内面：回転ナデ 外側：体部ナデ口縁部回転ナデ	
80	1	A	第1・第2黒色土	弥生土器	甕	小片	(5.8)	<16.0>	—	粗くて3mm程度の砂粒含む	内面：5YR7/6 外面：5YR8/6	良好	内面：体部不明口縁部ナデ 外側：体部不明口縁部ナデ	
80	2	A	第1・第2黒色土	須恵器	壺	小片	(4.3)	—	<11.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：灰褐色2 外面：灰褐色1	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転ヘラ切りのち回転ナデ	
80	3	A	第1・第2黒色土	肥前陶器	碗	小片	(4.8)	—	<6.2>	精緻	内面：5Y4/2 外面：5Y5/2(胎土も)	良好	内面：釉薬 外側：釉薬染付 高台は無釉	
80	4	A	第1・第2黒色土	石見焼	香炉・火消	1/2未満	(7.6)	—	8.2	精緻	内面：5YR7/1 外面：5YR2/2(釉薬)	良好	内面：体部回転ナデ底部ナデ 外側：施釉	胎土5YR7/1 沈線3条の装飾2ヶ所以上。
80	5	A	第1・第2黒色土	陶器	壺・甕	小片	(3.6)	—	—	精緻	内面：5YR6/1 外面：7.5YR4/3	良好	内面：体部タタキ 外側：肩上部施釉	胎土10YR2/1 釉薬7.5YR1.7/1
80	6	A	第1・第2黒色土	石	砥石	小片	(5.5)	(3.7)	1.7	精緻	2.5Y7/2	—	—	研いだ痕 壓重さ28.3g
80	7	A	第1・第2黒色土	土師器	焰烙	小片	(4.6)	<31.6>	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：7.5YR7/8 外面：7.5YR7/8	良好	内面：回転ナデ 外側：口縁部回転ナデ	
82	1	A	第3黒色土	弥生土器	甕	小片	(4.0)	<17.4>	—	粗くて1~2mm程度の砂粒含む	内面：10YR8/3 外面：10YR8/3	良好	内面：ナデ 外側：体部ナデ口縁部擬凹線文	
82	2	A	第3黒色土	弥生土器	甕	小片	(2.7)	—	—	粗くて2~3mmの白色砂粒含む	内面：10YR8/6 外面：10YR8/3	良好	内面：ナデ 外側：体部ナデ口縁部擬凹線文	
82	3	A	第3黒色土	土師器	?形器台	小片	(5.9)	—	—	1~2mmの大白色砂粒含む	内面：10YR7/6 外面：10YR7/6	良好	内面：ケズリ 外側：不明	
82	4	A	第3黒色土	土師器	小型丸底壺	小片	(13.7)	<10.0>	—	0.5mmの大褐色砂粒含む	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR7/6	良好	内面：体部ケズリ頸部不明 外側：不明	
82	5	A	第3黒色土	土師器	小型丸底壺	小片	(9.4)	—	—	1mm大の砂粒含む	内面：5YR6/6 外面：5YR6/6	良好	内面：底部ケズリのちミガキ 体部ケズリのちナデ 外側：ハケ	
85	1	A	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	1/2未満	(22.5)	—	<6.4>	2から3mmの大自色砂粒含む	内面：2.5Y6/4 外面：2.5Y6/4	良好	内面：全体的に磨滅により不明 外側：全体的に磨滅により不明	
85	2	A	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	小片	(3.7)	—	—	2mmの大白色褐色砂礫砂粒含む	内面：7.5YR8/4 外面：7.5YR8/4	良好	内面：不明 外側：ナデ頸部沈線一条	
85	3	A	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	小片	(2.8)	—	<7.6>	粗くて大粒砂粒あり	内面：10YR6/3 外面：10YR7/3	良好	内面：体部ナデ底部指頭圧痕あり 外側：体部ナデ	
91	1	B	Ⅲ層	須恵器	蓋壺	小片	(2.3)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：5PB6/1 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外側：回転ナデ	外面肩部沈線1条あり
91	2	B	Ⅲ層	須恵器	蓋	小片	(1.2)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：7.5Y7/1 外面：7.5YR5/2	良好	内面：回転ナデ 外側：回転ナデ	
91	3	B	Ⅲ層	須恵器	蓋	小片	(2.0)	—	—	1mm程度の黒色砂粒含む	内面：N5/0 外側：N7/0	良好	内面：頂部回転ナデのちナデ 体部回転ナデ 外側：頂部ナデ体部回転ナデ	
91	4	B	Ⅲ層	須恵器	蓋	小片	(2.0)	<14.6>	—	1mm以下の砂粒含む	内面：N4/0 外側：N4/0	良好	内面：回転ナデ 外側：回転ナデ	
91	5	B	Ⅲ層	須恵器	蓋	小片	(2.5)	<16.4>	—	2mm以下の白色砂粒含む	内面：N5/0 外側：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外側：回転ナデ	
91	6	C	Ⅲ層	須恵器	蓋	小片	(1.6)	<9.1>	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N8/0 外側：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外側：回転ナデ	外面肩部沈線2条あり
91	7	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(3.4)	—	<8.8>	1mm以下の砂粒含む	内面：N8/0 外側：N4/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転ヘラケズリ	
91	8	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(4.8)	—	<8.4>	精緻	内面：N6/0 外側：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	9	C	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(2.0)	—	<5.8>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N8/0 外側：N8/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	10	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(1.3)	—	<6.2>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N7/1 外側：N7/1	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	外面炭付着
91	11	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(1.8)	—	<6.0>	精緻	内面：N8/0 外側：N8/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	12	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(2.5)	—	<6.8>	3mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外側：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	13	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(2.4)	—	<6.4>	1mm以下の砂粒含む	内面：N6/0 外側：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	14	B	Ⅲ層	須恵器	壺	小片	(4.5)	—	<7.6>	1mm以下の白色砂粒含む	内面：7.5GY7/1 外側：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外側：体部回転ナデ底部回転糸切り	

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
91	15	B	III層	須恵器	坏	小片	(3.6)	<12.8>	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：5GY7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	外面部に火襷あり
91	16	B	III層	須恵器	坏	小片	(4.0)	—	<7.8>	細かく1mm大の黒色砂粒含む	内面：2.5Y8/2 外面：2.5Y7/2	良好	内面：体部回転ナデ火襷底部ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	17	B	III層	須恵器	坏	1/2未満	4.6	<9.2>	<8.4>	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N8/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
91	18	B	III層	須恵器	坏	小片	4.0	<13.0>	<8.4>	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：10GY4/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ	
91	19	B	III層	須恵器	坏かIII	1/2未満	(2.6)	◇	<10.2>	1mm以下の白色砂粒含む	内面：5PB7/1 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部へ タ切り	
91	20	B	III層	須恵器	坏	小片	(4.5)	—	—	細かい	内面：N7/0 外面：N8/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	□墨書き土器
91	21	B	III層	須恵器	甕	1/2未満	(6.0)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N4/0 外面：N5/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	頸部に関して体部 完成後に取り付けた跡が残る
91	22	B	III層	須恵器	高坏	小片	(3.8)	—	<10.6>	1mm以下の砂粒含む	内面：N5/0 外面：N4/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
91	23	B	III層	須恵器	高坏	小片	(4.4)	—	—	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N4/0 外面：N5/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
91	24	B	III層	須恵器	坏	小片	(2.7)	—	<8.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：5P7/1 外面：N7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回 転ヘタ切りのちナデ	自然釉薬あり
91	25	B	III層	須恵器	壺	小片	(3.0)	<13.6>	—	細かい	内面：7.5Y7/1 外面：N8/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	外面自然釉
91	26	C	III層	須恵器	壺	小片	(5.0)	—	<11.4>	1~2mmの黒色砂粒含む	内面：N8/0 外面：5PB7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ヘラケズリ	
91	27	B	III層	須恵器	鉢	小片	(5.7)	—	<17.0>	1mm以下の砂粒含む	内面：5PB5/1 外面：5PB5/1	良好	内面：体部ハケ底部ナデの ち刺突痕 外面：体部ハケ・一部ハケ のち回転ナデ	底部内面に粒状剥 離痕あり
92	28	C	III層	須恵器	甕	小片	(7.4)	<18.4>	—	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：10YR6/1 外面：10YR6/1	良好	内面：体部タタキ口縁部ナデ 外面：体部タタキ口縁部回 転ナデ	胎土 7.5Y8/2
92	29	B	III層	須恵器	瓶類か	小片	(1.8)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：7.5Y4/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ヘラケズリ のちくし型刺突痕	沈線1条あり
92	30	C	III層	須恵器	長頸壺か	小片	(5.6)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	刺突痕3条
92	31	B	III層	土師器	甕	小片	(3.5)	<23.1>	—	1mm以下の透明砂粒含む	内面：10YR8/4 外面：10YR7/14	良好	内面：体部ハケ・ケズリ口 縁部ナデ 外面：体部ハケ口縁部ナデ	
92	32	B	III層	土師器	甕	小片	—	—	—	1mm程度の白色砂粒含む	内面：5YR5/6 外面：5YR5/6	良好	内面：ナデ 外面：不明	
92	33	B	III層	土師器	甕	小片	—	—	—	精緻	内面：7.5Y7/8 外面：7.5Y7/8	不良	内面：ナデ 外面：ナデ	
92	34	B	III層	鉄器	釘	完形	23.2	2.2	1.3					重さ251g
93	1	B	S D02・03	須恵器	蓋坏	小片	(1.9)	—	—	0.5mm大の白色砂粒含む	内面：5PB6/1 外面：5PB6/1	良好	内面：回転ナデ 外面：頂部回転ヘラケズリ 体部回転ナデ	
93	2	B	S D02・03	須恵器	坏身	小片	(2.8)	—	—	0.5mm大の白色砂粒含む	内面：10Y7/1 外面：10Y7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
93	3	B	S D02・03	須恵器	坏身	小片	(2.9)	—	—	0.5mm以下の砂粒を少量含む	内面：N5/0 外面：N5/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
93	4	B	S D02・03	須恵器	壺・甕	小片	(5.2)	<16.2>	—	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N4/0 外面：7.5GY3/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	胎土N8/0
93	5	B	S D02・03	須恵器	蓋	小片	(1.2)	—	<12.2>	緻密	内面：10Y8/1 外面：10Y8/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
93	6	B	S D02・03	土師器	甕	小片	(1.7)	—	—	0.5mm大の赤褐色砂粒含む	内面：10YR6/6 外面：7.5YR8/6	良好	内面：不明 外面：不明	
93	7	B	S D02・03	金属製品	耳環	完形	長さ 2.6	幅 2.9	厚さ 0.7		内面 外面		内面 外面	断面楕円形重さ 17.5g
94	1	B	IV層	土師器	甕	小片	(4.9)	<17.0>	—	1mm以下の砂粒含む	内面：2.5Y7/3 外面：2.5Y7/3	良好	内面：体部ケズリのちナデ 口縁部ナデ 外面：体部ハケ口縁部ナデ	
94	2	B	IV層	弥生土器	甕	小片	(5.0)	—	—	粗くて1~2mm程度の白色砂粒含む	内面：2.5Y8/3 外面：2.5Y8/3	良好	内面：ナデ 外面：ナデ	
94	3	B	IV層	土師器	高坏	1/2未満	(6.7)	—	—	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：10YR7/3 外面：10YR7/3	良好	内面：ケズリ 外面：ミガキ	
						長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)						
104	1	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(18.0)	(32.5)	(1.4)					
104	2	B	SR01	木製品	田下駄	完形	(23.0)	29.0	(1.2)					
105	3	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(19.5)	36.0	1.6					
105	4	B	SR01	木製品	田下駄	完形	23.5	43.5	1.5					
106	5	B	SR01	木製品	田下駄	完形	23.5	35.0	1.0					

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
106	6	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(19.5)	(32.0)	2.2					
107	7	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(17.0)	32.0	(1.5)					
107	8	B	SR01	木製品	田下駄	1/4	(8.5)	25.0	1.9					
107	9	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(11.5)	38.0	1.5					
108	10	B	SR01	木製品	田下駄	完形	37.0	41.0	1.5					
108	11	B	SR01	木製品	田下駄	完形	18.5	31.0	(1.1)					
108	12	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(17.0)	29.0	(1.0)					
109	13	B	SR01	木製品	田下駄	完形	21.0	44.5	2.8					
109	14	B	SR01	木製品	田下駄	完形	25.0	28.0	1.6					
110	15	B	SR01	木製品	田下駄	1/2 以上	(19.0)	27.0	1.0					
110	16	B	SR01	木製品	田下駄	不明	(12.5)	(29.0)	1.2					
110	17	B	SR01	木製品	田下駄	1/4か?	(11.5)	29.0	(1.5)					
111	18	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(16.5)	41.0	1.3					
111	19	B	SR01	木製品	田下駄	完形	31.0	39.0	1.6					
112	20	B	SR01	木製品	田下駄	ほぼ 完形	(15.5)	19.5	1.5					
112	21	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(14.5)	31.5	1.4					
112	22	B	SR01	木製品	田下駄	完形	24.0	33.0	2.0					
113	23	B	SR01	木製品	田下駄	1/2	(14.5)	31.5	1.4					
113	24	C	SR01	木製品	田下駄	完形	34.5	30.5	1.5					
114	25	C	SR01	木製品	田下駄	1/2	(21.5)	30.5	1.5					
114	26	C	SR01	木製品	田下駄	完形	32.0	34.5	1.5					
115	27	C	SR01	木製品	田下駄	完形	35.0	35.5	2.0					
115	28	C	SR01	木製品	田下駄	1/2	(12.0)	32.0	(1.0)					
115	29	C	SR01	木製品	田下駄	1/3	(13.0)	31.5	(1.2)					
116	30	C	SR01	木製品	田下駄	1/2	(17.0)	29.0	1.8					
116	31	C	SR01	木製品	田下駄	1/3	(10.5)	33.5	1.2					
116	32	C	SR01	木製品	田下駄	小片	(4.0)	(24.0)	(1.5)					
117	33	C	SR01	木製品	田下駄	1/2 以上	(23.0)	31.5	1.5					
117	34	C	I 3	木製品	田下駄	1/2	(12.8)	(27.2)	(1.6)					
117	35	C	SR01	木製品	田下駄	完形	(13.0)	38.0	1.5					
118	36	C	SR01	木製品	板	ほぼ 完形	94.2	12.9	16.8					
118	37	C	SR01	木製品	矢板	完形	263.4	24.6	3.6					
118	38	C	SR01	木製品	板	完形	130.2	12.6	1.8					
119	39	C	SR01	木製品	板	不明	(108.6)	15.6	21.0					
119	40	C	SR01	木製品	板	不明	(115.8)	13.2	2.1					
119	41	C	SR01	木製品	板	不明	(144.0)	(12.0)	1.2					
120	42	C	SR01	木製品	板	完形	78.6	19.8	1.2					
120	43	C	SR01	木製品	板	不明	(63.0)	12.9	1.2					
							器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)					
121	1	C	E 6 II 層 排土中	須恵器	蓋	小片	(1.7)	—	—	4 mmの白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ頂部回 転糸切り肩部回転ヘ ラケズリ	
121	2	C	東溝	須恵器	蓋	1/2 未満	(21.0)	—	—	1 mm以下の黒色砂粒 含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：頂部回転糸切りのち ナデ体部回転ナデ	

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
121	3	B	H 3 II層	須恵器	坏	小片	4.2	<13.3>	<9.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：5GY7/1 外面：2.5GY7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
121	4	B	E 5	須恵器	坏	小片	(2.6)	—	<7.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：5PB7/1 外面：5PB7/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
121	5	B	G 4	須恵器	坏	小片	(3.2)	—	<8.0>	密	内面：N6/6 外面：5GY6/1	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部回転糸切り	
121	6	B	H4 2層	須恵器	坏	小片	(2.7)	—	<8.0>	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N7/0	良好	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ底部ナデ	
121	7	C	F 6 II層	須恵器	高坏	1/2未満	(9.5)	—	—	1mm程度の白色砂粒含む	内面：N7/0 外面：N6/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
121	8	C	E6 2層	須恵器	甕	小片	(2.5)	—	<20.2>	0.5mm以下の砂粒含む	内面：5Y6/1 外面：7.5Y5/1	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	実測図は天地逆
121	9	B	H 4 II層 H 3 II層	須恵器	壺	小片	(6.1)	<14.8>	—	1mm程度の白色砂粒含む	内面：5 Y 7/1 外面：N8/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	外面に自然釉あり
121	10	B	PNO 2 トレンチ5②	李朝青磁	皿	小片	(1.6)	—	<4.0>	1mm以下の白色砂粒含む	内面：10Y5/1 外面：10Y5/1	良好	内面：釉薬 外面：釉薬体部回転ナデ	胎土N7/0
121	11	C	E6 II層	青磁	皿	小片	(2.2)	—	—	精緻	内面：10Y6/2 外面：10Y6/2	良好	内面：釉薬 外面：釉薬	
121	12	C	D8 1層 PNO52	青磁	皿	小片	(1.9)	—	<4.8>	精緻	内面：5Y5/3(釉薬) 外面：5Y5/3(釉薬)	良好	内面：釉薬 外面：釉薬	
121	13	B	PNO55 E 6 II層	白磁	皿	1/2未満	(2.1)	—	<8.4>	精緻	内面：7.5Y6/2(釉薬) 外面：7.5Y6/2(釉薬)	良好	内面：施釉 外面：底部静止糸切り周辺 ヘラ切り露胎	胎土N7/0
121	14	B	I 層	肥前磁器	碗	1/2未満	(4.2)	<11.0>	—	精緻	内面：10Y8/1 外面：10Y8/1	良好	内面：釉薬 染付 外面：釉薬 染付	胎土N8/0
121	15	B	PNO12 トレ3②	備前焼	鉢	小片	(5.2)	<23.6>	—	2mm程度の砂粒含む	内面：N7/0 外面：10Y3/1	良好	内面：ナデ 外面：回転ナデ	
121	16	B	F4	須恵器	坏身	小片	(2.2)	<9.0>	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N3/0 外面：N4/0	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	
121	17	B	E4 II層	李朝青磁	碗	小片	(3.7)	<11.0>	—	精緻	内面：5 Y 6/2 外面：5 Y 6/2	良好	内面：施釉 外面：施釉	
121	18	C	O6	須恵器	甕	小片	(7.5)	—	—	1mm以下の黒色砂粒含む	内面：N8/0 外面：N5/0	良好	内面：同心円タタキ 外面：タタキ	
121	19	B	F5 II層	須恵器	甕	小片	(9.9)	—	—	1mm以下の白色砂粒含む	内面：N6/0 外面：N5/0	良好	内面：車輪タタキ 外面：格子目タタキ	

### 於才迫遺跡観察表

図版	番号	区	出土地点	種別	器種	遺存	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	胎土	色調	焼成	調整・手法の特徴	備考
130	1		炭窯2	磁器	碗	小片	(1.9)	—	4.6	精緻	内面：N8/0 外面：N8/0	良好		底部に「重山」
130	2		南	肥前磁器	碗	小片	(26.0)	<4.8>	—	精緻	内面：N8/0 外面：N8/0	良好	内面：施釉 外面：施釉	
130	3		南1層	陶器	蓋	小片	(2.9)	—	—	精緻	内面：10YR4/6 外面：10YR3/4	良好	内面：回転ヘラケズリ 外面：回転ナデ	
130	4		窯4附近 2層		ボタン	完形	0.3	2.0	1.6		内面： 外面：	良好	内面： 外面：	プラスチック
130	5		1層	鉄	金づち	1/2以上	(2.5)	—	—		内面：10YR4/6 外面：10YR3/4	良好	内面：回転ヘラケズリ 外面：回転ナデ	重さ174g
130	6		南抜張	瓦	棟瓦	1/2未満	(2.0)	—	—	0.5mmの大黒色砂粒含む	内面：N1.5/0 外面：N1.5/0	良好	内面： 外面：	凹面いぶし 凸面一部いぶし
130	7		南抜張	陶器	煙突	小片	(18.5)	—	—	精緻	内面：7.5Y17.7/1 外面：7.5Y17.7/1	良好	内面：施釉 外面：施釉	